御義口伝　序講

御義口伝　序講

第一章　御義口伝の由来

(一)　日蓮大聖人と御義口伝

(1)　御義口伝の地位

御義口伝は、日蓮大聖人が晩年に身延山において、法華経の要文について講じられた御講義を、御弟子日興上人が筆録され、大聖人の御允可をいただき、後世に伝えられたものである。上下二巻に分かれ、上巻は「日蓮所立、序品より涌出品に至る」から始まり、下巻は「日蓮所立、寿量品より開結二経に至る」から始まっている。

日蓮大聖人の御一代における各御抄は、いずれも重要である。例えば立正安国論には、邪法を破し、正法正義を立てることによってのみ、国家社会の平和と繁栄が実現されることを論じている。開目抄には、五重の相対を立てて、あらゆる諸教、諸宗を配列批判し、末法の御本仏たる日蓮大聖人こそが、末法万年の民衆の苦悩を救われる人本尊であらせられることを明かしている。また観心本尊抄には、五重三段を立てて、低劣な諸教、諸宗を破し、末法において即身成仏の大直道は、文底下種三段において立つるところの、三大秘法の大御本尊であることを明か

している。そのほか、数多くの法門を述べられた諸御抄から、御供養の御礼を述べられたわずか二、三行のお手紙にいたるまで、みなそれぞれ重要な地位を占めている。

御義口伝はまた、これらの諸御抄とは比較にならない重要性がある。それは日蓮大聖人の文底下種仏法が、きわめて明確に説き尽くされているからである。この文底下種仏法を、開目抄上（一八九㌻）には「一念三千の法門は但法華経の本門・寿量品の文の底にしづめたり」と説き、観心本尊抄（二四九㌻）には「彼は脱此れは種なり彼は一品二半此れは但題目の五字なり」と判じられている。しかし、御義口伝においては、釈尊所説の法華経二十八品、ならびに開結二経の文を挙げて、天台、妙楽等の釈を引かれ、さて「御義口伝に云く云云」と、あらゆる宗教論、生命論、宇宙観、生活指導の原理等々を、信心に約し、生活に約して説き尽くされている。この御義口伝の内容こそ、あらゆる宗教、あらゆる哲学、あらゆる思想の最高峰であり、極理中の極理である。

法華経二十八品自体が、すでに釈尊一代五十年の説法における最高の経典である。迹門には、諸法実相、理の一念三千を説き、本門には久遠実成、三妙合論の事の一念三千を明かしている。しかして日蓮宗と名のる各宗派は、悉くこの文上の法華経に執着し、これが究竟の極説であるかのごとき邪見に陥っている。

しかし、釈尊の法華経は、日蓮大聖人の三大秘法に比較する時には、本迹二門ともに、熟脱であり垂迹である。日蓮大聖人の三大秘法こそが、唯一最高の久遠下種の本地の大白法である。三大秘法抄（一〇二三㌻）に「法華経を諸仏出世の一大事と説かせ給いて候は此の三大秘法を含めたる経にて渡らせ給えばなり」と。観心本尊抄（二四九㌻）に「再往之を見れば迹門には似ず本門は序正流通倶に末法の始を以て詮と為す」また「寿量の法門は滅後の

為に之を請ずるなり」（二五〇ページ）と。

これを要するに、法華経は、末法の御本仏の三大秘法流布の予言書として、初めてその意義がある。さらに本門寿量品の文底に、三大秘法が秘し沈められていて、本迹二門とも、この三大秘法の義によって、文を判じなければならない。三大秘法を知らずして法華経の文に執着するのは、天の月を知らずしてただ池の月を見、その池の月を取ろうとして水に溺れるようなものである。このような関係は、御義口伝においてもっとも明らかである。御義口伝を拝読することは、日蓮大聖人の仏法の真髄を拝することになるとともに、また釈尊の一代仏教を知ることにもなるのである。

しかして次項に明かすごとく、御義口伝は、今こそ広宣流布実現の時を得て、初めてその真義が世に流布するものと確信する。立正安国論、開目抄、観心本尊抄等は、古来幾多の先師や学僧によって、解釈され、講演され、流布されたが、御義口伝のみは、だれも本格的に手をつけられなかった。その理由は、創価学会の出現を待ち、今日のごとき広宣流布実現の時を待っていたと、いわざるをえないのである。

また御義口伝の一部の奥書には「私集最要文」「註法華経を見らるべし」等とあり、また「註法華経を置かせ給いて……」とある。註法華経とは、日蓮大聖人が御在世中お持ちの法華経の中へ、数多くの註を入れたもので、現在、写真版で発行されているものも、読み下して活版で発行されているものもある。

日興上人筆の御遷化記録によれば、「経は私集最要文名注法華経同く墓所寺に籠め置き」とあり、すなわち身延山の日蓮大聖人の墓所に置けとなっている。しかるに日蓮大聖人滅後に、日朗が立像仏を盗んだ時、この註法華経は日昭が盗

んで持っていった。後に、彼らの末徒が御遺物配分帳などを偽作して、註法華経を日昭に賜わったなどと称している。

さてこの註法華経と御義口伝とは、内容のまったく違う別のものである。ゆえに御義口伝は前記の奥書にあるように、註法華経を前におき、註法華経を中心にして、講義なされたものと考えられる。

次に御義口伝と並び伝えられるものに、御講聞書がある。御義口伝が日興上人の記であるのに対し、これは日向の記と伝えられ、日向記ともいう。御義口伝は各品ごとに何箇かの大事を立て、二百三十一箇条その他と整足されているのに対し、九十箇条の日向記は、内容体裁とも大きな相違がある。もって日興上人の第二祖としての重要なお立ち場を拝することもできるのである。

御書全集大石寺版に収められた御講聞書は、日宗社本に依っている。

(2) 広宣流布実現の時

御義口伝は、極めて重要な御相伝書であるから、古代においては深秘の口伝として伝承され、一般世間には容易に知られなかった。江戸時代になって、ようやく各宗派の間に広まっていったが、これを最重要の御相伝書として拝する者と、一部にはこれを、日蓮大聖人の御義口伝となすのに、多少の疑義をさしはさむ者もあった。

それにしても、日蓮大聖人の他の御抄は、数多くの講義や解釈が行なわれてきたのに、御義口伝にかぎり、だれ一人手をつける人がなかった。大石寺第二十六世日寛上人も、その一部分を六巻抄等に引用されたのみで、全文の

由来や講義については、少しもお述べにならなかった。

明治以降においても、御義口伝の研究や講義は皆無の状態である。ただわずかに、御義口伝の研究に関する記事のなかに、ことさらに御義口伝を偽書扱いにしようとする妄難迷論がある。これとても、きわめて微々たる存在であるが、後にこれらの妄説をまとめて破折することとする。

かくて御義口伝について、先師の述べられた研究や定説はなに一つないのに、なぜ私はここに本講義を発刊せざるをえなくなったのか。それは、いよいよ広宣流布の日が、眼前に、着々と迫りつつあるからである。創価学会の大宗教運動は、ついに全世界各国にわたって五百万世帯を数え、広宣流布の達成は、実に今日あるを思わしめる。

しからば、今こそ、日蓮大聖人の大哲学が、一法も余すことなく、一塵も漏るることなく、全日本へ、全世界へ流布され、理解され、実践されなければならない時がきたのである。しかも御義口伝は、宗教観、宇宙観、人生観等々、いずれの面から考えても、実に仏教の奥底であり、あらゆる哲学、あらゆる思想の最高峰である。御義口伝を欠いて日蓮大聖人の仏法を論ずることは、いかにも大きな欠陥を生ずるであろう。

いまここに、各方面に王仏冥合の文化活動が進展しつつある。いまや一経対一経、一宗対一宗の勝劣を争う時代は過ぎた。政治、経済、教育、芸術、言論等々あらゆる分野にわたって、その根本理念としての宗教の勝劣、正邪、善悪が争われ、判定されるべき時がきたのである。

すなわち、難解な仏教の原論対原論の争いのみではなくて、その原論たる仏法が、いかに現実のうえに顕現さ

れ、人類、社会に、どれほどの平和と繁栄をもたらすかが問題なのである。

御義口伝の内容は、法華経の文や天台、妙楽の解釈の文を引きながらも、必ず日蓮大聖人の観心の上から、一一の文々句々を種脱相対、久遠元初、三大秘法、人法一箇の大御本尊等々の仏教哲学の極致をお述べになっている。さらにまた生命論のうえから、随縁真如、不変真如、煩悩即菩提、生死即涅槃、法報応の三身、空仮中の三諦、色心不二、因果倶時、十界皆成、常楽我浄等々の、生命論の窮極をお説きになっている。さらにまた「今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者」とて、末法に地涌の菩薩として出現された日蓮大聖人こそが、久遠の御本仏として一切衆生を永遠にお救いになる、その国土は日本国であり、総じては全世界であると宣言されている。

いま広宣流布の時を得て、御義口伝の真実の義が、初めて世に顕われ、実践されつつある。それが創価学会の実践活動である。ゆえに本講義は、書誌学的研究や、訓詁註釈的なものが主眼でなく、以上に述べてきたごとく、もっぱら仏教論、生命論、文化論として、いかに応用され、実現されていくかを、最大の眼目としたことはいうまでもない。

実に七百年の間、顕われるべき時を待たれた御義口伝が、今こそ時を得て世に出で、創価学会によって実践されることになったものと痛感する。開目抄は五重の相対を、観心本尊抄は五重三段をもって、邪義を破し正義を顕揚している。しかるに御義口伝は、さらに一歩進んで、人間勝利の新文化実現のための指南書として、その特質を見いだすのである。

(3) 伝承の経過

御義口伝は極めて重要な御相伝書として後世に伝えられ、長い間一般に公開されることはなかった。現在まで伝えられる写本・出版本には、次のようなものがある。

① 天文八年（祖滅二五四年）日経の写本

八品派日経の写本で大阪の妙徳寺に蔵されていたが、今は所在不明。日経の次のような奥書がある。「于時に天文八年己亥五月十四日之を書写し訖んぬ。中村河内に於て仏法興隆、弘通増進の為に之を写す。不審極り無き事之れ多し、但本に任せて之を置くのみ。堅固に之を秘すべき処なり。努努聊爾すべからず、聊爾すべからず。後覧の学侶八品所顕妙法蓮華経、御廻向之を憑むべき者なり。本化沙門日経 花押 日経より相伝す 持主日語在判」

八品派日経は、この御義口伝を、どのようないわれがあって、どこで拝見したか、詳細は明らかでないが、「不審極り無き事之れ多し」といって、平素から日蓮大聖人の御正意を知らないできているので、疑問点が多いといっている。しかし「本に任せて之を置く」というから、自分では理解のできないことも、原本どおりに写しておいたものとみえる。これが伝えられるところの写本の中で最古のものであるが、八品派の一学僧だけが御義口伝を見て、他はだれ一人知らなかったとは考えられない。このころからは、多くの学僧たちが、この深秘の御相伝書を写して、勉強したに違いないのである。

② 元亀二年（祖滅二九〇年）の写本

天文写本より三十六年後のもので、上巻は大石寺に、下巻は京都要法寺に蔵する。下巻には「元亀二辛未二月二十八日」とある。

③　木版印刷・要法寺版

承応三年（祖滅三七三年）と、享保六年（祖滅四四〇年）の二回刊行され、享保版は承応版の重改本であるが、内容はほとんど同じである。享保版の刊記には、寛延四年十月に、京都要法寺檀徒磯村荘兵衛が、承応版の板木があるのを見つけて買い求め、要法寺へ奉納し、以後これを要法寺版と呼ぶようになったとある。

④　金川妙覚寺版

明治十七年一月、不受不施派日正が岡山県金川妙覚寺から発行したもので「増補御義口伝鈔」二巻。体裁・内容ともに古本と大きな相違がある。

⑤　日宗社版

活版印刷の初めであり、大正三年十月、東京池上の日宗社から、普及版小型本として発行された。

⑥　京都平楽寺版

昭和四年十月、清水梁山校訂、高橋善中編の「御義口伝日向記」が、前項日宗社と同型で出版された。

⑦　大正新修大蔵経第八十四巻

昭和六年十二月発行のものに、就注法華経御義口伝として収録されている。上巻は華洛要法寺蔵享保六年刊本に依り、但し文段の体裁は専ら明治十七年刊本に依ると。下巻は大阪妙徳寺蔵天文八年日経書写本により、但し文段

の体裁は専ら明治十七年刊本に依るとなっている。

⑧　御書全集、大石寺版

昭和二十七年四月発行、堀日亨編纂で、御義口伝と御講聞書は「日宗社本に依る」となっている。

⑨　日蓮聖人遺文、第三巻

昭和二十九年二月発行、立正大学編纂。これには「本書は清水梁山師校訂平楽寺版による」となっている。

以上の各本に依って、内容、体裁もそれぞれ異なる。但し多くの本は全体の体裁を、惣釈南無妙法蓮華経の事・序品から普賢品の二十八品・無量義経・普賢経・廿八品一文充の大事・廿八品悉南無妙法蓮華経の事の順となっている。しかるに④の金川妙覚寺版は廿八品悉南無妙法蓮華経の事をバラバラにして各品の頭へおき、惣釈を削除し、無量義経から始め廿八品・普賢経・廿八品に一文充の大事と変更してしまっている。したがって文段の体裁を明治十七年の刊本に依った大正大蔵経も、この変型順序となっているし、昭和三十七年発行の三宅重也の「御義口伝の研究」も変型である。しかも彼は、この変型を自讃し、誤謬を慢じている様は、天魔か外道としか思えないような状態である。

また各本には、後人の加筆や、伝写の誤りなどもあって、これがかえって、日蓮大聖人の御義口伝に疑難を加える原因ともなっているが、それらは後項にいたって明らかにしよう。

さて次に御義口伝は、いつごろから他の著述や文献に顕われているか、また、いかなる文献に引用されているか

を二、三検討してみよう。

日精（富士大石寺第十七世、天和三年・祖滅四〇二年寂）

日蓮聖人年譜（富要集第五巻一三四ページ）「延山蟄居の後御弟子衆の請により法華経の御講釈あり、日興度々の聞を集め部帙を成して御義口伝と名づく亦日興記と号するなり」

富士門家中見聞上（富要集第五巻一五三ページ）「聖人山居の後門弟子の請により法華経の御講釈あり、御弟子衆数多ありといへども日興達士の撰にあたり給ひしかば章安所録の天台の章疏に習って聖人の説法を記録し給ふ事、合して二百廿九箇条、其の外度々の聞を集めて日興記と名く、是れ聖人編集の註法華経に就ての口伝なり御筆今重須に在るなり」

日寛（富士大石寺第二十六世、享保十一年・祖滅四四五年寂）

観心本尊抄文段（下）（富要集第四巻二五七ページ）「御義口伝に云く此の本尊の依文とは如来秘密神通之力の文なり、戒定慧の三学は寿量品の事の三大秘法是れなり、日蓮慥に霊山に於て面授口決せしなり、本尊とは法華経の行者の一身の当体なり云云」

（同二五七ページ）「御義口伝に云く本門事の一念三千の明文なり御本尊は此の文を顕し出だし給うなり乃至其の故は時とは末法第五時の時なり、我とは釈尊・及は菩薩・衆僧は二乗・倶とは六道なり・出とは霊山浄土に列出するなり霊山とは御本尊並びに今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者の住所を説くなり云云」

（同二七四ページ）「御義口伝下に云く、惣じて流通とは未来当今の為なり、法華経一部は一往は在世の為なり再往は末法当今の為なり、其の故は妙法蓮華経の五字は三世諸仏共に許して未来滅後の者の為なり、品品の法門は題

目の用なり体の妙法・末法の用たらば何ぞ用の品品別ならむや」

依義判文抄第三（富要集第三巻一二三ページ）「御義口伝に云く本門事の一念三千の明文なり御本尊は此の文を顕し出だし給うなり……時とは末法第五時の時なり、我とは釈尊・及は菩薩・衆僧は二乗・倶とは六道なり・出とは霊山浄土に列出するなり……故に御義口伝に又云く霊山とは御本尊並びに日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者の住所を説くなり云云、板本の利出の利の字・応に列の字に作るべし御本尊也の也の字・応に並の字に作るべし」云云。

その他日寛上人は、各所に御義口伝を引かれ、縦横無尽にこれを駆使せられている。御義口伝偽書説のありそうな気配など微塵もないのである。

次に他門流における御義口伝の関連記事の著作を挙げると、大要次のとおりである。近代のものは、これを略す。なお、正安二年九月（祖滅八年）日興上人が重須大坊で御義口伝を講じ、日尊が破門されたと日宗年表（要法寺富谷日震著）にある。

円明日澄（一致派、鎌倉妙法寺住、明応元年祖滅二一一年）

法華経啓運抄（五十七紙裏四行）「高祖御義に云く八歳とは竜女が一心なり、八とは三千なり、……又云く言論未訖の事、此の文は無明即法性の文なり」本書は五十五巻で法華経を講じたものであり、御義口伝の引用が多い。

恭寿日耕（八品派隆門、明和三年著、祖滅四八五年）

本迹境智論（日宗全書、本門法華宗部、四四五ページ）「問う御義口伝に云く今日蓮等の類南無妙法蓮華経と唱え奉る者

は寿量品の本主なり、総じて迹化の菩薩は此の品に手をつけいろうべきに非る者なり、彼は迹面本裏、此は本面迹裏然りと雖も当品は末法の要法に非るか……下種を以て末法の詮となす已上、文旨如何」本書は本迹一致を破し、八品派の立ち場で本迹勝劣を主張している。

事行日忍（要法寺系日体の弟子、明和六年著、祖滅四八八年）

根本日蓮宗旨名目下巻（十一紙五行）「御義口伝之れ有り、六高弟も之を伝えり、故に御義口伝上下二巻は日蓮宗の神魂なり」日体は要法寺から追放されたが、根本日蓮宗を提唱し、要法寺とも大石寺とも異なる一派を立てた。

本昌日達（什門流京都寂光寺第九世、安永元年・祖滅四九一年寂）

置文諷誦抄下（日宗全書、顕本法華宗部、三一七ページ）「問う御義口伝下に云く如来は是れ一切衆生の大施主事……開結二経の下今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る等と云えり。是れ則ち六老僧等の上達に対して講談し給う所なり」本書は日什の諷誦文を註釈したものである。

(二)　御義口伝の大意

(1)　宗教の極理論

御義口伝は文々句々に甚深の義意を含み、一代仏教の依文判義となるべき文に当たり、跨節中の跨節の文ともいうべきである。ゆえにその大意を略述することも、極めて至難ではあるが、凡そ三段に分けて概論することとし、まず第一に宗教の極理論として、次の各項を挙げて大要を知ろうと思う。

① 種脱相対を明かす

日蓮大聖人の仏法では、五重の相対を立てるが、その窮極は第五の種脱相対である。種脱相対して立つところの窮極の大仏法が、寿量品の文底に秘し沈められた久遠元初の下種仏法である。これについて御義口伝には、次のように明かされている。信解品（七二七㌻）「無上に重重の子細あり、外道の法に対すれば三蔵経は無上……今日蓮等の類いの心は無上とは南無妙法蓮華経・無上の中の極無上なり」五百弟子品（七三五㌻）「酒に重重之れ有り権教は酒法華経は醒めたり、本迹相対する時迹門は酒なり始覚の故なり本門は醒めたり本覚の故なり、又本迹二門は酒なり南無妙法蓮華経は醒めたり」寿量品（七五三㌻）「惣じては迹化の菩薩此の品に手をつけいろうべきに非ざる者なり、彼は迹表本裏・此れは本面迹裏・然りと雖も而も当品は末法の要法に非ざるか其の故は此の品は在世の脱益なり題目の五字計り当今の下種なり、然れば在世は脱益滅後は下種なり仍て下種を以て末法の詮と為す云云」

② 三大秘法を明かす

種脱相対して立つところの久遠元初の下種仏法とは、三大秘法である。三大秘法とは、本門の本尊、本門の戒壇、本門の題目である。この三大秘法の建立こそ日蓮大聖人の出世の御本懐であり、御義口伝には次のように明か

されている。宝塔品（七四四ページ）「今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉り権教は無得道・法華経は真実と修行する是は戒なり防非止悪の義なり、持つ所の行者・決定無有疑の仏体と定む是は定なり、三世の諸仏の智慧を一返の題目に受持する是は慧なり」寿量品（七五二ページ）「寿量品の事の三大事とは是なり」同・寿量品（七六〇ページ）「戒定慧の三学は寿量品の事の三大秘法是れなり、日蓮慥に霊山に於て面授口決せしなり、本尊とは法華経の行者の一身の当体なり云云」

この三大秘法は、合する時は御本尊の一大秘法となる。此の本尊の所住の処を戒壇となし、此の本尊を信じて南無妙法蓮華経と唱えるを本門の題目となすのである。また三大秘法を開して六大秘法となる。本尊に人と法があり、戒壇に義と事があり、題目に信と行がある。さらに六大秘法を開けば八万法蔵となる。いま御義口伝においては、特に人本尊、法本尊、人法一箇等の深義を説き尽くされている。

③　人本尊、法本尊、人法一箇

末法下種の人本尊は、日蓮大聖人であらせられる。ゆえに常不軽品（七六六ページ）「末法の仏とは凡夫なり凡夫僧なり、法とは題目なり僧とは我等行者なり、仏とも云われ又凡夫僧とも云わるるなり」無量義経（七八三ページ）「守護章には有為の報仏は夢中の権果・無作の三身は覚前の実仏と云云、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は無作の三身覚前の実仏なり云云」同・無量義経（七八四ページ）「今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は無作三身の本主なり」寿量品（七五二ページ）「今日蓮等の類いの意は惣じては如来とは一切衆生なり別しては日蓮の弟子檀那なり、されば無作の三身とは末法の法華経の行者なり無作の三身の宝号を南無妙法蓮華経と云うなり」

法本尊は「法とは題目なり」とお示しのごとく、南無妙法蓮華経の大御本尊であり、その根本は弘安二年十月十二日御建立の、本門戒壇の大御本尊である。しかして本尊は人法に分かれるとはいえ、実は人法一体であらせられ、釈迦仏法のように人法の勝劣がないのである。ゆえに、寿量品（七五二ページ）「無作の三身の宝号を南無妙法蓮華経と云うなり」同・寿量品（七六〇ページ）「本尊とは法華経の行者の一身の当体なり」同・寿量品（七五九ページ）「自受用身とは一念三千なり、伝教云く『一念三千即自受用身・自受用身とは尊形を出でたる仏と・出尊形仏とは無作の三身と云う事なり』云云」

④ 久遠元初を明かす

末法の本仏は久遠元初いらい、本有常住の化導をなされ、未来永遠の衆生をお救いになるのである。寿量品（七五九ページ）「久遠とははたらかさず・つくろわず・もとの儘と云う義なり、無作の三身なれば初めて成ぜず是れ働かざるなり、卅二相八十種好を具足せず是れ繕わざるなり本有常住の仏なれば本の儘なり是を久遠と云うなり、久遠とは南無妙法蓮華経なり実成無作と開けたるなり云云」この久遠元初の仏は、名字凡夫位の仏であり、諸御書には五百塵点劫当初とか、五百塵点劫乃至等と表現されている。御義口伝において、無作三身を論じ、自受用身を論じているのは、すべて久遠元初の仏を指し示しているのである。

(2) 生命の本質論

① 色心不二を明かす

従来の哲学は、唯物論か、唯心論かに偏って互いに争ってきたが、日蓮大聖人の仏法では、色心不二の生命哲学を根本とする。ゆえに御義口伝には、総題釈（七〇八㌻）「帰とは我等が色法なり命とは我等が心法なり色心不二なるを一極と云うなり、釈に云く一極に帰せしむ故に仏乗と云うと」宝塔品（七四四㌻）「戒とは色法なり定とは心法なり慧とは色心二法の振舞なり」、提婆達多品（七四七㌻）「一とは妙法蓮華経なり宝とは妙法の用なり珠とは妙法の体なり、妙の故に心法なり法の故に色法なり色法は珠なり心法は宝なり妙法とは色心不二なり」

このように色心は、二にしてしかも不二である。精神と肉体は、二にしてしかもその当体は、一人の生命であるがゆえに不二である。法華経方便品には、この瞬間の生命に十如是を具すと説く。しかして十如是は、相は唯色、性は唯心、体、力、作、縁は色心を兼ね、因果は唯心、報は唯色である。十如是のうちでも初めの三如是が体となり、後の七如是は用となる。御義口伝にはこれについて、化城喩品（七三三㌻）「方便品の相性体の三如是を祖と云うなり……此の三如是は三世の諸仏の父母なり」

②　三諦、三身を明かす

三如是のうち、如是体とは生命をいい、法身如来という。如是性とは、精神、心、性格をいい、報身如来という。如是相とは、肉体、姿、形をいい、応身如来という。またこれらによって、三観・三諦を立てる。如是相は仮観であり、仮諦である。如是性は空観であり、空諦である。如是体は中道観であり、中諦である。しかも爾前経では三観・三諦が別々に説かれた。たとえば、この世は仮で、死んだ後は空に帰すというようなものである。しかるに法華経では、瞬間瞬間の生命に、三観、三諦、三身を具すと説いている。

ゆえに御義口伝には、譬喩品（七二二ページ）「舎利弗とは法華経なり、舎とは空諦利とは仮諦弗とは中道なり円融三諦の妙法なり」常不軽品（七六四ページ）「第二得大勢菩薩の事、御義口伝に云く得とは応身なり大とは法身なり勢とは報身なり、又得とは仮諦なり大とは中道なり勢とは空諦なり円融の三諦三身なり」

無作三身については、前記の人本尊の項で詳しく引用したのでこれを略すが、次の一文によって、十如是と無作三身と我等の生命との関係を知ることができる。方便品（七二〇ページ）「我とは釈尊・我実成仏久遠の仏なり此の本門の釈尊は我等衆生の事なり、如我の我は十如是の末の七如是なり九界の衆生は始の三如是なり我等衆生は親なり仏は子なり父子一体にして本末究竟等なり、此の我等を寿量品に無作の三身と説きたるなり」

③ 十界互具・一念三千を明かす

生命はまた十界互具の当体のゆえに、われわれ凡夫の一念に仏界を具し、仏界にはまた、地獄界に至るまでの九界を具す。提婆達多品（七四五ページ）「提婆は地獄界なり竜女は仏界なり、然る間十界互具百界千如一念三千なり」方便品（七一四ページ）「即は円なれば法華経の別名なり即とは凡夫即極・諸法実相の仏なり、円とは一念三千なり……煩悩即菩提生死即涅槃是なり」方便品（七一六ページ）「開仏知見の仏とは九界所具の仏界なり知見とは妙法の二字止観の二字寂照の二徳生死の二法なり色心因果なり、所詮知見とは妙法なり九界所具の仏心を法華経の知見にて開く事なり、爰を以て之を思うに仏とは九界の衆生の事なり」譬喩品（七二二ページ）「合とは仏界なり掌とは九界なり九界は権仏界は実なり、妙楽大師の云く『九界を権と為し仏界を実と為す』と十界悉く合掌の二字に納まって森羅三千の諸法は合掌に非ざること莫きなり」

一念三千は仏教の極理であり、三大秘法の大御本尊は一念三千の当体である。御義口伝においては、その御本尊を信じ修行に励む者を、十界互具、百界千如、一念三千の当体であるとして、信心の上から、生活の上から、功徳と罰の上から、その他あらゆる面から説ききっている。すなわち随縁不変一念寂照、煩悩即菩提、生死即涅槃、無明即法性、因果倶時、草木成仏等々、すべて一念三千を、実践、応用の面から説かれている原理である。ここにおいて、生命の極理本質を、説ききわめ尽くされたというべきである。

(3) 永遠の幸福論

① 世界広布を明かす

御義口伝においては「今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱うる者」とて、いま末法において正しく信心折伏に励み、広宣流布して一切衆生を救う者は、ただひとり日蓮大聖人であらせられることを、くりかえし、くりかえし断定されている。日本国中はいうまでもなく、全世界の民衆を、末法万年より永遠の未来にわたって即身成仏せしめられるのである。

方便品（七一七ページ）「国土世間の縁とは南閻浮提は妙法蓮華経を弘むべき本縁の国なり、経に云く『閻浮提内広令流布使不断絶』是なり云云」方便品（七二〇ページ）「今日蓮が唱うる所の南無妙法蓮華経は末法一万年の衆生まで成仏せしむるなり豈今者已満足に非ずや、已とは建長五年四月廿八日に初めて唱え出す処の題目を指して已と意得可きなり……満足とは成仏と云う事なり」

寿量品（七五六ページ）「是好良薬とは……末法にては南無妙法蓮華経なり、好とは三世諸仏の好み物は題目の五字なり、今留とは末法なり此とは一閻浮提の中には日本国なり、汝とは末法の一切衆生なり」寿量品（七五九ページ）「当品流布の国土とは日本国なり惣じては南閻浮提なり、所化とは日本国の一切衆生なり修行とは無疑曰信の信心の事なり、授与の人とは本化地涌の菩薩なり云云」神力品（七七一ページ）「第七斯人行世間能滅衆生闇の事、御義口伝に云く斯人とは上行菩薩なり世間とは大日本国なり衆生闇とは謗法の大重病なり、能滅の体は南無妙法蓮華経なり」普賢品（七八一ページ）「第五閻浮提内広令流布の事、御義口伝に云く此の内の字は東西北の三方を嫌える文なり、広令流布とは法華経は南閻浮提計りに流布す可しと云う経文なり、此の内の字之を案ずべし」

しかして、その国土の民衆が正法を持ち、成仏をすれば、草木成仏、依正体一となって、国土もまた繁栄するのである。譬喩品（七二三ページ）「草木成仏の証文に而自廻転の文を出すなり是れ一念三千の依正体一の成仏を説き極めたるなり、草木成仏の証人とは日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るを指すなり、廻転とは題目の五字なり自とは我等行者の事なり」

② 永遠の幸福を明かす

広宣流布の時には、個人も社会も永遠の平和と幸福を築いていくことができる。即身成仏の文は既に再三引いてきたが、最後に二、三の文を引いて終わりとする。

寿量品（七五二ページ）「惣じて伏惑を以て寿量品の極とせず唯凡夫の当体本有の儘を此の品の極理と心得可きなり、無作の三身の所作は何物ぞと云う時南無妙法蓮華経なり」神力品（七九一ページ）「是人於仏道決定無有疑、此の

文は十界各各本有本覚の十如是なれば地獄も仏界も一如なれば成仏決定するなり所謂南無妙法蓮華経の受持なり云云」勧発品（八〇三ページ）「日蓮が弟子檀那別の才覚無益なり、妙楽の釈に云く『子父の法を弘む世界の益有り』と、子とは地涌の菩薩なり父とは釈尊なり世界とは日本国なり益とは成仏なり法とは南無妙法蓮華経なり、今又以て此くの如し父とは日蓮なり子とは日蓮が弟子檀那なり世界とは日本国なり益とは受持成仏なり法とは上行所伝の題目なり」

第二章　疑難を破す

(一)　本文に対する疑難

(1)　補註または科註の文

次の文が補註の文か、科註の文か。もし科註の文とすれば、時代の相違があるという論難がある。

「第十如却　関錀開大城　門の事　補註の四に云く此の開塔見仏は蓋し所表有るなり、何となれば即ち開塔は即開権なり見仏は即顕実なり是れ亦前を証し復将に後を起さんとするのみ、如却関錀とは却は除なり障除こり機動くことを表す謂く法身の大士惑を破し理を顕し道を増し生を損するなり」（御書全集七四一ページ）と。

ただこれだけの文が引用されてあるところから、御義口伝の真偽論までやかましく争っている。いかに近代の御義口伝の研究なるものが、日蓮大聖人の仏法論、生命論から逸脱して、枝葉や末節に固執しているかがわかるであろう。

御書全集の編纂者堀日亨上人は、大石寺の古写本たる元亀の写本に、ここが「補註」となっているところから、

「補註」となされたものとみえるが、そのほかの御義口伝の各本は「科註」となっている。宋の従義の補註四は文句一の下から二の下までを註記したものである。しかして宝塔品は補註の九になっており、その文も御義口伝の引用の文とは大分違う。科註四には、正しく御義口伝に引用の文と同じ文がある。

ところで科註四の文が引用されているとなれば、この科註は日蓮大聖人の滅後十三年、元の徐行善が集めたものであり、いかに日蓮大聖人といえども、滅後十三年に出来上がった本の内容を、あらかじめ引用されるわけがない。したがって御義口伝は偽書であるなどというのが、立正大学の執行海秀らの論法である。

これに対する各宗派の本格的な反論もないが、ただわずかに日蓮正宗の富士学林の研究生三名が、教師講習会において研究発表をしたものが、大日蓮（昭和三十七年二月号）に掲載されている。その内容は重複していたり、きわめてまわりくどい表現だったりして、いずれが決定的意見か把握しにくいが、概要は次のように論じている。

法華経科註とは、主として天台の文句および文句記を、科をかかげ註を加えたものである。これに三種ありとされ

① 宋の守倫の註。

② 元の徐行善が註したもの「徐氏註」という。

③ 明の法済が訂正したもの「倫註」という。

現在では①の守倫の註は失われてしまい、現存するものは②と③である。ここで想像できるのは、

① 宋の守倫の註が早くから日本に渡ってきていて、日蓮大聖人は、これを見て引用なされたのであろう。ただし、守倫註が日本へ渡ってきていたかどうか、また守倫の旧本の内容が失われてしまって不明であり、現在のと同

じかどうかも決定的なことはわからない。

② 次に想像できることは、祖滅十三年に成立した徐氏の註が、間もなく日本へ渡ってきて、おそらく日興上人が、宝塔品第十一のところへ附加されたものであろうともいう。

いずれにしても本講義は、それらを究明するのが目的でないから、詳しい論述は省略するが、元亀本、大石寺版のとおり補註とするのにも、相当の根拠があってのことであるし、補註なら時代の相違は問題ない。科註にしても前述のような想像が可能であってみれば、ただこの一箇の案をもって偽書扱いするなどというのは、暴言妄論も甚だしいといわざるをえない。

(2) 弘安元年正月一日の文

御義口伝は上下巻とも最後の日附が、弘安元年正月一日となっている。建治四年は二月に弘安と改元されているのであって、正月一日から弘安を使うわけがないという。

御義口伝は日蓮大聖人の講義を、日興上人が加筆されたものであって、その講義も、必ずしも建治三年の年末までで終わったとはいい切れない。講義は弘安年間にはいっても続けられたことが御抄に見られるので、この時代のものも、御義口伝の中に、はいっているといえる。

ただ弘安元年正月一日が、講義の一往の終了の時期であったか、ほかにまたなにかの原因があって、こういう日附となされたか。日附を後から入れる場合には、建治を使わずに、正月一日から弘安を使うような例は、他にもよく

見られることで、不思議はないのである。いずれにしても、これが偽書論の論拠にならないことはいうまでもない。

(3) 執行海秀等の愚論

御義口伝に疑難を加える者として、今日よくその名を聞くのが、立正大学教授の執行海秀である。しかし、いきなり彼の御義口伝の真偽論をとりあげても、意味がない。彼は日蓮大聖人の仏法を知らないで、自己流の仏教に執着し、その我見で御義口伝を判断するので、およそ日蓮大聖人の御義口伝とは似ても似つかない迷論愚論に陥っている。

次にまず彼の論文の一部を引用してみよう。

執行海秀・日蓮教学上に於ける御義口伝の地位（印度学仏教学研究・第三巻第一号）

「そもそも本書は、①観心主義の思想を基調とするので、②五百塵点を事顕本とし、この事顕本に対して無作三身の理顕本を如来秘密神通之力の文に依て強調している。③無作三身の宝号を南無妙法蓮華経というも、それは凡夫の当体本有の儘を指したものであり、また三千の諸法に名ずけたものに他ならない。……かくして十界諸法の理顕本を以て④寿量品の極意とし、森羅万象を自受用身の自体顕照と談ずるわが本門の事円であるといい、久遠とはいろはずつくろはざる有の儘の姿であると釈している」

この程度の御義口伝の理解では、とうてい真偽論など戦わすことが不可能なことは明らかであるが、せっかく引

用のついでに、二、三の破折を加えておくこととする。

① そもそも本書は観心主義を基調にしているというが、日蓮大聖人の仏法は、観心主義が基調となるくらいは、いかなる幼学の徒も知りぬいているであろう。もし観心主義がいけないなら、教相主義でいくというのか。しからば「観心の本尊抄」を捨てて、新たに「教相の本尊抄」を執行君が書かなくてはならないであろう。

② 五百塵点を事顕本とし、無作三身を理顕本とするというが、それは一体誰の説か、執行君の独断説であり、日蓮大聖人や日蓮正宗とは関係がない。本迹相対する時は、迹門の理に対して本門は事となるが、種脱相対する時には、本迹ともに迹となり理となって、文底下種の一念三千のみが、真実の事行の一念三千となるのである。

③ 無作三身のことを、彼は、理顕本であり、宝号を南無妙法蓮華経といい、凡夫の当体本有の儘であり、また三千の諸法に名づけたものといっている。ここでも肝心のところを知らない。すなわち無作の三身とは末法の法華経の行者であり、無作の三身の宝号を南無妙法蓮華経というのである。末法の法華経の行者とは日蓮大聖人で人本尊を表わし、宝号を南無妙法蓮華経とは、法本尊を表わす。すなわちこれこそ人法一箇の三大秘法の大御本尊をお示しの文である。総じていえば、凡夫の当体本有の儘も、三千の諸法も、ことごとく無作三身であるが、別して本有無作三身の教主釈尊とは、本仏日蓮大聖人であらせられることを、御義口伝に説かれているのである。

④ 寿量品の極意以下も、論理が支離滅裂である。そもそも寿量品の極意とはなにか。文上には五百塵点劫成道の仏の本地を明かしているが、その文底には、久遠元初の三大秘法が秘し沈められていることを知らなくては、久遠を論ずる資格がないのである。

またさらに御義口伝に疑難を加えるものがよくいうのは、文書の形態が日蓮大聖人滅後の南北朝時代に成立した中古天台の、等海口伝等に似ているなどという。三大秘法抄にお示しのとおり、仏教の極理は面授口決によってのみ、正しく後世へ伝えられるのである。口伝や文体が似ているからといって、中古天台の観心や寿量頭本や無作三身論と、日蓮大聖人の仏教の真髄との見分けがつかないようでは、自己の低迷ぶりをさらけ出している以外の何ものでもないのである。

また種脱相対論や宗祖本仏論があるから偽書だなどというのは、邪宗邪義の徒輩がいつもいうことで、珍しくはない。種脱相対も本仏論も観心主義も、みな開目抄や観心本尊抄に明々白々のとおりである。また身延派などでは、日向記に対抗して、日興記の御義口伝が偽作されたなどという、奇想天外の説をなす者もあるというが、こんなのはもとより問題とならない。

このように本書を疑う根拠は何ものもない。ゆえに執行海秀にしても、結論は次のように、実にあいまいとなっている。こんなあいまいもこたる結論を聞いて、御義口伝そのものが偽書扱いされたかなどと騒ぐほうが、むしろおかしいではないか。

「ところで本書は古来より真偽の論がある。……本書は思想的にも文献的にも、日蓮教学上に於ける第一資料とすることには躊躇せざるをえないのである」

(二) 後人の加筆に対する疑難

(1) 当体蓮華抄の文

最初の南無妙法蓮華経の事の終わりの文（七〇八ページ）「……八葉九尊の仏体なり能く能く之を思う可し已上」の次に「抑も此の蓮花所所の処を尋ね候えば、何なる河地に開け、何なる処、何なる境に生きる華とやせん。若し霊山の北か、うずいの南無熱池と云う池に大白蓮華開け不思議のベラ華を備えたり、以て彼を妙法蓮華と号す可きか。亦法伽はら王の池に千葉の蓮華開く。而るに人中の蓮華は十余葉、天上の蓮華は百葉、仏菩薩の蓮華は千葉なり。是を以て妙法蓮華と云う可きか。又白鷺池……功能此くの如し」という相当の長文がある（要法寺版等）。しかもその文は録外廿三の当体蓮華抄と同じ文が引かれていることになるところから、論難するものがあった。

しかし大石寺版御書全集には削除されているように、この文は「……已上」で終わった後に、後人の附加した文である。ゆえに当体蓮華抄と同文があったからといって、御義口伝そのものを疑う理由とはならない。

(2) 老僧の所望等の文

本文の最後の「……法とは上行所伝の題目なり」（八〇三ページ）の次に、次のような奥書が載っている本がある。

「六老僧の所望に依て老後たりと雖も、日蓮が本意の一端、講談せしめ畢んぬ。是れ併しながら私集最要文を読誦せしむる所なり。然る間法華一部の諸要文書き付け畢んぬ。此の意は或は文を隠して義を取り、或は義を隠して文を取り、或は文義共に顕し、或は文義共に隠して講談するなり。委しくは註法華経を見らる可きなり。然りと雖も文義深遠なる間、愚昧に及ぶ可からざるなり。広宣流布の要法豈に此の註法華経に過ぎんや。就註法華経御義口伝巻下日蓮在御判　日興之を記す」（大正大蔵経による）

この文に六老僧とあるところから、弘安元年に六老僧はなかった。本弟子六人と定められたのは弘安五年御入滅直前のことである等と論難するものがある。

確かにそのとおりであって、此の文もまた、後世の者の附加した文である。ゆえに、ただ「老僧の所望」とでもあればよいところを、後世の者が「六老僧」としたままでである。

大石寺版にはこの文が削除されているが、「広宣流布の要法豈に此の註法華経に過ぎんや」等の文は、創価学会の広宣流布の実践活動によって初めて証明されたのである。

(3)　高祖の御義等の文

さらにまた、前記に引き続いて、次のような奥書がある。

「本伝に云く、御義口伝と云う事、何れも高祖の御義なり。御流れなる間、口伝と云うなり。本末師等の疏釈其の外見合せ、御義を以て法門を荘厳し奉る可きなり。初心の行者の及ぶ可からざる法門なり。此は註法華経を置かせ

給いて、六老僧の為に身延山に於て御談有るなり。此の巳前甲州の日春日法の所望に依て御談有りき、提婆品の時、蛇来りて聴聞せり。八歳の竜女なりと仰せらる。此の書授与の末代の亀鏡は此の御法門なり。其の時の執筆日興なり云云。弘安元年戊寅正月一日　執筆日興花押。六老僧花押」（大正大蔵経による）

以上の文も、明らかに後世に附加された文である。それゆえ、これをもとにして、御義口伝そのものを疑うことは決してできないのである。

たしかに日蓮大聖人の御在世中に、大聖人のことを「高祖」と申し上げ、その教えを「御義なり」などといったかどうか。疑問にならないわけでもない。しかし、後世に書き加えられた文であるならば、「高祖」とも、「御義」とも申し上げるほうが、当然であろう。しかしまた、日蓮正宗富士大石寺においては、御開山日興上人いらい、日蓮大聖人の教えを正しく伝承し、日蓮大聖人こそ末法の御本仏なりと拝してきている。ゆえに、たとえ御在世中であっても、「高祖の御義」と申し上げるほうが、当然であった。

ゆえに原殿御書には「いづくにても聖人の御義を相継ぎ進らせて、世に立て候はんこそ詮にて候へ」とお述べになっているのである。

御義口伝　本講

御義口伝　本講

御義口伝　本講

御義口伝目録

南無妙法蓮華経

巻上

序品七箇の大事

第一　如是我聞の事

第二　阿若憍陳如の事

第三　阿闍世王の事

第四　仏所護念の事

第五　下至阿鼻地獄の事

第六　導師何故の事

第七　天鼓自然鳴の事

方便品八箇の大事

第一　方便品の事

第二　諸仏智慧甚深無量其智慧門の事

第三　唯以一大事因縁の事

第四　五濁の事

第五　比丘比丘尼有懐増上慢優婆塞我慢優婆夷不信の事

第六　如我等無異如我昔所願の事

第七　於諸菩薩中正直捨方便の事

第八　当来世悪人聞仏説一乗迷惑不信受破法堕悪道の事

譬喩品九箇の大事

第一　譬喩品の事

第二　即起合掌の事

第三　身意泰然快得安穏の事

第四　得仏法分の事

第五　而自廻転の事

第六　一時倶作の事
第七　以譬喩得解の事
第八　唯有一門の事
第九　今此三界等の事
信解品六箇の大事
第一　信解品の事
第二　捨父逃逝の事
第三　加復窮困の事
第四　心懐悔恨の事
第五　無上宝聚不求自得の事
第六　世尊大恩の事
薬草喩品五箇の大事
第一　薬草喩品の事
第二　此の品述成段の事
第三　雖一地所生一雨所潤等の事
第四　破有法王出現世間の事
第五　我観一切普皆平等無有彼此愛憎之心我無貪著亦無限礙の事
授記品四箇の大事
第一　授記の事
第二　迦葉光明の事
第三　捨是身已の事
第四　宿世因縁吾今当説の事
化城喩品七箇の大事
第一　化城の事
第二　大通智勝仏の事
第三　諸母涕泣の事
第四　其祖転輪聖王の事
第五　十六王子の事
第六　即滅化城の事
第七　皆共至宝処の事

五百弟子品三箇の大事
第一　衣裏の事
第二　酔酒而臥の事
第三　身心遍歓喜の事
人記品二箇の大事
第一　学無学の事
第二　山海慧自在通王仏の事
法師品十六箇の大事
第一　法師の事
第二　成就大願愍衆生故生於悪世広演此経の事
第三　如来所遣行如来事の事
第四　与如来共宿の事
第五　是法華経蔵深固幽遠無人能到の事
第六　聞法信受随順不逆の事
第七　衣座室の事
第八　欲捨諸懈怠応当聴此経の事
第九　不聞法華経去仏智甚遠の事
第十　若説此経時有人悪口罵加刀杖瓦石念仏故応忍の事
第十一　及清信士女供養於法師の事
第十二　若人欲加悪刀杖及瓦石則遣変化人為之作衛護の事
第十三　若親近法師速得菩薩道の事
第十四　随順是師学の事
第十五　師と学との事
第十六　得見恒沙仏の事
宝塔品廿箇の大事
第一　宝塔の事
第二　有七宝の事
第三　四面皆出の事
第四　出大音声の事
第五　見大宝塔住在空中の事

第六　国名宝浄彼中有仏号曰多宝の事
第七　於十方国土有説法華経処我之塔廟為聴是経故涌現其前為作証明讃言善哉の事
第八　南西北方四惟上下の事
第九　各齎宝華満掬の事
第十　如却関鑰開大城門の事
第十一　摂諸大衆皆在虚空の事
第十二　譬如大風吹小樹枝の事
第十三　若有能持則持仏身の事
第十四　此経難持の事
第十五　我則歓喜諸仏亦然の事
第十六　読持此経の事
第十七　是真仏子の事
第十八　是諸天人世間之眼の事
第十九　能須臾説の事
第二十　此経難持の事

提婆達多品八箇の大事

第一　提婆達多の事
第二　若不違我当為宣説の事
第三　採菓汲水拾薪設食の事
第四　情存妙法故身心無懈倦の事
第五　我於海中唯常宣説の事
第六　年始八歳の事
第七　言論未訖の事
第八　有一宝珠の事

勧持品十三箇の大事

第一　勧持の事
第二　不惜身命の事
第三　心不実故の事
第四　敬順仏意の事
第五　作師子吼の事
第六　如法修行の事

第七　有諸無智人の事
第八　悪世中比丘の事
第九　或有阿練若の事
第十　自作此経典の事
第十一　為斯所軽言汝等皆是仏の事
第十二　悪鬼入其身の事
第十三　但惜無上道の事
安楽行品五箇の大事
第一　安楽行品の事
第二　一切法空の事
第三　有所難問不以小乗法答等の事
第四　無有怖畏加刀杖等の事
第五　有人来欲難問者諸天昼夜等の事
涌出品一箇の大事
第一　唱導之師の事

巻下

寿量品廿七箇の大事

第一　南無妙法蓮華経如来寿量品第十六の事
第二　如来秘密神通之力の事
第三　我実成仏已来無量無辺等の事
第四　如来如実知見三界之相無有生死の事
第五　若仏久住於世薄徳之人不種善根貧窮下賤
貪著五欲入於憶想妄見網中の事
第六　飲他毒薬薬発悶乱宛転于地の事
第七　或失本心或不失者の事
第八　擣篩和合与子令服の事
第九　毒気深入失本心故の事
第十　是好良薬今留在此汝可取服勿憂不差の事
第十一　自我得仏来の事
第十二　為度衆生故方便現涅槃の事

第十三　常住此説法の事
第十四　時我及衆僧倶出霊鷲山の事
第十五　衆生見劫尽〇而衆見焼尽の事
第十六　我亦為世父の事
第十七　放逸著五欲堕於悪道中の事
第十八　行道不行道の事
第十九　毎自作是念の事
第二十　得入無上道等の事
第廿一　自我偈の事
第廿二　自我偈始終の事
第廿三　久遠の事
第廿四　此の寿量品の所化の国土と修行との事
第廿五　建立御本尊等の事
第廿六　寿量品の対告衆の事
第廿七　無作三身の事

分別功徳品三箇の大事
第一　其有衆生聞仏寿命長遠如是乃至能生一念信解所得功徳無有限量の事
第二　是則能信受如是諸人等頂受此経典の事
第三　仏子住此地則是仏受用の事
随喜品二箇の大事
第一　妙法蓮華経随喜功徳の事
第二　口気無臭穢優鉢華之香常従其口出の事
法師功徳品四箇の大事
第一　法師功徳の事
第二　六根清浄の事
第三　又如浄明鏡の事
第四　是人持此経安住希有地の事
常不軽品三十箇の大事
第一　常不軽の事

第二　得大勢菩薩の事
第三　威音王の事
第四　凡有所見の事
第五　我深敬汝等不敢軽慢所以者何汝等皆行菩薩道当得作仏の事
第六　但行礼拝の事
第七　乃至遠見の事
第八　心不浄者の事
第九　言是無智比丘の事
第十　聞其所説皆信伏随従の事
第十一　於四衆中説法心無所畏の事
第十二　常不軽菩薩豈異人乎則我身是の事
第十三　常不値仏不聞法不見僧の事
第十四　畢是罪已復遇常不軽菩薩の事
第十五　於如来滅後等の事
第十六　此品の時の不軽菩薩の体の事
第十七　不軽菩薩の礼拝住処の事
第十八　開示悟入礼拝住処の事
第十九　毎自作是念の文礼拝住処の事
第二十　我本行菩薩道の文礼拝住処の事
第廿一　生老病死礼拝住処の事
第廿二　法性礼拝住処の事
第廿三　無明礼拝住処の事
第廿四　蓮華の二字礼拝住処の事
第廿五　実報土礼拝住処の事
第廿六　慈悲の二字礼拝住処の事
第廿七　礼拝住処分真即の事
第廿八　究竟即礼拝住処の事
第廿九　法界礼拝住処の事
第卅　礼拝住処忍辱地の事
神力品八箇の大事
第一　妙法蓮華経如来神力の事

第二　出広長舌の事
第三　十方世界衆宝樹下師子座上の事
第四　満百千歳の事
第五　地皆六種震動其中衆生○衆宝樹下の事
第六　娑婆是中有仏名釈迦牟尼仏の事
第七　斯人行世間能滅衆生闇の事
第八　畢竟住一乗○是人於仏道決定無有疑の事

嘱累品三箇の大事

第一　従法座起の事
第二　如来是一切衆生之大施主の事
第三　如世尊勅当具奉行の事

薬王品六箇の大事

第一　不如受持此法華経乃至一四句偈の事
第二　十喩の事
第三　離一切苦一切病痛能解一切生死之縛の事
第四　火不能焼水不能漂の事
第五　諸余怨敵皆悉摧滅の事
第六　若人有病得聞是経病即消滅不老不死の事

妙音品三箇の大事

第一　妙音菩薩の事
第二　肉髻白毫の事
第三　八万四千七宝鉢の事

普門品五箇の大事

第一　無尽意菩薩の事
第二　観音妙の事
第三　念念勿生疑の事
第四　二求両願の事
第五　三十三身利益の事

陀羅尼品六箇の大事

第一　陀羅尼の事

第二　安爾曼爾の事
第三　鬼子母神の事
第四　受持法華名者福不可量の事
第五　皐諦女の事
第六　五番神呪の事
厳王品三箇の大事
第一　妙荘厳王の事
第二　浮木孔の事
第三　当品邪見即正の事
普賢品六箇の大事
第一　普賢菩薩の事
第二　若法華経行閻浮提の事
第三　八万四千天女の事
第四　是人命終為千仏授手の事
第五　閻浮提内広令流布の事
第六　此人不久当詣道場の事

無量義経六箇の大事
第一　無量義経徳行品第一の事
第二　量の字の事
第三　義の字の事
第四　処の一字の事
第五　無量義処の事
第六　無量義処の事
普賢経五箇の大事
第一　普賢経の事
第二　不断煩悩不離五欲の事
第三　六念の事
第四　一切業障海皆従妄想生若欲懺悔者端坐思
実相衆罪如霜露慧日能消除の事
第五　正法治国不邪枉人民の事

別伝

廿八品に一文充の大事

一廿八品悉南無妙法蓮華経の事

以上

御義（南無妙法蓮華経）

御義（南無妙法蓮華経）

南無妙法蓮華経

本文

南無妙法蓮華経

御義口伝に云く南無とは梵語なり此には帰命と云う、人法之れ有り人とは釈尊に帰命し奉るなり法とは法華経に帰命し奉るなり又帰と云うは迹門不変真如の理に帰するなり命とは本門随縁真如の智に命くなり帰命とは南無妙法蓮華経是なり、釈に云く随縁不変・一念寂照と、又帰とは我等が色法なり命とは我等が心法なり色心不二なるを一極と云うなり、釈に云く一極に帰せしむ故に仏乗と云うと、又云く南無妙法蓮華経の南無とは梵語・妙法蓮華経は漢語なり梵漢共時に南無妙法蓮華経と云うなり、又云く梵語には薩達磨・芬陀梨伽・蘇多覧と云う此には妙法蓮華経と云うなり、薩は妙なり、達磨は法なり、芬陀梨伽は蓮華なり蘇多覧は経なり、九字は九尊の仏体なり九界即仏界の表示なり、妙とは法性なり法とは無明なり無明法性一体なるを妙法と云うなり蓮華とは因果の二法なり是又因果一体なり経とは一切衆生の言語音声を経と云うなり、釈に云く声仏事を為す之を名けて経と為

すと、或は三世常恒なるを経と云うなり、法界は妙法なり法界は蓮華なり法界は経なり蓮華とは八葉九尊の仏体なり能く能く之を思う可し已上。

伝云序品七箇の大事
信解品六箇の大事
化城喩品七箇の大事
法師品十六箇の大事
勧持品十三箇の大事
寿量品二十七箇の大事
法師功徳品四箇の大事
嘱累品三箇の大事
普門品五箇の大事
普賢品六箇の大事
方便品八箇の大事
薬草喩品五箇の大事
五百品三箇の大事
宝塔品二十箇の大事
安楽行品五箇の大事
分別功徳品三箇の大事
不軽品三十箇の大事
薬王品六箇の大事
陀羅尼品六箇の大事
無量義経六箇の大事
譬喩品九箇の大事
授記品四箇の大事
人記品二箇の大事
提婆品八箇の大事
涌出品一箇の大事
随喜品二箇の大事
神力品八箇の大事
妙音品三箇の大事
厳王品三箇の大事
普賢経五箇の大事

已上二百三十一箇条也此の外に別伝之有り具さに之を記し訖ぬ。

語訳

南無とは梵語なり此には帰命と云う　梵語とは、古代インドの標準文章語。現代、一般的には、サンスクリットと呼ばれている。梵天が造った「語」であるとする伝説から「梵語」といわれている。梵語から漢語に翻訳する場合に、漢字をカタカナのように使って、その音を訳したのを「音訳」という。意味を訳したのを「意訳」という。例えば、梵語「ナム」を「南無」とするのは音訳であり、「帰命」とするのは意訳である。これは、ちょうど、英語を日本語に訳するとき「spoon」を「スプーン」とするのは音訳であり、「さじ」とするのは意訳であるのと全く同じである。同じような例を幾つか挙げれば、梵語「アヌッタラサンミャクサンボディー」は漢語に音訳して「阿耨多羅三藐三菩提」となる。意訳しては「無上正等覚」となる。また、梵語「ボディー」は漢語に音訳して「菩提」となり、意訳して「悟り」となる。また「シャリプッタ」を音訳して「舎利弗」となり、意訳して「身子」となる。さて「南無」とは、南無御書(一二九九ページ)に「南無と申すは月氏の語・此の土にては帰命と申すなり、帰命と申すは天台の釈に云く『命を以て自ら帰す』等云云、命を法華経にまいらせて仏にはならせ給う、日蓮今度命を法華経にまいらせて」とおおせである。白米一俵御書(一五九六ページ)には「一切のかみ・仏を敬うやまいたてまつる・始の句には南無と申す文字をき候なり、南無と申すは・いかなる事ぞと申すに・南無と申すは天竺のことばにて候、漢土・日本には帰命と申す帰命と申すは我が命を仏に奉ると申す事なり、我が身には分に随いて妻子・眷属・所領・金銀等をもてる人人もあり・又財なき人人もあり、財あるも財なきも命と申す財にすぎて候財は候はず、されば古いにしへの聖人・賢人と申すは命を仏にまいらせて・仏にはなり候なり」と申されている。

釈尊　釈尊とは、通途の仏法では、釈迦牟尼仏を指す。しかし、実には、六種類の釈尊があることを知らなければならない。すなわち、一に蔵教の釈尊。二に通教の釈尊。三に別教の釈尊。四に法華経迹門の釈尊。五に法華経本門の釈尊。六に法華

経本門文底の釈尊である。この場合の釈尊は、当然、第六の文底の釈尊、すなわち久遠元初の自受用報身如来であられる日蓮大聖人の御事である。

法華経　法華経とは正像末に三種の法華経がある。正法においては、釈尊の二十八品。像法においては、天台の摩訶止観。末法においては、三大秘法の五字七字の南無妙法蓮華経である。この場合の法華経は当然、末法の「法本尊」たる三大秘法の南無妙法蓮華経のことである。

迹門不変真如の理・本門随縁真如の智　真如の「真」とは、真実ということであり、「如」とは「ごとく」と読み、また「そのまま」「ありのまま」と読む。「不変真如の理」とは、永久に不変である真実、真正の法理ということである。法華経迹門では、諸法実相に約して十界互具・百界千如・一念三千の理を説き明かした。これ不変真如の理である。なお、天台大師は、大御本尊の出現にさきだち、摩訶止観で理の一念三千の哲理を説いた。これまた、迹門不変真如の理に同ずる。「随縁真如の智」とは、縁に随って、刻一刻と変化しゆく事象に対応した、幸福への生命活動をいう。所詮は、仏界を湧現することをいう。また、一念三千の当体の、生命の確立をいう。ゆえに、仏の振舞いを根本に、因果国に約して、一念三千を説き明かした本門は、随縁真如の智である。また、宇宙森羅万象の、本源を具現した御本尊は、随縁真如の智ともなり、不変真如の理ともなるといえる。すなわち、次の項にあるように、一念寂照である。

釈に云く随縁不変・一念寂照と　随縁とは随縁真如の智である。不変とは不変真如の理である。一念とは瞬間の生命を指す。寂照の寂とは静を意味し、照とは照り輝く、動の意味となる。瞬間瞬間の生命活動が大宇宙のリズムに合致し、妙法に照らされた境涯、つまり絶対的幸福境涯をいう。すなわち、随縁真如の智、不変真如の理を説く法華経（御本尊）を信ずることによって、わが生命の上に、仏界を湧現することを示している。

色心不二なるを一極と云うなり　色とは物質、肉体をいう。心とは精神、心の働きをいう。この精神と肉体とが、二つであっ

て、実は二でない（而二不二）一体であるのが生命の本体、本質である。これを色心不二という。色心不二の生命哲学こそ、最高、究極の哲学であるということを一極というのである。結局は、一極とは、最高、究極の大哲理の根源である三大秘法の大御本尊を指す。

釈に云く一極に帰せしむ故に仏乗と云うと　一極とは、永遠不変の、最高無上の哲理。すなわち大御本尊となる。この三大秘法の御本尊を、受持、信心するゆえに成仏ができるのである。

薩達磨・芬陀梨伽・蘇多覧　妙法蓮華経の梵語は「サダルマ・プンダリーカ・スートラム」（Saddharma Puṇḍarika Sūtram）それを音訳して「薩達磨・芬陀梨伽・蘇多覧」といったのである。ただし天台大師の「法華玄義」には音訳として「薩達磨・芬陀梨・蘇多覧」の九字となっている。そして「サ」（薩）とは「妙」という意味であり、「ダルマ」（達磨）とは「法」という意味であり、「プンダリーカ」（芬陀梨伽）とは「蓮華」という意味であり、「スートラム」（蘇多覧）とは「経」という意味であるから、羅什三蔵は「妙法蓮華経」と訳したのである。

九字は九尊の仏体なり　九字とは、梵語の「サダルマ・プンダリーカ・スートラム」を梵字で書くと九字（九節）になることをいわれたと思われる。あるいは天台大師の法華玄義に音訳として出ている「薩達磨・芬陀梨・蘇多覧」の九字を指すか。九尊とは、八葉九尊のこと。真言密家では、胎蔵界の中台院、すなわち胎蔵界曼荼羅の中央の一院が八葉の蓮華となっており、その中台に大日如来、周囲の八葉には四仏四菩薩の八尊がすわっており、合計して九尊となるという。日蓮大聖人は、これを依義判文されて「九界即仏界の表示なり」と申されているのである。

法性、無明　法性とは悟り、無明とは迷いのこと。当体義抄（五一〇㌻）に「悟は即ち法性なり迷は即ち無明なり」とある。

釈に云く声仏事を為す……　章安大師の私記縁起（法華玄義の序文）の私序王に「声、仏事を為す、之を称して経と為す」とある。

八葉九尊　九界即仏界を表している文。真言密家では胎蔵界の中台院、すなわち胎蔵界曼荼羅の中央の一院が八葉の蓮華とな

っている。その中台に大日如来、周囲の八葉に四仏四菩薩の八尊がすわっている。合計して九尊となる。生命の姿を知らしめようと譬喩的に説いたものである。これを依義判文して用いられたのである。

別伝　「廿八品に一文充の大事」（七八六㌻）と「一廿八品悉南無妙法蓮華経の事」（七九三㌻）の御義口伝をいう。

通解

南無妙法蓮華経について、日蓮大聖人の御義口伝には、次のように仰せである。

「南無」とは梵語であって、これを漢語に訳せば「帰命」という。その帰命する対境、対象に「人」と「法」とがある。「人」とは、文底の釈尊即人本尊たる日蓮大聖人である。「法」とは末法の法華経であり、法本尊であるところの南無妙法蓮華経である。すなわち、人法一箇の大御本尊に帰命することが、真実の中の真実の帰命なのである。

また「帰」というのは、迹門不変真如の理に帰するのである。「命」とは本門随縁真如の智に命くことなのである。南無妙法蓮華経は、宇宙本源の絶対真理である。ゆえに、妙法を唱えることによって、宇宙の本源に合致できうるのである。したがって、不変真如の理に帰したことになる。そして、その偉大なる妙法の力が、わが生命活動に、生活の上に、顕現してくるのである。これ随縁真如の智に命いたことになるわけである。結局、帰命とは、南無妙法蓮華経自体のことなのである。

釈には「随縁不変・一念寂照」とある。随縁真如の智も、不変真如の理も、共に実在しているのが、生命の実体であり、本質なのである。これを妙法というのである。これすなわち、三大秘法の南無妙法蓮華経である。この御本尊に帰依することによって、絶対的幸福境涯たる成仏がかなうのである。

また、「帰」とは、われわれの色法を意味する。「命」とは、われわれの心法を意味するのである。この色法すなわち肉体・物質と、心法すなわち精神・心の働きが不二であると説く、日蓮大聖人の色心不二の生命哲学こそ、最高唯一の哲学なのである。この日蓮大聖人の、大宗教に帰依することによって、成仏の境涯、すなわち、色心ともに、絶対の幸福確立をなすことができるのである。

また、仰せには、南無妙法蓮華経の「南無」とは梵語であり、妙法蓮華経は漢語である。梵漢共時に南無妙法蓮華経というのである。また、妙法蓮華経とは、梵語の薩達磨・芬陀梨伽・蘇多覧を漢語に翻訳したものである。薩は妙を意味し、達磨は法を意味し、芬陀梨伽は、蓮華を意味し、蘇多覧は経を意味する。この薩達磨・芬陀梨伽・蘇多覧の九字は、八葉九尊の九尊を意味するのである。これを生命論に約していえば、九界即仏界を表しているところである。

妙法を、無明、法性に約して説けば、妙は法性であり悟りである。法は無明であり、迷いを示す。したがって、妙法というとき、すでに無明法性一体であることがあらわされている。蓮華とは、因果の二法を示し、因果一体、すなわち因果倶時をあらわしている。

経とは一切衆生の言語音声をいうのである。しかして、章安大師が「声仏事を為す之を名けて経と為す」とい

っているように、南無妙法蓮華経こそ、最高の経なのである。また、生命が、過去、現在、未来の三世にわたって、永遠に続いていくことを経というのである。所詮、大宇宙も、わが生命も、森羅万象ことごとく妙法であり、蓮華であり、経なのである。宇宙生命の根源のことを、妙法蓮華経というのである。この中で、蓮華とは、八葉九尊という形式で示されている。以上のことを、よくよく思索しなさい。

講義

南無妙法蓮華経の御義口伝が、冒頭にきているのは、南無妙法蓮華経こそ一切経の根本であり、法華経の肝要であるゆえである。

曾谷入道殿御返事（一〇五八㌻）に「南無妙法蓮華経と申すは一代の肝心たるのみならず法華経の心なり体なり所詮なり」云云と。

御義口伝下（七九三㌻）の「一廿八品悉南無妙法蓮華経の事」には「疏の十に云く惣じて一経を結するに唯四のみ其の枢柄を撮って之を授与すと、御義口伝に云く一経とは本迹二十八品なり唯四とは名用体宗の四なり枢柄とは唯題目の五字なり授与とは上行菩薩に授与するなり之とは妙法蓮華経なり云云、此の釈分明なり今日蓮等の弘通の南無妙法蓮華経は体なり心なり廿八品は用なり廿八品は助行なり題目は正行なり正行に助行を摂す可きなり云云」と。

また、四信五品抄（三四二ページ）には「問う何が故ぞ題目に万法を含むや、答う章安の云く『蓋し序王とは経の玄意を叙す玄意は文の心を述す文の心は迹本に過ぎたるは莫し』妙楽の云く『法華の文心を出して諸教の所以を弁ず』云云、濁水心無けれども月を得て自ら清めり草木雨を得豈覚有って花さくならんや妙法蓮華経の五字は経文に非ず其の義に非ず唯一部の意なるのみ、初心の行者其の心を知らざれども而も之を行ずるに自然に意に当るなり」とおおせである。

このような御文は、数多くあり、全部、南無妙法蓮華経こそ、一切経の骨髄であり、宇宙の根本であることを示されている。およそ、釈迦仏法の最高峰たる法華経であっても、南無妙法蓮華経を根本としなければ、いくら読んでも、学んでも、真実に法華経を読み、学んだことにはならないのである。現在、法華経が最高の経文であることは、少しく仏法を知る有智の人ならだれでも知っている。しかしながら、多くの人は、法華経を読んだつもりでいても、文々句々に執着し、何故に法華経が最高であるかという根本の理由を知らないのである。

一代聖教大意（四〇四ページ）に「此の法華経は知らずして習い談ずる者は但爾前の経の利益なり」と。また、開目抄上（一九五ページ）には「当世も法華経をば皆信じたるやうなれども法華経にては・なきなり」と申され、文上読みの多くの人々の錯覚を厳しくいましめられている。

一体、法華経には、何が説かれているのか。これこそ、根本問題なのである。序品における大儀式。宝塔品の二処三会の儀式。地涌の菩薩の大地よりの湧現等々。これらは、何を示すものであろうか。法華経を、本当にわかろうとするならば、当然ぶつかり、解かねばならぬ重要課題といえよう。ただ文上のみにとらわれ、満足して

いるとすれば、増上慢であり、謗法の科は絶対まぬがれないのである。なお、大仏法哲理をば、われわれと全く無関係に位置づけてしまうものであって、生活と遊離した空理空論に終始してしまうわけである。法華経序品に、すでに大不思議がある。それを、戸田城聖前会長は、次のごとく述べている。

「さて、この耆闍崛山に集まった第一類声聞衆・第二類菩薩衆・第三類雑衆の数をざっとかぞえてみれば、約三十万に近いと思われる。それ以上であるか、それ以下であるかは、若干百千とあるので、推測にまかせる以外にはない。これだけの大多数の人間が、どうして集まれたかということが不思議になってくる。たとえ、集まりえたとしても、釈尊の音声が、これらの人へ、どうして聞かせたことか。仏は梵音声があるといって梵音声の一相をもってこれを片づけるとしても、末代われわれ凡夫は信ずることができない。拡声機のようなものがあったと説く人がいるが、今日の科学者は断じてこれを信ずるまい。古跡の発掘から、それらしきものが出てくれば別であるが、いまだ、そんな話を聞いたこともない。ことに雑衆中、帝釈天とか、自在天とか、大梵天とか、また、人にあらざる竜王とか、緊那羅とか、乾闥婆とか、迦楼羅とかにいたっては、どうしてこれを信ずることができようか。

法華経をひもといて、これを鵜呑みにするならいざ知らず、少しく科学的に考慮する者は、序品第一から、疑いを起こして二十八品を読了する気にはならないであろう。しかるに、経文の処々において、これを信ぜざる者は悪道に落つとある。日蓮大聖人も、また六万九千三百八十四文字ことごとく金色の仏なりとおおせである。金色の仏とは真理なりとのおことばである。信ぜんとすれば、疑わざるをえず、これを疑えば釈尊および大聖人の

二仏を妄語の仏となし、かつは悪道に落ちねばならぬ。吾人はここに進退きわまれりというか。

ひるがえって仏語を案ずるに、仏のことばはいつわりではない。しからば何を意味するのか。

法華経には当体蓮華、譬喩蓮華の義がある。当体蓮華とは、動かすことのできない真理の直接説明であり、譬喩蓮華とは、その真理を、譬えをかりて説明したものである。たとえば、蓮華のことであるが、因果倶時の法それ自体を説くときは当体蓮華であって、因果倶時の法を蓮華の花をかりて、その花と実とが同時にあることを示して、これを説明するのが譬喩蓮華である。

この序品の三類の大衆の集まりは、すなわち譬喩蓮華であって、当体蓮華ではないのである。しからば序品の当体蓮華はいかん。何万の声聞・何万の菩薩・何万の雑衆は、これことごとく釈尊己心の声聞であり、釈尊己心の雑衆である。妙法蓮華経は、釈尊の命であり、釈尊の心である。さればこそ、十界の衆生ことごとく釈尊の内証に住むというとも、なんのまちがいもないのである。序品を読む者、よくよくこれを心得なければならぬ。

なお、すすんでいうならば、寿量文底の仏の大下地がここにあらわれていると読んでいいのではないか」と。

結局、法華経は、序品から、生命それ自体を説いていることが明確であろう。いな、開経たる無量義経において、すでに生命の不可思議な実体を、さまざまな角度から説き明かしている。過去、幾千万の哲学者、思想家たちが、解決に努力をしてきた、その生命の実体、本体こそ南無妙法蓮華経なのである。

この南無妙法蓮華経は、文字は七文字であるが、その義は、実に深固幽遠である。この不思議なる実体を現わすために、釈尊は法華経二十八品を説いて、説明に努めた。ゆえに、釈尊の仏法は、今日では家の設計図であ

る。日蓮大聖人の仏法たる南無妙法蓮華経は、家それ自体である。釈迦仏法は、南無妙法蓮華経を説明する、譬喩蓮華であり、大聖人御建立の大御本尊こそ、当体蓮華である。したがって、ここに大聖人の御義口伝により、初めて法華経の文々句々が意味をもち、生かされ、生活の中に、実感として、脈々と生きてくるのである。

人法之れ有り人とは釈尊に帰命し奉るなり法とは法華経に帰命し奉るなり

この段のあり方について述べれば、帰命といっても、いろいろな帰命が考えられてくる。昔の家臣は、主君に帰命したといえよう。ある人は、仕事、研究に、命を賭し没頭してゆく場合もある。これも一種の帰命の姿である。ある人は、登山家として、山に命を捨てることを本望としている。しかし、これらの帰命は絶対の幸福に通ずる帰命ではないのである。

何に、帰命するかによって、その人の人生の幸不幸は決定されてしまう。目先のことのみに生きる人生、低い目的のみに帰命して満足しゆく人生、これほどあわれな人生はない。しからば、人生にとって、最高無上の帰命は何か。本源的な帰命とは何か。これこそ、日蓮大聖人に帰命し奉り、南無妙法蓮華経に帰命するに尽きるのである。これ最高の帰命であり、事実の上に、絶対的幸福を感得でき得るからである。

なお、民衆の幸福、世界の真の平和たる、広宣流布の戦いに、命を捨てる姿こそ、真実の帰命といえるのである。自我偈にいわく「一心欲見仏・不自惜身命」と。永遠の生命の会得、覚知、ならびに、令法久住のために、身命を惜しまぬ信心こそ、実践こそ、帰命の究極といえるのではないだろうか。

また、観心本尊抄（二四六ページ）には「釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華経の五字に具足す我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り与え給う」とおおせである。われわれが、大御本尊を信じ、唱題することによって、すでに権・迹・本の釈尊の因位の万行、果位の万徳が具わるとの言である。大御本尊を受持することは、宇宙の本源力に帰命する姿となるのである。ゆえに、いっさいの大福運が、わが生命の中に具足してくるのである。すなわち、受持即観心こそ、また、正しい帰命の姿となるのである。

又帰と云うは迹門不変真如の理に帰するなり命とは本門随縁真如の智に命くなり帰命とは南無妙法蓮華経是なり、釈に云く随縁不変・一念寂照と

まず、釈迦仏法について、考えてみる。釈尊は、爾前経では二乗不作仏を説いた。また、女人不成仏、悪人不成仏を説いている。あるいは、菩薩の修行過程に五十二位の段階をつくった。これらは幾多の修行を積んで、最後に悟りが得られるとの説き方であった。

次に、法華経迹門にきて前説をくつがえした。すなわち、二乗作仏、女人成仏、悪人成仏を説き、さらに諸法実相を説いて、森羅万象ことごとく、妙法の当体であることを示したのである。いわゆる、一切の現象は百界千如、一念三千なることを明かしたわけである。

この原理に、基づいてゆけば、誰人たりとも妙法の当体である。いな、非情界の草木、瓦石たりとも同じである。さらに全宇宙が妙法の当体なのである。例外は、いっさいあり得ない。時間、空間によって、変化し左右さ

れるものでも決してない。一切衆生ことごとく、妙法の当体であるという道理は、絶対の真理であり、ありのままの実相なのである。法華経迹門では、この妙法蓮華経という、宇宙本源の理――不変真如の理を説き明かしたのであった。

理論的に考察してゆけば、たしかに、森羅万象は、すべて百界千如、一念三千の当体であることが伺えると思う。有情・非情にわたって、皆、仏界、仏性を具しているはずである。しかしこの分析的考察は、あくまでも理にすぎない。仏性を具しているだけでは価値は生じない。例えば、自分自身が、いかに理論的に妙法の当体であり、かつは仏界を具していると理解しても、事実の働きとは別問題だ。病気の悩み、経済的な圧迫、毎日が憂える生活であるならば、妙法の当体とも、仏界の湧現とも決していえない。理と事との相違は、天地の違いがあることが明瞭となるわけである。

われらの生命活動は、絶えず、「縁」にふれて行なわれているといえよう。地獄界から仏界までの十界の生命活動は、厳然と一個の生命に具わっているが、しかも、縁にふれなければ顕現しないものである。しかし、われわれは、地獄界から菩薩界までの九界の様相は、自分の生活の上にも、他人の生活の上にも、常に見ることができる。しかしながら、仏界とは、いかなる生命状態か、そして、その仏界を現わす方法はいかにすべきか、これこそ仏法上の重大問題なのである。

観心本尊抄（二四一ページ）に「問うて曰く六道に於て分明ならずと雖も粗之を聞くに之を備うるに似たり、四聖は全く見えざるは如何、答えて曰く（中略）所以に世間の無常は眼前に有り豈人界に二乗界無からんや、無顧の

悪人も猶妻子を慈愛す菩薩界の一分なり、但仏界計り現じ難し九界を具するを以て強いて之を信じ疑惑せしむること勿れ」と。

この現じ難き、仏界を現ずる――ここに〝証得〟ということが大事になってくるわけである。

迹門は、理具の仏界。本門では、本因、本果、本国土を明かす。釈尊自身が、いつ、どこで、どういう原因によって仏になったか。この事実の振舞いのうえに、かつは釈尊自身の証得のうえに、一念三千を説き明かしたものであった。この仏としての、具体的実際の振舞い――これ「随縁真如の智」である。ここに「本門随縁真如の智」とおおせなのである。しかし、これは釈迦仏法の範囲内での理論である。日蓮大聖人の仏法からみれば、釈尊の法華経は、本迹ともに「迹」となり、ともに「不変真如の理」となるのである。

本因妙抄（八七七ページ）にいわく「一代応仏のいきをひかえたる方は理の上の法相なれば一部共に理の一念三千迹の上の本門寿量ぞと得意せしむる事を脱益の文の上と申すなり」と。

先きに述べたごとく、法華経二十八品は、ことごとく末法御出現の日蓮大聖人および大御本尊の説明書となる。あたかも、建造物の設計図のようなものである。理のうえの法相なのである。ゆえに、釈迦仏法は迹門不変真如の理となり、日蓮大聖人の仏法こそ、本門随縁真如の智であることがおわかりと思う。

日蓮大聖人が、大智慧をもって、末法万年の人類救済にあたられたことは、随縁真如の智である。また、信心に約せば、「智」とは「信」の異名である。経にいわく「以信代慧」と。したがって、われら末代幼稚の凡夫たりとも、大御本尊を信じ、題目を唱える直道によって、仏界を湧現することが、簡単にできるのである。これ

が、随縁真如の智である。この場合、「随縁」の縁は御本尊にあたる。「真如」とは仏界のことである。「智」とは信心のことである。

当体義抄（五一〇㌻）を引例すれば、冒頭に「問う妙法蓮華経とは其の体何物ぞや、答う十界の依正即ち妙法蓮華の当体なり」とのお言葉がある。これによれば、一切衆生ことごとく妙法の当体ということになる。ところが、同じ当体義抄（五一二㌻）の先を読んでいくと、次のようにおおせられている。

「所詮妙法蓮華の当体とは法華経を信ずる日蓮が弟子檀那等の父母所生の肉身是なり、正直に方便を捨て但法華経を信じ南無妙法蓮華経と唱うる人は煩悩・業・苦の三道・法身・般若・解脱の三徳と転じて三観・三諦・即一心に顕われ其の人の所住の処は常寂光土なり、能居・所居・身土・色心・倶体倶用・無作三身の本門寿量の当体蓮華の仏とは日蓮が弟子檀那等の中の事なり」

御文のごとく、御本尊を信ずる者のみが妙法の当体なりと御断定であられる。不信の者は、現実には、絶対に妙法の当体とはいえないことが明らかである。

前文は、不変真如の理に約して述べられた御聖訓である。しかし、これは幸、不幸とは別問題であり、価値とは無関係である。後文では、幸、不幸ということが、第一義の問題であり、最高価値創造の人生行路は、いかにすべきかの問題に対する御金言である。結局は実生活を意味するのである。これ随縁真如の智ではないか。

さて、次に迹門不変真如の理に帰すとは、前に述べたとおり、大宇宙の本源力が南無妙法蓮華経であり、この本源に帰することをいう。

我が身も妙法の当体。宇宙も妙法それ自体である。われらが妙法を唱えるとき、わが生命が、大宇宙の本源のリズムに合致するのである。これ不変真如の理に帰したことになる。今度は、その宇宙の本源力たる妙法蓮華経が、現実生活の上に、生命活動の上に湧現してくるのである。その生命力、智慧が源泉となって、苦難、苦悩を打開し、人間革命、生活革命を成就してゆくのである。これ「随縁真如の智に命く」にあたるのである。例えば、御書それ自体は不変真如の理である。永遠に変わらざる哲理である。絶対の真理だからである。今、われらが懸命に、その御書を勉強している。これこそ不変真如の理に帰している姿である。さらに、不変真如の理である御書をば、信心および智慧によって会得し、自身の生活の糧に、人生観、社会観の源泉としてゆくことは、随縁真如の智に命いたことにあたるわけである。

この方程式は、すべてのことにあてはまるといえよう。ここにマイクロホンがある。マイクロホンそれ自体の構造は不変真如の理である。機械自体、音声拡大の素質を具備している。その原理に帰しているわけである。それに、スイッチを入れ、電気を流し、実動させる。——音響を拡大して、実生活の活動を開始した。これ随縁真如の智に命いたと、このように考えることができる。

「帰命とは南無妙法蓮華経是なり」とのおおせは、われらが南無妙法蓮華経と唱えることは、宇宙のリズムに合致した、道理にかなった、自然本然の姿である。その力が、現実の生活に、偉大なる智慧と活力となって発揮されることをいうのである。妙法は、宇宙の大鉄則であり、大哲理であると同時に、旺盛なる生命力と、輝く英知の源泉となるのである。

次に随縁不変・一念寂照とは、いかなる意味であろうか。

随縁真如の智といい、不変真如の理といい、別々に存在するものでは決してない。同時に実在する法理なのである。あたかも、不変真如の理は映画のスクリーンのごとく、随縁真如の智は、そこに映る映像のごとくである。また、不変真如の理は大海のごとく、随縁真如の智は波のごとくである。また、H_2Oを不変真如の理であるとすれば、冷水、湯、水蒸気、氷にと、縁により変化してゆく様は、随縁真如の智にたとえられよう。

なお、ここに「A」という人がいる。「A」という一個の人間のもつ法は、不変真如の理である。この「A」は、ある時は食事をしている「A」である。あるときは、電車に乗る、歩く、寝る、怒る、笑う、仕事をする等、刻々と変化してゆく「A」である。

このように変化しているのが生活の実相であり、生命活動なのである。この「A」という人のいっさいの活動は、随縁真如の智にもとづいているのである。しかも「A」という人は、いつでもAであって、別人となるわけでは決してない。このように、随縁真如の智を離れて、不変真如の理があるのでもなく、不変真如の理がなくて、随縁真如の智があるというのでもない。一切万物の事象ことごとく、随縁不変をともに備えているものなのである。この随縁不変がともに存在しているのが、生命の実相であり本質であり、妙法の実体なのである。

日蓮大聖人は、これを「随縁不変・一念寂照」とおおせられたのである。

立正観抄（五三一ページ）にいわく「伝教大師の血脈に云く『夫れ一言の妙法とは両眼を開いて五塵の境を見る時は随縁真如なるべし両眼を閉じて無念に住する時は不変真如なるべし、故に此の一言を聞くに万法茲に達し一代

の修多羅一言に含す』文」またいわく「目を開いて妙法を思えば随縁真如なり目を閉じて妙法を思えば不変真如なり此の両種の真如は只一言の妙法に有り我妙法を唱うる時・万法茲に達し一代の修多羅一言に含す」（五三ページ）と。

御義口伝には「随縁不変・一念寂照」とあり、立正観抄には「此の両種の真如は只一言の妙法に有り」とおおせられているのは、同じことをあらわしているのである。ゆえに「一念寂照」とは「妙法」を意味しているのである。「一念寂照」の一念とは、唯心論的な、単なる「心」という意味ではない。色心ともに具えたる瞬間、瞬間の生命の意義である。無明と法性とを、ともに含んだ一念をいう。九界と仏界を含んだ一念である。この一念が、十界の活動をなし、生命の上に、生活の上に、それぞれ現象を与えるゆえに、唯心の一念でもなく、唯物をも左右する一念なるがゆえに、色心不二の一念となるのである。ゆえに、この一念ということは、当体義抄（五一三ページ）に「因果倶時・不思議の一法」とおおせられていることと、全く同意である。

当体義抄文段（富要集第四巻四〇〇ページ）にいわく「問う因果倶時不思議の一法とは其の体何物ぞや、答う即是れ一念の心法なり故に伝教の釈を引いて一心の妙法蓮華と云うなり、当に知るべし一念の心法とは考うるに即是れ色心総在の一念なり、妙楽が総在一念と云うは別して色心に分け、別を摂し総に入る等と是れなり。問う因果倶時等とは相貌如何、答う且く二義を以て之れを消せん、一には一往九因一果に約す、謂く此の一念の心に十法界を具す九界を因と為し仏界を果と為す、十界宛然と雖も互具互融して一念の心法に在り故に因果倶時不思議の一法と云うなり、二には再往各具に約す、且く地獄の因果の如き悪の境智和合すれば則ち因果有り、謂く瞋恚は

是れ悪口の因悪口は是れ瞋恚の果、因果を具すと雖も刹那に在り故に因果倶時の不思議の一法と云うなり、乃至善の境智和合すれば則ち因果有り謂く信心は是れ唱題の因唱題は是れ信心の果、因果を具すと雖も唯一念に在り、故に因果倶時の不思議の一法と云うなり、是れ仏界の因果なり、略して始終を挙ぐ中間の八界は准説して知るべし」と。

いま、この一念の生命について、さらに論究したい。

「生命」といっても、瞬間の連続である。瞬間以外に「生命」の実在はあり得ない。過去は、あくまで過去であり、未来は、また、あくまで未来である。過去は「あった」のであり、現実今時に「ある」のとは自ら違う。未来は「あるだろう」ということであって、事実実在することとは違うものだ。だが、その瞬間の「生命」は、たとえ、瞬間といえども、過去の因と、未来の果を内蔵していることには間違いない。厳しく論ずれば、過去遠々劫の、いっさいの因、未来永劫のいっさいの果は、その瞬間の生命の中に含まれているわけである。

もし瞬間ということのみを分析すれば、過去もない。現在もない。未来もないわけだ。総勘文抄（五六二ページ）には「過去と未来と現在とは三なりと雖も一念の心中の理なれば無分別なり」との、御金言のとおりである。

西洋において大哲学者と称せられるカントは、時間は、われわれの心の中にある主観的なものであることを説いている。

カント以前に、西洋哲学を築いて来た哲学者たちは、時間、空間は客観的存在であると思いこんでいたわけであるが、それらの哲学を総合して新しい哲学的立ち場を打ち立てたカントは、時間、空間等は、本来、外界に客観

的に存在するものではなくて、われわれが外界の対象を認識する場合の主観的形式であると主張したのである。

そして、この考えは、従来と全く逆であるから、ちょうど天文学において、天動説に対して地動説を説いたコペルニクスの偉業にも比すべきものであると自負したのである。

彼の時間、空間論は、仏法に一歩近づいたものとして興味深いものである。

戸田城聖前会長は、次のように申されている。

「今、その瞬間と思った刹那は、ただちに過去となり、未来と思った瞬間は現在となって、ただちに過去に移るのである。有りといえば無く、無しといえば有り、すなわち『空』という概念にあたる実在であります。しかしながら、われわれは、その瞬間に幸福を感じ、不幸をみ、希望をもったり、失望したりする生活を送るのであります。この瞬間が『生命』全体とも申されましょう」（講演集上）と。

仏法では、この瞬間の「生命」をば、徹底して説いているといっても過言ではない。ある時は、竪に、久遠元初と、また久遠即末法と説いている。ある時は、この一念が、横に法界に遍ずると説く。所詮「宇宙即我」の大原理を、明細に説き明かしている。この、竪に未来永劫、過去遠々劫をはらみ、横に十方に遍ずる、「瞬間の生命」をば、仏法の真髄では、一念三千の原理によって説明しきっているのである。十界、十界互具、十如是、三世間、等々、それらは、縦横無尽に、「一念の生命」を、説ききっているところなのである。

一念三千理事（四〇八ページ）には、妙楽の弘決の文の引用をもって、次のごとくおおせである。「弘の五に云く『一念の心に於て十界に約せざれば事を収むること徧からず三諦に約せざれば理を摂ること周からず十如を語ら

ざれば因果備わらず三世間無んば依正尽きず』文」すなわち、十界によって、生命の実相がわかる。また、十如是によって、生命に内在する因果が、明かされる。そしてさらに、三世間によって、依正不二の原理が明かされてゆくところである。ゆえに、この一念寂照の一念には、十界も、因果も、依正も、ことごとく具足しているものなのである。

さて「一念寂照」の「寂照」とは、小乗に説く「寂滅」あるいは「空寂」に相対した内容である。小乗教では「生滅滅已・寂滅為楽」とあるように、煩悩を断じ尽くし、生死をはなれるところに悟りがあるとする。それに対し、大乗で説く「寂照」は、煩悩即菩提であり、生死即涅槃のことである。此の土こそ、常寂光土と説き、この世をはなれて悟りはなく、この身体は、そのまま常楽我浄なりと説くものである。

このように、「寂滅」と「寂照」とでは、根本的に、生命観、修行観の相違がある。「寂滅」の立ち場は、すべてを犠牲にして、己れのみ悟りを得ることに努める。利己主義極まりない。「寂照」の立ち場は、人生を楽しみつつ、社会に価値創造しながら、悟りを得る。釈尊自身、「四十余年未顕真実」（無量義経八八ページ）と、小乗爾前の修行を打ち破っていることは、当然うなずけることである。あくまで、「寂滅」の修行、人生は、戒律にしばられ、制約され、まことに、残酷といわざるを得ない。

現代社会においても、低級思想、誤れる宗教、迷信に執着し、満足している人々は、この類いである。偏頗な学者、評論家等も、結局は真実の自我なく、ただ利己主義に徹し、人々の幸福を考えぬ、小乗思想の持ち主と断じてさしつかえなかろう。末法の法華経の説く「寂照」は、妙法に照らされ、九界の現実に遊戯していく人生である。

自己を最高度に発揮して、絶対の幸福生活をしつつ、社会の繁栄にいそしむ最高善の振舞いをいうのである。

又帰とは我等が色法なり命とは我等が心法なり色心不二なるを一極と云うなり

「帰」とは、たえず新陳代謝して宇宙に還元されていく肉体であり、色法をいう。「命」とは心法のことである。絶えず、宇宙のリズムに、冥合してゆこうとする作用をいう。この色心不二の生命哲学が、最高の大哲理なりとの日蓮大聖人の御確信であられる。「色」とは、目にみえるもの、物質、形質、あるいは肉体を意味する。「心」とは物質にあらざるもの、性質、性分、あるいは精神、内在する力等を意味する。

唯物思想は、物質が根源であり、物質中心主義である。唯心思想は、精神が本源であり、物質は、その幻影にすぎないとする思想である。共に、ある一面の真理を説いたものとはいえよう。しかし、部分観は、部分観としての意義をもつだけである。部分観をもって、全体観とすることは、はなはだしい誤りといわざるを得ない。生命それ自体は、唯心でも、唯物でもない。思うに、現代の哲学においては、今日にいたるまで、生命について、幾多の議論が展開されてきた。だが、なんら根本的解決はなされていないのである。

十九世紀フランスの実験生理学者、クロード・ベルナールは次のようにいっている。

「唯心論と唯物論を哲学で論議するのはよかろう。が、実験生理学では問題にはならない。何の役にも立たない。軌範は実験にしか求められないからである。……今日では生理学は精密科学となった。もはや哲学や神学上の諸思想を払いのけるべきである。思えば長い間これらの思想が混在していた。数学者や物理学者に、唯物論者

かときく必要がないように、生物学者にもそんな質問はすべきでないのである」

この主張は、いかに今日まで、唯物論ならびに唯心論が、生命自体の研究のさまたげになってきたかを物語る一つの証拠といえよう。彼自身が、究極を解決しえたとするのでなく、新しい角度からの究明が必要である。その一つの示唆として私は引例したわけである。

もはや、不可思議なる生命の実体を、唯物、唯心でみようとする時代は過ぎ去った。もしも、このような思想で論ずる人ありとせば、過去の死滅せる思想に執着する、あわれな人にほかならない。

それは結論していえば、生命は、「色心不二」なのである。これこそ、現代の哲学、生物学、医学等々、すべてが帰趨していく事実なりと訴えるものである。とくに、生命の問題と密接な関係をもつ、医学の分野において、そうした傾向が顕著ではないかと思う。「精神身体医学」が最近とみに叫ばれるようになってきている。これも一つの好例と考えられる。これは、病気の原因を、単に肉体だけに限るのではなく、心にも原因を求めようとする推移である。こうした考え方は、仏法では、すでに三千年前から説いてきた。

ある医学者は、次のように述べている。

「精神とか、心とは何か。ということは昔から問題になっていて、今日ではその本体はわからない。昔は肉体から独立した心があると考えられていたが、今日、医学者は心は脳の活動によって生ずると思っている。しかし、それは脳のどんな働きによるのかは分らない。2＋2＝4であると考える時や、私は悲しい、と感ずる精神的なものを、脳の細胞の何かの変化、電流や化学的変化で、おきかえていいあらわすことは出来ない。それで心は

心、体は体として取り扱っておくより仕方がないが、心と体にはわれわれに見える関係もないのかというと、そういうものでもない。

たとえば、酒を飲むと、アルコールが吸収されて脳へゆき、脳の神経細胞の代謝に、変化を与えるが、このときに心については、気が大きくなって愉快になったり、おしゃべりになったり、さらに多くのアルコールが行けば、意識を失ってしまうものだ。（体から心へ）

今度は、逆に心の変化が、体に変化をおよぼすことがあろう。実際こういうこともありうる。例えば、恐ろしい目にあったとする。恐ろしいというのは心の出来事であるが、物質的な体の方面では、顔の血管が収縮して蒼白になり、毛は逆立ち、体は震え、瞳孔は拡がり、心臓の鼓動は、激しくなり、血圧が上がる。一層恐ろしい目にあえば、下肢が麻痺して、いわゆる腰が抜けた状態となる。これらは、みんな、心の変化を原因とする体の変化である（心から体へ）」

これらの帰納的考え方は、仏法に説く、色心不二の生命哲学に一歩近づいた証左といえよう。しかしながら、これは、医学上の立ち場の思索であり、肉体と心の表面的な関係を、ばく然と言い表わしたにすぎない。極言すれば、現在の医学や生物学で、生命の実体を解明することは、到底不可能なことだ。これは、医学者や、生物学者自身が、すでに認めているところではないか。

ある生物学者は、次のように述べている。

「生命とは何か。このことは、物理学的な時間、空間が、物理的科学から定義できないと同様に、生命は生物学

的科学からは、定義できないのであって、生命は把握する以外に方法はないのである。そして、この生命の把握という問題は、実は科学以外の体験の問題である」と。

ところで、いかに生命を把握するか、いかなる体験をせよというのかが重大問題なのである。

なお、ある医学者は、医学の限界を次のように述べている。

「自然科学は人間が自然の中にある真理を研究して、それから得た結果を人間生活に利用しようとしている。それゆえ自然科学の根底には人間が自然を支配し利用しようとしている目的がよこたわっている。医学の行なうところはふつうこれである。しかし自然科学的な方法で医学はずいぶん発達したとはいえ、生命の神秘、こころの神秘についてはまだ何もわかってはいない。医学にたずさわるものは、この神秘に近づこうとたえず努力をしなければならない。しかし病者はこの神秘が医者にはわかっているはずだと考えて、自然科学に何とかしてもらうことができるはずであり、それが医学的治癒だと思っている。ところがほんとうはほとんど何もわかっていない。解剖学は人のからだの部分にくわしい名をつけるのみであり、生理学は人のからだがはたらくときにどんな物質的変化があるかをみるだけのことである。内科では、ばい菌性の病気に対しては、それを滅すような物質を発見しつつあるとはいえ、その他の病気に対しては自然の治癒力をさまたげないようにみまもり、その間、病者の不安を医師の存在によってなぐさめているのである。あるいは完全になおらなかった病者に新しい世界をつくり出して病者をそこに適合させて治したように思っている。糖尿病患者は糖質摂取をへらしてインシュリン注射をするという世界改革を行なえば健康なごとくに生活してゆき、これが治療なのである。

外科では悪い所を切ってとってしまうのが治療である。胃癌ができれば胃を大部分とってしまい、虫垂炎の時には虫垂をとってしまう。しかし脳の病気の時に脳をとってしまうというわけにはいかない。とにかく医者は積極的に治療するということはなかなかできない。医者は、今のところ、毛一本生えさせることもできず、にきびのあとをきれいにすることもできないのである。

肉体的物質的病気でもそうであるから、脳のはたらきの異常とはいえ、こころの現象というような、いっそうつかまえどころのないものが関係した病気に対しては、自然科学的な物質的な手づるはほとんどないのである。神経症のごとき、脳の物質的なものを手がかりにできないような心の病気には、それを病気としてなおそうとしてあくせく思いわずらうのがいけない。病気なら病気で仕方がない。世間一般の価値判断からすれば悪いものではあるが、これはこれで仕方がないではないかと、自分のこころの状態をやむおえないものとして肯定し、自然にまかせるのである」

これらは、一往、医学を中心として論じたものである。医学は、直接生命の問題に関係あるがゆえに引いたにすぎない。この「色心不二」ということについては、御義口伝のいたる個所に出ており、そのつど、考察していきたいと思っている。

釈に云く一極に帰せしむ故に仏乗と云うと

一極とは、いま述べたとおり、最高の哲学をいう。仏乗とは、一仏乗のことである。すなわち成仏の境涯をい

う。妙法という、最高の哲理、大思想を実践してのみ、永遠に崩れざる幸福境涯を開くことができるとの言である。

低級哲学、偏頗な思想を基にすれば、必ず矛盾を生じ、混乱と不幸をもたらしてしまうものである。世界の大部分の人々は、真実の妙法の大哲理を知らない。その証拠に、社会は不安定であり、世界は動乱の連続なのである。なお、個人は主体性を失い、行く手を失い、無価値の人生に終始しているといえよう。

この文こそ、天台の文を引いての、最高峰の大思想、永遠不滅の大哲学はこれなりとの、日蓮大聖人の宣言なりと拝するものである。

又云く南無妙法蓮華経の南無とは梵語・妙法蓮華経は漢語なり梵漢共時に南無妙法蓮華経と云うなり

これ、東洋の広宣流布は、必ずできるとの御予言書とも拝せる。日蓮大聖人の仏法に、偏頗がない証拠の文でもある。大御本尊を拝するに、中央に「南無妙法蓮華経　日蓮」とお認めである。南無とは梵語、妙法蓮華経は漢語、日蓮は日本語である。左右十界の衆生にも、梵漢日の三か国の文字が全部はいっている。右端、左端にある梵字は、不動明王ならびに、愛染明王をあらわされている。他は、日本語、漢語である。

これこそ、日蓮大聖人の仏法が、日本のみならず、全東洋、全世界の仏法であることを、意義づけられているのである。所詮、南無妙法蓮華経の大仏法が、東洋へ、世界へ流布されていくことは、時代の要求であり、人間本然の欲求であり、せきとめようとしても、決して止めることのできない奔流なのである。

蓮華とは因果の二法なり是又因果一体なり

これは因果倶時を説かれた御文である。因果倶時については、先に引用した当体義抄文段に「因果倶時不思議の一法」として明かされたとおりである。すなわち、九界を因となし仏界を果となした場合、九界即仏界、仏界即九界となり、九界仏界ともに一念の心法にある。ゆえに「因果倶時不思議の一法」というのである。そして再往十界各具の因果に約せば、地獄界の場合は「瞋恚は是れ悪口の因、悪口は是れ瞋恚の果」となる。仏界の場合は「信心は是れ唱題の因、唱題は是れ信心の果」となる。このように因果はあるけれども、ともに刹那の生命、一念の心法にあるがゆえに「因果倶時不思議の一法」と説かれているのである。

この「因果倶時」について、さらに論じてみたい。本果妙である釈迦仏法は、因果異時の教えである。日蓮大聖人の、本因妙の仏法は、因果倶時を明かされている。生命の本質を論ずれば、結局因果倶時である。このことを第一に知らねばならない。

本因妙抄（八七一ページ）にいわく「次に宗の四重とは一に因果異性の宗・方便権教なり、二に因果同性の宗・是れ迹門なり、三に因果並常の宗・即ち本門なり、四に因果一念の宗・文に云く『芥爾も心有れば即ち三千を具す』と、是れ即ち末法純円・結要付属の妙法なり云云」と。

釈迦仏法は、因と果を分離し、あるいは対立させて考えようとする。およそ、世の中の現象の因果関係を表面的にみれば、因果異時である。体の具合の悪いときに薬をのむ。しかし、薬が効くまでに、ある程度の時間がか

かるだろう。しかし、根本の生命に内在する因果律は、因果倶時である。この因果律の奥底を、究め説かれたものが、日蓮大聖人の仏法である。すなわち、あくまで因果倶時である。「因果一念の宗」と申された所以は、ここにあるわけである。

釈尊は、三十二相八十種好を現じた、色相荘厳の仏と説かれている。これは、当時の衆生に、理想人格を描かせたものと考えられる。事実、釈尊は、自分が仏になるまで、長い長い間の修行（歴劫修行）を経てきたと、因位の修行の長遠なることをあげている。このように、釈尊は、当時の衆生に対し、仏という理想人格を、渇仰恋慕せしめたのである。

観心本尊抄（二四二ページ）にいわく「問うて曰く教主釈尊は此れより堅固に之を秘す　三惑已断の仏なり又十方世界の国主・一切の菩薩・二乗・人天等の主君なり行の時は梵天左に在り帝釈右に侍べり四衆八部後に聳い金剛前に導びき八万法蔵を演説して一切衆生を得脱せしむ是くの如き仏陀何を以て我等凡夫の己心に住せしめんや」と。

この文は、受持即観心を説き起こすための問いの文である。ここに釈迦仏法の相貌が伺えるのである。

まさしく釈迦仏法は、長い間の仏道修行の仏因を経て、仏果を得るとするので、どこまでも因果異時となる。たとえ、本門といえども、五百塵点劫以前に、菩薩道を長い間行じたとし、因果異時であり、本果妙の仏法となる。

日蓮大聖人の仏法は「凡夫即極」また「受持即観心」の仏法であり、因果倶時であり、とりもなおさず本因妙の仏法となる。

同じく観心本尊抄（二四六ページ）にいわく「釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華経の五字に具足す我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り与え給う」と。われらが、南無妙法蓮華経を、受持することによって、因位の万行と、果位の万徳を具足するとの御聖訓である。御本尊に南無する信心、実践によって、一念の生命の中に、宇宙全体の、福智、功徳が収まるとのことである。

経とは、仏典の経文のことだと、世人は思っている。しかるに仏教上の経とは、決してそれだけを意味するものではない。宇宙の森羅万象の語言、動作、ことごとく経である。賢哲の言動も経であれば、一凡愚のさけびも経である。この経は、そのもの自体の真理と価値を表明する。ゆえに非情より有情の経は高く、有情のうちでも、ネコ、イヌより凡夫の経が高いのである。また、人のなかでも、凡下の者より智者、智者のなかでも大智者の経が高い。大智者といわれる者のなかでも、仏と名づけられる方の経が、もっとも高いと結論できるわけである。

なお、われわれの生活に見る場合に、魚屋は、魚屋としての経を、日常読んでいる。政治家は政治家、大工は大工、職工は職工の、労働運動の指導者は、その労働運動の経を読んでいるわけである。

仏滅後の今日、妙法蓮華経の経はもっとも高しとするゆえんのものは、妙法とは最高の価値ある生命であり、蓮華とは最高価値ある生命を内包する玉体である。ゆえに最高善を営む、すなわち、大善生活を営む者の経こそ最高であり、真理であるとの意味を、戸田城聖前会長は、常にいわれていた。

蓮華とは八葉九尊の仏体なり

八葉九尊とは、一往真言密家の説く、胎蔵界曼荼羅の中央の一院（これを中台院という）が八葉の蓮華となっている。その中台には大日如来、東、西、南、北、東南、東北、西南、西北の周囲の八葉には四仏（宝幢仏、阿弥陀仏、沙羅樹王開敷仏、天鼓雷音仏）四菩薩（普賢、観音、文殊、弥勒）の八尊が坐っている。これらを指して九尊といっているのである。しかし、これは、大日の経文に説くといえども、権大乗教である。実大乗教である法華経の眼、開いて見れば、実に「九界即仏界」の意味を説明していることがわかる。権大乗の大日経では、九界即仏界を説けぬゆえに、生命論の解明の前提として、そういう一つの形式を示したのであろう。

日蓮大聖人が引例なされたのも、その意味は生命論として扱われているのである。したがって、前文には「九字は九尊の仏体なり九界即仏界の表示なり」とおおせである。九界は、因であり、仏界は、果である。九界即仏界、これ因果倶時ではないか。因果倶時これ蓮華の法である。ゆえに「蓮華とは八葉九尊の仏体なり」と仰せられたのである。なお、この八葉の蓮華は、「胸間の八葉の蓮華」を意味しているのである。

結論するに、妙法に照らされて、そこに厳然として仏界が顕現される様を「八葉九尊」といわれたのである。

「胸間の八葉の蓮華」とは

さて、仏教では、われわれの胸の中に八葉の蓮華ありと主張するが、今日の解剖学上、納得できない人もあろ

うと思う。これは何を意味しているのかというに、二つの意味がある。以下二十六世日寛上人の「当体義抄文段」および、戸田城聖前会長の解説によって少しく述べてみよう。

その一つは、われわれの生命それ自体が妙法蓮華経であるということである。

二つには、われわれの生命自体が妙法蓮華経即当体蓮華であるということを、われわれの肉体の中から見出だしたことである。しからば何をもって、胸間の八葉の蓮華というかというに、心臓と肺臓の一対を意味するのである。解剖学によって心臓と肺臓の有り様を見るに、二つの肺臓の中に包まれて心臓がある。その形が、あたかも蓮華によく似ているのである。これを名づけて、胸間の八葉の蓮華といっているのである。

これあたかも法蓮華と譬喩蓮華のごときもので、法蓮華に当たる当体蓮華は、われわれの生命それ自体であり、譬喩蓮華に当たる当体蓮華は、心臓と、それを包んだ二つの肺臓である。それゆえ、われわれの胸間に八葉の蓮華ありとするは、われわれ自体が妙法蓮華経の当体であることを、強く意識せしむるのである。あたかもタイのひれの付け根に、タイの形と同じ形の骨があって、これをタイのタイと名づけ、また人間の死後、火葬に付した時に、人の形によく似た骨が出来るが、それをのど仏と名づくようなものである。

伝教大師の牛頭決にいわく「当体蓮華とは一切衆生の胸の間に八葉の蓮華あり、これを名づけて当体蓮華となす」等云云。

この胸間の八葉の蓮華は、男子は仰ぎ、女子は伏するといわれている。しかして、もし女人が妙法を受持すれば、男子と同じく仰ぐなりと仰せられている。これには深き意味があると思う。解剖学的に、肺臓が廻転すると

いう意味ではなかろう。生理学的には、何かしら、心臓と肺臓の活動に差異が生ずるであろうと推定するだけである。

生命論よりすれば、男子と女子とは、一般的に、生活力の差異があることは認めざるを得ない。しかして、本門戒壇の大御本尊を信ずる女性は、その生活力が男子と同様になるとの意である。それゆえ日寛上人は「当流の女人は外面は女人ではあるが、内心はこれ男子である」とおおせられている。涅槃経の第九に「仏性を見る者は是れ女人と雖も又男子と名づく」と。このゆえに、邪宗を信ずる女人は、これ女人というといえども是れ夜叉であると。このことは華厳経に次のごとくいっている。「外面は菩薩に似て内心は夜叉の如し」と。

そして、この胸間の八葉の蓮華の色はどうかというと、これは白蓮華であると決定せられる。

また大日経第一に胸間の蓮華を説く文にいわく「内心の妙白蓮は八葉正円満なり」等云云。

法華伝第六にいわく「比丘尼妙法、俗姓は李氏、年漸く長大にして情出家を欣ぶ、年十二の時其の姉法華経を教ゆ、日に八紙を誦し月余にして一部を誦し訖る、人其の徳を美にして妙法と云う、願を立て諷誦八千辺臨終の時座に三茎の白蓮を生ず、池に生ずる時の如し、七日にして萎落せず」云云。

釈書十一にいわく「釈氏蓮長天性精勤にして妙経を持す、唇舌迅疾にして一月に千部を経る。臨終の時、手に不時の蓮華一茎を把る、鮮白薫烈、傍人問うて云く此の華何より得る、答う是れ妙法蓮華なり云い已って已に寂す、手中の蓮華忽然として見えず」等云云。

これは、妙法読誦の功用によって胸間の白蓮華を顕現したと説いているのである。実際問題として白蓮華が顕

現したとするのか、また妙経の体を体得したとするのか、これは上中下の機根にまかせて判読すべきであるといわれている。それゆえ日寛上人のおおせに「像法既に爾なり、今唱題を励む豈顕現せざらんや、故に知ぬ胸間の蓮華は正に是れ白蓮華なり」と。

今末法下種の三宝は日蓮大聖人の胸間の大白蓮華が顕現し給うのである。十如是事（四一一ページ）にいわく「妙法蓮華経の体いみじくおはしますは何様なる体にておはしますぞと尋ね出してみれば我が心性の八葉の白蓮華にてありける事なり、されば我が身の体性を妙法蓮華経とは申しける事なり」等云云、ゆえに、御本尊の中央に南無妙法蓮華経・日蓮とおしたため遊ばされている日蓮とは、白蓮華を意味しているとの仰せである。

日蓮大聖人が白蓮華であるということは、籤の七に「有る人云く白蓮は日に随って開き回り、青蓮は月に随って開き回る、故に夫の中に華の開合を用いて昼夜を表するなり」等云云と述べられているとおりである、日蓮の二字は、日に随って開き回る蓮華である。ゆえに白蓮なることは疑いないのである。したがって日蓮大聖人の当体そのままが、中央の御本尊であり、すなわち白蓮華なのである。

また御開山日興上人も白蓮華であらせられる。そのゆえは御開山は、「白蓮阿闍梨」と、名のられている。名詮自性の理によって、名は必ず体を顕す徳がある。白蓮阿闍梨の御名は正しく御開山日興上人が白蓮華であることを明かしているのである。ゆえに末法下種の三宝は、われわれ衆生の胸間の八葉の白蓮華なのである。

また、この末法下種の三宝の住処である富士山も、われわれ衆生の胸間の八葉の白蓮華である。ゆえに大日蓮華山と名づけるのであって、この名は神道深秘に出ている。神社考四に富山の縁起を引いていわく「孝霊天皇九

十二年六月富士山涌出す、郡名を取って富士山と云う形蓮華に似て絶頂に八葉あり」云云。古徳富山の詩にいわく「根は三州に跨(またが)って烟樹(いんじゅ)老い、嶺(みね)は八葉に分れて雪華重(せっけかさな)る」云云。雪華というのは、白色であるから、ゆえに大日蓮華山はすなわち、八葉の白蓮華である。

日蓮大聖人は末法本果妙の仏であり、日興上人は本因妙の九界である。富士山は本国土妙であるから、文底下種の本因、本果、本国土三妙合論、事の一念三千であって、すなわち本門の本尊である。されば依正の因果悉く是れわれわれ衆生の心性、八葉の白蓮華、本門の本尊である。ゆえにこの本門の本尊を信じて南無妙法蓮華経と唱える人は、すなわち本門寿量の当体蓮華仏ということである。日女御前御返事（一二四四ページ）にいわく「此の御本尊全く余所に求る事なかれ・只我れ等衆生の法華経を持ちて南無妙法蓮華経と唱うる胸中の肉団におはしますなり」等云云。

御義口伝巻上

序品七箇の大事

日蓮所立自リ序品ニ至ルマデ涌出品ニ

御義口伝巻上

序品七箇の大事

日蓮所立自リ序品ニ至ルマデ涌出品ニ

第一　如是我聞の事

本文

第一如是我聞の事　文句の一に云く如是とは所聞の法体を挙ぐ我聞とは能持の人なり記の一に云く故に始と末と一経を所聞の体と為す。

御義口伝に云く所聞の聞は名字即なり法体とは南無妙法蓮華経なり能持とは能の字之を思う可し、次に記の一の故始末一経の釈は始とは序品なり末とは普賢品なり法体とは心と云う事なり法とは諸法なり諸法の心と云う事なり諸法の心とは妙法蓮華経なり、伝教云く法華経を讃むると雖も還って法華の心を死すと、死の字に心を留めて之を案ず可し不信の人は如是我聞の聞には非ず法華経の行者は如是の体を聞く人と云う可きなり、爰を以て文句の一に云く「如是とは信順の辞なり信は則ち所聞の理会し順は則ち師資の道成ず」と、所詮日蓮等の類いを以て如是我聞の者と云う可きなり云云。

語訳

如是我聞　「是の如きを、我聞きき」と読む。あらゆる経文の冒頭には、かならずこの一句がある。妙法蓮華経序品第一の冒頭には「妙法蓮華経序品第一。如是我聞。一時仏住。王舎城。耆闍崛山中。……」（是の如きを、我聞きき。一時、仏、王舎城、耆闍崛山の中に住したまい……）とある。

文句の一　「文句」とは、天台大師の三大部の一つ「法華文句」のこと。法華経の初め、序品の「如是我聞」から、最後の普賢品の「作礼而去」までの一字一句を、因縁、約教、本迹、観心の四釈をへて、くわしく十巻八百七十枚にわたって解釈している。「文句の一」とは文句の第一巻ということである。

記の一　記とは、妙楽大師が、天台大師の法華文句をさらに解釈した「法華文句記」のこと。妙楽大師は中国の唐代の人で、天台宗第九祖、天台大師より六世の法孫で、中興の祖としておおいに天台の教義を宣揚し、実践修行に尽くし、仏法を興隆した。そのなかでも、天台大師の三大部の注釈は、天台大師の幽旨を明解にしたものである。「法華玄義」を「法華玄義釈籤」に、「法華文句」を「法華文句記」に、「摩訶止観」を「摩訶止観輔行伝弘決」に、それぞれ注釈している。

名字即　天台大師が法華経を修行する人の位を理即、名字即、観行即、相似即、分真即、究竟即の六即位に分けた。名字即は、その第二であり、初めて仏法の信仰にはいった位をいう。日蓮大聖人の仏法には、修行の段階はない。「即身成仏」のゆえに名字妙覚という。名字即の凡夫が御本尊を拝んで、仏の生命を感得したときが、即ち妙覚の仏である。総勘文抄（五六六ページ）に「一切の法は皆是れ仏法なりと通達し解了する是を名字即と為す名字即の位より即身成仏す故に円頓の教には次位の次第無し」とある。

法とは諸法なり　法とは「現象」と訳す。諸法とは「あらゆる現象」という意味である。

伝教云く法華経を讃むると雖も……　伝教大師の法華秀句下九にある。法相宗の慈恩大師が法華玄賛十巻を著して法華経をほめたが、法華経を華厳経等と同格にほめたにすぎず、それはかえって法華経を軽視したことになり、謗法であるとの意。

法華経の行者　法華経の教えどおりに修行する如説修行の行者をいう。正像においては、釈尊、天台、伝教がそうであり、末法においては、日蓮大聖人およびその門下、別しては日蓮大聖人お一人が法華経の行者である。日蓮大聖人が法華経の行者であるとは、「末法の仏」という意味である。御義口伝（七五二ページ）にいわく「されば無作の三身とは末法の法華経の行者なり無作の三身の宝号を南無妙法蓮華経と云うなり」と。同じく御義口伝（七六〇ページ）に「本尊とは法華経の行者の一身の当体なり云云」と。

師資の道　師弟の道と同じ。「師」は師匠、「資」は「たすけ」という意味で、弟子をいう。

通解

これは、序品第一の最初に、「如是我聞」（是の如きを、我聞きき）とあるところの御義口伝である。

天台大師の法華文句の第一巻にいわく「如是我聞の如是とは、所聞の法体を挙げているのであり、我聞とは能持の人をいうのである」と。それをうけて、妙楽大師の法華文句記にいわく「ゆえに最初の序品から、最後の普賢品までの法華経一経全体を所聞の体とするのである」と。

日蓮大聖人の御義口伝には、次のように仰せである。文句に「所聞の法体」といっているが、所聞の聞とは、

名字即、すなわち南無妙法蓮華経を信受する位を意味するのである。法体とは、南無妙法蓮華経のことである。

「能持の人」の能持とは、「能」の字に心を留めて、よくよく考えなさい。

次に記の一の「故始末一経」（故に始めと末と一経）の釈で、「始」とは「序品」を指し、「末」とは「普賢品」を指すのである。

法体の体とは「心」ということである。法とは「諸法」を意味する。従って、法体とは「諸法の心」ということであり、その諸法の心こそ、南無妙法蓮華経なのである。

伝教大師は「法華秀句」の中で、慈恩の「法華玄賛」の邪義を責めて、「法華経をほめたとしても、法華経の真意を知らなければ、かえって法華経の心を死すことになるのである」と打破った。この「死」の字に心を留めて考えるべきである。

不信の人は、如是我聞の聞にはならない。なぜならば、如是の体を聞かぬからである。法華経の行者のみが、如是の体を聞く人といえるのである。ここをもって、天台の文句の一にいわく「如是とは信順のことばである。信ずることによって所聞の理、すなわち一念三千の法理を会得することができるのであり、順ずれば師弟の道を成じ、みずからも、仏界を現ずることができるのである」と。

所詮、日蓮大聖人およびその門下こそが、如是我聞の人というべきである。

講義

如是我聞は、すべての経文の冒頭にあることばである。その上には、必ず、その経文の真髄というべき題目がある。その上の題目を指して、如是我聞といったのである。

曾谷入道殿御返事（一〇五七ページ）には、「文句の一に云く『如是とは所聞の法体を挙ぐ』と記の一に云く『若し超八の如是に非ずんば安ぞ此の経の所聞と為さん』と云云、華厳経の題に云く『大方広仏・華厳経・如是我聞』云云、『摩訶般若波羅蜜経・如是我聞』云云、大日経の題に云く『大毗盧遮那・神変加持経・如是我聞』云云、一切経の如是は何なる如是ぞやと尋ぬれば上の題目を指して如是とは申すなり、仏何の経にても・とかせ給いし其の所詮の理をさして題目とはせさせ給いしを、阿難・文殊・金剛手等・滅後に結集し給いし時題目をうちをいて如是我聞と申せしなり」云云とある。

御文の方程式のごとく、たとえば、華厳経でいえば、華厳経の始末があって、その真髄が、華厳の法体になる。阿含、方等部の経々も、その経文が全体として何を真髄として説かんとしているのか、これが、その経文の法体というのである。

法華経二十八品の法体は、妙法蓮華経である。この、妙法蓮華経は、ふつう、法華経の題目ぐらいに考えられがちである。これこそ、皮相的な、法華経を真に知らざる者の考え方なのである。

同じく曾谷入道殿御返事（一〇五九ページ）にいわく「所詮妙法蓮華経の五字をば当時の人人は名と計りと思へり、さにては候はず体なり体とは心にて候、章安云く『蓋し序王は経の玄意を叙し玄意は文の心を述す』と云云、此の釈の心は妙法蓮華経と申すは文にあらず義にあらず一経の心なりと釈せられて候、されば題目をはなれて法華経の心を尋ぬる者は猿をはなれて肝をたづねし・はかなき亀なり、山林をすてて菓を大海の辺にもとめし猿猴なり、はかなしはかなし」云云と。

ゆえに、南無妙法蓮華経は、法華経の肝心であり、真髄であることがわかる。のみならず、一切経の眼目であり、骨髄なのである。さらに、曾谷殿御返事（一〇六〇ページ）に「法華経の題目は一切経の神・一切経の眼目なり」と、おおせになっている。

思うに、華厳の心は華厳経の題目に、阿含の心は阿含経の題目にある。これ一往の義といわねばならない。再往、三世十方の諸仏の経々、現象、法門の本体、真髄は、南無妙法蓮華経となることは明確である。

御義口伝に云く所聞の聞は名字即なり

名字即とは、六即の配立のなかの一つである。いまここに「所聞の聞は名字即」とあるのは、いかなる意味であろうか。

総勘文抄（五六六ページ）にいわく「一切の法は皆是れ仏法なりと通達し解了する是を名字即と為す名字即の位より即身成仏す故に円頓の教には次位の次第無し」云云と。

一切の法とは、宇宙の森羅万象の意である。仏法とは、妙法の五字ことごとく、妙法の当体なりと、通達し解了することが名字即なのである。

しかして「通達解了」ということが根本問題となる。何をもって「通達解了」とするのか。天台仏法では、観念観法により、理論的に理解することに意義づけた。

大聖人の仏法は、受持即観心である。大御本尊を信受し、題目を唱えきることが、一切法皆是れ仏法であると、通達解了したことになる。結局、「通達解了」とは〝信じ切る〟ということなのである。

また「一切法皆是れ仏法なりと通達し解了する」とは、わが身が妙法の当体なりと確信することともいえるのである。

日寛上人は、「当流行事抄」（富要集第三巻二〇四ページ）において、総勘文抄（五六八ページ）の「釈迦如来・五百塵点劫の当初・凡夫にて御坐せし時我が身は地水火風空なりと知しめして即座に悟を開き給いき」の文と、止観の「名字の中に於いて通達解了して一切の法は皆是れ仏法なりと知る」の文とは、ことばはちがうが、その意は同じなりと、次のように仰せである。

「今・釈尊凡夫の御時と云う即・名字中等（止観の「名字の中に於いて……」の文）に同じきなり、今我が身・地水火風空と知ると云う即・一切の法は皆是れ仏法なりと知ると同じ、謂く一切の法の外に我が身無く我が身の外に一切の法無し故に我が身全く一切の法なり、地水火風空は即妙法五字なり妙法五字の外に仏法無し故に五大全く皆仏法なり故に其の意是れ同じきなり、然れば即ち釈尊名字凡夫の御時一切の法は皆是れ仏法なり我が身の五

大は妙法の五字なりと知しめし速かに自受用報身を成ず故に即座開悟と云うなり」

また「一切法是れ仏法なりと通達解了する」とは、われわれの生活に約せば「信心即生活」といえるのである。御本尊に向かい、題目を唱える人は、みな名字即である。即、いっさいの活動は、すべて妙法の理にかなった、人生行路なのである。これ名字即であり即究竟即となる原理である。

近い例をあげてみる。「B」という人がいたとする。この「B」は、地球上に生を受けた。初めは名前がなかった。しかし一度「B」と名前をつけられた。この名前は、法律上は勿論のこと、学校でも、社会でも、名簿にも、一切の生活の上に決定づけられてゆく。交通事故を起こせば、新聞紙上に「B」と。反対に、研究の結果文化勲章を受け、かつは、国会議員に立候補し当選したとしても、みな「B」の報道がなされるわけである。これ、「B」の振舞い以外の何にものでもない。

このようにわれわれが一度、南無妙法蓮華経を信受するならば、われらの活動は、いっさいが仏法の理にかない、妙法の振舞いに通じてゆく、これを名字即というのである。

法体とは心と云う事なり法とは諸法なり諸法の心と云う事なり諸法の心とは妙法蓮華経なり

この段は、前の「法体とは南無妙法蓮華経なり」の文をうけ、さらに法と体とにわけて説かれ、結論して、ふたたび「妙法蓮華経なり」と結ばれたところである。

「法体とは心なり」の〝心〟とは、一念三千の一念をいう。生命の本質ということになろう。

「法とは諸法なり」の〝法〟とは現象と訳す。したがって諸法とは、ありとあらゆる現象という意味になる。風、温度、気流、雪、雲等々。

これらの宇宙の変化、すなわち、進化、退化、建設、破壊といった、全作用をくりかえしゆく活動をば、諸法という。この諸法の本体が南無妙法蓮華経であるとの仰せである。

このようにみれば、われわれの昔々旬々、歩行、喜怒哀楽、また星辰の輝き、太陽の光線、月光、草木の発育、生命の出生等々、ことごとく妙法の作用であり、南無妙法蓮華経の源泉によってなされるものである。

伝教云く法華経を讃むると雖も還って法華の心を死すと、死の字に心を留めて之を棄ず可し

伝教大師は、慈恩のごとき者が、法華経を賛嘆しても、法華経と爾前経とを並べ考えたり、法華最第一の精神なく、ただ、すばらしい哲理だと賛嘆しているにすぎず、かえって、法華経の心を死してしまっているのだと、厳しく破折したのである。この伝教のことばは、そのまま現在の日蓮宗各派や、南無妙法蓮華経を看板とする新興宗教に、ぜんぶあてはまるものである。

いったい法華経の心とは何か。一代聖教大意（四〇四ページ）にいわく「此の法華経は知らずして習い読ずる者は但爾前の経の利益なり」と。また、三大秘法抄（一〇二三ページ）にいわく「法華経を諸仏出世の一大事と説かせ給いて候は此の三大秘法を含めたる経にて渡らせ給えばなり」と。

結局は、法華経の心とは、三大秘法の南無妙法蓮華経なのである。ゆえに、いかに法華経を読もうとも、三大

秘法の大仏法を知らされば「法華の心を死す」ことに帰着するのである。

また、種種御振舞御書（九一九㌻）には「かかる日蓮を用いぬるともあしくうやまはば国亡ぶべし」と。これも同じ原理である。いかに大聖人を賛嘆しても、大聖人を上行菩薩ぐらいに取り扱ったり、日蓮大菩薩などとしていることは、末法の御本仏を、おおい隠すことになる。そして日蓮大聖人を軽視することに通ずる。これ、かえって国を亡ぼし、身を失うの根源なることを知らねばならぬ。

日蓮大聖人の御心とは何か。経王殿御返事（一一二四㌻）には「日蓮がたましひをすみにそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ」と述べられているごとく、日蓮大聖人の御心とは大御本尊にある。

そして「余は二十七年なり」（聖人御難事一一八九㌻）と、出世の本懐として顕わされた本門戒壇の大御本尊こそ、究竟中の究竟の御心なのである。この大御本尊を否定して、いかに大聖人の御書を拝読しても、法華経を賛嘆しても、全部、大聖人の御心に背いている仏敵と断ずることができるのである。

不信の人は如是我聞の聞には非ず法華経の行者は如是の体を聞く人と云う可きなり

文句の一には「我聞とは能持の人なり」とある。大聖人は「能の字之を思う可し」と仰せられている。これ、大聖人の御金言を、身口意の三業で読むことであり、大御本尊を色心ともに受持する意である。

ゆえに、如是我聞の聞とは、ただ「聞く」というのではなく、「信心」を意味するのである。

先に、如是我聞の聞は、名字即であり、名字即とは、大御本尊を受持した位であることを示した。したがら

て、大御本尊を信じない者は、絶対に如是我聞の人ではない。さらに厳しく論ずれば、大御本尊受持の人たりとも、身口意の三業の信心修行なき者は、如是我聞の人とはいえない。

この点につき、日寛上人は、当体義抄(五一二㌻)の「本門寿量の当体蓮華の仏とは日蓮が弟子檀那等の中の事なり」の文の〝中〟の字を「正信にあたる」と読むべきであると示されておられる。

次に文句の一の「如是とは信順の辞なり信は則ち所聞の理会し順は則ち師資の道成ず」とは、やはり如是我聞が信心であることを示したものである。ここで信順と述べ、さらに、信と順とにわけて説き、ともに仏道修行の根本義を述べられている。

「信は則ち所聞の理会し」とは、信ずること、実践することによって、所聞の理たる一念三千の法理を会得することができるという意である。

いかに観念的に、仏法を理解しようとしても、仏法の真髄が、決して会得できるものではない。題目を唱え、逆境を切り開き、力強い人生を歩むとき、生活、生命の上に厳然と功徳が湧き、証得できるのである。そこに、大御本尊の偉力、大聖人の仏法の偉大さを、しみじみと自覚できるものである。遠く、釈尊時代、「智慧第一」といわれた舎利弗すら、「以信得入」といって、信をもって成仏した。信心、実践のなき者に、仏法がわかろうはずがないのである。

「順は則ち師資の道成ず」とは、師弟相対の原理である。仏法は、決して観念であってはならない。人間対人間の生きた関係の中に、生き生きと伝わるものである。

法といえども、所詮は人に帰着するものである。求道心に燃え上がる人こそ、りっぱな如是我聞の人といえる。順とは、師匠の言を、一直線に実践してゆくことをいう。ここに師匠たる大聖人と、境智冥合し、師弟不二の眼理に基づき、われわれが、永遠の生命を、感得できうるのである。

最後の文に「所詮日蓮等の類いを以て如是我聞の者と云う可きなり」と仰せである。正に、われら、創価学会員は、日蓮大聖人の御遺命たる、化儀の広宣流布達成に向かい、勇敢に戦っている、大聖人の御予言をば、虚妄にせざるために。この実践の姿こそ、如是我聞の人であり、正信の鑑であると確信すべきなのである。

第二　阿若憍陳如の事

本文

第二阿若憍陳如の事　疏の一に云く憍陳如は姓なり此には火器と翻ず婆羅門種なり其の先火に事こう此れに従て族に命く、火に二義有り照なり焼なり照は則ち闇生ぜず焼は則ち物生ぜず・此には不生を以て姓と為す。御義口伝に云く火とは法性の智火なり、火の二義とは一の照は随縁真如の智なり一の焼は不変真如の理なり照焼の二字は本迹二門なり、さて火の能作としては照焼の二徳を具うる南無妙法蓮華経なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは生死の闇を照し晴して涅槃の智火明了なり生死即涅槃と開覚するを照則闇不生とは云うなり、煩悩の薪を焼いて菩提の慧火現前するなり煩悩即菩提と開覚するを焼則物不生とは云うなり、爰を以て之を案ずるに陳如は我等法華経の行者の煩悩即菩提生死即涅槃を顕したり云云。

語訳

阿若憍陳如　阿若倶鄰（拘鄰）と同じ。釈尊から最初に化導された五比丘の一人。中インド迦毗羅城の婆羅門の出身。釈迦誕生の第五日、浄飯王の召に応じて城門に参り、新皇子の瑞相をうらなって、必ず仏陀になるべきことを予言したという。その後、釈尊の出家に際し、父王・大官の懇望により、他の四比丘とともに、釈尊の侍者として苦行の旅に出た。この修行は十二年の久しきにわたったが、釈尊がこの修行法が真の解脱の法でないことを悟り、これを棄てたとき、阿若倶鄰等の五人は釈尊が退転したと思って、そのもとを去り、波羅内の鹿野苑に来て修行を続けた。その後、釈迦が菩提樹下において悟りをひらき、鹿苑に来て四諦を説いたところ、拘鄰は他に先立って、帰依したという。「阿若」の訳名「初名」「已知」または「了本際」は、この辺の消息をあらわすといわれる。増一阿含経第三弟子品には拘鄰をほめて「我が声聞中第一の比丘といわば、寛仁博識にして善く能く勧化し、聖衆を将養して威儀を失わせざるは、いわゆる阿若拘鄰比丘これなり。初め法味を受けて四諦を思惟せしもまたこの阿若拘鄰比丘なり」と出ている。法華経序品第一には「是の如きを、我聞きき。一時、仏、王舎城、耆闍崛山の中に住したまい、大比丘衆、万二千人と倶なりき。皆是れ阿羅漢なり。諸漏已に尽くして復煩悩無く、己利を逮得し、諸の有結を尽くして、心自在を得たり。其の名を阿若憍陳如、摩訶迦葉、優楼頻螺迦葉、伽耶迦葉、那提迦葉、舎利弗、大目犍連……」とある。

疏の一に云く　法華文句巻第一上にある文である。

婆羅門種なり其の先火に事こう此れに従て族に命く　婆羅門の出身であり、その先祖が火に仕えていた。そこで憍陳如一族に「火器」というような名前がつけられたという意味。先祖が火に仕えていたということは、火神に仕えていたことであろう。古代インド人は火を異常に尊み、火は神として崇められたのである。一種の原始宗教である。

生死即涅槃・煩悩即菩提　九界即仏界の哲理。止観に「無明塵労は即是菩提・生死は即涅槃なり」玄義に「煩悩即菩提と達するを名づけて慧と為す」とある。生死、煩悩は迷いで九界、涅槃、菩提は悟りで仏界を意味する。法華経では、煩悩等の迷

いを断じなくてもそのまま悟りになるのであり、両前の「迷いを離れる」という教えを破している。しかし、真の生死即涅槃、煩悩即菩提は大聖人の仏法による以外にない。

通解

これは、序品のとき集まった、万二千の阿羅漢の一人阿若憍陳如（あにゃきょうじんにょ）についての御義口伝である。

天台の法華文句の第一巻には「憍陳如は姓であり、漢語には火器と翻訳する。婆羅門階級である。その先祖が火に仕えていたという。一族全体に、憍陳如（火器）という姓がつけられたゆえんがここにある。火に二義、二つの働きがある。『照らす』と『焼く』との二つの作用である。照らせば闇が生じないし、焼けば物が生じない。いずれにしても生じないという意味で、不生（ふしょう）を姓としているのである」と。

日蓮大聖人の御義口伝には、次のごとく仰せである。火とは、法性の智火を意味する。「文句（もんぐ）」には、火に照と焼と、二つの意義があるというが、「照」は、随縁真如の智を意味し、「焼」は不変真如の理を意味する。したがって、照焼の二字は、本迹二門（照は本門、焼は迹門）を意味している。かくのごとく、火の作用として照焼の二徳を具（そな）えるといえども、南無妙法蓮華経に両者とも含まれているものである。

今、日蓮大聖人およびその門下が、南無妙法蓮華経と唱え奉ることは、生死（しょうじ）の闇を照らし晴らし、涅槃の智火が明了（みょうりょう）に現われることである。すなわち、生死即涅槃と開覚することを、文句では、「照は則ち闇生ぜず」という

っているのである。また、妙法を唱え奉ることは、煩悩の薪を焼いて菩提の慧火が現前することである。すなわち、煩悩即菩提と開覚することを、文句では、「焼は則ち物生ぜず」といっているのである。このようにみていくと、結局、阿若憍陳如とは、われら法華経の行者の、煩悩即菩提、生死即涅槃をあらわしているのである。

講義

仏法は生命の根本解決の原理である。総勘文抄（五六三㌻）にいわく「一代聖教とは此の事を説きたるなり此れを八万四千の法蔵とは云うなり是れ皆悉く一人の身中の法門にて有るなり、然れば八万四千の法蔵は我身一人の日記文書なり」と。したがって、法華経序品の儀式も、みな釈尊己心の生命に展開された儀式である。阿若憍陳如も、同じく釈尊己心の阿若憍陳如なのである。むろん、釈尊の弟子の中に、阿若憍陳如という人も実在していたことと思う。しかし、大聖人の示し論じられる阿若憍陳如は、具体的な一人を指すというより、生命論の上から論じた阿若憍陳如という生命活動を意味するのである。

御義口伝に云く火とは法性の智火なり

法性の智火とは、知識を生活に応用してゆく智慧をいう。文化、文明を発展せしめていく人間の智慧である。価値創造の源泉である。この根本の智慧こそ、妙法の智慧であることを示されているのである。われわれの生活

をふりかえってみるに、一瞬一瞬の行動が、智慧の発露ともいえよう。交通事故などを、瞬間にしてまぬがれることができるのも智慧の働きである。事業等の不振を打開していくのも、その人自身の、智慧の判断によるものである。時々刻々の振舞いの人間社会にあって、いかにして生きるか、決めていくのも、皆己れ自身の判断であり、智慧によるものといえよう。

小さくは個人、大きくは社会、国家、世界の発展も、悉く人間の英知によるものである。文明、文化の歴史的な発達も、同じく、人類のたゆまざる智慧の集積がもたらしたものである。善悪共に、智慧は働くものである。ある人は、自己の私利私欲のために、ある人は、他人を陥しいれるために、全智慧を発揮することだろう。しかし、真実の智慧は、自己の最高の幸福と、社会の繁栄に寄与する智慧でなくてはならない。これこそ、妙法の智慧しかなく、真実の英知なのである。

火の二義とは一の照は随縁真如の智なり一の焼は不変真如の理なり照焼の二字は本迹二門なり

随縁真如の智、不変真如の理については「南無妙法蓮華経」の御義口伝のところで詳細に述べたとおりである。また本門が随縁真如の智であり、迹門が不変真如の理であることも、同じく詳論したとおりである。

ここでは、火の二義を、具体的に説明することにする。まず、太陽に、照焼の二義をあてはめてみる。太陽自体は、その表面では、たえず摂氏六、〇〇〇度ぐらいの熱を発しながら燃焼しつづけている。だが燃焼していることそれ自体は、不変真如の理となる。いまだ、実際には、われわれの生活、生物の発育には関係がない。今度

は、太陽の熱が、この地球に届き、光りが地球を照らして、初めて縁になり、われらの生命、草木が吸収し、生活し発育することが可能になるわけである。これ、随縁真如の智である。

われわれの生命に例をとってみる。肉体の体温は、三十六・五度前後といえる。燃焼の火器である。この生命は、燃焼しているといっても、燃焼それ自体は不変真如の理である。今度は、その三十六・五度前後の体温を保ち、順調に生命活動していくことが、照になり、これ随縁真如の智になるのである。

さて火の能作としては照焼の二徳を具うる南無妙法蓮華経なり

この文は「南無妙法蓮華経」の御義口伝のなかの「随縁不変・一念寂照」にあたる文である。照は随縁真如の智であり、焼は不変真如の理である。「照焼の二徳を具うる南無妙法蓮華経」で「随縁不変・一念寂照」となるのである。

物が焼ける。焼けること自体は不変真如の理である。その焼けることを、人間の生命と、どのように関係させるかが、随縁真如の智の働きになる。燃焼作用を、人間の幸福、人類の平和に使うか否かは、人間の智慧、英知によるのである。とくに、原子核の分裂、反応等による、大量の熱発生をば、人類社会の幸福にもちいるか、戦争方向に使うか、これひとえに、人間の智慧が決定するものである。妙法の英知により、この照焼の二徳が、正しき方向にゆくことを祈って止まない。

日蓮大聖人の大仏法は、照焼の二徳具備の法門である。ゆえに、この大仏法こそ、初めて、いっさいの科学を

平和に、幸福に、指導でき得る唯一の方法なりと叫ぶものである。

今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは生死の闇を照し晴して涅槃の智火明了なり

生死については、三つの義がある。一には、生命それ自体をいう場合。二には、生老病死という意味での生死。三に、苦しみと訳す場合とがある。いまここで論ずる生死とは、第三の苦しみという内容の生死である。

「涅槃の智火明了なり」の涅槃とは、「悟り」と同意である。

しからば、末法の悟りとは何か。それは、「信」の一字につきるのである。日寛上人の三重秘伝抄にいわく「妙楽云く『仏界の心強きを名づけて仏界と為し、悪業深重なるを名づけて地獄と為す』云云、既に法華経を信ずる心強きを名づけて仏界と為す、故に知んぬ法華経を謗る心強きを悪業深重と号して地獄界と名づくるなり」(富要集第三巻二一ページ)と。結局、大御本尊を疑わないということが信心であり、末法の悟りなのである。それが以信代慧の原理により仏の智慧となってあらわれるのである。

「智火明了なり」とは、複雑と苦難の実生活にあって、妙法と境智冥合して、悠々と人生を歩んでゆける智慧をいうのである。事実の上に、功徳を受け、かつは諸天善神に護られ、三世十方の仏菩薩に擁護され、正しい、幸福な生活を営んでいくことをいうのである。これこそ「智火明了」になっている証拠であるといえよう。また、題目を唱えることによって、生命力が豊かになる。道理がわきまえられてくる。頭脳が整頓されてくる。御書を拝読するたびに、他の哲学、思想を見とおすことができる等々、これみな「智火明了」といえると思う。

生死即涅槃と開覚するを照則闇不生とは云うなり

「生死即涅槃と開覚する」とは、いかなる難事件が到来しても、変毒為薬でき得ることをいう。罰を利益に変えてゆく力のことをいうのである。これ「照は則ち闇生ぜず」に通ずるところである。すなわち、生涯、妙法を抱きしめ、どんな事態に遭遇しても、「照は則ち闇生ぜず」になしゆく確信こそが、真の強信者といえるのではなかろうか。この文を、身読していけば、常に洋々たる前途を見いだすことが可能であると確信するものである。

煩悩の薪を焼いて菩提の慧火現前するなり

煩悩とは、人間の欲望であり悩みをいう。爾前教、とくに小乗教では、この世の不幸の原因は、煩悩であると説き、煩悩を離れなければならないとする。したがって、煩悩を断じ尽くした世界を悟りとした。このために、比丘に二百五十戒、比丘尼に五百戒等の戒律を持たせようとした。

だが、そもそも、煩悩を滅し尽くすなどということは、とうていできうることではない。そんな境涯を悟りとするならば、真の悟りなど得られるはずがない。このような教えは、現実を否定し、無視し、他の世界に幸福を求めゆくのと同じとなる。しかして釈尊は、こうした教えは、真実に非ずと、後に、自身述べている。ただ、真実の法に入らしむる手段に過ぎなかったとして、排斥しているのである。

これら、小乗の教は、当時のインドの民衆の、現世主義、享楽主義的精神を打ち破るために、最低道徳を説い

たにすぎないのである。このような、低級な教えを根本にすれば、当然、自由な人間性の発揮を阻害し、無気力と、偽善とを植え付けるにすぎない。現在なお小乗仏教国といわれる、東南アジアの国々の民衆の、無気力、消極的風潮が、そのよきあらわれである。

煩悩を断ずる必要は、絶対にない。真実の仏法、人間性は、煩悩即菩提なのである。薪を離れて、火があるのでなく、薪があってこそ、火が生ずるのである。学生が、立派な成績を欲することも煩悩である。幸福生活を、欲望するのも、煩悩である。一生成仏を願うことも、また立派な煩悩なのである。さらに、日本の国を救いたい、世界を平和にしたいという念願も、立派な大煩悩といえよう。

菩提とは、成就であり、悟りをいう。所詮、悟りとは信心のことである。信心に約せば、わが生命に仏智が現われることであり、生活に約せば、最高の幸福生活を指すわけである。これこそ、所願満足の満足に通じ、衆生所遊楽の、遊楽に通ずるのである。所願とは、いっさいの願いをいう。この願いは、幸福への欲望につきる。人は誰人たりとも幸福を願っている。満足とは、一時的、刹那的満足を意味するものではない。生命の奥底からの満足である。生涯、永遠に崩れない幸福境涯のことである。これこそ、仏法の根本であり、信心の究極目的なのである。所願とは、欲望であり、煩悩である。満足とは、欲望充足であり、菩提である。

なお、衆生所遊楽の衆生とは、生命と訳す。そして遊楽とは、幸福境涯と訳すのである。厳しい、苦境の社会にあって、生涯常に、衆生所遊楽の、自由自在の人生を生きゆくことが、最高の幸福というべきである。

第三　阿闍世王の事

本文

第三阿闍世王の事　文句の一に云く阿闍世王とは未生怨と名く、又云く大経に云く阿闍世とは未生怨と名く又云く大経に云く阿闍を不生と名く世とは怨と名く。

御義口伝に云く日本国の一切衆生は阿闍世王なり既に諸仏の父を殺し法華経の母を害するなり、無量義経に云く諸仏の国王と是の経の夫人と和合して共に是の菩薩の子を生む、謗法の人・今は母の胎内に処しながら法華の怨敵たり豈未生怨に非ずや、其の上日本国当世は三類の強敵なり世者名怨の四字に心を留めて之を案ず可し。日蓮等の類い此の重罪を脱れたり謗法の人人法華経を信じ釈尊に帰し奉らば何ぞ已前の殺父殺母の重罪滅せざらんや、但し父母なりとも法華経不信の者ならば殺害す可きか、其の故は権教の愛を成す母・方便真実を明めざる父をば殺害す可しと見えたり、仍て文句の二に云く「観解は貪愛の母・無明の父・此れを害する故に逆と称す逆即順なり非道を行じて仏道に通達す」と、観解とは末法・当今は題目の観解なる可し子として父母を殺害するは逆

なり、然りと雖も法華経不信の父母を殺しては順となるなり爰を以て逆即是順と釈せり、今日蓮等の類いは阿闍世王なり其の故は南無妙法蓮華経の剣を取って貪愛・無明の父母を害して教主釈尊の如く仏身を感得するなり、貪愛の母とは勧持品三類の中第一の俗衆なり無明の父とは第二第三の僧なり云云。

語訳

阿闍世王とは未生怨と名く　阿闍世王は、法華経の序品列座の大衆の一人である。「韋提希の子阿闍世王、若干百千の眷属と倶なりき」とある。阿闍世王は釈尊在世から滅後にかけての中インド・摩訶陀国の王。父は頻婆沙羅王、母は韋提希夫人。阿闍世とは梵語で、訳せば未生怨、法逆となる。未生怨のいわれは、大般涅槃経等によれば、父の頻婆沙羅王に世継ぎの子なく、山中に住む仙人が死後太子となって生まれると占師がいったことを待ちきれずに仙人を殺した。やがて生まれた男子は、占師が、王の怨となるといったことから、未生怨(阿闍世)と名づけられた。阿闍世は長じて悪逆の提婆達多と組み、父を殺し釈尊に反逆したが、後に悔いて釈尊の弟子となり、仏典の結集等、仏法の外護に努めた。

大経　大般涅槃経の略名である。釈尊の入涅槃、ならびに、その際説かれた説法を記録した経典。

無量義経　無量義経は法華経の序分で、開経として大切なる経であり、徳行品第一、説法品第二、十功徳品第三の一巻三品の経である。「諸仏の国王と是の経の夫人と和合して、共に是の菩薩の子を生む」の文は、十功徳品第三（一〇四ページ）にある。この経は、冒頭に「一時、仏、王舎城、耆闍崛山の中に住したまい、大比丘衆、万二千人と倶なりき」とあるから、法華経と同じく霊鷲山において説かれたことは明らかである。また、法華経の序品（一二四ページ）に「諸の菩薩の為に、大乗経の、無

量義、教菩薩法、仏所護念と名づくるを説きたもう。仏、此の経を説き已って、結跏趺坐し、無量義処三昧に入って、身心動じたまわず」とあり、この三昧より安詳として起って、方便品を説かれたのであって、無量義経説法品第二に「仏の言わく、善男子、是の一の法門をば名づけて無量義と為す」（八三ページ）とあるから、この無量義経は法華経の直前に説かれたことがわかる。なお、説法品第二に「無量義とは一法より生ず」（八四ページ）と説かれているが、この一法とは何かということは、明確に説かれてはいない。この一法こそ、次の法華経において説かれる妙法蓮華経である。そこで、この無量義経は、法華経の序分であるといえるのである。御義口伝（七八五ページ）にいわく「法華経八巻は処なり無量義経は無量義なり、無量義は三諦・三観・三身・三乗・三業なり法華経に於一仏乗・分別説三と説いて法華の為の序分と成るなり」またいわく「法華の為の序分開経なり云云」と。

三類の強敵　正法の行者を迫害する三種類の敵人。法華経勧持品第十三に出ている。釈尊が一座の大衆に滅後の弘経を勧めた時、八十万億那由佗の菩薩が、釈尊滅後どのような難にあっても、南無妙法蓮華経を弘めたいと誓った文で、末法には三類の強敵が出現すると予言している。勧持品（四四一ページ）に「諸の無智の人の、悪口罵詈等し、及び刀杖を加うる者有らん、我等皆当に忍ぶべし（以上が第一・俗衆増上慢）。悪世の中の比丘は、邪智にして心諂曲に、未だ得ざるを為れ得たりと謂い、我慢の心充満せん（第二・道門増上慢）。或は阿練若に、納衣にして空閑に在って、自ら真の道を行ずと謂いて人間を軽賤する者有らん。利養に貪著するが故に、白衣の為に法を説いて、世に恭敬せらることを為ること、六通の羅漢の如くならん。是の人悪心を懐き、常に世俗の事を念い、名を阿練若に仮って、好んで我等が過を出さん、而も是の如き言を作さん、此の諸の比丘等は利養を貪るを為っての故に、外道の論議を説く、自ら此の経典を作って、世間の人を誑惑す、名聞を求むるを為っての故に、分別して是の経を説くと。常に大衆の中に在って、我等を毀らんと欲するが故に、国王大臣、婆羅門居士、及び余の比丘衆に向って、誹謗して我が悪を説いて、是れ邪見の人、外道の論議を説くと謂わん（第三・僭聖増上

慢）」とある。この一連の偈頌を勧持品の二十行の偈というが、この偈を文句記等で三類の強敵に分別しているのである。俗衆増上慢は、今でいえば仏法を知らない世間の人がただ感情的に反対していることであり、道門増上慢は、邪宗の僧侶である。僭聖増上慢は世の指導者階級と目される人々が大聖人の仏法に敵対してくることで、この第三僭聖増上慢がもっとも邪悪であり、また現在は、この第三がもっとも盛んな時である。

法華経　この場合、末法の法華経たる南無妙法蓮華経の御本尊、法本尊。（南無妙法蓮華経の項五〇ページ参照）

釈尊　法華経文底の釈尊、すなわち日蓮大聖人、人本尊。（南無妙法蓮華経の項四九ページ参照）

観解　観とは心を定め、対境を広く深く、また、遠く明らかに見ること、解とは智解の意で、事物の理を思惟することによって明らかに知ることをいう。すなわち観解とは、すぐれた智慧をもって経教等の義を理解し、その意を悟ること。末法においては、御本尊に題目を唱えることが観解となる。

通解

これも序品列座の大衆の一人である阿闍世王についての御義口伝である。

文句の一にいわく「阿闍世王とは、未生怨と名づける」、またいわく「涅槃経にいわく『阿闍世とは未生怨と名づける』と」またいわく「涅槃経にいわく『阿闍とは不生という意味である。世とは怨という意味である』と」

これに対する、日蓮大聖人の御義口伝は次のとおりである。日本国の一切衆生は、阿闍世王である。なぜなら、

すでに、謗法によって、諸仏という父を殺し、法華経という母を害しているからである。無量義経にいわく「諸仏という国王と、法華経という夫人が和合して、共にこの菩薩の子を生むのである」と。謗法の人は、母の胎内にいながら法華の怨敵である。まさに未生怨ではないか。

そのうえ日本国の現在の人々は皆、俗衆、道門、僭聖増上慢の三類の強敵である。世者名怨（世とは怨と名く）の四字に心をとどめてよくよく考えなさい。日蓮大聖人およびその門下はこの重罪を犯さないですむのである。たとえ以前は謗法の人であったとしても、末法の法華経たる大御本尊を信じ、末法の御本仏たる日蓮大聖人に帰依するならば、以前の諸仏の父と法華経の母を殺害するという重罪、すなわち謗法の重罪が、どうして滅しないわけがあろうか。

ただし父母であっても、法華経不信の者であれば、その謗法の心を殺害すべきである。すなわち、その執着心を断ち切るべきである。その理由は、権教に執着している母、方便の教えか真実の教えかをわきまえない父は殺し、真実最高の法華経を信ずる父母として誕生させなければならないことは経文に明らかだからである。よって文句の二にいわく「天台家の観念観法により貪愛という母も、無明という父も、これを害するから逆罪ではあるが、その逆はそのまま順となるのである。そのわけは、父母を害することは非道であり逆罪であるが、それが即仏道に通達することになるがゆえに逆即順なのである」と。ここに観解とあるのは、文句では、天台の観念観法をいうが、末法当今では受持即観心であり、題目を唱えることが観解なのである。子として父母を殺害するのは逆である。しかし、法華経不信の父母を殺すのは順となるのである。それゆえ文句の二では「逆は即是れ順な

り」と釈したのである。

いま日蓮大聖人およびその門下は阿闍世王なのである。そのわけは、南無妙法蓮華経の剣を取って、貪愛の母および無明の父を殺害して、久遠元初の自受用報身如来と等しく仏身を感得するからである。ここにいう貪愛の母とは勧持品二十行の偈に説かれている三類の強敵のうちの第一の俗衆増上慢である。無明の父というのは第二の道門増上慢、第三の僭聖増上慢の邪僧たちである。

講義

日蓮大聖人は、ここで、明らかに二つの立ち場から、阿闍世王について述べられている。第一に、謗法の人を指して、阿闍世王なりと。「日本国の一切衆生は阿闍世王なり既に諸仏の父を殺し法華経の母を害するなり」と仰せのごとくである。第二に、信心ある者が、阿闍世王なりと。「今日蓮等の類いは阿闍世王なり其の故は南無妙法蓮華経の剣を取って貪愛・無明の父母を害して教主釈尊の如く仏身を感得するなり」と仰せのとおりである。

およそ、他人を怨む性格、性質は誰人にもある。否、現今ほど、日本の人が、世界の民衆が、互いにいがみあい、嫉妬と憎悪に満ちみちた時代はなかろう。国と国との、不信、相剋もその一つである。それらの、すべての怨み合いの底流には、たんに己れの利己的な心を満足すればそれでよしとの、醜い根性が横たわっているものである。しかも、自分で自分を、どうしようもないのである。所詮、力なき思想、低級哲学、偏頗な主義主張で

は、この人間自体の根本解決は、到底できえぬことがわかるものだ。これらは、ますます、人心を迷惑し、混乱と怒号とを助長させるにすぎないのである。ありとあらゆる葛藤の原因は、根強い対立感情といえよう。しからば、その根強い対立感情は、いずこより来たのであろうか。原因には、近因と遠因とが必ずある。事態の経過は、いかに説明し得ても、人間生命の問題の解決なくしては、それらは、みな、近因を述べたものにほかならない。ありとあらゆる修羅、葛藤の根本原因は、人間生命に深く根ざしていることは、有智の人ならば、誰人も知るところであろう。

日蓮大聖人は、かかる、他人を怨み、人を害するという、人間が本来備えた生命の傾向をば、「阿闍世王」と名づけられたのである。阿闍世王は、インド、マカダ国の国王であった。初め釈尊に敵対し、父王を殺し、母を幽閉するという、悪逆の限りをつくしたといわれる。しかし、後に悔い改め、釈尊に帰伏し、仏法守護につとめたのであった。これは、一人の阿闍世王という人間の行動であり、姿である。しかし、この一人の阿闍世王は、まさに、現今の、いっさいの人々の縮図である。したがって一人の阿闍世王は、万人の阿闍世王ともいえる。ゆえに大聖人は「日本国の一切衆生は阿闍世王なり既に諸仏の父を殺し法華経の母を害するなり」と仰せられたのである。ここに諸仏の父とは日蓮大聖人であり、法華経の母とは南無妙法蓮華経のことである。

およそ、怨むという根性に支配され、それによって行動し、不幸をもたらすことは、その人の生命力の弱さであり、目的観、境涯の低さによるものと思う。人間は感情の動物ともいわれている。たしかに人間である以上、怨みもするし、悲しみもする。また喜びもする。これらの感情を無視しようとするなら、人間に木石になれとい

うのと同じである。しかし、それらの感情に支配され、流されていけば、これもまた不幸なことだ。これらの感情を使い切っていくのでなくてはいけない。この感情をば、意のままに用いて、人生を楽しみ切っていくことが理想であるといわねばならぬ。日蓮大聖人は「令離諸著」の離を「明らむ」と読むべきであると仰せではないか。ゆえに、人間に本来備わった阿闍世王という生命の傾向も、ぜんぶ、幸福のほうへ用いていけるのである。これが大聖人が「逆即是順」といわれたゆえんではなかろうか。一口に怨むといっても、何を怨むかが問題だ。また怨むときのその人の心が問題である。日蓮大聖人を怨み、大御本尊を怨むことは、悪の中の極悪となるのである。そのとき怨む人の心は魔の心であり、正しい道理をすなおに聞けない、ゆがんだ、増長し切った心なのである。

しかし、真に民衆のことを思い、戦争を憎み、平和を願い、敢然と戦う姿は、真の阿闍世王の姿である。また謗法を憎み、相手の幸福を考え、折伏する姿は、これまた真の阿闍世王である。ゆえに日蓮大聖人は「今日蓮等の類いは阿闍世王なり其の故は南無妙法蓮華経の剣を取って貪愛・無明の父母を害して教主釈尊の如く仏身を感得するなり」と仰せられたのである。日蓮大聖人の大仏法によって、初めて人間革命ができ、境涯を開き、確固不動の目的観に立ち、仏界があたかも総司令部のごとくになり、いっさいの性格、いっさいの執着、いっさいの欲望、いっさいの煩悩や苦しみ、怒り、嫉妬も、すべて変毒為薬し、用いていけるのである。九界を、思うがままに遊戯し、人生の醍醐味をば、存分味わうことができるのである。総じて、現今のいっさいのいがみ合い、修羅、葛藤も、大聖人の仏法が根底となったときに、自然に、全部が心を一つにした、よい意味での競争に変わり、おたがいに激励し合い、啓発し合う姿となり、主義主張の違いも、共通の立ち場を見いだし、人類発展の原

因となることを信じてやまない。

無量義経に云く諸仏の国王と是の経の夫人と和合して共に是の菩薩の子を生む

「諸仏の国王」とは能証の智であり、久遠元初の本仏日蓮大聖人である。「是の経の夫人」とは、所証の境であり、無作本有の南無妙法蓮華経である。人法一箇の大御本尊として境智和合することを「和合」というのである。その境智冥合の大御本尊を拝することによって、成仏できるのである。「菩薩の子」とは成仏の種子であり、われわれが大御本尊に南無することをいうのである。この大御本尊こそ、七百年来、厳然と富士大石寺におわしますのに、大御本尊のお力を知らず「雖近而不見」のゆえに、敵対し、謗法を重ねているということは、まさに母の胎内にいながら、すでに怨みを持つ姿である。ここをもって大聖人は「謗法の人・今は母の胎内に処しながら法華の怨敵たり豈未生怨に非ずや」と仰せられたのである。

但し父母なりとも法華経不信の者ならば殺害す可きか

この「殺害」ということであるが、これは、いわゆる「殺す」という意味では決してない。立正安国論（三〇ページ）では、客が「若し謗法の輩を断じ、若し仏禁の違を絶せんには、彼の経文の如く斬罪に行う可きか。若し然らば、殺害相加って罪業何んが為んや」と、次に大集経の文や竹杖や提婆達多等の例をあげて質問している。それに対し主人（日蓮大聖人）は「客明かに経文を見て猶斯の言を成す。心の及ばざるか、理の通ぜざるか。全く

仏子を禁むるには非ず、唯偏に謗法を悪むなり。夫れ釈迦の以前の仏教は、其の罪を斬ると雖も、能仁以後の経説は則ち其の施を止む。然れば則ち四海万邦、一切の四衆、其の悪に施さずして皆此の善に帰せば、何なる難か並び起り、何なる災か競い来らん」と答えられている。

すなわち、大聖人は、謗法の邪僧を斬罪にするというのは、布施をとどめることであると仰せられているのである。つまり、人間を殺すのではなく、謗法行為を殺すのであり、また謗法の心を断ち切ることを意味するのである。いま、ここに日蓮大聖人が「但し父母なりとも法華経不信の者ならば殺害す可きか」と仰せられるのも、同様の意味と考えられる。すなわち、謗法への執着心を断ち切ることを「殺害」とおおせになっているのである。ゆえに次に、「其の故は権教の愛を成す母・方便真実を明めざる父をば殺害す可しと見えたり」とあるのである。

また、父母といっても、必ずしも、世間のいわゆる父母を指すとは限らない。次の文句の「観解は貪愛の母・無明の父・此れを害する故に逆と称す」の文によれば、母とは貪愛を表わし、父とは無明を表わしているのである。さらに最後の「貪愛の母とは勧持品三類の中第一の俗衆なり無明の父とは第二第三の僧なり」との仰せによれば、母とは第一の俗衆増上慢を表わし、父とは第二の道門増上慢、第三の僭聖増上慢を指すことは明らかである。

よく、仏法のことを何も知らない者が、たまたま大聖人の「父母を殺害する」等の文を見て、ほんとに殺害するのかと、とんでもない勘違いをするが、まことにもって笑うべきことである。いったい日蓮大聖人が、いつ親を殺そうとなされたか。日蓮大聖人御自身こそ、至孝の限りをつくされたではないか。また、孝の大事なること

を、諸御書に示されているではないか。

報恩抄（二九三㌻）では「仏教をならはん者父母・師匠・国恩をわするべしや」と申され、四恩抄（九三七㌻）では「仏法を習う身には必ず四恩を報ずべきに候か……二には父母の恩」といわれ、また開目抄（一八六㌻）では「夫れ一切衆生の尊敬すべき者三あり所謂主師親これなり」と申されているとおりである。

また、七百年来、日蓮大聖人の門下が、いつ、親をないがしろにしたというのか。これらの事実から考えただけでも、そのような考えが、いかに笑止の愚論なるかがわかろう。

第四　仏所護念の事

本文

第四仏所護念の事　文句の三に云く仏所護念とは無量義処は是れ仏の証得し給う所是の故に如来の護念し給う所なり、下の文に仏自住大乗と云えり開示せんと欲すと雖も衆生の根鈍なれば久しく斯の要を黙して務て速かに説き給わず故に護念と云う記の三に云く昔未だ説かず故に之を名けて護と為す法に約し機に約して皆護念する故に乃至機仍お未だ発せず隠して説かず故に護念と言う、乃至未説を以ての故に護し未暢を以ての故に念ず、久黙と言うは昔より今に至るなり斯要等の意之を思うて知る可し。

御義口伝に云く此の護念の体に於ては本迹二門首題の五字なり、此の護念に於て七種の護念之れ有り一には時に約し二には機に約し三には人に約し四には本迹に約し五には色心に約し六には法体に約し七には信心に約するなり云云、今日蓮等の類いは護念の体を弘むるなり、一に時に約するとは仏・法華経を四十余年の間未だ時至らざるが故に護念し給うなり、二に機に約するとは破法不信故墜於三悪道の故に前四十余年の間に未だ之を説かざる

なり、三に人に約するとは舎利弗に対して説かんが為なり、四に本迹に約するとは護を以て本と為し念を以て迹と為す、五に色心に約するとは護を以て色と為し念を以て心と為す、六に法体に約するとは法体とは本有常住なり一切衆生の慈悲心是なり、七に信心に約するとは信心を以て護念の本と為すなり、所詮日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは併ら護念の体を開くなり、護とは仏見なり、念とは仏知なり此の知見の二字本迹両門なり仏知を妙と云うなり仏見を法と云うなり此の知見の体を修行するを蓮華と云うなり、因果の体なり因果の言語は経なり加之法華経の行者をば三世の諸仏護念し給うなり、普賢品に云く一者為諸仏護念と護念とは妙法蓮華経なり諸仏の法華経の行者を護念したもうは妙法蓮華経を護念したもうなり機法一同護念一体なり、記の三の釈に約法約機・皆護念故と云うは此の意なり、又文句の三に云く「仏所護念とは前の地動瑞を決定するなり地動は六番破惑を表するなり、妙法蓮華経を受持する者は六番破惑疑い無きなり」神力品に云く「於我滅度後・応受持斯経・是人於仏道・決定無有疑」仏自住大乗とは是なり、又た一義に仏の衆生を護念したもう事は護とは唯我一人能為救護・念とは毎自作是念是なり、普賢品に至って一者為諸仏護念と説くなり、日蓮は生年卅二より南無妙法蓮華経を護念するなり。

語訳

仏所護念　序品第一（一二四ページ）には「諸の菩薩の為に、大乗経の、無量義、教菩薩法、仏所護念と名づくるを説きたもう」

とある。すなわち、妙法蓮華経は大乗経であり、いっさいの法義の根本であり、菩薩を教え仏に入らしむる教であり、三世十方の諸仏が護り念じてきたところのものであるとの意。

無量義処は是れ仏の証得し給う所　序品第一の「仏所護念」のすぐあとに「仏、此の経を説き已って、結跏趺坐し、無量義処三昧に入って、身心動じたまわず」とある。無量義処三昧の三昧というのは、心を一処に定めて動かさず、一心に思索する状態。無量義とは無量義経（八四ページ）にある「無量義とは一法より生ず」ということ。したがって、無量義処三昧とは「無量義とは一法より生ず」ということに、心を定めて動かさず一心に思索する状態を指す。このなかに一法とあるのは妙法蓮華経の一法のことである。無量義がことごとく妙法蓮華経の一法より生ずることを感得した無量義処三昧という境涯は、仏のみが証得したものであるという意味。無量義処三昧は、現在でいえば、御本尊を絶対と信ずることである。

仏自住大乗　方便品（一七五ページ）に「仏は自ら大乗に住したまえり」とある。大乗とは法華経である。仏はすでに妙法蓮華経を証得しており、大乗教の境涯に住していたとの意。さらに深く考えれば、仏とは人で、大乗とは法であり、人法一箇を意味している。

久しく斯の要を黙して秘て遠かに説き給わず　「斯の要」とは法華経であり、妙法蓮華経である。釈尊は、いきなり法華経を説かず、衆生の機根に応じて爾前経しか説かなかった。

機仍お未だ発せず　機根がまだ熟していなかった。

未説を以ての故に護し未暢を以ての故に念ず　未だ出世の本懐たる法華経を説かなかったがゆえに護といい、未だ外に向かって暢べず、心のなかで念じていたので念というのである。

久黙と言うは昔より今に至るなり　文句に「久しく斯の要を黙して」の「久しく黙して」ということは、釈尊が三十で成道してから法華経の説時まで、四十余年の長い期間、真実をいわなかったことをいう。

此の護念の体に於ては本迹二門首題の五字なり　仏が護念してきた本体は何かといえば、それは爾前経に相対すれば本迹二門である。一重立ち入ってみれば南無妙法蓮華経の五字七字である。

破法不信故墜於三悪道　方便品（一八六ページ）に「法を破して信ぜざるが故に、三悪道に墜ちなん」とある。機根がととのっていなければ、法華経を説いてもわからず、かえって法を破り、法を信じないために三悪道に墜ちてしまうとの意。したがって釈尊は四十余年のあいだ、法華経を護念し、衆生の機根をととのえたのである。

人に約するとは舎利弗に対して説かんが為なり　華厳、阿含、方等、般若における対告衆の人ではなく、法華経を理解できる代表として智慧第一の舎利弗の出現を待っていた。

舎利弗　釈尊の十大弟子の一人。智慧第一といわれた。舎利弗は梵語であって、訳して「身子」という。バラモンの出身で、小さいときから大そう頭がよく、八歳のとき、王舎城中の諸学者と議論して負けなかったという。目連とともに外道を学び、多くの弟子を持っていたが、釈尊が成道して間もなく弟子となり、声聞階級の代表であった。二百五十人をひきいて鹿野苑の会座（小乗の説法）に参加し、また阿弥陀経等でも対告衆となったが成仏せず、法華経の迹門方便品の対告衆となり、開三顕一の法説を聞いて開悟し、譬喩品で華光如来の記別を与えられた。

護を以て本と為し念を以て迹と為す　護念の護は本門であり、念は迹門であるとの意。身をもって護るということは実践であり、本門である。護ろうと念ずることは心の中で思うことであり、まだ迹門である。

普賢品に云く一者為諸仏護念　「一には、諸仏に護念せらるることを為」と読む。普賢菩薩勧発品第二十八（六六二ページ）に「若し、善男子、善女人四法を成就せば、如来の滅後に於いて、当に是の法華経を得べし。一には、諸仏に護念せらるることを為、二には、諸の徳本を植え、三には、正定聚に入り、四には、一切衆生を救う心を発せるなり」とある。この文に滅後とあるのは、一往、正像末の三時にわたるが、再往末法を意味する。滅後において法華経（大御本尊）を得るならば、第

一には必ず諸仏に護念されるとの意味で、諸天善神の加護があることである。第二には諸の徳本を植える、すなわち、福運を積むことができる。第三の「正定聚に入り」とは大御本尊を持つことができるということであり、第四に「一切衆生を救う心を発せり」とは、折伏ができるということである。

機法一同護念一体なり　妙法を唱えたわれわれの機根と大御本尊とが境智冥合して一体となり、三世十方の諸仏がわれわれを護念するのである。

記の三の釈に約法約機・皆護念故　妙楽の法華文句記の三には「法に約し、機に約して、皆護念する故に」とある。三世十方の諸仏は悉く妙法を護念し、同時に、妙法を持つものを護念するということである。

地動瑞　序品第一の「普仏世界六種に震動す」をいう。「仏所護念」の文との関係は「諸の菩薩の為に、大乗経の、無量義、教菩薩法、仏所護念と名づくるを説きたもう。仏、此の経を説き已って、結跏趺坐し、無量義処三昧に入って、身心動じたまわず、是の時に、天より曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、曼殊沙華、摩訶曼殊沙華を雨して仏の上、及び諸の大衆に散じ、普仏世界六種に震動す」（一二四ページ）

六番破惑　六番破惑とは、十住、十行、十回向、十地、等覚、妙覚と、六段階に無明惑を破って、悟りを開いていくことをいう。

神力品に云く「於我滅度後・応受持斯経・是人於仏道・決定無有疑」　神力品第二十一（五八四ページ）には「我が滅度の後に於いて、斯の経を受持すべし、是の人仏道に於いて、決定して疑い有ること無けん」とある。「我が滅度の後」とは末法、斯の経とは南無妙法蓮華経である。末法において、大御本尊を受持する者は、必らず仏道を成就し、永遠の生命を会得し、絶対の幸福境涯を獲得することができるとの意味である。

護とは唯我一人能為救護・念とは毎自作是念是なり　譬喩品第三（一三三ページ）に「今此の三界は、皆是れ我が有なり、其の中の衆生は、悉く是れ吾が子なり、而も今此の処は、諸の患難多し、唯我れ一人のみ、能く救護を為す」とある。また寿量品

第十六の自我偈の冒頭（五一〇ページ）には「毎に自ら是の念を作さく、何を以ってか衆生をして、無上道に入り、速かに仏身を成就することを得せしめんと」とある。日蓮大聖人が末法の救世主として、一切衆生を救護されることが護念の「護」であり、大聖人が、一切衆生を救おうと思われる大慈大悲の一念が護念の「念」なのである。

日蓮は生年卅二より　建長五年四月二十八日、御年三十二歳で立宗宣言をされて以来。

通解

これは、序品第一の「諸の菩薩の為に、大乗経の、無量義、教菩薩法、仏所護念と名づくるを説きたもう」とあるところの、「仏所護念」についての御義口伝である。

文句の第三に「仏所護念とは、無量義がことごとく妙法蓮華経の一法より生ずるということを感得した無量義処三昧という境涯は、仏のみ証得したものである。そこで如来はこれを護念したもうのである。ゆえに下の文には〝仏は自ら大乗に住したまえり〟とあり、仏はすでに妙法蓮華経を証得しており、大乗の境涯に住していたのである。この妙法を開き示そうとしたが衆生の機根が鈍根であるので、いきなり法華経を説かず、四十余年の長いあいだ黙っていたので、護念というのである」と。それを受けて記の三には「昔の経、すなわち四十余年の間には妙法蓮華経を説かなかったので、このことを名づけて『護』というのである。法の立ち場から論じ、衆生の機根の立ち場から論じ、皆護念したがゆえに。乃至、機根がまだ薫発しておらず、仏は妙法を秘し隠して説かなか

ったので護念というのである。乃至未だ出世の本懐たる法華経を説かなかったことを護という。外に向かって説かず内に念じていたので念というのである。文句に〝久しく斯の要を黙して〟とあるが、その〝久しく黙して〟ということは釈尊が三十成道してから法華経の説時まで四十余年の長い期間を指すのである。また〝斯の要〟というのは、妙法こそ一切経の根本であり、要中の要であるので、このように言っているのである。そのことをよくよく考えなさい」と。

御義口伝には次のように仰せである。この三世の諸仏が一同に護念してきたところの本体は何かといえば、それは、爾前経に相対すれば本迹二門であり、さらに一重立ち入ってみれば、南無妙法蓮華経の五字七字である。この護念については、七種類の護念がある。一に時に約し（「約す」とは「その立場から論ずる」という意味）、二には機に約し、三には人に約し、四には本迹に約し、五には色心に約し、六には法体に約し、七には信心に約すのである。今日蓮大聖人およびその門下は、護念の体たる三大秘法の南無妙法蓮華経をひろめているのである。

さて、一に時に約すとは、仏が法華経を四十余年のあいだ、時がまだ来ていなかったので護念したのである。二に機に約すとは、方便品に「法を破して信ぜざるが故に、三悪道に墜ちなん」とあるように、機根がととのっていなければ法華経を説いても、かえって信ぜず、毀謗して、三悪道の苦しみを受けざるを得ないという結果になるので、前四十余年のあいだ法華経を説かなかったのである。三に人に約すとは、法華経を理解できる舎利弗の出現を待って護念したのである。四に本迹に約すとは、護は本門であり、念は迹門である。すなわち、身をもって護り切るということは実践であり、本門である。護ろうと念ずることは、心の中で思うことであり、迹門な

のである。五に色心に約すとは、護とは実際の行動であり、あらわれたる姿であるゆえに色となる。念とは精神活動であり、心である。六に法体に約すとは、法体とは生命の本質であり、妙法のことである。一切衆生はことごとく妙法の当体であり、永遠の生命なのである。妙法を唱えることによって、わが生命のなかにあった仏界という、力強き大生命が湧現し、大いなる慈悲心が生ずるのである。この永遠につづく、力強い大生命の実体、慈悲に満ちみちた生命の本質が一切衆生にあるということを四十余年間護念して説かなかったのである。七に信心に約すとは、信心をもって護念の根本とするのである。信心がなければ、護念した本体を証得することができない。すなわち、われ仏なりと開悟することができないからである。

所詮、日蓮大聖人およびその門下が、南無妙法蓮華経と唱え奉ることは、護念の体たる妙法を開き、われ仏なり、われ事の一念三千の当体なりと開悟することになるのである。護とは、身をもって護ることであり、仏見である。念とは大御本尊を念ずることであり、仏知である。この仏界を知見するということを本門、迹門の両門に説かれているのである。

また仏知を「妙」といい、仏見を「法」というのである。すなわち、妙は仏界、法は九界である。すなわち、大御本尊に題目を唱えることは、仏の智慧を感ずるゆえに、仏知である。また仏の生命そのものをわが身に感得していくのであるから仏知である。それが源泉となり、慈悲心が湧き、生命力が湧き、功徳が湧いてくるのであるから妙である。仏見ということは、事実の生活のうえで功徳の生活をしていく現実の姿であり、現象であるから法なのである。

この知見の体である妙法を修行することによって成仏することができる。修行するということは因であり、成仏は果である。ゆえに南無妙法蓮華経と唱えるときに、未来のありとあらゆる福運はこの瞬間に含まれるのである。この因果倶時の生命活動の本質を蓮華というのである。因果の体とは大御本尊であり、また、境智冥合の原理によって、われわれの生命が因果の当体である。妙法を唱えるその声は経であると同時に、大御本尊を受持した生活の一切の言々句々は、ことごとく妙法のあらわれであり、経なのである。いっさいの三世の諸仏は、たんに妙法蓮華経を護念するだけでなく、末法の法華経の行者である日蓮大聖人を護念するのである。御義口伝巻下の「寿量品廿七箇の大事」にいわく「本尊とは法華経の行者の一身の当体なり云云」（七六〇㌻）と。信心の立ち場からいえば、身、口、意の三業で修行していく者を、やはり三世の諸仏が護念するのである。

普賢品には「一には諸仏に護念せらるることを為」とある。これは、末法において法華経を持つ者は、諸仏に護念されることになるのである。もとより護念とは妙法蓮華経を護念することである。しかし、三世十方の諸仏が法華経の行者を護念することが、即妙法蓮華経を護念することになるのである。機すなわち人と、法とは、一同であり、三世十方の諸仏は法を護念すると同時に、人をも護念するのである。記の三の釈に「法に約し機に約して皆護念する故に」といっているのもこの意味なのである。

また文句の三にいわく「仏所護念とは序品の〝普仏世界六種に震動す〟の文に示されている地動瑞を決定しているのである。地動瑞は、六番破惑といって、十住、十行、十回行、十地、等覚、妙覚と六段階に無明惑を破って悟りを開いていくこと、また生命論からいえば、六根の惑いを断ち切ることをあらわすのである。妙法蓮華経を

受持する者は、無明即法性とあらわれ六番破惑は疑いないことである」と。また神力品にいわく「我が滅度の後に於いて、斯の経を受持すべし、是の人仏道に於いて、決定して疑い有ること無けん」と。これ、末法において大御本尊を受持する者は、必ず仏道を成就し、絶対の幸福を得ることは疑いのないことの御断言である。方便品に「仏は自ら大乗に住したまえり」とあるのは、このことをいっている。仏とは日蓮大聖人であり、人である。大乗とは南無妙法蓮華経であり、法である。ゆえに人法一箇なのであり、人法ともに護念されるのである。

また、別の角度からいえば、仏が衆生を護念するということは、護とは譬喩品の「唯我れ一人のみ、能く救護を為す」とあるごとく、日蓮大聖人が一切衆生を救護されることが護念の護である。また念とは寿量品に「毎に自ら是の念を作さく、何を以ってか衆生をして、無上道に入り、速かに仏身を成就することを得せしめん」とあるように、大聖人が一切衆生を救おうという大慈大悲の一念が護念の念なのである。これを普賢品にきて「一には諸仏に護念せらるることを為」と説いておられるのである。日蓮大聖人は、三十二歳の立宗宣言以来、南無妙法蓮華経を護念遊ばされてきたのである。

講義

現代の日本には、この仏所護念を、まるで見当違いな読み方をする教団がある。仏所護念の「仏」を「死んだ先祖」と立て、先祖がわれわれを護念するというのである。霊友会や仏所護念会等がそのたぐいである。彼ら

はまず、「先祖が仏である」という、仏法に関して根本的にあやまった通念を、無反省に取り入れている。第二に、仏所護念とは「説大乗経。名無量義。教菩薩法。仏所護念」または「説大乗経。名妙法蓮華。教菩薩法。仏所護念」と説いている、一連の句に通ずることを知らないのである。読めないのである。第三に、「護念」の意味が全くわかっていない。この文が、いかに妙法が甚深の教義であるかという実証のところなるかも知らないのである。そして、日本人の先祖崇拝の精神的伝統を利用し、法華経の文の何かを引っぱってくれば、深遠なる教義かのごとく錯覚をしてしまう、民衆の無知につけこみ、陰険と策謀の手によって、人々をごまかして来たことは、明瞭なる事実といえよう。無知より恐ろしきものはない。無知よりあわれなものはない。

第二代戸田会長は、彼らの法盗人ぶりを指摘して、次のように明快に破折されている。

「世間に、今大流行をしている宗教がある。この宗教は南無妙法蓮華経と唱えるから、知らない人々は、日蓮宗だと思っている。信者自身も、日蓮宗とはこんなものかと信じているものが大多数である。その理由は、ただ南無妙法蓮華経と唱えるからである。しかし、その教義は、日蓮大聖人の教えなど、毛ほども用いていない。信者は、まず先祖をまつれ、死者のイハイを拝めと教えられる。そして、お導きと称して、信者を二十五人から五十人と作ったものは、利益があるとせられている。だから、『ねずみ算』式に、信者はどんどんふえる。もうかるのは本部だけで、信者の方は、真の仏教でないデタラメなものに夢中になるから、宗教の原則によって、だんだんと生命力をなくしてしまう。そして、かれらのいうには、『法華経』にある教えだと称して、恥としないのである。なぜ先祖をまつるかというと、『仏所護念』ということが、法華経にある。これは仏が信者を護ること

だ。仏とは、とりわけ先祖であり、死者のことだから、どこのイハイでも拝むなら、その死んだ人、死んだ先祖は、拝むその人を護るのであるというのが、ただ一つの教義である。

『仏様とは死人のことをいう』と、俗世間では思いこんでいるものが多いのは事実だから、これを利用して、愚人に、『死んだ人即仏で、仏を拝めば利益がある。それは法華経の仏所護念の経文による』と思いこませているのである。仏所護念が、一番大事な金カンバンである。もし、釈迦が、これを聞いたら怒ることを忘れて、呆然として、しかる後、大いにふき出すであろう。日蓮大聖人がお聞きになったら、『世も末』と、ただ一言仰せあるにちがいない。法華経のなかに、仏所護念ということばは、数個所にあるが、これは、『説大乗経。名妙法蓮華。教菩薩法。仏所護念』という一連の句をなしているので、仏所護念だけで意味をなしているものではない。全体が一文をなしているのである。すなわち妙法蓮華経と名づけたてまつる大乗経であって、菩薩に教える大事な経であり、三世諸仏（決して死人ではない）すなわち仏になられた方々が、心から護り念じてきた経であるとの意味なのである。

仏所護念は仏道修行の極致にいたり、人格が大完成して、あらゆる人を救う力のある、たとえば釈尊のような仏様を意味しているので、しかも、この仏が護り念じているのは、妙法蓮華経なんだという意味であって、この邪教の教えるがごとき意味は微塵もない。先祖のイハイを拝んだとて、先祖が仏になっていないことは自明の理である。餓鬼界にいるか、地獄界にいるか、修羅界にいるか、六道のどの世界かにいる先祖だけを拝むなら、その先祖がその人を護るどころか、自分を救ってくれ、と言うにちがいない。ところが、こちらでは、仏法をもじ

っているから、救うどころの騒ぎではない。そこで、先祖の苦しい境涯とこちらの念が感応して、その人の生命をなくしていくのである。ここに、その人の不幸の原因をつくっていくので、ほんとうに、かわいそうなのは、知らず、幸福になると思って不幸におちいる信者である。

これを要するに、『先祖をまつる』ということは、長い間の人類の習慣であって、『まつる』こと自体は、いっこうに不思議でもないし、悪くもない。ただ問題は、『まつる方法』にあるのだ。いまだ吾人の記憶になまなましいことは、戦時中に、敬神崇祖といって、日本国民全体に神社の礼拝を強制して、それが、超国家主義、軍国主義と結託していた当時も、『祖先を崇める』ことに変わりはなかった。しかし、このような祖先のまつり方では、決して幸福になれないことは、現実に実証されたのだ。いま、また、『先祖をまつれ』といって宣伝し、仏教教典になんらの根拠もないインチキの教えをふりまいている状態を見て、さらに、無智の大衆が、なんらの批判もなしに、これが日蓮大聖人の真の教えであるかのように眩惑されているのを見て、吾人は、だまっておられないのである。邪教の理論的詐術を知らぬ愚人こそ、吾人は哀れと思わざるをえない」（巻頭言集）と。

また「護念」とは、われわれの日常生活にも必ず考えられるものだ。大学にあって、教授が、学生を、立派に育てようとする真剣な心は、一種の護念といえよう。母親が、常に子供の安否を心配し、幸いのみを願っている心境も、護念である。恋人が、互いに護りあい、励ましあう姿も、それなりの護念のあらわれだと思う。世間のことすら、大なり小なり、実に護念の方程式は多い。いわんや、仏法の世界は当然なことといえる。八万法蔵の極理たる、法華経をば、時の来るまで護念したということは、これを、日蓮大聖人の立ち場で論ずれば、大聖人

は、建長五年四月二十八日に、南無妙法蓮華経を、立宗宣言遊ばされた。直ちに、三類の強敵が雲のごとく押し寄せて来た。時を待たず大御本尊を図顕（ずけん）しておられたら大変であったと思われる。すぐさま、破ったり流されたりされたことだろう。佐渡にゆかれるまで、大御本尊の図顕建立をば、一切衆生を、地獄に落とさぬため、護念してくださったと解釈できるわけである。また、われわれの信心の立ち場からいえば、われわれは、生涯、永遠に大御本尊を護念する信心でなくてはならないと思う。絶対に御本尊を護念しきって、瞬時たりとも御本尊を離さないで、そして広宣流布を成し遂げようというのが、学会精神であり、大聖人のまことの弟子として、仏所護念を読みきった、大信者といえると思うのである。

第五　下至阿鼻地獄の事

本文

第五下至阿鼻地獄の事

御義口伝に云く十界皆成の文なり提婆が成仏此の文にて分明なり、宝塔品の次に提婆が成仏を説く事は、二箇の諫暁の分なり、提婆は此の文の時成仏せり此の至の字は白毫の行く事なり白毫の光明は南無妙法蓮華経なり、上至阿迦尼吒天は空諦・下至阿鼻地獄は仮諦・白毫の光は中道なり、之に依って十界同時の成仏なり天王仏とは宝号を送るまでなり、去て依正二報の成仏の時は此の品の下至阿鼻地獄の文は依報の成仏を説き提婆達多の天王如来は正報の成仏を説く依報正報共に妙法の成仏なり、今日蓮等の類い聖霊を訪う時法華経を読誦し南無妙法蓮華経と唱え奉る時・題目の光無間に至りて即身成仏せしむ、廻向の文此れより事起るなり、法華不信の人は堕在無間なれども、題目の光を以て孝子法華の行者として訪わんに豈此の義に替わる可しや、されば下至阿鼻地獄の文は仏・光を放ちて提婆を成仏せしめんが為なりと日蓮推知し奉るなり。

語訳

下至阿鼻地獄　序品第一（一二四ページ）に「爾の時に仏、眉間白毫相の光を放ちて、東方万八千の世界を照らしたもうに、周徧せざること靡し。下、阿鼻地獄に至り、上、阿迦尼吒天に至る」とある。

阿鼻地獄　阿鼻は梵語、「無間」と訳す。無間地獄のこと。地獄界のもっとも底にあるとされ、正法誹謗の者、五逆罪を犯した者が、この地獄に堕ちるといわれる。顕謗法抄（四四七ページ）にくわしい。

十界皆成　十界がことごとく成仏するということ。

提婆が成仏此の文にて分明なり　提婆達多は地獄界をあらわす。地獄界を代表する提婆達多の成仏は、この「下至阿鼻地獄」の文に明らかである。

提婆　提婆達多、調達ともいい、訳せば天熱、天授。提婆は斛飯王の子、阿難の兄、釈尊のいとこにあたる。釈尊の弟子となり、神通を学び学道進んだが、心が憍慢で虚栄利欲の俗念が強く、後に釈尊に怨嫉して三逆罪を犯した。すなわち第一に釈尊の和合僧団を破り五百の弟子を奪った。第二に出仏身血で、山上より大石を落とし釈尊の足指を傷つけた。第三に殺阿羅漢で、蓮華色比丘尼を拳をもって打ち、即死させた。また阿闍世をそそのかし父の頻婆沙羅王を殺させ、釈尊に敵対させた。後に提婆は王舎城のなかで、大地破れて落ち、生きながら地獄にはいった。しかし釈尊は法華経提婆達多品で過去の因縁を説き、過去世に提婆は阿私仙人といい、その時国王であった釈尊は王位を捨て阿私仙人に千年仕えて成仏したとし、提婆が善知識なるゆえんを説き、成仏の記別を与え天王如来とした。法華経で初めて悪人成仏を説いたのである。

宝塔品の次に提婆が成仏を説く事は二箇の諫暁の分なり　提婆達多の成仏は、すでに序品のこの「下至阿鼻地獄」の文のとき

に明らかなのである。したがって、あらためて提婆の成仏を説く必要はないようであるが、宝塔品の次の提婆品で提婆達多が天王如来の記別をうけ成仏したということは、二箇の諫暁の分としてなのであるとの意味。提婆品に「我をして……等正覚を成じて、広く衆生を度すること、皆提婆達多が善知識に因るが故なり……提婆達多、却って後、無量劫を過ぎて、当に成仏することを得べし。号を天王如来……世界を天道と名づけん」（四二四㌻）とある。二箇の諫暁とは、釈尊が、提婆達多および竜女の成仏によって、いかにこの法華経がすばらしいかということを示し、宝塔品の三箇の勅宣にひきつづき、滅後における弘教をせよと宣言していることをいうのである。

二箇の諫暁　提婆品における二大法門をいう。一には釈尊の弘経・提婆達多の成道、二には文殊の通経・竜女の作仏である。悪逆の限りをつくして現身に地獄におちた提婆達多が、釈尊の仏法によって成仏したことは、煩悩即菩提の現証であり、悪人成仏を説いたものである。また、竜王の女・竜女が成仏したことは、女人成仏を説いたものである。いずれも、衆生に対し、法華経の救済力の偉大さを示し、感奮興起させる大諫暁である。

白毫　白毫相は、仏の三十二相の一つ。仏の眉間には白玉の繊毛がある。これを白毫という。清浄にして柔軟であり、右に旋回して、たえず光りを放つとされている。

阿迦尼咤天　梵語で、阿迦は「色」、尼咤は「究竟」の意。色究竟天のこと。色界十八天のうち、最上位にある天。有頂天ともいう。

空諦・仮諦・中道　空仮中の三諦である。「諦」とは「審諦」、すなわち「つまびらか」または「あきらか」という意味で、じゅうぶんに実相を見ることである。仏の悟りの真実の理をいう。空諦は、事物の性分、仮諦は事物のあらわれた姿、形、中道は事物の本質である。人間生命でいえば、その人の性分、心は空諦であり、その人の姿、形は仮諦、その人の生命は中道である。三身でいえば、空諦は報身、仮諦は応身、中諦は法身である。講義参照。

天王仏とは宝号を送るまでなり　提婆達多は、提婆品で天王如来の記別を与えられたが、実は序品のとき、すでに提婆は成仏していたのである。提婆品では天王如来という宝号を送ったにすぎないということ。

依正二報の成仏　依報と正報。正報とは、果報の主体で衆生の身であり、依報とは、正報の所依となる非情の草木国土をいう。依正は二にしてしかも不二である。瑞相御書（一一四〇㌻）に「夫十方は依報なり・衆生は正報なり譬へば依報は影のごとし正報は体のごとし・身なくば影なし正報なくば依報なし・又正報をば依報をもって此れをつくる」とある。また諸法実相抄（一三五八㌻）に「依報あるならば必ず正報住すべし」とあるように、いっさいの現象、事物のすがたには、依報、正報があり、その究極に存在する依正不二の当体が妙法蓮華経である。依報正報は同時に成仏する。

聖霊　死者の生命。ここでは、御本尊に結縁してなくなった人の生命を指している。

廻向　回向とも書く。回転趣向という意。すなわち、みずからが仏道修行をして得たところの功徳を、回し転じて、衆生に向けてほどこし与えることをいう。三大秘法の御本尊に唱題し、その功徳を、父母、兄弟、先祖等の菩提のために回し向けることである。

通解

序品第一において、仏が、諸の菩薩のために「大乗経の、無量義、教菩薩法、仏所護念」と名づくる法を説き、それが終わって、無量義処三昧にはいり、身心を動じなかった。その時に天からは曼陀羅華、摩訶曼茶羅華、曼殊沙華、摩訶曼殊沙華がふり、大地は六種に震動した。一座の大衆は、この未曾有の事実をみて、歓喜

し、合掌して、一心に仏を見奉らんとしたのである。その時釈尊は三十二相の一つである白毫相の光りを放って、東方の一万八千の世界を照らし、その光りはあまねく行き渡り、下は阿鼻地獄に至り、上は阿迦尼吒天にいたったとある。今はこの白毫の光りが下は阿鼻地獄にいたり、上は阿迦尼吒天にいたったということを御義口伝されたのである。いったい白毫の光りとはなにか。また、その光りが阿鼻地獄にいたったとは、どういうことなのか。また阿迦尼吒天にいたったとは、どういうことなのであろうか。ここでは、十界互具、三諦、依正不二といった生命論のうえから明かされているのである。

大聖人の御義口伝には、次のように仰せである。この文は十界の衆生が、皆ことごとく成仏するという証文である。提婆達多の成仏はこの文で明らかである。宝塔品の次に提婆品で提婆達多が天王如来と成仏の記別を与えられたことは、竜女の成仏とともに、宝塔品の三箇の勅宣にひきつづいて二箇の諫暁の分として説かれたのである。

提婆達多は、この「下至阿鼻地獄」の文のときすでに成仏したのである。「至」の字は白毫の光りが行くことを指す。白毫の光明とは南無妙法蓮華経なのである。「上至阿迦尼吒天」は空諦、「下至阿鼻地獄」は仮諦、「白毫の光」は中道である。これによって十界同時の成仏であることが明かされている。提婆品では天王如来という宝号を与える儀式を行なったのにすぎず、実際には、この序品のときすでに仏となったのである。さて、依正の二報の成仏ということで論ずるときは、この序品に説かれている「下至阿鼻地獄」の文は、依報の成仏を説き、提婆品において、提婆達多が天王如来という宝号を与えられたことは、正報の成仏を説いているのである。このように正報の成仏、依報の成仏と立て分けるけれども、依正不二であり、依正ともに南無妙法蓮華経によって成

仏したのである。

今、日蓮大聖人およびその門下が、大御本尊に結縁してなくなった人を法華経方便品第二、寿量品第十六を読誦し、南無妙法蓮華経と唱えて追善供養する時、題目の光りが無間地獄に至って、即身成仏することができる原理である。廻向の文はこれより事起こるのである。また、法華不信の人は、無間地獄におちて苦しまなければならない。しかしながら、孝子が正しい仏法によって追善供養してあげるならば、この原理にかわりはなく、抜苦与楽できるのである。したがって「下至阿鼻地獄」の文は、仏が光りを放って、提婆達多を成仏させようとなされたと、日蓮大聖人は推知されているのである。

講義

宝塔品の次に提婆が成仏を説く事は二箇の諫暁の分なり

宝塔品には「三箇の勅宣」といって、滅後において妙法蓮華経を弘経せよという宣言がある。それに引き続いて、提婆品で、提婆達多と竜女の成仏が明かされ、法華経こそ真の孝経であり、真の仏弟子たらんとする者は、この経をひろめよと諫暁したのである。

宝塔品の「三箇の勅宣」と提婆品の「二箇の諫暁」とを合わせて「五箇の鳳詔」といい、それによって、勧持

品において迹化の衆が滅後の弘経を誓うのである。（むろん、これらの迹化の衆は、涌出品（四七二ページ）で「止みね善男子、汝等が此の経を護持せんことを須いじ」と、制止されているのであるが）さて、宝塔品（四一〇ページ）にいわく「爾の時に多宝仏、宝塔の中に於いて、半座を分ち、釈迦牟尼仏に与えて……、爾の時に大衆、二如来の、七宝の塔中の、師子座の上に在して、結跏趺座したもうを見たてまつり……大音声を以って、普く四衆に告げ給わく、誰か能く此の娑婆国土に於いて、広く妙法蓮華経を説かん。今正しく是れ時なり。如来久しからずして、当に涅槃に入るべし。仏此の妙法華経を以って付属して在ること有らしめんと欲す」と。これは第一の勅宣である。

またいわく「爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、聖主世尊、久しく滅度したもうと雖も、宝塔の中に在して、尚法の為に来りたまえり、諸人云何ぞ勤めて、法の為にせざらん……又我が分身、無量の諸仏、恒沙等の如く、来れるは法を聴き……各妙土、及び弟子衆、天人竜神、諸の供養の事を捨てて、法をして久しく住せしめんが故に此に来至したまえり……譬えば大風の、小樹の枝を吹くが如し、是の方便を以って、法をして久しく住せしむ、諸の大衆に告ぐ、我が滅度の後に、誰か能く、斯の経を護持し読誦せん、今仏前に於いて、自ら誓言を説け」と。これは第二の鳳詔である。

また「多宝如来、及与我が身、集むる所の化仏、当に此の意を知るべし……諸の善男子、各諦かに思惟せよ此れは為れ難事なり、宜しく大願を発すべし、諸余の経典、数恒沙の如し、此等を説くと雖も、未だ難しと為す に足らず、若し須弥を接って、他方の、無数の仏土に擲げ置かんも、亦未だ難しと為ず……若し仏の滅後に、悪

世の中に於いて、能く此の経を説かん、是れ則ち難しとす……仮使劫焼に、乾れたる草を担い負って、中に入って焼けざらんも、亦未だ難しと為ず、我が滅度の後に、若し此の経を持ちて、一人の為にも説かん、是れ則ち難しとす……諸の善男子、我が滅後に於いて、誰か能く、此の経を受持し読誦せん、今仏前に於いて、自ら誓言を説け」と。これは第三の諫勅である。

提婆品の二箇の諫暁については、開目抄（二二三ページ）に次のごとく仰せである。

「宝塔品の三箇の勅宣の上に提婆品に二箇の諫暁あり、提婆達多は一闡提なり天王如来と記せらる、涅槃経四十巻の現証は此の品にあり、善星・阿闍世等の無量の五逆・謗法の者の一をあげ頭をあげ万ををさめ枝をしたがふ、一切の五逆・七逆・謗法・闡提・天王如来にあらはれ了んぬ毒薬変じて甘露となる衆味にすぐれたり、竜女が成仏此れ一人にはあらず一切の女人の成仏をあらはす、法華已前の諸の小乗教には女人の成仏をゆるさず、諸の大乗経には成仏・往生をゆるすやうなれども或は改転の成仏にして一念三千の成仏にあらざれば有名無実の成仏往生なり、挙一例諸と申して竜女が成仏は末代女人の成仏往生の道をふみあけたるなるべし、儒家の孝養は今生にかぎる未来の父母を扶けざれば外家の聖賢は有名無実なり、外道は過未をしれども父母を扶くる道なし仏道こそ父母の後世を扶くれば聖賢の名はあるべけれ、しかれども法華経已前等の大小乗の経宗は自身の得道猶かなひがたし何に況や父母をや但文のみあって義なし、今法華経の時こそ女人成仏の時・悲母の成仏も顕われ・達多の悪人成仏の時・慈父の成仏も顕わるれ、此の経は内典の孝経なり、二箇のいさめ了んぬ」と。

すなわち、悪人提婆達多の成仏は、独り彼の成仏のみでなく、すべての悪人の成仏を意味し、また竜女の成仏

は、全女人の成仏を示すものであると仰せられているのである。

白毫の光明は南無妙法蓮華経なり

白毫相は三十二相の一つである。三十二相とは、仏の理想的姿を示したものである。しかし、眉間から光りが放たれ、その光りが、あまねく、ありとあらゆる世界に行き渡るなどということは、そのまま事実として考えることはできない。三十二相とか八十種好とかいうのは、その当時の衆生にとって、おそらく、仏は理想人格として、すべてが尊貴に、輝かしく見えたにちがいない。それが衆生の心のなかに、三十二相として映じたものであろうか。

戸田城聖先生は、「色相荘厳の仏」と「凡身の仏」について次のようにいわれている。

「さて色相荘厳の仏と凡身の仏については、以上のごとく説かれて現在までの仏法においては、不思議とされてはいない。しかし現代人がこの色相荘厳の仏について言葉通りにこれを信じようとしたならば、無理が起こってきはしないだろうか。いかに三千年の昔であったとしても、そんな仏がいるべきはずがない。されば、これについて私に会通を加えるのであるが、それに誤りあらば識者の教を乞うものである。そもそも色相荘厳の仏とは理想人格である。このような色相荘厳の仏がいるとして、それを民衆に渇仰せしめてその渇仰より己身の仏界、宇宙の仏界を知らしめんとしたものである、咸皆懐恋慕而生渇仰心はこれではないか。

されば釈尊に六種の釈尊ありというが、その六種の釈尊とは蔵、通、別、迹、本、文底の釈尊である。蔵教の

釈尊とは蔵教の理想的人格、通教の釈尊は通教の理想的人格であり、別教の釈尊とは別教の理想的人格であり、迹門の釈尊とは迹門の理想的人格であり、本門の釈尊は本門の理想的人格であり、文底下種の釈尊は下種仏法の理想的人格である。

さて末法は下種仏法の時代であるから、その理想的人格とは凡身に仏界を具した方となってくるのは当然である。されば蔵通別迹本の仏が、色相荘厳であるということは、とうてい普通凡夫の達し得ない人身で只理想とするだけである。どうして末法の今日に役立とうか。これに反して末法下種の仏法の理想的の人格は凡夫の体そのままの絶対不壊の幸福を獲得するのを云うのであるから、誰人もこれに到達することができる可能性がある。大聖人の御義口伝（七五二ページ）にいわく『今日蓮等の類いの意は惣じては如来とは一切衆生なり別しては日蓮の弟子檀那なり』またいわく『六即の配立の時は此の品の如来は理即の凡夫なり』

即ち理想的人格とは末法の仏法においては色相荘厳の仏のごとく煩悩を破り、また貪瞋癡の三毒をなくすというようなことではなくて、煩悩、三毒を持ちながら戒も持たず威儀も修せずありのままなのである。ゆえに凡身である。しかし その煩悩三毒に悩まされない永劫不滅の絶対観を獲得するのであるから、これ理想的人格といえるのである。ここに色相荘厳の仏と凡身の仏との相違がある。されば凡身の仏こそ末法の仏と断ぜざるを得ないのである」と。

それでは、この白毫の光りを、今日、われわれの生活に約して、どのように考えたらよいであろうか。ここに日蓮大聖人は「白毫の光明は南無妙法蓮華経なり」と仰せられているのである。すなわち、われわれが南無妙法

蓮華経と唱えることは、仏の知見に立脚することであり、いっさいを見通していけるのである。その証拠として、厳然と生活の上に功徳が出るではないか。またどんな苦境をも、そのなかに打開策を見出だし、切り開いていけるではないか。この、いっさいを見通していく根源力が、白毫の光りであり、南無妙法蓮華経なのである。さらにくわしくは宝塔品の「第八南西北方四惟上下の事」で論ずることにする。

上至阿迦尼吒天は空諦・下至阿鼻地獄は仮諦・白毫の光は中道なり

阿迦尼吒天とは、全宇宙を指す。ゆえに空諦である。現実の苦しみの相たる下至阿鼻地獄は仮諦である。そして大宇宙に遍満し、わが身の上にも強くにじみ出ている生命の本質を白毫の光りにたとえているがゆえに、白毫の光りは中道である。

この空仮中の三諦についての大聖人の仰せは、枚挙にいとまがない。いま一文をあげれば、十如是事（四一〇ページ）にいわく、

「初めに如是相とは我が色形に顕れたる相を云うなり是を応身如来とも又は解脱とも又は仮諦とも云うなり、次に如是性とは我が心性を云うなり是を報身如来とも又は般若とも又は空諦とも云うなり。三に如是体とは我が此の身体なり是を法身如来とも又は中道とも法性とも寂滅とも云うなり、されば此の三如是を三身如来とは云うなり此の三如是が三身如来にておはしましけるを・よそに思ひへだてつるがはや我が身の上にてありけるなり、かく知りぬるを法華経をさとれる人とは申すなり此の三如是を本として是よりのこりの七つの如是はいでて十如是

とは成りたるなり」と。

三諦というのは、なにも有情にのみ限るのでは決してない。有情、非情ともに三諦をそなえているのである。否、全宇宙の森羅万象ことごとく三諦におさまるのである。たとえば、水について考えてみよう。水の本質というものは、H_2O という分子式であらわされる。お湯になろうが、氷になろうが、または水蒸気になろうが、そのものの本質には変わりない。H_2O それ自体は、中道であり、法身といえよう。水蒸気となり、あるいは氷となり、あるいは冷水となる、その姿、形は仮諦であり、応身である。また、水は、表面張力があり、あるいは、溶解力があり、そしてまた、零度以下では氷になり、百度以上では水蒸気になる等の性質をもつ。それは、空諦であり、報身といえる。

三諦は、宇宙の実相である。実相をありのままに把握することが正しい認識である。実相をそのままわが心に受けとめ、それに対しどう価値創造していくか、どう対処するか、それが智慧である。人をどう評価していくかという場合も、まず、その人に対する正しい認識なくして、どうして正しい判断が下しえようか。その人の表面の姿、行動のみを見、その人の本質を見失えば、判断を誤る。また、その人の本質はこういうものだときめつけて、時々刻々と移り変わる姿、行動を、ありのままに把握しないとすれば、やはり正しい認識とはいえない。その人の姿、行動も、その人の特質、個性も、その人の本質も、ぜんぶ、そのままを受けとめることが大事となる。

天台は、宇宙の実相を「三諦」として見ていくことを「三観」といい、観念観法の修行を強調した。しかし、

末法においては、観念観法などは必要なく、受持即観心の原理により、信心を根本にして、いっさいを見通していけるのである。

ゆえに日蓮大聖人は、本因妙抄（八七六㌻）に、伝教のことばを引いて「一刀を下して妙法万方に勅するに自然に由お三諦を出だす見聞覚知に明なり」と仰せられている。

「一刀を下して」とは信心である。「万方に勅するに」とは、信心をもっていっさいを見ていくことである。「自然に由お三諦を出だす」とは、妙法の境涯に叶い、宇宙の実相を、なんら偏ぱなく、ありのままに見ていけることをいうのである。「見聞覚知に明なり」とは、見るもの、聞くもの、覚るもの、知るもの、ことごとく、そのまま、わが生命の中に写し出し、明らかに見究めていくことである。その上に立って、初めて、偉大な価値創造、文化創造がなされゆくと信じて止まない。

去て依正二報の成仏の時は此の品の下至阿鼻地獄の文は依報の成仏を説き提婆達多の天王如来は正報の成仏を説く依報正報共に妙法の成仏なり

この段は、依正不二の哲理を示されたところである。白毫の光りが、阿鼻獄におよび、即座に常寂光土に転ずるをいう。これ依報の成仏を明かしている。提婆品においては、提婆自身が成仏するゆえに、これ正報の成仏を明かすことになる。しかも「提婆が成仏此の文にて分明なり」とあるのは、依正不二の原理をあらわしているといえる。なお「依報正報共に妙法の成仏なり」というのも、依正不二を説き明かしていると考えられよう。結局、

このように考えてみると、依報のみの成仏、正報だけの成仏は、あり得ないことがわかる。依正ともに、成仏してゆくのが、法華経の根本哲理となるのである。

では、ここで、依正不二とは、いかなる哲理であるかを説明したい。瑞相御書（一一四〇㌻）にいわく「夫十方は依報なり・衆生は正報なり譬へば依報は影のごとし正報は体のごとし・身なくば影なし正報なくば依報なし・又正報をば依報をもって此れをつくる（作）」

この文の理論のごとく、正報とは主体的なものであり、依報とはいっさいの環境であり客体的立ち場のものをいう。しかも、依報と正報とは、絶対に切りはなせるものではない。両者は、たがいに影響しあって、渾然一体をなしゆくものである。十方とは、われわれを取りまく客体全部をいう。社会、自然、宇宙等々。ゆえに、われらの生命と環境とは、而二不二であり、一体関係をなすものである。ちょうど、体と影とが不即不離の関係にあるごとくに、常に相離れることができない道理である。

しかして、人間の身体は、外界を構成する種々な元素により形造られている。人間が生存しゆく限り、つねに新陳代謝を行なって、外界のものを取り入れ、また出してゆかねばならない。いま吸った空気は、忽ちにして血液の中に吸収される。摂取した食物や水は、血となり、肉となっていく。そしてまた出ていく。また、われわれの肉体は、一応外界と区別されているようであるが、事実は、穴だらけで、無数の宇宙線が通過している。わが生命と、外界との関係は、実に密接不可分なことがわかろう。

われわれの肉体は、自然の運行にしたがって、夜になるとねむくなり、昼になると活気づく。夏の暑さにも冬

の寒さにも、たえず順応して調整されるようになっている。病気になると、なんとなく陰うつな心になるし、その反対に、われわれの精神活動が活発で生命力が強いときは、難病を克服することもできるし、健康な身体を維持することもできる。それと同じように、人の心がゆがんで醜ければ、家庭や社会も、自然と陰気で殺ばつとしたものになる。逆に、人の住む環境が悪い場合には、そこに住む人間の精神もすさんでくるのである。しかし、そうであるからといって、どんなに環境が完備されたとしても、人間の生命に内在する喜びや悲しみや苦しみを抜本的にはどうすることもできない。また、道徳や精神修養で、人生の根本苦をば治すこともできえない。

われわれの生命（正報）と環境（依報）との関係は、二にして不二なのである。生命力が衰えているばあいには、環境による重圧に耐えかねる自己となり、反対に強い生命力の発動は、環境を意のままに変えて、ゆうゆうたる人生を築く。さらに、一国に正法が流布し、民族自体に活気があるならば、その国は平和であり、隆々と発展するのである。

そして、われわれの一念は、自然現象や宇宙の運行に対しても、依正不二の原理によって、大きく影響をおよぼすことができる。仏法でいう「一身一念法界に遍し」とは、これをいうのである。

法華不信の人は堕在無間なれども、題目の光を以て孝子法華の行者として訪わんに豈此の義に替わる可しや

これは、塔婆供養の方式を述べているところである。題目の力によって、先祖の抜苦与楽となる原理をいうのである。このことについては、烏竜、遺竜父子の話が伝えられている。

法蓮抄（一〇四七ページ）の明文から、思索されたい。

「烏竜と申せし能書は手跡の上手なりしかば人之を用ゆ、然れども仏経に於てはいかなる依怙ありしかども書かず最後臨終の時・子息遺竜を召して云く汝我が家に生れて芸能をつぐ我が孝養には仏経を書くべからず殊に法華経を書く事なかれ、我が本師の老子は天尊なり天に二つの日なし而に彼の経に唯我一人と説くきくわい第一なり、若し遺言を違へて書く程ならば忽に悪霊となりて命を断つべしと云って舌八つにさけて頭七分に破れ五根より血を吐いて死し畢んぬ、されども其の子善悪を弁へざれば我が父の謗法のゆへに悪相現じて阿鼻地獄に堕ちたりともしらず遺言にまかせて仏経を書く事なし況や口に誦する事あらんをや、かく過ぎ行く程に時の王を司馬氏と号し奉る御仏事のありしに書写の経あるべしとて漢土第一の能書を尋ねらるるに遺竜に定まりぬ、召して仰せ付けらるるに再三辞退申せしかば力及ばずして他筆にて一部の経を書かせられけるが、帝王心よからず尚遺竜を召して仰せに云く汝親の遺言とて朕が経を書かざる事其の謂無しと雖も且く之を免す但題目計りは書くべしと三度勅定あり、遺竜猶辞退申す大王竜顔心よからずして云く天地尚王の進退なり、然らば汝が親は即ち我が家人にあらずや、私をもって公事を軽んずる事あるべからず、題目計りは書くべし若し然らずんば、仏事の庭なりといへども速に汝が頭を刎ぬべしとありければ題目計り書けり、所謂妙法蓮華経巻第一・乃至巻第八等云云、其の暮に私宅に帰りて歎いて云く我親の遺言を背き王勅術なき故に仏経を書きて不孝の者となりぬ天神も地祇も定んで瞋り不孝の者とおぼすらんとて寝る、夜の夢の中に大光明出現せり朝日の照すかと思へば天人一人庭上に立ち給へり又無量の眷属あり、此の天人の頂上の虚空に仏・六十四仏ましまします、遺竜・合掌

して問うて云く如何なる天人ぞや、答えて云く我は是れ汝が父の烏竜なり仏法を謗ぜし故に舌八つにさけ五根より血を出し頭七分に破れて無間地獄に堕ちぬ、彼の臨終の大苦をこそ堪忍すべしともおぼへざりしに無間の苦は尚百千億倍なり、人間にして鈍刀をもて爪をはなち鋸をもて頸をきられ炭火の上を歩ばせ棘に籠められなんどせし人の苦を此の苦にたとへば・かずならず、如何してか我が子に告げんと思いしかどもかなはず、臨終の時・汝を誡て仏経を書くことなかれと遺言せし事のくやしさ申すばかりなし、後悔先にたたず我が身を恨み舌をせめしかども・かひなかりしに昨日の朝より法華経の始の妙の一字・無間地獄のかなへの上に飛び来って変じて金色の釈迦仏となる、此の仏三十二相を具し面貌満月の如し、大音声を出して説て云く『仮令法界に遍く善を断ちたる諸の衆生も一たび法華経を聞かば決定して菩提を成ぜん』云云、此の文字の中より大雨降りて無間地獄の炎をけす閻魔王は冠をかたぶけて敬ひ獄卒は杖をすてて立てり、一切の罪人はいかなる事ぞとあは てたり、又法の一字来れり前の如し又蓮・又華・又経・此くの如し六十四字来って六十四仏となりぬ、無間地獄に仏・六十四体ましませば日月の六十四が天に出たるごとし、天より甘露をくだして罪人に与ふ、抑此等の大善は何なる事ぞと罪人等仏に問い奉りしかば六十四の仏の答に云く我等が金色の身は栴檀宝山よりも出現せず是は無間地獄にある烏竜が子の遺竜が書ける法華経八巻の題目の八八・六十四の文字なり、彼の遺竜が手は烏竜が生める処の身分なり、書ける文字は烏竜が書くにてあるなりと説き給いしかば無間地獄の罪人等は我等も娑婆にありし時は子もあり婦もあり眷属もありき、いかに・とぶらはぬやらん又訪へども善根の用の弱くして来らぬやらんと歎けども歎けども甲斐なし、或は一日・二日・一年・二年・半劫・一劫になりぬるにかかる

善知識にあひ奉って助けられぬるとて我等も眷属となりて忉利天にのぼるか、先ず汝をおがまんとて来るなりとかたりしかば、夢の中にうれしさ身にあまりぬ、別れて後又いつの世にか見んと思いし親のすがたをも見奉り仏をも拝し奉りぬ、六十四仏の物語に云く我等は別の主なし汝は我等が檀那なり、今日よりは汝を親と守護すべし汝をこたる事なかれ、一期の後は必ず来って都率の内院へ導くべしと御約束ありしかば遺竜ことに畏みて誓いて云く今日以後外典の文字を書く可からず等云云、彼の世親菩薩が小乗経を誦せじと誓い日蓮が弥陀念仏を申さじと願せしがごとし、さて夢さめて此の由を王に申す、大王の勅宣に云く此の仏事已に成じぬ此の由を願文に書き奉れとありしかば勅宣の如くにし、さてこそ漢土・日本国は法華経にはならせ給いけれ、此の状は漢土の法華伝記に候」と。

この御書は、法華経書写の功徳を示されたものにすぎない。ましてや、われわれは、偉大なる日蓮大聖人の大仏法たる、五字・七字の南無妙法蓮華経をもって、供養するものである。どうして、先祖の聖霊の苦悩を救えないわけがあるだろうか。

第六　導師何故の事

本文

第六導師何故の事　疏に云く良に以みれば説法入定して能く人を導く既に導師と称す。御義口伝に云く此の導師は釈尊の御事なり、説法とは無量義経・入定とは無量義処三昧に入りたもう事なり、所詮導師に於て二あり悪の導師善の導師之れ有るなり、悪の導師とは法然・弘法・慈覚・智証等なり善の導師とは天台・伝教等是なり、末法に入っては今日蓮等の類いは善の導師なり、説法とは南無妙法蓮華経・入定とは法華受持の決定心に入る事なり能導於人の能の字に心を留めて之を案ず可し涌出品の唱導之師と同じ事なり、所詮日本国の一切衆生を導かんが為に説法する人是なり云云。

語訳

導師何故　序品第一（一二七ページ）に「文殊師利、導師何が故ぞ、眉間白毫の、大光普く照らしたもう」とある。仏が白毫の光りで、あまねく東方万八千の世界を照らしたのに対し、この瑞相はいかなる意味を持っているかを、弥勒菩薩が文殊に問いただした文である。

疏　疏とは、一般的に、経文を解釈したものをいう。ここでは天台の法華文句第三を指す。

入定　禅定にはいること。禅定とは三昧と同じ意味である。心を一処にとどめて一心に思索する状態。

法然　日本浄土宗の開祖（一一三三年―一二一二年）。崇徳天皇長承二年四月七日に生まれ、十五で出家し、比叡山で天台学を学んだが、四十三歳の時、慧心の「往生要集」を読み念仏者となった。選択集を著わし、浄土の三部経（阿弥陀経、無量寿経、観無量寿経）以外の経典はすべて捨てよ閉じよ閣け拋てとの邪義を唱えて、人々を迷わせた。承元の初め土佐に流され、建暦元年順徳天皇の時に大赦で帰されたが、翌年死去。死後、埋葬した骨が犬神人に暴かれ、加茂川に捨てられたという。大聖人は南条兵衛七郎殿御書（一四九七ページ）では「悪魔の法然」といわれ、立正安国論では、法然のような邪僧がいるゆえに国に三災七難が起こるのであると、国家諫暁されている。

弘法　空海（七七四年―八三五年）のこと。日本の真言宗の開祖。渡唐し、慧果より、金剛、胎蔵両部を伝承し、帰国後、真言宗の邪義をひろめた。真言の三部経（大日経、蘇悉地経、金剛頂経）を立て、大日如来を本尊として本主の釈尊をたおし、法華経は戯論の法だと邪義を唱えたので、大聖人は真言亡国と、強く破折された。

慈覚・智証　慈覚は天台宗第三の座主。諱は円仁。伝教大師の弟子でありながら、真言の悪法を取り入れた。「金剛頂経疏」「蘇悉地経疏」を著わす。智証は天台宗第四の座主で、諱は円珍という。義真の弟子であったが、慈覚とともに真言を取り入れ、天台宗を堕落させた。この慈覚・智証の師敵対の大謗法について、日蓮大聖人は三大秘法抄（一〇二二㌻）に、次のように仰せられている。「此の戒法立ちて後・延暦寺の戒壇は迹門の理戒なれば益あるまじき処に、叡山に座主始まって第三・第四の慈覚・智証・存の外に本師伝教・義真に背きて理同事勝の狂言を本として我が山の戒法をあなづり戯論とわらい し故に、存の外に延暦寺の戒・清浄無染の中道の妙戒なりしが徒に土泥となりぬる事云うても余りあり歎きても何かはせん、彼の摩黎山の瓦礫の土となり栴檀林の荊棘となるにも過ぎたるなるべし、夫れ一代聖教の邪正偏円を弁えたらん学者の人をして今の延暦寺の戒壇を蹈ましむべきや」と。なお、日本天台宗の第四の座主は安慧とされることもあるが、安慧は、補任の座主であったため、大聖人は、第四の智証と述べられたと思われる。

法華受持の決定心　入定というのは、現在においては、大御本尊を受持しぬいていくという絶対の決意、大確信に立つことをいう。

能導於人の能の字に心を留めて之を案ず可し　文句にある「能く人を導く」の文の能の字によくよく心を留めて思索せよということ。すなわち身口意の三業をもってこの文を読み切りなさいということ。

涌出品の唱導之師　涌出品第十五（四七六㌻）に「是の四菩薩、其の衆中に於いて、最も為れ上首唱導の師なり」とある。すなわち、唱導の師とは、四菩薩をいう。末法においては、御本仏日蓮大聖人であることはいうまでもない。

通解

ここは、序品第一において、弥勒菩薩が、仏の眉間白毫相について不思議に思い、「文殊師利、導師何が故ぞ、眉間白毫の、大光普く照らしたもう」と、文殊師利菩薩に尋ねたところである。

天台の法華文句第三にいわく「まことに、よくよく考えると、仏は、あるいは説法し、あるいは入定して、能く人を導くので導師というのである」と。

この「導師何が故ぞ」の経文に対する大聖人の御義口伝には、次のように仰せである。この「導師」というのは、釈尊のことなのである。「説法」とは無量義経、「入定」とは無量義処三昧にはいることである。所詮、導師には二種類ある。すなわち悪の導師と善の導師とである。悪の導師とは、法然、弘法、慈覚、智証等である。善の導師とは天台、伝教等がこれなのである。末法に入っては、日蓮大聖人およびその門下は、善の導師なのである。説法とは南無妙法蓮華経の説法であり、入定とは法華受持の決定心、すなわち大御本尊を受持しきっていく大確信に立つことである。文句に「能く人を導く」とあるが、そのなかの「能」の字に、よくよく心を留めて思索しなさい。この序品の「導師何故」の導師と、涌出品の「唱導之師」とは同じことである。所詮、日本国の一切衆生を成仏に導こうと説法する人、すなわち日蓮大聖人がこれなのである。

講義

ここで、日蓮大聖人は、まず、「導師」とは釈尊と仰せられ、次に善悪の導師のうち、善の導師として天台、伝教をあげ、最後に結論として末法の御本仏日蓮大聖人こそが真の善の導師なることを明示されている。したがってこの「釈尊」とは、必ずしもインドの釈尊を意味するだけではない。像法年間でいえば、天台、伝教であり、末法においては日蓮大聖人のことをいう。すなわち「釈尊」とは仏という意味である。こう考えれば、末法においては、釈尊とは、末法の御本仏日蓮大聖人と考えるべきことが明らかである。

さて、ありがたいことに、大聖人は、「末法に入っては今日蓮等の類いは善の導師なり」と仰せられて、われわれをも含めて下さっておられる。御義口伝には、必ず「日蓮等の類い」とか「日蓮が弟子檀那（だんな）」等といわれている。「日蓮等の類い」の「日蓮」は別しての立ち場であり、「等の類い」は総じての立ち場である。すなわち、これは、日蓮大聖人が、われわれを、大聖人と同じ境涯にまで、引き上げようとしてくださる、お心であると拝される。

また「説法とは南無妙法蓮華経・入定とは法華受持の決定心に入る事なり」とは、われわれの立ち場からいえば、説法とは南無妙法蓮華経という法を説くことであり、それはとりもなおさず折伏なのである。また南無妙法蓮華経にもとづいた、いっさいのふるまい、行動も、また説法となるのである。その理由は、われわれのいっさ

いの活動、ふるまいは、ことごとく妙法のあらわれであり、大聖人の仏法の偉大さを自然のうちに証明している姿であるからである。また「法華受持の決定心」とは、大御本尊を護持しぬいていく不惜身命の決意であり、大御本尊に対する絶対の確信である。日蓮大聖人は、全人類を救う大導師である。しかして、大御本尊を絶対と信じ奉り、折伏戦に勇敢に邁進していく者のみが「日蓮等の類い」となり、恭けなくも、その中にはいることができるのである。

現実の世情を、よくよくみれば、世の指導者階級の無能ぶり、あるいは邪悪ぶりを、憤り、悲しむものは、私一人ではあるまい。この現状を見るにつけ、知るにつけ、創価学会こそが、次の時代の、民衆の依怙依託であることは、いかんともなしがたき事実ではないだろうか。この御義口伝を拝し、われわれもまた、世界の指導者たる大確信に立って、前進していきたいものである。

第七　天鼓自然鳴の事

本文

第七天鼓自然鳴の事　疏に云く天鼓自然鳴は無問自説を表するなり。御義口伝に云く此の文は此土・他土の瑞同じきことを頌して長出せり、無問自説とは釈迦如来・妙法蓮華経を無問自説し給うなり、今日蓮等の類いは無問自説なり念仏無間・禅天魔・真言亡国・律国賊と喚ぶ事は無問自説なり三類の強敵来る事は此の故なり、天鼓とは南無妙法蓮華経なり自然とは無障碍なり鳴とは唱うる所の音声なり、一義に一切衆生の語言音声を自在に出すは無問自説なり自説とは獄卒の罪人を呵責する音・餓鬼飢饉の音声等・一切衆生の貪瞋癡の三毒の念念等を自説とは云うなり此の音声の体とは南無妙法蓮華経なり、本迹両門妙法蓮華経の五字は天鼓なり天とは第一義天なり自説とは自受用の説法なり、記の三に云く無問自説を表するとは方便の初に三昧より起って舎利弗に告げ広く歎じ略して歎ず、此土他土言に寄せ言を絶す若は境若は智此乃ち一経の根本五時の要津なり此の事軽からずと、此釈に一経の根源五字の要津とは南無妙法蓮華経是なり云云。

語訳

天鼓自然鳴　序品第一（一四五ページ）に「仏此の経を説き已って、即ち法座の上に於いて、跏趺して三昧に坐したもう、無量義処と名づく、天より曼陀華を雨し、天鼓自然に鳴り、諸の天竜鬼神、人中尊を供養す」とある。

疏に云く　法華文句第三巻の文である。

無問自説　仏が人の問いを待たず直ちに自ら説法すること。仏の随自意の説法を意味する。十二部経といって、仏教の経文を形式上十二に分けたものの一つ。

此の文は此土・他土の瑞同じきことを顕して長出せり　仏が法華経を説くにあたり、説法瑞、入定瑞、雨華瑞、地動瑞、心喜瑞、放光瑞の六瑞が起きたが、仏が白毫の光りで東方万八千の世界を照らしてみたところ、他土にも此土（娑婆世界）と同じ瑞相が起きていた。このことを説かれようとして、この天鼓自然鳴の句を含む一連の偈を説いたのである。

天とは第一義天なり　第一義天とは第一義の教理を天空の高く遠いのにたとえたもの。第一義とは根本的、絶対的、全体的教えという意味で、妙法蓮華経をいう。すなわちこの文の意味は、天とは、いわゆる天をいうのではなく、第一義天すなわち妙法蓮華経のことをいうのであるとの意。

記の三に云く無問自説を表するとは方便の初に三昧より起って舎利弗に告げ広く歎じ略して歎ず、此土他土言に寄せ言を絶す　妙楽の記の三には、法華文句の〝無問自説を表する〟とは、方便品の初めに仏が三昧より起って舎利弗に告げて「諸仏智慧甚深無量」より「止舎利弗、不須復説」まで広く賛嘆したのである。また「諸法実相」として十如を述べたことは、略して諸法の甚深なることを明かされたのである。仏はこの妙法の甚深なることを此土の瑞相や他土の瑞相等をもって知らせよう

とした。なぜならば法華経の理はそれほど深いので、その深さを、言葉をもっていい表わすことができないからである、との意。

若は境若は智此乃ち一経の根本五時の要津なり　「若は境」とは迹門、「若は智」とは本門、「一経の根本」とは法華経の根本である。「五時」とは、華厳、阿含、方等、般若、法華の五時であり、その要津、肝要とは南無妙法蓮華経である。

通解

これは序品第一の「仏此の経を説き已って、即ち法座の上に於いて、跏趺して三昧に坐したもう、無量義処と名づく、天より曼陀華を雨し、天鼓自然に鳴り、諸の天竜鬼神、人中尊を供養す」とあるところの御義口伝である。

文句の第三にいわく「経文に『天鼓自然に鳴り』とあるのは無問自説を表わすのである」と。

大聖人の御義口伝には、次のように仰せである。この「天鼓自然鳴」の文を含む偈は、この娑婆世界の瑞相も、他の国土の瑞相も、まったく同じであることを説いたところである。

無問自説とは、釈迦如来が、妙法蓮華経を、誰からも問われずして、自ら説いた形態である。今日蓮大聖人、およびその門下の立ち場は、無問自説である。その理由は念仏無間、禅天魔、真言亡国、律国賊と叫ぶことは無問自説ではないか。誰からたのまれたのでもないのである。三類の強敵が競い起こるのは、そのゆえである。

「天鼓」とは南無妙法蓮華経であり、「自然」とは無障碍ということである。「鳴」とは南無妙法蓮華経と唱える音声のことである。

また別の面から解釈すれば、一切衆生が語言音声を自在に出すことは無問自説といえる。監獄の監守が罪人をせめつける声も、餓鬼飢饉を訴える声も、一切衆生の貪瞋癡の三毒の念々等を自説ともいうのである。しかしその音声の本体というものは、やはり南無妙法蓮華経なのである。

天鼓とは、釈迦仏法でいえば本迹二門をいう。文底の立ち場からいえば妙法蓮華経の五字が天鼓なのである。ここにいう「天」とはいわゆる一般的にいう天を意味するのではない。第一義天、すなわち妙法蓮華経をいうのである。「自説」とは自受用身の説法を意味する。

妙楽の法華文句記の第三にいわく「文句に『無問自説を表する』とは次のような意義である。すなわち方便品の初めに仏が三昧より起って、舎利弗に告げて、広く妙法の甚深なることを賛嘆し、また略して賛嘆したのである。仏は、この妙法の甚深なることを、此土の瑞相や他土の瑞相等をもって知らせようとした。なぜならば法華経の理はそれほど深いので、言葉をもっては、言い尽くせないからである。あるいは迹門において宇宙森羅万象の実相を客観的に不変真如の理として説き明かし、また本門においては、その客観世界に冥ずべき仏智を随縁真如の智として説き明かしているのである。

しかるに、その根本は、五時のいっさいの経々の肝要であるところの妙法蓮華経であり、このことはもっとも大事なことであり、容易なことではない」と。この妙楽の釈のなかの「一経の根源五字の要津」とあるのは、南

無妙法蓮華経のことを指しているのである。

講義

まず文句に「天鼓自然鳴は無問自説を表するなり」とあるは、最大の瑞相論および随自意の説法を述べているところである。

いかなる経文にも、さまざまな瑞相が明かされているものである。その瑞相が大きいということは、その経文が、いかに深遠なる、大事な経であるかを示しているのである。

いま、法華経の序品に説かれた瑞相は、此土も他土も、悉く大変化を起こすという大瑞相である。これこそ仏の最大深秘の法が説かれる前兆である。無問自説とは、仏の随自意の説法をいう。この大法は、問う人もいない。ゆえに、質問者がいないのに、仏が自ら説かれたものであるということである。

此の文は此土・他土の瑞同じきことを頌して長出せり

序品における瑞相が、たんに娑婆世界だけではなく、他の国土にも、これとまったく同じ瑞相が起こったことは、依正不二、一念三千の原理を示したものといえる。われわれの一念の変化が全宇宙に通じていくのである。自分がひじょうにうれしいという場合には、その喜びの生命活動が、全宇宙にあまねく行き渡るのである。

また、大御本尊を信ずるならば、いかなる遠き国土においても、幸福をつかんでいけることを意味するのである。此土を日本国ととれば、アメリカやイギリスやソ連は他土である。しかし、国境を越え、民族を越え、人種を越えて、全世界の、いかなる民衆をも幸福にする原動力が、南無妙法蓮華経なのである。

無問自説とは釈迦如来・妙法蓮華経を無問自説し給うなり

無問自説とは「随自意」ということである。「随自意」とは、「随他意」に対することばである。仏の内証の悟りそのままを説き示すことをいう。「諸経と法華経と難易の事」（九九一ページ）にいわく「仏九界の衆生の意楽に随って説く所の経経を随他意という譬えば賢父が愚子に随うが如し、仏・仏界に随って説く所の経を随自意という、譬へば聖父が愚子を随えたるが如きなり」と。

釈尊が法華経で説こうとした妙法蓮華経は、仏の随自意の説であるがゆえに、難信難解であり、誰人も問うことができない。そこで釈尊は無問自説したのである。

しこうして、随自意、随他意というのは、必ずしも一様ではない。権実相対する時は権教は随他意、法華経は随自意、本迹相対する時は迹門は随他意、本門は随自意、種脱相対する時は文上脱益の法華経は随他意、文底下種の南無妙法蓮華経こそ随自意なのである。まことに日蓮大聖人の大仏法こそ、生命の本源を余すところなく説き切ったものであり、これこそ真の随自意の説法であられる。これ凡人の知るところではないのである。ゆえに「今日蓮等の類いは無問自説なり」と仰せられている。

今、創価学会が化儀の広宣流布をしていくということは随自意である。世間では、やれ逆コースであるとか、ファッショ的であるとか、迷信であるとか、さまざまな批判・中傷を加えてきた。しかし彼らは、仏法の大哲理、歴史の真実の流れ、いかにしたら民衆が心から安定し、平和になり、幸福になるかという根本原理を知らずして、たんに批判のみに終始しているのである。

しかし、広宣流布以外に、民衆の真実の幸福は絶対に実現しえないことを、われわれは知っている。社会改革をいかに唱え、世界連邦をいかに唱えても、根本の一念のめざめ、解決がなくして、どうして平和な社会が建設されるであろうか。

われわれにはなんの野心もない。ただ、民衆のため、人類のため、わが身命をなげうって戦うのみである。信心をした人々の浄らかな心、美しい団結の姿、なにものにも屈することなく正義の旗をかかげて進む力強い息吹き、いったい創価学会の精神を誰人が知りえようか。いかなる、批判の嵐、弾圧の怒濤をうけようが、ただ広宣流布に向かって進んでいく――これこそ随自意であり、無問自説なのである。

所詮、御本尊様しかない。広宣流布のみが世界平和を実現するただ一つの方程式である。このことを絶対の大確信をもって示しているのである。

もしも、創価学会が、世間の批判、中傷を恐れて、広宣流布への戦いをやめたならば、あるいはまた、権力に迎合し、慈善事業などで民衆をあざむくとすれば、民衆の幸福は永久に没してしまうことだろう。一触即発の戦争の危機がさらに深刻をきわめ、この地上に阿鼻叫喚の世界が現出することは、経文に照らし、御書に照らし、

明々白々たるものがある。

われわれは、断じて権力に迎合してはならない。言論界等に、よく書かれようとして、おべっかを使う見苦しい態度など、微塵もない。民衆をごまかしていくような卑きょうな真似もしない。あくまでも随自意なのである。右にも寄らず、左にも寄らない。ただ全民衆の幸福のために法旗を高く掲げて戦うのみである。

念仏無間・禅天魔・真言亡国・律国賊と喚ぶ事は無間自説なり三類の強敵来る事は此の故なり

これは、折伏することが無間自説であるとの文である。誤った宗教が人を根本的に不幸にしてゆくことを、本人たちは知らないのである。念仏をやっている人は、自分の宗教で無間地獄におちるなどとは思いもよらない。極楽往生でもできるかのように思っている。それを、日蓮大聖人が「念仏無間」と破折されたのであるから、その驚き、怒りたるや、大きいのは当然である。念仏や、律、真言、禅、今でいえば日蓮宗等が、世の不幸の根源であることを知っているのは、われわれのみなのである。だから彼らは驚き、色をなし、怨み、さまざまの迫害をしてくるのである。

このことについて妙楽大師の弟子である智度法師は「東春」に、次のようにいっている。すなわち「俗に良薬口に苦しと言うが如く此の経は五乗の異執を廃して一極の玄宗を立つ故に凡を斥ぞけ聖を呵し大を排し小を破る乃至此くの如きの徒悉く留難を為す」と。この文は現在の日本の宗教界、思想界の実情にぴったりあてはまるものではないか。

一極の玄宗とは、弘安二年十月十二日御出現の本門戒壇の大御本尊である。この大御本尊こそが一切衆生の仏種である。この仏種を知らず、目先のことばかりにきゅうきゅうとしている凡人を斥け、いかに世間の人々から尊敬されている聖人君子のごとき人であっても、一宗の教祖であっても、かつは政治家、評論家、学者であっても、この仏種を仏種としない人に対しては、断固、その偏見、浅薄さを、叱りとばしてゆけとの指導、命令である。かかる釈迦仏法の大小乗等を、ことごとくうち破っているために、それらの人は聞くを喜ばず、斥けられたのを怒り、叱りつけられたのを恨みに思い、さまざまな留難をなすにいたるのである。

いったい、創価学会ほど悪口をいわれた団体が、他にあるであろうか。現在は、学会のなかにはいっている人も、多くは、かつて学会を非難し、中傷してきた人たちであった。しかし、学会に対する非難は、ことごとく無認識から生じたものであり、無定見で、たえず変動するものである。

学会の主張は定見である。無定見の主張は、批判・中傷するということには一致しても、それ以外は、ばらばらなものである。一見はなばなしく見えても、その実体は、まことに軟弱である。したがって初期のころには、無定見のほうが積極的であり、定見のほうが受け身のようにみえる場合もあるが、最後には、必ず、定見が無定見をうち破っていくものである。

学会の主張は一貫して永久に変わらない。それは随自意だからである。

しかし、学会に対する世間の見方が、ある場合は大きく、ある場合は徐々に、変化をきたしていることは、動かすことのできない事実なのである。

天鼓とは南無妙法蓮華経なり自然とは無障碍なり鳴とは唱うる所の音声なり

天鼓の天とは、後にあるように、第一義天を指す。第一義天とは、宇宙の根本であり、生命の本質を意味する以上、妙法を指すととるべきはとうぜんである。ゆえに「天鼓とは南無妙法蓮華経なり」と仰せられているとおりである。「自然とは無障碍なり」とは、自由自在の境涯を指す。すなわち、南無妙法蓮華経と唱えた生活、境涯というものは、障りがない、行き詰まりがないということである。

ここで無障碍とは哲学的には自由ということである。自由とは束縛のないことと定義されている。哲学者、天野貞佑氏あたりは、この束縛を内部的束縛と外部的束縛にわけ、根本的な束縛は内部的束縛であり、それを我欲としている。そして我欲を捨て去ることが自由である、という意味のことをいっていたことがある。たしかに天野貞佑氏のいうごとく、内部的束縛、すなわち生命に内在する我欲等が、人生を不幸に導く原因であるかもしれない。しかし、氏が、その我欲をなくすことが自由の境涯であると考えることは、大きなあやまりであろう。大聖人の仏法では、そうした欲望にせよ、煩悩にせよ、すべて使い切っていくものである。我欲に左右されず、それを使い切っていく力強い本源の生命の境涯――それが自由の境涯である。すなわち、煩悩即菩提、生死即涅槃と開覚することが真の自由であり、無障碍なのである。

また、自由とは主観と客観との完全冥合である。ピアニストとして世界的に有名な人であっても、最初ピアノを習い始めたころは、ピアノを弾くのに、指も自由に動かなかったときもあったであろう。そのときは、不自由

であり、苦しみであり、なんともいえないまだるこしさを感じたに違いない。しかし、練習に次ぐ練習によって、ついにはピアノを自由に駆使し、思うがままに、みずからの感情を表現し、なんらさしさわりというものがなくなってくるではないか。これはピアノを弾くという世界における自由の境涯である。

野球を例にしても、野球をやっているとき、人はあるときは汗を流し、あるときはすべり込んで腕をすりむいたりして、なんとか点をいれようとか、いれさせまいとかして、いろいろな苦労をする。しかし、野球の好きな人にとっては、それがなんの苦痛にもならない。苦痛どころか、そんなことをしながら、楽しくて楽しくてしょうがないのである。ところが、野球の嫌いな人が、どうしても野球をやらなければならないとすれば、それは、その人にとって実に苦痛の種となろう。これもその世界における自由であり、束縛である。

環境と自分とが一体となったときに、ほんとうにさしさわりがなく、自由自在になっていくことは、この二つの例からも明らかであろう。ピアノを弾くとか野球をするという場合は、ある特定の人の特定の行動にすぎない。しかし、人生だけは、誰人といえどもそれを避けることのできぬ行路である。ゆえに、堂々たる人生を歩んでいくためには、自己の生活と自分自身の生命とが冥合する、偉大なる生命力を湧現することが、大事になってくるわけである。これが仏法で説く、境智冥合である。すなわち、境智冥合の状態こそ、真の自由といえるのである。

しからば、生死即涅槃と開覚し、煩悩即菩提と開覚し、また境智冥合していく根源力とはなにかといえば、観念論でなく、事実の上で、それは南無妙法蓮華経しかないのである。ゆえに次に「鳴とは唱うる所の音声なり」

と仰せられているのである。すなわち、「天鼓自然鳴」の鳴とは南無妙法蓮華経と唱えて、人生を生きていく、その言々句々が鳴ということになるのである。

一義に一切衆生の語言音声を自在に出すは無問自説なり自説とは獄卒の罪人を呵責する音・餓鬼飢饉の音声等一切衆生の貪瞋癡の三毒の念念等を自説とは云うなり此の音声の体とは南無妙法蓮華経なり

「一義に」とは、ある面から解釈すればという意味である。法華経は、そして大聖人の仏法は、生活から遊離した観念の世界のことを説いているのではない。生活の実体をあますところなく説ききり、そこから幸福をいかにして実現するかということを示しているのである。したがって、無問自説ということも、なにも法華経だけに、また、大聖人の仏法だけにあるものではない。いっさいの人間の本能としてもあるのである。一切衆生が声を自在に出すことも、ことごとく無問自説である。たとえば、なにかよいことがあると、自然と口からは歌が出たり、また気温の変化によって、自然のうちに「暑い」とか「寒い」とか表現するそのことばも、無問自説なのである。また「ああ、なにか食べたい、飲みたい」というその声自身も無問自説である。

さらに「一切衆生の貪瞋癡の三毒の念念等を自説とは云うなり」と仰せられているごとく、たんに音声だけではなく「ああしたい、こうしたい」「病気がなおりたい」「苦しい」等々の三毒の念々も、ことごとく自説なのである。ぜんぶ自らの境涯を説いているのであり、みずからの心の発露である。

しかも、それらの言々句々のことごとくが、幸福を求めての言々句々であり、その音声を発するところの生命

の本質は、南無妙法蓮華経なのである。人々の生命も、本質的には南無妙法蓮華経である以上、すべて幸福を求めていることは、知ると知らざるとにかかわらず、厳然たる事実なのである。ただ、これらの無問自説は、みずからの生命が邪智と偏見とにおおわれているために、絶対の幸福、永遠の幸福につながらないのである。

一切衆生の本質は南無妙法蓮華経である。ゆえに大御本尊に向かい唱題したときに、我が身に内在しておった南無妙法蓮華経という偉大な生命が呼び起こされて、真実の自由自在の幸福生活を営むことができるわけなのである。

方便品八箇の大事

方便品八箇の大事

第一　方便品の事

本文

第一方便品の事　文句の三に云く方とは秘なり便とは妙なり妙に方に達するに即ち是真の秘なり、内衣裏の無価の珠を点ずるに王の頂上の唯一珠有ると二無く別無し、客作の人を指すに是長者の子にして亦二無く別無し、此の如きの言は是秘是妙なり、経の唯我知是相・十方仏亦然・止止不須説・我法妙難思の如し故に秘を以て方を釈し妙を以て便を釈す正しく是れ今の品の意なり故に方便品と言うなり記の三に云く第三に秘妙に約して釈するとは妙を以ての故に即なり円を以て即と為し三を不即と為す故に更に不即に対して以て即を釈す。

御義口伝に云く此の釈の中に一珠とは衣裏珠・即頂上珠なり、客作の人と長者の子と全く不同之無し、所詮謗法不信の人は体外の権にして法用能通の二種の方便なり爰を以て無二無別に非るなり、今日蓮等の類南無妙法蓮華経と唱え奉るは是秘妙方便にして体内なり故に妙法蓮華経と題して次に方便品と云えり、妙楽の記の三の釈に本疏の即是真秘の即を以円為即と消釈せり、即は円なれば法華経の別名なり即とは凡夫即極・諸法実相の仏なり、

円とは一念三千なり即と円と言は替れども妙の別名なり、一切衆生実相の仏なれば妙なり不思議なり謗法の人今之を知らざる故に之を秘と云う、又云く法界三千を秘妙とは云うなり秘とはきびしきなり三千羅列なり是より外に不思議之無し、大謗法の人たりと云うとも妙法蓮華経を受持し奉る所を妙法蓮華経方便品とは云うなり今末法に入って正しく日蓮等の類の事なり、妙法蓮華経の体内に爾前の人法を入るを妙法蓮華経方便品とは云うなり、是を即身成仏とも如是本末究竟等とも説く、又方便とは十界の事なり又は無明なり妙法蓮華経は十界の頂上なり又は法性なり煩悩即菩提生死即涅槃是なり、以円為即とは一念三千なり妙と即とは同じ物なり一字の一念三千と云う事は円と妙とを云うなり円とは諸法実相なり、円とは釈に云く円を円融円満に名くと円融は迹門円満は本門なり又は止観の二法なり又は我等が色心の二法なり一字の一念三千とは慧心流の秘蔵なり、□は一念なり員は三千なり一念三千とは不思議と云う事なり、此の妙は前三教に未だ之を説かず故に秘と云うなり、故に知ぬ南無妙法蓮華経は一心の方便なり妙法蓮華経は九識なり十界は八識已下なり心を留めて之を案ず可し、方とは即十方十方は即十界なり便とは不思議と云う事なり云云。

語訳

方便　方便には、法華経の方便の意と、他経（爾前経）のいわゆる方便の意とがあり、一に法用方便、二に能通方便、三に秘妙方便の三種にわかれる。一に法用方便とは、衆生の機根に応じ、衆生の好むところに随って説法をし、真実の門に誘引し

ようという教えの説き方である。二に能通方便とは、衆生が低い経によって、悟ったと思っていることを、だめだと弾呵して真実の門に入らしめる方便である。この二つは方便品第二の長行に「正直に方便を捨てて、但無上道を説く」（一八九ページ）と説かれる方便教で、四十二年間の阿弥陀経、大日経、蘇悉地経等の権教で説かれているゆえに用いてはならない。三に秘妙方便とは、秘妙門とも訳すべき法門で、実教である。秘とは仏と仏のみが知っていること、妙とは衆生の思議しがたい境涯であり、具体的にいうならば、長者窮子の譬えや、衣裏珠の譬えによってわかるように、末法の衆生は種々の悩みや、凡夫そのままの愚かな境涯に住んでいるけれども、その身そのままが、久遠元初以来、御本仏日蓮大聖人の眷族であり、仏なのだと悟る、これが秘妙方便である。悩んでいる時のわれわれも、仏であると自覚して折伏行に励む時も、その体は一つで、その人に変わりはない。これは仏のみ知れる不思議であるから秘妙方便という。

内衣裏の無価の珠　五百弟子受記品にある「衣裏珠の譬え」または「貧人繋珠の譬え」のこと。ある人が親友から無価の宝珠（無上の宝珠）をもらったが、謗法の酒に酔っていたので、そのことを知らず、長い間衣食のために苦労した後、ふたたびその親友にあった。親友は「なんだ、せっかく君のためと思って衣の裏に無価の宝珠をかけてあげたのに」という。そこではじめて、その貧乏人は自分がその宝を持っていたことに気がついたという話である。文底の意は、御本尊を信ずれば、われわれはもともと仏であることを知る。しかしながら謗法していることによって、知ることができないとの意である。

王の頂上の唯一珠　安楽行品にある「髻中明珠の譬え」を指す。すなわち、ある大王が最高の勇気ある者に無上の宝である髻中の明珠を与えた。しかして、この明珠は法華経であると説いたのである。文底の意は、御本尊こそ、あらゆる宝に超絶した明珠であるということである。

二無く別無し　内衣裏の無価の珠とは、われわれの生命の中に仏界があることを示したのであり、まだ仏界が冥伏している状態である。王の頂上の唯一珠とは、現実に仏界が顕わされた状態である。すなわち、これは九界と仏界を示し、九界即仏

界、仏界即九界のことを「二無く別無し」といっているのである。

客作の人・長者の子　信解品第四の「長者窮子の譬え」を指す。すなわち長者の子が、自分が長者のむすこであることを知らずに流浪し困窮するが、長者の方便によって、長者の客となり、やがて子であることを自覚する。これ秘妙方便である。「客作の人」とは長者の子でありながら、それとは知らずに、自分が他人であると思っていることをいい、九界の迷いをさす。「長者の子」とは、みずから仏の当体であると自覚することをいう。「全く不同之無し」で九界即仏界をあらわす。文底の意では、末法の凡夫はもともと仏でありながら、迷って罰を受けたりするが、御本尊を信じ、退転なく真の仏道修行することにより、必ず成仏するとの意である。詳細は信解品を参照。

経の唯我知是相・十方仏亦然・止止不須説・我法妙難思　方便品第二（一五八㌻）には「唯我是の相を知れり、十方の仏も亦然なり」とあり、また同（一六三㌻）には「止みなん止みなん須く説くべからず、我が法は妙にして思い難し」とある。この文を引用したのは、この妙法蓮華経は、不可思議であり、仏のみがよくこれを知ることができるものであるということから秘妙についての説明を加えているところである。文の中に「是の相」とあるのは、一念三千の相、即南無妙法蓮華経である。「十方の仏も亦然なり」とは、十方の仏もまた妙法を悟って成仏したのであるということ。

記の三に云く第三に秘妙に約して釈するとは妙を以ての故に即なり円を以て即と為し三を不即と為す故に更に不即に対して以て即を釈す　法華文句では、方便を、法用、能通、秘妙のそれぞれに約し、第三の秘妙に約して釈すのがこの本意であるとしている。第一に法用に約して「方とは法なり。便とは用なり」といい、第二に能通に約して「又方便とは門なり。門は能通に名け、所通に通ず。方便権略は皆是れ弄引にして、真実の為に門と作る。真実の顕わることを得るは、功は方便に由る。能顕に従いて名を得、故に門を以って方便を釈す」といい、第三に秘妙に約してとは、本文の冒頭にお示しのごとくである。これを妙楽がさらに釈しているところである。即とはそのままあるいは全体ということ、またはありとあらゆるも

のを兼ね備えているといった意味で、円と同じ意味になる。「三を不即と為す」の三とは、三権であり、一実に対するものである。三権とは声聞、縁覚、菩薩の三乗、一実とは一仏乗、また三権とは蔵通別の三教、一実とは円教である。三乗あるいは三権では不完全であるということ。

謗法不信の人は体外の権　「体外の権」とは、華厳経・阿含経等と独立して考えるときには体外の権経である。法華経が説かれて後に会入のうえで用いる権経は体内の権である。末法にはいり三大秘法の建立されて後は、体外の権教は邪教であり無得道経である。大御本尊を信ずる立ち場において用いる権経は体内の権である。また玄義に「九界を権と為し、仏界を実と為す」とあるように、権とは九界の衆生のことである。その意味で「体外の権」とは大御本尊を信じない人であり、迷いの生活を続けるしかない。「体内の権」とは仏界に照らされた九界の生活である。

無二無別に非るなり　文句でいう「二無く別無し」ということに、当てはまらないということ。すなわち、九界即仏界、仏界即九界とはならないということである。

本疏　妙楽の文句記に対して、天台の文句を本疏と呼んだのである。

即是真秘　本文の冒頭にある文句の三の「即ち是真の秘」のこと。

以円為即　本文の記の三の「円を以て即と為し」のこと。

消釈　解釈すること。

凡夫即極　即身成仏、直達正観などともいう。凡夫が凡夫そのままの姿で成仏すること。釈迦仏法では、法華経で初めて説かれた法門である。末法の今日では、御本尊を受持して題目を唱える以外に、即身成仏はできない。

一念三千　一念三千は仏教の極理であり、釈尊はこれを出世の本懐として、法華経迹門方便品にいたり「諸法実相」に約して、ほぼこれを説いた。ついで本門寿量品にいたり、因果国の三妙に約して、仏身の振舞いのうえから、これを説いた。これ

をうけて天台大師は、像法時代に出現し、摩訶止観の第五において、次のようにこれを説いた。観心本尊抄（二三八㌻）にいわく「『夫れ一心に十法界を具す一法界に又十法界を具すれば百法界なり一界に三十種の世間を具すれば百法界に即三千種の世間を具す、此の三千・一念の心に在り若し心無んば而已介爾も心有れば即ち三千を具す乃至所以に称して不可思議境と為す意此に在り』等云云」と。十界とは地獄界、餓鬼界、畜生界、修羅界、人界、天界、声聞界、縁覚界、菩薩界、仏界である。十如とは如是相、如是性、如是体、如是力、如是作、如是因、如是縁、如是果、如是報、如是本末究竟等である。三世間とは、五陰世間、衆生世間、国土世間である。一念三千に事と理があり、迹門は理の一念三千であり本門は事の一念三千である。本迹の一念三千に相違があるとはいえ、文底下種本門に対する時は、法華経の本迹二門とも理の一念三千となる。すなわち真の一念三千の法門とは、寿量品の文底に秘し沈められた三大秘法の南無妙法蓮華経である。

煩悩即菩提生死即涅槃　序品七箇の大事の段を参照。

一字の一念三千　「一字」とは圓の一字である。本文のすぐあとに「口は一念なり員は三千なり」とあるように、圓の一字が一念三千をあらわしているのである。

円融円満　円とは、完全無欠、融とは、すべてにゆきわたるということ。満は「みつる」義。円融も円満も、ともに一念三千の法門が宇宙の実相を完全に説きつくしていることをあらわす。

止観の二法　摩訶止観の修行法を二つに分けている。止とは、邪念、邪想を離れて心を一境に止住するという意であり、観はさらに、正見正智をもって諸法を観照する。すなわち、妙法を感得する意、信心のことである。

慧心流　比叡山天台宗の主流であり、慧心僧都源信（九四二年―一〇一八年）がその始祖である。他の一派を檀那流という。天台宗の相伝には、教門に重きを置くものと、観門に重きを置くものとがあるが、源信は慈覚より観門の相承をうけ、これを発展させた。本迹勝劣を立てる。四条金吾殿御返事（一一一六㌻）には「檀那僧正は教を伝ふ、慧心僧都は観をまなぶ・さ

れば教と観とは日月のごとし教はあさく観はふかし、されば檀那の法門は・ひろくして・あさし・慧心の法門は・せばくして・ふかし」とある。慧心僧都は天台座主第十八代・慈慧大師の弟子で、初め念仏の行に帰し「往生要集」三巻を作ったが、後に悔い改めて念仏を去り法華経に復帰した。

口は一念なり員は三千なり　圓を口と員とに分けたのである。口は一念であり、員は三千である。すなわち、一念のなかに三千の生命活動がぜんぶおさまることを圓という一字が示しているというのである。口は「めぐる」という意味があり、宇宙全体ともとれるし、法界に遍じてとどこおりなき一念の生命ともとれる。また員とは物の数量ということであり、百界、千如、三千世間と数量を成じていくことを意味する。

前三教　蔵通別の三教。

南無妙法蓮華経は一心の方便なり　一心とは一念である。方便とは御義口伝下（七九四ページ）に「此の方便とは十界三千なり」とあるごとく三千の変化である。一念に三千を具足している実体が南無妙法蓮華経なのであるという意味。

妙法蓮華経は九識なり十界は八識已下なり　妙法蓮華経は一念三千の一念であり、十界は三千の変化に含まれる。妙法蓮華経が本体であり、三千の変化は用なのである。九識とは「九識心王真如の都」とあるように、生命の根本であり、本質である。八識以下はその働きである。ゆえに「妙法蓮華経は九識なり十界は八識已下なり」といわれたのである。

九識　天台宗、華厳宗等では識を九つ立て、第九識をもって如来蔵識、清浄識といい、これを心王という。識とは心が内外の対境に対して、これは何、彼は何と、その異同を知る作用をいい、眼、耳、鼻、舌、身、意の六のおのおのに識があると立てる。すなわち、眼識とは色を縁として物の区別異同を知る識、以下おのおの声、香、味、触、法を縁とする。倶舎宗等の小乗はこの六識しか立てておらず、第六識（意識）をもって心王としている。第七識を末那識という。末那とは梵語。訳せば意識となるが、第六識と区別するため梵名を残す。意とは思量の義。思量によって物事を判断してゆく識。第八識を阿

賴耶識という。阿賴耶とは梵語。蔵と訳す。この第八識は染浄の二法を含む。浄法薫ずれば菩提となり、染法薫ずれば煩悩となる。ゆえに法相宗では、これを含蔵識といい、この八識を色心縁起の根本として、心王といっている。天台宗、華厳宗ではさらに、染浄含蔵の第八識に対して、真浄識、根本浄識を立て、これを第九識として、染と浄とを含蔵する第八識と区別している。ゆえに天台宗、華厳宗においては、第九識をもって清浄無染の根本識、すなわち心王とするのである。

十方　四方八方に上下を加えた十方。宇宙、あらゆる世界の意味に使われる。

通解

方便品について、文句の第三に次のようにいっている。「方とは秘であり、便とは妙である。妙に方に達する、すなわち、妙法という万法の根源に秘密のうちに達することが、真の秘なのである。五百弟子受記品の〝衣裏珠の譬え〟のなかにある、あの貧人の衣に縫いつけられてあった無価（価をはかることができないほど尊い）の珠をしらべてみると、その宝珠と、安楽行品の〝髻中明珠の譬え〟にある転輪聖王の頂上にあった珠とは、まったく同じ意である。また、信解品第四の〝長者窮子の譬え〟に出てくる『客作の人』すなわち諸国を遍歴してきたところの窮子は、実は長者の子にほかならなかったのである。これこそ九界即仏界、仏界即九界であり、われわれの生命のなかに、真実に清浄無染で力強い仏界の生命があるということであり、秘であり、妙である。

方便品に〝唯我是の相を知れり、十方の仏も亦然なり〟〝止みなん止みなん須く説くべからず、我が法は妙

にして思い難し〟とあり、方便品に説かれるところの妙法蓮華経は不可思議であり、仏のみがよくこれを知ることができるものであるといっているのである。ゆえに秘をもって方を釈し、妙をもって便を釈することが、この方便品の意図なのである。この秘妙という意味で方便品というのである」

これをうけて、妙楽の法華文句記の第三には、次のようにいっている。「法華文句では、方便を第一に法用、第二に能通、第三に秘妙に約して釈し、第三の秘妙に約して釈すのがこの経の本意であるといっているが、それでは、第三に秘妙に約して釈すとはどういう意味であろうか。とくに即是真秘の即とは妙なるがゆえに即なのである。円を以て即となし、三権すなわち三乗（または蔵通別の三教等）は不即なのである。すなわち、法華経においては、宇宙の本源たる妙法蓮華経を説き明かしたのであるから完全無欠であり、円であり、即である。ところが三乗や三教は不完全であり不即である。ゆえにさらに、不即すなわち不完全な教えの法用方便や能通方便に相対して即、すなわち完全無欠の秘妙方便を釈したのである」と。

御義口伝には次のように仰せである。この法華文句の方便についての釈の中にある「唯一珠有ると二無く別なし」の「一珠」とは衣裏珠であり、即それは頂上珠なのである。すなわち頂上珠とは仏界であり、最高の宝であり、それがわれわれの生命のなかに本然的に備わっているというのが衣裏珠なのである。また客作の人と長者の子とは、まったく不同がない。すなわちわれら大御本尊を信ずる者は即日蓮大聖人とあらわれることができるのである。所詮、謗法不信の人は、体外の権であって法用、能通の二種の方便であり、仏法を顕現し妙法の当体とあらわれることができない。ゆえに文句にいう「無二無別」とはいえないのである。今われわれ大御本尊を信じ

南無妙法蓮華経と唱える者は、秘妙方便であり、大御本尊の体内であり、仏界に照らされた九界の生活を思うがままに遊戯しきっていけるのである。これこそ妙法の体内の方便である。したがって妙法蓮華経と題して、次に方便品というのである。妙楽は法華文句記で文句の「即是真秘」の即を「圓を以て即と為す」と解釈している。即とは圓であるから法華経の別名である。即とは凡夫即極を意味し、有作ではなくして諸法実相の仏なのである。ここに法華経とは、一往は二十八品、再往文底からは大御本尊であり、凡夫即極、諸法実相の仏とは本有無作三身の日蓮大聖人である。圓とは一念三千である。「即」も一念三千、「圓」も一念三千、ことばはちがうが、ともに同じく妙の別名である。一切衆生は、もともと実相の仏であるから妙であり、不思議である。われわれ大御本尊を信ずる者は、本来、実相の仏であることを事実の上に顕現して知ることができるけれども、謗法不信の人は、これを知ることができないから秘なのである。

また、大聖人は次のようにも仰せられている。法界三千、すなわち宇宙の森羅万象にことごとく三千の変化が備わっている、これを秘妙という。秘とはきびしきことをいう。妙法はきびしき大宇宙の法則である。いっさい宇宙の森羅万象には、三千が一つも欠けることなく、きびしく羅列しているのである。これよりほかに不思議なものはない。ゆえに妙なのである。大謗法の人であっても、所詮は妙法の当体であり、必ず妙法蓮華経を受持するのである。このように、いかなる人といえども大御本尊から離れることはできず、必ず大御本尊を受持するところを妙法蓮華経方便品というのである。すなわち、これは、今末法に入っては、日蓮大聖人およびその門下が謗法を断ち切り、大御本尊を信じ、唱題することによって、仏界に照らされた、自由自在の生活をしている者の

ことなのである。妙法蓮華経の体内に爾前の人法を入れるのを、妙法蓮華経方便品というのである。すなわち、九界の衆生が、妙法を根底に、いっさいの活動をなし、また、いままでの社会観、世界観がことごとく妙法によって生かされるのである。これを即身成仏とも如是本末究竟等ともいうのである。

また、方便品の方便とは十界のことであり、または無明のことである。妙法蓮華経は十界の頂上であり、または法性である。妙法蓮華経方便品であるから煩悩即菩提、生死即涅槃である。記の「以圓為即」とは一念三千なのである。妙と即とは同じものであり、ともに一念三千なのである。圓とは天台の釈に「圓を圓融圓満に名づく」とある。圓融は、十界互具、百界千如、一念三千の理を説き明かしたところの迹門であり、圓満とは現実に仏界を顕現していくことを明かしたところの本門である。または、止観の二法である。止は「とどまる」ことであり、宇宙の本源の動かない理、すなわち不変真如の理を意味し、圓融である。観とは「観ずる」ことであり、仏界を現ずる智慧であり、随縁真如の智をいい、圓満である。また色心二法に約せば、身をもって実践活動していくことは圓満である、心は融通無礙であり、よくわが心に万法を浮かべることができるので圓融である。つまり色が圓満で、心が圓融である。

一字の一念三千とは、慧心僧都源信を始祖とする慧心流の秘蔵である。それによると圓の字を分けて口は一念であり、員は三千ということである。一念三千とはこのように一念に三千を具するのであるから不思議としかいいようがない。この不思議なる実体は、蔵通別の前三教には未だこれを説かなかった。ゆえに秘というのである。

以上のことからわかるように南無妙法蓮華経とは一心の方便なのである。一心とは一念であり、方便とは三千なのである。すなわち一念に三千を具している実体が南無妙法蓮華経なのである。九識という観点から論ずれば、妙法蓮華経は九識であり、本体である。十界は、妙法の働きであり、八識以下となるのである。このことをよくよく信心をもって思索してゆきなさい。「方」とは十方すなわち全宇宙であり、全宇宙の実相は十界である。「便」とは不思議ということである。

講義

この項で大事なことは、秘妙方便ということである。法用方便、能通方便は爾前経で説く方便であり、真実の方便ではない。方便品の方便とは、これら二種の方便に対して、秘妙方便なのである。秘妙方便とは、秘妙門とも訳すべき法門で、実教のことである。秘とは仏と仏のみが知っていること、妙とは衆生の思議しがたい境涯をいう。具体的にいうならば、長者窮子の譬えや、衣裏珠の譬えによってわかるように、末法の衆生は種々の悩みや、凡夫そのままの愚かな境涯に住んでいる。しかし、その身そのままが、久遠元初以来、御本仏日蓮大聖人の眷属であり、仏なのだと悟る、これが秘妙方便である。悩んでいる時のわれわれも、仏であると自覚して折伏行に励む時も、その体は一つでその人には変わりはない。これは仏のみ知れる不思議であるから秘妙方便という。

そして、これを広げると、さまざまの角度から論ずることができる。まず、秘妙方便とは生活即信心というこ

とであり、九界即仏界ということである。そもそも秘妙方便とは、方便と真実とを相対的にみるのではなく、真実に立脚して妙用する方便である。方便とは権であり、九界である。ゆえに生命論からいえば、仏界に照らされ、妙法蓮華経に立脚して、九界の生活を思うがままに遊戯することなのである。

これについて、もう少しくわしくみてみよう。人々は、一瞬一瞬生活を営んでいる、それぞれの立ち場で、またいろいろな姿で。ある人は魚屋であり、ある人は学生であり、ある人は床屋である等と。しかし、その活動は、悉くその人自身の生命活動であり、その人自身の生命のあらわれである。今ここに、二人の魚屋がいたとする。そして一人は大御本尊を持ち、もう一人は信心していないとする。信心をしている、いないにかかわらず、二人とも魚屋をやっている点において同じである。したがって、大体同じように活動し、同じような姿であるかもしれない。けっして信心をしているからといって、特別なことをやるわけではない。この意味において、信心はあくまでも信心であって、生活はあくまでも生活である。しかし今述べたとおり、その人の生活は、その人自身の生命活動であり、生命のあらわれであることを忘れてはならない。したがって、大御本尊によって、生命力豊かに、確信と希望にみなぎっているならば、魚屋をやっているなかに、大きな喜びを感じ、商売をさらに発展させていくのである。むろん、時には損をすることもある。失敗もあろう。しかし、いくら失敗したとしても、それを乗り切ってゆく力があれば、必ず、現状を打開していく。たんに打開していくだけではなく、それによって得たる力はさらに発展してゆく力となる。ゆえに、初めはなんでもないようであるが、信仰をして十年二十年たった時には、信心をしている人の生活と、していない人の生活には、大きな開きがでてくる。

このように、信心をしているものは、一見なんら他と変わりがないように見えながらも、その実は、知らずしらずのうちに妙法蓮華経の大リズムにかなった生活をしているのである。これは妙法の体内の方便であり、秘妙方便なのである。ゆえに日蓮大聖人は「今日蓮等の類南無妙法蓮華経と唱え奉るは是秘妙方便にして体内なり故に妙法蓮華経と題して次に方便品と云えり」と仰せられているのである。

即は円なれば法華経の別名なり即とは凡夫即極・諸法実相の仏なり

また、本文に「即は円なれば法華経の別名なり即とは凡夫即極・諸法実相の仏なり」との仰せも、われわれの生活に約せば、同じ意味である。ここに、法華経とは、文底下種事行の一念三千の大曼荼羅である。凡夫即極・諸法実相の仏とは、有作ではなく、本有無作三身如来の末法御本仏・日蓮大聖人であられる。しかしながら総じては、われわれ、大御本尊に南無妙法蓮華経と唱える者は、やはり凡夫即極であり、諸法実相の仏なのである。諸法実相の仏とは、ありのままの姿そのままで、それが即仏であるということである。大御本尊を拝んだ者は、諸法実相の仏であるがゆえに、学生は、学生として諸法実相の仏なのである。工員は工員として諸法実相であり、それで即仏なのである。漁師は漁師として、そのふるまい自体が、もうすでに仏の所作になっている。換言すれば絶対の幸福境涯の上に立った漁師の活動である。

それでは、仏とは何か。瞬間瞬間の生命活動が、楽しくて楽しくてたまらないという境涯、これを仏と、一往、定義づけられよう。仏とは遠くの世界にあるものではない。西方十万億土にあるものでも絶対にない。金ピカな

姿をしているものでもない。背のびして、立派そうな人格を見せるものでもない。そのままの人生の姿が、もう仏の姿であり、仏の活動になっているのである。現在、世間では、釈迦仏法にとらわれて、邪宗教の教祖などが、信者の前や、また社会にあって、聖者ぶって、偽善者であるにもかかわらず、さも綺麗に、りっぱそうにみせようとするのがある。それらは釈迦仏法の流れをくむものであり、自分のために大衆をたぶらかす、魔の姿なりと断ぜざるを得ない。

あくまで、仏界の生命は、九界のわれら衆生のなかに存在しているのである。われわれ凡愚の生命の中に、宇宙大の力強い大生命が存在していることは、到底わからないことであり、宇宙の実相を体得なされた仏しかわからないところである。ゆえに秘なのである。しかしながら、われわれが大御本尊を受持したときに、たとえわれわれが意識しなくても、自然に、わが生命のなかに、仏界が湧現し、妙法の境涯を会得し、ゆうゆうたる人生を闊歩できるのである。すなわち、秘にして妙ではないか。ゆえに九界即仏界は、まさに秘妙方便なのである。これを即身成仏とも煩悩即菩提とも、生死即涅槃とも、如是本来究竟等ともいうのである。

次に、謗法の人といえども、必ず信心をするようになることが秘妙方便なのである。ゆえに、本文には「大謗法の人たりと云うとも妙法蓮華経を受持し奉る所を妙法蓮華経方便品とは云うなり」と仰せられているのである。なぜ大謗法の人でも、必ず大御本尊を受持するようになるのか。それは、大謗法の人たりとも、本来、妙法の当体だからである。ゆえに誰人といえども、大御本尊を持つことを、本然的に希求していると結論できるのである。

曾谷殿御返事（一〇五五㌻）にいわく「境と云うは万法の体を云い智と云うは自体顕照の姿を云うなり、而る

に境の淵ほとりなく・ふかき時は智慧の水ながるる事つつがなし、此の境智合しぬれば即身成仏するなり（乃至）此の境智の二法は何物ぞ但南無妙法蓮華経の五字なり」と。

この御文を、われわれの信心に約せば、境とは大御本尊である。智とはわれわれの一念の生命である。そして大御本尊に向かい南無妙法蓮華経と唱えるときに、わが生命のなかの妙法が呼ばれて顕現し、境も南無妙法蓮華経、智も南無妙法蓮華経であり、ここに境智冥合し、即身成仏、すなわち最高の幸福境涯を獲得することができるのである。ところが、謗法の人は、内に南無妙法蓮華経を秘めながらも、偏見、邪見のために、その清浄無染で力強い大生命力はおおわれてしまい、智は自体顕照の姿とはならないのである。邪智に染まってしまい、境もまた、地獄界の当体たる邪教の本尊であり、ここにいよいよ生命力は弱くなり、真の境智冥合はせず、大宇宙のリズムに合致することができず、しらず、しらずに、不幸へ、不幸へと沈んでいくのである。

しかし、いかに謗法の人とはいえ、もともと妙法蓮華経の当体である。願うところは、最高の幸福境涯であり、求むるところは、最高の価値ある人生である。人々の行動は、境智冥合へ、境智冥合へと動いているのである。境智冥合は大宇宙のリズムに合致した生活であり、それを希求するのは、人間の本然的な姿である。あたかもそれは、水が高きより低きに向かって流れるごとくである。現実に創価学会員が五百万世帯を突破している事実は、なににもまして、これを雄弁に物語っているではないか。そのなかには、信心することに猛反対してきた人もかなりいる。たとえ猛反対はしなくても、すべての人が、多かれ少なかれ、批判の眼をもってみてきたのである。しかし、そのような人が、皆信心するようになったのである。

われわれが折伏するのも、また、一切衆生が妙法の当体だからである。相手が妙法の当体でなければ、なんで折伏する必要があろうか。折伏をしておけば、たとえその時は信心しなくても、必ずやその折伏という縁によって、もともと備わっていた妙法の仏種が薫発されて、信心する時がくるのである。相手が猛反対するのをば、何故に強折するのか。それはもともと、猛反対する人とて妙法の当体である以上、信心をせざるをえないからである。すなわち、われわれが折伏するのは、その人間を駄目だと批判するのではない。相手のもつ邪法をうち破り、邪見、偏見のためにおおい隠された、清浄な、そして尊厳な、妙法蓮華経という生命をあらわさんがためである。これぐらい相手を尊敬している行為は他にはない。相手が尊厳な妙法の当体であることを信じてのふるまいだからである。

過去において不軽菩薩は「但行礼拝」といって、一切衆生を礼拝して歩いた。なぜ礼拝したかというと、それは相手の生命の奥底に仏性があるからだというのである。これは相手を最高に尊敬した行為を示しているのである。しかし、礼拝の行は、現在では、なんの役にも立たない。むしろ害があるのである。礼拝したところで、なんで相手を救うことができるか。相手の悪を断ち切らずして救えるわけがない。したがって、末法の今日においては、折伏をすることが、もっとも相手を尊敬する行為なのである。折伏こそ生命の尊厳を確信した民主主義の実践である。

とまれ、大謗法の人たりとも、大御本尊を信ずるようになることは、宇宙の大鉄則であり、これぐらい厳しいことがあろうか、これぐらい不思議なことがあろうか。また、秘妙方便とは、妙法を根底に、いっさいの人々、

またいっさいの思想、哲学を指導し、用いていけるということである。ゆえに、大聖人は本文中に「妙法蓮華経の体内に爾前の人法を入るを妙法蓮華経方便品とは云うなり」と仰せられているのである。すなわち、いっさいの経教が、南無妙法蓮華経の流通分として用いていけるのであるし、また、「一切法これ仏法なり」という信心の立ち場から、いかなる学者、指導者といえども、ぜんぶそれを生かしきって、広宣流布のために活動させていけるのである。大きい、洋々たる、太平洋のような仏法であり、そしてまた、日蓮正宗創価学会が広宣流布していくにふさわしい御文ではないか。

しからば、なにゆえ、いっさいの経々を破折するのか。それには、相待妙と絶待妙とがあることを知らねばならない。相待妙とは、彼と此と相対して取捨を定め、文底下種の大御本尊のみが唯一無二の即身成仏の直道であると決定するのが相待妙である。絶待妙とは、大御本尊を信じて修行するにあたっては、法華経はもとより一切経、あらゆる善論を取り入れて用いる立ち場である。大聖人は、一代聖教大意（四〇三ページ）に、「相待妙の意は前の四時の一代聖教に法華経を対して爾前と之を嫌い、爾前をば当分と言い法華を跨節と申す、絶待妙の意は一代聖教は即ち法華経なりと開会す」と仰せられている。

ここに、「当分」とは部分観を意味し、「跨節」とは全体観を意味する。そもそも、部分は部分として意味をもつのである。部分と全体とを混同し、部分観をもって全体観とするのは、まったくの誤りである。部分観に執着し、それをもって最高であると思い込む錯覚は、ことごとく打ち破らなければならない。もし、部分を部分として、全体観に立脚して用いるならば、それは、ことごとく生きてくるのである。

ゆえに、日寛上人は、三重秘伝抄（富要集第三巻二五ページ）に、次のように述べられている。「問う昔の経経の中に一念三千を明さずんば天台何ぞ華厳心造の文を引いて一念三千を証するや。答う彼の経に記小久成を明さず何ぞ一念三千を明さんや、若し大師引用の意は浄覚の云く『今の引用は会入の後に従う』等云云、又古徳の云く『華厳は死の法門にして法華は活の法門なり』云云、彼の経の当分は有名無実なる故に死の法門と云う、楽天が云く『龍門原の上の土・骨を埋むとも名を埋めず』と、和泉式部の云く『諸共に苔の下には朽ちずして埋もれぬ名を聞くぞ悲しき』云云、若し会入の後は猶蘇生の如し故に活の法門と云うなり」と。

この原理は、さらに、現在における思想、哲学、またいっさいの学問、さらには、社会制度等にもあてはまるものである。まことに、一念三千の大仏法を根底にしない、いっさいの学問、制度等は「死の法門」である。しかるに、ひとたびそれが大御本尊を根底にしたとき、妙法の智水によって生き生きと輝いてくる。まさに「活の法門」である。このように、いっさいの思想、哲学、また、いっさいの指導者、学者等を、ことごとく妙法の体内に引き入れて用いるのを妙法蓮華経方便品といい、秘妙方便というのである。

また、大聖人は「方とは即十方十方は即十界なり便とは不思議と云う事なり」と仰せられている。方とは、東西南北の四方、さらに東北、東南、西北、西南の四方を加えて八方、それに上下を加えれば十方である。すなわち、十方とは全宇宙ということである。全宇宙がいかに不思議であるかということが、また秘妙方便なのである。以上秘妙方便について述べたが、さらに、大事な二、三の文をあげて、これについて考えてみたい。

秘とはきびしきなり三千羅列なり是より外に不思議之無し

これは、妙法はきびしき大宇宙の法則であるともいえるし、また大御本尊のお姿とも拝せる。中央に「南無妙法蓮華経　日蓮」とおしたためであり、左右には十界三千の諸法が、一法も欠くことなく備わっているのである。大御本尊は、大宇宙のいっさいを備えて、余すところがないのである。まことにもって厳しい姿ではないか。

また「厳しい」とは、因果倶時だから厳しいのである。われわれの瞬間瞬間の生命のなかに、未来のいっさいを含んでいるのである。聖人御難事（一一九〇ページ）に「過去現在の末法の法華経の行者を軽賤する王臣万民始めは事なきやうにて終にほろびざるは候はず」とある。過去の法華経の行者とは不軽菩薩であり、現在の末法の法華経の行者とは日蓮大聖人である。したがって「法華経の行者を軽賤する」とは日蓮大聖人を誹謗することであり、現在では、創価学会をそしることを意味する。

大聖人の時代において大聖人を誹謗した人は、いったいどういう運命をたどったであろうか。大田の親昌や長崎次郎兵衛尉時綱や大進房が落馬して、苦悶のうちに死んだことはいうにおよばず、大聖人一門をいじめていじめぬいた平左衛門尉頼綱もまた、一族絶滅という悲惨な事態を招いたではないか。

これについて日寛上人は撰時抄文段（富要集第四巻三五〇ページ）で次のように仰せである。「問う宗祖は兼ねて未萌を知られ、現世に符合のこと既に命を聞き畢った。また現世の御言葉が、宗祖滅後に符合していることがあるか。答う実に所問の通りである。今しばらく現在の三事に准じて滅後符合の三事を出そう。一には下山御消息

（三六三ページ）に云く『教主釈尊より大事なる行者を法華経の第五の巻を以て日蓮が頭を打ち十巻共に引き散して散に蹋たりし大禍は現当二世にのがれがたくこそ候はんずらめ』云云。此の大科は、終に免かれなかった。すなわち、平の左衛門の尉頼綱も宗祖大聖人滅後十二年に当って一族が滅亡してしまった。鎌倉将軍譜に云く『弘安七年十月、時宗の子貞時四十家督を継ぎ執権す…永仁元年四月鎌倉大地震、死者一万余人、貞時の家令頼綱剃髪し果円と号す。威権日に盛なり其の次男安房守廷尉に任じ飯沼殿と号す、密に安房守を立て将軍と為んと議す、果円の長子宗綱以て貞時に告ぐ、貞時は果園及び安房守等を誅す、宗綱亦佐渡に流さる〇一族滅亡す』等云云。今案じて云く、平の左衛門入道果円は首を刎ねられてしまった。これすなわち安房の国の蓮祖大聖人の御顔を打ったゆえである。また最愛の次男である安房守も首を刎ねられた。これすなわち蓮祖大聖人の御頸を刎ねようとしたためである。嫡子宗綱は、佐渡に流罪になった。これはすなわち、蓮祖大聖人を佐渡が島にお流ししたゆえである。そのことがすでに符合している。このことは豈大科の免れがたい証拠ではないか」と。

大聖人は、平左衛門尉が栄華をきわめ、権力をほしいままにしていたときに、すでに未来の果を覚知せられていたのである。これは未来の果が、現在の因に含まれている証拠である。謗法をおかせば、いかにそのとき形はりっぱそうに見え、繁栄しているように見えても、その一瞬に無間地獄の果をはらんでいるのである。これだけは、どんなに逃れようとしても逃れられない、厳しい定めなのである。聖人知三世事（九七四ページ）にいわく「教主釈尊既に近くは去って後三月の涅槃之を知り遠くは後五百歳・広宣流布疑い無き者か、苦し爾れば近きを以て遠きを推し現を以て当を知る如是相乃至本末究竟等是なり」と。本末究竟等の本とは現であり、末とは当で

ある。究竟等とは現在に未来が含まれていることである。因果に約せば本とは因であり、末とは果である。究竟等とは因果倶時である。因果倶時は、厳しき宇宙の大鉄則である。仏の予言がことごとく的中するというのは、現在の因に未来の果がぜんぶ含まれているからである。したがって、透徹した生命観、宇宙観をもつならば、未来の果も当然、察知されうるのである。世間においても、一流の経済学者あるいは実業家などが、経済界の将来をあるていど見通すことができる例がある。しかし、それは、ある部分の、あるわずかな期間のことでしかない。

われわれは凡愚であり、とうてい未来を知ることはできないが、ほんとうに信心が透徹してくれば、未来を決定することはできるのである。もしも大御本尊を信じ、南無妙法蓮華経と唱えるならば、未来の果は現在の瞬間の生命のなかにそなわり、未来は自由自在となるのである。信心しても、まことの信心をする人、それから大して真剣に信心しない人等あるが、ともに、それぞれ三千羅列のきびしい姿を示していくのである。

ある人がこういう質問をした。「御書の講義をしている状態は、これは菩薩界であろう。しかし、いやいやながら講義をしているとすれば、それは十界論からいえばどうなるのか」と。そのとき「それは地獄だ。講義をしている姿は、あくまでも形式である。自分がいやでやっており、義務で苦しいというのが、それがほんとうの自分の一念ではないか」と答えておいたことがある。秘とは自分の一念である。秘とは誰からもわからないから秘である。外面の形式ではわからない奥底の一念である。したがって地獄の一念で講義をしたところで、どんなに言葉をかざろうと、わが身をかざろうと、人に感動をあたえることはできない。一念の生命の如何が、いっさい

を決定するのである。じつに厳しいではないか。

妙法蓮華経の体内に爾前の人法を入るを妙法蓮華経方便品とは云うなり

「爾前の人法」ということに留意すべきである。人と法にわけ、まず「妙法蓮華経の体内に爾前の人を入る」とは、九界の衆生が、妙法を根底にして、いっさいの活動をするということであり、またすぐ前にある「大謗法の人たりと云うとも妙法蓮華経を受持し奉る所を妙法蓮華経方便品とは云うなり」にもあたる。また別の角度からいえば、〝一切法これ仏法なり〟という信心の立ち場から、いかなる学者、指導者でも、ぜんぶ生かし、用いていくことを意味する。次に「妙法蓮華経の体内に爾前の法を入る」とは、仏界に照らされた九界の生命であり、また絶待妙の立ち場から、いっさいの経々、哲学が、妙法の流通分として用いられることである。

釈に云く円を円融円満に名くと円融は迹門円満は本門なり又は止観の二法なり又は我等が色心の二法なり

円とは完全無欠ということ、融とは融通無礙なること。法華経迹門では、空仮中の三諦を相即して説き明かし（これを円融の三諦という）、また宇宙森羅万象ことごとく実相であるとして、十界互具、百界千如、一念三千の理を説き明かした。これによって森羅万象の理が完全に説き明かされたことを意味する。円満が本門とは、およそ満とは「みつる」という意味であり、現実に仏界を顕現してこそ、初めて「みつる」といえるからである。迹門の理に対して実践活動であり、具体的事実なのである。末法においては、受持即観心で、大御本尊を信じ、唱題す

ることによって幸福生活を営んでいくことが、真の円満である。「止観の二法」とは、止とは「とどまる」ことであり、宇宙の本源の動かない理すなわち、不変真如の理であり、円融であり、迹門である。観とは観ずることであり、仏界を現ずる智慧である。ゆえに、これは具体的実践活動であり、随縁真如の智であり、円満であり、本門である。「色心の二法」とは、色とは肉体であり、心とは精神である。われわれが、現実に身をもって実践活動をしていくことは円満である。自分の心は融通無礙であり、よくわが心に万法を浮かべることができるので、円融である。

故に知ぬ南無妙法蓮華経は一心の方便なり妙法蓮華経は九識なり十界は八識已下なり

この一心とは、一念三千の一念であり、たんに精神的な心という意味とはちがう。方便とは御義口伝下（七九四㌻）に「此の方便とは十界三千なり」とあるように、一念三千の三千である。すなわち「南無妙法蓮華経は一心の方便」とは「南無妙法蓮華経は一念三千」ということなのである。

「妙法蓮華経は九識なり十界は八識已下なり」の妙法蓮華経は九識（語訳参照）であるとは、妙法蓮華経が宇宙の本源であり、生命の究極ということである。十界は八識已下とは本体に対する働きであり、生命の究極である一念のあらわれである。十界ことごとく一念の作用であり、働きであるがゆえに、釈迦多宝もまた妙法の用でしかないのである。すなわち、現実にあらわれた仏の所作は八識已下になってくるのである。ゆえに、諸法実相抄（一三五八㌻）にいわく「されば釈迦・多宝の二仏と云うも用の仏なり、妙法蓮華経こそ本仏にては御座候へ、経に云く

『如来秘密神通之力』是なり、如来秘密は体の三身にして本仏なり、神通之力は用の三身にして迹仏ぞかし、凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏は用の三身にして迹仏なり」と。ゆえに、われわれが妙法を唱えたときに、ゆうゆうと人生を見おろし、楽しみきって生活するのである。これこそ経文の「衆生所遊楽」にあたるではないか。

第二　諸仏智慧甚深無量其智慧門の事

本文

第二諸仏智慧甚深無量其智慧門の事　文句の三に云く先ず実を歎じ次に権を歎ず、実とは諸仏の智慧なり三種の化他の権実に非ず故に諸仏と云う自行の実を顕す故に智慧と言う、此の智慧の体即ち一心の三智なり、甚深無量とは即ち称歎の辞なり仏の実智の竪に如理の底に徹することを明す故に甚深と言う、横に法界の辺を窮む故に無量と言う無量甚深にして竪に高く横に広し、譬えば根深ければ則ち条茂く源遠ければ則ち流長きが如し実智既に然り権智例して爾り云云、其智慧門は即ち是れ権智を歎ずるなり蓋し是れ自行の道前の方便進趣の力有り故に名けて門と為す、門より入って道中に到る道中を実と称し道前を権と謂うなり、難解難入とは権を歎ずるの辞なり不謀にして了し無方の大用あり、七種の方便測度すること能わず十住に始めて解す十地を入と為す初と後とを挙ぐ中間の難示難悟は知る可し、而るに別して声聞縁覚の所不能知を挙ぐることは執重きが故に別して之を破するのみ、記の三に云く竪高横広とは中に於て法譬合あり此れを以て後を例す、今実を釈するに既に周く横竪を窮めたり下に権を釈するに理深極なるべし、下に当に権を釈すべし予め其の相を述す故に云云と註す、其智慧門とは其とは乃ち

前の実果の因智を指す若し智慧即門ならば門は是れ権なり若し智慧の門ならば智即ち果なり、蓋し是等とは此の中に須く十地を以て道前と為し妙覚を道中と為し証後を道後と為すべし、故に知んぬ文の意は因の位に在りと。御義口伝に云く此の本末の意分明なり、中に竪に高く横に広しとは竪は本門なり横は迹門なり、根とは草木なり草木は上へ登る此れは迹門の意なり、源とは本門なり源は水なり水は下へくだる此れは本門の意なり、条茂とは迹門十四品なり流長とは本門十四品なり智慧とは一心の三智なり門とは此の智慧に入る処の能入の門なり三智の体とは南無妙法蓮華経なり門とは信心の事なり、爰を以て第二の巻に以信得入と云う入と門とは之れ同じきなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るを智慧とは云うなり、譬喩品に云く「唯有一門」と門に於て有門・空門・亦有亦空門・非有非空門あるなり、有門は生なり空門は死なり亦有亦空門は生死一念なり非有非空門は生に非ず死に非ず有門は題目の文字なり空門は此の五字に万法を具足して一方にとどこうらざる義なり、亦有亦空門は五字に具足する本迹なり非有非空門は一部の意なり、此の内証は法華已前の二乗の智慧の及ばざる所なり、文句の三に云く「七種の方便測度すること能わず」と、今日蓮等の類いは此の智慧に得入するなり、仍て偈頌に除諸菩薩衆信力堅固者と云うは我等行者の事を説くなり云云。

語訳

諸仏智慧甚深無量其智慧門　方便品（一五三ページ）の最初に「爾の時に世尊、三昧より安詳として起ちて、舎利弗に告げたまわ

く、諸仏の智慧は甚深無量なり。其の智慧の門は難解難入なり。一切の声聞、辟支仏の知ること能わざる所なり」とあるところである。（講義参照）

先ず実を歎じ次に権を歎ず　「諸仏智慧、其深無量」とは、仏の実智（仏界の智慧）を歎じている。「其智慧門、難解難入」とは、仏の権智（九界の智慧）を歎じているということ。

三種の化他の権実　三種とは、蔵、通、別の三種である。化他とは、自行に対するものである。自行化他は修行に約す場合と法体に約す場合とがある。いまは法体に約した場合で、自行とは究竟真実の随自意の妙法である。化他とは九界の衆生を導くために方便をおびている随他意の教えである。釈迦仏法においては、自行の法とは法華経であり、化他の法とは爾前の諸経である。また日蓮大聖人の仏法においては、本地自行の法とは、三大秘法の文底下種仏法であり、垂迹化他の法とは、五時八教の釈迦仏法である。総勘文抄（五五八㌻）に「夫れ一代聖教とは総べて五十年の説教なり是を一切経と言うなり、此れを分ちて二と為す・一には化他・二には自行なり、一には化他の経とは法華経より前の四十二年の間説き給える諸の経教なり此れをば権教と云い亦は方便と名く、（乃至）二に自行の法とは是れ法華経八箇年の説なり」との仰せがある。権実とは、権とは九界、実とは仏界である。爾前経の権実は夢中の法門であり、真実ではない。爾前の仏は始成正覚の仏であり、衆生も始成正覚の仏を理想として難行苦行の修行をするのであるから、九界も仏界もはかない夢のなかのできごとと同様である。同じく総勘文抄（五六〇㌻）には「権教は難行苦行して適仏に成りぬと思えば夢中の権の仏なれば本覚の寤の時には実仏無きなり」と仰せられている。

自行の実　自行については前項のごとくである。さらにこれを文底の立ち場からいえば、大聖人のふるまいのすべてが、一切衆生をお救いくださるところの智慧であり、それが自行である。また、信心の立ち場に約せば、われわれが、大御本尊に向かい題目を唱えることが自行であり、その上に立った生活、生命活動は、ぜんぶ実智、すなわち生活の上に現われてくると

ころの本源的智慧なのである。

一心の三智　一心三観の修行によって得られる二乗、菩薩、仏の三智で一切智、道種智、一切種智である。不思議三智ともいう。大智度論三十六に「一心の中に一切智、道種智、一切種智を得て一切の煩悩及び習を断ず」とある。一切智は、一切の思想および経典に通達した二乗の智慧、道種智はあらゆる道法により、衆生の生命に仏界を湧現させようとする菩薩の智慧、一切種智とは、一切を見通していく透徹した仏智をいう。止観にはこの三智が一心に具しているとして「仏智、空を照すこと、二乗の見る所のごとくなるを、一切智と名く。仏智、仮を照すこと、菩薩の見る所のごとくなるを、道種智と名く。仏智、空仮中を照し、皆実相を見るを、一切種智と名く。ゆえに三智は一心の中に得というなり」と述べている。

竪に如理の底に徹する　仏の実智というものは竪に永遠である。すなわち時間的に永遠であるということ。如理の底とは宇宙の本源であり、南無妙法蓮華経ということである。

横に法界の辺を窮む故に無量と言う　横にとは空間である。法界とは現象界である。仏の智慧は宇宙大であることをいう。

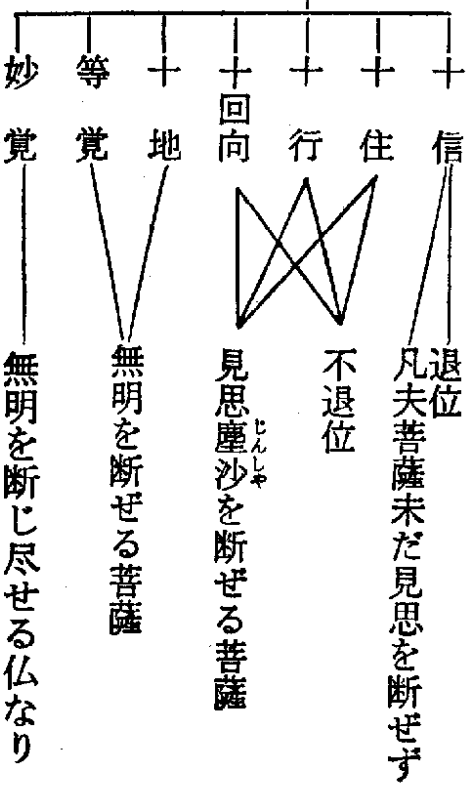
自行の道前の方便進趣の力　本文に「門より入って道中に到る道中を実と称し道前を権と謂うなり」との仰せがあるように、其智慧門、すなわち権智は、権智として、それだけにとどまってよいものではない。必ず前に進むべき力を兼ね持っているという。九界の智慧は、よく仏界を薫発することをいうのである。われわれの立ち場で考えれば、其智慧門は信心の門である。われわれには悩みがあり、願いがある。これらの悩み、願いは権智である。それによって信心しようとする心が起き、さらに信心によって幸福生活を営むのである。九界即仏界と開くカギが信心なのである。

不謀にして了し無方の大用あり　不謀とは、南無妙法蓮華経は難解難入で謀ることができないということ。「不謀にして了し」とはそれがいかに難解難入であっても、信の一字で実智を感得することができるという意味である。無方とは「はかり知れない」ということ。大用とは、大なる力用という意味で、妙法はいっさいを変化させる力をもっているのでこういう。結局われわれが

大御本尊を信じ、南無妙法蓮華経と唱えるときに、自然に、妙法の境涯に住して偉大な力を発揮することができることをいう。

七種の方便測度すること能わず　七種の方便とは、蔵教の声聞・縁覚・菩薩、通教の声聞・縁覚・菩薩および別教の菩薩である。これらの蔵、通、別の三教に通じた二乗や菩薩の境涯では、仏の智慧がいかに甚深無量かを、とうていはかり知ることはできないという意味。

十住に始めて解す十地を入と為す　十信とか十住というのは、釈迦仏法の別教において立てる菩薩の五十二位の中のものである。今五十二位について示せば、次のようになる。十信（信心・念心・精進心・慧心・定心・不退心・回向心・護法心・戒心・願心）十住（発心住・治地住・修行住・生貴住・具足方便住・正心住・不退住・童真住・法王子住・灌頂住）十行（歓喜行・饒益行・無違逆行・無屈撓行・無癡乱行・善現行・無著行・難得行・善法行・真実行）十回向（救護衆生離衆生相回向・不壊一切回向・等一切諸仏回向・至一切処回向・無尽功徳蔵回向・入一切平等善根回向・等随順一切衆生回向・真如相回向・無縛無著解脱回向・入法界無量回向）十地（歓喜地・離垢地・発光地・焔慧地・極難勝地・現前地・遠行地・不動地・善慧地・法雲地）等覚・妙覚。



一代聖教大意（三九五ページ）にいわく「此の教（別教）の意は五十二位を一一の位に多倶低劫を経て衆生界を尽して仏に成るべし一人として一生に仏に成る者無し、又一行を以て仏に成る事無し一切行を積んで仏と成る微塵を積んで須弥山と成すが如し、華厳・方等・般若・梵網・瓔珞等の経に此の旨分明なり、但し二乗界の此の戒を受くる事を嫌ふ、妙楽の釈に云く『偏く法華已前の諸経を尋ぬるに実に二乗作仏の文無し』文」と。すなわち、十信とは、仏道修行を始めたばかりの段階であり、まだ縁に紛動されやすい。ところが十住にくると不退位となり、絶対に退転しないという決意がかたまるのである。このとき妙法がすごいものだと初めてわかるようになる。十地とは、不退転の信心の境涯である。いまでいえば、三障四魔、三類の強敵と現実に戦い、それにうち勝っていく強い信心の境涯である。この境涯を難解難入の入とするのである。

中間の難示難悟は知る可し　中間とは十住と十地の中間、すなわち十行と十回向を指す。このような位では、とうてい「諸仏智慧、甚深無量」であることを理解できないということはわかるであろうとの意味。

而るに別して声聞縁覚の所不能知を挙ぐることは執重きが故に別して之を破するのみ　方便品に「難解難入」の次に「一切声聞、辟支仏、所不能知」とあり、別して声聞縁覚をとりあげているのは、二乗がとくに執著が強いので、別してこれを破折したのであるという意味。

竪高横広とは中に於て法譬合あり此れを以て後を例す　法華文句に「竪に高く横に広し」とある文の中に、法譬合があり、これは実智を説明したものであり、これをもって後の権智をも例するのであるという意味。「仏の実智の竪に如理の底に徹することを明す故に甚深と言う、横に法界の辺を窮む故に無量と言う無量甚深にして竪に高く横に広し」が法であり、「譬えば根深ければ則ち条茂く源遠ければ則ち流長きが如し」が譬であり、「実智既に然り権智例して爾り云云」が合である。

今実を釈するに既に周く横竪を窮めたり下に権を釈するに理深極なるべし　実智を釈して、すでに実智は空間的には宇宙大であり、時間的には永遠であることは示されたとおりである。さらに実智と同様、権智もまた、理深極である。その理はじつ

に深く、究極に達しているのであるという意味。

下に当に権を釈すべし予め其の相を述す故に云云と註す　文句の「実智既に然り権智例して爾り云云」とあるなかの「云云」ということばは、その以下に権を釈すのに、あらかじめ、その相を述べようとして「云云」といったのであるという。

其智慧門とは其とは乃ち前の実果の因智を指す　「其智慧門」の其とは、その前にある「諸仏智慧、甚深無量」の仏果に至るまでの因行としての智慧すなわち権智をさすのである。すなわち、蔵通別と修行し、十地に至った究極の智慧を門ともいい、権智ともいうのである。現在でいえば、「信」の一字が実果の因智である。

若し智慧即門ならば門は是れ権なり若し智慧の門ならば智即ち果なり　もし、智慧即門、すなわち、智慧をそのまま門ととるならば、門はあくまでも権である以上、その智慧は権智ととるべきである。しかし、この「其智慧門」を智慧の門ととるならば、門は智慧にはいる門であり権であるが、智慧は仏果となるのであるとの意味。これは、九界の智慧が即仏界の智慧となることを示すことにもなる。

十地を以て道前と為し妙覚を道中と為し証後を道後と為すべし　文句に「蓋し是れ自行の道前の方便進趣の力有り故に名けて門と為す、門より入って道中に到る道中を実と称し道前を権と謂うなり、難解難入とは権を歎ずるの辞なり不謀にして了し無方の大用あり、七種の方便測度すること能わず十住に始めて解す十地を入と為す」とあるのは、けっきょく十地を道前とし、妙覚を道中とし、妙覚を得てからを道後とすべきであるという意味である。

故に知んぬ文の意は因の位に在りと　以上の点から結論すると「其智慧門」の文の意は、あくまでも因の位にあるのだとの意味である。われわれの信心の立ち場からいえば、門とは信心の門であり、難解難入の解といい入といい、ぜんぶ信心のなかに含まれるのであり、信心によって成仏するのであるから、信心こそ成仏の因なのである。

此の本末の意　本とは天台の法華文句の文、末とは妙楽の法華文句記の文、意とは意味ということである。

根とは草木なり草木は上へ登る此れは迹門の意なり、源とは本門なり源は水なり水は下へくだる此れは本門の意なり　「草木は上へ登る」とは従因至果を示し、「水は下へくだる」とは従果向因を示している。従因至果は迹門、従果向因は本門である。薬草喩品の「雖一地所生一雨所潤等の事」の御義口伝（七二九㌻）のなかに「一地とは迹門の大地一雨とは本門の義天・一地とは従因至果・一雨とは従果向因、末法に至って従果向因の一雨を弘通するなり」とあるように、迹門では、あくまでも、一切衆生の心中に、仏性があることを明かしたのである。仏果を現実に証得した、仏のことを中心にしたものではない。一切衆生に、仏性があるゆえに、仏界を顕現することが人生の目的なりとすることは、因より果に向かわしめたといえるのである。本門では、仏を中心に、仏が一切衆生を救おうとする慈悲の活動が表である。ゆえに、果より因に向かうのである。これは一往の解釈であり、さらに深くは、日寛上人の「末法相応抄」にくわしい。

条茂とは迹門十四品なり流長とは本門十四品なり智慧とは一心の三智なり　条茂とは空間の無限であり、空間の森羅万象ことごとく妙法の当体であることを明かしたのが、法華経迹門であるからこう仰せられたのである。流長とは時間的に永遠であるということで、本門寿量品において五百塵点の顕本を明かしたのでこういわれたのである。一心の三智とは前に示したとおりであるが、ここでは南無妙法蓮華経と拝すべきである。ゆえに次に「三智の体とは南無妙法蓮華経なり」と仰せられたのである。

能入の門　門というのは、結局、南無妙法蓮華経にはいる門であり、次に「門とは信心の事なり」と仰せられている。能入の能の字に心を留めるべきである。

第二の巻に以信得入と云う　「信を以て入ることを得」とよむ。法華経譬喩品第三の偈の文（一三九㌻）に「汝舎利弗すら、尚此の経に於いては、信を以って入ることを得たり、況や余の声聞をや、其の余の声聞も、仏語を信ずるが故に、この経に随順す、己が智分に非ず」とある。智慧第一の舎利弗すら、信によって悟ったということ。

今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るを智慧とは云うなり　「南無妙法蓮華経と唱奉る」とは信行の題目である。但余念なく大御本尊を信じ、南無妙法蓮華経と唱えるならば、以信代慧の原理により、いっさいの幸福生活の源泉となる智慧を生ずるのである。それが真実最高の智慧であるという意味。

唯有一門　譬喩品第三（二〇九ページ）に「是の舎は唯一門有り。而も復狭小なり。諸子幼稚にして未だ識る所有らず。戯処に恋著せり。或は当に堕落して火に焼かるべし。我当に為に怖畏の事を説くべし。此の家已に焼く。宜しく時に疾く出でて、火に焼害せられしむこと無かるべし」と。これは「三車火宅の譬え」のなかに出てくる一節である。長者が、火宅のなかにいる子供を、なんとかして助けようと、いろいろ念じているところである。われわれの信心に約せば、真に幸福になる道は大御本尊を信ずる以外にないということである。

有門・空門・亦有亦空門・非有非空門　蔵教は多く有門、通教は多く空門、別教は多く亦有亦空門、円教は多く非有非空門とされている。しかし、四教それぞれにこの四門があるとして十六門と立てることもある。有門とか空門とかは、事物が、本来具体的な実在として把握できるか、できないかという問題なのである。有門というのは、いっさいは具体的個物として存在すると立てるのである。空門とは、それらの存在は仮にそうみえるものであって、たんなる幻映にすぎないし、一切は本来空であるとする。しかしこれらの考え方は、ともに部分観であり、有の辺もあれば空の辺もある、とするのが亦有亦空門である。しかし、これとて折衷的なものであり、徹底した中道観ではない。以上は爾前教で説くところの原理であり、法華経では、さらにこの上に非有非空門と立て、有に非ず空に非ずとして中道法相の理を立てる。しかも、先の有門、空門、亦有亦空門、ことごとくそなわっているとする。これを大聖人は、さらに生命論の上から説かれているのが次の「有門は生なり空門は死なり亦有亦空門は生死一念なり非有非空門は生に非ず死に非ず」との仰せである。

亦有亦空門は五字に具足する本迹なり非有非空門は一部の意なり　これは四門をさらに深く説いたものである。およそ生命の

本質というものは、有とか無とかいう生命の部分的様相だけで説明できるものではない。一生成仏抄（三八四㌻）には次のように仰せである。「抑妙とは何と云う心ぞや只我が一念の心・不思議なる処を妙とは云うなり不思議とは心も及ばず語も及ばずと云う事なり、然れば・すなはち起るところの一念の心を尋ね見れば有りと云はんとすれば色も質もなし又無しと云はんとすれば様様に心起る有と思ふべきに非ず無と思ふべきにも非ず、有無の二の語も及ばず有無の二の心も及ばず有無に非ずして而も有無に偏して中道一実の妙体にして不思議なるを妙とは名くるなり、此の妙なる心を名けて法とも云うなり、此の法門の不思議をあらはすに譬を事法にかたどりて蓮華と名く、一心を妙と知りぬれば亦転じて余心をも妙法と知る処を妙経とは云うなり」このように生命の本質は有無に偏しないで、しかも現実としては、あるときは有＝生とあらわれ、あるときは無（絶対無ではない）＝死とあらわれるのである。妙法蓮華経とはそのような実体なのである。したがって生命の本質は非有非空門であるが、そのなかに有も無もともに具足するのである。法華経の本迹は、生命の本質を説こうとして、あるときは有に偏し、あるときは空を中心に説く。それは全部妙法に具足するのである。「非有非空門は一部の意」の意とは、文義意のなかの意であり妙法をさす。一部とは法華経二十八品である。

偈頌に除諸菩薩衆信力堅固者　方便品の偈頌（一五六㌻）のなかに「是の如き大果報、種種の性相の義、我及び十仏の仏、乃し能く是の事を知しめせり、是の法は示すべからず、言辞の相寂滅せり、諸余の衆生の類、能く得解すること有ること無し、諸の菩薩衆の、信力堅固なる者をば除く」とあり、信力堅固の者のみが仏の智慧を会得できるといっている。

通解

方便品第二の「諸仏智慧、甚深無量」の経文について、文句の三では次のようにいっている。この文のうち、ま

ず「甚深無量」の文は、実智（仏界の智慧）を賛嘆し説明し、次に「其智慧門、難解難入」は権智（九界の智慧）を賛嘆しているのである。実というのは諸仏の智慧であり、蔵、通、別の三種の化他の権実ではない。すなわち、爾前教で説くところの権実は、「実」は始成正覚の仏であり、「権」はその仏を理想として難行苦行の修行を積む衆生であり、ともにはかない夢の中のできごとのようなものであって、ここではそのような権実をいうのではない。いま実というのはまさしく自行の実、すなわち究竟真実の随自意の妙法のことなのである。

しからば、この智慧の体とはなにかといえば、それは、一切智、道種智、一切種智の三智を妙法の一法に具足するという一心の三智をいうのである。「甚深無量」というのは、称賛のことばである。仏の実智というものは竪に永遠であり、宇宙の本源の妙法を悟っていることを明かすゆえに甚深というのである。横に宇宙大の広がりをもっているので無量というのである。まことに仏の智慧というものは甚深無量であって竪に高く横に広いのである。譬えば根が深ければ大木となり枝や葉は茂り、源が遠ければ流れが長いようなものである。実智がこのように甚深無量である。権智もまた難解難入であることはやはりこの例をあてはめることができよう云云。

「其智慧門」は権智を賛嘆し、説明しているのである。思うにこれは、権智は権智としてそれだけにとどまるものではなく、必ず前に進むべき力を持っている。すなわち、九界の智慧は、よく仏界を薫発するのである。ゆえに名づけて門というのである。人が家の中にはいるにはまず門からはいる例えのごとく、門の前の道を道前といい、門からはいって家にいたるあいだの道を道中と称し、道前を権といい、道中を実と称するのである。「難解難入」とは権を嘆ずるのことばである。妙法の境涯というものは、難解難入ではかることができない。し

かしそれがいかに難解難入であっても信の一字で易解易入となり実智を感得でき、そこに計り知れない力用を発揮するのである。この仏の智慧が、いかに甚深無量であるかということは、七種の方便、すなわち、蔵教の声聞・縁覚・菩薩、通教の声聞・縁覚・菩薩および別教の菩薩等の境涯では、とうていはかり知ることはできないのである。十住にきて不退の決意がかたまり、このとき、初めて妙法がすごいものだとわかるようになってくる。さらに、十地にきて絶対の不退の境地に立脚して、信心の門に入ったといえるのである。いま初めの十住と後の十地をあげることによって、その中間の十行と十回向の境涯では、今なお仏の智慧の甚深無量なることを示すことも、悟ることもできないことを知るべきである。

したがって、別教の菩薩ですら仏の境地は理解できない。しかし、いま声聞と縁覚に限って「一切声聞、辟支仏、所不能知」と弾呵したのは、二乗が特に執着が強いので、別してこれを破折したのである。

以上が文句の三の文であるが、妙楽は、これをうけて、さらに法華文句記の第三巻に次のようにいっている。

「文句に『竪に高く横に広し』とある文の中に法譬合があり、これは実智を説明したものであり、これをもって後の権智をも例することができるのである。すなわち、法とは『仏の実智の竪に如理の底に徹することを明す故に甚深と言う、横に法界の辺を窮む故に無量と言う無量甚深にして竪に高く横に広し』の文を指し、『譬えば根深ければ則ち条茂く源遠ければ則ち流長きが如し』が譬であり、『実智既に然り権智例して爾り云云』が合である。

今、実智を釈して、実智はすでに空間的には宇宙大であり、時間的には永遠であることは明らかとなった。さらにその文の下には権智を釈して、権智もまた実智と同様、その理はじつに深きことも示されているとおりであ

る。下に権智を釈さんとするに、まずあらかじめその相貌をのべようとして『云云』といったのである。『其智慧門』の其とは、その前にある『諸仏智慧、甚深無量』の仏果に至るまでの因行としての智慧すなわち権智を指すのである。もし智慧即門、すなわち、智慧をそのまま門ととるならば、門はあくまでも権である以上、その智慧は権智ととるべきである。しかし智慧にはいる門ととるならば、智慧は仏果となり、実智となるのである。すなわち、九界の智慧とは妙法を信ずることであり、それは即仏界の智慧とあらわれるのである。『蓋し是れ』等とあるのは、結局十地を道前とし、妙覚を道中とし、妙覚を得てからを道後とすべきである。以上の点を総合すると『其智慧門』とは、あくまでも因の位にあるということが明瞭である」と。

この「諸仏智慧、甚深無量」および天台、妙楽の釈について、御義口伝には、次のように仰せである。この天台および妙楽の釈がなにをいわんとしているかは明らかである。そのなかに「竪に高く横に広し」とあるが、竪とは永遠の生命を説き明かした本門であり、横とは、理の一念三千、諸法実相を説き明かした迹門を意味する。文句には「根深ければ則ち条茂く源遠ければ則ち流長きが如し」とあるが、根とは草木である。草木は大地より天に向かって上に登るのであり、従因至果の姿を示しており、したがって迹門を意味する。源とは本門である。源とは水源であり、水は下へくだるものであり、これは従果向因の姿であり、したがって本門を意味するのである。

「条茂し」とは空間の無限であり、宇宙の森羅万象ことごとく妙法の当体であることを明かした法華経迹門十四品であり、「流長し」とは時間的に長遠であることを意味するものであり、生命の永遠を明かした本門十四品を

意味するものである。智慧とは、一心の三智なるをいう。門とは、この一心の三智にはいるところの能入の門である。しからばこの三智の体とはなにか。それは南無妙法蓮華経なのである。しからば、その南無妙法蓮華経にはいる門とは、信心なることは明らかであろう。ゆえに第二の巻の譬喩品第三においては「以信得入」と説き、「大智舎利弗すら信を以て成仏したのである、まして他の声聞は信がなければ成仏できるわけがない」として、成仏の根本は、信であるといっているのである。「入」と「門」とは、ともに信心のことを意味するものであり、同じことである。

今、日蓮大聖人およびその門下が信心強盛に、唯余念なく南無妙法蓮華経と唱えるならば「以信代慧」の原理により、いっさいの幸福生活の源泉となる智慧を生ずるのである。それが真実最高の智慧なのである。

譬喩品第三には「唯一門有り」とあり、真に幸福になる道はただ一つ、大御本尊を信ずる以外にないことを示されている。門においては有門、空門、亦有亦空門、非有非空門の四門等がある。有門は蔵教、空門は通教、亦有亦空門は別教、非有非空門は円教であるが、いまさらに一歩深く生命論に約し、論ずれば、有門は生であり、空門は死であり、亦有亦空門は生死とあらわれたる一念の生命を意味し、非有非空門は、生に偏せず、死に偏しない、生死をはなれた生命の本質を意味すると考えられよう。

また、この四門を文底の仏法の立ち場から論ずれば、四門はことごとく妙法に具足するのである。有門とは題目の文字である。なぜなら、文字は目に具体的な形として見えるからである。この題目の文字は五字七字であるが、実はこの五字に万法を具足し、宇宙大の力がこめられ、けっして一方に偏するようなことはないのである。

これが空門の意義である。亦有亦空門とは、妙法の五字に具足する本迹であり、法華経二十八品とも考えられる。これは、ある時は、有を中心に、ある時は、空を中心に生命の本質を説こうとするものである。しかし、詮ずるところ、すべてが妙法に含まれているのである。非有非空門は、法華経一部八巻二十八品の根本たる、文義意の中の意の法華経たる南無妙法蓮華経なのである。

この南無妙法蓮華経という、内証の智慧は、法華以前の二乗等の到底及ぶところではない。このことを法華文句の三には「七種の方便である二乗、菩薩の到底考えおよぶところではない」と断言されているのである。

しかしながら、今日蓮大聖人およびその門下は、この南無妙法蓮華経の智慧にはいることができるのである。よって、方便品の偈に「諸の菩薩衆の、信力堅固なる者をば除く」とあり、信力堅固の者のみが仏の智慧を会得できるといっているのは、われわれ法華経の行者のことを説いているのである。

講義

日蓮正宗の勤行は、題目を正行として唱え、方便品と寿量品を助行として読誦する。このことについて、日寛上人は「当流行事抄」に、「大覚世尊教えを設くるの元意は一切衆生をして修行せしめんが為なり、修行に二有り所謂正行及び助行なり、宗々殊なりと雖も同じく正助を立つ同じく正助を立つれども行体各異なり、流々の正助は今論ぜざる所なり、当門所修の二行の中に初めに助行とは方便・寿量の両品を読誦し正行甚深の功徳を

助顕す、譬えば灰汁の清水を助け塩酢の米麺の味を助くるが如し、故に助行と言うなり、此の助行の中に亦傍正有り、方便を傍とし寿量を正と為す、是れ則ち遠近親疎の別有るに由る故なり、傍正有りと雖も倶に是れ助行なり、次に正行とは三世諸仏の本懐・法華経二十八品の最要・本門寿量の肝心・文底秘沈の大法・本地難思・境智冥合・久遠元初の自受用身の当体・事の一念三千・無作本有の南無妙法蓮華経是れなり、荊渓尊者謂る有り『正助・合行して因って大益を得』と云云」（富要集第三巻一七九ページ）と仰せられている。

さらに立ち入って、方便品をなぜ読誦するのか、寿量品をなぜ読誦するのかといえば、方便品は「所破」のためと「借文」のためである。また寿量品は「所破」のためと「所用」のためである。今、方便品の所破借文について考えてみることにしよう。当流行事抄には、「今謹んで解して曰く文々句々自ら両辺有り所謂文義なり、文は是れ能詮・義は是れ所詮・故に読誦に於いて亦両意を成ず、是れ則ち所詮の辺に約せば所破の為なり、能詮の辺に約せば借文と為るなり、故に所破の為とは即ち迹門所詮の義を破するなり、借文の為とは迹門能詮の文を借りて本門の義を顕わすなり」とあり、また「且く唯仏与仏等の一文の如き汎く之を論ずれば則ち而も多意を成ず、謂く所破の辺自ら二意を含む、一には体外の迹門即ち是れ今日・始成正覚の仏の所証の法なり在々処々多く此の意に拠る、二には体内の迹門・此れ即ち従本垂迹の仏の所証の法なり読誦の意正しく此に在り、又借文の辺も又両意を含む、一には近く久遠本果所証の法を顕わすなり通得引用多く此の意に拠る、二には遠く久遠名字の所証の法を顕わすなり読誦の意正しく此に在り云云、当に知るべし若し文底の眼を開く則は此の文即ち是れ久遠名字の本仏・唯仏与仏乃能究尽なり云云」（富要集第三巻一八一ページ）と仰せられているのである。

以上の点からすれば、結局、方便品も、大聖人の仏法の偉大さを証明するためのものであって、釈迦仏法それ自体のために、方便品を読誦するのでないことは明らかであろう。

ゆえに、この「諸仏智慧、甚深無量」の文も、文字通りの意味からみれば、迹門の仏の智慧が、甚深無量であるととれるわけであるが、それは表面的な解釈であって、大聖人の御心にかなうものではない。迹門の仏の智慧が、甚深無量といっても、真実の甚深無量ではない。いまだ永遠の生命を説かず、生命の奥底を説き極めていない。しかし、文底の眼を開いて、かえってこの文をみるならば、まさに、末法の御本仏日蓮大聖人の御智慧こそ宇宙大であり、久遠元初の自受用身として永遠の仏であり、真実の「甚深無量」なのである。また、その智慧には、われわれはとうてい及ぶことなく、その智慧にはいる門は、難解難入とされているが、もし大聖人の仏法からこれをみるときには、受持即観心の原理により、信心をもってこの智慧を開くことができるのである。ゆえに智慧にはいる門とは「信心」と訳すのである。

いま「諸仏智慧、甚深無量」を生命論のうえからいえば、「甚深」とは生命の永遠ということである。「無量」とは、われわれの生命が宇宙法界に偏満しているということである。生命の永遠は法華経「本門」において説かれ、われわれの生命が宇宙大であることは法華経「迹門」ですでに説かれている。すなわち、法華経迹門では、諸法実相と説き、ありとあらゆる現象がことごとく妙法蓮華の当体であり、われわれの一念の生命にすでに万法を具えていることを明らかにし、さらに、本門寿量品では、五百塵点劫の久遠を説いたのであった。

およそ、一つの事物を把握するにしても、それを環境との関係においてとらえると同時に、その事物は過去の

幾多の歴史をはらんで実在し、また未来をはらんで実在するものである以上、時間的にもとらえていかなければ、真に把握したことにはならないのである。たとえば、ある一人の人をどういう人物かとみるときに、無意識のうちに、現実のその人の姿、形、または環境等を見ると同時に、その人の過去の経歴を見ようとするのが常ではないだろうか。これらのことは、世間一般にもよく行なわれることである。

仏法は、なにも仮空な特別なことを説いているのではない。仏法はあくまで道理である。ただ生命の奥底を説き切ったものであるので、難信難解なのである。釈尊の四十余年の爾前の経々では、実にこの生命に対する観察が不徹底であった。横に法界を尽くすわけでもなく、竪に永遠の生命を説くのでもなかった。ゆえに釈尊自身、これらの経々をさして「未顕真実」といって打ち破ったのである。法華経にきて初めて、一念三千が明かされ、横に法界を窮め、竪に永遠の生命が明かされたのであった。

まず横に法界を尽くすとは、一生成仏抄に（三八三㌻）「一心法界の旨とは十界三千の依正色心・非情草木・虚空刹土いづれも除かず・ちりも残らず一念の心に収めて此の一念の心・法界に徧満するを指して万法とは云うなり」とあり、また日寛上人は、三重秘伝抄において「問う止観の第五に云く『此の三千は一念の心に在り』等云云、一念微少・何ぞ三千を具するや。答う凡そ今経の意は具遍を明かす、故に法界の全体は一念に具し一念の全体は法界に遍し、譬えば一微塵に十方の分を具し一滴の水の大海に遍きが如し云云」（富要集第三巻二〇㌻）と仰せられている。

これらの文は、数多くある。皆ことごとく、われわれの生命が即大宇宙の生命なることを、一念三千の大仏法

原理によって明かしているところである。一念三千のことについては、次項の「第三唯以一大事因縁の事」の講義で論ずることにする。ここでは、一往、一念三千によって法界が尽くされたということにとどめておこう。

次に、竪に永遠の生命が説かれたというのは、寿量品における五百塵点劫の顕本をいうのである。その文（四九六ページ）にいわく「一切世間の天人、及び阿修羅は皆今の釈迦牟尼仏、釈氏の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を得たまえりと謂えり。然るに善男子、我実に成仏してより已来、無量無辺百千万億那由佗劫なり」と。さらにその長さを「譬えば、五百千万億那由佗阿僧祇の三千大千世界を、仮使人有って、抹して微塵と為して、東方五百千万億那由佗阿僧祇の国を過ぎて、乃ち一塵を下し、是の如く東に行きて是の微塵を尽さんが如き、（乃至）是の諸の世界の、若しは微塵を著き、及び著かざる者を尽く以って塵と為して、一塵を一劫とせん。我成仏してより已来、復此に過ぎたること百千万億那由佗阿僧祇劫なり」と説いているのである。

しかし、釈尊が、このように寿量品において、永遠の生命を説くといえども、まだその限界があるのである。一には、釈尊は、仏の境涯の上において、久遠の生命を説いたということである。これはまだ色相の仏の域を脱していない。みずからを理想化し、その理想化した仏の久遠を説いたにすぎない。したがってこの仏は、作られた仏であり、着飾った仏であり、あたかも水に映る月のごとき迹中の虚仏であり、衆生化導のために世情に随順する垂迹化他の仏なのである。したがって、いまだ生命の真実の姿を如実に説き明かしているとはいえない。ゆえに、日寛上人は、文底秘沈抄に次のごとく仰せられている。

「問う若し爾らば本果は猶迹仏化他の成道と為んや。答う文底の意に准ずるに実に所問の如し、謂く本果の成道に既に四教八教有り全く今日の化儀に同じきが故なり、文の一（二十一）に云く『唯本地の四仏は皆是れ本なり』云云、籤の七に云く『既に四義浅深不同有り故に知んぬ不同は定めて迹に属す』云云、又云く『久遠に亦四教有り』云云、又云く『昔日已に已今を得』等云云、故に知んぬ本果仍是れ迹仏化他の成道なり、応に知るべし三蔵の応仏次第に昇進して寿量品に至り自受用身と顕わる故に応仏昇進の自受用身と名づくるなり、是れ則ち今日の本果と一同なり云云」（富要集第三巻八八ページ）と。

二には、永遠といえども、いまだ五百塵点劫というように時を限定しているゆえに、いかにその時が長遠であっても、これでは本当の無始無終の生命観にはならないということである。

これに対して、日蓮大聖人は、凡夫位のお立ち場から、久遠の生命を明かされている。すなわち、凡夫のわれわれの生命自体が、無始無終であるとお説き遊ばされている。

御義口伝（七五九ページ）には「久遠とははたらかさず・つくろわず・もとの儘と云う義なり、無作の三身なれば初めて成ぜず是れ働かざるなり、卅二相八十種好を具足せず是れ繕わざるなり本有常住の仏なれば本の儘なり是を久遠と云うなり、久遠とは南無妙法蓮華経なり」と仰せられている。

同じく、御義口伝（七五二ページ）に「されば無作の三身とは末法の法華経の行者なり無作の三身の宝号を南無妙法蓮華経と云うなり（乃至）惣じて伏惑を以て寿量品の極とせず唯凡夫の当体本有の儘を此の品の極理と心得可きなり」とも仰せられているのである。このことによって明らかなごとく、釈尊の、仏を中心とする生命観、し

かも永遠の生命も不徹底である法門は、理の上の法相であって、大聖人の説かれた凡夫の当体本有のまま無始無終の生命観こそ真実であり、より本源的なのである。

永遠の生命

この生命の永遠ということに関して、われわれの生活をとおして、思索してみよう。現代の多くの人々は、生命に対してはなはだ無知である。しかし、幸福ということにせよ、人生ということにせよ、日常の生活にせよ、ことごとく自分の生命と切っても切り離せないことはわかる。それほど自分にもっとも大事な問題が、もっともおろそかにされているということは、まったく迂闊な話といえよう。また一方では、偏頗な生命観に固執する人もいる。迷信を少し装飾したていどの霊魂説や、また、それと相対する唯物思想が、大きく世を害していることに注目すべきである。とくに、最近では、世の知識階級といわれる人の中に、唯物論的な考え方のもとに、死後の生命は迷信であるとして信じない人もいる。

そこで、科学においては、生命についてどう考えているか、またその限界と仏法との関係を、とくにオパーリンの「生命の起原」を見ることによって明らかにし、さらに現代の現世主義的生命観に批判を加え、最後に生命の永遠であることを論じていこう。

生命の起原ということは、西洋においても、昔から今日に至るまで、人々の深い関心事であった。キリスト教においては、生命は神の創造によるとされ、その他、自然発生説、あるいは生命の連続説等があり、これらの説

は、多くの学者によって否定されまたは修正されてきた。そして、近頃の有力な説として挙げられるのは、オパーリンの学説である。彼はソビエトの生化学者であって、地球の進化過程と生命発生の関係を、極めて多量な資料によって体系づけ、一九三六年に「生命の起原」と題して発表した。彼は炭素化合物が発展していって第一に有機化合物が生成され、第二に蛋白質が生成され、第三の段階として物質代謝の発生があったと説き、そして第三段階において生命が発生したといえると述べている。これは要するに、生命は地球外から飛んできたものではなく、地球自体が進化し、その進化過程において地球自体から生命が発生したと説くのである。

さて、生命に対する考え方には、二つの大きな流れがある。一つは観念論であり、一つは唯物論である。そして、オパーリンも「この生命の本質に関する問題は、最古の時代から現代に至るまで、つねに二つの和解し難い哲学の陣営――観念論と唯物論――の間で行なわれてきた激烈な思想闘争の基本的なよりどころの一つであったし、また現在でもそうである」と述べているごとく、生命観の対立が、思想の対立の根本原因なのである。

観念論で説くところの生命観は、大体次のようである。生命の本質は、物質を超越した霊魂あるいは生気であって、物質は、霊魂または生気が生物をつくり、生物に形態や構造の合目的性をあたえ、呼吸と運動の能力を所有せしめ、一般にこれらを生き物にするところの材料にすぎない。そして霊魂が飛び去ると死が訪れ、生命のないぬけ殻――死体が残るのみであると。

オパーリンは、この観念論の基盤をなす生命論を否定し、唯物論の見地に立脚する。彼は、次のように述べている。「唯物論はこれと正反対の観点から、生命の本質の問題に接近する。唯物論は自然科学が得た事実にもと

づいて、生命はほかの全世界と同様に、その本質は物質的であり、生命を理解するためには、実験的にとらえられない魂の始原などというものを認識する必要のないことを確信する。それのみか、唯物論の立ち場からは、外界を客観的に研究することこそ、生命の本質の理解に到達するだけでなく、生物的自然を人類の福祉のために変化させ改造しうる確実な方法なのである」と。

彼はさらに、生命を全物質と同一視する機械的唯物論を否定し、弁証法的唯物論を強調するのである。「……このように、生命はその性質上物質的である。しかし生命は全物質に不可分な共通の性質ではない。生命は生物にしかない。生命は、生物界とは質的に異る物質の特殊な運動形態であり、生物のみに内在する特異な生命学的性質および法則であって、これは無機的自然を支配する法則だけに解消しうるものではない」と。彼は、ここでも述べているごとく、生命を単に静的なもの、すなわち物質それ自体としてとらえているのではなく、生命は「物質の特殊な運動形態であり、生物のみに内在する生物学的特質および法則性である」と生命を動的にとらえているのである。

彼の生命に対する考察は、こうした弁証法的唯物論の見地に立ったものであり、その前提にもとづき「生命の起原」も展開されているのである。この弁証法的唯物論については後にふれるところであるが、二十世紀の偉大なる科学者が、多くの実験と資料とによって、発表した「生命の起原」それ自体については、高く評価してよいと思う。

また、彼よりも少しおくれて、イギリスの物理学者・バナールも、「生命の起原」に関して、根本的に同じ結論に到達していることを考えるときに、真実を多く含んでいることを知らされるのである。

この説が、また仏法の説くところに一歩近づいていることも知るべきである。仏法においては、宇宙の森羅万象はことごとく、妙法蓮華経の当体であると説かれている。この妙法蓮華経は生命の本質であり、したがって宇宙の森羅万象は、ことごとく、その本質を論ずれば生命体なのである。すなわち、地球自身も一個の生命体なのである。地球自身から生命体が発生したとすれば、地球が、それ自体に生命を発現させる力を内在している一個の偉大なる生命体であるということが納得されやすくなる。事実、今日の科学者の中で、広い意味では一切が生命体であることを否定する人はほとんどいなくなっているのである。

ここで、われわれが考えなければならないことは、オパーリン等の説く生命観は、生物学的見地よりする生命観であるということである。すなわち「生命は生物にしか存在しない」との前提に立っているのである。この生物学の目指すところは、「生物一般にそなわっている生命とは何か」と問い、その本質を理解して、人間の欲するように生物を変化させ医学や農業に役立てようというものである。なるほど、こうした研究を推し進めてゆくには、どうしても唯物的見地に立たざるをえない。しかし、これは医学や農業に大いに役立ったとしても、「人生をいかに生きるべきか」「いかにしたら幸福が得られるか」といった人生の根本問題は、解決できないのである。むしろ、このような唯物的生命観をもって、人生の根本問題を解決しようとしたならば、生命の尊厳を見失ってしまう。

またオパーリン等の科学者が問題にするのは、あくまで生命が発現し発展するという前提に立った変化現象であり、部分観である。もともと彼が前提としている弁証法的唯物論それ自体が、物事を動的にとらえ、変化現象

に着目している以上、それを前提として出発している彼の「生命の起原」が、そうした部分観になるのは当然といえよう。仏法では、このような変化の世界を「仮有の世界」と呼んでいるが、まさに彼らが問題にしているところは、有為転変する「仮有の世界」であり「流転の世界」である。これに対し、仏法では、変化する面を認めつつも、常住の面を根底に置いているのである。

したがって、オパーリンが「もともと生命はなかったが、物質の変化によって生命が発生した」というごとく、科学者達の考え方の基礎は「もともとそうでなかったものが、変化してそうなった」といったものであり、彼らには、「もともとあったものが、縁にふれて発現してくる」といった考え方は、甚しく欠如しているようである。むろん、科学は、現象形態より実体を探ろうというものであるがゆえに、そのように考えることは当然であろうが、しかし、それでは、物事の経過、すなわち物事の「いかに」を説明し得ても、根本原因は、究明され得ず、単に不問にふすに止まるであろう。

アメリカの社会学者・マッキーヴァーはいう。「科学は、わたしたちの最終的な疑問については、なに一つ答えていない。科学は物事のいかにを示そうとしているのであって、何故に、をではない。それは生命の進化の力学を跡づけているのであって、何故に進化してきたかを説明してはいない」（「幸福の追求」）と。よって、科学は、根本的な問題になると、多く偶然に支配されている。

しかし、宇宙の調和した姿、偉大なる力、生命の神秘、これらについて多くの観念論者は、「何故に」を「神によって」と因果づけることによって解消しようとする。こんな子供だましみたいなもので、理性ある人が、ご

まかされるわけがない。ところが現実に、根本問題を考えていくと、わけがわからなくなり、神を認めることによって妥協する人が、相当の知識人の中にもよく見られるのである。

まことに、人生、宇宙の根本問題たる「生命」を究明したものこそ仏法である。仏法こそ全体観に立ったものである。世の多くの人は、部分観をもって全体観と混同しがちである。なぜなのか。それは仏法を知らないからである。全体を知ってはじめて、部分観を部分観としてとらえることができるのである。すなわち、仏法を知ってはじめて科学の位置も明瞭となるのである。

また科学に哲学が必要であるとは、現代の科学者の多くが認めるところである。科学の世界では、実験を重んずる。しかし無秩序に盲目的に実験するのではなく、一定の秩序と方向によって実験は行なわれるのである。オパーリンの「生命の起原」に対する考察も、実験も、弁証法的唯物論という哲学が根底にあることは前に述べたとおりである。

それゆえ、科学の根底に、いかなる哲学があるかということが、重要な問題となるのである。科学の成果を善用するのみならず、科学に偉大なる力を与え、方向を与える、最高の哲学が、現代の行き詰まった科学界に必要であることを痛感するものである。

生物学では、生命を無生物の対立物としてとらえる。したがって、生と死という問題を解決することができないでいる。生と死——これこそ人生の重大問題ではないか。これについて深刻に悩んだ人は、昔の人も、現代の人も、それこそ多くの数にのぼるであろう。仏法では、この生と死の問題を徹底的に解決しているのである。

さて、多くの人は、生命はこの世だけのものである、すなわち、生まれてきた時に初めて生じ、死ねば泡のごとく消え去ると考える。しかし、それは実に浅はかな考え方である。こうした考え方をする人は、科学万能主義で宗教を否定する者に多い。ところで科学は、原因、結果の法則で成り立っているのである。ところが、もし、生まれて来た時に、生命が発生したというなら、生命に差別ができる原因が究明され得ていない。単に動物と植物の相違、人間と馬の相違、同じ人間でも、男と女、または貧乏な家に生まれる人と、富裕な家庭に生まれる人との相違も、結果だけであって、どうしてそのような差別ができるのかという本因が究明されなくなってしまうのである。人は不幸につぐ不幸の生活をしている他人に対して「あの人は運が悪いのだ」等と割り切っていう。しかし当事者にとっては、「どうして自分はこんなに不運なのだろう」と、第三者がばくぜんと原因としてあげているものを、一歩つっこんで考え、なんとか立ち上がろうと努力するのである。

それは自分にとって関係の深い問題であればあるほど、その人は、原因をより根本的に探ろうとするからである。しかして、その根本原因は、もし過去を認めない限り、解決されないであろう。科学者は、自然界にのみ原因、結果の法則を考えようとするが、人生にも厳然として原因結果の法則が存するのである。ただ自然界は相対的に画一的であるが、人生は複雑である。そこで、自然界の因果はわかりやすいのであるが、人生における因果律には、なかなか気がつかないのである。しかし自然界にのみ因果律を認めて、人生における因果律を否定することは、かえって非科学的であり、自らの愚を表示しているものといえよう。思うに科学の歩んできた道は偶然と思われてきたことを、必然であると示す闘いの道ではなかったのか。

また、生命は死んだならばもう消えてなくなるとは、なんと浅はかな考え方であろうか。アイヒマンは、六百万人のユダヤ人を殺した張本人の一人として、死刑に処せられた。一人殺しても死刑になる人もいる。何百万人殺害しても、一人殺しても、死という同じ結果に終わるならば、不合理この上ないではないか。しかもアイヒマンが死刑に処せられたのは、ドイツが敗戦国だったからである。もし、戦勝国だったらどういうことになったであろうか。あるいは、英雄として生涯を送るようになったかも知れない。「一人殺せば罪人、百万人殺せば英雄」とは現代にも存する疑惑である。

例えば、広島、長崎に投下され、一瞬にして四十万余の日本国民の生命を奪った原子爆弾の問題はどうであろう。理由はどうであれ、人道上の問題として許され得るものではない。瞬間の閃光によって、それまで人として平和な生活を送っていた民衆が、火の海と化した巷を、全身焼けただれてのたうちまわり、恨みをのんで死んでいった。地獄絵図のようなこの事実、さらには、からくもこの大惨劇から逃れた多くの民衆が、原爆症という病魔に冒されて、いつ死ぬかもしれない不安と恐怖に襲われながら、現在も無限の苦しみと闘っている現実、これほどの恐ろしいことはあるまい。またこれほどの大犯罪はあるまい。しかし、いったい、この原爆投下の責任者が、どういう刑罰を受けたというのだろうか。どういう罪の償いをしたというのであろうか。

このように、人類に大きな惨事をまき起こす人がいる一方、自らは不遇の身でありながら、人のため、世のため、国のために尽くすまじめな人もいる。死ねば、同一結果に終わる。すなわち、同じく消滅してしまうとは、まことにもって不合理といわなければならぬ。

また、ある人が苦学して血のにじむような努力をして大学までいったとする。ところがいよいよ大学を卒業することになって病のために倒れたならば、その人のそれまでの努力は、いったい何のためだったというのであろうか。そして、もし死後の生命が否定されるならば、われわれはまじめに生きることが馬鹿馬鹿しくなる。法律の網の目をくぐって生きた方が得である。一瞬のごとくにして一生は経過する。この短い一生を、できる限り楽しく、人のことなんかどうでもよい、自分だけが楽しみぬければそれでよいといった考え方が横行するに違いない。西洋では、よく「良心」なる言葉を使う。この言葉は観念的なものであるが、しかし、何かを意味しているといえなかろうか。

また、よく唯物論的な考え方をする人の中で「死とは、高次神経系の機能の停止」などと、とくとくとして答える人も、一たび自分の最も近しい人が死んだとき、果たして、こんな風に考えるであろうか。また自分が死に直面したらどうであろう。深刻な心となるに違いない。

また、昔より今日に至るまで、しかもこのように科学の発達した時代でさえ、宗教はなくならないという事実、そしてまた、相当の科学者が、宗教を信じているという事実、たとえ信じないまでも、宗教が必要であることを強調する偉大なる科学者がいるという事実、これは一体何を意味しているのであろうか。

以上の点を考えても、われわれは、生命は必ず、過去世にも存し、また未来にも続いていくこと、そして、すべての人が無意識のうちにも、三世の生命を感じており、また、三世の生命、永遠の生命を説く真実の仏法を求めていると確信してやまない。

道前、道中、道後

次に天台のいう「道前、道中、道後」ということであるが、当然、末法においては五十二位という段階がないのであるから、十地を道前とし、妙覚を道中とし、証後を道後とするということは、そのままあてはまるものではない。しかし絶待妙の立ち場から論ずるならば、それらの立て分けも意味をもってくる。

ここに十地とは不退地の境涯である。われわれの信心に約せば、どんな難があろうと、どんな魔が荒れ狂おうとも、不退転で信心を貫くことが十地である。「行躰即信心」ということばがある。信心とは、単に観念的に、心のなかで信ずるなどというものではない。実践のなかに信心はあるのである。

また、妙覚を道中というのは、仏智を湧現したら、それでおしまいではない。御本尊に題目をあげ、それによって得たる生命力と智慧をもって、こんどは人のため、社会のために、それを生かして行くのである。

また、一面からいえば道中に至るまでは知識といえる。そして道中が智慧であるといえよう。また、道中に至るまでは帰納法的であり、道中が演繹的とも考えられる。したがって八万法蔵は理論であり、帰納である。大御本尊は演繹である。

どんなに帰納的学問にはげみ、知識を自分が習得しても、それだけでは偉大な生命力は湧かないし、現実に人を救うこともできないし、偉大な智慧も湧現しない。しかしながら、それらの学問も知識も、仏法の智慧を根底におくとき、ことごとく生かされ、人生の幸福のために大いに役立つのである。この、大御本尊を根底に、いっ

さいを生かし、社会に貢献していくのが道後なのである。

根深ければ則ち条茂く源遠ければ則ち流長きが如し

この文は、実智がいかに甚深無量であるかを譬えたものである。「根深ければ」とは、宇宙の本源たる妙法蓮華経である。「条茂く」とは、森羅万象である。すなわち、妙法によって初めて森羅万象が説き尽くされることをいうのである。また、大御本尊を根本にしたときに、いっさいが福運と転じ、悠々たる人生を生きぬいていけるという事実である。また人間革命が根本となり、それを土台として、漸次、文化革命、教育革命、経済革命にと進み、真の平和社会が築かれることをも意味する。

家屋を造る場合にしても、土台が大事である。土台が深く、堅固であるならば、りっぱな高層建築ができる。所詮、人間革命なき社会改革は、流血の惨事を繰り返すのみであり、それによってつくられた新しい社会も、また幾多の悲惨な犠牲を出して崩壊する。利害による統一は、利害の対立によって破られ、権力による統一は、権力の弱体化と新しい権力者により打ち破られる。人々に共通なものは、ともに「人間」であるということである。すべての人々がこの共通の広場にもどり、そこから出発したときに、人類が心から望む犠牲なき繁栄と、活気にみなぎった世界が現出することを確信する。

また「源遠ければ」とは、永遠の生命ということである。「流長し」とは、永遠の生命を説き明かした真実最高の仏法によって、初めて永遠の幸福を確立することができることである。

これを、信心に約していえば、大御本尊を信じたものは永久に行き詰まらないということである。すなわち、いっさいの行き詰まりは、信の一字によって打開されることである。社会もまたしかりである。どんなに科学が発達し、工業、経済が成長したからといっても、もっと恒久的な土台であるべき大仏法、大哲理が根底になかったならば、真の幸福、真の繁栄というものは永続しなかろう。

また、これを生活に約して論ずれば、青年期の修行がいかに大事であるかを、示すものといえる。青年時代に苦労し、勉強し、基礎的な力を十二分に蓄えておくならば、その青年は将来において、偉大な発展を遂げていくであろう。

また、戸田城聖前会長は「青年時代にもった理想を、一生涯貫いていく人が、世の中でもっとも偉大な人である」といつも申されていた。いついかなる時でも、勇気と情熱と溌剌たる青年の息吹きこそ、いっさいを変化させる根源である。

思うに、青年とは限りなき発展をはらんだ生命活動である。岩にぶつかり、谷間を流れていた水も、ゆうゆうたる大河となり大海に注ぐがごとく、青年の生命は、洋々と開く未来に向かっているのである。この大御本尊を持った人のみが永久の青年であり、不滅の若さを誇り得るのである。これ「源遠ければ流長し」ではないか。

また「源遠ければ」とは建設の力であり、開拓する力であり、また草創精神である。いかなる社会、組織も、時代が下り、草創期の苦しみを忘れたときに、その社会なり組織は固定化し、人々は出来上がった世界に安住し、惰性に流され、気力を失い、やがては崩壊に向かっていくということは、過去の歴史が証明している事実である。

永久の発展をしていくためには、いつも若さと力強い建設の息吹きがみなぎっていなくてはならない。いつも未来をめざし、現実の一瞬一瞬を、たえざる建設と努力と精進をしぬいていく人々の心の結集が、溌剌とした、しかも和気あいあいたる社会を、永続させる本源なのである。これ、本因妙の精神である。これが「源遠ければ流長し」にあたるのである。

次に十住とか十地とかについていえば、あくまでもこれは釈迦仏法の別教における権門の配立である。ゆえにこのように位の次第があることに対し、日蓮大聖人は「権教の行は無量劫を経て昇進する次位なれば位の次第を説けり今法華は八教に超えたる円なれば速疾頓成にして」（総勘文抄五六七㌻）等と仰せられているのである。しかし、これもやはり絶待妙の立ち場から論ずるならば、決して無意味なこととはいえない。

もしも、われわれの信心に約していえば、十信とは、初信の人である。初信者は縁に紛動されやすいので信心強固とはいえない。しかし、次第に信心が強盛になると、一生涯、仏道修行にはげもう、一生成仏と広宣流布をめざして頑張ろうと決意するようになる。こう決意するのが初住である。また十住である。いよいよ、その決意が固まると、止観の第五に「行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競い起る」とあるごとく、必ずや三障四魔、三類の強敵が起こってくる。しかし、これらのいっさいの難をうち破り、確固不動の信心の境涯に立脚するのが十地である。この境涯に住するときに、本当の幸福境涯を会得することができるのである。これが妙覚である。

それでは、信心に段階があるように見えるがどうか。しかりである。大聖人も「信心の厚薄」とか「但し御信

心によるべし」ということは、諸御書に仰せられているとおりである。また次の顕立正意抄（五三七㌻）の御文からも、この点は十分に拝せられるのである。「今日蓮が弟子等も亦是くの如し或は信じ或は伏し或は随い或は従う但だ名のみ之を仮りて心中に染まざる信心薄き者は設い千劫をば経ずとも或は一無間或は二無間乃至十百無間疑無からん者か」

しかし、それはあくまでも信心の厚薄であり、一貫してつらぬいているものは信の一字なのである。したがって釈迦仏法におけるような、六波羅蜜を修行する等の段階があるのとは、全く意味が違う。なにも特別な人間になるのでもない。このままの姿で、このままの境遇で、真実の幸福生活を送ることができるのである。

なお、時間的に経過があって、だんだん変わっていくように見えるが、それは表面的なものであり、実は、大御本尊を信ずる心強きを仏界というのであって、信ずる瞬間に妙法の当体とあらわれていることを確信されたいものである。

たとえばある人は貧乏している。そして日蓮正宗の信仰を持った。信心したては貧乏であるかもしれない。しかし、信心して十年、十五年、二十年とたつうちに、ありとあらゆる功徳と福運に満ち満ちた幸福生活を築き上げたとする。しかし、そう考えるのはまだ時間的経過を追った現象面のみを見ているのであって、実は、信心したとき、すでに二十年後の大福運は含まれていたのである。外形がどんなに貧乏であったとしても、内証は世界最高の幸福者となっているのである。すなわち、その人の生命に内在する因果は倶時であり、直達正観なのである。ゆえに、その本源的意味において段階もなければ、時間的経過もない。一瞬一瞬が喜びであり、いかなる難

といえども、その難は、ことごとくその人の人生を飾るものでしかないのである。この瞬間の生命を説き明かしたのが大聖人の仏法であり、時間的経過と歴劫修行を中心に、表面的現象の変化を問題にしたのが釈迦仏法なのである。

第三　唯以一大事因縁の事

本文

第三唯以一大事因縁の事　文句の四に云く一は即ち一実相なり五に非ず三に非ず七に非ず九に非ず故に一と言うなり、其の性広博にして五三七九より博し故に名けて大と為す、諸仏出世の儀式なり故に名けて事と為す、衆生に此の機有って仏を感ず故に名けて因と為す、仏機を承けて而も応ず故に名けて縁となす、是を出世の本意と為す。

御義口伝に云く一とは法華経なり大とは華厳なり事とは中間の三味なり、法華已前にも三諦あれども砕けたる珠は宝に非ざるが如し云云、又云く一とは妙なり大とは法なり事とは蓮なり因とは華なり縁とは経なり云云、又云く我等が頭は妙なり喉は法なり胸は蓮なり胎は華なり足は経なり此の五尺の身妙法蓮華経の五字なり、此の大事を釈迦如来・四十余年の間隠密したもうなり今経の時説き出したもう此の大事を説かんが為に仏は出世したもう我等が一身の妙法五字なりと開仏知見する時・即身成仏するなり、開とは信心の異名なり信心を以て妙法を唱え

奉らば聴て開仏知見するなり、然る間信心を開く時南無妙法蓮華経と示すを示仏知見と云うなり、示す時に霊山浄土の住処と悟り即身成仏と悟るを悟仏知見と云うなり、悟る当体・直至道場なるを入仏知見と云うなり、然る間信心の開仏知見を以て正意とせり、入仏知見の入の字は迹門の意は実相の理内に帰入するを入と云うなり本門の意は理即本覚と入るなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る程の者は宝塔に入るなり云云、又云く開仏知見の仏とは九界所具の仏界なり知見とは妙法の二字止観の二字寂照の二徳生死の二法なり色心因果なり、所詮知見とは妙法なり九界所具の仏心を法華経の知見にて開く事なり、爰を以て之を思うに仏とは九界の衆生の事なり、此の開覚顕れて今身より仏身に至るまで持つや否やと示す処が妙法を示す示仏知見と云うなり、師弟感応して受け取る時如我等無異と悟るを悟仏知見と云うなり、悟って見れば法界三千の己己の当体法華経なり此の内証に入るを入仏知見と云うなり秘す可し云云、又云く四仏知見とは八相なり開とは生の相なり入とは死の相なり中間の示悟は六相なり下天託胎等は示仏知見なり出家降魔成道転法輪等は悟仏知見なり、権教の意は生死を遠離する教なるが故に四仏知見に非ざるなり、今経の時生死の二法は一心の妙用・有無の二道は本覚の真徳と開覚するを四仏知見と云うなり、四仏知見を以て三世の諸仏は一大事と思召し世に出現したもうなり、此の開仏知見の法華経を法然は捨閉閣抛と云い弘法大師は第三の劣戯論の法とののしれり、五仏道同の舌をきる者に非ずや、慈覚大師智証等は悪子に剣を与えて我が親の頭をきらする者に非ずや云云、又云く一とは中諦・大とは空諦・事とは仮諦なり此の円融の三諦は何物ぞ所謂南無妙法蓮華経是なり、此の五字日蓮出世の本懐なり之を名けて事と為す、日本国の一切衆生の中に日蓮が弟子檀那と成る人は衆生有此機感仏故名為因の人なり、夫れが為に法華経

の極理を弘めたるは承機而応故名為縁に非ずや、因は下種なり縁は三五の宿縁に帰するなり、事の一念三千は、日蓮が身に当りての大事なり、一とは一念・大とは三千なり此の三千ときたるは事の因縁なり事とは衆生世間・因とは五陰世間・縁とは国土世間なり、国土世間の縁とは南閻浮提は妙法蓮華経を弘むべき本縁の国なり、経に云く「閻浮提内広令流布使不断絶」是なり云云。

語訳

唯以一大事因縁の事　法華経方便品第二（一六六㌻）に「諸仏世尊は、唯一大事の因縁を以っての故に、世に出現したもう。舎利弗、云何なるをか諸仏世尊は、唯一大事の因縁を以っての故に、世に出現したもうと名づくる。諸仏世尊は、衆生をして仏知見を開かしめ、清浄なるを得せしめんと欲するが故に世に出現したもう。衆生に仏知見を示さんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして、仏知見を悟らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして、仏知見の道に入らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。舎利弗、是れを諸仏は唯一大事の因縁を以っての故に、世に出現したもうと為づく」とある。仏の出世の目的は、開示悟入の一大事因縁のためであるということ。文底の立ち場からいえば、一大事因縁とは南無妙法蓮華経のことである。また、日寛上人は文底秘沈抄に「一は謂く本尊なり、是れ則ち一閻浮提第一の故なり、又閻浮提の中二無く亦三無し、是の故に一と云うなり。大は謂く本門の戒壇なり、旧より勝るなりと訓ず権迹の諸戒に勝るるが故なり。事は謂く本門の題目なり、理に非ざるを事と曰う是れ天台の理行に非ざる故なり、又事を事に行ずるが故に事と言う」なり」（富要集第三巻六九㌻）と、一大事の文を三大秘法に読まれている。

一は即ち一実相なり五に非ず三に非ず七に非ず九に非ず故に一と言うなり　一とは三とか五とか七とか九とかいう数字と相対していう一ではなく、いっさいの根本といった絶対的な意味での一で、真理であり、普遍妥当性のものである。したがって一実相とは、宇宙の根本の実相という意味で南無妙法蓮華経のことである。草木成仏口決（一三三九ページ）に「一色一香中道に非ざること無し」の文を釈して「一色一香の一は二三相対の一には非ざるなり、中道法性をさして一と云うなり」と仰せられているが、この一と、いまの一とは同じ意味である。また一とは一仏乗、五に非ずの五は五乗、三に非ずの三は三乗、七に非ずの七は七方便、九に非ずの九は九法界と訳す。すなわち、仏の出世は一実相、一仏乗を顕わすためであって、五乗、三乗、七方便、九法界を説くためではないという意味である。

衆生に此の機有って仏を感ず故に名けて因と為す、仏機を承けて而も応ず故に名けて縁となす　衆生の機根に応じて仏が出現するということである。一切衆生には本質的に仏性が具わっている。しかし、その仏性も縁にふれなければ現じない。そこで衆生の仏性を開発しようとして仏の出現がある。衆生がもともと仏性をもっていることが因となり、仏の出現によってそれが縁となって仏性が開発され、ここに因縁和合し、衆生が成仏するのである。

一とは法華経なり大とは華厳なり事とは中間の三味なり　三世諸仏総勘文教相廃立（五七四ページ）には「三世の諸仏は此れを一大事の因縁と思食して世間に出現し給えり一とは中道なり法華なり大とは空諦なり華厳なり事とは仮諦なり阿含・方等・般若なり已上一代の総の三諦なり」とある。すなわち、法華経は中道法相であるから一なのである。この場合の一も三、四、五と相対した一ではなく、あらゆるものを含んだ一という意味で、根本という意味である。大とは華厳経は「心如工画師」の文のごとく心が中心であり、心はよく万法を浮かべることができるので大であり、空諦である。阿含、方等、般若は、四諦の法輪といった実践修行とくに戒律を重んずる。そうした外形的なものに中心をおくので仮諦である。「中間の三味」とは、阿含、方等、般若の経々のことである。天台は、釈尊の華厳、阿含、方等、般若、法華涅槃の五時を、それぞれ牛の乳、酪、生酥、熟酥、醍醐の五味にたとえ

た。すなわち、阿含、方等、般若は中間の酪、生酥、熟酥にあたる。

法華已前にも三諦あれども砕けたる珠は宝に非ざるが如し　爾前経においても三諦はあるにはあるが、三諦がばらばらであり、蔵教では「但空の理」通教では「不但空の理」すなわち空諦のみを、また別教では「但中の理」すなわち中道（法華で説く中道とは天地雲泥の開きがある）のみを扱うといったように、部分部分を説いたにすぎない。このような三諦を隔歴の三諦という。これに対し、法華経で説く三諦は、一心三諦といい、また円融の三諦という。砕けたる珠とは、隔歴の三諦をたとえたものである。それは真実最高の教えではないから「宝に非ざるが如し」と仰せなのである。

此の大事　わが身が妙法蓮華経の当体であるということ。これは、仏教で説く真髄であるから、「此の大事」といわれたのである。

開とは信心の異名なり　仏の知見を開くのは信心しかないからである。信がなければ、わが己心の妙法は、永久に閉ざされたままとなる。

而して　そのままという意味。

開示悟入　法華経方便品第二の広開三顕一の文である。「諸仏世尊は衆生をして仏知見を開かしめ（乃至）、仏知見を示さん（乃至）仏知見を悟らしめん（乃至）仏知見の道に入らしめんと欲するが故に世に出現したもう」この開示悟入の四仏知見は、衆生がもともともっている仏界を開発することを示したものであり、ゆえに開三顕一になるのである。開仏知見の開とは信心の異名であり、示仏知見の示とは南無妙法蓮華経を示し、悟仏知見の悟とは即身成仏と悟り、入仏知見の入とは悟る当体直至道場となることであり、そして信心の開仏知見が正意であるといわれている。われわれの信心の立ち場でいえば、開とは大御本尊を初めて信じた状態であり、示とは大御本尊の功徳をわが身の上に示し、他にも示し、悟とは、いかなる苦難があっても大御本尊を疑わず、いっさいがわが身の福運と確信することであり、入とは、そのときそのままの姿で真に喜

び切った幸福境涯に住することである。しかも、それを一貫してつらぬいているものは、信の一字なのである。また、一往このように段階があるようにみえるが、ほんとうに信心に立脚したときには、開示悟入の四仏知見は、ことごとく、そのときすでに備わっているのである。

霊山浄土の住処　霊山とは霊鷲山、法華経の説法が行なわれた耆闍崛山（梵語）の漢訳であり、寂光土の意。霊山浄土の住処とは、別しては御本尊のおわします所、また総じてはわれわれが題目を唱えた所を指す。すなわち、幸福は他の世界にあるのではなく、この現実のわれわれの世界が妙法の功徳により、即霊山浄土の寂光土となるのである。御義口伝（七五七ページ）にいわく「霊山とは御本尊並びに日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者の住所を説くなり云云」と。またさらに霊とは仏界、鷲とは九界とし、十界互具に約す場合もある。

直至道場　法華経譬喩品第三（二三五ページ）に「此の宝乗に乗じて、直ちに道場に至らしむ」とある。宝乗とは御本尊。御本尊を信じて、即身成仏するということ。われわれが御本尊を信じ、唱題したときに、すでにいかなる難があろうと、仏界に照らされたゆうゆうたる人生行路になっていることをいう。

宝塔に入る　「宝塔」とは御本尊のことである。「宝塔に入る」とは御本尊の体内にはいることであり、われわれのふるまいのいっさいが、御本尊を根底とした、宇宙のリズムと合致した活動となるということである。

迹門の意は実相の理内に帰入するを入と云うなり本門の意は理即本覚と入るなり　迹門の意でこの入という文字を読めば、実相の理内、すなわち理の一念三千の境涯にはいることであり、天台の観念観法である。もし入の字を本門の意で読めば、一切衆生の生命に実在する仏界が現実に顕現することであり、末法においては大御本尊を信ずる以外にない。また迹門はあくまでも実相の理内、すなわち本門に入るための門である。本門の理即本覚の理は、迹門に対して本門の永遠の生命を説いている理であり、即本覚とは、文底秘沈の仏法である。

知見とは妙法の二字止観の二字寂照の二徳生死の二法なり色心因果なり　知見とは仏界を知見するということで、覚知することである。覚知、すなわち体得するということは、妙法の二字、止観の二字、寂照の二徳、生死の二法である。止観とは文底から拝すれば南無妙法蓮華経である。寂照とは寂滅に対する語で、ゆうゆうと人生を生ききってゆく境涯をいう。生死の二法とは、本有の生死のことで永遠の生命ということである。「色心因果」の色心とは生命である。われわれの生命は因果倶時である。これを色心因果という。また御本尊を拝んで、色心ともに幸福な生活を確立できることが色心因果である。

此の開覚顕れて今身より仏身に至るまで持つや否やと示す処が妙法を示す示仏知見と云うなり　此の開覚顕れてとは開仏知見のことである。この開覚とはこの前の文「九界所具の仏心を法華経の知見にて開く事なり」を指す。「今身より仏身に至るまで持つや否やと示す」とは、今身すなわち九界の衆生であるわれわれが、大御本尊を抱きしめて一生成仏のため、また世界平和のため信心を貫き通して、妙法の偉大さを示していくことが示仏知見なのである。

師弟感応して受け取る時如我等無異と悟るを悟仏知見と云うなり　師とは日蓮大聖人、大御本尊である。弟とは弟子、すなわち御本尊を持つわれわれである。感応とは境智冥合である。すなわちわれわれの信力行力によって、大御本尊の法力仏力が厳然とあらわれ、真の幸福な生活を送ることができることをいう。「如我等無異」は法華経方便品第二（一七六㌻）の「我が如く等しくして異ること無からしめんと欲しき」の文である。観心本尊抄（二四六㌻）に「『我が如く等しくして異なる事無し我が昔の所願の如き今は已に満足しぬ一切衆生を化して皆仏道に入らしむ』、妙覚の釈尊は我等が血肉なり因果の功徳は骨髄に非ずや」と述べられている。文の意味は、信力、行力でわれわれは仏と等しくなる。すなわち、われわれもまた南無妙法蓮華経の当体と顕われるということである。

四仏知見とは八相なり　八相とは下天、託胎、出胎、出家、降魔、成道、転法輪、入涅槃をいう。これは仏が応身または化身を現じて、作仏（または成道）を中心とする八種の相を示現して説法教化することをいう。ここでは開とは生の相であり、

出胎を指し、示は下天、託胎を指し、悟は出家、降魔、成道、転法輪を指し、入は死の相であり、入涅槃を指す。

権教の意は生死を遠離する教なるが故に四仏知見に非ざるなり　権教とは四十余年の未顕真実の教えである。爾前教では、生死は六道の迷いの凡夫が、徘徊するところであり、生も死も離れた涅槃の境地が悟りであると説く。真実は、生死のなかに四仏知見があるのであり、生死を離れる教えは、現実逃避であり、観念の遊戯であり、真実の教えではない。

今経　今経とは、一往は法華経二十八品、再往は日蓮大聖人の法華経である南無妙法蓮華経のことである。

生死の二法は一心の妙用・有無の二道は本覚の真徳　伝教大師の「天台法華宗牛頭法門要纂」（略して牛頭決）の文。生死とは、ふつう「苦しみ」と訳す。また「生きる」「死ぬ」という生命流転の実相を意味する。権教においては離るべきものとされていた生死の二法は、一心の妙用、すなわち南無妙法蓮華経の働きであって離るべきものではない。「有無の二道」は「生死の二法」の異名であり、「本覚の真徳」は「一心の妙用」のこと、すなわち、南無妙法蓮華経と考えてさしつかえない。

法然　日本浄土宗の開祖。（くわしくは本書一五〇ページ参照）

捨閉閣抛　法然の選択集にある。念仏一宗を建立するために、観経等の浄土の三部経以外のいっさいの諸経を廃捨するのに用いた。「浄土門、易行道、正行である浄土の三部経を用い、法華経等の聖道門、難行道、雑行を捨てよ、閉じよ、閣け、抛て」と説いて、この四字をもっていっさいを迷わした。日蓮大聖人は立正安国論（二三ページ）に次のように仰せられている。

「之に就いて之を見るに、曇鸞・道綽・善導の謬釈を引いて、聖道・浄土・難行・易行の旨を建て、法華・真言総じて一代の大乗、六百三十七部・二千八百八十三巻、一切の諸仏菩薩及び諸の世天等を以て皆聖道・難行・雑行等に摂して、或は捨て、或は閉じ、或は閣き或は抛つ。此の四字を以て、多く一切を迷わし、剰え三国の聖僧、十方の仏弟を以て、皆群賊と号し、併せて罵詈せしむ。近くは所依の浄土の三部経の『唯除五逆誹謗正法』の誓文に背き、遠くは一代五時の肝心たる

法華経の第二の『若し人信ぜずして、此の経を毀謗せば、乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん』の誡文に迷う者なり」と。

第三の劣戯論の法　真言宗では、「法華経等の一切経は応身の釈迦仏が説法したものであり、大日経は法身大日如来の説法である。大日如来に比較するならば釈尊は無明の辺域であり草履取りにもおよばない。また、法華経は釈尊一代仏経中にも第三の劣であり、戯論である」等といっている。とくに「第三の劣、戯論」等とは弘法が「十住心論」でいっており、誹謗の限りをつくしている。

五仏道同　五仏道同の儀式といって、三世のあらゆる仏が、同じく法華経を説くことを出世の本懐としていることを述べたもの。五仏とは総諸仏、過去仏、未来仏、現在仏、釈迦仏を指す。この儀式は法華経方便品（一六六ページ）にある。まず総諸仏章では「所以は何ん。諸仏世尊は、唯一大事の因縁を以っての故に、世に出現したもう」とあって次に四仏知見が説かれている。第二に過去仏章のところでは「舎利弗、過去の諸仏も、無量無数の方便、種種の因縁、譬喩の言辞を以って、衆生の為に諸法を演説したもう。是の法も皆一仏乗の為の故なり」等とある。未来仏章のところでは「舎利弗、未来の諸仏の、当に世に出でたもうべきも亦無量無数の方便、種種の因縁、譬喩、言辞を以って、衆生の為に諸法を演説したもう。是の法も、皆一仏乗の為の故なり」等とあり、釈迦仏章のところでは「舎利弗、我も今亦是の如し」といい、釈尊もまた一仏乗を目的として法を説いてきたことを述べている。

慈覚大師智証等　日本天台宗の第三、第四祖。真言宗を取り入れて、天台宗を堕落させた。（くわしくは本書一五一ページ参照）

一とは中諦・大とは空諦・事とは仮諦　一実相は、中道法相で中諦、大は宇宙、生命が大宇宙に遍満しているということで空諦、事とは仮諦で事実の相、行動をいう。

因は下種なり縁は三五の宿縁に帰するなり　因は下種であるとは久遠元初の下種を指す。三五とは三千塵点劫および五百塵点劫の結縁を指す。われわれには、いわゆる三、五の宿縁はない。

一とは一念・大とは三千なり此の三千ときたるは事の因縁なり事とは衆生世間・因とは五陰世間・縁とは国土世間なり　一とは一念の生命であり、それが三千とあらわれるのである。森羅万象はことごとく三千の範ちゅうにおさまる。ゆえに大とは三千なのである。一念が三千とあらわれるのは、具体的な事実の姿としてあらわれるのである。実際の活動、現象というものはぜんぶ因があり、縁があり、その因と縁が和合している姿なのである。また、事とは、事実の生命活動であり、それは現実に地獄、餓鬼、畜生等と十界の生命活動を行なっている衆生の生命であり、衆生世間である。因とは、衆生を形成する原因は五陰だからである。すなわち色、受、想、行、識が仮に和合して、衆生というものを構成する。縁が国土世間であるというのは、生きているものがぜんぶ縁するものは国土だからである。衆生世間、五陰世間、国土世間の関係は三重秘伝抄にくわしい。

南閻浮提　閻浮とも閻浮提ともいう。古代インドにおける世界観にもとづくものである。須弥山を中心として、八つの海、八つの山が囲んでおり、その一番外側の海を大鹹海といい、その中に、東西南北の四方に人間の住む四洲（東弗婆提、西瞿耶尼、南閻浮提、北鬱単越）があるという。現在の観点よりみると、われわれの住んでいるこの地球全体、全世界を意味する。

閻浮提内広令流布使不断絶　普賢菩薩勧発品第二十八（六六八ページ）に「閻浮提の内に広く流布せしめて、断絶せざらしめん」とある。

通解

方便品第二には、仏の出世の本懐について、次のように述べられている。「是の法は思量分別の能く解する所に非ず。唯諸仏のみ有して、乃し能く之を知しめせり。所以は何ん。諸仏世尊は、唯一大事の因縁を以っての故に、世に出現したもう。舎利弗、云何なるをか諸仏世尊は、唯一大事の因縁を以っての故に、世に出現したもうと名づくる。諸仏世尊は、衆生をして仏知見を開かしめ、清浄なるを得せしめんと欲するが故に世に出現したもう。衆生に仏知見を示さんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして、仏知見を悟らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして、仏知見の道に入らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。舎利弗、是れを諸仏は唯一大事の因縁を以っての故に、世に出現したもうと為づく」と。

この「唯以一大事因縁」の経文について、文句の四では次のようにいっている。一大事因縁の「一」とは五とか三とか七とか九とかいう数字と相対していう一ではない。いっさいの根本といった絶対的な意味の一で、一実相を意味する。また、三乗でもなく、五乗でもなく、七方便でもなく、九法界でもない。あらゆるものを総括して一というのである。すなわち、ここにいう一とは、妙法蓮華経のことを指すのであり、その妙法蓮華経というものは森羅万象ことごとくにわたっており、五乗、三乗、七方便、九法界よりもひろい。ゆえに「大」というのである。この妙法蓮華経を説く儀式が諸仏出世の儀式であり、これは事相（事実の姿）であり、ゆえに、これを「事」と名づけるのである。仏が世に出現するには、衆生に仏を渇望する機根がなければならない。すなわち、仏を渇望する衆生の機が「因」となり、仏はこれに応じて出現するのである。これを「縁」というのである。この一大事因縁こそ、仏の出世の本意、本懐である。

この文について、御義口伝には、次のように仰せである。「一」とは中道実相を説いた法華経であり、「大」とは空諦を説いた華厳経であり、「事」とは仮諦を説いた阿含、方等、涅槃等、中間の三味なのである。これは一代総の三諦である。法華経においてこの三諦が円融相即して説かれるのであるが、法華経以前の経々では、ばらばらに説かれており、「隔歴の三諦」である。あたかも、砕けた珠は宝として用いられないように、真実幸福への教えとして用いることはできないのである。

また大聖人が仰せられるには、一とは妙であり、大とは法であり、事とは蓮であり、因とは華であり、縁とは経である。すなわち、一大事因縁とは妙法蓮華経のことである。

また、大聖人の仰せには、われわれの頭は妙であり、喉は法であり、胸は蓮であり、胎は華であり、足は経である。すなわち、われわれの身体自体が妙法蓮華経の当体なのである。

この大事を釈迦如来は、四十余年のあいだ隠密して説かなかったのである。法華経にきて、初めて説いたのである。また、この大事を説くために仏は世に出現したのである。われわれの一身が妙法蓮華経の五字であると開仏知見するとき、即身成仏するのである。

「開仏知見」の「開」とは「信心」の異名である。信心をもって南無妙法蓮華経と唱え奉るならば、そのまま開仏知見するのである。そして信心を開くとき、人間革命した実相を示し、南無妙法蓮華経の功徳をわが身の上に顕現し、他にも示すことが示仏知見なのである。妙法と示したときに、幸福は他の世界のどこかにあるのではない、この現実のわれわれの世界が即霊山浄土の寂光土と悟り、わが身がこのまま仏である、即身成仏できるので

あると確信することが悟仏知見なのである。そう確信したときに、譬喩品に「此の宝乗に乗じて、直ちに道場に至らしむ」とあるように、いかなる難があろうと、もうすでに仏界に照らされたゆうゆうたる人生行路となっているのである。これを入仏知見というのである。

ところで、これらの四仏知見を一貫してつらぬいているものは信の一字であり、またこのように開、示、悟、入と四つに立て分けることはできるけれども、それはぜんぶ別のものではなく、ぜんぶ信心のなかに含まれるのであるから、信心の開仏知見をもって正意とするのである。入仏知見の「入」の字は、迹門の意で読めば、実相の理内、すなわち百界千如、理の一念三千の境涯に入ることである。本門の意でこの入の字を読めば、一切衆生の生命に実在する仏界が現実に具現し、理即本覚と入る、すなわち、わが身が即本覚、事の一念三千の当体とあらわれることが入なのである。今、日蓮大聖人およびその門下で、南無妙法蓮華経と唱え奉るほどの者は、宝塔に入るのである。すなわち、大御本尊の体内に入り、己心の大御本尊を湧現し、大宇宙のリズムと合致した活動となるのであると。

また大聖人の仰せには、開仏知見とは九界所具の仏界なのである。この知見ということは、妙法の二字、止観の二字、寂照の二徳、生死の二法であり、また色心因果なのである。所詮知見とは妙法のことなのである。ゆえに開仏知見というのは九界所具の仏心、すなわち衆生にもともとあった仏界を、法華経の知見すなわち大御本尊によって開くことをいうのである。これをもって考えるのに、仏とは九界の衆生のことであって、衆生を離れてあるものではない。

この開覚、すなわち、衆生にもともと、偉大なる、仏界という生命があるという開覚が顕われて、今身すなわち九界の衆生であるところのわれわれが、大御本尊を護持し、一生信心を貫き通し、わが身が仏身であることを示していくことが示仏知見なのである。

かくして、その信力行力によって大御本尊と境智冥合し、仏力、法力があらわれ、師匠である、日蓮大聖人および大御本尊の生命が、われわれ弟子の身のなかに顕現され、方便品の「我が如く等しくして異ること無からしめんと欲しき」の文のごとく、わが身仏なりとの大確信に立つことができる。これが悟仏知見である。このように悟ってみれば、宇宙のありとあらゆるものは、すべて妙法蓮華経の当体なのである。この内証すなわち悟りの境涯に入ることが、入仏知見なのである。これはじつに重大なことであるから秘すべきであると。

また大聖人は次のようにも仰せられている。四仏知見とは八相のことである。「開」とは「生」の相であり、出胎を指し、「入」とは入涅槃であり、「死」の相である。開と入の中間の「示」と「悟」は六相である。すなわち下天、託胎は示仏知見であり、出家、降魔、成道、転法輪は悟仏知見である。権教では、生も死も離れた涅槃の境地が悟りであると説くが、真実は生死のなかに四仏知見があるのであり、生死を離れることを説く権教では、四仏知見を悟ることはできない。法華経にきて初めて、生死の二法は南無妙法蓮華経の不思議な働きであり、有無の二道も本覚の真徳、すなわち妙法蓮華経のあらわれであると開覚することが、四仏知見であると説かれたのである。四仏知見をもって三世の諸仏は一大事と思い、世に出現したのである。

この衆生の仏知見を開くところの最高の経である法華経を、法然は、捨てよ、閉じよ、閣け、抛てと誹謗し、

弘法大師は、第三の劣、戯論の法であると悪口をいい、大謗法をおかしている。これこそ、総諸仏、過去仏、未来仏、現在仏、釈迦仏の五仏が、ともに、衆生の仏知見を開くことを一大事の因縁として法華経を説いた、五仏道同の儀式をふみにじるものであり、五仏の舌を切るものではないか。比叡山の座主でありながら、真言の悪法を取り入れた慈覚、智証等は、悪子に剣を与えて、自分の親の頭を切らせる者ではないかと。

また大聖人の仰せには、一とは、中道法相で中諦、大とは生命が大宇宙に遍満しているということで空諦、事とは事実の相、行動で仮諦である。この三諦がバラバラでなく、渾然一体となっている実体、すなわち円融の三諦とはなんであろうか。それはいわゆる南無妙法蓮華経なのである。この南無妙法蓮華経の五字、すなわち大御本尊をあらわすことこそ、日蓮大聖人の出世の本懐なのであり、この事行の一念三千の大曼荼羅を名づけて事というのである。日本国の一切衆生の中でも、日蓮大聖人の弟子檀那となる人は、文句にある「衆生に此の機有って仏を感ず故に名けて因と為す」の人である。そのために法華経の極理たる南無妙法蓮華経を弘める日蓮大聖人は、まさに末法の御本仏であり「仏機を承けて而も応ず故に名けて縁と為す」にあたるではないか。因とは久遠元初の下種である。縁とは三千塵点劫、五百塵点劫の宿縁に帰するのである。

ゆえに釈迦仏法において三千塵点劫の下種、五百塵点劫の下種というが、それはたんなる縁にすぎないのであって、一切衆生はことごとく久遠元初の下種に立ち還って成仏するのである。日蓮大聖人は、その久遠元初の下種である南無妙法蓮華経を末法に弘められたのである。これこそ事の一念三千であり、それは日蓮大聖人の御生命そのものであり、大聖人の身に当たる大事なのである。

一とは一念の生命であり、それが三千とあらわれるのである。森羅万象はことごとく三千の範ちゅうにおさまるゆえに、大とは三千なのである。またこの三千の活動、現象というものは、ぜんぶ因と縁が和合している姿なのである。また事とは事実の生命活動であり、衆生世間、因とはそれを構成する五陰世間、縁とはいっさいが関係するところの国土世間なのである。国土世間である縁とは、南閻浮提は妙法蓮華経を弘めるべき、もともと縁のある国土である。ゆえに法華経の勧発品には「閻浮提の内に広く流布せしめて、断絶せざらしめん」とあるのである。

講義

ここは、方便品の「一大事因縁」の文を、あらゆる角度から説かれているところである。まず一大事因縁とは、仏がなにゆえ、出現したのかという因縁である。これすなわち、仏の出現の目的は、衆生の仏知見を開かせるためであり、衆生に仏知見を示すためであり、衆生に仏知見を悟らせるためであり、衆生を仏知見の道に入らしめるためである。この開示悟入が仏の一大事因縁なのである。

末法の御本仏、日蓮大聖人の一大事因縁は、大御本尊を建立せられて、末法万年の一切衆生を救おうとなされたところにあられる。末法の衆生は、大御本尊を信じてのみ、絶対の幸福境涯を開いていくことができるのである。また、われわれの立ち場で一大事因縁とは、大御本尊を根本に、自らの一生成仏をめざし、広宣流布に邁進

していくことにつきるのである。

また、一大事因縁を生命論から論ずれば、御文に、一が中諦、大が空諦、事が仮諦とあるごとく、一大事とは、空仮中の三諦のことであり、生命の本質をいう。因縁とは、生命の運動しゆく本質の原因、結果の過程である。たとえば「A」という人がいたとする。「A」という人の性分は空諦であり、姿、形は仮諦である。また「A」という人は、他のいかなる人でもなく、「A」その人である。これは中諦である。「A」という人の一瞬をとらえたときに、空、仮、中の三諦が厳然として備わっている。ある瞬間の「A」は食事をしており、ある瞬間の「A」は、会社で仕事をしている。その瞬間の実相は、空仮中の三諦で把握できるものである。しかし、それがどうしてそうなったかという運動、変化の根源的基調は因果の法則である。そうなるべき因があり、それが縁にふれることによって果を結ぶ。それが現在の事実となってあらわれているのである。すなわち、ある一つの事実も、それまでの無量の因と縁とが結びあってできているのである。ゆえに一大事因縁ということばで、横に生命の本質、実相が説かれ、竪に運動し、変化している基調である因果が説かれているのである。

また、一大事因縁とは妙法蓮華経のことである。すなわち、御文に「一とは妙なり大とは法なり事とは蓮なり因とは華なり縁とは経なり」とあるごとくである。一とは、一実相であり、一実相とは一念の生命である。

いったい生命とは、有と思うべきなのか無と思うべきなのか。大聖人は、これを一生成仏抄（三八四㌻）に、次のように仰せである。

「抑妙とは何と云う心ぞや只我が一念の心・不思議なる処を妙とは云うなり不思議とは心も及ばず語も及ばず

と云う事なり、然れば・すなわち起るところの一念の心を尋ね見れば有りと云はんとすれば色も質もなし又無しと云はんとすれば様様に心起る有と思ふべきに非ず無と思ふべきにも非ず、有無の二の語も及ばず有無の二の心も及ばず有無に非ずして而も有無に徧して中道一実の妙体にして不思議なるを妙とは名くるなり」と。

次に「大とは法なり」ということは、大とは森羅万象であり、法とは現象を意味するからである。いかに生命の実体が妙であるからといって、それは、ぼうばくとした存在では絶対にないのであって、不思議であり、しかも厳然たる法が妙法なのである。

「事とは蓮なり」とは、蓮とは実であり、果である。現在、具体的な事実の姿としてあらわれていることをいう。「因とは華なり」とは、華が果実を結ぶ因だからである。しかしながら、この因果は、因果異時の因果ではなく、因果倶時の因果である。それは、蓮華は華と果実が同時に成長するのであり、因果倶時を示すからである。

「縁とは経なり」とは、われわれの生命が事実の活動としてあらわれるのは、縁があるからである。本然的に怒るという性分を持っていたとしても、縁にふれなければ、その性分はあらわれない。具体的な事実の生命活動は、ことごとく縁によるのである。

縁にふれながら、三世常恒に生命活動を続けていくことが経なのである。また妙法蓮華経の経こそが、一切衆生の心中にある仏界を顕現させる所縁の経であるゆえに「縁とは経なり」と仰せられているのである。さらに、一大事因縁は、事の一念三千とも拝せるし、一大事を三大秘法等にも約せることは、語訳に示したとおりであり、ここでは省くことにする。

さて、開示悟入のことであるが、これこそ、まことにもって生命の尊厳を明かしたものである。観心本尊抄（二四四ページ）にいわく「往いて之を見るに経文分明に十界互具之を説く所謂『欲令衆生開仏知見』等云云、天台此の経文を承けて云く『若し衆生に仏の知見無んば何ぞ開を論ずる所あらん当に知るべし仏の知見衆生に蘊在することを』云云、章安大師の云く『衆生に若し仏の知見無くんば何ぞ開悟する所あらん若し貧女に蔵無んば何ぞ示す所あらんや』等云云」と。

ここに衆生とは生命と同意である。生命は、仏界の珠をつつむ宝器である。しこうして、この仏界の珠をあらわすためには、信心以外にはあり得ないのである。ゆえに「開とは信心の異名なり信心を以て妙法を唱え奉らば軈て開仏知見するなり」と仰せられているゆえんである。次に信とは実践であり、実践なき信仰は、観念である。ゆえに信心を開いて、自行化他に亘って南無妙法蓮華経と唱えるのを示仏知見という。そのとき、わが身が妙法の当体であるとの大確信に燃え立つことができ得るのである。これ、悟仏知見である。わが身が妙法の当体なりと自覚したときに、いっさいが、大宇宙のリズムに合致した生命活動となりゆく。これが、入仏知見である。

いかに生命は尊厳といっても、貧困にうちひしがれ、病気にさいなまれ、あるいは家庭不和に悶々たる日々を送り、さらには、まるで虫けら同様の扱いをうけたり、生きること自体が苦しく、生命力が弱まり、希望なき人生を送ったり、麻薬患者のような餓鬼道の生活をしている人の生命が、どうして尊厳といえようか。また、戦争であえなく自分の身を犠牲にする人の生命が、なんで尊厳といえようか。

生命の尊厳こそ、一切の社会、人類にとって、根本の中の根本であり、大事の中の大事である。また民主主義の最重要な問題でもある。これを、本質的に、一分の矛盾（むじゅん）もなく説き明かされたのが、日蓮大聖人の大生命哲学なのである。

この大哲学の実践あるところ、仏界に照らされた、真の尊厳に自覚した、力強き人生を歩むことができるのである。ゆえに、妙法の広宣流布以外に仏国土の建設はなく、真の民主主義の達成は絶対あり得ぬと叫ぶゆえんなのである。

第四　五濁の事

本文

第四五濁の事　文句の四に云く劫濁は別の体無し劫は是長時・刹那は是短時なり、衆生濁は別の体無し見慢果報を攬る煩悩濁は五鈍使を指て体と為し見濁は五利使を指て体と為し命濁は連持色心を指して体と為す。御義口伝に云く日蓮等の類いは此の五濁を離るるなり、我此土安穏なれば劫濁に非ず・実相無作の仏身なれば衆生濁に非ず・煩悩即菩提生死即涅槃の妙旨なれば煩悩濁に非ず・五百塵点劫より無始本有の身なれば命濁に非ざるなり、正直捨方便但説無上道の行者なれば見濁に非るなり、所詮南無妙法蓮華経を境として起る所の五濁なれば、日本国の一切衆生五濁の正意なり、されば文句四に云く「相とは四濁増劇にして此の時に聚在せり瞋恚増劇にして刀兵起り貪欲増劇にして飢饉起り愚癡増劇にして疾疫起り三災起るが故に煩悩倍隆んに諸見転た熾んなり経に如来現在猶多怨嫉況滅度後と云う是なり、法華経不信の者を以て五濁障重の者とす経に云く「以五濁悪世但楽著諸欲如是等衆生終不求仏道」云云仏道とは法華経の別名なり天台云く「仏道とは別して今経を指す」と。

語訳

五濁　方便品（一七〇ページ）に「舎利弗、十方世界の中には、尚二乗無し、何に況や三有らんや。舎利弗、諸仏は五濁の悪世に出でたもう。所謂劫濁、煩悩濁、衆生濁、見濁、命濁なり。是の如し。舎利弗、劫の濁乱の時は、衆生垢重く、慳貪嫉妬にして、諸の不善根を成就するが故に、諸仏、方便力を以って、一仏乗に於いて分別して三と説きたもう」とある。五濁の順序を述べれば、文句の四に「煩悩・見を根本と為し、此の二濁に従いて衆生を成ず。衆生に従いて連持の命あり、此の四の時を経るを、謂いて劫濁と為すなり」とあるとおりである。

劫濁は別の体無し　劫濁とは時代の濁りをいう。煩悩濁、衆生濁、見濁、命濁の盛んな時代をいうのであって、特別に体があるのではない。「劫」についてはさまざまな説があるが、ここでは、刹那（短時）に対して長時といわれている。

衆生濁　衆生社会の濁りをいう。文句には「見慢を攬りて果報の上に此仮名を立つ。文に『衆生垢重く』と云うは即ち此義なり」とある。我見、慢心により、衆生社会全体が濁っていること。

煩悩濁は五鈍使を指て体と為し　煩悩濁は、個人についてみた濁りである。貪（むさぼり）瞋（いかり）癡（おろか）慢（慢心）疑（うたがい）の五鈍使がその内容である。五鈍使とは、見惑を十使にわけて、五利使と五鈍使となる。五利使が思想的な惑いであるのに対して、五鈍使は本能的な惑いである。「使」とは、その煩悩に追い使われる、すなわち支配されるという意味である。

見濁は五利使を指て体と為し　見濁とは思想からくる濁りである。五利使とは身見、辺見、見取見、戒取見、邪見をいう。身

見とは、己れの身に愛着して、我見に執着することである。辺見とは、断見ともいい、生命の永遠常住を認めない考え方である。見取見とは、自己の見解に執着し、増上慢を起こして、劣っているものを勝れていると謂う考え方（劣謂勝見）である。戒取見（戒禁取見）とは、因でないものを因と謂い、道理でないものを道理と謂う考え方である。邪見とは、因果律、三界の因果の理法を認めない考え方である。

命濁は連持色心を指して体と為す　命濁とは生命の濁りである。連持色心とは、色心（生命）の連続の上に、濁りがあり、生命力を損耗していくことをいう。

我此土安穏なれば劫濁に非ず　寿量品の自我偈に「我が此の土は安穏なり」とある。南無妙法蓮華経を根本として、安心立命の境涯に立ち、蓮華が汚泥にあってなお浄らかに咲くように、色心ともに一念三千の当体と顕われている。その所居の環境（依報）は、常寂光土であるゆえに、我此土安穏であり、時代の濁りに染まらないのである。当体義抄（五一二ページ）にいわく、「所詮妙法蓮華の当体とは法華経を信ずる日蓮が弟子檀那等の父母所生の肉身是なり、正直に方便を捨て但法華経を信じ南無妙法蓮華経と唱うる人は煩悩・業・苦の三道・法身・般若・解脱の三徳と転じて三観・三諦・即一心に顕われ其の人の所住の処は常寂光土なり能居・所居・身土・色心・倶体倶用・無作三身の本門寿量の当体蓮華の仏とは日蓮が弟子檀那等の中の事なり」

実相無作の仏身なれば衆生濁に非ず　南無妙法蓮華経を信ずる者は、事の一念三千の当体の仏身と顕われる。したがって、日蓮大聖人の弟子檀那は、衆生の濁りを離れるのである。生命の本質（実相）を悟り、無作三身の仏として顕現するのであるから、我見慢心等によりその報いを受けることはないのである。

煩悩即菩提生死即涅槃の妙旨なれば煩悩濁に非ず　日蓮大聖人の仏法の立ち場では、煩悩を断じつくすのではなく、煩悩がそのまま菩提の因であり、生死の苦しみの生活のなかに即涅槃し仏界の境涯を湧現した、悟りの幸福生活を具現していくので

ある。したがってあらゆる煩悩を、それにとらわれることなく、明らかに見て、生活の上に生かしていくことができる。これは煩悩濁を離れた姿である。

五百塵点劫より無始本有の身なれば命濁に非ざるなり　生命は五百塵点劫の当初以来、無始無終の永遠常住のものである。妙法を持って、永遠の生命を覚知し、確信するがゆえに、命濁―生命の濁りを離れるのである。

正直捨方便但説無上道の行者なれば見濁に非るなり　方便品（一八九㌻）に「正直に方便を捨てて、但無上道を説く」とある。前掲の当体義抄の文をみよ。爾前権教、さらに熟脱の法華経文上の教えは、文底下種独一本門に至るための方便の教えである。無上道とは三大秘法の南無妙法蓮華経である。それを信じ、実践する日蓮大聖人の門下は、見濁――思想の濁り、偏見の思想を離れるのである。

文句四に云く『相とは四濁増劇にして此の時に聚在せり……』　ここは、劫濁の相（体相）を明かすのである。四濁がともに劇しく増えて、此の時―劫濁の時にあつまるのである。

瞋恚増劇にして……疾疫起り　瞋恚（いかり）が増して戦争が起き、貪欲（むさぼり）が増して飢餓が起き、愚癡（おろか）が増して疫病が起こる。ここは依報、正報の不二の原理である。

三災起るが故に煩悩倍隆んに諸見転た熾んなり　穀貴、兵革、疫病の三災（これを小の三災という）が起こるがゆえに、また衆生の煩悩はますます盛んになり、邪見がはなはだしく起こってくるのである。このほか、大の三災（火災、水災、風災）を指すときもある。

経に如来現在猶多怨嫉況滅度後と云う　法師品（三九〇㌻）に「如来の現在すら猶怨嫉多し、況んや滅度の後をや」とある。如来の現在とは、釈尊在世であり、滅度の後とは、釈尊滅後、正法、像法、末法に通ずるが、その正意は末法である。ゆえに況滅度後の経文を日寛上人は「況んや滅度の後正法をや、況んや滅度の後像法をや、況んや滅度の後末法をや」（取意）

と読むべきであると仰せられている。釈尊は九横の大難をうけている。しかし、釈尊以上の大難をうけられたのは、日蓮大聖人お一人である。

五濁障重の者　法華経不信の者、御本尊を信じえない謗法の者を、五濁の障りが深重の者とする、五濁爛漫というのである。

経に云く『以五濁悪世……』　方便品（一九一㌻）に「五濁の悪世には、但諸欲に楽著せるを以って、是の如き等の衆生、終に仏道を求めず」とある。

仏道とは法華経の別名なり　方便品の仏道とは法華経のことをいうのである。日蓮大聖人の文底仏法の立ち場では、三大秘法の南無妙法蓮華経になる。

天台云く「仏道とは別して今経を指す」　今経とは法華経、すなわち御本尊のこと。

通解

これは、方便品（一七〇㌻）の「舎利弗、諸仏は五濁の悪世に出でたもう。所謂劫濁、煩悩濁、衆生濁、見濁、命濁なり。是の如し。舎利弗、劫の濁乱の時は、衆生垢重く、慳貪嫉妬にして、諸の不善根を成就するが故に、諸仏、方便力を以って、一仏乗に於いて分別して三と説きたもう」の部分である。

天台大師は、法華文句の四に、次のように述べている。まず、「劫濁」とは、何か一つの実体があるものではない。劫とは、短時を意味する刹那に対して、長い時の流れをいうのである。すなわち、劫濁とは、時代の濁りであり、四濁が盛んである時代をいうのである。「衆生濁」とは、やはり、とくに別の実体があるのではない。

我見、慢心が盛んになることによって、衆生社会の上に、それに対する果報（むくい）を受けている状態である。「煩悩濁」は、貪、瞋、癡、慢、疑の五鈍使に追い使われている状態であり、「見濁」は五利使によって起こるところの煩悩、偏見である。また命濁は、色心を連持、すなわち色心（生命）の連続の上に、濁りがあり、生命力を損耗していくところのものである。

御義口伝には、次のように仰せである。いま、三大秘法の南無妙法蓮華経を信受する日蓮大聖人およびその門下は、この五濁を離れているのである。五濁のなかにありながら、それをのりこえた、浄らかな境涯、生活を顕現せしめているのである。

その理由は次のとおりである。すなわち、寿量品に「我が此の土は安穏なり」とあるように常寂光の国土世間に住しているのである。ゆえに、われわれは、劫濁という時代の濁りのなかで、悠々と楽しみきった生活行動をしていくのである。また、われわれは、実相無作三身の如来とあらわれるのであり、本覚の如来であるわが身には、衆生の濁りはないことは当然である。ゆえに、衆生濁を離れているのである。

妙法は煩悩即菩提、生死即涅槃の哲理を説いた教えである。ゆえに、妙法を護持する者には、煩悩濁はないのである。煩悩、苦しみが、そのまま自己の悟り、幸福境涯確立の因となって開いていくのである。また、われわれの生命は、久遠元初以来、無始無終に、永遠に三身常住するのである。したがって、生命の上につづくところの濁り、命濁を、根本的に離れているのである。また、爾前、権教、文上の方便の教えを捨て、ただひたすらに南無妙法蓮華経という最高の哲学、宗教を信じ実践するわれわれは、正しい思想、正しい人生観、社会観、世界

観を確立しているのであるから、見濁ではないのである。

詮ずる所は、これらすべての五濁は、南無妙法蓮華経を信ずるか否かにより、その有無が定まるものであるから、不信の衆生である日本国の一切衆生こそ、この五濁の文に当たる人々なのである。したがって文句の四には「劫濁の相（すがた）というのは、四濁がきわめて激しく、ある時代にあつまっていることなのである。瞋恚（いかり）が劇（はげ）しくなれば、その国土に戦争が起き、貪欲（むさぼり）が盛んな時は、飢饉が起き、愚癡（おろか）が多いときには、伝染病が起きる。かようにして三災が起こってくると、人々の煩悩はますます盛んになり、諸々の邪悪な思想や宗教がはびこることになるのである」といっている。

法華経法師品に「如来の現在すらなお怨嫉を受けたのであるから、いわんや滅後、とくに末法においては、難がさらに激しいことは当然である」と説かれているのは、このような五濁の時代を指しているのである。

法華経、すなわち三大秘法の南無妙法蓮華経を信ぜざる者こそ、五濁の障（さわ）り重く、不幸の境涯に沈む衆生である、というべきである。このような衆生の姿を、方便品には「五濁の悪世の時には、ただいろいろの欲望を願い、それに執着する衆生が充満するのであり、これらの衆生はついに仏道を求めることがない」と説いている。この「仏道」とは法華経、三大秘法の大御本尊の別名である。天台大師は「仏道というのは、仏のさまざまの教えのうちで、別して今経（法華経）を指している」と述べている。いま、日蓮大聖人の仏法の上からは、仏道とは法華経、すなわち三大秘法の南無妙法蓮華経をいうのである。

講義

まことにこの御文こそ、現今の世相を映し出しているものであり、同時に、大御本尊を信受したわれわれが、この社会を浄化していく以外にないことを示されたものといえる。

まず、劫濁とは時代の濁りである。たしかに、時代によって、混乱した、濁りきった時代もあったし、比較的平和な時代もあった。時代の濁りといっても、実体というものはないのであるが、他の四濁が激しく、盛んであり、その濁りが、長くつづいている場合、劫濁というのである。劫とは長時という意味であるが、これは相対的なものである。したがって、ある一年間なら一年間の乱れを劫濁ととってもよいし、五年、十年を劫濁と考えてもよいし、また百年、二百年を劫濁としてもよいのである。

あの第二次世界大戦の時代は、まさに劫濁そのものであった。この時代は、過去の悪夢ともいうべき、血なまぐさい殺りく、荒廃した国土、怒号と悲鳴とに満ちた修羅場を目の前に展開したのである。しかし、現在もまた、けっして劫濁を離れたとはいえない。核戦争の危機――しかも、誰が望むのでもなく、誰の意思にもよらないで起こる偶発戦争の危機等にさらされる冷たい対立も、必ずしも緩和されたわけではない。ベトナムの紛争や中ソ論争や西欧列強の複雑な内部事情によって、対立の様相は、徐々に変わってきているが、それは、対立そのものの変更を意味するものとはいえない。国と国が、たがいに相手のすきを伺い、虎視たんたんと目を光らせ、必要

によっては、手を結んだり、あるいは敵対するなど、利害による妥協と敵対以外のなにものでもない。これこそ劫濁の時代ではないか。

次に、衆生濁であるが、これもやはり、社会全体の濁りであり、別に本体があるわけではない。しかし、現在の社会をみたときに、日本の政治を考えただけでも、いかに濁りきっているかがわかるのである。悪徳政治家たちは、既成の権威にしがみつき、私利私欲にあけくれている。腐敗は慢性的になり、政治家とは、野心家とか、腹芸がうまい人の、代名詞のごとく思われている。こうした政治家を生むのも、結局、民衆の無気力、無知、そして長いものにまかれろ式の封建性が原因しているのである。このような社会全体の濁りが衆生濁である。

以上の二つの濁りは、あくまでも全体としての濁りであり、総合的に考えたうえでの濁りである。次にあげる煩悩濁、見濁、命濁は、こんどは、いずれも個人個人についていえるものである。

煩悩濁は、五鈍使、すなわち、貪、瞋、癡、慢、疑という、むしろ本能的な迷いである。自分の利益ばかりを、むさぼるように求めて、他人をかえりみないのは「貪」である。事態を冷静に判断できず、すぐに感情に走り、生活を破壊するのは「瞋」である。目先のことのみにとらわれ、自分の一生を台無しにするのは「癡」である。少々のことを鼻にかけ、正しいものを受け入れようとしないのは「慢」である。なんでも疑いの目を向け、自暴自棄になるのは「疑」である。いずれにしても、末法のわれら衆生の姿に、まったくぴったりとあてはまるではないか。たまには、自分はなんと利己的で、怒りっぽく、馬鹿で、威張っていて、疑い深いかと反省するときもあろうが、その自分をどうしようもないのが現実ではなかろうか。

次に見濁とは、思想の濁りである。五利使とは、先の五鈍使が生命それ自体に備わった、いわば誰にでもある本能的な濁りであるのに対し、才智ある邪見、煩悩で、鋭利的なものとされている。五利使については、つぶさには語訳にあるとおりであるが、身見といい、辺見といい、見取見といい、戒禁取見といい、邪見といい、まったく、現代の、いわゆる似非知識人にあてはまるではないか。特に、仏法のなんたるかも知らずして、創価学会を非難し、中傷する評論家こそ、愚人の中の愚人であることを暴露しているようなものである。

次に、命濁とは、生命それ自体の濁りである。染浄の二法のなかには、染法である。すなわち、煩悩濁や見濁が原因で、生命それ自体が濁り、生命力が弱まり、意欲がなくなっていることをいうのである。

戸田城聖前会長は、このことについて、次のように述べられている。

「われわれの生命には、染浄の二法が存在する。清らかな生命は、外界のいっさいを、すなおにうけて、宇宙の大リズムに調和して、生命が流転するから、決して、無理はない。この生命こそ、偉大な生命力を発揮するがゆえに、人生を楽しむことができるのである。

ところが、生命の染法と申すのは、生命が幾多の流転の途上に、みな、あやまった生活が生命に染まって、一つのクセをもつことになる。そのクセをつくるもとが、欲ばり、いかり、バカ、しっと等のもので、これによって種々に染められた生命は、宇宙のリズムと調和しなくなって生命力をしぼめていくのである。このしぼんだ生命は、宇宙の種々の事態に対応できなくて、生きること自体が苦しくなるので、すなわち、不幸なる現象を生ずるのである」と。

このように、生命の連続のうえに、濁りがあり、生命力が弱まるのが命濁である。たしかに、われわれは、信仰する前は、なんと苦悩に満ちみちた人生を歩んできたことか。また、現在、信心していない人々は、自らの宿命に泣き、生きる喜びを失っているのである。どんなに自分を誇張しようとしても、背のびして、りっぱそうにしても、真に生きがいある人生は送れないのである。

以上が五濁の説明であるが、日蓮大聖人は「日蓮等の類いは此の五濁を離るるなり」と仰せられているのである。現在、五濁悪世の世であるとしても、われわれ大御本尊を持ったものは、この五濁に染まらないのである。どんな時代がこようとも、どこへ行こうとも、それに左右されることなく、環境を変え、この娑婆世界を思うがままに乱舞するのは、時代の濁りに染まらないといえるのである。さらに、大御本尊を持つ人が一国に多くなり、やがて化儀の広宣流布の時がやってくるならば、その国は、いかに世界が動乱の巷にあっても、それに動かされることなく、むしろ、世界の指導国家として、動乱を静め、平和な世界をもたらすことに偉大な貢献をするようになるのである。小さくは個人の身のまわりから、大きくは世界全体にいたるまで、常寂光の世界を実現させるのは、われわれしかないことを銘記すべきである。これこそ「我此土安穏なれば劫濁に非ず」と仰せられたことにあたるのである。ゆえに立正安国論（三二ページ）には「汝早く信仰の寸心を改めて、速かに実乗の一善に帰せよ。然れば則ち三界は皆仏国なり。仏国其れ衰んや。十方は悉く宝土なり。宝土何ぞ壊れんや。国に衰微無く土に破壊無くんば、身は是れ安全にして、心は是れ禅定ならん」と仰せられているのである。

また、一人一人が人間革命すれば、社会全体は、活気に満ちみち、おたがいに尊重し、信頼しあい、政治も、

経済も、教育も発展し、真に潤いのある、豊かな文化社会が建設されていくのである。これが「実相無作の仏身なれば衆生濁に非ず」ということである。事実、創価学会という一大和合僧団は、なんと清らかな世界であろうか。学生も、勤労青年も、老いも若きも、男も女も、一つの目的に向かって団結し、おたがいがそれぞれの分野で、自己の使命と責任とをもって進んでいるのである。

よく世間の人は、創価学会の団結の姿を見て、命令的であるとか、盲目的であるとかいうが、これは大なるあやまりである。創価学会の団結は、一人一人の自覚と責任感あっての団結である。いったい、命令で五百万世帯以上の人が動くであろうか。そんな前時代的な、旧式の方法で、人々が動くと考えること自体が、既成の知識にしばりつけられ、それに盲目的にしたがっている、愚人の姿ではなかろうか。

また「煩悩即菩提生死即涅槃の妙旨なれば煩悩濁に非ず」とは、煩悩や苦しみに支配され、自分で自分をどうしようもなかった人生を克服して、煩悩を使いきり、苦境を打開し、思うがままに人生を遊戯する自在の境涯を開き、幸福な人生を歩んでいくことをいうのである。このときは、大聖人が「南無妙法蓮華経は歓喜の中の大歓喜なり」（七八八㌻）と仰せられているように、われわれは、瞬間瞬間、日々、月々、年々、楽しいのである。

「五百塵点劫より無始本有の身なれば命濁に非ざるなり」とは、永遠の生命観に立脚することである。人生におけるいっさいの行き詰まりは、生命は今世しかないという、刹那主義から起きてくるのである。では、永遠の生命観に立脚するとは、いかなることであろうか。観念的に、生命は永遠であると考えたところで、それは永遠の生命観に立脚したことにはならない。考えてみれば、われわれの生命には、無始以来の無量の宿命が内在してい

るのである。生命の流転のうちに、生命力は弱まり、不幸にさいなまれ、苦悩の中に没入していたのである。しかしながら、いかなる因縁あってか、大御本尊にめぐり会えたのである。

観心本尊抄（二四六㌻）にいわく「釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華経の五字に具足す我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り与え給う」と。たとえ、過去にいかなる宿業があろうと、大御本尊を持つならば、それらの宿業はことごとく消え、過去世に無量の善根を積んできたと同じ結果があらわれる、そして、未来永劫に行き詰まらないとの仰せなのである。これ永遠の生命観に立脚し、命濁を離れた姿ではないか。

「正直捨方便但説無上道の行者なれば見濁に非ざるなり」とは、偏頗な思想の持ち主ではないということである。寿量品（四九九㌻）には「如来は如実に、三界の相を知見す」とある。まことに仏法こそ、宇宙、人生の実相を説き究めた最高の思想であり、哲学である。われわれは、その絶対に正しい根本思想の持ち主であるがゆえに、人生観、宇宙観、社会観、国家観等も開けてくるのである。これ見濁を離れた姿ではないか。

「正直に方便を捨てて、但無上道を説く」（一八九㌻）の無上道とは、最高の哲学、幸福をもたらす偉大な思想ということである。大聖人は、御義口伝の信解品の項で、次のように仰せられている。

「御義口伝に云く無上に重重の子細あり、外道の法に対すれば三蔵教は無上・外道の法は有上なり又三蔵教は有上・通教は無上・通教は有上・別教は無上・別教は有上・円教は無上、又爾前の円は有上・法華の円は無上・又迹門の円は有上・本門の円は無上、又迹門十三品は有上・方便品は無上・又本門十三品は有上・一品二半は無上、又天台大師所弘の止観は無上・玄文二部は有上なり、今日蓮等の類いの心は無上とは南無妙法蓮華経・無上

の中の極無上なり」と。

われわれは、この「無上の中の極無上」たる南無妙法蓮華経を唱えるがゆえに、仏智を湧現し、自然に、いっさいを見通していけるようになってくるのである。

次に、文句の四の劫濁の説明のところは、まことに興味深い。「瞋恚増劇にして刀兵起り」とは、戦争の本質をついたものである。戦争など狂人でない限り、誰一人として、望んではいなかろう。もし戦争を望むような人間がいるとすれば、それは人間ではなくして、人間の仮面をかぶった魔物である。誰も願っていないのに、なぜ核兵器が製造され、世界は一触即発の危機にさらされ、また弱小国には動乱が絶えないのであろうか。人々を大量虐殺したり、戦車の下敷きにしたり、原水爆投下によって多くの犠牲者を出すなどということは、理性ではとうてい考えられないことである。これは、まったく瞋恚、すなわち、怒りからくるのである。「修羅は身長八万四千由旬」とあるが、生命論からいえば、怒りの境涯をあらわしたものであろう。人は、怒り狂っているときは、すべての物が小さく見えてしまうのである。したがって日ごろ大事にしていた品物を、怒りのあまり投げつけてこわしたり、他人の家に火をつけたり、あげくのはては、人殺しまでしかねないのである。戦争の際の、あの残虐さも同様である。激怒と激怒の衝突が、戦争の火花となってあらわれるのである。

「貪欲増劇にして飢餓起り」とは、人々が利己主義で、自分の利益を追求することのみ、あくせくしているならば、たまたまの天災は、民衆に大打撃を与え、政治の劣悪は、人々に多くの不足をもたらすのである。人々は、他人を蹴落としてまで、自己の保身のために躍起となり、とくに指導者が貪欲であれば民衆は塗炭の苦しみを味

わわなければならない。

「愚癡増劇にして疾疫起り」とは、愚癡すなわち愚かであるために、病気が起こるというのである。すべての病気は、正しいリズムからはずれたときに起こる。愚癡蒙昧にして、目先のことのみに目を奪われ、偏見、邪見のためにすなおな心がおおわれて、生命力は衰え、無気力となり、そこに疫病がまん延するのである。

「三災起るが故に煩悩倍隆んに諸見転た熾んなり」とは、こうした人々の生命の濁りが原因で刀兵（兵革）、飢餓（穀貴）、疾疫（疫病）の三災が起こるのであるが、この三災がまた原因となって、さらに煩悩や邪見を増すという悪循環を繰り返すのである。

第五　比丘比丘尼有懐増上慢　優婆塞我慢優婆夷不信の事

本文

第五比丘比丘尼有懐増上慢優婆塞我慢優婆夷不信の事　文句の四に云く上慢と我慢と不信と四衆通じて有り、但し出家の二衆は多く道を修し禅を得て謬て聖果と謂い偏に上慢を起す、在俗は矜高にして多く我慢を起す女人は智浅くして多く邪僻を生ず自ら其の過を見ずとは三失心を覆う、疵を蔵くし徳を揚げて自ら省ること能わざるは是れ無慙の人なり、若し自ら過を見れば是れ有羞の僧なり記の四に云く疵を蔵くす等とは三失を釈するなり疵を蔵くし徳を揚ぐは上慢を釈す、自ら省ること能わざるは我慢を釈す、無慙の人とは不信を釈す、若し自ら過を見るは此の三失無し未だ果を証せずと雖も且らく有羞と名く。

御義口伝に云く此本末の釈の意は五千の上慢を釈するなり委くは本末を見る可きなり、比丘比丘尼の二人は出家なり共に増上慢と名く疵を蔵くし徳を揚ぐるを以て本とせり、優婆塞は男なり我慢を以て本とせり優婆夷は女人

なり無慙を以て本とせり、此の四衆は今日本国に盛んなり経には其数有五千と有れども日本国に四十九億九万四千八百廿八人と見えたり、在世には五千人・仏の座を立てり今末法にては日本国の一切衆生悉く日蓮が所座を立てり、比丘比丘尼増上慢とは道隆良観等に非ずや又鎌倉中の比丘尼等に非ずや、優婆塞とは最明寺優婆夷とは上下の女人に非ずや敢て我が過を知る可からざるなり、今日蓮等の類いを誹謗して悪名を立つ豈不自見其過の者に非ずや大謗法の罪人なり法華の御座を立つ事疑無き者なり、然りと雖も日蓮に値う事是併ら礼仏而退の義なり此の礼仏而退は軽賤の義なり全く信解の礼退に非ざるなり此等の衆は於戒有欠漏の者なり、文句の四に云く「於戒有欠漏とは律義失有るをば欠と名け定共道共失有るをば漏と名く」と此の五千の上慢とは我等所具の五住の煩悩なり、今法華経に値い奉る時慢即法界と開きて礼仏而退するを仏威徳故去と云うなり、仏とは我等所具の仏界なり威徳とは南無妙法蓮華経なり、故去とは而去不去の意なり普賢品の作礼而去之を思う可きなり、又云く五千の退座と云う事法華の意は不退座なり其の故は諸法実相略開三顕一の開悟なり、さて其の時は我慢増上慢とは慢即法界と開きて本有の慢機なり、其数有五千とは我等が五住の煩悩なり若し又五住の煩悩無しと云うは法華の意を失いたり、五住の煩悩有り乍ら本有常住ぞと云う時其数有五千と説くなり、断惑に取り合わず其の儘本有妙法の五住と見れば不自見其過と云うなり、さて於戒有欠漏とは小乗権教の対治衆病の戒法にては無きなり是名持戒の妙法なり故に欠漏の当体其の儘是名持戒の体なり、然るに欠漏を其の儘本有と談ずる故に護惜其瑕疵とは説くなり、元より一乗の妙戒なれば一塵含法界一念遍十方する故に是小智已出と云うなり、糟糠とは塵塵法法・本覚の三身なり故にすくなき福徳の当体も本覚無作の覚体なり、不堪受是法とは略開の諸法実相の法体を聞き

て其の儘開悟するなりさて身子尊者鈍根に分別解説したまえと請う広開三の法門をば不堪受是法と説く、さて法華の実義に帰りて見れば妙法の法体は更に能受所受を忘るるなり不思議の妙法なり、本法の重を悟りて見る故に此衆無枝葉と云うなり、かかる内証は純一実相・実相外更無別法なれば唯有諸貞実なり所詮貞実とは色心を妙法と開く事なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る処を唯有諸貞実と説くなり、諸とは諸法実相の仏なり諸は十界なり貞実は十界の色心を妙法と云うなり今経に限る故に唯と云うなり、五千の上慢の外全く法華経之れ無し五千の慢人とは我等が五大なり五大即妙法蓮華経なり、五千の上慢は元品の無明なり故に礼仏而退なり此れは九識八識六識と下る分なり流転門の談道なり、仏威徳故去とは還滅門なり然らば威徳とは南無妙法蓮華経なり本迷本悟の全体なり能く能く之を案ず可し云云。

語訳

比丘比丘尼……不信　ここは方便品で、五千人の増上慢の比丘比丘尼が退座するところである。長行（一六五ページ）には「此の語を説きたもう時、会中に比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷五千人等有り。即ち座より起って仏を礼して退きぬ。所以は何ん。此の輩は罪根深重に、及び増上慢にして、未だ得ざるを得たりと謂い、未だ証せざるを証せりと謂えり。此の如き失あり。是を以って住せず。世尊黙然として制止したまわず」云云とあり「比丘偈」（一七一ページ）の冒頭には「比丘比丘尼の、増上慢を懐くこと有る、優婆塞の我慢なる、優婆夷の不信なる、是の如き四衆等、其の数五千有り、自ら其の過を見ず、戒に於いて欠漏有って、其の瑕疵を護り惜しむ、是の小智は已に出でぬ、衆中の糟糠なり、仏の威徳の故に去りぬ、斯の人は

福徳尠くして、是の法を受くるに堪えず、此の衆は枝葉無し、唯諸の貞実のみ有り」とある。

上慢・我慢　慢とは、自分を恃んで他人に対して高く挙げるのを慢というのである。七慢、八慢、九慢等の種類がある。いま七慢について述べれば、一に慢とは、他に劣っているのに、おのれが勝れていると謂うこと。二に過慢とは、他に等しいのに、おのれが勝れていると謂うこと。三に慢過慢とは、他が勝れているのに、おのれがさらに勝れていると謂うこと。四に我慢とは、われをたのみわが所に執すること、五に増上慢とは、いまだ得ざるを得たりと謂うこと。六に卑慢とは、他が多分に勝れているのに対して、おのれは少しく劣っていると謂うこと。七に邪慢とは、おのれが徳がないのに徳があると謂うことである。「上慢」とは、第五の「増上慢」のことである。

四衆　比丘（出家の男子＝僧）、比丘尼（出家の女子＝尼）、優婆塞（在家の男子）、優婆夷（在家の女子）のこと。

禅　禅定のこと。ここでは爾前権教の禅をいう。

聖衆　仏の悟りのこと。

矜高　誇り高いこと。

邪僻　まちがった考え、邪見。

自ら其の過を見ず　前出の方便品の文参照。

三失　上慢と我慢と不信。

無慙　恥を知らないこと。記の四には「不信」と釈している。

有羞の僧　恥を知る謙虚な僧。

本末の釈　「文句」を本とし、それを釈した「文句記」を末といわれたのである。

二人　二種類の人という意味。

此の四衆は今日本国に盛んなり　涅槃経にいわく「我れ涅槃の後……像法の中に於て当に比丘有るべし持律に似像して少かに経典を読誦し飲食を貪嗜して其の身を長養し袈裟を服ると雖も猶猟師の細視徐行するが如く猫の鼠を伺うが如し、常に是の言を唱えん我羅漢を得たりと外には賢善を現し内には貪嫉を懐く啞法を受けたる婆羅門等の如く実には沙門に非ずして沙門の像を現じ邪見熾盛にして正法を誹謗せん」と。この四衆が、国に充満していることを述べている。

其数有五千　前掲の方便品の「其の数五千有り」（開目抄下二二八ページ）の文。

四十九億九万四千八百廿八人　この億は十万のこと。したがって、四百九十九万四千八百廿八人ということ。大聖人御在世当時の日本の人口である。

道隆良観　道隆とは、建長寺道隆のことで、日蓮大聖人に敵対した禅宗の僧。良観とは、極楽寺良観のことで、鎌倉の極楽寺で律、真言、念仏等をひろめて、大聖人に敵対した邪僧。

最明寺　最明寺入道時頼。北条時頼のこと。大聖人を伊豆の伊東に流罪した。

不自見其過　前掲の「自ら其の過を見ず」の文。

礼仏而退　前掲の「仏を礼して退きぬ」の文。日蓮大聖人にお会いして「礼仏而退」するというのは、大聖人が末法の仏であるとの仰せと拝すべきである。

於戒有欠漏　前掲の「戒に於いて欠漏有って」の文。

文句の四に云く『於戒有欠漏とは……』　大小乗を通じて律儀戒、定共戒、道共戒の三つがある。三種戒という。律儀戒は仏が大律条儀則という一定の形式、項目を設けて抑止した戒で、その下に規律正しい修行をするもの。定共戒は静慮律儀ともいい、禅定を修するうちに自然に防非止悪の用をともなうもの。道共戒は無漏律儀と訳し、修行の結果、無漏心（煩悩のない心）を起こすことにより、自然にそなわるもの。

五住の煩悩　㈠三界の見惑　㈡欲界の思惑　㈢色界の思惑　㈣無色界の思惑　㈤根本無明惑をいう。五千の上慢とは、われわれの生命にそなわるところの、これらの煩悩を意味しているのである。

慢即法界と開きて　南無妙法蓮華経を信受した時には、これらの上慢、我慢、すなわち己心の五住の煩悩は、法界にそのまま実在するものと開覚する。法界とは十界をいう。

仏威徳故去　「仏の威徳の故に去りぬ」の文。

故去とは而去不去　「故に去りぬ」とは「去って去らず」ということ。

普賢品の作礼而去　普賢品第二十八（六七二ページ）の最後に「仏是の経を説きたもう時、普賢等の諸の菩薩、舎利弗等の諸の声聞、及び諸の天、竜、人非人等の一切の大会皆大いに歓喜し、仏語を受持して礼を作して去りにき」とある。信解の礼退である。

諸法実相略開三顕一の開悟なり　五千の退座と経にあることは、一重立ち入ってみれば、不退座なのである。なぜかならば、すでに「十如是」の諸法実相の文により、略開三顕一を開悟しているからである。

略開三顕一、広開三顕一　開三顕一とは「三乗を開いて一仏乗を顕わす」ということ。釈尊はインドに出世し、三十歳、菩提樹下で成道以来、四十二年にわたって方便権教を説いてきたが、後八年の法華経を説くにあたり、その開経である無量義経（八八ページ）には「四十余年には未だ真実を顕さず」と説き、ついで方便品第二（一五六ページ）には「世尊は法久しくして後要ず当に真実を説きたもうべし」「正直に方便を捨てて但無上道を説く」（一八九ページ）と宣言している。すなわち、方便品の説法は、四十余年にいまだかつて聞かざる大法であることが知られるのである。また、方便品には十如実相を説き、一念三千を明かしている。これにより爾前経では、各別に説いた空諦、仮諦、中諦も円融相即していると説く。従来施してきた権教は、実教のために説いてきたのであり、いまここに権を開いて実を示し、実を示すとき権を廃するのである。これすなわち開三顕一であり、方便品に「一仏乗に於いて分別して三と説きたもう」「唯一乗の法のみ有り、二も無く亦三も無し、仏の方便

の説をば除く」（一七四ページ）というのがこれである。ここにおいて天台は三種の教相中、第一に根性の融不融の相を立てた。爾前経では衆生の根性が不融であるゆえに声聞、縁覚、菩薩等に対して説法はばらばらであったが、法華経方便品にいたって根性は円融し、一仏乗の大目的に統合されたのである。この開三顕一に、広略の二開があり、ほぼ開顕するのを略開三顕一と呼び、広く開顕するのを広開三顕一という。略開三顕一は法華経方便品の十如実相の教えをさし、略一念三千を説き明かしている。開目抄上（二〇八ページ）に「法華経・方便品の略開三顕一の時・仏略して一念三千・心中の本懐を宣べ給う」とある。広開三顕一とは方便品長行から人記品第九までをいう。すなわち、方便品長行において開示悟入して仏出世の一大事因縁を説き、つぎの譬喩品第三で三車火宅の譬えにより、第四の信解品で長者窮子の譬えにより、第五の薬草喩品では三草二木の譬えにより、開三顕一を説き、第六の授記品を経て第七の化城喩品では化城宝処の譬えをひいて重ねて開三顕一を述べ、第八の五百弟子受記品では、この会にいない一切の声聞に授記を説き、授記を得た五百の弟子は繋珠の譬えをあげて仏恩の深重を述べた。ついで第九の人記品では下根の者にも授記を明かした。つまり、方便品の長行から人記品に至るまでは、広く三乗を開いて一乗を明かし、法説、喩説、因縁説の手段によって、あらゆる衆生が成仏できることを説いたから、広開三顕一というのである。

断惑に取り合わず其の体本有妙法の五住と見れば不自見其過と云うなり　煩悩、惑を断ずるのでなく、煩悩即菩提であり、煩悩は即妙法に本有のものと覚るがゆえに、「自ら其の過を見ず」といえるのである。

対治衆病の戒法　爾前権教の戒をいう。爾前経の戒は衆病すなわち煩悩を対治するものである。小乗経の五戒、八斎戒、具足戒、十善戒、権大乗経の三聚浄戒、十重禁戒等の戒法は、いずれも煩悩を断じつくして悟りをうるための戒である。

是名持戒の妙法なり　法華経宝塔品（四一九ページ）に「此の経は持ち難し、若し暫くも持つ者は、我即ち歓喜す、諸仏も亦然なり、是の如きの人は、諸仏の歎めたもう所なり、是れ則ち勇猛なり、是れ則ち精進なり、是れを戒を持ち、頭陀を行ずる者

と名づく」とあり、御講聞書（八二七ページ）にも「法華経の文の如く是名持戒の戒体を本として、正直捨方便・但説無上道の如くなるは戒なり」とある。すなわち、日蓮大聖人の仏法における戒とは、通途の仏法で説くところの戒法ではなく、南無妙法蓮華経を受持することが即持戒となるのである。生命は妙法蓮華の当体であり、通途の仏法の戒においては欠漏があるといえども、その当体がそのまま持戒の体となり、戒体と現われるのである。

護惜其瑕疵　通途の戒において欠漏があるとは、結局は上慢、我慢等の煩悩のことである。その煩悩が本有のものであるがゆえに、「其の瑕疵を護り惜しむ」ということになるのである。

一塵含法界一念遍十方する故に是小智已出と云うなり　小乗権教の小智を已に出でていることをいっている。観心本尊抄（二三八ページ）に、摩訶止観第五の文を引いていわく「夫れ一心に十法界を具す（乃至）即三千種の世間を具す、此の三千・一念の心に在り若し心無んば而已介爾も心有れば即ち三千を具す乃至所以に称して不可思議境と為す意此に在り」と。

糟糠とは塵塵法法・本覚の三身　かすとぬかのこと。また、ねうちのないもの。経文には「衆中の糟糠」という。しかるに観心の立ち場からは、このような一塵・一法にいたるまで、ことごとく本覚の三身如来の生命のあらわれとなる。

身子尊者鈍根に分別解説したまえと請う広開三の法門　身子尊者とは舎利弗のこと。舎利弗が方便品で、略開三顕一の諸法実相の説法を聞いて、さらに広開三顕一の説法を求めるところである。「爾の時に舎利弗、四衆の心の疑を知り、自らも亦未だ了せずして、仏に白して言さく、世尊、何の因、何の縁あってか、慇懃に諸仏第一の方便、甚深微妙難解の法を称歎したもう。我昔より来、来だ曾て、仏に従って是の如き説を聞きたてまつらず。今者四衆、咸く皆疑有り、唯、願わくは世尊、斯の事を敷演したまえ。世尊、何が故ぞ、慇懃に甚深微妙難解の法を称歎したもう」（一五九ページ）等と、三回も熱心に請い、はじめて仏は広開三顕一の説法を始めるのである。南無妙法蓮華経を根本として、一重立ち入ってみる時には、一切衆生ことごとく妙法の当体であり、一として成仏せざるものはないのである。

広開三の法門をば不堪受是法と説く　すでに略開三・諸法実相の法門を聞いて、開悟しているのであり、舎利弗は鈍根の者のために、分別解説したまえと請うているのであって、釈尊が説きはじめる広開三の法門を、あえて聞き受ける必要がないのである。ゆえに「是の法（広開三の法門）を受くるに堪えず」というのである。

妙法の法体は更に能受所受を忘るるなり　妙法蓮華経の法体というものは、能所不二の不思議の妙法である。受くる衆生の当体も妙法蓮華経の当体なのである。ゆえに、改めて妙法の法体を受けるのではなく、わが生命の妙法を開いていくのである。

本法の重　本法とは文底の法華経であり、釈迦仏法より一重たちいった法門である。

此衆無枝葉と云うなり　「此の衆は枝葉無し」と読む。

実相外更無別法なれば唯有諸貞実なり　森羅万象、あらゆる実相の姿のほかに、ことさら別の法はない。森羅三千即妙法である。したがって「唯諸の真実のみ有り」となるのである。この貞実とは、所詮は、わが色心（生命）を妙法蓮華経の当体であると開覚することなのである。

五千の慢人とは我等が五大なり　五千の上慢の比丘とは、我等の生命を構成する五大（地水火風空）をあらわしているのであり、その五大は南無妙法蓮華経という生命の本体以外の何ものでもないのである。

九識八識六識と下る分なり　識については第一方便品の事の語訳「九識」を参照。倶舎宗等の小乗では、眼、耳、鼻、舌、身、意の六識しか立てず、第六識（意識）をもって心王としている。法相宗では、第八識、含蔵識を立て、これを心王とする。天台宗、華厳宗においては、さらに第九識、根本浄識を立て、これを心王としている。したがって、九識八識六識と下るとは、天台宗、法相、小乗と退転していく姿である。礼仏而退とはこれをいう。これは衆生が迷い、流転し、生死の苦しみにおちていく姿の上からいうのである。

流転門　還滅門に対する語であり、流転とは六道の迷いの生活をくり返していくことをいう。一念三千理事（四〇六ページ）に詳しい。

仏威徳故去　この「故去」とは、生死の苦しみおよび迷いを去って寂滅（さとりの境涯）にかえっていくことについていうのであり、威徳とは、南無妙法蓮華経を信受するゆえに仏界を開覚するのであるから、仏の威徳とは南無妙法蓮華経のことになるのである。南無妙法蓮華経は、本有の迷い、本有の悟りの全体をあらわすのである。

還滅門　流転門に対する語であり、還滅とは寂滅涅槃の本源にかえることをいう。一念三千理事（四〇七ページ）に還滅のさまを述べられて「仏は還って煩悩を失って行く方なり」といわれている。

通解

方便品において、仏がいよいよ広開三顕一の説法を始めようとしたとき、会中にいた五千人の増上慢の比丘、比丘尼が座を立って去っていく。

長行（一六五ページ）には「此の語を説きたもう時、会中に比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷五千人等有り。即ち座より起って仏を礼して退きぬ。所以は何ん。此の輩は罪根深重に、及び増上慢にして、未だ得ざるを得たりと謂い、未だ証せざるを証せりと謂えり。此の如き失あり。是を以って住せず。世尊黙然として制止したまわず」云云とあり、「比丘偈」の冒頭（一七一ページ）には「比丘比丘尼の、増上慢を懐くこと有る、優婆塞の我慢なる、優婆夷の不信なる、是の如き四衆等、其の数五千有り、自ら其の過を見ず、戒に於いて欠漏有って、其の瑕疵を護

り惜しむ、是の小智は已に出でぬ、衆中の糟糠なり、仏の威徳の故に去りぬ、斯の人は福徳尠くして、是の法を受くるに堪えず、此の衆は枝葉無し、唯諸の貞実のみ有り」云云と説かれている。ここは、主として、後の偈についての御義口伝である。

天台の文句の四には、次のように説いている。増上慢と我慢と不信とは、四衆に通じて有るものである。ただし、そのなかで、別して出家の二衆は、多く仏道修行をし、禅定の果を得てそれを誤って仏果と思い、ひたすら増上慢を起こすのである。在家は、おごり高く、我慢の心を起こす。女人は智慧浅く、邪見を生ずることが多い。「自ら其の過を見ず」とは、上慢、我慢、不信の三失が心を覆いかくしていることである。その疵をかくし、しかも外面には徳あるがごとき姿を示して、みずから反省することのできないのは、これは慙を知らない者のことである。もし、この過を自ら見るならば、その人は有羞の僧（はじを知る僧）というべきである。

妙楽は、この「文句」の釈を記の四にさらに解釈している。「文句に『疵をかくす』等とあるのは、三失を釈しているのである。すなわち、疵をかくし徳をあぐるは上慢の姿であり、自ら省ること能わずというのは我慢の姿であり、また無慙の人とは不信の者である。もし、みずからこの過に気づいて、さらに求道の志を起こすならば、三失がないといえるのであり、いまだ仏果を証得しないでも、しばらく一往の義によって『有羞』と名づけるのである」と。

御義口伝には、次のように仰せである。　この「文句」「文句記」の解釈は、五千の上慢についてであり、くわしくは「文句」「記」を見るべきである。比丘比丘尼の二衆は出家であり、ともに増上慢である。疵をかく

し、表面には徳ある姿を宣揚することをもって根本としている。優婆塞は在家の男であり、我慢をその本質としている。優婆夷は在家の女人であり、無慙をその本質としている。

しかしてこの四衆は、いま日本国に盛んである。経には「其の数五千有り」とあるけれども、日本国の上慢の四衆は、四十九億九万四千八百二十八人と数えられる。すなわち、釈迦在世においては五千人が法華経の会座から立ち去ったが、いま末法においては、日本国の一切衆生が、ことごとく日蓮大聖人の弘通に対して、誹謗しているのである。比丘比丘尼増上慢とは、建長寺の道隆や極楽寺の良観等のごとき、外に賢善の相を示し、内に貪嫉を抱く僧侶に求めずして、外に誰があるか。また、鎌倉中の比丘尼等ではないか。優婆塞とは、最明寺入道時頼等のことであり、優婆夷とは身分の上下を問わず、一切の不信の女人ではないか。これらの人々は、おのれの過ちを知らない者なのである。

いま日蓮大聖人の一門を誹謗して、日蓮門下の悪名を流すものは、経文の「自ら其の過を見ず」の者というべきではないか。まことに大謗法の重罪人であり、これらの人は、法華経の会座、すなわち日蓮大聖人の説法の座を立つことは疑いないのである。

しかしながら、日蓮大聖人に値うことは、礼仏而退（仏を礼して退きぬ）の義である。この礼仏而退は軽賤の意味であり、信解の礼退ではない。これらの衆を、経に「戒に於いて欠漏有る」者といっているのである。文句の四には、「戒に於いて欠漏有りとは、律儀戒に失あることを欠といい、定共戒・道共戒に失あることを漏という」といっている。

さて、更に深く考えるならば、この五千の上慢とは、われらが己心に具えているところの五住の煩悩をさすのである。いま文底下種の法華経に値い奉る時、慢即法界の姿であると開覚して、礼仏而退することを、「仏の威徳の故に去る」というのである。この仏とは、われら己心の仏界である。威徳とは南無妙法蓮華経である。「故去」（故に去りぬ）の「去」とは「去って去らず」の意である。普賢品の作礼而去（礼を作して去りにき）と同様に、信解の「去」となるのである。

また、別の見方をすれば、五千の退座ということは、法華経の真意からみれば、まったく不退座なのである。そのゆえは、すでに諸法実相十如是の略開三顕一を開悟しているからである。さて、その上から見る時には、我慢、増上慢ということは、慢即法界と開覚するのであり、生命に本有にそなわっているところの慢になる。「其数有五千」（其の数五千あり）とは、われらの生命に五住の煩悩があるということにほかならない。もし五住の煩悩がないというならば、それは法華の真の生命観を失うものである。五住の煩悩が生命に本有常住のものとみる時、これを其数有五千と説くのである。煩悩、惑を断ずるという爾前小乗の思想にとりあわず、そのまま本有の妙法の五住の煩悩とみる、これを「不自見其過」（自ら其の過を見ず）というのである。

さて、「於戒有欠漏」（戒に於いて欠漏あり）とは、小乗権教における、衆病対治のための戒法のことではなく、受持即持戒、是名持戒の妙法の受持である。ゆえに、小乗権教における戒という点からみて欠漏がある、われわれの生命の当体が、そのまま是名持戒の戒体と現われるのである。しかるに、ここにおいて欠漏、煩悩を本有と談ずるゆえに、「護惜其瑕疵」（其の瑕疵を護り惜しむ）と説いているのである。本来一仏乗の妙戒であり、一塵に

法界をことごとく含み、一念はまた十方法界に遍満するのであるから、小乗権教の小智はすでに出でぬというのである。糟糠とは、一塵、一現象にいたるまで、法界のすべてのものは、本覚の仏の当体であるから、福徳のすくなき当体も本覚の無作三身の覚体とあらわれるのである。

「不堪受是法」（是の法を受くるに堪えず）とは、略開三顕一の諸法実相の一念三千の法体を説くのを聞いて、そのまま開悟するのであり、その後に舎利弗尊者が、鈍根のために分別、解説したまえと請うて、釈尊が説きはじめるところの広開三顕一の法門をば、不堪受是法と説くのである。

さて、文底下種の法華経の実義にたちかえってこれをみるならば、妙法蓮華経の法体は能所不二である。能受の人、所受の妙法、ともに妙法蓮華経の当体である。じつに不思議の妙法である。この文底の法華経の重に立ち入って、その悟りの上からみるときに、「此衆無枝葉」、一切法ことごとく妙法の当体と開くのである。このような深奥の悟りは、純一実相、南無妙法蓮華経という、実相の外に更に別の法はないのである。ゆえに、「唯有諸貞実」（唯諸の貞実のみ有り）なのである。所詮、「貞実」とは、わが色心（生命）を妙法の当体と開悟することなのである。

今、日蓮大聖人およびその門下が南無妙法蓮華経と唱え奉ることを、「唯有諸貞実」と説くのである。「諸」とは森羅万象ことごとく諸法実相の仏であるということであり、また十界をあらわしている。貞実とは、十界のあらゆる色心を、そのまま妙法の当体であると開くことである。それを説き、またそれを開悟しうるのは、今経、すなわち文底下種の法華経たる南無妙法蓮華経にかぎるゆえに、「唯」というのである。

こうみるならば、五千の上慢以外、まったく法華経の当体はないのである。すなわち、五千の慢人とは、わが色法を構成するところの地水火風空の五大をあらわすのであり、その五大は、即妙法蓮華経をあらわしているのである。

また五千の上慢とは、元品の無明惑をあらわす。元品の無明惑を起して、法華不信となるゆえに「礼仏而退」するのである。これは九識、八識、六識と、最高の浄法から、次第に汚染の小法へと下る辺をいうのであり、流転門（迷い、苦しみに流転すること）からみたのである。「仏威徳故去」とは、今度は、染法から浄法へ、寂滅、寂照のさとりの境涯へ立ち還っていく姿である。それゆえ、寂滅に還る根本となる仏の威徳とは、南無妙法蓮華経であると断ずることができるのである。妙法は、本有の迷いと悟りの全体を含んでいるのである。これは深奥の法門であるから、よくよく案ずべきである。

講義

「上慢と我慢と不信と四衆通じて有り」について文句で説明しているが、このことは、学会の折伏活動にあたって、痛切に実感するところである。上慢とは、増上慢のことである。知識人と称せられる人に多く見受けられるものである。自分はなんでも知っている、あるいは、自分ほど偉いものはないといった、自己を誇示しようとする心をいうのである。我慢とは、一般の人々にも多くあてはまるもので、自分の考えは絶対に正しいとして、少

しも反省のないことをいうのである。不信とは、無知な人が、低級なもの、あやまったものに執着し、正しいものを信じようとしないことをいうのである。

これは、一往、このように立て分けるけれども、この三つは、決して、ばらばらに独立しているのではない。増上慢の人は、即我慢の人であり、不信の人なのである。日ごろどんなに偉そうな人であっても、物わかりのよさそうな人でも、一たび大御本尊の話をするや、血相を変えて怒り出したり、自分の無知をさらけ出したりするものである。ふだん見えなかった上慢、我慢、不信の心が、折伏によって浮き彫りにされてくる現象なのである。

なかんずく現代知識人の慢心は、甚しい。彼らは、たしかに自分の専門分野については、豊富な資料をもって科学的に考察しようと努力する。ところが、一歩専門外のこと、特に宗教に関しては、たちまち科学性を失い、わずかばかりの先入観念で論じようと大変である。科学的探究をもってその任とする知識人が、科学性を放棄するということは、みずから知識人であることを放棄するに等しい。

彼らの創価学会批判はしばしば変動し、じつに無定見きわまりない批判が多い。彼らは、学会を、ファッショであるとか、自民党に味方する反動団体であるとか、また、以前には、逆に、過激なアカの団体であるとか、迷信邪教であるとか言ってきたのである。したがって学会を非難するという一点においては一致しているようであるが、その批判の内容は、多種多様であり、科学性など微塵もなく、皮相的、感情的そのものであった。また、彼らは、既成の事実と創価学会を結びつけようとした。あるいは、組織のすばらしさ、団結の姿を、ナチス・ヒ

ットラーと結びつけ、あるいは、かつてのフランスのプジャード党と学会と同じであるとし、最近では、一向一揆になぞらえたりしている。まさに、創価学会の本質を知らず、右往左往と、うろたえた姿である。

しかしながら、創価学会の主張は、永遠に一貫して変わるものではない。右でもない。左でもない。全民衆を幸福にするべく、日蓮大聖人の色心不二の大生命哲学をもって進んでいるのが創価学会なのである。先にものべたように、無定見は、一見花々しくみえる場合もある。それは、無定見は、多くの意見があり、無責任に、なにごとも言える立ち場であるからである。定見はただ一つであり、責任がある。しかして、定見は、必ず無定見をうち破る。これを実証しているのが、まさに創価学会の今日の姿であると確信されたい。

五千の退座と云う事法華の意は不退座なり其の故は諸法実相略開三顕一の開悟なり

経文の上では、五千人の増上慢の輩が、法華経の説法を、もうこれ以上聞く必要がないとして退座したのであった。しかしながら、これは、法華経の意で読めば、不退座だというのである。なぜかならば、諸法実相略開三顕一の説法があった後であるからだというのである。

およそ、諸法実相にしろ、略開三顕一すなわち十如実相にせよ、森羅万象ことごとく妙法の当体であることを明かされたものであった。したがって、どんな人であっても、本質的に妙法の当体である以上、南無妙法蓮華経から逃れることは永久にできないのである。ゆえに不退座なのである。これは、秘妙方便を説明するところで述べたとおりである。

次に「慢即法界」とは、この慢は、本有の慢であり、法華の慢なのである。大御本尊は絶対であるとの大確信は、法華の慢であり、それが即大宇宙のリズムと合致した生活となってあらわれるのである。日蓮大聖人は、一切の不幸の根源は、邪宗邪義にありと喝破され、この不幸を救うのは日蓮のみであると宣言され、また大聖人こそ末法の御本仏であると示されているのである。これこそ最高の法華の慢ではなかろうか。ゆえに大聖人は、顕仏未来記（五〇七ページ）に次のように仰せられているのである。

「難じて云く汝は大慢の法師にして大天に過ぎ四禅比丘にも超えたり如何、答えて云く汝日蓮を蔑如するの重罪又提婆達多に過ぎ無垢論師にも超えたり、我が言は大慢に似たれども仏記を扶け如来の実語を顕さんが為なり、然りと雖も日本国中に日蓮を除いては誰人を取り出して法華経の行者と為さん汝日蓮を謗らんとして仏記を虚妄にす豈大悪人に非ずや」云云と。

第六　如我等無異如我昔所願の事

本文

第六如我等無異如我昔所願の事　疏に云く因を挙げて信を勧むと。

御義口伝に云く我とは釈尊・我実成仏久遠の仏なり此の本門の釈尊は我等衆生の事なり、如我の我は十如是の末の七如是なり九界の衆生は始の三如是なり我等衆生は親なり仏は子なり父子一体にして本末究竟等なり、此の我等を寿量品に無作の三身と説きたるなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱うる者是なり、爰を以て之を思うに釈尊の惣別の二願とは我等衆生の為に立てたまう処の願なり、此の故に南無妙法蓮華経と唱え奉りて日本国の一切衆生を我が成仏せしめんと云う所の願併ら如我昔所願なり、終に引導して己身と和合するを今者已満足と意得可きなり、此の今者已満足の已の字すでにと読むなり何の処を指して已にとは説けるや、凡そ所釈の心は諸法実相の文を指して已にとは云えり、爾りと雖も当家の立義としては南無妙法蓮華経を指して今者已満足と説かれたりと意得可きなり、されば此の如我等無異の文肝要なり、如我昔所願は本因妙如我等無異は本果妙なり妙覚

の釈尊は我等が血肉なり因果の功徳骨髄に非ずや、釈には挙因勧信と挙因は即ち本果なり、今日蓮が唱うる所の南無妙法蓮華経は末法一万年の衆生まで成仏せしむるなり豈今者已満足に非ずや、已とは建長五年四月廿八日に初めて唱え出す処の題目を指して已と意得可きなり、妙法の大良薬を以て一切衆生の無明の大病を治せん事疑い無きなり此れを思い遣る時んば満足なり満足とは成仏と云う事なり、釈に云く「円は円融円満に名け頓は頓極頓足に名く」と之を思う可し云云。

語訳

如我等無異如我昔所願　方便品（一七六ページ）に「舎利弗当に知るべし、我本誓願を立てて、一切の衆をして、我が如く等しくして異ること無からしめんと欲しき、我が昔の所願の如き、今者は已に満足しぬ、一切衆生を化して、皆仏道に入らしむ」とある。

疏に云く　文句の四に「我本立誓願の下二行は、是れ因を挙げて信を勧む。此を亦二と為す。初に我本立誓願の下一行は昔誓を挙げ、二に如我昔の下の一行は願満を明す」とある。仏の因位の誓願を挙げて、信を勧めているのである。

我とは釈尊・我実成仏久遠の仏なり　我とは久遠元初の自受用報身、文底下種の釈尊であり、別しては日蓮大聖人、総じて御本尊を信ずる我等衆生のことである。船守弥三郎許御書（一四四六ページ）にいわく「過去久遠五百塵点のそのかみ唯我一人の教主釈尊とは我等衆生の事なり（乃至）かかるたうとき法華経と釈尊にてをはせども凡夫はしる事なし」とある。

如我の我は十如是の末の七如是なり九界の衆生は始の三如是なり　十如是の中、初めの三如是―相、性、体は、法報応の三身をあらわす。力、作、因、縁、果、報、本末究竟等は、三如是を根本としてあらわれるのである。十如是事（四一〇ページ）にいわ

く「されば此の三如是を三身如来とは云うなり此の三如是が三身如来にておはしましけるを・よそに思ひへだてつるがはや我が身の上にてありけるなり、かく知りぬるを法華経をさとれる人とは申すなり此の三如是を本として是よりのこりの七つの如是はいでて十如是とは成りたるなり」と。しかして、如我等無異の我（仏）とは、末の七如是をあらわすのであり、我ら衆生こそ本覚の三身如来なのである。衆生は親、仏は子、父子一体であり、かくして本末究竟等となるのである。ここに衆生とは凡夫の当体本有のままの仏であり別してはあらゆる仏の能生の根源である末法の御本仏・日蓮大聖人ととるべきである。諸法実相抄（一三五八㌻）にいわく「されば釈迦・多宝の二仏と云うも用の仏なり、妙法蓮華経こそ本仏にては御座候へ、経に云く『如来秘密神通之力』是なり、如来秘密は体の三身にして本仏なり、神通之力は用の三身にして迹仏ぞかし、凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏は用の三身にして迹仏なり、然れば釈迦仏は我れ等衆生のためには主師親の三徳を備へ給うと思ひしに、さにては候はず返って仏に三徳をかふらせ奉るは凡夫なり」

寿量品に無作の三身と説きたるなり　御義口伝にいわく「されば無作の三身とは末法の法華経の行者なり無作の三身の宝号を南無妙法蓮華経と云うなり」（七五二㌻）「然らば無作の三身の当体の蓮華の仏とは日蓮が弟子檀那等なり南無妙法蓮華経の宝号を持ち奉る故なり」（七五四㌻）寿量品の文の御義口伝において、類文はなお多い。我等衆生が、総じて、無作三身如来である。別しては日蓮大聖人のみが無作三身の仏であられる。

釈尊の惣別の二願　仏菩薩にはみな誓願がある。総願は四弘誓願で、すべての仏菩薩に共通した願い。四弘誓願とは、衆生無辺誓願度、煩悩無数誓願断、法門無尽誓願知、無上菩提誓願証である。別願は、仏菩薩の各々の特別の誓願である。釈尊の別願とは「我本誓願を立てて、一切の衆をして、我が如く等しくして異ること無からしめんと欲しき、我が昔の所願の如き」等とあるのを指す。文句に「我昔の誓願は、但自ら菩提を誓うのみに非ず、亦衆生をして同じく仏慧に入らしめんと誓う」とある文の意によれば、「亦衆生をして同じく仏慧に入らしめんと誓う」すなわち一切衆生の救済は総願にあたり、「我昔

の誓願は、但自ら菩提を誓うのみに非ず」の「自ら菩提を誓う」ことは別願にあたるとも解される。われわれの立ち場でいえば、広宣流布をしていこうというのが総願であり、一生成仏を願うのは別願であるといえる。

終に引導して己身と和合するを今者已満足と意得可きなり　三世諸仏総勘文教相廃立（五七四㌻）にいわく「滞り無く上上品の寂光の往生を遂げ須臾の間に九界生死の夢の中に還り来つて身を十方法界の国土に遍じ心を一切有情の身中に入れて内よりは勧発し外よりは引導し内外相応し因縁和合して自在神通の慈悲の力を施し広く衆生を利益すること滞り有る可からず」また同（五七五㌻）にいわく「三世の諸仏と一心と和合して妙法蓮華経を修行し障り無く開悟す可し」と。

所釈の心　文句に「我昔の誓願は、但自ら菩提を誓うのみに非ず、亦衆生をして同じく仏慧に入らしめんと誓う。今誓に酬うが故に説きたまう、是も亦信ず可し」とある。開三顕一の諸法実相の法門を説いたことをもって、釈尊の所願満足であると、天台はいうのである。

南無妙法蓮華経を指して今者已満足と説かれたり　日蓮大聖人の観心の立ち場から読むならば、南無妙法蓮華経の法体を説きあらわすことをもって、所願が已に満足したと心得るべきなのである。すなわち、釈迦仏法においても、じつはことごとく文底秘沈の南無妙法蓮華経を悟って成仏するのである。文底の眼を開いてみれば、寿量品の文底に南無妙法蓮華経を秘沈されたことが、釈尊の所願満足となるのである。また、末法において、御本仏日蓮大聖人が寿量文底秘沈の南無妙法蓮華経をとりいだして、人法一箇、事の一念三千の大御本尊とおあらわしになったことは、日蓮大聖人の立ち場に約して、所願満足となるのである。

如我昔所願は本因妙如我等無異は本果妙なり　戸田城聖前会長の観心本尊抄講義録にいわく――又、「我が如く等しくして異る事無からしめんと欲しき、我が昔の所願の如き、今は已に満足しぬ、一切衆生を化して、皆仏道に入らしむ」の文を引いて、「妙覚の釈尊は我等が血肉なり因果の功徳は骨髄に非ずや」となぜ仰せられているかというのに、これは三身即一身

に約して久遠元初の自受用身を明かし、師弟不二を示されているのである。「我が如く等しくして異ること無からしめんと欲しき」とは我が昔の所願の如き今は已に満足したからである。この「我」は久遠元初の自受用身であらせられる。昔の所願の「昔」は久遠元初を意味しているのである。他門流は、これを寿量品の「我本行菩薩道」の時に立てた誓願であると解しているが、当流に於いては「我本行菩薩道」の時はまだまだ近い時であって之れよりなおなお遠い時である無始即ち久遠元初の時とするのである。されば久遠元初の自受用身の誓願を「我が昔の所願の如き」といい、この久遠元初の自受用身が末法に出現して三大秘法の大御本尊を幼稚の衆生に授与せしめ給うたから「今は已に満足しぬ」というのである。又この大御本尊を受持する衆生は皆久遠元初の仏道に入ることになるから「一切衆生をして皆仏道に入らしむ」というのである。既に久遠元初の仏道に入れば我等衆生の凡身の当体は全く是れ久遠元初の自受用身と一体であるから「妙覚の釈尊は我等が血肉なり、因果の功徳は骨髄に非ずや」と仰せられる。而して自受用は師であり我等は弟子である。既に「我が如く等しくして異ること無し」で師弟不二を示して居るのである云云。

挙因勧信　本文の冒頭にある「因を挙げて信を勧む」の文。当体義抄文段にいわく「信心はこれ唱題の因、唱題はこれ信心の果なり」因とは一生成仏の因である。それには信行が必ずともなうのである。すなわち、成仏の因をあげて、信行を勧めるのである。しかして、「挙因は即ち本果なり」とは、因とは成仏の種子、挙とはその種子を覚知すること、すなわち本果にほかならない。因果倶時の原理である。

満足とは成仏と云う事なり　満足とは、以下の釈にあるごとく、円融円満、頓極頓足を意味する。すなわち即身成仏をいうのである。

釈に云く「円は円融円満に名け頓は頓極頓足に名く」と　「円は円融円満に名け」とは、大宇宙の森羅万象をことごとく具足した大御本尊であり、完全無欠の、偏頗のない哲理のことである。なおくわしくは「第一方便品の事」の語訳を参照。「頓

は頓極頓足に名く」とは、頓とは「速」の義、極とは「究極」「至極」の義で、即身成仏、凡夫即極、直達正観と同意である。日女御前御返事（一二四四ページ）にいわく「此の御本尊全く余所に求る事なかれ・只我れ等衆生の法華経を持ちて南無妙法蓮華経と唱うる胸中の肉団におはしますなり」と。凡夫は迷えるがゆえに、わが身が当体蓮華の仏であることを知らないのである。しかるに、当体義抄（前掲）にお示しのように、御本尊を信じて南無妙法蓮華経と唱えれば、以信代慧の原理によって、わが身が永遠の生命を感得し、当体蓮華の仏であることを覚知することができるのである。これを即身成仏、また頓極頓足というのである。一往は、爾前経の歴劫修行に対して、法華経の即身成仏の法は頓極頓足であるが、再往は、色相荘厳の仏の法たる釈迦仏法においては、頓極頓足の教えはないのである。日蓮大聖人の仏法こそ、受持即観心の法であり、頓極頓足の法門である。

通解

これは、方便品（一七六ページ）に「舎利弗当に知るべし、我本誓願を立てて、一切の衆をして、我が如く等しくして異ること無からしめんと欲しき、我が昔の所願の如き、今者は已に満足しぬ、一切衆生を化して、皆仏道に入らしむ」とあるところの御義口伝である。

天台の疏、すなわち文句の四には、これは「仏の因位を挙げて、信心を勧めるのである」と説いている。

御義口伝には、次のように仰せである。「我」とは本門寿量文底の釈尊、久遠元初の仏である。この本門の釈尊とは、別しては御本仏日蓮大聖人、総じては御本尊を奉ずるわれら衆生のことである。また如我の「我」と

は、十如是の末の七如是である。仏界は用である。九界の衆生は始の相、性、体の三如是であり、三身如来なのである。衆生があってこそはじめて仏の出現はあるのであり、衆生を体とするのである。それゆえ、われら衆生は親、仏は子となる。父子一体、親子不二である。衆生も仏も妙法の当体なのである。これが本末究竟等―衆生を本、仏を末として究竟して等しいのである。このわれら衆生を、寿量品において、無作の三身と説いているのである。今、別しては日蓮大聖人、総じては妙法を唱え奉る衆生が、無作三身の仏なのである。

以上から考えてみるのに、釈尊の総別の二願とは、所詮は、我ら衆生を救い、仏果を得せしめんがために立てられたところの願である。それゆえに、今、南無妙法蓮華経と唱えて、日本国の一切衆生を日蓮大聖人が、成仏せしめんという願いこそが、御本仏に約した「如我昔所願」（我が昔の所願の如き）になる。ついに導いて、衆生をして仏の境涯と一致せしめることは、御本仏日蓮大聖人の「今者已満足」（今者は已に満足しぬ）である。

さて、この「今者已満足」の「已」の字は「すでに」と読むのである。しからば、「すでに」とは、いずれのところを指していうのであるか。およそ天台の解釈の意は、釈尊が諸法実相を説かれた文をさして、「已に」というとしている。しかしながら、文底下種家の立義としては、南無妙法蓮華経を説かれたことをさして、「今者已満足」というと意得るべきなのである。ゆえに、この「如我等無異」の経文は、じつに重要である。「如我昔所願」は本因妙、「如我等無異」は本果妙をあらわしている。また、妙覚の釈尊はわれら衆生の血肉であり、因果の功徳は骨髄であるとは、師も久遠元初の自受用身、弟子もまた久遠元初の自受用身としてあらわれ、自受用身に約して師弟不二であることを、明かされているのである。また釈には、「挙因勧信」とあり、因を挙ぐは即

ち本果なりとは、仏の種子を覚知せしめることを成仏というのである。

今、日蓮大聖人がお唱えになる南無妙法蓮華経は、末法一万年の衆生を、ことごとく成仏せしめるのである。どうして「今者已満足」でないといえようか。「已」とは、日蓮大聖人が建長五年四月二十八日、清澄寺において、はじめて唱え出されたところの題目を指して、「已」と意得るべきである。妙法の大良薬をもって、一切衆生の根本の迷い、不幸の根源を除き去り、幸福境涯に住せしめることは、疑いないのである。これを思いやるときに、日蓮大聖人の所願は満足されたのである。また衆生に約していえば、成仏をもって満足というのである。釈には、「円とは円融円満の妙法のことであり、頓とは頓極頓足、即身成仏、凡夫即極の妙法のことである」と述べられている。これをよく考えるべきである。

講義

疏に云く因を挙げて信を勧むと

現代でいえば、われわれが、幸福になろう、一生成仏をしようという因である。そして、信行実践が必要になってくる道理である。したがって、当体義抄文段には「信心はこれ唱題の因、唱題はこれ信心の果なり」とあり、因果倶時を表わしているのである。われわれが、幸福になろう、一生成仏しようとの願いは、必ず信行によって叶えられるのである。その願望、一念のなかに、未来の果は含まれるのである。

我とは釈尊・我実成仏久遠の仏なり此の本門の釈尊は我等衆生の事なり

此の本門の釈尊とは、本門文上の色相荘厳の釈尊ではなくして、本門文底の釈尊、すなわち久遠名字即の凡夫であることは明らかである。前にも述べたとおり、方便品を読誦するのに、借文の辺に両意があり、一には久遠本果の所証の法を顕わし、二には、遠く久遠名字の所証の法を顕わすと読むのである。ここは、もちろん、二番目の久遠名字の妙法を顕わすと読むのである。ゆえに別しては、御本仏・日蓮大聖人、総じては、大御本尊を奉ずるわれわれ末法の衆生のことである。

船守弥三郎許御書（一四四六ページ）に「過去久遠五百塵点のそのかみ唯我一人の教主釈尊とは我等衆生の事なり、（乃至）かかるたうとき法華経と釈尊にてをはせども凡夫はしる事なし」とおおせあるのも、この意なのである。

如我の我は十如是の末の七如是なり九界の衆生は始の三如是なり我等衆生は親なり仏は子なり父子一体にして本末究竟等なり

これは、十如是のなかの三如是を本体ととり、七如是を働きとして、仏界の働きも、結局、われわれの生命が妙法の当体、すなわち無作三身如来とあらわれたときに、湧現するとして、本末究竟等ということで、如我等無異をあらわそうとしたのである。このことを順次論じてみよう。

十如是について、日寛上人は三重秘伝抄に、次のように仰せになっている。

「十如是とは相・性・体・力・作・因・縁・果・報等なり、如是相とは譬えば臨終に黒色なるは地獄の相・白色なるは天上の相等の如し、如是性とは十界の善悪の性・其の内心に定まりて後世まで改まらざるを性と云うなり、如是体とは十界の身体色質なり、如是力とは十界各の作すべき所の功能なり、如是作とは三業を運動し善悪の所作を行ずるなり、善悪に亘りて習因習果あり、先念は習因・後念は習果なり、是れ則ち悪念は悪を起し善念は善を起す、後に起す所の善悪の念は前の善悪の念に由る、故に前念は習因・即ち如是因なり、後念は習果・即ち如是果なり、善悪の業体を潤ずる助縁は是れ如是縁なり、習因習果等の業因に酬いて正しく善悪の報を受くるは是れ如是報なり、初めの相を本となし、後の報を末と為し、此の本末の其の体究って中道実相なるを本末究竟等と云うなり云云」（富要集第三巻一七ページ）結局、如是相というのは、外面の姿であり、物質・肉体である。如是性とは内面の性質であり、精神、心、智慧等といえる。如是体とは、肉体にもあらず、精神にもあらず、しかも肉体、精神にはっきりと、滲み出ている実体、すなわち生命それ自体である。如是力とは、内在している能力、如是作とはその力が現実に働き出すことである。如是因とは、生命それ自体にそなわる原因であり、如是果とは、生命それ自体にそなわる結果であり、これを媒介する助縁は如是縁となるのである。如是報とは因果のあらわれたる報いである。現実の生活の姿である。ここで、初めの如是相から終わりの如是報まで、ともに一念の生命のなかにおさまり持つものであり、一貫した活動、姿なのである。これを指して、如是本末究竟等というのである。

天台の摩訶止観をうけて妙楽は、釈籤第六に、十如是を色と心とに分けている。「相は唯色に在り性は唯心に在り体・力・作・縁は義色心を兼ね因果は唯心・報は唯色に在り」と。これによれば、色にのみ存するのが相と

報であり、心にのみ存するのは性と因果である。あとの体、力、作、縁は、色だけでもなければ心だけでもない、色と心との両方に関するのである。

相がただ色にあるということは明らかであろう。報は、やはり、肉体や外形に具体的にあらわれた状態をいうから、色にのみあるのである。性は、内在する性質であるから心にのみあるのである。ところで、なぜ因果が、ただ心だけなのであろうか。それは、因果とは、生命それ自体に内在する因果なのであって、目に見えるものではないからである。したがって、外形がどうであろうと、どのように装うとも、奥底の一念の生命のなかに、因果は含まれるものである。自分がああしたい、こうしたい、ということは因であり、そのなかに果は含まれるのである。そして、それは具体的には、報として外形にあらわれるのである。

次に、体、力、作、縁は、ともに色心を兼ねるとは、どういうことであろうか。「体」とは玄義の二には「主質を名けて体となす」とあり、色心を兼ねそなえた、生命の本質を意味する文である。したがって「色心を兼ぬ」ということになるのである。「如是力」とは止観に「力は勘忍を用となす」とあり、例えば、なにかを持ったとすると、それがどのくらいもてるか、目方やそれをもつことのできる時間、これが力の大きさを表わすのである。たしかに、力それ自体は目に見えるものではなく、内在しているものである。しかし、現実に目に見える姿として、たとえば重い荷物を持つとか、なにかを動かすとか、腕力で人を倒すとか、そのような動作の中にあらわれるのである。

次に「作」は、これは止観に「建立を作と名く」とある。すなわち、力が発揮されて、現実にどのように影響を

もたらしていくか、これが作なのである。例えば、原爆には、ものすごい力が内在している。それが、人類に対して、貢献となるか、破壊となるか、これが如是作なのである。どんなに力があっても、影響がある場合とない場合とがある。それは如是作のちがいとなろう。

この如是作、即ち作用は、別にそれ自体目に見えるものではないが、しかも現実に家が建てられたり、テレビが作られたり、工場がつくられたりするのである。ゆえに色心を兼ねるのである。また、刻々と変化する生命活動は、ことごとく縁にふれて行なわれている現実だ。すなわち、環境が、主体に働きかけ、主体がそれを受けとめ、それがもともとあった因を薫発させるのである。この一連の働きかけを縁というのである。作用が、主体から環境への働きかけであるのに対し、縁は、主体が環境をどう受けとめ、どう反応するかということなのである。卑近な例ではあるが、ある人からなぐられたとする。なぐられれば、たいていの場合怒る。その場合、なぐられて痛かったからというより、なぐる相手の心が憎くて怒る。これは、なぐられたときには、音がするし、現実に痛いたい。しかも、そのなかに相手の心が含まれているわけだ。またそれを受けとめる主体も、たんに肉体的な痛さを受けとめるだけでなく、相手の心を受けとめるのである。ゆえに縁は色心を兼ねるのである。

以上、十如是のそれぞれについて考えてみたが、これまでいえることは、初めの三如是は、生命の実体であり、あとの七如是は、働きであるということである。

ゆえに、十如是事（四一〇ページ）に、大聖人は、次のように仰せられている。「初めに如是相とは我が身の色形に顕れたる相を云うなり是を応身如来とも又は解脱とも又は仮諦とも云うなり、次に如是性とは我が心性を云う

なり是を報身如来とも又は般若とも又は空諦とも云うなり、三に如是体とは我が此の身体なり是を法身如来とも又は中道とも法性とも寂滅とも云うなり、されば此の三如是を三身如来とは云うなり此の三如是が三身如来にておはしましけるを・よそに思ひへだてつるがはや我が身の上にてありけるなり、かく知りぬるを法華経をさとれる人とは申すなり此の三如是を本として是よりのこりの七つの如是はいでて十如是とは成りたるなり」

相、性、体の三如是が生命の実体であり、その生命がどのような働きをするかが、力、作、因、縁等の七如是なのである。すなわち、生命それ自体の活動の基調となるのが、七如是である。

幸福な生活を営むのも、不幸な生活に甘んじていなければならないのも、結局は、生命それ自体が、無作三身の覚体とあらわれるか、あらわれないかによるわけである。もしも、大御本尊を信じ、唱題するならば、大御本尊と境智冥合し、わが身も無作三身如来とあらわれ、現実の生活のうえに仏智を湧現し、ゆうゆうたる人生を楽しみつつ送ることができるのである。

すなわち、われら衆生の相、性、体の三如是が、日蓮大聖人の御生命に冥合し、即無作三身とあらわれるならば、そこに仏の力用があらわれ、自然と、仏のふるまい、活動となり、無量の福運を積み、いかなる環境もことごとく変毒為薬し、自分の幸福への源泉とし、たえず未来をめざし発展し、内外に人間革命の姿を示しきっていける結果となるのである。これが如我等無異ということである。ゆえに御文には「如我の我は十如是の末の七如是なり九界の衆生は始の三如是なり我等衆生は親なり仏は子なり父子一体にして本末究竟等なり、此の我等を寿量品に無作の三身と説きたるなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱うる者是なり」

仏といっても、それは妙法の力用、働きである。ゆえに、釈迦、多宝も用の仏にすぎないし、また、迹仏にすぎないと諸法実相抄（一三五八㌻）に示されている通りである。妙法とは無作三身である。ゆえに御義口伝下（七五二㌻）には「無作の三身の宝号を南無妙法蓮華経と云うなり」と仰せられているのである。無作三身とは、別して日蓮大聖人なのである。妙法は法であり、日蓮大聖人は人であり、人法一箇なのである。ゆえに、もったいなくも、大御本尊の中央には、「南無妙法蓮華経　日蓮」としたためられている。その左右には釈迦多宝、あるいは上行等の四菩薩、さらには、声聞、縁覚、ずっと地獄界の衆生までいることがわかる。これは、釈迦多宝といえども、大聖人の己心の釈迦多宝であり、大聖人の生命の働きであることを示すものである。

したがって、釈迦多宝の二仏も、大聖人の御生命から出発するのであり、大聖人が親であり、釈迦多宝はそこから誕生する子なのである。さらにいえば、十方三世の一切の諸仏もまた子であり、大聖人は親であられることは、次の日寛上人の仰せで明瞭となろう。すなわち、当流行事抄では、玄文第七の「百千枝葉同じく一根に趣くが如し」の文を釈されて「横に十方に徧じ竪に三世に亘り微塵の衆生を利益したもう垂迹化他の功、皆同じく久遠元初の一仏一法の本地に帰趣するなり」（富要集第三巻二〇二㌻）と仰せられているのである。文中「一仏」とは久遠元初の自受用無作三身如来即日蓮大聖人であり、「一法」とは、文底下種事行の一念三千の南無妙法蓮華経である。

また、秋元御書（一〇七二㌻）には「三世十方の仏は必ず妙法蓮華経の五字を種として仏になり給へり」と仰せがあることと照合して考えれば、大聖人すなわち南無妙法蓮華経こそ、いっさいの仏の能生の根源であり、親であると断ずることができるのである。ゆえに、われわれは、能生の根源たる大御本尊を信ずるときに、受持即

観心の原理により、わが己心の生命のなかに、三世十方の諸仏はことごとく誕生し、大宇宙のリズムにかない、無量の力を発揮していけるわけなのである。したがって、いかなる苦難があろうと、茨の道を歩もうと、どんな環境であろうと、いっさいを変え、そこに常寂光の世界があらわれゆくのである。これ如我等無異ではないか。

また「我等衆生は親なり仏は子なり父子一体にして本末究竟等なり」を、別の角度からいえば、民主主義の大原理である。衆生がいなければ、そして不幸な人がいなければ、仏は出現しない、出現する必要もなかろう。

学校にしても、生徒がいなければ先生は必要はない。乱れた社会を幸福にし、繁栄させようというところに、りっぱな政治家が出なくてはいけない。また、社会に貢献し、大勢の人々の生活を保障していこうとするところに、真の実業家の役目があるわけだ。それが、現今では、指導者層が、人々の幸福など考えない。私利私欲、栄誉栄達に、汲々としている。まことに、歎かずにはいられない現状である。

わが学会幹部、否、日蓮大聖哲の弟子は、後輩の幸福を願いきっての信心でなくてはならぬ。絶対に、権威主義や、命令主義に落ちいってはならない。況んや、信心を利用した、幹部の行動こそ、極悪なりと、断ずるものである。

如我昔所願は本因妙如我等無異は本果妙なり

この文を、われわれの信心修行のうえで考えてみる。あの人を折伏しようと考えた場合には、これが因であり、そしてまた、その人を折伏しきるということは、果となる。また、御本尊を信じて題目を唱えるとき、信心はこ

れ因であり、唱題はこれ信心の果である。しかも、一瞬の一念に因果を具しているのである。所詮は、自分がねがうところは、南無妙法蓮華経の当体になりたいのである。すなわち、最高の幸福をつかみたいのである。それが如我昔所願である。すなわち、決意であり、本因である。それで今度は、南無妙法蓮華経と唱え、実践し、仏界を湧現しきることが、如我等無異であり、本果である。

また、例を実生活にみれば、事業を興こし懸命に頑張り、大会社にさせよう。これが因である。大会社になった——これが果である。すなわち、自分の思っていたこと、願っていたことと、相等しくなったわけである。真剣に勉強して、りっぱな成績で卒業しよう。これは如我昔所願である。事実その通りになれば如我等無異である。みな、なんらかの如我昔所願を持っているものだ。それが必ずしも如我等無異にならないというところに不幸が起こる。それが等しくなった時に、今者已満足となり、幸福を感ずるのである。われわれの生活の上において、ぜんぶ、その方程式が、あてはまるわけである。今月は、これだけ教学をやろう、唱題しよう、折伏をやろうと決意する。それが成就した場合、これ今者已満足である。それが福運となり、また因となり、次の福運の果を作るわけである。これを生涯くりかえし、福運を積み重ねていくことを冥益というのである。

大御本尊には、偉大な功徳がある。ゆえにわれわれの願いは必ず叶う。われわれが、大御本尊に心から祈り願った時、すでにその結果はその願望のなかに含まれ、成就するのであるから、因果倶時となるのである。

妙覚の釈尊は我等が血肉なり因果の功徳骨髄に非ずや

これは、信仰の目的が、あくまで、仏と等しい生命を、確立することにあるとの義である。これは、絶対的幸福および人格完成ともいえるのである。釈尊といっても、所詮は、われら凡夫の生命を指しており、われら凡夫の仏界を湧現して、人生を楽しみきっていくことに尽きるのである。

「挙因は即ち本果なり」とは、挙因とは成仏を指すからである。そのわけは、三重秘伝抄に「種子を覚知するを作仏と名づくるなり」とあり、挙因とは種子を覚知することを意味するからである。結局、人生の目的とは何か。それは成仏することであり、永遠の生命を覚知するということなのである。

今日蓮が唱うる所の南無妙法蓮華経は末法一万年の衆生まで成仏せしむるなり

このなかに一万年とは、正法千年、像法千年というのに対して、いわれたものである。したがって、釈迦仏法のように限界があるのではなく、未来永劫にわたって力のあることを示されたものである。一万とは、必ずしも、一万、二万という厳密な意味でいわれたのではなく、無限であることを示されたものであろう。この万ということばには「みつる」という意味がある。また、報恩抄（三二九ページ）には「日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華経は万年の外・未来までもながるべし」と仰せられていることからも、大聖人の仏法が不滅の大仏法であることが明らかからであろう。

今ここに、末法の御本仏日蓮大聖人は、末法万年の衆生を救わんとの大確信をのべられているのである。

ある特定の期間、一時的に民衆を幸福にすることができる人はいよう。しかし未来永劫にわたって全人類を救

い切るとは、仏にあらずんば、絶対に言いえない御確信と拝するものである。日蓮大聖人は、生涯、全民衆救済を叫びつづけられた。その間、大難は、次から次へと大聖人に襲いかかったのであった。しかし、いかなる大難も、御本仏日蓮大聖人の御境涯を侵すことはできなかったのである。大聖人の受けられた難で代表的なものの一つが、佐渡御流罪である。われわれは、ここに佐渡流罪中の大聖人の御姿を拝し、大聖人の大確信を拝そう。

当時、流罪には、近流、中流、遠流とあり、遠流は、もっとも罪の重い人がうけ、死罪にも匹敵するものであった。世間的になんの罪もない大聖人を、当時の幕府は、邪宗の僧等の陰謀にひっかかって、遠流に処したのであった。

佐渡は、まことに厳寒の地である。人家も少ないうえ、ただ死人を捨てるような場所に、しかも一間四方のあばら屋に住まわれたのであった。冬などは雪のなかで、こごえ死ぬような寒さであったろう。食べるものとて少なく、しかも、邪教の信徒らによって命はたえずねらわれ、まさに風前のともしびであった。

そのときの御苦労は、種種御振舞御書（九一六㌻）にしのばれるのである。

「同十月十日依智を立って同十月二十八日に佐渡の国へ著ぬ、十一月一日に六郎左衛門が家のうしろ塚原と申す山野の中に洛陽の蓮台野のやうに死人を捨つる所に一間四面なる堂の仏もなし、上はいたまあはず四壁はあばらに雪ふりつもりて消ゆる事なし、かかる所にしきがは打ちしき蓑うちきて夜をあかし日をくらす、夜は雪霰雷電ひまなし昼は日の光もささせ給はず心細かるべきすまゐなり、彼の李陵が胡国に入りてがんくつにせめられし法道三蔵の徽宗皇帝にせめられて面に火印をさされて江南にはなたれしも只今とおぼゆ」

「かくて・すごす程に庭には雪つもりて・人もかよはず堂にはあらき風より外は・をとづるるものなし、眼には止観・法華をさらし口には南無妙法蓮華経と唱へ夜は月星に向ひ奉りて諸宗の違目と法華経の深義を談ずる程に年もかへりぬ、いづくも人の心のはかなさは佐渡の国の持斎・念仏者の唯阿弥陀仏・生喩房・印性房・慈道房等の数百人より合いて僉議すと承る、聞ふる阿弥陀仏の大怨敵・一切衆生の悪知識の日蓮房・此の国になげされたり・なにとなくとも此の国へ流されたる人の始終いけらるる事なし、設ひいけらるるとも・かへる事なし、又打ちころしたりとも御とがめなし、塚原と云う所に只一人ありいかにがうなりとも力つよくとも人なき処なれば集りていころせかしと云うものもありけり、又なにとなくとも頸を切らるべかりけるが守殿の御台所の御懐妊なれば・しばらくきられず終には一定ときく、又云く六郎左衛門尉殿に申してきらずんば・はからうべしと云う、多くの義の中に・これについて守護所に数百人集りぬ」（九一七ページ）

まさに、大聖人の御生活は、われわれであれば、地獄のどん底のような境遇生活だったのである。しかも、鎌倉では弟子たちが、あるいは牢に入れられ、あるいは妻子をとられ、あるいは土地を没収される等の迫害をうけ、退転者も続出するありさまだった。このような状態のなかで、どうして日本国の人々が皆南無妙法蓮華経と唱える時が来ると言いえようか。御自身の命も風前のともしびであり、鎌倉の弟子も退転者が続出するなかで、広宣流布が必ずできるなどと、誰が実感できようか。

しかしながら、大聖人の佐渡御流罪中の御書は、いずれも、広宣流布の大確信に漲っているのである。大聖人が、佐渡御流罪中にあらわされた御書には、「開目抄」あり、「観心本尊抄」あり、また、「生死一大事血脈抄」

「草木成仏抄」「顕仏未来記」「佐渡御書」「諸法実相抄」「祈禱抄」「如説修行抄」　等の三十八編にわたっているが、どれも、御本仏の大確信が躍如としている。

開目抄（二三二ページ）にいわく「詮ずるところは天もすて給え諸難にもあえ身命を期とせん、身子が六十劫の菩薩の行を退せし乞眼の婆羅門の責を堪えざるゆへ、久遠大通の者の三五の塵をふる悪知識に値うゆへなり、善に付け悪につけ法華経をすつるは地獄の業なるべし、大願を立てん日本国の位をゆづらむ、法華経をすてて観経等について後生をごせよ、父母の頸を刎ん念仏申さずば、なんどの種種の大難・出来すとも智者に我義やぶられずば用いじとなり、其の外の大難・風の前の塵なるべし、我日本の柱とならむ我日本の眼目とならむ我日本の大船とならむ等とちかいし願やぶるべからず」

観心本尊抄（二五四ページ）にいわく「此の時地涌千界出現して本門の釈尊を脇士と為す一閻浮提第一の本尊此の国に立つ可し」

如説修行抄（五〇二ページ）にいわく「天下万民・諸乗一仏乗と成って妙法独り繁昌せん時、万民一同に南無妙法蓮華経と唱え奉らば吹く風枝をならさず雨壌を砕かず、代は羲農の世となりて今生には不祥の災難を払い長生の術を得、人法共に不老不死の理顕れん時を各各御覧ぜよ現世安穏の証文疑い有る可からざる者なり」

顕仏未来記（五〇八ページ）にいわく「問うて曰く仏記既に此くの如し汝が未来記如何、答えて曰く仏記に順じて之を勘うるに既に後五百歳の始に相当れり仏法必ず東土の日本より出づべきなり」

諸法実相抄（一三六〇ページ）にいわく「日蓮一人はじめは南無妙法蓮華経と唱へしが、二人・三人・百人と次第

に唱へつたふるなり、未来も又しかるべし、是あに地涌の義に非ずや、剰へ広宣流布の時は日本一同に南無妙法蓮華経と唱へん事は大地を的とするなるべし」

いずれの御文も、かかる御苦難のなかで述べられているとは思われないおことばである。「願くは我を損ずる国主等をば最初に之を導かん」（顕仏未来記五〇九㌻）とまで仰せられているのである。しかも、広宣流布は絶対にできるのだと「大地を的とするなるべし」とまで仰せられているのである。なんたる大確信であろうか。なんと大慈悲に満ち満ちている御信念であろうか。

戸田城聖前会長は、この佐渡御流罪中の大聖人の御境涯を「成仏の境涯とは絶対の幸福境涯である。なにものにも犯されず、なにものにもおそれず、瞬間瞬間の生命が澄みきった大海のごとく、雲一片なき虚空のごときものである。この境涯が大聖人佐渡御流罪中の御境涯である」（論文集三五一㌻）と述べられていた。また、大聖人が民衆を思う慈悲の心を「春の海に毅然たる大岩が海中にそびえ立ち、その厳のもとに、陽光をおびた小波が、あまえている風景にも似た感がある」（同三六三㌻）と述べられている。

以上佐渡御流罪中のことをとりあげたが、大聖人の民衆救済を願う一念は、いかなる逆境にあっても崩れることなく、むしろ逆境のときこそ、ますます慈悲のお心が躍如としてあらわれていることを示したのである。特にあのような時に広布を厳然と確信された、大聖人の御境涯の、なんと崇高なるかを述べたのである。

日蓮大聖人の、広宣流布へのこの絶対なる御予言こそ、今日の姿なりと強く確信して止まない。釈迦仏法は、大聖人の御出現に依り、虚妄とならなかった。大聖人の仏法は、わが創価学会の出現によって、不虚妄の証明を

なしたものといえる。大聖人の御確信、御精神は、化儀の広宣流布達成に前進する、われら正信の弟子のみが、ひしひしと感じゆけるものであろう。われらは、この大聖人の願望をば、絶対に、遂行でき得ることを深く信じ、ますます決意を新たに勇猛邁進していきたいものである。と同時に、日本国の幸福と安泰のため、かつは、世界の恒久平和確立のため、世の指導者は、今こそ頭を垂れて、大聖哲の言々句々を信受すべきであると主張してやまないのである。

満足とは成仏と云う事なり

この段を生活に約し論ずれば、学校を良い成績で終了したことも所願満足といえる。立派な会社に就職できたことも、また所願満足といえる。給料が上り、生活の安定をみたのも所願満足といえよう。有名人になり、人々から尊敬されるようになったことも、また病人が健康になったことも、みな所願満足に通ずる意である。

しかしながら、それらの満足は、相対的な満足なのである。本然的欲求の一部を満たしたにすぎない。いつ崩れ去るかも知れぬ。

絶対的な、根底からの満足、幸福は、結局、成仏以外にはないのである。何ものにも、こわされない、侵されない、幸福境涯。そして常に、瞬間瞬間を楽しみきっていける、生命の躍動、福運。これこそ、生命の奥底からの満足である。この満足の成就は、大御本尊の生命と、わが生命との境智冥合しかないことを銘記すべきである。

釈に云く「円は円融円満に名け頓は頓極頓足に名く」

これは、大宇宙のいっさいの力を、そのままお認められた大御本尊のことである。すなわち、すべての人を幸福にしきる、完全無欠なる大哲学を意味する。しかるに現今の思想哲学が、マルクス主義にせよ、ヘーゲルの観念哲学にせよ、実存哲学にせよ、みな円融円満ではない。いずれも偏頗である。今日の社会が行き詰まりをきたしているが、これを打開できないのがその証拠である。世の指導者の、よくよく猛省すべき問題であると思う。大聖人の色心不二の哲理と、それらの哲学とを冷静に比較討究すべきことを、強く主張して止まないものである。

「頓は頓極頓足に名く」とは、日蓮大聖人の仏法が即身成仏、凡夫即極の大仏法であることを示しているのである。すなわち、当体義抄（五一二㌻）には「正直に方便を捨て但法華経を信じ南無妙法蓮華経と唱うる人は（乃至）無作三身の本門寿量の当体蓮華の仏とは日蓮が弟子檀那等の中の事なり」とあり、さらに日女御前御返事（一二四四㌻）には「此の御本尊全く余所に求る事なかれ・只我れ等衆生の法華経を持ちて南無妙法蓮華経と唱うる胸中の肉団におはしますなり」等とあるのが、即身成仏の御文である。

凡夫は迷えるがゆえに、わが身が当体蓮華仏であることを知らない。しかるに、御本尊を信じて南無妙法蓮華経と唱えれば、すなわち以信代慧によって、わが身が永遠の生命を感得し、当体の仏であることを覚知する。これを即身成仏、頓極頓足というのである。

第七　於諸菩薩中正直捨方便の事

本文

第七於諸菩薩中正直捨方便の事　文句の四に云く於諸菩薩と云うより下の三句は正しく実を顕すなり、五乗は是れ曲にして直に非ず通別は偏傍にして正に非ず今皆彼の偏曲を捨てて但正直の一道を説くなりと。御義口伝に云く此の菩薩とは九界の第九に居したる菩薩なり又一切衆生を菩薩と云うなり今日蓮等の類いなり、又諸天善神等迄も是れ菩薩なり正直とは煩悩即菩提生死即涅槃なり、さて一道とは南無妙法蓮華経なり今末法にして正直の一道を弘むる者は日蓮等の類いに非ずや。

語訳

於諸菩薩中正直捨方便　方便品（一八九ページ）に「今我喜んで畏れ無し、諸の菩薩の中に於いて、正直に方便を捨てて、但無

上道を説く」とある。

於諸菩薩と云うより下の三句　「於諸菩薩中、正直捨方便、但説無上道」（諸の菩薩の中に於いて、正直に方便を捨てて、但無上道を説く）の三句を指す。

五乗　五乗とは人、天、声聞、縁覚、菩薩にそれぞれ説かれた教えをいう。乗とは運載の義、すなわちこれに乗せて此岸より彼岸（成仏の境涯）へ教え運ぶという意味である。

通別　化法の四教（蔵、通、別、円）のうち、通教と別教をいう。通教は蔵教にも通じ、別教にも通ずるので通教という。別教は、蔵通二教とも、円教とも異るので別教という。いずれも円融の教えではない、偏った教えである。

一道　御義口伝（七一六ページ）にいわく「一とは法華経なり」一とは一仏乗、最高の悟りの境涯、教えを意味する。ゆえに一道とは南無妙法蓮華経になるのである。

通解

方便品に「今我喜んで畏れ無し、諸の菩薩の中に於いて、正直に方便を捨てて、但無上道を説く」とあるところの御義口伝である。

文句の四には次のように説く。「於諸菩薩中、正直捨方便、但説無上道」の三句は、正しく権教方便を捨て、実教、一仏乗の教えをあらわしている。人、天、声聞、縁覚、菩薩の五乗の教えは、仏の本意ではない曲った教えであり、「直」ではない。通教、別教は、いずれも円融円満の悟りを説かない偏った教えであり、「正」では

ない。今、すべて、かの五乗、通別の偏曲の教えを捨てて、但正直の一仏乗の円教を説くのである」と。

御義口伝には、次のように仰せである。この「菩薩」とは九界の第九、最高位に位する菩薩のことである。また一切衆生、仏道を求めるものを、菩薩というのである。今、日蓮大聖人およびその門下のことなのである。また諸天善神等までも、菩薩なのである。「正直」とは煩悩即菩提、生死即涅槃と開いていく教えのことである。

さて、「一道」とは、南無妙法蓮華経なのである。今、末法において、正直の一道、南無妙法蓮華経を弘通する者は、日蓮大聖人およびその門下ではないか。

講義

人生の究極の目的は、一仏乗、すなわち成仏と永遠の生命の感得にある。けっして五乗が目的ではない。五乗の初めの人界――人として正しく生きることは当然であるが、善悪の基準すらわからぬのが人生である。いわんや、宿命、宿業に苦しんでいる人のいかに多いことか。天界――地位、財産ができ、なに不自由ない幸福な生活であっても、一寸先は闇であることも当然である。天上界は五衰を受ける宿命を解決できない。ゆえに絶対の幸福とは決していえない。声聞――学者等、おのおのの法則の一分を知ることはできても、自己をも、人をも、根本的に恒久的に救済できないことは、過去、現在の知識階級の実態をみても、明瞭であろう。縁覚――大科学者、大技術者、大芸術家等も、局部的な法則は解っていても、また声聞階級と、その本質は同じである。

五乗の終わりの菩薩――自からも悟りを得んとつとめ、人をも、さまざまな姿で救わんと活躍はしてゆくが、いまだ、宿命転換はできないのである。所詮、仏の生命を覚知することが、人生の根本問題になるわけである。

正直とは煩悩即菩提生死即涅槃なり

煩悩とは、人生、生活における煩い悩みである。菩提とは、仏法の悟りの境地である。いわゆる釈迦仏法では、三惑を断じ煩悩を断じて、初めて幸福境涯が得られると説くが、これは、現実にありえないことであり、低級な教え方である。日蓮大聖人の仏法では、御本尊を信ずる大功徳によって、煩悩はそのまま菩提になると、実際生活のうえから、明らかに妙理を説かれているのである。

ゆえに生死一大事血脈抄（一三三八㌻）には「相構え相構えて強盛の大信力を致して南無妙法蓮華経・臨終正念と祈念し給へ（乃至）煩悩即菩提・生死即涅槃とは是なり」と仰せである。

第八　当来世悪人聞仏説一乗
迷惑不信受破法堕悪道の事

本文

第八当来世悪人聞仏説一乗迷惑不信受破法堕悪道の事

御義口伝に云く当来世とは末法なり悪人とは法然・弘法・慈覚・智証等なり、仏とは日蓮等の類いなり一乗とは妙法蓮華経なり不信の故に三悪道に堕す可きなり。

語訳

当来世悪人聞仏説一乗迷惑不信受破法堕悪道　方便品（一九一ページ）に「五濁の悪世には、但諸欲に楽著せるを以って、是の如き等の衆生、終に仏道を求めず、当来世の悪人は、仏説の一乗を聞いて、迷惑して信受せず、法を破して悪道に堕せん」と

ある。

法然・弘法・慈覚・智証　法然は、日本浄土宗の開祖。弘法は、日本真言宗の開祖。慈覚・智証は、日本天台宗の第三・第四の座主。真言の邪義・悪法を天台宗の中に取り入れて堕落させた。（くわしくは本書一五〇ページ参照）

三悪道　地獄界、餓鬼界、畜生界を三悪道という。

通解

「当来世の悪人は、仏説の一乗を聞いて、迷惑して信受せず、法を破して悪道に堕せん」と読む。

御義口伝には、次のように仰せである。「当来世」とは、正しく、末法をさすのである。悪人とは法然、弘法、慈覚、智証等、法華経を誹謗し、民衆を不幸につきおとす邪宗教の開祖たちのことである。「仏」とは、日蓮大聖人およびその門下である。「一乗」の法とは南無妙法蓮華経である。南無妙法蓮華経を信ぜず誹謗するがゆえに、邪宗邪義の輩は、三悪道におちざるを得ないのである。

講義

当来世とは、未来の時を指しており、正像末の三時の中には末法のことである。法華経が、文上そのままを拝

すれば、上行菩薩の出現の予言書であり、文底よりみれば、末法の御本仏、日蓮大聖人御出現の未来記であることは、もはや誰人も疑う余地はない。

悪人とは、誤った宗教の元祖であると、強く御断言遊ばされておられる。そして、誤った宗教が三悪の本源であり、一切の不幸の原因であるとの、御確信である。現在の日本国が、三悪道に堕していることは明らかな事実である。疫病、子供の不良問題、汚職などの世相を、いつの指導者も、悪いとは知りつつも、解決し得たためしがない。ただただ、正中の正たる大御本尊に帰依し奉り、大聖人の大哲理を、日本の大衆の根本思想とする以外に、他に方策があり得なくなっていることを、銘記すべきであろう。

「仏とは日蓮等の類いなり」とあるが、現在、多くの人が、仏とは釈尊だけをいうと考えているが、全く誤りであることを文中よくよく知るべきである。

譬喩品九箇の大事

譬喩品九箇の大事

譬喩品九箇の大事

第一　譬喩品の事

本文

第一譬喩品の事　文句の五に云く譬とは比況なり喩とは暁訓なり大悲息まず巧智無辺なれば更に樹を動かして風を訓え扇を挙げて月を喩すと。

御義口伝に云く大悲とは母の子を思う慈悲の如し今日蓮等の慈悲なり、章安云く「彼の為に悪を除くは即是れ彼の親」と、巧智とは南無妙法蓮華経なり諸宗無得道の立義なり巧於難問答の意なり更とは在世に次で滅後の事と意得可きなり、樹を動すとは煩悩なり風を訓るとは即菩提なり扇を挙ぐとは生死なり月を喩すとは即涅槃なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る時大白牛車に乗じて直至道場するなり、記の五に云く「樹と扇と風と月とは唯円教の理なり」と又云く「法説の実相は何ぞ隠れ何ぞ顕れんや長風息むこと靡く空月常に懸れり」と此釈之を思う可し、隠とは死なり顕とは生なり長風とは我等が息なり空月とは心月なり法華の生死とは三世常恒にして隠顕之無し我等が息風とは吐く処の言語なり是南無妙法蓮華経なり、一心法界の覚月常住にして懸れり是

を指して唯円教の理と釈せり円とは法界なり教とは三千羅列なり理とは実相の一理なり云云。

語訳

文句の五に云く　くわしくは、文句の五に「譬とは比況なり、喩とは暁訓なり、此れに託して彼を比し、浅に寄せて深を訓う。前に広く五仏の長行と偈頌を明す、上根は利智にして円かに聞いて悟を獲、中下の流は、迷を抱て未だ達せず、大悲已まず、巧智無辺なれば、更に樹を動かして風を訓え、扇を挙げて月を喩し、其をして悟解せしむ、故に譬喩と言う」とある。

章安云く　涅槃経疏にある。

巧智　巧みなる智慧とは、仏智、すなわち南無妙法蓮華経のことである。

諸宗無得道の立義なり　法華経にいわく「諸余怨敵、皆悉摧滅」と。天台いわく「法華折伏、破権門理」と。如説修行抄（五〇四ページ）にいわく「諸経は無得道・堕地獄の根源・法華経独り成仏の法なり」と。

巧於難問答　涌出品（四九二ページ）に、地涌の菩薩について「是の諸の菩薩等は、志固くして怯弱無し、無量劫より来、而も菩薩の道を行ぜり、難問答に巧みにして、其の心畏るる所無く、忍辱の心決定し、端正にして威徳有り」とある。

大白牛車　譬喩品の三車火宅の譬えで、羊、鹿、牛の三車は三乗を意味し、大白牛車は一仏乗にたとえる。文底の意では、大白牛車は三大秘法の御本尊である。

直至道場　譬喩品（二三五ページ）に「諸の菩薩、及び声聞衆と、此の宝乗に乗じて、直ちに道場に至らしむ」とある。即身成仏を意味する。

法説の実相　法説とは譬説に対することば。法説の実相とは、方便品の法説周の正説段で説き明かされた諸法実相の開三顕一の法門である。

心月　心月とは一念、生命をいう。

法華の生死とは三世常恒にして隠顕之無し　生死一大事血脈抄（一三三六㌻）にいわく「妙は死・法は生なり此の生死の二法が十界の当体なり又此れを当体蓮華とも云うなり、天台云く『当に知るべし依正の因果は悉く是れ蓮華の法なり』と云云此の釈に依正と云うは生死なり生死之有れば因果又蓮華の法なる事明けし、伝教大師云く『生死の二法は一心の妙用・有無の二道は本覚の真徳』と文、天地・陰陽・日月・五星・地獄・乃至仏果・生死の二法に非ずと云うことなし、是くの如く生死も唯妙法蓮華経の生死なり、天台の止観に云く起は是れ法性の起・滅は是れ法性の滅』云云」と。法華の生死とは、真実の生命観である。生命は、過去、現在、未来の三世にわたって、常住永遠なものである。隠（死）顕（生）があるようにみえても、それは本有の若退若出であり、じつは隠顕ということはないのである。

一心法界の覚月　生命の本質、南無妙法蓮華経のことをいう。

円とは法界なり　法界の万象をことごとく授し入れて、一つも欠けるものがないがゆえに、円である。

教とは三千羅列なり　御義口伝（七一四㌻）にいわく「法界三千を秘妙とは云うなり秘とはきびしきなり三千羅列なり是より外に不思議之無し」と。南無妙法蓮華経は、因果の理法をきびしく説ききっているのである。三千という生命活動の範疇はわが一身に厳然とそなわり、因果の理法はきびしくあらわれてくるのである。

理とは実相の一理なり　実相の一理とは、南無妙法蓮華経である。万法はことごとく、南無妙法蓮華経の一法に帰する。したがって、一理というのである。

通解

譬喩品ということについて、文句の五には、次のようにある。譬とは比況―此をあげて彼と比し、喩とは暁訓―浅きによって深きを訓えるのである。仏の大慈悲はやむことなく、巧みなる智慧は無辺に働くのであり、さらに、迷う者のために、樹を動かして、風というものをおしえ、扇をかかげて、月というものをわからせるのであると。

御義口伝には、次のように仰せである。「大悲」とは、母親が子を思う慈悲、慈愛の念のごときもので、今日蓮大聖人の慈悲こそ、一切衆生をあくまで救いきっていこうという大慈悲なのである。章安大師が涅槃経疏に「彼がために悪を除き去ることは、すなわちこれ彼の親」というように、一切衆生の不幸の根源たる邪宗邪義を折伏し、とり除く、抜苦与楽の振舞いこそ慈悲なのである。

「巧智」とは、最高の智慧の法門である南無妙法蓮華経のことである。諸宗によっては一切成仏することはできないと断ずるのである。涌出品に、地涌の菩薩をさして「巧於難問答」（難問答に巧にして）とあるように、巧智とは、折伏にはげむわれわれ地涌の菩薩に約するのである。

「更に」とは、一往は、釈尊在世の中下の機根の衆生のために譬喩を説くのであるが、再往は、滅後末法の衆生のためであると知るべきである。

「樹を動かす」とは煩悩をあらわし、それにより「風を訓える」とは、即菩提をあらわす。すなわち煩悩即菩提となる。「扇を挙げる」とは生死をあらわし、それにより「月を喩しおしえる」とは、即涅槃をあらわす。生死即涅槃となるのである。今、日蓮大聖人およびその門下が、南無妙法蓮華経と唱え奉る時、大白牛車たる一仏乗の南無妙法蓮華経により、煩悩即菩提、生死即涅槃と転じ、即身成仏することができるのである。

しかして妙楽は「記」の五に「樹と扇と風と月とは、いずれもただ、円教の理をあらわしているのである」と説いている。また「法説周において明かされた実相というのは、どうして、隠れたり顕われたりするであろうか。まったくそうではない。長風はやむことなく続いているのであり、空の月は、つねに虚空にかかっているのである」と。この釈を、よく考えるべきである。

この釈で、「隠」とは「死」、「顕」とは「生」をあらわす。長風とはわれらの息であり、空月とは心の月をあらわしている。すなわち、法華の生死、真実の生命観に立ってみるならば、生命というものは、過去、現在、未来の三世にわたって、常住不変に存在するのであり、隠顕ということはありえないのである。

さてわれわれの息風とは、吐くところの言語であり、これすなわち南無妙法蓮華経のあらわれである。一心法界の覚月（南無妙法蓮華経）は常住にして、永遠に存在しつづけるのである。この生命の本然の姿を、「円教の理」と妙楽は釈しているのである。「円」とは法界三千をあらわすのであり、「教」とは三千羅列きびしき因果の理法であり、「理」とは実相の一理である南無妙法蓮華経である。

講義

譬喩品は、三周の説法のうち喩説周である。法説周の正説は、方便品で説かれるが、そこでは、智慧第一の舎利弗一人が、諸法実相の妙理を会得している。すなわち、舎利弗は、三乗を開いて一仏乗を顕わすことが、成仏の原理であると、領解したのである。そして、釈尊が、その舎利弗の領解を証明して、彼に劫、国、名号を説き、未来成仏の記別を与えて、法説周の一段が終わる。

そこで、舎利弗以外の、未領解の声聞たちは、さらに、仏に詳説を乞うたのである。これが三車火宅の譬喩説、すなわち喩説周の正説段となるのである。この三車火宅の譬喩こそ、三車三乗の権を開き、一車一仏乗、すなわち大白牛車の実を顕わしているのである。

また、この品には、有名な十四の誡め、十四誹謗の内容が、説かれている。これは「松野殿御返事」（一三八二㌻）に出ているとおりである。

まず、文句の五の「譬とは比況なり喩とは暁訓なり……大悲息まず、巧智無辺なれば更に樹を動かして風を訓え扇を挙げて月を喩す」とあるのは、次の総勘文抄（五六二㌻）の御文と対比してみれば明らかである。

「一切経の語は夢中の語とは譬えば扇と樹との如し法華経の寤の心を顕す言とは譬えば月と風との如し、故に本覚の寤の心の月輪の光は無明の闇を照し実相般若の智慧の風は妄想の塵を払う故に夢の語の扇と樹とを以て寤の心の月と風とを知らしむ是の故に夢の余波を散じて寤の本心に帰せしむるなり、故に止観に云く『月・重山に

隠るれば扇を挙げて之に類し風大虚に息みぬれば樹を動かして之を訓ゆるが如し』文、弘決に云く『真常性の月煩悩の山に隠る煩悩一に非ず故に名けて重と為す円音教の風は化を息めて寂に帰す寂理無礙なること猶大虚の如し四依の弘教は扇と樹との如し乃至月と風とを知らしむるなり已上、夢中の煩悩の雲・重畳せること山の如く其の数八万四千の塵労にて心性本覚の月輪を隠す扇と樹との如くなる経論の文字言語の教を以て月と風との如くなる本覚の理を覚知せしむる聖教なり故に文と語とは扇と樹との如し』文、上釈は一往の釈とて実義に非ざるなり月の如くなる妙法の心性の月輪と風の如くなる我が心の般若の慧解とを訓え知らしむるを妙法蓮華経と名く」と。

譬喩とは、あくまで実体の説明である。しこうして、実体とは何か。これこそ、南無妙法蓮華経なのである。また、譬喩とは、ある意味で、われわれの生活である。そして、実体とは大御本尊である。われわれの生活のいっさいが、大御本尊の偉大な功徳を説明しているといえる。「譬とは比況なり」とは、昨日の生活、一年前の生活、また信心する以前の生活と、今日の生活とは、明らかに相違があろう。これが比況である。また、信心しない人と信心している人の生活、ぜんぷ比況となろう。「喩とは暁訓なり」とは、その生活の実相そのものが、偉大な大御本尊の力を教えさとしていることである。

また、譬喩とは功徳と罰である。われわれが大御本尊を信じ、唱題し、折伏行に励むのは即身成仏のためである。われわれが最初、信心した動機は、貧乏、病気、精神的な苦しみ、家庭不和等で、さまざまな悩み、動機があったわけである。それが、信行に励んだときに、次第次第に解決していく。これこそ大聖人が「近き現証を引

いて遠き信を取るべし」（一〇四五㌻）との仰せのごとく、即身成仏は絶対に間違いないと確信すべき根拠なのである。

また、信心に反対すれば、法の厳しい報いを蒙る。聖人御難事（一一九〇㌻）に「過去現在の末法の法華経の行者を軽賤する王臣万民始めは事なきやうにて終にほろびざるは候はず」とあるように、それは無間地獄の苦悩の淵に沈むことを意味するものである。それは即ち、大御本尊による以外に、幸福になる道は絶対にないという証拠でもある。

大悲とは母の子を思う慈悲の如し今日蓮等の慈悲なり

慈悲とは、愛、憎のごとき相対的なものでなく、絶対的なものである。慈とは楽しみを与え、悲とは苦しみを抜いてあげる義をいう。キリスト教で説く愛とは、根本的に違いがあり、自他共に永遠に救済しきる働きが含まれているものである。

しかも、慈悲とは、修行によって得られるものではない。大御本尊を信じ、唱題していくときに、自然と仏の慈悲の境地に立脚し、わが生命のなかに、ほとばしり出るものである。

ゆえに、慈悲ほど強いものはない。百万言を尽くしても、慈悲なき言は、相手に感動を与えるものでは決してない。そして、相手を思い、幸福を願っての心からの、言々句々は、その人の心を、根底からゆり動かさずにおかないであろう。

いま、われわれは、大御本尊を、即日蓮大聖人と拝し、仏弟子として甚深の慈悲を蒙っているのだ、と確信し、感謝を忘れてはならない。そして、いまだ正法を知らぬ人々に対し、この御本尊の功徳を教えてあげることが、私たちの慈悲の行為となっているのである。橋を造ったり、学校に寄附したり、人に親切にしたりすることは、もちろん、善ではあるが、これは、一時的な社会の善に過ぎない。これ小善というものである。また、これらは本来、政治等で解決すべき問題でもある。慈悲は大善である。大善は、根本的に、しかも永久に、最も多くの人の幸福のためにする行為である。したがって、われわれの折伏活動こそ、大善の中の極大善であることを、強く強く確信すべきである。

現在、社会に最も必要なことは、この慈悲ということである。日蓮大聖人の大慈悲につつまれながら、大生命哲学を学び、生活の源泉としていく以外に、真に安心立命の人生はない。また、社会も、おたがいの慈悲がなければ、まるで闇のようになり、三悪道から抜けることは、永久にできえないことであろう。ために、政治、経済、教育等の文化の根底に慈悲がなければ、民衆は断じて救われない。慈悲を根底とした人間文化こそ、一切の人の待望するところであろう。

法説の実相は何ぞ隠れ何ぞ顕れんや長風息むこと靡く空月常に懸れり

これを生命論に約せば、生命は永遠であって、その本有のうえの生であり、死なのであるということである。法説の実相とは生命であり、隠は死であり、顕は生である。「法華の生死は三世常恒にして隠顕之無し」とは、

総勘文抄（五六三㌻）に「生と死と二つの理は生死の夢の理なり妄想なり顚倒なり本覚の寤を以て我が心性を糾せば生ず可き始めも無きが故に死す可き終りも無し既に生死を離れたる心法に非ずや」との仰せのごとくである。爾前の生死、すなわち生老病死は、今世だけを説き、法華に説く生命論は、生命の実体は永遠であるということである。

この「法華の生死」ということについて、さらにいえば、御義口伝（七五三㌻）に「三界之相とは生老病死なり本有の生死とみれば無有生死なり生死無ければ退出も無し唯生死無きに非ざるなり、生死を見て厭離するを迷と云い始覚と云うなりさて本有の生死と知見するを悟と云い本覚と云うなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る時本有の生死本有の退出と開覚するなり」とあり、同じく御義口伝（七二四㌻）には「自身法性の大地を生死生死と転ぐり行くなり」とあり、六道輪廻の生死ではなく、永遠の生命観に立脚し、妙法に照らされた生死が、法華の生死なのである。

信心に約せば、法説の実相とは大御本尊である。大御本尊のお力というものは、隠れたり、顕われたりするものではない。相対的に一部の人を救うようなものでもない。全民衆を根底より救いきるものであり、またある期間のみ通用する限界がある法でもなく、永遠に照り輝いているのである。われわれもまた、この大御本尊を信じ、南無妙法蓮華経と唱えることによって、大御本尊と境智冥合し、われらの肉団の本尊、仏界が湧現し、現実の荒れ狂う社会に照り輝き、師子王のごとく、ゆうゆうたる人生を、楽しく生ききっていくことができることを意味するものである。

最後の行の「教とは三千羅列なり」とは、南無妙法蓮華経は、きびしき因果の理法を説ききったものであるということである。三千とは、生命活動の範疇である。

世間法は、網の目がいまだ大きい。国法でもまた、網の目がある。罪を犯した者が、逃げ通す場合がある。しかし、仏法律は厳しい。因果の理法の生命活動を説ききっているから、網の目がまったくないのである。人が見ていようが、見ていなかろうが、間違いなく、われわれの人生は、原因結果によって連続している。おまけもなければ、割り引きもない。とくに、妙法の鏡に照らしてみれば、原因、結果が明らかであるから、誰人たりとも、この一生を大事に、有意義に生きねばならぬことを、身を震わして思うであろう。

現代は、乱世で、刹那主義である。まったく正しい人生観をもった人が少ない、悲しむべき時代である。しかし生命は、厳然と永遠なのである。今世のみであるなら、誰が法を求めて、修行する必要があるだろうか。所詮、妙法を鏡として、人生を正しく生ききっていくべきである。また妙法の鏡に照らして、いっさいの社会、世界を、明らかに見ていくべきである。したがってわれわれの、主観すれば生命活動、客観すれば生活自体が、ぜんぶ因果の理法の中にあって、逃げることができないということを、各人が覚知すべきである。

第二　即起合掌の事

本文

第二即起合掌の事　文句の五に云く外義を叙するとは即起合掌は身の領解と名く昔は権実二と為す掌の合わざるが如し、今は権即実と解る二の掌の合するが如し、向仏とは昔は権・仏因に非ず実・仏果に非ず今権即実と解して大円因を成ず因は必ず果に趣く故に合掌向仏と言うと。

御義口伝に云く合掌とは法華経の異名なり向仏とは法華経に値い奉ると云うなり合掌は色法なり　向仏は心法なり、色心の二法を妙法と開悟するを歓喜踊躍と説くなり、合掌に於て又二の意之れ有り合とは妙なり掌とは法なり、又云く合とは妙法蓮華経なり掌とは廿八品なり、又云く合とは仏界なり掌とは九界なり九界は権仏界は実なり、妙楽大師の云く「九界を権と為し仏界を実と為す」と十界悉く合掌の二字に納まって森羅三千の諸法は合掌に非ざること莫きなり、惣じて三種の法華の合掌之れ有り今の妙法蓮華経は三種の法華未分なり、爾りと雖も先ず顕説法華を正意と為すなり、之に依って伝教大師は於一仏乗とは根本法華の教なり〇妙法の外更に一句の余経

無しと、向仏とは一一文文皆金色の仏体と向い奉る事なり合掌の二字に法界を尽したるなり、地獄餓鬼の己己の当体其の外三千の諸法其の儘合掌向仏なり而る間法界悉く舎利弗なり舎利弗とは法華経なり、舎とは空諦利とは仮諦弗とは中道なり円融三諦の妙法なり舎利弗とは梵語此には身子と云う身子とは十界の色心なり身とは十界の色法子とは十界の心法なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は悉く舎利弗なり、舎利弗は即釈迦如来釈迦如来は即法華経法華経は即我等が色心の二法なり、仍て身子此の品の時聞此法音と領解せり、聞とは名字即法音とは諸法の音なり諸法の音とは妙法なり、爰を以て文句に釈する時長風息むこと靡しと長風とは法界の音声なり、此の音声を信解品に以仏道声令一切聞と云えり一切とは法界の衆生の事なり此の音声とは南無妙法蓮華経なり。

語訳

即起合掌　譬喩品（一九三㌻）に「爾の時に舎利弗、踊躍歓喜して、即ち起ちて合掌し、尊顔を瞻仰して仏に白して言さく、今世尊に従いたてまつりて、此の法音を聞いて心に踊躍を懐き、未曾有なるを得たり」とある。

文句の五に云く　文句には領解段の叙には、内解と外儀にわけている。「内解の心に在るを喜と名く、喜の形に動くを踊躍と名く」ともある。外儀とは、内心の領解にたいして、それが外にあらわれた振舞いである。

即起合掌は身の領解と名く　文句には、即起合掌を身の領解、「白仏」（仏に白して）の下は口の領解とする。

昔は権実二と為す　爾前経においては、三乗と一乗が別であった。方便品においては、諸法実相を説き、三乗即一乗を明かし

たのである。これを開三顕一、あるいは開権顕実という。

昔は権・仏因に非ず実・仏果に非ず　いまだ開会以前の権実は、真の仏因・仏果とならない。しかるに開会ののちにおいては、絶待妙の立場から、権即実、三乗即一乗と開いて、大円因―即身成仏の因を成し、また因果倶時して、必ず仏果を証得するのである。ゆえに、合掌（権即実と解して）仏（仏果）に向かうと言うのである。

合掌は色法なり向仏は心法なり　合掌は信心の色法に現われた姿である。向仏は、信心の心法をいう。

色心の二法を妙法と開悟するを歓喜踊躍と説くなり　色心の二法（生命）が、即妙法蓮華経の当体であると開覚して、舎利弗は譬喩品で歓喜踊躍したのである。また、歓喜は心法、踊躍は色法である。色心の二法が妙法の当体と開悟することが、歓喜踊躍と説かれた意味なのである。

合とは妙なり掌とは法なり　合とは十界互具、一念三千の当体である妙法である。十界互具、一念三千の当体は、妙であり、不可思議である。一切の森羅三千の根底にあって、その生命活動を顕現させるものである。掌とは、諸々の現象である。生命活動の具体的な姿である。

合とは妙法蓮華経なり掌とは廿八品なり　合とは三大秘法、さらにつきつめていえば一大秘法であり、南無妙法蓮華経である。掌とは一大秘法、三大秘法を開いて、法華経二十八品、さらには八万法蔵となるのである。

合とは仏界なり掌とは九界なり　権即実と解して仏界を証得したことは、掌が合ったことになる。

森羅三千の諸法は合掌に非ざること莫きなり　森羅三千の諸法は、ことごとく妙法の当体である。眼を開いてみれば、森羅三千の諸法はすべて妙法蓮華経に合掌したてまつっている姿なのである。

三種の法華　伝教大師の「守護国界章」に、釈尊一代の仏説を根本法華、顕説法華、隠密法華の三つにわけて説いてある。法華経の本門で、釈尊の悟り―生命の長遠を明白に仏の振舞いの上に説いたものを顕説法華という。霊鷲山の八年間の説法に

おいて、一仏乗の法華経を説き、出世の本懐としたものを根本法華という。爾前経においては、三乗を分別して説くが、それは一仏乗の法華経にいたるための方便権教である。一乗の法華経を隠して、かりに三乗を説いたものであるから、隠密法華という。また、文底仏法に約して三種の法華を論ずるならば、百六箇抄（八六五㌻）にいわく「下種三種法華の本迹。二種は迹なり一種は本なり、迹門は隠密法華・本門は根本法華・迹本文底の南無妙法蓮華経は顕説法華なり」と。

於一仏乗　方便品（一七〇㌻）にいわく「一仏乗に於いて分別して三と説きたもう」と。涅槃経にいわく「実には三乗無し顛倒心の故に三乗有りと言う、一実の道は真実にして虚ならず顛倒心の故に一実無しと言う」伝教大師の守護章にいわく、「妙法の外更に一句の余経無し」と。

一一文文皆金色の仏体　妙心尼御前御返事（一四八四㌻）にいわく「天台大師の云く『一一文文是れ真仏なり』等云云、妙の文字は三十二相・八十種好・円備せさせ給う釈迦如来にておはしますを・我等が眼つたなくして文字とは・みまいらせ候なり」と。単衣抄（一五一五㌻）にいわく「仏前に詣でて法華経を読み奉り候いなば・御経の文字は六万九千三百八十四字・一一の文字は皆金色の仏なり」と。本尊供養御書（一五三六㌻）にいわく「法華経の文字は六万九千三百八十四字・一一の文字は我等が目には黒き文字と見え候へども仏の御眼には一一に皆御仏なり」と。現代でいえば、御金言という意。

舎とは空諦利とは仮諦弗とは中道なり　舎利弗とは円融三諦の妙法、南無妙法蓮華経を意味するのである。三諦各別の、隔歴の三諦ではなく、三諦を円融相即しているのである。

聞此法音と領解せり　譬喩品（一九三㌻）の「今世尊に従いたてまつりて、此の法音を聞いて心に踊躍を懐き、未曾有なるを得たり……」の文を指す。舎利弗の領解の発言である。

聞とは名字即　名字即とは、仏法の名を聞き、これを信ずる初心の位。日蓮大聖人の下種仏法では、名字即究竟（妙覚）となるのである。

信解品に以仏道声令一切聞と云えり　信解品（二七五ページ）に「我等今者、真に是れ声聞なり、仏道の声を以って、一切をして聞かしむべし」とある。

通解

ここは、譬喩品（一九三ページ）の最初に「爾の時に舎利弗、踊躍歓喜して、即ち起ちて合掌し、尊顔を瞻仰して仏に白して言さく、今世尊に従いたてまつりて、此の法音を聞いて、心に踊躍を懐き、未曾有なるを得たり……」とあるところの御義口伝である。

文句の五には、次のように釈している。領解の、外にあらわれた振舞いについて述べるならば、「即起合掌」は領解が身形にあらわれたものであり、身の領解と名づけるのである。爾前教においては、三乗と一乗が各別であり、権実各別であり、十界互具していないから、あたかも掌が合わないようなものである。今は、方便品において、開三顕一が明かされ、三乗即一乗、権即実であると領解することができたのであるから、二つの掌が合したようなものである。向仏とは、昔は、権である三乗の修行は、真の仏因ではなかったし、実である一乗も真の仏果ではなかったのである。今、方便品において開三顕一して、権即実と領解したときに、はじめて成仏の因を成じ、その因は必ず仏果に趣くのである。ゆえに「合掌して仏に向う」と言うのであると。

御義口伝には、次のように仰せである。「合掌」とは法華経の異名である。「向仏」とは、妙法蓮華経にあい

たてまつるということである。合掌は、色法の姿であり、向仏とは信心であり、心法である。色心の二法を妙法蓮華経であると開悟するのを、譬喩品で、舎利弗が歓喜踊躍したと説くのであり、歓喜踊躍とは心法色法一体の姿なのである。

合掌において、また二つの意味がある。合とは「妙」であり、掌とは「法」である。また、合とは、妙法蓮華経であり、掌とは、それを開いた二十八品である。また、合とは仏界であり、掌とは九界である。九界は権、仏界は実である。妙楽大師は「九界を権となし、仏界を実となす」といっている。かくして、十界はことごとく合掌の二字の中に納まっており、森羅三千のあらゆる現象は、合掌の当体でないものはないのである。

惣じて、三種の法華の合掌ということがある。伝教大師は、一代仏教を、隠密法華、根本法華、顕説法華の三種類に分けている。隠密法華というのは、法華経を隠密して爾前経を説いたがゆえに、爾前経を指して隠密法華といい、根本法華とは二十八品を指し、顕説法華とは法華経本門を指す。今この妙法蓮華経は、三種の法華を、別々に分けて言っているのではない。しかしながら、まず、顕説法華を正意とするのである。それゆえに、伝教大師は、守護章に、「於一仏乗」とは根本法華の教えである……妙法のほかに、さらに一句の余経もない、といっているのである。

向仏とは、妙法蓮華経の一一文文が、みな仏の生命である、また、ことごとく仏の真実の言々句々であると、信解して向かいたてまつることである。われわれの立ち場から言えば、大御本尊は仏の当体であると拝することが、向仏という意味である。合掌の二字に、法界のすべてを摂しつくしているのである。したがって、地獄、餓

鬼の己己の当体、そのほか三千の諸の現象は、そのまま妙法の当体であり、合掌向仏しているのである。それゆえ、法界はことごとく、合掌向仏する舎利弗の姿である。舎利弗とは、法華経を意味するのである。舎とは空諦、利とは仮諦、弗とは中道、すなわち舎利弗は円融三諦の妙法をあらわしているのである。

舎利弗とは梵語であり、身子と訳する。身子とは十界の色心（生命）をあらわすのである。身とは十界の色法、子とは十界の心法、すなわち身子とは十界の色心不二の生命をあらわしている。今、日蓮大聖人およびその門下として南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、ことごとく舎利弗であり、舎利弗が仏に向かい奉ったごとく、御大本尊に向かい奉っている姿である。

舎利弗は即釈迦如来であり、釈迦如来は即法華経である。法華経は即われらの色心の二法（生命）である。文底に約すれば、舎利弗とは末法のわれわれであり、われわれと日蓮大聖人は師弟不二である。日蓮大聖人と大御本尊は人法一箇である。大御本尊を信ずることによって、われわれの色心の二法、われわれの生命が、即仏の生命とあらわれるということである。したがって、舎利弗は、この譬喩品において、「聞此法音」（此の法音を聞く）と領解する―開三顕一の法を聞いて悟ったというのである。じつは、われら衆生の領解である。

聞とは、名字即である。妙法蓮華経の名字を聞くがゆえに名字即という。法音とは諸法の音である。諸法の音とは、妙法を意味するのである。ここをもって、文句に釈するに「長風息むことなし」（前項参照）という。長風とは法界の音声であり、それは常住にしてやむことがないのである。この音声を、信解品（二七五ページ）においては、「仏道の声を以って、一切をして聞かしむべし」と説いている。一切とは法界の一切衆生のことである。

この音声とは南無妙法蓮華経である。

講義

「昔は、権実二と為す掌の合わざるが如し」とは、相待妙の立ち場であり、現在でいえば、いっさいの宗教、哲学、思想が、現実の生活と遊離していることともいえる。すなわち、幸福生活確立への原動力でなく、観念論であるということである。

「今は権即実と解る」ここは絶待妙の立ち場である。実が大海、権が河川にあたるわけである。従って、南無妙法蓮華経の一大秘法を開いて三大秘法、また開いて六大秘法、また開いて法華経二十八品、八万法蔵になるのである。生活に約せば、一切法これ妙法であり、仏法である。信心即生活であり、仏法は体、世法は影なりと領解することといえるのである。

向仏とは昔は権・仏因に非ず実・仏果に非ず

懸命に爾前教を修行しても、決して仏になれない。幸福になろうと、いかなる努力を払っても、不幸の原因を打開することはできない。爾前教の修行は、例えば、家屋それ自体を造っているのではなく、その櫓を造っているにすぎない。またインドへ飛行機で旅行するとする。目的はインドである。しかし、爾前教は、空港に行く

途中のバスの中にいるようなものである。すべて目的への修行活動にすぎない。これに対し、成仏の目的たる、また理論上完璧な極理となる、一念三千を説いたのが方便品である。法説周である舎利弗は、この方便品にきて、初めて生命の本質を覚ることができたのである。そして、経文上では譬喩品にきて、釈尊に対し合掌した儀式をふむわけである。

「色心の二法を妙法と開悟するを歓喜踊躍と説くなり」とは、生命哲学の極理であり、智慧第一の舎利弗が、最後に会得したのも、この色心不二の生命哲理以外のなにものでもない、ということである。宇宙、生命の根本は、心でもない、物でもない、色心不二なのである。現在、真の智人、哲人、学者がいるならば、舎利弗のごとく、御本尊の前で歓喜踊躍することは、当然であろう。

向仏とは一一文文金色の仏体と向い奉る事なり合掌の二字に法界を尽したるなり

ここに「金色の仏体」の金色という意味は、法華経に説かれてある一つ一つの文が、ことごとく仏の真実の言言句々であるということであり、文字それ自体が色心不二の仏の生命であるともいえる。ゆえに諸宗問答抄（三八〇㌻）にいわく「文字は是一切衆生の心法の顕れたる質なりされば人のかける物を以て其の人の心根を知って相する事あり、凡そ心と色法とは色心不二の法にて有る間かきたる物を以て其の人の貧福をも相するなり、然れば文字は是れ一切衆生の色心不二の質なり」と。

また木絵二像開眼之事（四六八㌻）にいわく「法華経の文字は仏の梵音声の不可見無対色を可見有対色のかたち

と・あらはしぬれば顕形の二色となれるなり、滅せる梵音声かへって形をあらはして文字と成って衆生を利益するなり、人の声を出すに二つあり、一には自身は存ぜざれども人をたぶらかさむがために声をいだす是は随他意の声、自身の思を声にあらはす事ありされば意が声とあらはる意は心法・声は色法・心より色をあらはす、又声を聞いて心を知る色法が心法を顕すなり、色心不二なるがゆへに而二とあらはれて仏の御意あらはれて法華の文字となれり、文字変じて又仏の御意となる、されば法華経をよませ給はむ人は文字と思食事なかれすなはち仏の御意なり」と。

大御本尊は、たんなる文字でもなければ、紙でもない。末法の御本仏日蓮大聖人の御命そのものである。ゆえに経王殿御返事（一一二四ページ）にいわく「日蓮がたましひをすみにそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ、仏の御意は法華経なり日蓮が・たましひは南無妙法蓮華経に・すぎたるはなし」と。「日蓮がたましひ」とは、日蓮大聖人の御命ということである。ゆえに、われわれは、この大御本尊に帰命することによって、大聖人の生命を、わが肉団の胸中に湧現し、金剛不壊の、絶対の幸福境涯を開いていくことができるのである。

しかしながら信心のない者は、大御本尊を軽く考えるのである。大御本尊は仏の生命そのものであるなどとは思いもよらず、単に紙に字が書いてあるぐらいにしか考えないのである。ゆえに、いかに大御本尊に向かったとしても、それは合掌向仏の向仏にはならない。このことを曾谷入道殿御返事（一〇二五ページ）には次のように仰せられている。「此の経の文字は皆悉く生身妙覚の御仏なり然れども我等は肉眼なれば文字と見るなり、例せば餓鬼は恒河を火と見る人は水と見る天人は甘露と見る水は一なれども果報に随って別別なり、此の経の文字は盲

眼の者は之を見ず・肉眼の者は文字と見る二乗は虚空と見る菩薩は無量の法門と見る、仏は一一の文字を金色の釈尊と御覧あるべきなり即持仏身とは是なり」と。

だからといって、御本尊に向かって唱題したときに、大御本尊が大聖人のお姿として見えたなどというのは、大きな誤りである。そのようなことは、絶対にありえないことである。われわれは、御本尊のそのままの姿を拝すればよいのである。ただ御本尊の絶対の功徳を確信し、唱題し、大歓喜を生じていくことが「一一文文皆金色の仏体と向い奉る事なり」にあたるのである。

地獄餓鬼の己己の当体其の外三千の諸法其の儘合掌向仏なり

これをわれわれの生活に約していえば、一切衆生ことごとくが妙法蓮華の当体であるがゆえに、信心していない人であっても、ぜんぶ合掌向仏している。すなわち、南無妙法蓮華経を求めている姿ともいえよう。

折伏されて、反対していても、その人の心の動きは、本然的に、暗闇の虫が電灯を求めるように、水が高きより低きに流れるように、妙法を求めているものなのである。猛反対しながらも、次第に、信仰しなくてはならない情勢になってくるものだ。これこそ明らかに向仏の姿なのである。それは、われわれの体験が、なによりもよく実証しているではないか。また、有情のみではなく、非情も同じく妙法の当体である。草木にも、また十界が互具しているのである。このことについては難信難解であるので、草木成仏口決等の御書をよくよく拝すべきである。

一幅の曼荼羅、すなわち、もったいなくも大御本尊の御力も非情の仏界である。また、われわれが死んで、石になり、草木になることも、御書に照らして明らかなことである。また、髪の毛・爪は非情である。これもまた非情と有情とのあいだには、絶対的区別があるのではなく、外面的なものであり、ともに十界互具の当体であることは明らかである。ゆえに非情もまた合掌向仏していると考えられるのである。例えていえば、草木は太陽を求める。陰に咲き成長するより、なんとか太陽を求め、のびのびと生長しようとしている本性があるものだ。草木の宿命により、その分布は、おのずから違うのも不思議なことといえよう。しかし、生きぬくためには、全力をあげて水と光りとを求め抜いて、根を張り、花を咲かせようとする。これらの働きの本源をたずぬれば、やはり大宇宙のリズムにかなって生きようとする姿であり、合掌向仏なのである。

次に、舎利弗を空、仮、中の三諦に立て分け、またその漢語訳の「身子」を色心の二法に見ていくということ、釈尊の十大弟子の一人である舎利弗との関係を考えてみよう。たしかに、舎利弗という名の人は実在していたに違いない。実に頭が良く智慧第一といわれるぐらい、釈尊の説法をよく理解した人といわれている。しかし、法華経は、万人に通ずる方程式を示したものである。したがって、舎利弗という人を通して、万人が幸福になる原理を説いているわけなのである。そうなれば、舎利弗は、もはや個人としての舎利弗ではない。一切衆生を代表しての舎利弗となってくる。

舎利弗は、法華経の説法を聞き、妙法蓮華経を信受し、みずからも円融の三諦、すなわち、妙法の当体であると覚知し、また、色心を妙法と開いたのであった。ゆえに、法華経における舎利弗は、円融の三諦の妙法そのも

のであり、色心を妙法と開いた覚体である。したがって、舎利弗を空・仮・中の三諦に約し、また身子を色心と約するものである。しかも、不思議と舎利弗という名も、身子という名も、三諦、色心の意味をもっているということは、舎利弗の出現は、偶然ではなく、仏縁が深いともいえるし、大きな使命を有して生まれてきていたといえようか。

舎利弗が法華経の説法を聞いて、いったい何を悟ったのか、それは、あとにも説明するが、事の一念三千の南無妙法蓮華経を悟って成仏したのである。この妙法に合掌することが、境智冥合であり、真の合掌になるのである。ゆえに舎利弗にせよ、凡愚のわれわれにせよ、事の一念三千の当体に向かって唱題修行するとき、空仮中の三諦、法報応の三身を覚知することになるのである。

今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は悉く舎利弗なり、舎利弗は即釈迦如来釈迦如来は即法華経法華経は即我等が色心の二法なり、仍て身子此の品の時聞此法音と領解せり、聞とは名字即法音とは諸法の音なり諸法の音とは妙法なり

ここに舎利弗とは末法のわれら衆生であり、釈迦如来とは人本尊たる日蓮大聖人であり、法華経とは法本尊たる法華経である。すなわち、末法のわれら衆生は、人法一箇の大御本尊を信ずることによって、大聖人とわれわれは師弟不二となり、わが身も妙法の当体とあらわれるのである。「聞此法音」の「聞」が名字即ということは、信受の意味である。たんに「聞く」といった意味ではない。信がなければ、いかに聞いても、真に聞いたこ

とにはならない。ゆえに日寛上人は三重秘伝抄に「応に知るべし能く聴くとは是れ信受の義なり、若し信受せずんば何ぞ能く聴くと云わんや」と仰せられている。

舎利弗も、結局、信ずることによって成仏したのである。しかも、それは文上の法華経ではなく、文底下種・事行の一念三千の南無妙法蓮華経を信じて、妙覚の極位に至ったのである。このことは当流行事抄（富要集第三巻一九一ページ）に次のごとく述べられている。

「問の今日在世得脱の衆生は皆是れ三五下種の輩なり、何ぞ久遠元初の下種等と云うや。

答う三五下種と言うは且く是れ当家第一第二の教相の意なり、若し第三の教相顕われ已れば在世の衆生は皆悉く久遠元初下種の人なり、且く身子の如き鹿苑の断惑は只是れ当分の断惑にして跨節の断惑に非ず・是れ則ち種子を知らざる故なり、然るに法華に来至して大通の種子を覚知す此れ即ち跨節の断惑なり、然りと雖も若し本門に望むれば猶是れ当分の断惑にして跨節の断惑に非ず・未だ久遠下種を了せざるの故なり、而して後本門に至って久遠の下種を顕わす此れ即ち跨節の断惑なり、然りと雖も若し文底に望むれば猶是れ当分の断惑にして跨節の断惑に非ざるなり、若し文底の眼を開いて還って彼の得道を見れば実に久遠下種の位に還って名字妙覚の極位に至る・此れ即ち真実の跨節の断惑なり、故に経に云く『以信得入』等云云、以信・豈名字に非ずや、得入は即ち是れ妙覚なり、又云く『我等当信受仏語』云云、宗祖釈して云く『此の無作三身は一字を以て得たり所謂信の一字なり』云云、信は即慧の因・名字即なり無作三身・豈妙覚に非ずや、身子既に爾り一切皆然らん云云、当流の深秘に三重秘伝云云」

信解品の「仏道の声をもって、一切をして聞かしむべし」の文の一切とは一切衆生のことである。

一切衆生に十界の生命がある。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天、声聞、縁覚、菩薩、仏の十界であり、それぞれ仏性を具えている。この仏界を湧現せしむる力が妙法なのである。そして、その音声とは、南無妙法蓮華経なのである。それを図顕したのが御本尊である。御本尊とは、功徳聚、または、輪円具足ともいう。ちょうどここに、123の数字があって、この数字は、宇宙に久遠より実在する法理である。これを黒板または帳面に図顕して、われわれの生活と関係を結ぶ。あたかもそのように、宇宙の本源力たる南無妙法蓮華経を、大聖人は、御本尊として図顕遊ばされたのである。

第三　身意泰然快得安穩の事

本文

第三身意泰然快得安穩の事　文句の五に云く従仏は是れ身の喜を結するなり聞法は此れ口の喜を結するなり断諸疑悔とは是れ意の喜を結すと。

御義口伝に云く身意泰然とは煩悩即菩提生死即涅槃なり、身とは生死即涅槃なり意とは煩悩即菩提なり従仏とは日蓮に従う類い等の事なり口の喜とは南無妙法蓮華経なり意の喜とは無明の惑障無き故なり、爰を以て之を思うに此の文は一心三観一念三千我等が即身成仏なり方便の教は泰然に非ず安穩に非ざるなり行於険逕多留難故の教なり。

語訳

身意泰然快得安穏　譬喩品（一九四ページ）の「世尊、我昔より来、終日竟夜、毎に自ら剋責しき。而るに今、仏に従いたてまつりて、未だ聞かざる所の未曾有の法を聞いて、諸の疑悔を断じ、身意泰然として、快く安穏なることを得たり。今日乃ち知んぬ。真に是れ仏子なり……」の部分を指す。

従仏　前掲の譬喩品の「仏に従いたてまつりて」のこと。

聞法　同じく「法を聞いて」のこと。

断諸疑悔　同じく「諸の疑悔を断じ」のこと。

身とは生死即涅槃なり　身の泰然とは、生死即涅槃であるとの意。生死の苦しみというのは、身相、身形の上に受けていくものである。妙法を信じて、生死即涅槃と開くのである。

意とは煩悩即菩提なり　意の泰然とは、煩悩即菩提であるとの意。煩悩とは、意業の上に受けるところの苦の働きである。それが即菩提と開くのである。

一心三観一念三千　一心とは一念の心法である。三観は智、三諦は境であり、三諦を対象として修行する天台の観念観法が、三観である。しかし、文底の立ち場では受持即観心であり、御本尊を信受するわれわれの一念に三観の智慧はそなわっているのである。当体義抄（五一二ページ）にいわく「正直に方便を捨て但法華経を信じ南無妙法蓮華経と唱うる人は(乃至)三観・三諦・即一心に顕われ……」当体義抄文段にいわく「三観三諦即一心に顕われの文。三諦は是れ境、三観は是れ智、故に知んぬ但法華経を信じて南無妙法蓮華経と唱うれば、即本地難思の境智の妙法を即我れ等が一心に悟り顕わし、本門寿量の当体の蓮華仏と顕わるるなり、是れ本覚無作の一心三観と名づくるなり、修禅寺決十八に云く、本門実証の時は無思無念にして誰れ造作すること無し故に無作と云うなり云云」（富要集第四巻三九六ページ）ゆえに、一心三観も一念三千もまったく同じである。また、一念三千法門（四一三ページ）にいわく「百界と顕れたる色相は皆総て仮の義なれば仮諦の一なり千如は総て空

の義なれば空諦の一なり三千世間は総じて法身の義なれば中道の一なり、法門多しと雖も但三諦なり」と。このように、三千も三諦に約するのである。三諦は境、三観は智、いずれにしても一心三観と一念三千は、まったく同じことを説いていると知ることができるのである。

行於険道多留難故　爾前権教においては、成仏することができないことをいう。無量義経十功徳品（九七ページ）に「無量無辺不可思議阿僧祇劫を過ぐれども、終に無上菩提を成ずることを得ず。所以は何ん、菩提の大直道を知らざるが故に、険径を行くに留難多きが故に」とある。

通解

ここは、譬喩品（一九四ページ）で舎利弗が「世尊、我昔より来、終日竟夜、毎に自ら剋責しき。而るに今、仏に従いたてまつりて、未だ聞かざる所の未曾有の法を聞いて、諸の疑悔を断じ、身意泰然として、快く安穏なることを得たり」と、喜んでいる部分である。

文句の五には次のように釈している。従仏（仏に従いたてまつりて）とは「身」の喜を結成する。聞法（法を聞いて）は「口」の喜を結成する。断諸疑悔（もろもろの疑悔を断じ）とは「意」の喜を結成すると。

御義口伝には、次のように仰せである。「身意泰然」とは、妙法により、煩悩即菩提、生死即涅槃と開いて、幸福境涯に住することである。「身意」をわけて、「身」の泰然とは、生死即涅槃である。「意」の泰然とは、

煩悩即菩提である。「従仏」とは、身の喜を結するので、それは日蓮大聖人に随順する門下の者のことである。口の喜とは、南無妙法蓮華経と唱え奉ることである。意の喜とは、不幸の根源の無明惑の障りを除くがゆえである。

ここをもって考えてみるのに、この文は一心三観一念三千の理法、我らが即身成仏の法門なのである。方便権教の教えは、泰然でもなく、安穏でもないのである。方便の教えは、険逕を行くに留難多きが故に（無量義経十功徳品）、ついに仏道を成ずることはできないのである。

講義

われわれは、信心して、身意泰然、快得安穏にならなくてはならない。それが信心の目的である。

従仏は是れ身の喜を結するなり

いま、われわれは、大聖人の仰せどおりに、折伏行に邁進している。そしてまた、王仏冥合の達成に、化儀の広宣流布に邁進している。それに反し、世間の人々のなかには、一生をむなしく過ごす人のなんと多いことか。刹那主義に流され、あるいは自己の利益を追求することにのみ没頭している姿は、まさに畜生界、餓鬼界そのものではないか。真に生きがいある人生――それは、みずからの一生成仏をめざし、また広く王仏冥合、社会の繁

栄のために身をなげうって進むことに尽きる。われわれは、受け難き人身を受け、しかも大乗有縁の日本国に誕生し、会い難き大仏法にめぐり会え、しかも時を得て、化儀の広宣流布達成の時代に生きるとは、なんたる福運、なんたる喜びであろうか。

撰時抄（二六〇㌻）にいわく「道心あらん人人は此を見ききて悦ばせ給え正像二千年の大王よりも後世ををもはん人人は末法の今の民にてこそあるべけれ此を信ぜざらんや、彼の天台の座主よりも南無妙法蓮華経と唱うる癩人とはなるべし」と。この御文をそのまま実感できるのは、われわれをおいて他にあろうか。われわれは、喜びに身のふるえる姿でなくてはならない。

そしてまた「諸の疑悔を断ずる」――何が正しい生命観なのか、正しい人生のあり方なのか、最高善なのか、こうした悩みや疑問は、南無妙法蓮華経によってぜんぶ解決できる。宿命転換できる。これは、「意」の喜びではないか。

われわれは信心する以前は、確固たる目的観もなく、悶々として楽しまざる日々が多かった。信仰なき人生は、まさに闇夜のごとくである。そして、なんとか真実をつかもうと闇中模索していたのである。しかも、いったいなにが得られたというのだろう。多くの人は、坐折し、現実と妥協し、時流に迎合し、その中に浮き草のごとく、はかなき人生を送り、一方、自己に忠実に生きようとすれば、ますます、現実と自己の希望との矛盾にうちひしがれ、置場のない自己を見いだすほかあるまい。そして、これまた、現実の前に屈伏せざるをえないのである。

彼の有名な大正期の作家、芥川竜之介は、神経衰弱の末自殺し、北村透谷もまた「人生に相渉るとは何の謂ぞ」と人生に煩悶し、遂には投身自殺した。さらにまた、一高の秀才藤村操も「人生とは何か。いわく不可解」との言葉を残し、若き命を断った。なお、戦後の混乱期にあって、多数の青年を、その情熱的な文章で湧かした太宰治も、玉川上水に身を投げ、世の人々に大きな波紋を投げかけた。

彼の、ロシアの文豪トルストイは、夫人とのあいだがうまくいかず、「アンナ・カレーニナ」「戦争と平和」などの大作を自ら否定し、家出したのち、一寒村でのたれ死にしたことは、まことにあわれであった。また、かのフランスの文豪モーパッサンも狂い死にし、ドイツの哲学者ニーチェも狂乱の末、非業の死をとげている。

いずれにせよ、心の奥底にある、さまざまな疑念は、ついに晴れず煩悶し、また煩悶した最後の結末が、これであったと思う。真の哲学、最高の思想に到達できぬ人生が、いかにみじめなものかを雄弁に物語っている。

もしも、彼らが、日蓮大聖哲の大生命哲学を知ったならば、「自ら求めていたものは、これなり」と、強き強き確信を持ち、胸中には、新たなる希望と、勇気が湧き起こったに違いあるまい。

次に「身意泰然」をわけると、身の泰然と意の泰然とに分かれる。身の泰然とは、生死即涅槃であり、意の泰然とは、煩悩即菩提である。生死は、ここでは「苦しみ」と訳す。すなわち「生死の苦海」という場合の生死である。煩悩が、心の問題が中心であるのに対し、生死とは、生活のうえにあらわれた苦しみをいう。

たとえば、「商売が不振で困った」というのは生死である。それを、大御本尊を持ち、福運を積み、智慧を働かして、荒波をゆうゆうと乗り切り、うち勝ち、成功すれば涅槃である。また、学生が一生懸命に勉強して、な

んとか試験にパスしようと思い、努力しているのは、生死である。しかし、それによってパスできたとすれば涅槃である。

それに対し、煩悩は、心の問題であり、内面的なさまざまの悩みである。また貪、瞋、癡、慢、疑等の生命のにごりである。その煩悩を、題目の力によって宿命転換し、菩提にかえきっていく、すなわち、煩悩の鎖（くさり）にしばられないで、煩悩を智慧によって使いきっていく、これが煩悩即菩提である。煩悩即菩提も生死即涅槃も、ともに同じ原理であり、そこに絶対的な区別があるわけではない。また表裏一体の関係ともいえる。しかし、一往（いちおう）煩悩と生死とのあいだには、少しニュアンスの違いがあるのである。

まず、ここで示されているように、煩悩は、どちらかといえば、心の問題であり、生死とは、生活にあらわれた状態においていわれる。五百弟子品に「身心遍歓喜」とあり、それに対する大聖人の御義口伝にも「身とは生死即涅槃なり心とは煩悩即菩提なり」とあるごとくである。

次に、煩悩は、いっさいの苦しみの原因とされ、煩悩の内容である貪、瞋、癡等に支配された生活、すなわち煩悩の結果としての生活が生死であるというように、因果の関係としてとらえることもできる。また、煩悩はある一時点において、悩み、煩悶するという横の関係であるのに対し、生死は、生命の流転の上において論ぜられる苦悩の生活であり、竪（たて）の関係であるとも考えられる。

ゆえに、煩悩即菩提は、十界皆成（かいじょう）を説いた法華経迹門の意であり、生死即涅槃は、永遠の生命を説き明かした本門の意である。

従仏とは日蓮に従う類い等の事なり

日蓮大聖人こそ、末法の一切衆生にとって主であり、師であり、親であるところの御本仏であるという御宣言と拝することができる。しかもこの御文によれば、大聖人を御本仏と仰ぐわれらこそ、従仏であり、たとえ大聖人を崇むるとも、「日蓮大菩薩」などと呼ぶことは、従仏では決してなく、これこそ仏に背く仏敵である。「日蓮に従う」とは、日蓮大聖人の仰せどおり、寸分の狂いもなく実践することである。

日蓮大聖人は、お弟子の曾谷入道殿が、観心本尊抄（二四九㌻）の「一品二半よりの外は小乗教・邪教・未得道教・覆相教と名く」との文を曲解し、「迹門不読」の見解を立てたときに、四菩薩造立抄（九八九㌻）において、それを厳しくいましめられ、次のようにいわれている。「私ならざる法門を僻案せん人は偏に天魔波旬の其の身に入り替りて人をして自身ともに無間大城に堕つべきにて候つたなしつたなし、此の法門は年来貴辺（富木殿）に申し含めたる様に人人にも披露あるべき者なり総じて日蓮が弟子と云って法華経を修行せん人人は日蓮が如くにし候へ」また、種種御振舞御書には「日蓮を用いぬるともあしくうやまはば国亡ぶべし」とも仰せられている。

このようにみて、現在、日蓮大聖人の仰せのごとく、広宣流布の実現に向かって、あらゆる障魔を乗り越えて進んでいるのが、日蓮正宗創価学会なのである。まさに、われわれこそ従仏ではないか。そうであれば、身意泰然、快得安穏の真実の幸福境涯を得ることは、絶対であると確信すべきである。

次に無量義経の「険逕を行くに留難多きが故に」との文であるが、これは、爾前教では留難が多いということ

である。すなわち、留難多き人生のなかを、さまよい行くしかないのである。

すなわち、天上界であっても五衰を受けるし、どんなにいま幸せであっても、日本の国が戦争で他国から侵逼されたらどうするのか。年をとったらば、あるいは死んだ場合どうするか等々、考えてみれば、まことに留難多き人生である。それに対し、われわれは南無妙法蓮華経と唱えることによって変毒為薬ができ、宿命転換ができ、罰即利益に変えていけるのである。これほどの幸せはないではないか。これを確信したときに、その人は、身意泰然、快得安穏の人といえるのである。すなわち、我此土安穏なのである。それを確信するか、しないかが、人生の一切の幸不幸の決定線になる。まことに信心の究極はそれしかないのである。

第四　得仏法分の事

本文

第四得仏法分の事

御義口伝に云く仏法の分とは初住一分の中道を云うなり、迹門初住本門二住已上と云う事は此の分の字より起るなり、所詮此の分の一字は一念三千の法門なり其の故は地獄は地獄の分で仏果を証し乃至三千の諸法已已の当体の分で仏果を証したるなり真実の我等が即身成仏なり、今日蓮等の類南無妙法蓮華経と唱うる分で仏果を証したるなり、分とは権教は無得道・法華経は成仏と分つと意得可きなり、又云く分とは本門寿量品の意なり已已本分の分なり、惣じて迹門初住分証と云うは教相なり真実は初住分証の処にて一経は極りたるなり。

語訳

得仏法分　譬喩品（一九四ページ）に「今日乃ち知んぬ。真に是れ仏子なり。仏の口より生じ、法化より生じて、仏法の分を得たり」とある。

初住一分の中道　当体義抄（五一三ページ）にいわく「一法の蓮華に於て三の草華を分別し三乗の権法を施し擬宜誘引せしこと四十余年なり（乃至）法華経に至って四味三教の方便の権教・小乗・種種の草華を捨てて唯一の妙法蓮華を説き三の華草を開して一の妙法蓮華を顕す時、四味・三教の権人に初住の蓮華を授けしより始めて開近顕遠の蓮華に至って二住・三住乃至十住・等覚・妙覚の極果の蓮華を得るなり」と。ここで仏法の分を得たというのは、迹門の初住の境涯において、中道の悟りの一分を得たということである。迹門の開三顕一において初住の境涯、本門の開近顕遠に至って二住以上の境涯に昇進するという立てわけは、この分の字より分別されるのである。

分とは権教は無得道・法華経は成仏と分つと意得可きなり　この分は、また、権教においては成仏することはできない、しかして南無妙法蓮華経のみ成仏の直道であると、きびしく分別する意味なのである。

分とは本門寿量品の意なり己己本分の分なり　分とは本門寿量品文底秘沈の南無妙法蓮華経である。この分は、己己本分というときの分の意である。一切法の本分、生命の本分とは南無妙法蓮華経以外にないのである。

迹門初住分証と云うは教相なり真実は初住分証の処にて一経は極りたるなり　迹門の開三顕一の法門を聞いて、初住の境涯において、中道の悟りの一分を得たというのは、文上教相の所談である。さて、文底観心に約すれば、じつは寿量品の「我本行菩薩道」（五〇〇ページ）の本因初住の文底において、究極の悟りを得ているのである。また、初住とは不退地であり、信心に約せば決意ということである。その信心によって、我即南無妙法蓮華経の当体の仏であると悟るのである。

通解

ここは、前項の「身意泰然、快得安穏」の次の「今日乃ち知んぬ。真に是れ仏子なり。仏の口より生じ、法化より生じて、仏法の分を得たり」のところである。

御義口伝には、次のように仰せである。

この「仏法の分」とは、舎利弗が迹門の開三顕一の説法において、中道の悟りの一分を得て、初住の位にのぼったということである。迹門において初住の位、本門の開近顕遠に来至して二住已上の位ということは、この譬喩品において「仏法の分を得たり」ということから、分別されてくるのである。

所詮（ここでは一分を得たとあるが）、この分の一字は中道、一念三千の法門のことである。そのゆえは、地獄は地獄の当体の分際において仏果を証得するのであり、かように、三千の諸法はすべて己己の当体の分において仏果を証得したのである。これこそ真実の我らの即身成仏なのである。今、日蓮大聖人およびその門下は、南無妙法蓮華経と唱えるとき、その当体の分において仏果を成ずる、即身成仏するのである。

また、「分」とは、方便権教は、無得道、南無妙法蓮華経によってのみ成仏できるのであると、きびしく分別することと心得るべきである。

また、「分」とは、本門寿量品の文底に秘沈せられたる南無妙法蓮華経のことである。己己本分の分という意

味になるのである。

総じて、迹門の初住位において一分の証得というのは、文上教相の所談であり、真実の文底観心の意では、本因初住位において、妙法蓮華経の究極の悟りを得るのである。

講義

「仏法の分を得たり」とあるが、舎利弗は迹門の略開三顕一においては、初住の境涯――妙法蓮華経の一分の境涯を得たとされている。迹門においては、初住の境涯を得、本門において、二住乃至等覚、妙覚とのぼっていくのである。

したがって釈迦仏法では、たとえそれが法華経であっても、次第に位が登って仏になるという考え方が支配的である。たしかに法華経迹門では、爾前経の考え方をうち破って、一切衆生にことごとく仏性があることを説き明かしている。そして、いままで永不成仏とされていた二乗に、劫、国、名号等の記別を授けている。しかし、これは、あくまで未来における成仏を約束したのであって、成仏の可能性を説いたままでである。すなわち、一切衆生の心中には、もともと仏性があるという原理を説き明かしたにすぎない。そして、現実に仏果を証得するには、二住、三住、十住……十地、等覚と昇進していく以外にないとされ、それは本門寿量品によって証得することを説いている。しかも、経文の面にも、また天台大師の諸文にも、等覚位までしか説いていないのである。こ

れは釈迦仏法では、いまだ、仏の境涯というものが、歴劫修行してようやく到達できる特別の境涯とされているからである。

したがって、法華経に十界互具が説かれているというのも、即身成仏が明かされているというのも、また法華経にきて、直達正観が説かれているというのも、一つには爾前経に相対して言っているのであり、もう一つには、日蓮大聖人の仏法の立ち場から判じて、そのように仰せられているのである。

観心本尊抄（二四九ページ）にいわく、「所謂一往之を見る時は久種を以て下種と為し大通前四味迹門を熟と為して本門に至って等妙に登らしむ」と。

これに対し、日寛上人の文段には、戸田城聖会長の解説によれば、次のようにある。

「此の御文は釈迦在世の正宗を一往として明かされているのであって法華経本門十四品を見る時は五百塵点劫すなわち久遠において下種を受けた輩が大通智勝仏に会い、あるいは十六の王子に結縁し、または法華経以前の阿含、方等、般若、華厳等の前四味を聴聞し或は迹門に至って久遠の下種がだんだんと熟して来て本門に至って等覚の位に登ったのである。文上の意としては本門ではただ等覚に登っただけの利益であったが、文底の眼開けてみれば『等覚一転名字妙覚』して名字妙覚の位に登られたのである。等正覚を成じた仏が久遠の下種を感得し、久遠以来の師弟の契を覚悟して、その発心が皆事の一念三千、南無妙法蓮華経にあったことを知って直ちに名字妙覚の位を成じたのである。ゆえに本門に至って等妙に登らしむと仰せあるのである」

この文段のなかに「文底の眼開けてみれば『等覚一転名字妙覚』して名字妙覚の位に登られたのである」とあ

るが、これによれば、釈迦仏法の範囲では、真実の即身成仏はない。あくまでも大聖人の仏法によって、初めて事実の上に即身成仏、直達正観が明らかにされているといえるのである。ゆえに釈尊在世の衆生が、妙覚位すなわち仏界の位に登ったというのは、大聖人の仏法によって判じて、そのようにいえるのである。

等覚一転名字妙覚というのは、釈尊の法華経では、等覚位までしか説いていないし、その位までしかいかないのである。なぜなら、三世十方の諸仏ことごとく、南無妙法蓮華経によって妙覚の仏になるのであって、それを説かない法華経では等覚位まで登るとしかいいようがないのである。しかし、等覚位までいけば、一転して南無妙法蓮華経がわかるのである。自然に湧現するとでもいいえようか。

ちょうど、信濃町の駅までおそわってくれれば、あそこが学会本部だとわかるようなものである。その場合、信濃町の駅が等覚で、本部が妙覚である。信濃町の駅まで教えるのが釈迦仏法、本部を直接教えてくれるのが大聖人の仏法なのである。釈尊には説く資格がないから最後までは説かないのである。

または、大学までいかせるのが釈迦仏法であり、大学を卒業するということは、認識の訓練、人格の形成を行ない、社会人として社会に貢献できる人材をつくるということである。それをぜんぶ含めて、すぐさま社会人として、社会にも貢献でき、人類にも貢献でき、自分自身もゆうゆうと価値創造していくことを直接に教えるのが、大聖人の仏法である。

大学までいって、様々な学問を学び、一転して、りっぱな社会人として立つことが、等覚一転名字妙覚の例ともいえよう。

真実は初住分証の処にて一経は極りたるなり

日寛上人は三重秘伝抄に、開目抄（一八九㌻）の「一念三千の法門は但法華経の本門・寿量品の文の底にしづめたり」の文をうけて、いったいどの文底なのかを述べられて、「聞いて能く之を信ぜよ是れ憶度に非ず、師の曰く『本因初住の文底に久遠名字の妙法・事の一念三千を秘沈し給えり』云云、応に知るべし後々の位に登るは前前の行に由るなり云云」（富要集第三巻五〇㌻）と説かれている。

初住とは不退転の位である。釈尊は、自分が仏になる前に、菩薩道を行じたのだと説いている。いわゆる寿量品の「我本行菩薩道」の文である。その我本行菩薩道の初住のとき、すでに、不退の決意がかたまり、仏になることが決定されていたのである。では、いったいその初住に登る源泉の力はなんであったか。こうなると、もはや釈迦仏法では説明できない。初住から仏になる過程は一往、釈迦仏法で説明しえても、いったい、いかなる仏にあい、なにを対象に、初住に登ることができたのかを説明できない。それこそ、その源泉は、南無妙法蓮華経であり、久遠元初自受用報身如来なのであることを大聖人の仏法によって知りうるのである。ゆえに撰時抄文段（富要集第四巻三四六㌻）にいわく「五百塵点劫は本果の所証なり、復倍上数は本因の初住なり、亦其の復倍上数の当初は本因の所証の妙法なり」と。この「本因の所証」とは南無妙法蓮華経である。このように本因初住の文底に事の一念三千の南無妙法蓮華経が秘沈しているがゆえに「真実は初住分証の処にて一経は極りたるなり」と仰せられているのである。

初住とは、いまでいえば、絶対に退転しないという決意であり、信心となろう。真に大御本尊を絶対なりと確信し、一生涯大御本尊を持ちぬこう、広宣流布に向かって進んでいこうと決意したときに、すでに、絶対に崩れることなき幸福境涯が、その一念の生命のなかに築かれているのである。これが「一経は極りたるなり」の意味である。そこには、一切の功徳が雲集(うんじゅう)してくることは絶対である。わが一念の生命に妙法の境涯があらわれれば、あとは天台の「綱維(こうい)を提ぐるに目として動かざること無きが如し」の説のごとく、一切の福運、一切の未来の果報は、ぜんぶ、そこに含まれるのである。ゆえに、十字御書(一四九二ページ)にいわく「今日本国の法華経をかたきとしてわざわいを千里の外よりまねきよせぬ、此れをもってをもうに今又法華経を信ずる人は・さいわいを万里の外よりあつむべし」と。

第五　而自廻転の事

本文

第五而自廻転の事　記の五に云く或は大論の如し経に而自廻転と云うは身子の得記を聞きて法性自然にして転じ因果依正自他悉く転ずるを表すと。

御義口伝に云く草木成仏の証文に而自廻転の文を出すなり是れ一念三千の依正体一の成仏を説き極めたるなり、草木成仏の証人とは日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るを指すなり、廻転とは題目の五字なり自とは我等行者の事なり記の五の釈能く能く之を思うべし云云。

語訳

而自廻転　譬喩品（二〇五ページ）の「爾の時に四部の衆、比丘、比丘尼（乃至）摩睺羅伽等の大衆、舎利弗の仏前に於いて、阿

縛多羅三藐三菩提の記を受くるを見て、心大いに歓喜し、踊躍すること無量なり。各各に、身に著けたる所の上衣を脱ぎて、以って仏に供養す。釈提桓因、梵天王等、無数の天子と、亦天の妙衣、天の曼陀羅華、摩訶曼陀羅華等を以って仏に供養す。所散の天衣、虚空の中に住して自ら回転す」の部分である。

大論　竜樹菩薩の大智度論（百巻）のこと。

身子の得記　舎利弗が譬喩品（二〇〇ページ）で成仏の記別を与えられたこと。「舎利弗、汝未来世に於いて、無量無辺不可思議劫を過ぎて、若干千万億の仏を供養し、正法を奉持し、菩薩所行の道を具足して、当に作仏することを得べし。号を華光如来、応供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏、世尊と曰い、国を離垢と名づけん」とある。

法性自然にして転じ　法性とは悟りの境涯、または生命、一念、心性、境涯の意味。自然にしてとは、ありのままの、無作の姿で、転ずるとの意。すなわち、領解、歓喜して、我が生命がありのままで変わっていくことである。

因果依正自他悉く転ずる　因果が転ずるとは、悪因、悪果が、善因、善果と変わっていくのである。依正が転ずるとは、正報を一念とすれば、依報である肉体も変わっていく。また、我が生命が正報であり、環境は依報である。依正不二の原理により、環境もまた変わっていくのである。自他とは、自らの生命に対して、他とは環境である。このように、我が生命の境涯が変わっていくならば、因果も、依正も、自他も、ことごとく、ありのままの姿で変わっていくのである。

草木成仏　草木や土砂等の非情の物質が成仏することをいう。また、依正についていえば、依報の成仏である。日寛上人は、諸御書を案ずるに、草木成仏に二意ありとし、一に不改本位の成仏、二に木画二像の成仏であると、観心本尊抄文段（富要集第四巻二三五ページ）に説かれている。一に不改本位の成仏とは、草木の全体がそのまま本有無作の一念三千即自受用身の覚体である。草木成仏口決（一三三九ページ）にいわく「口決に云く『草にも木にも成る仏なり』云云、此の意は草木にも成り給へる寿量品の釈尊なり」三世諸仏総勘文教相廃立（五七四ページ）にいわく「春の時来りて風雨の縁に値いぬれば無心の草木も皆

悉く萌え出生して華敷き栄えて世に値う気色なり秋の時に至りて月光の縁に値いぬれば草木皆悉く実成熟して一切の有情を養育し寿命を続き長養し終に成仏の徳用を顕す之を疑い之を信ぜざる人有る可しや無心の草木すら猶以て是くの如し何に況や人倫に於てをや」御義口伝（七八四ページ）にいわく「森羅万法を自受用身の自体顕照と談ずる故（乃至）桜梅桃李の己己の当体を改めずして無作三身と開見すれば是れ即ち量の義なり」と。三世諸仏総勘文抄にあるように、無心の草木でありながら、その体は本覚の法身であり、その時節を違えず花咲き実の成る智慧は本覚の報身であり、有情を養育するは本覚の応身である。これを不改本位の成仏という。二に木画二像の成仏とは、四条金吾釈迦仏供養事（一一四五ページ）にいわく「国土世間と申すは草木世間なり、草木世間と申すは五色のゑのぐは草木なり画像これより起る、木と申すは木像是より出来す、此の画木に魂魄と申す神を入るる事は法華経の力なり天台大師のさとりなり、此の法門は衆生にて申せば即身成仏といはれ画木にて申せば草木成仏と申すなり」木絵二像開眼之事（四六九ページ）にいわく「法華経を心法とさだめて三十一相の木絵の像に印すれば木絵二像の全体生身の仏なり、草木成仏といへるは是なり」また、観心本尊抄（二四六ページ）にいわく「詮ずる所は一念三千の仏種に非ずんば有情の成仏・木画二像の本尊は有名無実なり」さて、ここで「草木成仏の証文に而自廻転の文を出すなり」と仰せられるのは、「法性自然にして転じ因果依正自他悉く転ずる」ということについてである。すなわち、正報とともに依報も変わっていくということは、正報の成仏により、非情の草木等の依報も成仏するのである。また、たとえば、一枚の紙が御本尊にかわり、楠の板が日蓮大聖人の御生命を具現する大御本尊へと変化することは、而自廻転であり、草木成仏である。

草木成仏の証人とは日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るを指すなり　日蓮大聖人のお立ち場に約せば、日蓮大聖人が御本尊をあらわされたことは、草木成仏の証人となるのである。われわれの信心に約せば、もともと非情の草木である御本尊に南無妙法蓮華経と唱えて、われわれが成仏するということは、御本尊に仏の生命がそなわっているからであり、これは草木

成仏の原理である。ゆえに、草木成仏の証人というのである。

廻転とは題目の五字なり　廻転とは、信心・生活に約せば、宿命転換である。境涯を開いていくことも廻転である。その廻転、宿命転換は、南無妙法蓮華経の五字七字の題目の力であり、御本尊のお力である。すなわち、廻転の根本の原動力は、南無妙法蓮華経なのである。

自とは我等行者の事なり　廻転、宿命転換をなしうるのは、われわれ南無妙法蓮華経と唱える、日蓮大聖人の門下であり、信ぜざる衆生は、理においては仏の生命を具していても、それを顕現し、宿命転換することはできないのである。また、廻転、宿命転換するのは、あくまでも自分であり、正報・主体である。環境を変えていくのも自分であり、自分の一念である。また、自分の一念により、信心により、宿命転換し、環境を変えていけるのは、われわれ大御本尊を信受する者のみのなしうることなのである。

通解

譬喩品（二〇四ページ）に「爾の時に四部の衆、比丘、比丘尼（乃至）摩睺羅伽等の大衆、舎利弗の仏前に於いて、阿耨多羅三藐三菩提の記を受くるを見て、心大いに歓喜し、踊躍すること無量なり。各各に、身に著けたる所の上衣を脱ぎて、以って仏に供養す。釈提桓因、梵天王等、無数の天子と、亦天の妙衣、天の曼陀羅華、摩訶曼陀羅華等を以って仏に供養す。所散の天衣、虚空の中に住して自ら廻転す」とある。

妙楽の法華文句記の五には次のように釈している。これについては、あるいは竜樹の大智度論に説かれている

とおりであって、譬喩品の文に而自廻転（自ら廻転す）というのは、身子（舎利弗）が華光如来の記別を受けたのを見て、一会の衆がまた領解、歓喜して、そのままの姿でその一念、境涯が転じ、しかして因果も悪因悪果から善因善果へ、依正も、自他も、ことごとく変わっていく姿を表わすのであると。

御義口伝には、次のように仰せである。草木成仏の証文として、この而自廻転の文を出すのである。これは、一念三千の依報、正報一体の成仏の原理を説ききわめているのである。草木成仏の証人とは、日蓮大聖人およびその門下のわれわれであり、日蓮大聖人が非情の草木を仏の当体である大御本尊にあらわされたこと、そして、それに向かって、われわれが南無妙法蓮華経と唱えて、成仏することは、草木成仏の原理によるのである。廻転、宿命転換は、南無妙法蓮華経の、五字七字の題目の力、御本尊のお力によるのである。自とはわれら、御本尊を信じて題目を唱える者のことである。記の五の釈を、よくよく考えるべきである云云。

講義

「而自廻転」をひと口にいえば、宿命転換ということである。宿命について一言すれば、人は、よく自らの不幸を、「宿命だから仕方がない」という。未来をも、ただ「運命にまかせるだけだ」といったりする。多くの人々が、現実を雄々しく切り開く気力を持たぬ。あたかも夕日が沈むがごとく、花がしぼむがごとく、現実の流れにただ流されゆき、小さな自分の殻のなかに閉じこもってしまう消極的な生き方をしようとする。しかも、それで

いて、望むところ多く、また悩みに耐えかねて、愚癡多き人生を送るものだ。一方では「宿命だから仕方なし」とあきらめ、また一方では、たえず現実を嘆き、不平不満の毎日を送るという、まことに矛盾した姿が、大部分の人々の姿ではなかろうか。

しかし、人々の行動をば虚心にみるならば、すべての人は、自からの宿命を打破し、幸福な生活を築こうと、本然的に願って、知ると知らざるとにかかわらず、それに向かって必死の思いで努力しているのである。その人間性を否定し、宿命によって人間性をしばりつけて、あきらめの思想を植え付けようとする低級思想こそ、まさにアヘンのごとく、人間生命をむしばむ、最も恐るべきものである。もしも、宿命というものが、すべて決まっていて、絶対に変えられないものであれば、われわれは、なんの創造の喜びがあろうか。現実を強く、正しく生きる価値があるといえようか。汗水を流して努力する必要があろうか。また、そのような人生がなんで価値があろうか。どうして生命が尊厳といいえようか。

宿命とは、現在までの原因のいっさいの集積である。ゆえに宿命の基調となっているものは、因果の法則である。そう考えれば、現在もまた、宿命をつくっているといえる。しかして、宿命は、悪いものだけをいうのではない。宿命には、よい宿命と悪い宿命と両方がある。われわれが信心できたということは、最大のよい宿命ではないか。諸法実相抄（一三六二㌻）にいわく「まことに宿縁のをふところ予が弟子となり給う」云云と。

よい宿命については、しばらくこれを置く。悪い宿命とは、過去におけるあやまった生活、すなわち邪宗を根本とした貪、瞋、癡の三毒そのままの生活が、生命に滲みこんでいき、その結果、またあやまれる生活を送り、

さらにそれが生命に染まっていくという工合に、流転してつくられた、生命のクセである。これが、自分の心や、肉体や、行動や、さらにまた環境にまで影響して、不幸な事態を招くのである。

もし、信心がなければ、このような宿命を打破することができず、大きく宿命によって決定づけられてしまう。宿命といっても、浅いものもあり、深く生命に根ざしたものもある。表面的な宿命は、人の努力や研究心によって変えられていくであろう。また、先ほども述べたように、細かい一つ一つの行動まで、すべて決まっていて動かないというものではない。しかし、生命の奥深く染まりついた宿命というものは、仏法によらなければ解決できないのである。あたかもそれは、大きい道路があって、その道路の範囲内で右へ寄ったり、左へ寄ったりすることはできるが、それはあくまでも道路の中のことであって、大きく方向を変え得るものではないのと同様である。

大聖人は、開目抄（二三一㌻）に心地観経を引いて「未来の果を知らんと欲せば其の現在の因を見よ」と示され、観心本尊抄（二四六㌻）には「釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華経の五字に具足す我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り与え給う」と仰せられているのである。われわれが、大御本尊を根本とした場合には、未来の果はぜんぶ現在の因に具足し、因果倶時の原理により、未来を自在に左右し、決定しうるのである。宿命に流されたり、左右されたりせず、洋々たる人生を闊歩することができるのである。

ゆえに、日寛上人は「故に此の本尊の功徳無量無辺にして広大深遠の妙用有り、故に暫くも此の本尊を信じて南無妙法蓮華経と唱うれば則ち祈として叶わざる無く・罪として滅せざる無く・福として来らざる無く・理とし

て顕われざる無し」（観心本尊抄文段の首文）と仰せられているのである。無始以来の宿業を打開し、ことごとくそれらを変毒為薬し、無量の福運を積むとは、まさにこれ而自廻転ではないか。

次に「一念三千の依正体一の成仏」ということであるが、依正不二については、序品のところで述べたとおりである。依正ということと一念三千の関係は、五陰世間、衆生世間が正報で、国土世間が依報である。したがって依正不二ということは、三千世間も一念に収まるという一念三千の原理によって、初めていい得るのである。

瑞相御書（一一四〇㌻）にいわく「夫十方は依報なり・衆生は正報なり譬へば依報は影のごとし正報は体のごとし・身なくば影なし正報なくば依報なし・又正報をば依報をもって此れをつくる」と。この文によって、正報があって初めて依報があり、また依報が正報をつくるという相関関係が明確にわかろう。自己と環境というものは、互いに交流しあい、影響しあっていることを知るべきである。環境をいかに整備したらよいかを問題にし、そこから人間の幸福の向上をはかろうとするのが、政治であり、経済であるとすれば、どのようにして、いかなる環境にも負けず、それを打開していくところの自己を確立していくか、これを問題にし、説ききったのが、真の仏法である。

環境が自己に影響を与えることは当然のことであるが、いま、しばらくこれを置く。大事なことは、自分自身が変われば、環境のいっさいが変わる。自分自身が弱ければ、環境に支配され、強ければ環境を支配する。いま、依正不二ということを、かかる観点から考えてみよう。

たとえば、いま自分が喜んでいるとすると、その喜びは顔にも出、また、からだ全体が軽々と、浮き浮きした

ような感じがする。そしてその喜びは、たんに自分だけではなく、他人にも影響を与える。さらに、国土にも、全世界にも影響していくのである。自分が嬉しいときには、一切万物に、その喜びの波動が及び、悩み苦しんでいるときには、何ごとにも腹が立ったり、すべてが地獄の苦しみの姿になってくる。

また、自分の境涯が開くと、自然に友だちに対する見方も変わり、おのずと接する態度も変わってくる。いままで自分のことでせいいっぱいであったのが、他人をも幸福にしてあげようという心になる。また、自分の苦しみの原因となっていた悪条件が、自分が成長する土台ともなるのである。自分の境涯が開くと、たしかに世界が開けてくる。ゆうゆうたる人生行路となる。行くところ行くところが、常寂光土となるのである。自らが、力強い自己を妙法によって確立し、これによって一切の環境を変え、環境を支配していくことが、やはり「而自廻転」なのである。さらには、大きく、派閥を団結に変えるのも、戦争を平和に変えるのも、ぜんぶ妙法の力によるのであり、「而自廻転」なのである。

草木成仏の証文に而自廻転の文を出すなり

草木成仏については語訳に示したとおりである。もし、これを科学的にいえば、木がパルプになり、紙となる。同じ木であっても、ある場合にはイスに変わり、机に変わり、建て物に変わる。同じ鉄であっても、原子爆弾の部分に変わり、または自動車の部分に変わる等、あらゆる変化をするのである。しかも、そのように変化するのは、もともとその木なり、鉄なりに、そのような働きをするという本質があったのである。そして、それ

は、その本質を見きわめた人によって、縁によって、どのようにも変えられるのである。ゆえに「法性自然にして転じ」ということになるのである。

もったいないことではあるが、一枚の紙が仏に変わる。すなわち御本尊としてあらわされる。また、楠（くすのき）の板が大聖人の御生命体の力に変わってしまう。生命の奥底を知りつくされた仏様が、もともとあったところの南無妙法蓮華経という宇宙の根源の大生命を、事実のうえに顕わされたのである。これまた「而自廻転」といえるゆえんである。

第六　一時倶作の事

本文

第六一時倶作の事

御義口伝に云く一時とは末法の一時なり倶作とは南無妙法蓮華経なり倶とは畢竟住一乗なり、今日蓮等の類いの所作には題目の五字なり余行を交えざるなり、又云く十界の語言は一返の題目を倶作したり、是れ豈感応に非ずや。

語訳

一時倶作　譬喩品（二〇五ページ）に「諸天の伎楽百千万種、虚空の中に於いて一時に倶に作し、衆の天華を雨して是の言を作さく」とある。

一時　仏法において論ずる「一時」とは、衆生が仏の出現を求め、その機根を感じて、仏がそれに応じて出現する時をいうのである。この一時とは、正しく末法をさしている、と日蓮大聖人は仰せられるのである。

倶作とは南無妙法蓮華経なり　末法において倶に作すところの所作とは、南無妙法蓮華経である。一切の余行を雑えず、但南無妙法蓮華経と唱え、また、南無妙法蓮華経をもって方便権教を折伏するのである。また、われわれがなすところのあらゆる生活活動、文化活動は、南無妙法蓮華経を根幹とするのであり、一切が妙法のあらわれであり、開花なのである。

倶とは畢竟住一乗なり　神力品（五八四ページ）には「日月の光明の、能く諸の幽冥を除くが如く、斯の人世間に行じて、能く衆生の闇を滅し、無量の菩薩をして、畢竟して一乗に住せしめん」とある。御義口伝の神力品「第八畢竟住一乗○是人於仏道決定無有疑の事」（七七二ページ）にいわく「御義口伝に云く畢竟とは広宣流布なり、住一乗とは南無妙法蓮華経の一法に住す可きなり是人とは名字即の凡夫なり仏道とは究竟即なり疑とは根本疑惑の無明を指すなり、末法当今は此の経を受持する一行計りにして成仏す可しと定むるなり云云」と。倶にとは、末法広宣流布の時において、すべて、但南無妙法蓮華経の一法によって、成仏することができるからである。

余行を交えざるなり　本因妙抄（八七七ページ）にいわく「文の底とは久遠実成の名字の妙法を余行にわたさず直達の正観・事行の一念三千の南無妙法蓮華経是なり」と。また上野殿御返事（一五四六ページ）にいわく「今末法に入りぬれば余経も法華経も詮せんなし、但南無妙法蓮華経なるべし、かう申し出だして候も・わたくし（私）の計にはあらず、釈迦・多宝・十方の諸仏・地涌千界の御計（交）なり、此の南無妙法蓮華経に余事をまじへば・ゆゆしきひが事（僻）なり」と。

感応　声のひびきに応ずるように、天月の清水に映ずるように、衆生の機感と仏の応用とが、たがいに通じ融合すること。

通解

これは、前項の「而自廻転」の次に「諸天の伎楽百千万種、虚空の中に於いて一時に倶に作し、衆の天華を雨らして……」とあるところの御義口伝である。この文について、次のように仰せである。

一時とは末法のことを指しているのである。倶作とは南無妙法蓮華経をいうのである。そして「倶」というのは神力品の「畢竟住一乗」の文にあたるのである。すなわち「倶に」というのは、末法広宣流布の時において、すべて、但南無妙法蓮華経の一法によって成仏するのである。今、日蓮大聖人およびその門下の所作は、すべて南無妙法蓮華経を中心として、一切の余行はまじえないということである。また仰せられるには、十界の森羅万象の語言というものは、一返の題目、南無妙法蓮華経を根底としているのである。したがって、わわれれの題目というものは、大宇宙に遍満して感応していくのである。

講義

「一時」とは、午前一時とか午前二時とかいう一時ではない。仏法の場合の一時とは、語訳に示したとおりである。そしてこの譬喩品の一時倶作の一時とは、末法ということなのである。末法において、全民衆は、御本仏の

出現を待望し、それに応じて日蓮大聖人は出現され、南無妙法蓮華経が広宣流布されるからである。

「畢竟住一乗なり」の畢竟とは、広宣流布であり、御本仏日蓮大聖人の究極目標である全民衆救済であり、永遠にくずれない仏国土の現出である。住一乗とは、いっさいの人々が題目を唱え、妙法を根底として幸福な生活をしきっていくことである。

十界の語言は一返の題目を倶作したり

理によって論ずるならば、いっさいの人々の話している言々句々等も、ぜんぶ妙法の所作から出てくるものであるという意味である。泣くのも、騒ぐのも、笑うのも、講演するのも、みな妙法の作用からなっているのである。もし、信心に約せば、大御本尊を信じて南無妙法蓮華経と唱えることであり、また信心を根底としたいっさいの言々句々を意味する。

是れ豈感応に非ずや

文句の四には「相とは、四濁増劇して此時に聚在す。瞋恚増劇して刀兵起り、貪欲増劇して飢餓起り愚癡増劇にして疾疫起る。三災起るが故に煩悩倍隆に諸見転熾なり」とある。これは、貪、瞋、癡の三毒が、戦争を起こし、災難を招き、伝染病を蔓延させる等の根本であるとしている。自分の一念、一心が、いかに社会、国土に大なる影響を示しゆくかが、うかがえる御文である。

同じように、南無妙法蓮華経を根本としていけば、まさに「我此土安穏」の世界が築かれるのである。一念三千の法理によって、ぜんぶ南無妙法蓮華経を根本とした一念を宇宙に感応せしめるか、または悪心をもって宇宙に感応せしめるか、それによって世の中の状態が決定されることを、よくよく知らねばならない。

第七　以譬喩得解の事

本文

第七以譬喩得解の事　止観の五に云く智とは譬に因るに斯の意徴し有りと。御義口伝に云く此の文を以て鏡像円融の三諦の事を伝うるなり、惣じて鏡像の譬とは自浮自影の鏡の事なり此の鏡とは一心の鏡なり、惣じて鏡に付て重重の相伝之有り所詮鏡の能徳とは万像を浮ぶるを本とせり妙法蓮華経の五字は万像を浮べて一法も残る物之無し、又云く鏡に於て五鏡之れ有り妙の鏡には法界の不思議を浮べ・法の鏡には法界の体を浮べ・蓮の鏡には法界の果を浮べ・華の鏡には法界の因を浮べ・経の鏡には万法の言語を浮べたり、又云く妙の鏡には華厳を浮べ・法の鏡には阿含を浮べ・蓮の鏡には方等を浮べ・華の鏡には般若を浮べ・経の鏡には法華を浮ぶるなり、順逆次第して意得可きなり、我等衆生の五体五輪妙法蓮華経と浮び出でたる間宝塔品を以て鏡と習うなり、信謗の浮び様能く能く之を案ず可し自浮自影の鏡とは南無妙法蓮華経是なり云云。

語訳

以譬喩得解　「譬喩を以って解することを得ん」と読む。譬喩品（二〇七ページ）に「爾の時に仏、舎利弗に告げたまわく、我先に諸仏世尊の種種の因縁、譬喩言辞を以って、方便して法を説きたもうは、皆、阿耨多羅三藐三菩提の為なりと言わずや。是の諸の所説は、皆、菩薩を化せんが為の故なり。然も舎利弗、今当に復譬喩を以って、更に此の義を明かすべし。諸の智有らん者、譬喩を以って解することを得ん」とある。

智とは譬に因るに斯の意徴し有り　智とは、譬喩によって、仏の教えの真意を明らかにできる智慧をいうのである。

鏡像円融の三諦　鏡像円融の三諦の譬喩は、伝教大師が入唐の際、道邃より伝えられたといわれる。鏡が物の像をうつすことを、円融の三諦の譬えとするのである。すなわち、鏡が万象の像を映すが、その物を前におかなければ像は映らないのである。種々の万象の姿を映すことは仮諦にたとえられ、何物も映していない状態は空諦にたとえられる。しかも、鏡それ自体は、本来、空諦でも仮諦でもなく、そのいずれにも偏らないのであり、これは中諦（中道）にたとえられるのである。しかして、この三諦は別々なものでなく、鏡と像との姿の中に、円融しているのであるから、円融三諦のことをたとえているのである。摩訶止観第一にいわく「譬へば明鏡の如し、明は即空に譬へ、像は即仮に喩へ、鏡は即中に喩う。合せず散せず、合散宛然たり」

自浮自影の鏡　伝教大師の修禅寺決にいわく「玄師の伝に云く、自影自浮の大鏡之れ有りて、一念三千の観を成す、自影自浮とは釈迦如来大蘇の法華道場に於て智者大師の為に大鏡を授け一心三観一念三千を伝う、其の事鏡とは日光に向うの時十界の形像を現ず、一鏡に十界を現ず、故に一念三千の深義なり」と。鏡が森羅万象をその鏡面に浮かべるように、一心に十界

を現ずるという天台の観念観法をたとえたものである。いまでいえば、自分の像を写し出す鏡とは信心であり、究極は大御本尊をいう。大聖人の仏法においては、一心とは信心のことで、信心によっていっさいを見透していけることをいう。また、一心とは自受用身の一念の心法であり、即それは南無妙法蓮華経である。大御本尊によってわが生命が映し出され、そこに仏界が顕現されるのである。

此の鏡とは一心の鏡なり　自分の一心が鏡となり、いっさいが自分の心に映し出され、正しく判断することで、円融の三諦とは、円教たる法華経で説くところの三諦である。不次第の三諦、不縦不横の三諦、三一相即の三諦ともいう。これは別教で説く、隔歴の三諦、次第の三諦を破折して説いたものである。すなわち、別教などで説くような、空仮中の三諦が別々の隔歴の三諦ではなく、即空即中即仮という円融無礙の法門をいうのである。

順逆次第して意得可きなり　妙法蓮華経は、華厳経にも、阿含経にも、方等経にも、般若経にも説かれず、法華経にきて初めて説かれるのである。これは、説法の順序にしたがって相対的に判じていった場合である。こんどは逆に、絶待妙の立ち場から八万法蔵を判じていったときに、華厳も、阿含も、方等も、般若も、ことごとく妙法蓮華経の一法に収まるのである。ゆえに「妙の鏡には華厳を浮べ・法の鏡には阿含を浮べ・蓮の鏡には方等を浮べ・華の鏡には般若を浮べ・経の鏡には法華を浮ぶるなり」というのは、八万法蔵ことごとく妙法蓮華経であるという絶対妙の立ち場から論じているのである。説法の順序にしたがって相対的に判じた場合、また法華経から立ち還って絶待妙の立ち場で判じた場合、どのようになるかをよくよく心得べきである。

五体五輪　五体とは、両手、両足および頭である。五輪とは、地輪、水輪、火輪、風輪、空輪である。輪とは円満を表わす。また身体の各部分がまるいところから、身体を五輪ともいう。

宝塔品を以て鏡と習うなり　阿仏房御書（一三〇四㌻）にいわく「妙法蓮華経より外に宝塔なきなり、法華経の題目・宝塔な

り宝塔又南無妙法蓮華経なり」と。見宝塔品第十一は、当然、弘経の功徳の深重を説き、七宝の塔が大地から湧出し虚空に立つと説き、さらに、三箇の勅宣、六難九易、三変土田、二仏並座を示して流通をすすめている段であるが、観心より読めば、釈尊自身、己心に御本尊をえがき、生命哲学として説いた品といえよう。所詮「宝塔品を以て鏡と習う」の宝塔とは、御本尊と読むべきである。大御本尊こそ明鏡中の明鏡である。

通解

ここは、譬喩品（二〇七ページ）で、仏が舎利弗に向かい、「我先に諸仏世尊の種種の因縁、譬喩言辞を以って、方便して法を説きたもうは、皆、阿耨多羅三藐三菩提の為なりと言わずや。是の諸の所説は、皆、菩薩を化せんが為の故なり。然も舎利弗、今当に復譬喩を以って、更に此の義を明かすべし。諸の智有らん者、譬喩を以って解することを得ん」と述べたところである。

天台大師は、摩訶止観の第五に「智とは譬に因るに斯の意徴し有り――智とは、譬喩によってその真意を明らかにすることをいう」と述べている。

この文について、御義口伝には、次のように仰せである。

この文は、鏡像円融の三諦を伝えるのである。すなわち、摩訶止観に「譬へば明鏡の如し、明は即空に譬へ、像は即仮に喩へ、鏡は即中に喩う。合せず散せず、合散宛然なり」とあるように、鏡像をもって円融の三諦が説

明されているのである。円融の三諦とは、爾前でバラバラに説いた三諦ではなく、法華で、空仮中の三諦は相即(そうそく)して円融無碍(むげ)であり、一つであると説かれた三諦である。

総じて鏡像の譬えとは、自らの影を浮かべる鏡のことである。

この鏡とは、一心の鏡のことである。総じて鏡については、重重の相伝がある。つまるところ、鏡の能力、徳性というのは、あらゆるものの姿を浮かべるところにあるのである。妙法蓮華経の五字は、あらゆるものの姿をすべて浮かべて、一つの現象をも浮かべ残すということはないのである。

鏡には妙、法、蓮、華、経の五つの鏡があり、妙の鏡には法界の不思議を浮かべ、法の鏡には法界の体(たい)を浮かべ、蓮の鏡には法界の果を浮かべ、華の鏡には法界の因を浮かべ、経の鏡には万法の言語を浮かべるのである。

また、妙の鏡には華厳を浮かべ、法の鏡には阿含を浮かべ、蓮の鏡には方等を浮かべ、華の鏡には般若を浮かべ、経の鏡には法華を浮かべるのである。妙法蓮華経は、華厳、阿含、方等、般若のいずれにも説かれず、法華経にきて、初めて説かれるのである。これは説法の順序にしたがって、相対的に判じていった立ち場であるが、こんどは逆に、絶待妙の立ち場から八万法蔵を判じていったときに、華厳も、阿含も、方等も、般若も、ことごとく妙法蓮華経の一法に収まるのである。このように順逆次第して八万法蔵を判じていかなければならない。

われら衆生の五体五輪、すなわちこの身体が妙法蓮華経の当体であり、このわれら衆生の生命を映し出す鏡こそ、宝塔品において釈尊が己心(こしん)に描(えが)いた、そして大聖人がその儀式を借りて事実のうえにあらわされた、大御本尊なのである。

信心した場合、謗法した場合、どういう現象があるかということは、この鏡によってわかるのである。

結論すれば、自浮自影の鏡とは、南無妙法蓮華経の御本尊であると心得るべきである。

講義

鏡像の譬とは自浮自影の鏡の事なり此の鏡とは一心の鏡なり

自分の姿が、鏡を見て初めてわかると同様に、自分のいっさいの行動の鏡となるのは、いったいなんであろうか。ソクラテスは「汝自身を知れ」といった。彼は、自分の行動を映し出し、自分を正しい方向にもっていくのは、他ならぬ自分自身であることを強調したのだった。

また、これらのことは、現代の哲学者の多くの人々が主張するところでもある。実存主義者が、人間の主体性を回復しようとし、人間存在に偉大なる価値を見いだそうとしたのも、結局、自分自身こそ、自らの発展と向上の源泉であることに気づいたからであった。

天台大師もまた、一心三観を説き、観念観法により、自らの心を見つめ、そこに悟りを開こうとしたのであった。

しかしながら、これらの哲学は、現在のわれわれの幸福を築く、力ある思想とはなり得ないのである。自分自

身を見つめることが、いかに大事であるかを知り得ても、また自分を見つめることができたとしても、自分で自分をどうすることもできないのが現実ではないだろうか。ゆえにソクラテスは、毒杯をあおいで生命を断ち、また、実存主義は、いたずらに、人間の苦悩、悲哀の世界に閉じ込もり、力ある人間形成の哲学とはなり得ていない。また、天台の仏法も、もはや民衆を救う力のなくなっていることは、観念観法が、いかに現実不相応であるかという一事実をもってしても、明らかなことである。

自分をいかに見つめても、それはたんなる自己の分析にほかならない。そこになんの価値を生ずるかといいたい。たとえば環境に負け、また自己の弱さに引きずられている自分を見つめても、さらには、貪、瞋、癡の三毒に支配されている自分を見つめることができたとしても、そこに真に力強き自己の確立がなされなくては、環境を変え、また輝かしき人生航路を歩むことは不可能である。

しからば、力強い自己の確立は、いかにしてなし得るのであろうか。

観心本尊抄（二四〇ページ）にいわく「観心とは我が己心を観じて十法界を見る是を観心と云うなり、譬えば他人の六根を見ると雖も未だ自面の六根を見ざれば自具の六根を知らず明鏡に向うの時始めて自具の六根を見るが如し、設い諸経の中に処処に六道並びに四聖を載すと雖も法華経並びに天台大師所述の摩訶止観等の明鏡を見ざれば自具の十界・百界千如・一念三千を知らざるなり」と。

このなかの「観心とは我が己心を観じて十法界を見る是を観心と云うなり」の文について、日寛上人は、附文の辺と元意の辺があると述べられている。附文の辺からこの文の意味をとると、天台家の観心となり、自分の心

をよく観察して、自分の生命の中に起こる種々の現象を十界、百界千如、一念三千と悟ることである。元意の辺で論ずれば、大聖人の観心であり、「己心を観じて」とは、大御本尊を信ずることであり、「十法界を見る」とは、南無妙法蓮華経と唱えることである。

また「明鏡に向うの時」の明鏡とは、附文の辺からいえば、法華経や天台所述の摩訶止観であり、元意の辺からいえば、一念三千の南無妙法蓮華経の本尊なのである。

すなわち、大御本尊を信じ、唱題していくときに、自然と大御本尊とわが生命が境智冥合し、仏界という偉大なる生命力が湧現する。ここに強き自己が確立されるのである。

戸田城聖前会長は、「自己自身に生きよ」と叫ばれて、次のように申されている。

「ここにおいて、十界互具、一念三千を説く大仏法を信ずるわれわれは、日常の生活の責任が、ことごとく自分自身にあることを知らなくてはならない。貧乏して悩むのも、事業に失敗して苦しむのも、夫婦げんかをして悲哀を味わうのも、あるいは火ばちにつまずいて、けがをするのも、結局、それは皆自己自身の生活である。すなわち、自己自身の生命現象の発露である。かく考えるならば、いっさいの人生生活は、自己の生命の変化である。ゆえに、よりよく変化して、絶えず幸福をつかんでいくということが大事ではないか。

されば、自己自身に生きよ……いや、自己自身に生きる以外にはないのだ、ということを知らなければならない。あの人が、こうしてくれればよいのだとか、この世の中がこうであればしあわせなのだといって、他人に生き、対境に生きるということは間違いではないか。

しかし、人間の力というものは弱いものである。自己自身に生きていると、いかに力んでみても、他人に支配され、対境に支配されやすいものなのである。されば、いかに観念的に、自己自身、自ら生きていると力んでみても、それで、幸福であると言いえない場合が多い。そこで、自己自身の生命が、もっとも強く、もっとも輝かしく、もっとも幸福であるためには、十界互具、一念三千の仏法に生きる以外にはないと、吾人は信ずるものである。

これこそ、七百余年前に、日蓮大聖人が、大宇宙に対して呼号なされた大哲理である。われらを、幼稚なる者と呼んで、一念三千の珠を授けて、幸福境涯を獲得せしめるとおおせられたのは、このゆえで、その一念三千の珠とは、弘安二年十月十二日ご図顕の大御本尊であらせられる。されば、末代幼稚の輩は、この大御本尊を信じまいらせて、強くりっぱに、自己自身に生きようではないか」

いままでのところは、与えて、自分自身を見つめることができたとしてもという、仮定のもとに論じてきた。もしも、奪っていえば、大御本尊によらずしては、自分自身を見つめることは絶対にできないのである。

心地観経にいわく「過去の因を知らんと欲せば其の現在の果を見よ未来の果を知らんと欲せば其の現在の因を見よ」（開目抄下二三一ページ）と。すなわち、現在の瞬間のなかに、過去の因のいっさいが含まれ、また未来永劫のいっさいの果が含まれているのである。この瞬間瞬間の一念の生命を見極めていくのは、御本尊に照らされる以外には、絶対にでき得ないのである。

次に、鏡とは、また仏界である。この鏡に他の九界、すなわち「貪」あるいは「癡」あるいは「諂曲」ある

いは「平か」あるいは「喜び」あるいは「無常」あるいは「慈愛」等の生命活動が写し出されるのである。しかも日寛上人が「妙楽云く『仏界の心強きを名づけて仏界と為し、悪業深重なるを名づけて地獄と為す』云云、既に法華経を信ずる心強きを名づけて仏界と為す、故に知んぬ法華経を謗る心強きを悪業深重と号して地獄界と名づくるなり」（富要集第三巻二二ページ）と仰せらるるごとく、信心強盛であることが、仏界なのである。そうであるならば、信心こそ、われわれの行動の規範であり、鏡である。ゆえに「一心の鏡」の一心とは信心と訳すべきである。すなわち、一心とは、師に約し、自受用身の一念の心法となる。これ、事の一念三千の大曼荼羅と訳す。そして弟子に約して、大御本尊を信ずる心と約するのである。

われわれは、信心によって、仏智を現わす。心を澄まして、自己の生活をみつめることができる。いかなる逆境をも、変毒為薬し、人生を楽しみきっていくことができるのである。

更に、社会の現象、時代の潮流をも見極めていけるのである。これ、われわれの信心が、いっさいの鏡であるゆえんである。

妙の鏡には法界の不思議を浮べ・法の鏡には法界の体を浮べ・蓮の鏡には法界の果を浮べ・華の鏡には法界の因を浮べ・経の鏡には万法の言語を浮べたり・

これは、非常に深い哲学である。大御本尊が宇宙の実相それ自体であるということにもなり、宇宙の縮図ともいえるし、また大御本尊を鏡にして、いっさいの宇宙を見ていけば、ぜんぶ見透していけるということにもな

る。

妙の鏡には法界の不思議を浮べ

宇宙森羅万象の不思議というものは、いまの物理学者でも化学者でも、どうしても解明できないものがあるのである。妙法によって会得し、感得し、理解する以外にないものである。

ソ連のある科学者が、大宇宙の星を研究しながら、あまりの神秘さにうたれて「自分はキリストのような神を信ずることはしない。ただし、その不思議な、あまりにも不思議な、宇宙を形成している本質といったものを、神というのだったら、私は信ずる」と言ったことが、新聞に報道されていたが、実に宇宙それ自体というものは、不可思議そのものである。

法の鏡には法界の体を浮べ

宇宙森羅万象は、不思議であると同時に、厳然たる実体なのである。けっして曖昧なるものではない。あるいは、ぼうばくとしたものではなく、必ず体があるのである。人間とかイヌとか、ネコとか、あるいはチョウチョウにしても、ミミズにしても、法界の体であり、他と厳然と区別すべき、一定の法をもってつくられている。また、富士山という体、アルプスという体、また、揚子江だ、アマゾン川だというのも、法界の体であり、実に不思議な存在ではなかろうか。

蓮の鏡には法界の果を浮べ

一年三百六十五日とか、春夏秋冬とか、また国によっては熱国、寒国、小国、大国、また人間でも黒色人種だ、黄色人種だ、白色人種だというのも、ぜんぶ果である。これらは国土世間に約し、また衆生世間に約した果の姿である。

華の鏡には法界の因を浮べ

宇宙の森羅万象は、たえず変化している。しかも、それぞれ、それ自体のなかに、変化してそうなるべきもともとの因をもっているのである。椿の種からは桜の花は咲かない。一つぶの種のなかに、もうすでに、桜にはならず、椿になる原因をもっているのである。

経の鏡には万法の言語を浮べたり

やれ英語だ、日本語だ、中国語だ、ロシア語だというように、言語というものは実に多いが、まことに不思議なものである。日本人は、日本語を通して意思を通じあい、また、中国人は、中国語で意思を通じあうというように、それぞれ自国語で語りあう。しかし、翻訳さえすれば、言語の違う、国同士、人同士が、互いの意思の交換が自由にできるものだ。これは、言語の根源も南無妙法蓮華経であることを示すものと思う。

こんどは、個人にあてはめて論じてみよう。まず「妙の鏡には法界の不思議を浮べ」とは自分自身の生命というものは、実に不思議である。神が造ったものでも、キリストが造ったものでもない。物理学で造ったものでも決してない。これ、生命それ自体に備わる因果の理法によるものであり、随自意であり、自受用身なのである。

次に「法の鏡には法界の体を浮べ」とは、人皆それぞれ、その人自体の体があるという意味である。「A」という人がいたとする。「A」は歩いている時、坐っている時、食事をしている時もある。会社で仕事をしている時もある。常に、一瞬一瞬、変化した行動をとっている。にもかかわらず、「A」という人はあくまでも「A」であって、いかにその行動に変化があるといっても、それは「A」という人の行動の範疇であり、「B」という人になったり「C」という人になったりするのではない。このような「A」という人の本質は、「A」という一定の方程式であり、法なのである。

次に「蓮の鏡には法界の果を浮べ」とは、背が低いとか、なにを食べても太らないとか、いくら勉強しても頭がよくならないとか、病弱である等は、果を浮かべているのである。

「華の鏡には法界の因を浮べ」とは、どうして自分は、このような宿命をもって生まれてきたのだろうか、なぜこのように悩むのかといった、現在の果報の原因を浮かべることである。大御本尊に照らされてみれば、更に過去の因も、明々白々と浮かび出るのである。

「経の鏡には万法の言語を浮べたり」信心ある人の発言は、実にはっきりしてくる。言々句々というものは、その人の一心の発露であり、貪、瞋、癡の生命に支配された人の発言は、どんなに飾ろうと、そこにいやみがあ

る。ゆえに、信心なき人の言々句々は、そこに慈悲もなく、信念もなく、強い生命力の響きも感じない。また大御本尊を護持していても、信心がスッキリしないと、自分の発言がなんとなく確信がなく、響きがなく、リズムに合わないのである。

また、自分の行動も、信心しておれば、リズムに合致し、溌剌としてくる。逆に信心から遠ざかった場合には、なにをやっても、うまくいかないし、また、なんとなく空虚となってゆく。これは、経の鏡に自分のいっさいの言語、行動を浮かべていることである。

我等衆生の五体五輪妙法蓮華経と浮び出でたる間宝塔品を以て鏡と習うなり

戸田城聖前会長は、この宝塔品の儀式について、開目抄下の講義に、次のようにいわれている。

「迹門の流通分たる見宝塔品において多宝塔が虚空に起ち、釈迦・多宝の二仏が宝塔の中に並座し、十方分身の諸仏迹化他方の大菩薩・二乗・人天等がこれにつらなるいわゆる虚空会の儀式が説かれている、これは甚だ非科学的のように思われるが如何、然し仏法の奥底よりこれを見るならば極めて自然の儀式である、若しこれを疑うなら序品の時に既に大不思議がある、数十万の菩薩や声聞や十界の衆生が悉く集って釈迦仏の説法を聞くようになっているが、こんなことができるかどうか、拡声器もなければ、又そんな大きな声が出るわけがない況して八年間もそれが続けられるわけがない、即ちこれは釈迦己心の衆生であり釈迦己心の十界であるから何十万集ったと言っても不思議はない、されば宝塔品の儀式も観心の上に展開された儀式なのである。我々の生命には仏界

という大不思議の生命が冥伏（みょうぶく）している、此の生命の力及（およ）び状態は想像も及ばなければ筆舌にも尽（つく）せない、しかしこれを我々の生命体の上に具現することは出来る、現実に我々の生命それ自体も冥伏せる仏界を具現出来るのだと説き示したのが此の宝塔品の儀式である、即ち釈迦は宝塔の儀式を以て己心の十界互具一念三千を表しているのである、日蓮大聖人は同じく宝塔の儀式を借りて寿量文底下種の法門を一幅の御本尊として建立されたのである、されば御本尊は釈迦仏の宝塔の儀式を借りてこそ居れ大聖人己心の十界互具一念三千――本仏の御生命である、此の御本尊は御本仏の永遠の生命を御図顕遊ばされたので、末法唯一無二の即身成仏の大御本尊であらせられる、末法の民衆は此の御本尊によつてのみ救済せられるのである、而して今日富士大石寺の御宝蔵（現在は奉安殿）に厳護されているのである」と。

第八　唯有一門の事

本文

第八唯有一門の事　文句の五に云く唯有一門とは上の以種種法門宣示於仏道に譬う、門に又二あり宅門と車門となり宅とは生死なり門とは出ずる要路なり、此は方便教の詮なり車とは大乗の法なり門とは円教の詮なりと。御義口伝に云く一門とは法華経の信心なり車とは法華経なり牛とは南無妙法蓮華経なり宅とは煩悩なり自身法性の大地を生死生死と転ぐり行くなり云云。

語訳

唯有一門　譬喩品の総譬（二〇八ページ）に「舎利弗、若し国邑聚落に大長者有らん。其の年衰邁して財富無量なり。多く田宅及び諸の僮僕有り。其の家広大にして、唯一門有り」とある。ここから三車火宅の譬えが始まる。

以種種法門宣示於仏道　方便品（一八四ページ）に「種種の道を示すと雖も、其れ実には仏乗の為なり（乃至）今我も亦是の如し、衆生を安穏ならしめんが故に、種種の法門を以って、仏道を宣示す」云云とある。

門とは出ずる要路なり　門とは出離生死の要路を意味する。生死の苦悩を出ずることである。

此は方便教の詮なり　生死の宅から出る、出離生死の門を出るということは、方便権教の所詮、究極の理なのである。

通解

ここは、譬喩品の、有名な三車火宅のたとえの最初のところである。「舎利弗、若し国邑聚落に大長者有らん。其の年衰邁して財富無量なり。多く田宅及び諸の僮僕有り。其の家広大にして、唯一門有り」と。

文句の第五には、次のように述べている。唯一門有りというのは、方便品に「種種の法門を以って、仏道を宣示す」の文を譬えて、仏道こそ、最高であり、唯一であることを述べているのである。門にまた、二つがある。宅の門と車の門とである。宅とは生死――苦悩の生活を意味し、宅門とはその生活から出る要路を意味するのである。これは、方便権教の究極である。車とは大乗の法をいい、車門とは円教の究極を意味するのである。

御義口伝には、次のように仰せである。一門とは法華経の信心のことであり、車とは法華経、大白牛車の牛とは南無妙法蓮華経である。また、宅とは煩悩を意味する。自身法性の大地とは、成仏という、永遠の生命を覚知した絶対の幸福境涯であり、生死生死と転り行くとは、その永遠の幸福境涯の上に立って、いっさいの生活をし

ていくことである。

講義

一門とは法華経の信心なり

人生の究極の目的は、博士になることでもなく、政治家、実業家、教育者等になるだけが目的でも決してない。大仏法によって永遠の生命を会得し、永遠に絶対の幸福境涯を持して価値創造していくことにある。その確立は、末法の法華経を信心する以外に絶対にないとの言であられる。信心とは、現代語で一口にいうならば、実践ということになると思う。行躰即信心ともいわれている。

車とは法華経なり牛とは南無妙法蓮華経なり

「車とは法華経なり」とは、御本尊は、険難なる山には杖となり、死して冥土の灯となり、三途の川には舟となるごとく、われらの興亡、盛衰、流転極まりなき現実の社会においては、堅固な、そして自由自在の車であると、たとえられている。「牛とは南無妙法蓮華経なり」とは、人本尊とも拝せる。「宅とは煩悩なり」とは、煩悩即菩提の生活を意味しているところである。

自身法性の大地を生死生死と転ぐり行くなり

この御文は、生命の永遠を説いておられる。だれびとが否定しようが、疑おうが、生命の永遠は厳然たる事実なりと示されておられる。神が人間を造ったのでもなく、今世のみで人間の生命が消えてなくなるものでもなく、因果の理法により、無始無終に、三身常住するのが生命の本質である。よくよく、われらは題目をあげ、このことを思索してゆきたいものである。また、われわれの生活に約していえば、経王殿御返事（一一二四㌻）の「いかなる処にて遊びたはふるとも・つつがあるべからず遊行して畏れ無きこと師子王の如くなるべし」という意味である。

幸福というものは、絶対に自分自身で築いていくものであって、人から与えられるものではない。人から与えられたものは崩れてしまう。いつ、頼る親が死に、夫が死ぬかわからない。現実は、あまりにも厳しい。また時代が変わって、どれだけの人が幸福になったか。ぜんぶ、自分自身の力、自分自身の智慧、自分自身の福運、それが第一義の問題となるのである。そして、福運、智慧ともに南無妙法蓮華経によって得られるものである。すなわち、自分自身が、最高度に自体顕照して、ゆうゆうと力強く、生きていける本源力はなにか。その源泉は御本尊様しかないということである。それが「自身法性の大地」という意味である。

第九　今此三界等の事

本文

第九今此三界等の事　文句の五に云く次に今此三界より下・第二に一行半は上の所見諸衆生為生老病死之所焼煮を頌して第二の所見・火の譬を合す、唯我一人より下・第三に半偈は上の仏見此已便作是念を頌して、驚入火宅を合するなりと。

語訳

御義口伝に云く此の文は一念三千の文なり一念三千の法門は迹門には生陰二千の世間を明し本門には国土世間を明すなり、又云く今此三界の文は国土世間なり其中衆生の文は五陰世間なり而今此処多諸患難唯我一人の文は衆生世間なり、又云く今此三界は法身如来なり其中衆生悉是吾子は報身如来なり而今此処等は応身如来なり。

今此三界等　譬喩品（二三三ページ）に「今此の三界は、皆是れ我が有なり、其の中の衆生は、悉く是れ吾が子なり、而も今此の処は、諸の患難多し、唯我れ一人のみ能く救護を為す」とある。

今此三界より下・第二に一行半……　「今此の三界……諸の患難多し」の一行半の偈は、第二に譬喩品の前の方にある「諸の衆生を見るに、生老病死、憂悲苦悩に焼煮せらる」（二一五ページ）の文を受けて、それを偈頌として、「長者是の大火の四面より起るを見て、即ち大いに驚怖して、是の念を作さく」（二〇八ページ）の火の譬えをも合して説いているのであるとの意味。長者が、火宅にいる子供を見るという「火の譬え」は、仏が一切衆生がさまざまな苦しみ、悩みにさいなまれている姿を見るということを譬えたのである。したがって、火の譬えを長者見火譬というのに対し、その譬えがあらわしている諸衆生為生老病死之所焼煮の法説の文を合見火譬というのである。さらに、この長者見火譬というものを偈頌として説いたのが、頌長者見火譬といわれる「長者聞き已って、驚きて火宅に入る」（二一七ページ）の文であり、法説である合見火譬の諸衆生為生老病死之所焼煮の文を、偈頌として説いたのが、頌合長者見火譬の文であり、それに能見と所見があり、第二の所見の文が「今此三界」の文である。能見と所見とについていえば、如来は三界の相を如実に知見するから能見であり、如来によって知見される三界は所見である。文中「頌して」とは、経文が一定の詩の形をなしているので「頌」というのである。

唯我一人より下・第三に半偈　「唯我れ一人のみ、能く救護を為す」の文は、合見火譬の結尾にある「仏此れを見已って、便ち是の念を作さく」（二一六ページ）の文を頌して驚入火宅の譬を法説と合して説いているのである。

生陰二千の世間　衆生世間と五陰世間の二千世間という意味。十界のおのおのに十界がそなわり、百界となる。それに十如是がそなわり千如是となる。ところで、迹門では一念三千を説くといっても、それはあくまで理であり、奪っていえば、百界千如を出ていない。あえていうなら、五陰世間を含めての二千世間である。これに対し本門では、国土世間が説かれたのである。観心本尊抄（二四八ページ）にいわく「（迹門の教主）は始成正覚の仏・本無今有の百界千如を説いて（乃至）本門は十

界久遠の上に国土世間既に顕わる」と。この文を堀日亨上人は釈されて「寿量品の『是よりこのかた我常に此の娑婆世界に在りて説法教化す』等の文に顕われておる。況んや余仏は久遠を説かず娑婆を穢土と嫌う。然るに本仏は久遠常住の寂光土と称せられる是れ本門独歩の法門である」と申されている。

其中衆生の文は五陰世間なり　五陰とは、個人を構成するものである。すなわち、色、受、想、行、識が仮りに和合して衆生となるのである。そして、五陰世間とは、個人個人における五陰の差別をいう。貧乏であろうが、病身であろうが、また、どんな性格の人であっても、すべて救いきっていくのである。いかに各個人の五陰に差別があろうと平等に救うというのが、仏の立ち場である。

而今此処多諸患難唯我一人の文は衆生世間なり　この地球上で三悪道や四悪趣に苦しんでいる衆生の姿、救っていかなくてはならない衆生の姿は衆生世間である。日本民族も、またアメリカ人もヨーロッパ人も、東南アジアの人々も、ぜんぶ不幸であり、いっさいの民族、国を救うのが仏の立ち場である。

今此三界は法身如来なり其中衆生悉是吾子は報身如来なり而今此処等は応身如来なり　今此三界の三界とは大宇宙であり、大宇宙の生命即法身如来なのである。其中衆生悉是吾子とは、一切衆生をわが子と思う慈悲の一念で、報身如来である。而今此処多諸患難唯我一人とは、苦悩に沈む民衆のなかに唯ひとり飛び込んで、実際に救っていく実践活動であり、応身如来である。

通解

ここは、有名な「（能見）如来は已に、三界の火宅を離れて、寂然として閑居し、林野に安処せり」「（所見）今此の三界は、皆是れ我が有なり、其の中の衆生は、悉く是れ吾が子なり、而も今此の処は、諸の患難多し、唯我れ一人のみ、能く救護を為す」（二三三ページ）のところである。

文句の五に、頌合長者見火譬の第二の所見にあたる「今此の三界……諸の患難多し」の一行半の偈は、譬喩品の前の方にある「諸の衆生を見るに、生老病死（憂悲苦悩）に焼煮せらる」の長行の文を偈として頌して、第二の所見、火の譬えを法説と合して説いているのである。

同じく第三の所見にある「唯我れ一人のみ能く救護を為す」の半偈の文は、譬喩品の前の方にある「仏此れを見已って、便ち是の念を作さく」の長行の文を頌して、驚入火宅の譬えを法説と合して説いているのであると。

御義口伝には、次のように仰せである。この文は、一念三千を表わしているのである。一念三千の法門は、法華経の迹門で衆生世間、五陰世間の二千の世間を明らかにし、本門で国土世間を明らかにしているのである。

また、次のようにも、とることができる。すなわち、今此三界（今此の三界）の文は国土世間であり、其中衆生（其の中の衆生）の文は五陰世間であり、而今此処多諸患難唯我一人（而も今此の処は、諸の患難多し、唯我れ一人のみ）は衆生世間である。

また、法報応の三身にあてはめれば、今此三界は法身如来、其中衆生悉是吾子は報身如来、而今此処等の文は応身如来となるのである。

講義

この「今此三界」の文を拝するたびに思うことは、この地球、宇宙は、一体誰のものか、ということである。

この経文より、推するならば、アメリカやソ連や、中国、フランス等の世界の強国の指導者達だけのものではない。主師親の三徳をお持ちの、御本仏のものであるといえる。黒人も、黄色人種も、白人も、御本尊より見れば、皆同じであり、子供である。日蓮大聖人の慈悲は、全く同じである。この仏法のみが、全世界の国境を除くことができる根本理念なることは明白であろう。因習強き日本でも、現実に一千万人近い人々の、幸せな交流をみている。海外にある、五万世帯以上の各国の人々も、互いに交流して楽しく信心に励んでいるこの現実は、未来の、国境なき世界平和の縮図ともいえるのである。

父子一体、師弟不二が仏法の原理であるから、日蓮大聖人の御金言を、衆生がそのまま実践した時こそ、仏国土すなわち、理想境ができ得るのである。その第一歩を、わが創価学会は事実の上に証明しているわけである。

次に、一念三千の法門は、迹門においては、衆生世間、五陰世間の二千を明かしている。本門においては、さらに国土世間をも明かしている。戸田城聖前会長は、現代科学でこの三世間を論ずるならば、法律、経済、社会学等が衆生世間の学問といえよう。電気、化学、物理、数学等は国土世間の学問である。

また、心理学、論理学、倫理学等は、五陰世間の学問である。世間の科学は、この三者の差別の研究分野にはいっている。日蓮大聖人の法門は、またそれを実践している学会の行き方は、この三者を統一した、色心不二の生命哲理が根本となるわけであると申しておられた。

信解品六箇の大事

信解品六箇の大事

信解品六箇の大事

第一　信解品の事

本文

第一信解品の事　記の六に云く正法華には信楽品と名く其の義通ずと雖も楽は解に及ばず今は領解を明かす何を以てか楽と云わんや。

御義口伝に云く法華一部廿八品の題号の中に信解の題号此の品に之れ有り、一念三千も信の一字より起り三世の諸仏の成道も信の一字より起るなり、此の信の字元品の無明を切る利剣なり其の故は信は無疑曰信とて疑惑を断破する利剣なり解とは智慧の異名なり信は価の如く解は宝の如し三世の諸仏の智慧をかうは信の一字なり智慧とは南無妙法蓮華経なり、信は智慧の因にして名字即なり信の外に解無く解の外に信無し信の一字を以て妙覚の種子と定めたり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と信受領納する故に無上宝聚不求自得の大宝珠を得るなり信は智慧の種なり不信は堕獄の因なり、又云く信は不変真如の理なり其の故は信は知一切法皆是仏法と体達して実相の一理と信ずるなり解は随縁真如なり自受用智を云うなり、文句の九に云く疑い無きを信と曰い明了なるを解と

曰うと、文句の六に云く中根の人譬喩を説くを聞きて、初めて疑惑を破して大乗の見道に入る故に名けて信と為す進んで大乗の修道に入る故に名けて解と為す、記の六に云く大を以て之に望むるに乃ち両字を分ちて以て二道に属す疑を破するが故に信なり進んで入るを解と名く、信は二道に通じ解は唯修に在り故に修道を解と名くと云うと。

語訳

正法華には信楽品と名く　「正法華」とは、西晋竺法護が梵語の法華経を漢訳した「正法華経」十巻のことであり、妙法蓮華経、添品法華経とともに、現存している三本のひとつである。法華経の漢訳が六本あり、そのうち三本のみが現存していることから、六訳三存といわれている。この正法華経では、妙法蓮華経の信解品第四が、信楽品第四と名づけられているのである。妙法蓮華経二十八品は、釈尊がパリ語もしくはサンスクリット語（梵語）で説いたようである。これは、釈尊の死後、遺弟によって梵語で結集された。六訳三存については　①魏正無畏西暦二五五年訳の法華三昧経六巻　②竺法護の第一訳、西晋の秦始元年、西暦二六五年。薩芸芬陀利経六巻　③同、第二訳、西晋の大康七年、西暦二八六年、正法華経十巻　④支道根、東晋の咸亨元年、西暦三三五年訳、方等法華経五巻　⑤羅什、姚秦の弘始八年、西暦四〇六年訳、妙法蓮華経八巻　⑥闍那崛多と達磨笈多の共訳、隋の仁寿七年、西暦六〇一年、添品法華経。このうち、③⑤⑥が現存している。三本はいずれも、原の梵本を異にし（祥公の法華経伝記および添品の序に記してあるが）羅什は罽賓国（現カシミール地方）王宮所蔵の六千偈白氈本により、崛多等は六千二百偈の貝葉本により、法護は于闐国（西域の一国）王宮所蔵の六千五百偈

の貝葉本によったと伝えられている。白氈は白綿布の類いであり、貝葉とは多羅樹の葉のことで、これに経文を記したものである。これらの三本のなかでは、羅什訳の原本が最も古本であると、学者の意見が一致している。また、訳としては、羅什訳のもののみが、仏の真意を伝えるものであると、日蓮大聖人が仰せであるが、古今の学者も、空前絶後の名訳として認めている。

今は領解を明かす何を以てか楽と云わんや　信解品第四は、三周の声聞のうち譬説周の領解段である。須菩提、迦旃延、迦葉、目犍連の四大声聞が、前品（譬喩品）で三車火宅の譬えをもって説かれた、開三顕一の深旨を、領解した旨を述べているのである。ゆえに、正法華経のように、信楽品などと楽（喜びねがうこと）の字を用いては、この品の意義をそこねてしまうのである。なお、領解とは、説かれた法門を完全に理解することである。

一念三千も信の一字より起り　一念三千とは寿量文底秘沈の三大秘法の南無妙法蓮華経のことであり、この御文は、衆生の信心に約して一念三千をお述べになったところである。観心本尊抄（二三八㌻）にいわく「夫れ一心に十法界を具す一法界に又十法界を具すれば百法界なり一界に三十種の世間を具すれば百法界に即三千種の世間を具す、此の三千・一念の心に在り若し心無んば而已介爾も心有れば即ち三千を具す乃至所以に称して不可思議境と為す意此に在り」と。すなわち、妙法蓮華の当体である一念三千の御本尊は、まったくよそにあるのではなく、ただ、大御本尊を信ずるわれら衆生の一念にあり、信心がなければ、わが生命に一念三千の御本尊を具することができないのである。ゆえに、日女御前御返事（一二四四㌻）に「此の御本尊全く余所に求る事なかれ・只我れ等衆生の法華経を持ちて南無妙法蓮華経と唱うる胸中の肉団におはします なり」と仰せである。したがって、この御文は、一念三千の具、不具は、すべて信の一字にかかっており、信心強盛に励む者こそが、一念三千を具することができるという意味である。

三世の諸仏の成道も信の一字より起るなり　秋元御書（一〇七二㌻）にいわく「種熟脱の法門・法華経の肝心なり、三世十方

の仏は必ず妙法蓮華経の五字を種として仏になり給へり」と。また御義口伝（七五三ページ）にいわく「此の無作の三身をば一字を以て得たり所謂信の一字なり、仍って経に云く『我等当信受仏語』と信受の二字に意を留む可きなり」と。以上の文によって明らかなように、いっさいの仏は、ことごとく南無妙法蓮華経を信じて、成仏したのであり、われわれもまた、信の一字をもって成仏することができるのである。

元品の無明　釈迦仏法において立てる三惑の第三・無明惑の根本である。無明惑とは中道法性を障えるいっさいの生死、煩悩の根本であり、別教では十二品・円教では四十二品をたてる。四十二のうち最後の無明惑を元品の無明というのである。大聖人の仏法から見るならば、元品の無明とは、三大秘法の大御本尊を信じない惑であり、根本の迷いなのである。元品とは生命と訳し、迷えば無明になり、悟れば法性となるのである。御義口伝「涌出品一箇の大事」（七五一ページ）には「元品の無明を対治する利剣は信の一字なり無疑曰信の釈之を思ふ可し云云」と仰せである。

無疑曰信　天台大師の法華文句の巻九の文で「疑い無きを信と曰う」と読むのである。戸田城聖前会長も「信ずるということは疑わないことである」と述べておられる。

信は価の如く解は宝の如し　信解品の題号である信と解との関係性を、宝とそれを買う価とにたとえて、述べられたのである。価とは一般に物品を購入するさいの手段であり、この場合には、それにより宝を求めることができるのである。すなわち信ずることによって、智慧という無上の宝を買うことができるという意味である。ゆえに次下に「三世の諸仏の智慧をかうは信の一字なり」と仰せである。われら衆生が、みずからを妙法の当体であると確信し、成仏の境涯に遊戯しゆくことも、結局は、信の一字が因となるのであり、根本なのである。またこの文は、以信代慧の原理を示しているのである。法華経方便品で、舎利弗の成仏が説かれているが、智慧第一といわれた舎利弗すら、最後は信心によって悟りを得たのである。したがって、末法の三毒強盛の衆生は、信心なくしては、とうてい、偉大なる仏の智慧をうることができないのみか、それ

は堕獄の因になってしまうのである。反対に、信ずる一念が強ければ、いかなる衆生であっても「信を以て慧に代う」ことができるのである。大聖人は四信五品抄に「慧又堪ざれば信を以て慧に代え・信の一字を詮と為す、不信は一闡提謗法の因・信は慧の因・名字即の位なり」（三三九ページ）と仰せである。また次下の「智慧とは南無妙法蓮華経なり、信は智慧の因にして名字即なり」の御文を、よくよくわが身に拝し味わうべきであろう。信心がいかに大切であるかを、価と宝とにたとえて述べられたのである。大聖人は「智者・学匠の身と為りても地獄に墜ちて何の詮かあるべき」（十八円満抄一三六七ページ）とも仰せなのである。心して、日頃の信心にまじめに励んでいくべきである。

信は智慧の因にして名字即なり　智慧とは仏の智慧であり、日蓮大聖人の仏智をいうのである。名字即とは天台が法華経の円教で立てた六即のうち、第二番の位であるが、大聖人の仏法の立ち場からいうならば、それは初信においても真に即身成仏していける位なのである。したがって、この文の意は、信心こそ仏の智慧をみずからの生活に具現していく根本の因であり、信心によって即身成仏していけるということである。

信の外に解無く解の外に信無し　信解不二をいわれているのである。すなわち信ずるという一念をのぞいては、智慧が湧現するはずはなく、領解の一念をのぞいては、やはり信が立ち場をなくしてしまうのである。このことは「以信得入」、「以信代慧」に通ずるのである。

無上宝聚不求自得　妙法蓮華経信解品第四（二六四ページ）に「無上宝聚不求自得」とあり、「無上の宝聚、求めざるに自ら得たり」と読む。これは四大声聞が、自分たちも仏になれるのであると喜び、その偈を述べたのである。無上宝聚とは功徳聚である大御本尊のことをさしており、不求自得とは、その宝を、われら衆生が、なんの辛労も尽くさず、ただ信心一途に得ることをいうのである。

信は不変真如の理なり其の故は信は知一切法皆是仏法と体達して実相の一理と信ずるなり　この文は、次下の文と合わせて、

大聖人が信解について、随縁・不変の立ち場から仰せになっているところである。そして信解の信は不変真如の理になるといわれる。ここに、不変真如の理とは、永遠に変わることのない、普遍妥当性をもつ真理のことである。真如とは中道、法性、生命等のことである。なぜ信が不変真如の理になるのであるかというならば「其の故は知一切法皆是仏法と体達し実相の一理と信ずる」からである。実相の一理とは、永遠不滅の大哲理である南無妙法蓮華経のことなのである。この哲理を信の対境となすがゆえに、不変真如の理になるのである。

解は随縁真如なり自受用智を云うなり　信解の解は、随縁真如になるのである。さて随縁真如とは、不変真如に相対する法門である。この大宇宙のいっさいの法則というものが、不変真如の理になり、同時に、現象は随縁真如の智になるのである。本・迹の立ち場からいうと、随縁真如は本門にあたり、生活に約せば、縁にふれて刻々とあらわれてくる智慧であり、現実の活動それ自体である。たとえていえば、水そのものは不変真如になるのであるが、波は随縁真如になるのである。「解は随縁真如なり」とは、ここにいう解が智慧の異名だからである。しかも、その智慧は、南無妙法蓮華経の智慧であるから、次下に「自受用智を言うなり」と仰せなのである。「自受用智」とは、ほしいままに受け用いる智という意であり、すなわち自受用報身如来、御本仏の智慧をいうのである。われらが信の一字を根本におくならば、このような偉大な仏力、法力をも有する智慧を得ることができるのである。

中根の人　法華経迹門で声聞の弟子が、つぎつぎと成仏を許されて授記を受けるが、それらの声聞は上根、中根、下根の三種に区別されている。まず舎利弗等（上根の人）は方便品の法説を聞いて得道する。これを法説周という。次に譬喩品等のたとえ話を聞いて須菩提、迦旃延、迦葉、目犍連等（中根の人）が得道する。これを喩説周という。第三に大通智勝仏以来の因縁を聞いて富楼那等（下根の人）が得道する。これを因縁周という。

大乗の見道に入る故に名けて信と為す　文句の第六巻の文で、大乗とは一仏乗のことであり、見道とは、三界六道における苦

果の因である見思の惑を断じ尽くすことである。そして、見道では、随信行、随法行が中心であると説かれている。したがって、見思の惑を破して一仏乗の妙法を信ずるがゆえに、信と名づけているのである。

大乗の修道に入る故に名けて解と為す　見思の煩悩を断じて、七聖の位を得るのであるが、修道とはそのうちの第二番目であり、さらに分かれて信解、見得、身証の三つの位になる。したがって一仏乗の妙法を信じ、信解の位になるがゆえに、解と名づけるのである。

通解

妙楽大師の「法華文句記」の六には、インドの法華経を竺法護が漢文に訳した「正法華経」においては、羅什訳「妙法蓮華経」の信解品にあたるものを、信楽品と名づけているとある。妙楽は、信楽品は信解品にかなり似かよった意味にはなるが、「楽」ということは、「解」には及ばないのである。なぜかならば、この品においては、四大声聞が一仏乗に目覚めたとの領解を述べているのであり、楽と名づけては、説かれている甚深の法門に、根本的に異なってしまうのである。したがって、信楽品などと名づけることは、とうてい、でき得ないのである、といっている。

御義口伝には次のように仰せである。

法華経一部二十八品の題号のなかで、「信解」という大事な題号はこの品についているのである。「一念三千

も信の一字より起り」とは、仏界が湧現するのでなければ、一念三千にはならない。仏界は、御本尊を信じて南無妙法蓮華経と唱えて、初めて現われるのである。すなわち、信によって一念三千は成り立つのである。また三世のあらゆる仏も、みな御本尊を信じて題目を唱えたからこそ、成道したのである。

信ということは、元品の無明―根本の迷い、すなわち、御本尊に対する迷いを切るのである。そのゆえは「疑い無きを信と曰う」ということで、信は疑惑をたち切る利剣なのである。解ということは、智慧の別名である。信ずることによって、智慧という宝を買うことができる。三世のあらゆる仏の智慧を買うのは信によるのである。智慧とは南無妙法蓮華経のことである。御本尊を信ずることは、日蓮大聖人の智慧をいただくもとであり、名字即の位である。信と解―御本尊を信ずることと仏をさとることとは一体である。信の一字こそ、妙覚―仏のさとりの種である。

いま日蓮大聖人、およびその門下が、御本尊にむかって南無妙法蓮華経と唱えることが成仏の根本であると信受し納得することは、信解品に「無上の宝聚求めざるに自ら得たり」とある、その大宝珠を得たことになるのである。信は智慧――仏の境涯のもとであり、不信は地獄に堕ちる原因となる。

また、日蓮大聖人は次のようにも申されている。信解の信は不変真如の理である。そのわけは、一切の法は皆これ仏法であると身を以って信じ、諸法の実相は南無妙法蓮華経の一理であると信じ切ることである。解は随縁真如の智―その場、その場で最高の判断を下していく御本仏の智をいうのである。

文句の九に、疑いがないことを信というのであり、明らかにわかることを解というのであるといっている。文

句の六には、中根の須菩提、迦旃延、迦葉、目犍連らの四大声聞たちが、仏が譬喩を説くのを聞いて、初めて疑惑を破して大乗―一仏乗の見道に入るゆえに名づけて信と為し、進んで大乗の修行道に入るゆえに名づけて解と為すと説いている。妙楽の文句記の六には、さらにこのことを説き、大乗をもって信解のことを示すのに、すなわち信解の両字を分かちて、見道、修道の二道に属す、疑いを破して疑い無きゆえに信である、進んで解了に入るを解と名づけるのである、すなわち信は見道、修道の二道に通じ、解はただ修道の一道に通ずるのみである、ゆえに修道を解と名づけるのであるといっている。

講義

信解品第四は、神通第一の目連尊者をはじめ須菩提、迦旃延、迦葉等の四大声聞が、開三顕一の法理を領解した譬説周である。「長者窮子の譬え」を説いての領解は有名である。

長者窮子の譬えは、巧みに種熟脱の三時をば、五時にわたって説叙して領解を明かしているわけである。今、観心から読めば、当然、われらは、日蓮大聖人すなわち御本尊の子であり、大福運の持ち主であるが、仏性をあらわさず、六道九界の境涯のみに流転してしまっている。みずから求道心を起こして、生命の本質、仏法の真髄を知ろうとしない。折伏されて逃げたり、いやいやながら信心に入ったような状態であった。まさに窮子の姿そのものであった。妙法をだきしめ、信心強盛となれば、すなわち、末法今時の信解である。これによって長者

（仏）と父子の縁を結び、わが身が妙法の当体とあらわれるのである。ゆえに、末法における信解こそ、絶対の幸福原理であることは、間違いないことである。

この御文にあるとおり、信解の信ということは、実に、いっさいの根本なのである。「一念三千も信の一字より起り三世諸仏の成道も信の一字より起るなり」との仰せは、信ずるということがなければ、仏法は成り立たないことを意味するものである。われわれは、友人を信じ、親を信じ、また自己を信じ、あるいは本を信じ、人の話を信じ、あるいは、新聞に報道されたことが事実であると信ずる。信じたり、信じなかったりすることが現実の生活であろう。生活から、信ずるということを取り除いたら、あとになにが残るだろうか。社会というものの本質が、おたがいに信頼しあい、尊敬しあって、初めて成り立つものである。

しかしながら、現実の社会は、あまりにも不信と欺瞞とに満ちみちているではないか。そこに、いっさい信ずべきものを失なった青年は、社会をのろい、血肉を分けた親兄弟をのろい、頽廃的になり、あるときは爆発的に、みずからのエネルギーを快楽のために発散する。もし、彼が、自己をも信ずることができなくなれば、もはや、生きる張りあいを、いっさいなくしてしまうことであろう。なにごとも、信が根本であることがうかがえるものだ。社会を改革しようとする息吹きも、芸術家が偉大な芸術を生んでいくのも、科学者が偉大なる発見をするのも、信あればこそである。一般の学問においても、認識するということの第一歩は、すべて、信ずるということから始まり、実験証明によって初めて正しく認識できうるのである。況んや仏法の根本においては、必ず信の一字より起こることは、当然の中の当然の理なのである。

戸田城聖前会長の巻頭言「思想の混乱」には、次のようにいわれている。

「世界の文化人が迷乱している思想に二つある。一つは知識が即智慧であるという考え方である。知識は智慧を誘導し、智慧を開く門にはなるが、決して知識自体が智慧ではない。（中略）智慧と知識は根本的な相違がある。ただし智慧の本道にはいるためには、知識の門を開いて、はいらなければならぬことは、いうまでもない。仏法においても、随喜功徳品において、五波羅蜜を捨てよとはいうが、般若波羅蜜をば捨てよとはいっていない。智慧のない人間は、犬猫にも劣るのであるから、智慧を磨くということを、よろしく考うべきであろうと思う。……要するに、根本は強き生命力と、たくましき智慧とによって、わが人生を支配していかなくては、ほんとうの幸福は得られないことを知らねばならぬ。これを実践に移し、いかにすべきかという問題は、わが創価学会の主張のごとく、日蓮正宗総本山の、一閻浮提総与の御本尊に、南無する（信ずる）こと以外、方法のないことを付記しておく」と。

すなわち、かくのごとく、人生の幸福の源泉たる智慧は、仏法の「以信代慧」「以信得入」という原理が示すごとく、結局は、三大秘法の大御本尊に対する強き信をもって智慧に代え、正法に対する信をもって幸福境涯を築く以外にないことを知らなければならない。

しかし、この信の対境を誤れば、また不幸におちいらざるをえないのである。妙楽大師いわく「たとい発心真実ならざる者も、正境に縁すれば功徳なお多し、正境に非ずんば、たとい偽妄無きも亦種とならず」と。すなわち、「鰯の頭も信心から」というような、浅はかな宗教観は、まったく非科学的であり、迷信であり、邪見であ

ることを知るべきである。あくまでも仏法は、文理現の三証具備でなければならない。

いま、われわれの信心の姿を見て、愚かな人は、他の宗教と同じと思い、よく「盲信」であると批判する。しかし、彼らは、われわれが常に大聖人の深遠なる生命哲学を追究していることを知らない。その幽玄でしかも明晰なる大哲理に、われらは、全生命からほとばしりいでる喜びの活動をしているのである。ある哲学者は、「信仰とは、理性の延長なり」といった。まことに、深き思索の結果の叫びであろう。

戸田城聖前会長は、また「理は信を生じ、信は理を求める。求められた理は、さらに信を深めるのである」と述べられている。この深遠なる道理をわきまえる実践をば知るならば、どうして「盲信」などと批判できようか。あえてそう批判する人たちこそ、いっさいの生活に、活動に、信ずるという純朴な人間性を喪失してしまった、哀れな存在であるといわれてもやむを得なかろう。

次に「信」と「解」の関係であるが、信とは、大御本尊を信ずること、生活活動への源泉を意味する。解とは、実際生活、活躍にあって、具体的に働く智慧の意味である。今、われら仏の軍の、一日も早く、広宣流布の実現を期しゆこうという、祈り、一念、一心は、信である。その戦いの完遂への、一歩一歩の具体的な構想、企画、活動等は、解ととるのである。

信は無疑曰信とて疑惑を断破する利剣なり

疑い無きを信と曰う。三大秘法の大御本尊の大功徳を絶対に信じ、日蓮大聖人の色心不二の生命哲学を最高唯

一と信ずることが、仏法の根本である。

たとえ一時的には罰を受けようが、病気になろうが、家が焼けようが、どんなことがあっても御本尊を疑わない。大聖人の仰せどおりに信心修行をまっとうしきる――これが無疑曰信であり、その信心をしている人が成仏できうるのである。少し世間から批判されたり、迫害を受けたり、そんなことで疑ってはならない。それでは信が弱いのであり、薄いのである。一生涯、永遠に御本尊をだきしめてはなさない。どんなことがあっても、題目を唱えきっていく、これが無疑曰信の信心といい得るのである。

さて、仏法においては、以上のごとく、信ずるということが根本であり、そこに何等の疑問もない。これはひとえに、仏法が文証、理証、現証の上に立って、絶対にゆるぎない大哲学であるからである。

ところが、参考のために、ひとたび目を、西洋の宗教、哲学に転じてみると、そこにはおよそわれわれには考えられないような奇妙な論議がくり返されている。それは、キリスト教の「神」をめぐっての論議である。

西洋文明は、その初期において、不合理極まるキリスト教を取り入れ、それに支配されてしまった。それ以来彼らは、何か人生について、宇宙について考えようとするときに、「唯一絶対、全智全能の神」というものを無視して考えを進めることが、絶対にできなくなってしまったのである。

しかしながら、その「唯一絶対の神」については、荒唐無稽な奇跡を説いたバイブルがあるだけで、理論的な裏づけはなく、現証として、実際生活にあらわるべき功徳などは全くない。したがって彼らは、あるいは信じ、あるいは疑い、あるいは、一方で信じつつ一方では疑うという、惨憺たる精神的悩みをもって、西洋思想史を形

成してきた。参考までに、そのおもなものを考察してみよう。

まず、カトリック教会の教義を確立し基礎づけようとした、いわゆる「教父哲学」の代表的思想家の一人テルトゥリアヌス（二世紀～三世紀）は、すべて、哲学によって、キリスト教を基礎づけようとすることを排撃して、キリスト教的信仰の非合理的性格を強調した。

「神の子は磔（はりつけ）に処せられた。これは恥ずべきことなるが故に、余はこれを恥じない。神の子は死んだ。これ愚かなることなるが故に、絶対に信じなければならぬ。またかれは葬られて後に復活した。これ不可能なるが故に確実である」という彼の主張は、その思想を明確に現わしている。それゆえ、通常、彼の思想は「不合理なるが故に信ず」ということを説いたものとして知られている。これは全く、人間の理性を無視した盲信であるといわざるを得ないではないか。

また、中世のスコラ哲学の初期の代表者アンセルムス（十一世紀）においては、教会の信仰は絶対的なものであり、それは決して疑われることのできないものであった。しかし彼は、この信仰を知識によって基礎づけうることを確信していた。有名な「知らんがためにわれ信ずる」という彼の言葉は、彼の意図を明瞭に示すものということができよう。

さて、近世西洋哲学の代表者といわれるデカルト（十七世紀）は何を考えていたか。彼は、信は「意」に関し、疑は「意」に関するものと「知」に関するものとがあると言いだして、

「知性に関する懐疑と意志に関する懐疑とは区別されるべきである。

人は、自らの知性が神の存在を証明し得ないかぎり、知性でもって神の存在を疑わなければならないが、しかし人は、神の存在を信ずることができる。なぜなら、信仰は意志の問題であるからである」

という意味のことを述べているのである。

このデカルトの態度に対して、当時の人々は、神の存在を疑うなどということは、一体許されてよいことだろうかと強く非難している。ところが一方、逆に、このデカルトの態度に対して、後の実存主義哲学者たち、キェルケゴール、ニーチェ、ヤスパース等は、懐疑の仕方が不徹底であると非難している。

とくに、現代ドイツの実存哲学者ヤスパースは、「デカルトと哲学」という本の中で、「デカルトの懐疑は、知性の方法的懐疑であって、信仰の実存的懐疑ではない。それは、それによって合理的確実性に到達しようとする計画的知性的な試みであって、デカルトを襲うところの実存の経験ではない。それは、デカルトがその主であるところの行為であって、信仰喪失という深淵へ陥ち込むことではない」等といい、もっと徹底して疑って、絶望にまで到るべきであるといっている。

われわれは、以上のような論議を見て、誠にくだらないと思う以外にないのである。しかしながら、彼らは、実に、こうした論議に命をかけていたのである。ということは、西洋の中世近世においては、もし神について、あからさまに、不信を表明すれば、それは、人々を迷わすものとされ、カトリック教会によって追及され、しばしば死刑にされたからである。それは、甚だ冷酷なものであった。また、現代においては、神に対する信仰は、いちじるしく弱まってきているわけであるが、やはりそれは、西洋人の人生観の中心となるものであり、もし神

の存在を否定するならば、彼らの人生観は根底からくつがえり、今後どのように生くべきかについて苦悩せざるをえなくなるのである。

われわれは、以上の考察から、西洋の哲学者たちが、本来ありもしない「唯一絶対の神」をめぐって、どれほど深刻に悩んだかをうかがい知ると同時に、文証、理証、現証に照らして一点の疑わしきところもない大生命哲学を奉ずるわれわれが、いかに恵まれた人生であるかを、痛感せずにはおられないではないか。

第二　捨父逃逝の事

本文

第二捨父逃逝の事　文句の六に云く、捨父逃逝とは大を退するを捨と為し無明自ら覆うを逃と曰い生死に趣向するを逝と為すと。

御義口伝に云く父に於て三之れ有り法華経・釈尊・日蓮是なり、法華経は一切衆生の父なり此の父に背く故に流転の凡夫となる、釈尊は一切衆生の父なり此の仏に背く故に備さに諸道を輪ぐるなり、今日蓮は日本国の一切衆生の父なり、章安大師の云く「彼が為に悪を除く即ち是れ彼が親なり」と、退大の大は南無妙法蓮華経なり無明とは疑惑謗法なり、自ら覆うとは法然・弘法・慈覚・智証・道隆・良観等の悪比丘・謗法の失を恣ままに覆いかすくなり。

語訳

捨父逃逝　信解品の文であり、有名な法華経の七譬のひとつである長者窮子の譬えの冒頭にでてくる。経文（二五一ページ）には「譬えば人有って、年既に幼稚にして、父を捨てて逃逝し、久しく他国に住して云云」とある。

大を退するを捨と為し　天台の法華文句の六に、捨父逃逝の「捨」ということを解釈して「大を退するを捨と為し」といっている。大とは大乗、すなわち一仏乗の教えであり、究極は「退大の大は南無妙法蓮華経なり」の仰せのごとくである。大を退するということは、信心に反対し、退転してゆく姿なのである。ゆえに「捨」ということは、一仏乗の道を捨てゆくことである。

無明自ら覆うを逃と曰い　無明とは、いちおう中道法性を障えるいっさいの生死煩悩の根本であって、末法今日の立ち場では、三大秘法の御本尊を信じられない迷いがこれにあたるのである。そして無明惑が一念を支配している状態を「逃」といわれているのである。

生死に趣向するを逝と為すと　生死とは苦しみという意である。したがって苦しみの多い生活、あるいは苦しい人生を送っていくようになることを「逝」とたとえたのである。

流転の凡夫　流転とは流転門の十二因縁からでてきたことばであり、流転の凡夫とは衆生が生死の苦海に流転していく姿をいうのである。

諸道を輪ぐるなり　諸道とはいわゆる三界六道の迷いの生活であり、父なる釈尊にそむくがゆえに、三界六道を輪廻する哀れな姿になってしまう。

章安大師の云く「彼が為に悪を除く即ち是れ彼が親なり」と　章安大師が涅槃経の長寿品の文を釈した文で「慈無くして詐り親しむは是れ彼が怨なり」という前文とともに、折伏の意義を示したのである。すなわち、折伏の精神は慈悲という崇高なものであり、キリスト教で説くところの愛などとは根本的に差異がある。愛はいまだ、愛憎という相対になるのであり、それに対し、慈悲は、いっさいのものを超越し、包含してゆく絶対的なものであるといえよう。慈悲の心を忘れ、謗法の者をみても、その非を責めずに、表面的に親しむということは、かえって、相手にとって、怨となるのである。相手が一時的にいかなる感情をもつといえども、その非を責め、謗法を取り除くならば、これは相手にとって、より以上の善を与えることになるのである。

退大の大は南無妙法蓮華経なり　大を退するの大とは、大乗すなわち一仏乗のことであって、三大秘法の南無妙法蓮華経なのである。

無明とは疑惑謗法なり　無明とは無明惑のことで、御本尊を信じられない根本の迷いであり、それは大謗法になるのである。

法然　日本浄土宗の開祖。（くわしくは本書一五〇ページ参照）

弘法　日本真言宗の開祖。（くわしくは本書一五〇ページ参照）

慈覚・智証　慈覚は比叡山第三の座主。智証は第四の座主。伝教大師にそむいて真言を取り入れ、天台宗を破滅させたのである。（くわしくは本書一五一ページ参照）

道隆・良観　道隆とは、建長寺道隆のことで、日蓮大聖人に敵対した禅宗の僧。良観とは、極楽寺良観のことで、律、真言念仏等をひろめて、大聖人に敵対した邪僧。ともに僭聖増上慢である。

通解

ここは、有名な窮子のたとえのところで、金持ちの息子が父を捨てて逃げ去ったことを述べている。経文には「譬えば人有って、年既に幼稚にして、父を捨てて逃逝し、久しく他国に住して云云」とある。

文句の六にいうには「捨」（すてる）ということは大乗、すなわち一仏乗の教えから退転することであり、無明惑がいのちを覆っている状態を逃とたとえたのであり、生死の苦しみにおもむくことを逝といったのである。

御義口伝には、次のように仰せである。捨父逃逝の父とは三通りに読むことができる。法華経と釈尊と日蓮大聖人とである。法華経は一切衆生の父である。この父に背くから九界をさまよう凡夫となるのである。釈尊は一切衆生の父である。この父なる仏に背いたものは、諸の悪道を輪廻したのである。

いま末法においては、日蓮大聖人が御本仏として、日本国の一切衆生に対して父の徳をそなえておられるのである。章安大師は「民衆のために、不幸の根源である邪宗を取り除いてあげる人こそ真の親である」といっているが、末法に入って邪宗を徹底的に折伏されたのは、日蓮大聖人お一人であったではないか。

文句にいう「退大」（大を退する）の大とは南無妙法蓮華経のことである。「無明」とは疑惑謗法―疑うという謗法である。「自ら覆う」というのは、法然、弘法、慈覚、智証、道隆、良観等の悪坊主どもが、自分の謗法の罪悪を、ほしいままに覆いかくしている状態をいうのである。

講義

章安大師の云く「彼が為に悪を除く即ち是れ彼が親なり」とは、涅槃経の長寿品の文を釈した文である。前の文は「慈無くして詐り親しむは是れ彼が怨なり」といい、ともに折伏の意義を示したものである。

この親とは、日蓮宗の輩がいうごとく「親身の友」というような、生やさしいものではない。別しては、主師親・三徳具備の御本仏、日蓮大聖人の親徳であり、総じては、折伏の慈悲の所行を、仏勅のままに行なうわれわれは、もったいなくも、仏の使いとして、この義にかなうことを知るべきである。しかして、正法を知らず折伏の悪口を言うものは、一切衆生の怨になることを知るべきである。「流転」とは、流転生死の義で、六道輪廻ということと同じである。三界六道の世界を、生死生死と、不幸な姿でめぐることである。これ一切衆生の父たる御本仏、日蓮大聖人の大仏法に背くがゆえである。

第三　加復窮困の事

本文

第三加復窮困の事　文句の六に云く、出要の術を得ざるを又窮と為し、八苦の火に焼かるるが故に困と為すと。御義口伝に云く出要とは南無妙法蓮華経なり術とは信心なり、今日蓮等の類い窮困を免離する事は法華経を受持し奉るが故なり、又云く妙法に値い奉る時は八苦の煩悩の火自受用報身の智火と開覚するなり云云。

語訳

加復窮困　信解品第四（二五二ページ）に「年既に長大して、加す復窮困し、四方に馳騁して、以って衣食を求め、漸漸に遊行して、本国に遇い向かいぬ」とある。すなわち窮子が長ずるにしたがって、「加す復窮困し」て、次第に、自分の本国に帰ってくるのである。

出要の術を得ざるを又窮と為し　文句の六にでている文である。出要の術とは「出離生死の要法」のことで生死の苦海たる人生において、大御本尊に信を入れたてまつり、たくましく歩み、真にみずからの人生を楽しみきっていけるようになる。そのような最高の人生を過ごす根本となる教えが「出要の術」である。日蓮大聖人は三大秘法抄（一〇二二㌻）に「末法に入て爾前迹門は全く出離生死の法にあらず、但専ら本門寿量の一品に限りて出離生死の要法なり」と仰せられている。ゆえに、いま末法にはいっては、大御本尊をのぞいて出要の術はないのである。そして加復窮困の窮について、天台大師は、出要の術を得ないことを「窮」というのであるといっている。

八苦の火　八苦とは通例四苦八苦といわれている。仏法に説かれている人生の苦しみで、四苦は生・老・病・死の四つである。八苦とはさらに愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五盛陰苦が加わるのである。愛別離苦とは、愛するものと離別しなければならない苦しみをいう。怨憎会苦とは、うらみ、憎む者に会う苦しみをいう。求不得苦とは、求めて得ざる苦しみ、すなわち、希望がかなわず、求めるところのものが得られない苦しみである。五盛陰苦とは、これらの七つの苦は五陰熾盛のために起こるので、総括して五盛陰苦という。天台大師は、衆生がこの八苦の火に焼かれ、人生の悲惨さを身をもって味わうことを「困」と名づけたのである。

出要とは南無妙法蓮華経なり　出要とは出離生死の要法のことである。すなわち、これまでのうらぶれた、苦しみに左右され、悩み多い人生から、いっさいの悩みを因として新たなたくましい人生にしていく根本の因は、三大秘法の南無妙法蓮華経なのである。

術とは信心なり　出要の術の術とは、方法論であり、具体論なのであって、それはとりもなおさず、信心のことなのである。

したがって、輝ける人生を歩むには、大御本尊へのゆるぎない信仰の一念がたいせつなのである。

妙法に値い奉る時は八苦の煩悩の火自受用報身の智火と開覚するなり云云　妙法とは大御本尊のこと、八苦とは、四苦八苦の

八苦。自受用報身の智火とは、御本仏・久遠元初の自受用報身如来の偉大なる智慧のことなのである。すなわちわれらが大御本尊に南無妙法蓮華経と唱えたてまつっていくとき、あらゆる煩悩の火が、すべての妙法の力用により、智火に展開していくのであるというのである。したがって、この文は、日蓮大聖人の仏法哲学における一つのかなめたる、煩悩即菩提、生死即涅槃の原理を示されているところである。

通解

ここは、前項の「捨父逃逝」のつづきのところで、窮子が長ずるにしたがって、「加す復窮困し」て、次第に自分の本国に帰って来るというところである。

文句の六には、出離生死の要法の術を得ないのを窮といい、八苦の煩悩の火に焼かれる状態を困というのである、といっている。

この文について、御義口伝には、次のように仰せである。出離生死の要法とは南無妙法蓮華経のことであり、「術」とは信心を意味するのである。いま日蓮大聖人およびその門下が、窮困しない、煩悩の火に焼かれるようにならないのは、御本尊を受持し奉るがゆえである。また、南無妙法蓮華経にあい奉るときは、八苦の煩悩の火が転じて、自受用報身、御本仏の智慧の火となり、悟りとなるのである。

講義

人生の目的が、幸福の確立にあることは、当然のことである。仏法で説く、成仏ということ、すなわち幸福は、古来、西洋哲学に説く「幸福主義」「幸福論」よりは、一段と深き哲理である。現実の不幸の宿命は、いかんともしがたいのが現状である。その根本的解決の術が、三大秘法の御本尊によるとの御断言である。

治病大小権実違目（九九七㌻）にいわく「元品の法性は梵天・帝釈等と顕われ元品の無明は第六天の魔王と顕われたり」と。また四菩薩造立抄（九八八㌻）に「日蓮は世間には日本第一の貧しき者なれども仏法を以て論ずれば一閻浮提第一の富る者なり」云云。この御本尊に帰命するとき、八苦（生、老、病、死、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五盛陰苦）の煩悩の火が、自受用報身の智火に転じ、すなわち、仏界を根底にして九界に遊戯する境涯を確立できうるのである。また、一人も犠牲にすることなく、誰びとも、瞬間瞬間楽しみきっていける、人生を生ききる智慧の働き、そして生命力を受けることができるとの御文である。

第四　心懐悔恨の事

本文

第四心懐悔恨の事　文句の六に云く悔を父に約し恨を子に約すと、記の六に云く父にも悔恨あり、子にも悔恨ありと。

御義口伝に云く日本国の一切衆生は子の如く日蓮は父の如し、法華不信の失に依って無間大城に堕ちて返って日蓮を恨みん、又日蓮も声も惜まず法華を捨つ可からずと云うべきものを霊山にて悔ること之れ有る可きか、文句の六に云く「心懐悔恨とは昔勤に教詔せず訓うること無くして逃逝せしむることを致すことを悔い子の恩義を惟わずして我を疎んじ他に親しむるを恨む」と。

語訳

心懐悔恨　信解品（二五二ページ）に「父毎に子を念う。子と離別して五十余年、而も未だ曾て、人に向って此の如き事を説かず。但自ら思惟して、心に悔恨を懐く云云」とある。

悔を父に約し恨を子に約すと　文句の六に心懐悔恨について釈している。すなわち悔とは父の立ち場であり、恨とは子の立ち場であるといっている。

父にも悔恨あり、子にも悔恨ありと　妙楽の釈した法華文句記の六には、父にも悔恨があり、子にも悔恨があると説いている。子の悔恨とは、次にあるとおり、衆生の立ち場であり、自分が父たる大聖人のもとを離れて、無間地獄の苦しみを味わって悔い、またなぜ地獄に落ちる前に救ってくれなかったのだろうと恨むことである。父の悔恨とは、仏の立ち場であり、日蓮大聖人が、法華を誹謗して地獄に落ちた衆生をあわれみ、なんとかして救ってあげればよかったと悔い、また、大聖人の真意もわからず、いたずらに邪宗教に迷い、大聖人を誹謗して、地獄に落ちたことを、恨むということ。これは、法華不信の人まで、地獄に落ちている人まで、なんとか救ってあげたい、また落としたくない、との大聖人の慈悲である。すなわち縁に紛動されたり、退転したりした人に対して、ああ、かわいそうだ、もっと言っておいてあげればよかった、なんとか救ってあげたいと思う心境、心情なのである。最後にある文句の六の文の心も、同様である。

法華不信の失に依って無間大城に堕ちて返って日蓮を恨みん　大聖人が天台の文句の釈に準じて、恨みを子の立ち場からさらにくわしく、しかも内証に約して論じられたところである。すなわち、子たる日本国の一切衆生が法華経即大御本尊を誹謗し、その罪によってかならず無間大城という不幸のどん底の生活をする。そのときに子たる衆生は、みずからの非にもかかわらず、父たる日蓮大聖人を恨むのである。現代の生活にこの原理をあてはめるならば、折伏されても、大反対をかさね、結局謗法の罰によるきわめて不幸な生活を送るようになると、こんどはかえっていわれのない恨みを、すなわち「あの時もっと強く折伏してくれたらよかったのに」というぐあいに恨むことなどは、まさに、よい例であろう。

又日蓮も声も惜まず法華を捨つ可からずと云うべきものを霊山にて悔ること之れ有る可きか　この文も、文句に準じ、悔いを父の立ち場として、大聖人が述べられたところである。一切衆生の父であらせられる大聖人は、御本仏の境涯からもったいなくも悔いることがあると仰せである。いかなることを悔いるのであろうか、それは大聖人が、声も惜しまずに大御本尊をたもつことを教えているにもかかわらず、日本国の衆生がなかなか信じようとせず、勝手に無間地獄におちてしまったことを悔いられるのである。われわれは、たとえ衆生自身に不幸な生活を送る原因があったとしても、なおのこと、大聖人がそれらの衆生までも救いきっていこうとなされる偉大な仏の慈悲を感ぜずにはいられないのである。

通解

信解品の窮子の譬えのつづきのところで、「父毎に子を念う。子と離別して五十余年、而も未だ曾て、人に向って此の如き事を説かず、但自ら思惟して、心に悔恨を懐く云云」とある。文句の六には、悔恨の悔（くいる）とは父の立ち場であり、恨（うらみ）とは子の立ち場であるといっている。文句記の六には、父にも悔恨があり、子にも悔恨があるといっている。

御義口伝には、次のように仰せである。日本国の一切衆生は、あたかも窮子のようであり、日蓮大聖人はその父のようである。日本国の一切衆生は、大御本尊を信じない罰として、無間地獄に堕ちて、せっかく彼らを救おうと努力なさっている大聖人のことを、返って恨むであろう。また、大聖人としては、声もおしまず、大御本尊

を持つべきことを教えているのに、日本国の一切衆生がなかなか耳を傾けないで、勝手に無間地獄に堕ちてしまったことを、霊山で――仏様としてのご境涯から――悔いることがあるであろう。

文句の六に、「（父が）心に悔恨を懐くというのは、むかし、ねんごろに教えなかったために、窮子が逃げていってしまったことを悔い、また、その子が、父の恩を感じないで、父を他人あつかいし、かえって他人と親しんでいるのを父は恨むのである」といっている。

講義

父子一体、師弟不二の大慈悲をお説きくださっているところである。日本国の一切衆生は子の如し、日蓮は父の如しと。

報恩抄（三二九ページ）にいわく「日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華経は万年の外・未来までも流布（ながるる）べし」云云。富木殿御書（九七〇ページ）にいわく「一生空しく過して万歳悔ゆること勿れ」云云。

「子の恩義を惟わずして我を疎んじ他に親むるを恨む」と。恩義とは、封建社会の恩義ではなくして「甚深無量」の大御本尊の恩義である。我とは日蓮大聖人の御事である。他に親しむとは、邪宗邪義のことである。したがって、いまだ信心なき人、大聖人よりみれば、むしろ、かわいい子であり、独り深く悩まれて、誰びとたりとも救ってあげたいとの大慈悲と拝すべきである。

第五　無上宝聚不求自得の事

本文

第五無上宝聚不求自得の事

御義口伝に云く無上に重重の子細あり、外道の法に対すれば三蔵教は無上・外道の法は有上なり又三蔵教は有上・通教は無上・通教は有上・別教は無上・別教は有上・円教は無上、又爾前の円は有上・法華の円は無上・又迹門の円は有上・本門の円は無上、又迹門十三品は有上・方便品は無上・又本門十三品は有上・一品二半は無上、又天台大師所弘の止観は無上・玄文二部は有上なり、今日蓮等の類いの心は無上とは南無妙法蓮華経・無上の中の極無上なり、此の妙法を指して無上宝聚と説き給うなり、宝聚とは三世の諸仏の万行万善の諸波羅蜜の宝を聚めたる南無妙法蓮華経なり、此の無上宝聚を辛労も無く行功も無く一言に受取る信心なり不求自得とは是れなり、自の字は十界なり十界各各得るなり諸法実相是なり、然る間此の文・妙覚の釈尊・我等衆生の骨肉なり能く能く之を案ず可し云云。

語訳

無上宝聚不求自得　信解品（二六三ページ）に「爾の時に摩訶迦葉、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言さく、我等今日、仏の音教を聞いて、歓喜踊躍して、未曾有なることを得たり、仏声聞、当に作仏することを得べしと説きたもう、無上の宝聚、求めざるに自ら得たり」とある。摩訶迦葉等の四大声聞（譬説周、中根の声聞）が、仏の開三顕一の説法を領解して歓喜して述べた言葉である。

無上に重重の子細あり　無上宝聚の無上といっても、それは、いく重にも立ちいたって、判断していかなければならないのである。有上とは、まだその上があるとの意で、もうこの上がないとの無上の法に劣るのであるが、この無上にも、当分と跨節があることを知るべきなのである。

今日蓮等の類いの心は無上とは南無妙法蓮華経・無上の中の極無上なり　いま、日蓮大聖人のお立ち場、お心からするならば、無上宝聚の無上とは、三大秘法総在の南無妙法蓮華経なのである。そして、この「無上」とは、いく段階にも考えられる無上のなかの究極の無上の法門なのである。

宝聚とは三世の諸仏の万行万善の諸波羅蜜の宝を聚めたる南無妙法蓮華経なり　諸波羅蜜とは、六度ともいい、「彼岸にいたる」との意である。すなわち主として通教、別教において教えられる法門であって、布施、持戒、忍辱、精進、禅、智慧の六行で、その行が千差万別であるところから六度万行ともいわれているのである。すなわち、三世十方の仏が、万行万善の修行を行なったところのすべての功徳というものが、ことごとく妙法の五字に具足しているのである。観心本尊抄（二四六ページ）には「未だ六波羅蜜を修行する事を得ずと雖も六波羅蜜自然に在前す」等云云乃至釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華経の

五字に具足す我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り与え給う」と仰せられている。

自の字は十界なり十界各各得るなり　不求自得の自とは十界を意味している。十界のおのおのがすべて無上の宝聚を得ることができるのである。すなわち、十界のことごとくが妙法の当体なのである。

通解

信解品において、摩訶迦葉らの声聞が成仏を約束されて大いに喜び、「無上の宝聚、求めざるに自ら得たり」と叫んだのである。

この文について、御義口伝には、次のように仰せである。「無上」という意味は何段階にも考えられるのである。外道と内道の三蔵教（小乗）とを相対すれば、内外相対して、外道の法は有上――すなわち、さらにその上がある教えとなり、三蔵教は、この上ないすぐれた教えとなるのである。また三蔵教は有上・通教は無上、通教は有上、別教は無上、別教は有上、円教は無上と蔵、通、別、円の順で、有上、無上ということがいえるのである。また、同じく円教といっても、爾前経の円と法華経の円では、爾前の円が有上、法華の円が無上である。さらに法華経の円のなかでも迹門の円は有上、本門の円は無上という関係になるのである。また、迹門についていえば正宗分である方便品は無上で、他の十三品は有上となるし、本門についていえば、正宗分の一品二半――寿量品の一品と涌出品の後半、分別功徳品の前半――計一品二半は無上で、他の十三品は有上となるのである。ま

た、天台大師が弘めた、三大部についていえば、摩訶止観は無上で、他の法華玄義と法華文句は有上ということになるのである。今、日蓮大聖人のお心からすれば、無上の法とは南無妙法蓮華経のことであり、これは相対的な無上ではなくて、究極の無上である。この南無妙法蓮華経を指して無上宝聚と説いているのである。宝聚とは三世のあらゆる仏のあらゆる修行、功徳をあつめた南無妙法蓮華経なのである。

この無上の宝聚を何の苦労もなく、修行もせず、ただ題目を唱えることによってわが身に受け取る。すなわち、仏界を湧現させることのできるのは、信心によるのである。ゆえに、不求自得（求めざるに自ら得たり）というのである。自とは十界を意味しているのである。十界がすべて南無妙法蓮華経の当体なのである。これを諸法実相というのである。それゆえ、観心本尊抄（二四六ページ）にも「妙覚の釈尊は我等が血肉なり因果の功徳は骨髄に非ずや」と仰せられているように、われわれの信心によって、仏のすべての功徳を得ることができるのである。

講義

無上宝聚とは、大御本尊のことである。すなわち、大御本尊が、無上の宝の聚りなのである。ゆえに御文に「今日蓮等の類いの心は無上とは南無妙法蓮華経・無上の中の極無上なり、此の妙法を指して無上宝聚と説き給うなり、宝聚とは三世の諸仏の万行万善の諸波羅蜜の宝を聚めたる南無妙法蓮華経なり」と仰せられているのである。

また、教行証御書（一二八二ページ）に「此の法華経の本門の肝心・妙法蓮華経は三世の諸仏の万行万善の功徳を集めて五字と為せり、此の五字の内に豈万戒の功徳を納めざらんや」とも仰せられている。この御文によれば、大御本尊には、釈尊が、爾前教で説いた功徳も、法華経迹門で説いた功徳も、また法師功徳品、随喜功徳品、分別功徳品等で説く法華経本門の功徳も、天台や伝教の悟りも、また、舎利弗や文殊の智慧も、薬王菩薩のよく病魔を克服する力も、勇施菩薩の働きも、弥勒菩薩の慈悲の力も、さらにいえば、十方三世の諸仏の万行、万善の功徳が具足しているのである。ゆえに、竪には永遠であり、横には宇宙大のいっさいの力、働きは、ことごとく大御本尊に納まっていると確信すべきである。

そして、大御本尊が無上宝聚であるのみならず、大御本尊を信じ、ただ余念なく南無妙法蓮華経と唱えるならば、われわれの生命も、無上宝聚となるのである。すなわち、われわれの生命のなかに、いっさいの宝が満ちみちてくるのである。貧乏の宿習を持つ人も、病気にさいなまれ、苦悩する人も、生命力弱く何事にも無気力になっている人も、精神的に悩みを持つ人も、ひとたび御本尊に信行をいたすならば、即座に、その人の生命の内に、無量の宝が満ちみち、太陽が、ふたたび、中天に昇りゆくごとく、未来への偉大なる力は、生命の奥底より、こんこんとわき出ずるのである。ゆえに、大御本尊を持ったものは、世界最高の幸福者なのである。

四信五品抄（三四二ページ）にいわく「問う汝が弟子一分の解無くして但一口に南無妙法蓮華経と称する其の位如何、答う此の人は但四味三教の極位並びに爾前の円人に超過するのみに非ず将た又真言等の諸宗の元祖・畏・厳・恩・蔵・宣・摩・導等に勝出すること百千万億倍なり、請う国中の諸人我が末弟等を軽ずる事勿れ進んで過去を

尋ぬれば八十万億劫に供養せし大菩薩なり豈熙連一恒の者に非ずや退いて未来を論ずれば八十年の布施に超過して五十の功徳を備う可し天子の襁褓に纏れ大竜の始めて生ずるが如し蔑如すること勿れ蔑如すること勿れ」と。

また松野殿御消息（一三七八㌻）にいわく「又法華経の薬王品に云く能く是の経典を受持すること有らん者も亦復是くの如し一切衆生の中に於て亦為第一等云云、文の意は法華経を持つ人は男ならば何なる田夫にても候へ、三界の主たる大梵天王・釈提桓因・四大天王・転輪聖王乃至漢土・日本の国主等にも勝れたり、何に況や日本国の大臣公卿・源平の侍・百姓等に勝れたる事申すに及ばず、女人ならば憍尸迦女・吉祥天女・漢の李夫人・楊貴妃等の無量無辺の一切の女人に勝れたりと説かれて候」と。

次に、「不求自得」ということであるが、これは御文に「此の無上宝聚を辛労も無く行功も無く一言に受取る信心なり」と仰せられているごとくである。実際に、われわれは、いったい御本尊を何十年もかかって求めぬいてきたかというと、そうではない。初めは気もすすまず、半信半疑の気持ちで入信した。そして、実践してみて、初めて、偉大な大仏法であることがわかった。なんの辛労もなく、行功もなく、われわれは、大御本尊を受持できたではないか。

また、信心した立ち場からいえば、釈迦仏法の場合は歴劫修行であるのに対し、日蓮大聖人の仏法は受持即観心であり、直達正観であるということである。いまの宗教界の現状をみるとどうか。何十万、何百万の金銭をつぎこんで修行している人もいる。寒いときに、死にもの狂いで、水を浴びて修行している人もいる。彼らは、それでなんとか救いを得よう、正しいものを求めようとしているのである。ところが、われわれは、そんな労苦は

全く必要としない。

ただ、常識人中の常識人として行動してゆけば良いのである。食べたい時に食べ、寝たい時に寝、何十時間勤行するわけでもない。わずか三十分、四十分の勤行で、大功徳を受け、宿命転換なされるわけである。誠に、もったいない御本尊と、感謝を忘れてはならない。優秀なる機械になればなるほど、実用のときは簡単であり、能率もよいと同様に、最高の仏法であり、哲学であるがゆえに、修行も簡単であり、功徳も絶大なのである。

また「無上に重重の子細あり」として、無上と有上とを相対して判じ、最後に南無妙法蓮華経こそ無上のなかの極無上であると結論されている点についてふれよう。およそ、もろもろの法相は、所対にしたがって不同である。そのことを知らずして、頑迷な頭で仏法をみようとすれば、そこに重大な誤りを生ずるのである。

たとえば開目抄上（一八八ページ）に「此の仏陀は三十成道より八十御入滅にいたるまで五十年が間・一代の聖教を説き給へり、一字一句・皆真言なり一文一偈・妄語にあらず外典・外道の中の聖賢の言すらいうこと・あやまりなし事と心と相符へり況や仏陀は無量曠劫よりの不妄語の人・されば一代・五十余年の説教は外典外道に対すれば大乗なり大人の実語なるべし、初成道の始より泥洹の夕にいたるまで説くところの所説・皆真実なり」との御文がある。五十年の説法が、ことごとく真実でありながら、なぜ無量義経に説くごとく、四十余年の経々は未顕真実の教えなのだろうか。

これは、仏法を学ぶ人が、まず突きあたる疑問といえよう。しかし宗教批判の原理を知るなら、その疑問はすぐに消え去るものだ。一代五十年の説法、ことごとく真実とするのは、外道に相対しての論である。従って「外

典外道に対すれば大乗なり大人の実語なるべし」と仰せのとおりである。また、未顕真実というのは、権実相対して判じたものなのである。ゆえに、開目抄上（一八八㌻）には「但し仏教に入て五十余年の経経・八万法蔵を勘たるに小乗あり大乗あり権経あり実経あり顕教・密教・軽語・麤語・実語・妄語・正見・邪見等の種種の差別あり、但し法華経計り教主釈尊の正言なり三世・十方の諸仏の真言なり」と仰せられているのである。ところが、これらの所対不同の原理を知らず、いたずらに低い経文に執着するのは、いつまでも株を守り、兎を獲ろうとする、愚かな木こりと同じであり、みずからの無知、無能を表明している以外のなにものでもない。

法華取要抄（三三一㌻）にいわく「今末の論師・本の人師の邪義を捨て置いて専ら本経本論を引き見るに五十余年の諸経の中に法華経第四法師品の中の已今当の三字最も第一なり、諸の論師・諸の人師定めて此経文を見けるか、然りと雖も或は相似の経文に狂い或は本師の邪会に執し或は王臣等の帰依を恐るるか、所謂金光明経の『是諸経之王』密厳経の『一切経中勝』六波羅蜜経の『総持第一』大日経の『云何菩提』華厳経の『能信是経・最為難』般若経の『会入法性・不見一事』大智度論の『般若波羅蜜最第一』涅槃論の『今者涅槃理』等なり、此等の諸文は法華経の已今当の三字に相似せる文なり・然りと雖も或は梵帝・四天等の諸経に対当すれば是れ諸経の王なり或は小乗経に相対すれば諸経の中の王なり或は華厳・勝鬘等の経に相対すれば一切経の中に勝れたり全く五十余年の大小・権実・顕密の諸経に相対して是れ諸経の王の大王なるに非ず所詮所対を見て経経の勝劣を弁うべきなり」等と。

この御文に依れば、爾前の教々にも、「諸教の中の王」とか、「第一の教なり」という言葉はある。しかれど

も、それは或る範囲内で第一であり、またそれ以前の経文と相対していわれたものである。結局、「一切経の中の王」とか「一切経の中で第一」とかいう意味と全く違うのである。かくのごとく仏法では、絶えず相対という段階を念頭に置かなければ、理解できえないのである。日蓮大聖人の仏法においても、当時、念仏等が広まっていたので、しばしば権実相対の立ち場でお説きなされているのである。そして、或る時は、法華経二十八品を立て、あるいは釈尊を立てたりされた場合もある。これらの意義を知らず、釈尊の仏像等を本尊とするのが、大聖人の本義であるかのごとき誤りを犯しているのが、日蓮宗の実態なのである。

第六　世尊大恩の事

本文

第六世尊大恩の事

御義口伝に云く世尊とは釈尊大恩とは南無妙法蓮華経なり、釈尊の大恩を報ぜんと思わば法華経を受持す可き者なり是れ即ち釈尊の御恩を奉じ奉るなり、大恩を題目と云う事は次下に以稀有事と説く、希有の事とは題目なり、此の大恩の妙法蓮華経を四十余年の間秘し給いて後八箇年に大恩を開き給うなり、文句の一に云く「法王運を啓く」と運とは大恩の妙法蓮華経なり云云、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉りて日本国の一切衆生を助けんと思うは豈世尊の大恩に非ずや、章安大師十種の恩を挙げたりしなり第一には慈悲逗物の恩・第二には最初下種の恩・第三には中間随逐の恩・第四には隠徳示拙の恩・第五には鹿苑施小の恩・第六には耻小慕大の恩・第七には領地家業の恩・第八には父子決定の恩・第九には快得安穏の恩・第十には還用利多の恩なり此の十恩即ち衣座室の三軌なりと云云、記の六に云く「宿萌稍割けて尚未だ敷栄せず長遠の恩何に由りてか報ず可き」と、

又云く「注家は但物として施を天地に答えず子として生を父母に謝せず感報斯に亡するを以てなり、と云えり」、輔正記の六に云く「物は施を天地に答えずとは謂く物は天地に由て生ずと雖も而も天地の沢を報ずと云わず子も亦之の如し」と、記の六に云く「況や復只だ我をして報亡せしむるに縁る斯の恩報じ叵きをや」と、輔正記に云く「只縁令我報亡とは意に云く只如来の声聞をして等しく亡報の理を得せしむるに縁るなり理は謂く一大涅槃なり」と。

御義口伝に云く此くの如く重重の所釈之れ有りと雖も所詮南無妙法蓮華経下種なり下種の故に如影随形し給うなり、今日蓮も此くの如きなり妙法蓮華経を日本国の一切衆生等に与え授くる豈釈尊の十恩に非ずや、十恩は即ち衣座室の三軌なりとは第一第二第三は大慈為室の御恩なり第四第五第六第七は柔和忍辱衣の恩なり第八第九第十は諸法空為座の恩なり、第六の耻小慕大の恩を記の六に云く「故に頓の後に於て便ち小化を垂れ弾斥淘汰し槌砧鍛錬す」と。

語訳

世尊大恩　信解品第四（二七六ページ）には「世尊は大恩ましします、希有の事を以って、憐愍教化して、我等を利益したもう、無量億劫にも、誰か能く報ずる者あらん」とある。これは四大声聞の一人である摩訶迦葉が、仏を賛嘆しているところである。世尊とは仏と同じ意味で、仏の十号（十の名称）の一つである。仏は世界で、もっとも尊い人であるので世尊と名づけ

文上からいえば、インドの釈迦のことであるが、文底から読めば末法御本仏・日蓮大聖人のことである。

以稀有事　希有の事とは、一眼の亀が浮木にあうよりも、三千年に一度だけ咲くといわれる優曇華にめぐりあえるよりも、会いがたき、また聞きがたき大仏法たる南無妙法蓮華経である。末法の御本仏・日蓮大聖人は、この法によって一切衆生の救済にあたられたのである。

法王運を啓く　序品第一の「是の如きを、我聞きき、一時、仏、王舎城、耆闍崛山の中に住したまい」とあるなかの「一時」ということについて文句第一で解釈した文のなかにある。すなわち「一時とは、肇師の云く法王運を啓く、嘉会の時とは世界なり」とある。法王とは、仏という意味であり、末法においては日蓮大聖人のことである。運とは、いっさいの福運であり、その根本は、南無妙法蓮華経である。末法の御本仏・日蓮大聖人は、不幸な民衆に妙法を説き、福運を開かしめたのである。

慈悲逗物の恩　逗とは「とどまる」という意味。仏の慈悲がいっさいの物に浸透していくこと。すなわち、仏の慈悲は広大無辺であることを示したことばである。大聖人の御慈悲は、宇宙大である。

最初下種の恩　最初というのは、最初、中間、今日と立て分けた意味での最初で、いちばん初めに仏が衆生に下種した時をいう。迹門で最初下種といえば、三千塵点劫の大通覆講のときの下種であり、本門でいえば、五百塵点劫における下種であり、文底の眼を開いて、最初下種を論ずれば、久遠元初の下種である。

中間随逐の恩　最初下種より、今日（インド出現）までの間を中間といい、そのあいだに何回も出現して、次第に衆生の機根を熟していったこと。もとより、釈迦仏法は歴劫修行であるから、このように述べられているが、もし、大聖人の直達正観の仏法からみれば、その恩は、大聖人の化導のなかに含まれてしまうのである。

隠徳示拙の恩　もともと久遠以来の仏であるにもかかわらず、インドで初めて修行して仏になったと、徳をかくして、拙い姿

を示したこと。これを、大聖人の立ち場でいえば、大聖人が示同凡夫のお姿で出現し、民衆の中に飛びこんで、救済しようとされたことをいう。

鹿苑施小の恩　鹿野苑というところで、小乗教を説いて衆生を誘引したこと。大聖人の仏法では、最初から南無妙法蓮華経を説き聞かせ、信ぜしめるのであり、釈迦仏法のように段階をふんでいくということはない。しかし、お弟子が釈迦の仏像を造立したことを、大聖人がほめられているなどというのは、権実相対の立ち場から、一往ほめられたのであって、しばらく誘引のためであったといえよう。

耻小慕大の恩　二乗が小乗教に執着していたのを弾呵し、耻とさせ、大乗教をねがわしめたこと。すなわち、方等部の教えを説いたこと。大聖人の立ち場からいえば、邪宗教に迷わされ、あるいは低級思想に凝り固まっていたわれわれの考えをうち破り、真実最高の宗教によって、成仏をねがわしめられたことは、耻小慕大の恩である。

領地家業の恩　領地家業とは信解品の窮子のたとえの中で父の長者が、その一切の家財を窮子に知らしめるところで、経文（法華経二六九ページ）には「長者智有って、漸く入出せしむ、二十年を経て、家事を執作せしめ、其に金銀、真珠頗梨、諸物の出入を示して、皆知らしむれども、猶門外に処し、草菴に止宿し」云云とある。これは般若部の教えを説いたことを意味する。大聖人の仏法においていえば、われわれが、大御本尊の功徳をいただき、大御本尊の力がいかに大きいかが、だんだんわかってきたことをいう。

父子決定の恩　父子決定とは、やはり窮子のたとえで、窮子が長者の子であることを悟ったことを意味する。すなわち、法華経にきて、一切衆生が成仏の記別を与えられたことを意味する。大聖人の仏法でいえば、大御本尊と、われわれの己心の仏界が境智冥合し、師弟不二とあらわれることをいう。

快得安穏の恩　譬喩品に「身意泰然快得安穏」（御義口伝七二二ページ参照）とあり、衆生が成仏の記を受けて真に歓喜し得たこ

と。大聖人の仏法の立ち場でいえば、真実の幸福境涯に住することをいう。

還用利多の恩　衆生が、すすんで、他の衆生を利益することができるようになったこと。いまでいえば、われわれが広宣流布に邁進できるのも、仏智によると拝せる。

衣座室の三軌　法師品第十に、法華弘経の三軌としてあげられている。軌というのは法則、手本といった意味である。法師品第十に「薬王、若し善男子、善女人有って、如来の滅後に、四衆の為に是の法華経を説かんと欲せば、云何が応に説くべき。是の善男子、善女人は、如来の室に入り、如来の衣を著、如来の座に坐して、爾して乃し四衆の為に広く斯の経を説くべし、如来の室とは一切衆生の中の大慈悲心是れなり。如来の衣とは柔和忍辱の心是れなり。如来の座とは一切法空是れなり」とある。また御義口伝の「衣座室の事」（七三七ページ）には「御義口伝に云く衣座室とは法報応の三身なり空仮中の三諦身口意の三業なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は此の三軌を一念に成就するなり、衣とは柔和忍辱の衣・当著忍辱鎧是なり座とは不惜身命の修行なれば空座に居するなり室とは慈悲に住して弘むる故なり母の子を思うが如くなり、豈一念に三軌を具足するに非ずや」との仰せがある。

此の十恩即ち衣座室の三軌なり　これは、本文の最後にご説明があるとおりである。

宿萠稍割けて尚未だ敷栄せず長遠の恩何に由りて報ず可き　萠とは、きざしとか芽ばえといった意味である。久遠において下種された仏種は、ややさけて、芽ばえようとしているが、まだ広がり栄えてはいない。すなわち仏果を得ていない。久遠以来化導していただいた仏の長遠の恩を、なににによって報いることができよう。ただ成仏することによってのみ、仏の恩を報ずることができるということ。

注家　注釈家のこと。

物として施を天地に答えず　次の輔正記の六にあるとおりである。物は天地によって生ずるが、その天地のめぐみに対し報じ

ようとしないということ。

感報　恩を感じ、恩に報いるということ。

輔正記　「法華文句記」の注釈書。道暹の著書。

天地の沢　天地のめぐみのこと。太陽の光りや雨によって草木がさかえ、大地によって万物がはぐくまれる等は、ことごとく天地の沢である。

只縁令我報亡　記の六の「只だ我をして報亡せしむるに縁る」のこと。

亡報の理　亡報とは恩を報ずることができないということ。理とは次にあるように一大涅槃である。すなわち亡報の理とは、絶対に恩を報ずることができないところの一大涅槃のことをいう。

如影随形　「影の形に随うが如し」と読む。影が物体の形にしたがってうつるように、いっさいの恩は、南無妙法蓮華経の下種の恩の影であり、南無妙法蓮華経のもとにしたがっていくのであるということ。

十恩は即ち衣座室の三軌なり　第一の慈悲逗物の恩、第二の最初下種の恩、第三の中間随逐の恩は、大慈為室の御恩にあたる。第一の慈悲逗物の恩が大慈為室にあたることは了解できよう。第二、第三がなぜ大慈為室になるかといえば、第二、第三の恩が、久遠以来、ずっと仏の慈悲の中に包んで、衆生を化導してきたからである。第四の隠徳示拙の恩、第五の鹿苑施小の恩、第六の耻小慕大の恩、第七の領地家業の恩は、柔和忍辱衣の御恩にあたるのである。それは、これらの恩が、いきなり法華経を説かず、隠忍自重し、まずインドで初めて成道した姿をわざと示し、次に小乗を説き、方等、般若と、衆生の機にしたがい、好みに応じて、仏の随自意の説法をせず、耐え忍んで、随他意の法を説いたことを意味するからである。第八の父子決定の恩、第九の快徳安穏の恩、第十の還用利他の恩は、ともに、仏の座において、すなわち、仏の境涯において、行動していくことを意味するので、諸法空為座の御恩にあたるのである。

頓の後に於て便ち小化を垂れ　頓は頓・漸・秘密・不定という化儀の四教の一つで、誘引の手段をとらず、率直に大乗を説くのが頓であり、具体的には華厳経を指す。小化とは、小乗による化導であり、具体的には阿含経を指す。

弾斥淘汰し槌砧鍛錬す　弾斥とはしかりとばすこと。具体的には二乗を弾呵した方等部の経々を説いたことを意味する。淘汰は洗い去るとか、えりすぐるとかいう意味で、執着を洗い去り、より高い教えを求めさせたということ。具体的には般若部の経々を説いたこと。槌とは「ツチ」、砧は「キヌタ」。したがって槌砧鍛錬とは、砧の上で槌をもって打つこと。仏が衆生の機根をととのえていったことをたとえたことば。

通解

ここは、四大声聞の一人である摩訶迦葉が、仏の大恩を賛嘆しているところである。「世尊は大恩ましまします。希有の事を以って、憐愍教化して、我等を利益したもう、無量億劫にも、誰か能く報ずる者あらん」と。

御義口伝には、次のように仰せである。世尊とは仏のことであり、大恩とは南無妙法蓮華経のことである。仏の大恩を感じ、それに報いようと思うならば、法華経（御本尊）を受持すべきである。これが、すなわち、仏の御恩を報じたてまつることになるのである。大恩を題目（南無妙法蓮華経）というわけは、次に「希有の事を以って」と大恩の内容を説明しているが、その希有の事とは、南無妙法蓮華経のことだからである。

仏は、この大恩の妙法蓮華経を、四十余年間は説かず、最後の八か年に説いたのである。文句の一に、「法王

運を啓く」といっているのも同じ趣旨で、法王とは仏、運とは大恩の妙法蓮華経のことである。いま末法において、日蓮大聖人が南無妙法蓮華経と唱え奉って、日本国の全民衆を不幸から救おうとしているのは、世尊（仏）が大恩をほどこす姿ではないか。

天台大師の弟子の章安大師は、この大恩ということを十種に分析している。

第一に慈悲逗物の恩――これは、仏の慈悲は物にまで逗まるということで、慈悲の広大さを示したものと思われる。

第二に最初下種の恩――最初、中間、今日とわけた意味での最初で、迹門の意では三千塵点劫、本門の意では、五百塵点劫、久遠の下種を指す。

第三に中間随逐の恩――最初下種から、今日（インド出現）までの間であり、その間に何回も出現して、次第に衆生の機根を熟していったこと。

第四に隠徳示拙の恩――もともと仏であるにもかかわらず、インドにおいて修行して仏になったと、徳をかくして、拙い姿を示したこと。

第五に鹿苑施小の恩――鹿野苑というところで、小乗教を説いて衆生を誘引したこと。

第六に耻小慕大の恩――小乗教に執着することを耻とさせ、大乗教をねがわしめたこと、すなわち、方等部の教えを説いたこと。

第七に領地家業の恩――領地家業とは信解品の窮子のたとえの中で、父の長者が、その一切の家財を窮子に知

らしめるところで、実は般若部の教えを説いたことを意味している。

第八に父子決定の恩――父子決定とは、同じく窮子のたとえで、窮子が長者の子であることをさとったことを意味する。すなわち、法華経によって、一切衆生が成仏の記別を与えられたことを意味する。

第九に快得安穏の恩――譬喩品に「身意泰然快得安穏」とあり、衆生が成仏の記を受けて真に歓喜し得たこと。

第十に還用利他の恩――衆生が、進んで、他の衆生を利益することができるようになったこと。

この十恩は衣座室の三軌に当たるのである。

法華文句記の六には「久遠に下種された仏種は、やや割けて芽ばえようとしているが、まだ栄えるにはいたっていない。長遠の恩を何によって報ずることができようか」といっている。

また、「注釈家は、但物として施を天地に答えず、子として生を父母に謝せず、感報斯に亡するを以てなり、といった」といっている。

道暹の法華天台文句輔正記の六に、この文を説明して「物は施を天地に答えずということは、物は天地によって生ずるけれども、その天地のめぐみに対し報恩しようとしない、人の子もまた同様である」といっている。仏の大恩は報じがたいということをたとえたものである。さらに記の六には、「況や復只だ我をして報亡せしむるに縁る斯の恩報じ叵きをや」といっている。輔正記に、この文を説明して「只だ我をして報亡せしむるに縁るとは、仏が声聞を等しく一大涅槃の境地に至らしめたということは絶対に報ずることのできない恩である」といっ

ている。

御義口伝には、次のように仰せである。このように重々の解釈があるけれども、つまるところ南無妙法蓮華経の下種の大恩ということである。下種のゆえに、影の形に随うがごとく、南無妙法蓮華経のもとにしたがっていくのである。今、末法において、日蓮大聖人が三大秘法の南無妙法蓮華経を一切衆生にお与えくださったことは、釈尊の十恩に当たるのである。

章安大師が十恩は衣座室の三軌になるといったのは、法師品（三九四ページ）に「是の善男子、善女人は、如来の室に入り、如来の衣を著、如来の座に坐して、爾して乃し四衆の為に広く斯の経を説くべし。如来の室とは一切衆生の中の大慈悲心是れなり。如来の衣とは柔和忍辱の心是れなり。如来の座とは一切法空是れなり」とあり、御義口伝には「衣とは柔和忍辱の衣・当著忍辱鎧是なり座とは不惜身命の修行なれば空座に居するなり室とは慈悲に住して弘むる故なり母の子を思うが如くなり」とあり、十恩の第一第二第三は大慈為室の御恩に当たり、第四第五第六第七は柔和忍辱衣の御恩に当たり、第八第九第十は諸法空為座の御恩に当たるのである。第六の恥小慕大の恩について、記の六には「ゆえに頓―頓教である華厳経を説いたあとで、小化―阿含経を説き、次に弾斥淘汰し方等部の経を説き、ツチやキヌタで打つように、衆生の機根をととのえていったのである」といっている。

講義

恩については、われわれの報ずべきものに四恩ある。一には一切衆生の恩、二には父母の恩、三には国王の恩、四には三宝の恩である。

最近では、あまり恩についてやかましくいわれていない。しかし、人間の根本倫理（りんり）として、忘恩で良いとは決していえぬと思う。もし忘恩でよいとなれば、社会にあっては、弱肉強食の畜生道に落ち入り、家庭にあっては、全くうるおいのない、冷たい不幸な家庭に終始せざるを得なかろう。したがって、日蓮大聖人は、報恩抄（二九三㌻）に「畜生すら恩を報ずいわうや人倫をや」と恩を報ずべき必要性を強調遊ばされている。しかし、真実の報恩の理も、正法に依らねばわからないともいえる。

現代社会においては、不幸なことに、善悪の基準すらない。明確でなくなっている。倫理の退廃（たいはい）は誠に悲しむべきことである。その道として、なによりもまず、三宝の真髄を知ることである。末法今日の正法たる、三大秘法の御本尊のいわれを、強く知ることに尽きるのである。そして信行に進みゆくことが、一切の恩を報ずる根本になるのである。日蓮大聖人の御聖訓どおりに、自行化他にわたる実践こそが、父母のため、法のため、衆生のため、社会のためにも、最大なる報恩になっているのである。

薬草喩品五箇の大事

薬草喩品五箇の大事

薬草喩品五箇の大事

第一　藥草喩品の事

本文

第一藥草喩品の事　記の七に云く無始の性徳は地の如く大乗の心を発するは種の如し二乗の心を発するは草木の芽茎の如し今初住に入るは同じく仏乗の芽茎等を成ずるが如しと。

御義口伝に云く法華の心を信ずるは種なり諸法実相の内証に入れば仏果を成ずるなり、藥とは九界の衆生の心法なり其の故は権教の心は毒草なり法華に値いぬれば三毒の煩悩の心地を三身果満の種なりと開覚するを藥とは云うなり、今日蓮等の類い妙法の藥を煩悩の草に受くるなり煩悩即菩提生死即涅槃と覚らしむるを喩とは云うなり、釈に云く「喩とは暁訓なり」と藥草喩とは我等行者の事なり。

語訳

無始の性徳　無始無終の永遠の生命に、本来そなわっている仏界のこと。この仏界が本有であるからこそ、衆生の成仏があるのである。これを大地にたとえている。

大乗の心を発するは種の如し　大乗とは、実大乗経たる法華経を指す。法華の心とは、法華経の肝心たる南無妙法蓮華経である。発するとは信ずることである。ゆえに次下には「法華の心を信ずるは種なり」とあるのである。大御本尊を信ずることが成仏の本源の因であるがゆえに種というのである。

二乗の心を発するは草木の芽茎の如し　声聞・縁覚のさとりのこと。いまでいえば、二乗とは学者、芸術家等である。草木の芽茎が種より出生するように、いかに偉大な学者といえども、芸術家といえども、妙法を根底にしなければならない。

今初住に入る　初住とは、五十二位のうち、十住の初めの位をいう。不退の位とされている。二乗は、法華経迹門にきて、作仏を許され、初住に入ったとされている。しかし、本門より望むならば、まだ初住に入ったとはいえない。当体義抄（五一八ページ）に「爾前と迹化の衆とは未だ本門に至らざる時は未断惑の者と云われ彼に至る時正しく初住に叶うなり、妙楽の釈に云く『開迹顕本皆初住に入る』文云云」さらにいえば、初住にのぼる源泉は、南無妙法蓮華経であり、文上の法華経ではない。ゆえに三重秘伝抄に「師の曰く『本因初住の文底に久遠名字の妙法・事の一念三千を秘沈し給えり』云云、応に知るべし、後々の位に登るは前々の行に由るなり云云」（富要集第三巻五〇ページ）とある。いま「初住に入る」ということを、われわれの立ち場からいえば、決意と訳し、信心を根本に、ある人は、学者として、ある人は政治家として、ある人は芸術家として、広宣流布をしていこう、一生成仏をしようと決意することをいうのである。

諸法実相の内証に入れば　記の七では「初住に入る」とあるが、われわれは「諸法実相の内証に入る」のである。諸法実相とは事の一念三千の大御本尊即南無妙法蓮華経である。内証とは外用に対していい、生命それ自体のさとりをいう。「諸法実相の内証に入る」とは、大御本尊と己心と一なりと観ずることをいう。また、諸法とは一切法であり、実相とは仏法であ

る。したがって「諸法実相の内証に入る」とは、「一切の法は皆是れ仏法なり」と確信し、大御本尊を根拠にして、いっさいの活動をしきっていくことをいう。

薬とは九界の衆生の心法なり　権教の心でいえば、九界の衆生の心法は毒草である。しかし法華経の心でいえば、変毒為薬であり、九界の衆生の心法を薬草といいきっていけるのである。

権教の心は毒草なり　権教の教えによれば、三毒に染まった九界の衆生の心法は、成仏するためには、毒草のように有害であり、捨て去らなければならないものとする。

三毒の煩悩の心地　三毒とは、貪、瞋、癡。貪はむさぼり、瞋はいかり、癡はおろかである。観心本尊抄（二四一㌻）に「瞋るは地獄・貪るは餓鬼・癡は畜生」等とあり、地獄界、餓鬼界、畜生界に支配された生命を三毒の煩悩の心地という。

三身果満　三身とは、法、報、応の三身のことであり、仏の身を説明する立て分けである。果とは仏果のことである。満とは、円満ということで、あらゆる面で欠けるところのない、満ち足りた状態をいう。したがって三身果満とは、法報応の三身の仏果が円満にてなわった状態、成仏の境涯のことである。

釈に云く　文句の第五に、譬喩品の譬喩ということを解釈して「譬とは比況なり、喩とは暁訓なり」とある。

通解

妙楽大師の法華文句記に、無始の性徳――衆生の本性は、大地のようなものであり、大乗の心をおこすのは、種をまいたようなものである。二乗の心をおこすのは、草木の芽や茎のようなものであり、今初住の位――不退

地に入るのは、仏乗の芽や茎を成ずるようなものであるといっている。

御義口伝には、次のように仰せである。法華の心――御本尊を信ずることは、仏種を植えたことであり、諸法実相の内証――南無妙法蓮華経の悟りに入れば、成仏の境涯となるのである。

薬草喩品の「薬」とは、九界の衆生の心法のことである。そのゆえは、権教を信ずる心は毒草にたとえられるが、法華(御本尊)にお会いすれば、貪瞋癡の三毒の煩悩の心が、実は法報応の三身をそなえた仏の種であると開覚するのを「薬」というのである。いま末法において、日蓮大聖人およびその門下は、妙法の薬――三大秘法の南無妙法蓮華経を、煩悩の草(心)に受けているのである。煩悩即菩提、生死即涅槃とさとらせることをば「喩」というのである。文句の五には「喩とは暁訓――教えさとすことである」といっている。結局、薬草喩とは、われわれ法華経の行者についていっているのである。

講義

法華経薬草喩品第五の大意は、前の信解品第四に説ける四大声聞が、一乗の譬えを聞き、三乗方便、一乗真実の哲理を知って領解した。しかし此の経は、本来一相一味であるけれども、衆生の機根に従って三乗五乗の別があることを説いていない。そこで薬草喩品に入って、更に一歩進めて、実相一味の法が、機によって三乗五乗の法に分かれることを示したのである。

ここで有名な譬えは、三草二木の譬えである。「一地の所生、一雨の所潤なりと雖も、而も諸の草木、各差

別有るが如し」云云。一地所生・一雨所潤は法華経である。もろもろの草木すなわち三草二木は三乗であり、五乗の機根のことである。いま、われわれの信心の立ち場から論ずれば、大御本尊の大功力が、一地の所生であり、一雨の所潤と拝するのである。おのおの、いかなる境遇にある人たりとも、いかなる性質の持ち主であっても、平等大慧の大功徳を受けることができるとの原理である。

すなわち、政治家は政治家として、実業家は実業家として、学生は学生として、また、老人も青年も少年も、工員も農民も、日本人も外国人も、ひとりも漏れなく、妙法蓮華経に照らされて、絶対の幸福境涯、即ち、成仏することができるのである。これ以上、現実に力を証明している大哲理が、大宗教が、いずこにあろうかと訴えたいものである。当体義抄（五一二ページ）にいわく「正直に方便を捨て但法華経を信じ南無妙法蓮華経と唱うる人は煩悩・業・苦の三道・法身・般若・解脱の三徳と転じて三観・三諦・即一心に顕われ其の人の所住の処は常寂光土なり」と。

第二　此の品述成段の事

本文

第二此の品述成段の事

御義口伝に云く述とは迦葉なり成とは釈尊なり、述成の二字は迦葉・釈尊一致する義なり、所詮・述は所化の領解、成は仏の印加なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と領するは述なり日蓮が讃嘆するは成なり我等が即身成仏を説き極めたる品なり、述成一致符契するは述成不二の即身成仏なり此の述成は法界三千の皆成仏道の述成なり。

語訳

述成　信解品第四で、四大声聞が、仏の譬喩品の説法を領解したことを、長者窮子の譬えを用いて述べたのに対し、この品

では、それを仏が印加（承認）して、さらに説明を重ねている。これを述成という。

述とは迦葉なり　迦葉は、釈迦の十大弟子の一人、頭陀第一といわれ、後に付法蔵第一となった摩訶迦葉のことである。四大声聞の一人として、譬喩品において成仏を許されたのであるが、その迦葉の領解の立ち場を述というのであるとの意。

成とは釈尊なり　成とは、釈尊の印加の立ち場であるという意味。

述成の二字は迦葉・釈尊一致する義なり　教えを受ける側の迦葉の領解の境涯と、教える側（印加する側）の釈尊の境涯とが一致したことを、述成の二字によって表わすのである。

所詮・述は所化の領解、成は仏の印加なり　師弟不二の原理を述べている。述成とは、迦葉と釈迦仏という関係にかぎるのではなく、詮じつめれば、述とは教えられる弟子の領解を意味し、成は師匠である仏の印加（承認）を意味するのである。

述成一致符契するは述成不二の即身成仏なり　符契とは、符節がぴったり合うことをいう。転じて、ものごとが一致することの例に用いられる。師弟不二、境智冥合の原理により成仏することを明かす文である。

此の述成は法界三千の皆成仏道の述成なり　法界とは森羅万象であり、それは一念三千の三千の範ちゅうにおさまる。ゆえにこれを法界三千という。宇宙の森羅万象のことごとくが、妙法蓮華経の当体であることを領解したのであり、またそれを承認したのである。これを、法界三千の皆成仏道の述成といっているのである。

通解

述成というのは、信解品第四で、四大声聞が、仏の譬喩品の説法を領解した旨を申し述べたのに対し、それ

を仏が印加（承認）して、さらに説明を重ねたことをいうのである。

御義口伝には、次のように仰せである。述とは迦葉の領解の立ち場であり、成とは釈尊の印加の立ち場である。つまり述成とは、迦葉と釈尊の境涯が一致したことを示しているのである。つまるところ、述成とは、釈尊と迦葉の関係に限るのではなく、述とは所化、すなわち弟子の領解であり、成とは仏の印加（承認）なのである。

いま、日蓮大聖人の門下が、末法の成仏は、南無妙法蓮華経以外にないと納得することは「述」であり、日蓮大聖人が、その信心を賛嘆されるのは「成」に当たるのである。薬草喩品は、われわれが南無妙法蓮華経によって即身成仏できることを説き切った品である。迦葉の述（領解）と仏の成（印加）とが符節を合わせたように一致するのは、述成不二（師弟不二）の即身成仏を表わしているのである。この述成ということは、法界三千――あらゆる森羅万象が皆成仏道、すなわち妙法の当体であり、不改本位の覚体であるということを領解し、また承認したことを意味するのである。

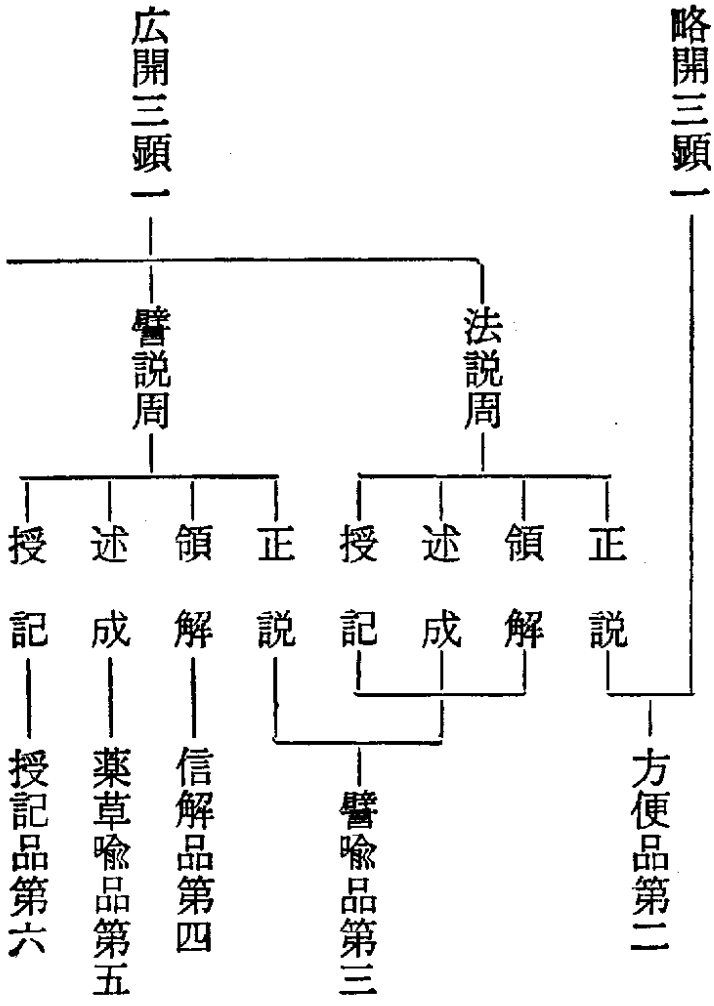
講義

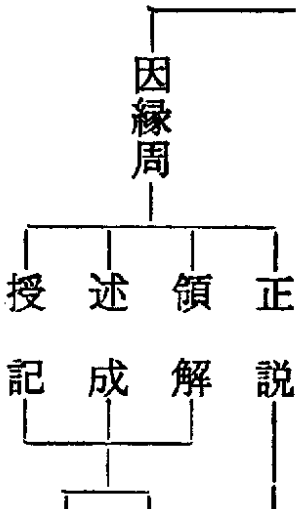
薬草喩品は、譬説周の述成を説いているのである。法華経迹門では、法説周、譬説周、因縁周のいわゆる三周の声聞が成仏を許され、それぞれ正説、領解、述成、授記が説かれている。

すなわち上根の舎利弗は法説周の声聞として、方便品で正説、譬喩品で領解、述成、授記をうけ、法説のみで

悟ったのである。次に中根の迦葉、迦旃延、須菩提、目犍連の四大声聞は、譬説周といわれ、純理のみでは解しがたいので譬えをもって説いている。譬喩品は正説となり三車火宅の譬えを説き、長者窮子の領解を信解品に説き、薬草喩品で述成し、授記品で授記をうけた。第三に下根の富楼那等は、因縁周といわれ、法説と譬説でも理解できず、過去世の因縁を聞いて得道する。大通智勝仏以来の結縁を説いた化城喩品は、因縁周の正説であり、五百弟子受記品と授学無学人記品は、領解、述成、授記の三つを明かしている。授記とはいわゆる劫、国、名号等をそなえた成仏の記別をうけることである。

次に三周の声聞に対する説法を、わかりやすく図示してみよう。





今までのべたのは天台の教相であるが、この述成を、われわれの信心の立ち場から考えれば、どのようになるであろうか。御義口伝にいわく「今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と領するは述なり日蓮が讃嘆するは成なり」と。すなわち述成とは、師弟不二、境智冥合をあらわしていると拝すべきである。日蓮大聖人と日興上人のお姿こそ、述成であり、師弟不二なのである。日蓮大聖人の南無妙法蓮華経の大仏法を、唯お一人余す所なく領解され、大聖人を正しく御本仏と拝した、第二祖日興上人こそ、別して「今日蓮等の類い」のお方である。また、総じては、われら学会員が、もったいなくも「今日蓮等の類い」との仰せに当たるものといえよう。

しかして、五老僧や、その末流は、日蓮大聖人を御本仏と仰げず、南無妙法蓮華経の大御本尊を信じえないゆえに、謗法の徒であり、断じて師弟不二の義は成り立たぬのである。われわれが御本尊を信じて、朝に晩に題目を唱えることによって、御本尊に境智冥合できうるのである。すなわち、わが身に仏界が湧現して、生命力豊かに智慧あふれ、永遠の生命を感得することができるのである。

大聖人が、御書のいたる所に「日蓮等の類い」「日蓮が弟子檀那等」と仰せくださるのは、われら凡夫を御本仏の境涯にまで引き上げてあげよう、境智冥合させてあげようという御慈悲のあらわれであり、まことに感激に

たえないものである。しかるに邪宗の教祖等と称する徒輩は、信者をあたかも奴隷のごとく遇し、信者の犠牲の上に君臨した姿であり、少しも師弟不二、境智冥合等の哲理を備えていないのは、当然のことであろう。われわれの、指導のあり方の根本は、大聖人の御精神のままに、すべて、本人の正しい信心、幸福を得さしめるための、境涯を大きく開かせるための指導でなければならない。また大学等の教育においても、ただ義務的に講義を繰り返すのみではなく、自分と同じ境涯にまで向上させよう、理解せしめようという姿があってこそ、初めて真の教育の本義が達成されるものであると思う。

第三　雖一地所生一雨所潤等の事

本文

第三雖一地所生一雨所潤等の事

御義口伝に云く随縁不変の起る所の文なり、妙楽大師云く「随縁不変の説は大教より出で木石無心の言は小宗より生ず」と、此の大教とは一経の惣体に非ず此の雖一地所生等の十七字を指すなり、一地所生一雨所潤は無差別譬・而諸草木各有差別は有差別譬なり無差別譬の故に妙なり有差別譬の故に法なり云云、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは有差を置くなり廿八品は有差別なり、妙法の五字は無差別なり、一地とは迹門の大地・一雨とは本門の義天・一地とは従因至果・一雨とは従果向因、末法に至って従果向因の一雨を弘通するなり一雨とは題目に余行を交えざるなり、序品の時は雨大法雨と説き此の品の時は一雨所潤と説けり一雨所潤は序品の雨大法雨を重ねて仏説き給うなり、一地とは五字の中の経の一字なり一雨とは五字の中の妙の一字なり法蓮華の三字は三千万法・中にも草木なり三乗・五乗・七方便・九法界なり云云。

語訳

雖一地所生一雨所潤等の事　薬草喩品（二八〇ページ）に「迦葉、譬えば、三千大千世界の山川、谿谷、土地に生いたる所の卉木、叢林、及び諸の薬草、種類若干にして、名色各異なり、密雲弥布して、偏く三千大千世界に覆い、一時に等しく澍ぐ。其の沢普く卉木、叢林、及び諸の薬草の小根、小茎、小枝、小葉、中根、中茎、中枝、中葉、大根、大茎、大枝、大葉に洽う。諸樹の大小、上中下に随って、各受くる所有り。一雲の雨す所、其の種性に称うて、而も生長することを得て、華果敷け実なる。一地の所生、一雨の所潤なりと雖も、而も諸の草木、各差別有るが如し」とある。同じ大地に生じ、同じ雨のめぐみを受けながら、しかも生ずる草や木に差別があるということ。実相一味の法が、機によって三乗五乗と分かれることを示したもの。いまでいえば、男女のちがい、おのおのの特徴、個性を異にし、また政治家、学者、経済人、サラリーマン、学生、工員等、種々の差別の世界に住しながら、根底は、いっさいの人々が妙法の当体であり、平等であることを意味する。

随縁不変　随縁真如の智、不変真如の理のこと。真如とは、真実でありのままの実体すなわち妙法である。真理というものはその実体は永遠に変わらぬものである。この不変の真理の体性を不変真如の理という。この不変の真理も、実践にうつされ、現実にあらわれるときには、縁にふれて種々の相をあらわす。この実践において、縁にふれ種々の相をあらわすことを、随縁真如の智という。ここでは「雖一地所生、一雨所潤」が不変真如の理であり、「而諸草木、各有差別」が随縁真如の智をあらわす。随縁真如の智、不変真如の理については、御義口伝「南無妙法蓮華経」の項の講義（五九ページ）参照。

大教　ここでは一往、法華経をさすが、再往は、法華経全体を意味するのでなく、この段の表題にあげられた「雖一地所生」

以下の十七文字を指すこと、本文のとおりである。

木石無心　木や石等、非情な物質の世界には生命がない、仏性がないと考える思想。結局十界互具、一念三千の生命論を説いていない、爾前教の教えに起因する考えであることは本文のとおりである。

小宗　小乗教のこと。しかし、広く爾前教をさすと考えてもよい。

一経の惣体　法華経二十八品全体のこと。

無差別譬、有差別譬　無差別譬とは、物事の差別がなく平等な面を取り上げ、これをあらわす譬えのことであり、有差別譬とは、物事に差別があることの譬えをいう。

無差別譬の故に妙なり有差別譬の故に法なり　妙とは不思議ということである。ありとあらゆるものの本質――これは妙としかいいようがない。いっさいが妙である。したがって妙は無差別である。法とは現象と約す。現実にあらわれている姿は、ことごとく差別相である。ゆえに法とは有差別譬なのである。

有差を置くなり　有差を差し置くということ。無量義は一法より生じ、また一切法は仏法に帰着するのである。無量の義すなわち一切法は、差別の世界である。一法とは妙法であり、無差別平等の世界である。日蓮大聖人の仏法は一切法の根底、無量義の根源たる妙法を説き明かすがゆえに「有差を置く」のである。

廿八品は有差別なり、妙法の五字は無差別なり　これは、種脱相対のところである。釈迦仏法はまだ差別の世界にとどまっているのである。なぜなら、釈迦仏法は、脱益の仏法であり、本已有善の機の人のみにあてはまるものである。それに対し大聖人の仏法は、いかなる人をも救っていくのである。ゆえに釈迦仏法は有差別であり、大聖人の仏法は無差別である。諫暁八幡抄（五八九㌻）にいわく「仏は法華経謗法の者を治し給はず在世には無きゆへに、末法には一乗の強敵充満すべし不軽菩薩の利益此れなり」と。また、釈尊は色相荘厳の仏であり、その仏になるにも歴劫修行をしなければならないとし、まだ

差別相を免がれない。これに対し、大聖人の仏法は、凡夫即極の大仏法であり、大聖人御自身も凡夫僧として御出現になったものである。ゆえに、仏に約して二十八品は有差別であり、大聖人の仏法は無差別である。

一地とは迹門の大地・一雨とは本門の義天　一地＝大地とは不変真如の理をあらわし、迹門である。一雨＝天とは随縁真如の智を示し、本門である。

一地とは従因至果・一雨とは従果向因　大地から草木が出生する姿は、因より果に至る姿であり、したがって一地は、従因至果である。雨は天より降ってくる。これは、果より因に向かう姿である。ゆえに一雨は従果向因である。従因至果、従果向因についての詳細は、講義参照のこと。

従果向因の一雨を弘通するなり　一雨とは、本門、従果向因とは、大聖人の下種本因妙の仏法をあらわす。すなわち、従果向因の一雨を弘通するとは、文上脱益の釈迦仏法を簡び、文底下種の大聖人の仏法を弘通することである。

雨大法雨　「大法の雨を雨し」と読む。序品（一三七ページ）には「今仏世尊、大法を説き、大法の雨を雨し（乃至）大法の義を演べんと欲するならん」とある。

一地とは五字の中の経の一字なり……　妙法蓮華経の五字に配して論ずれば、一地は経にあたる。地より万象が生長するごとく経より諸経が起こるのである。一雨とは妙である。雨が万象をうるおし、利益するように、万象は妙の一字より出生し、その生命と成長力とを与えられ、育ってゆく根源の力とするのである。三千万法の森羅万象は、法であり、また、因果を倶時相即するのであるから、蓮華の当体である。

三乗・五乗・七方便・九法界　三乗とは、声聞・縁覚・菩薩、五乗とは三乗と人・天、七方便とは、蔵教の声聞・縁覚・菩薩、通教の声聞・縁覚・菩薩と別教の菩薩をいう。

通解

ここは、「雖一地所生一雨所潤而諸草木各有差別」（一地の所生、一雨の所潤なりと雖も、而も諸の草木、各差別有るが如し）についての御義口伝である。

御義口伝には、次のように仰せである。この文から随縁真如、不変真如ということがいわれるのである。妙楽大師は「随縁不変の説は大教より出で木石無心の言は小宗より生ず」とのべている。随縁は本門、不変は迹門、小宗は爾前経、小乗経を指すと思われる。「木石をもって無心とみる」の言は、すなわち永遠の生命を説かない、成仏をみとめない小乗の教えからきているということである。ここで言う大教とは、法華経全体を指すのではなく、「雖一地所生」等の十七字を指しているのである。「一地の所生、一雨の所潤」ということは、物事の無差別の面をたとえたのであり、「而も諸の草木、各差別有るが如し」ということは、物事に差別のあることをたとえているのである。妙法の妙は無差別譬を意味し、法は有差別譬を意味するのである。

いま、日蓮大聖人およびその門下が南無妙法蓮華経と唱え奉ることは、有差別を差し置くのであり、すなわち無差別なのである。

廿八品は有差別であり、妙法の五字は無差別である。一地というのは迹門という大地、一雨というのは本門という天、また一地とは従因至果、一雨とは従果向因を意味しているのである。いま末法になって、従果向因の一雨、

すなわち南無妙法蓮華経を弘通しているのである。一雨とは、題目に題目以外の余計なものを少しも混ぜないということである。序品（一三七ページ）には雨大法雨（今仏世尊、大法を説き、大法の雨を雨し）と説き、この薬草喩品では一雨所潤と説いているが、一雨所潤は序品の雨大法雨を重ねてのべたのである。一地とは五字の中の一番下の経の一字であり、一雨とは五字の中の一番上の妙の一字である。中間の法蓮華の三字は、三千万法、とりわけ草木である。三乗（声聞、縁覚の二乗と菩薩）、五乗（三乗と人天）、七方便（蔵教の声聞・縁覚・菩薩と通教の声聞・縁覚・菩薩と別教の菩薩）、九法界である。

講義

「一雨所潤」とは、題目をあげていくことである。薬草喩品（二八九ページ）に「等しく法雨を雨して」とあるように、病気、貧困、家庭不和など、どんな悩みがあろうとも、御本尊を信じ、題目をあげることによって、すべての悩みは解決できうることを意味しているのである。これ御本尊の、無差別、平等の慈悲である。

また、一雨とは、十界の言語、音声の振舞いのすべてである。中でも、言語、音声をもって折伏していくのは、同じく一雨所潤である。そして、この折伏の法雨は、地獄の衆生、餓鬼の衆生、畜生の衆生等、あらゆる境涯の人々に降りそそぐのである。ゆえに折伏は、相手の地位や境遇の如何を選ぶことなく、あらゆる人に対して折伏できるのである。そして、すべての人が御本尊を信じて、大功徳をうけることを知らなければならない。

次に従因至果と従果向因について考えてみよう。まず従因至果と従果向因という法門は、伝教大師の口伝の法門といわれている。すなわち玄義私類聚第一に「伝教大師異朝に入り、行満座主に値いて従因至果の次第を伝え道邃和尚に随って従果向因の次第を伝うるなり」等と伝えられている。また天台宗の玄義大綱見聞にも「始覚門に詮せらるる処の実相の理という物は、従因至果・断迷開悟の顕なり、さて本覚の教の詮せらるる処の理は、従果向因・無造無作の実理なり」と出ている。ゆえに従因至果とは、迹門の談道で、迷いの衆生が修行の因によって成仏の果に向かう姿を示している。また従果向因とは、本門の本覚の法門として用いられているのである。

以来、天台宗で用いられ、真言宗でも一部盗用したが、日蓮大聖人が法華経の迹門は従因至果であり、法華経本門は従果向因なりとして、この御義口伝で用いられたのである。

さらに御相伝書たる百六箇抄の中には、さらに深い法門として、多く引用されているが、本果の妙法蓮華経の本迹（八五五㌻）の中の「今日の本果は従因至果なれば本の本果には劣るなり」の文について、日寛上人は末法相応抄（富要集第三巻一七四㌻）に次のように説いている。

すなわち「これは今日の本果と、本の本果との勝劣を判じている。同じく応仏昇進と雖も若し所顕に従えば勝劣がある。今日の本果は迹の因門を開して本の果門を顕わすゆえに従因至果である。若し本の本果は迹の本果を開して本の本因を顕わすゆえに従果向因である。勝劣をいえば、今日の本果は迹の因門を開して本の果門を顕わす。所顕の本果を若し本因に望むれば、なお本の上の迹なるゆえに今日の本果は劣るのである。若し本の本果は迹の本因を開して本の本因を顕わす。所顕の本因は独一の本門のゆえに本の本果は勝れるのである。所顕の法

門・勝劣殊なりと雖も今日の本果は同じくこれ色相荘厳の応仏昇進の自受用身である」と。

ここでは、従因至果は、今日の本果すなわち三千年前の法華経本門文上の教えであるとし、従果向因は本の本果すなわち五百塵点劫前の久遠の法華経本門文上の教えであるとして用いられているのである。すなわち従果向因とは、釈迦仏法の本果の教えを開いて、日蓮大聖人の本因妙の仏法を顕わす意味で用いられているわけである。

それでは、われわれの生活に約して論ずれば、どうなるかといえば、われわれが折伏をうけて入信し、仏道修行に励んで幸福になっていく姿は従因至果であるが、その幸福になったという結果の、そもそもの根本原因を尋ねていくと、久遠元初いらい御本尊の本眷属として三大秘法を信じていたという本因がわかるわけで、これが従果向因といえるであろう。諸法実相抄（一三六〇㌻）に「地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目なり」とおおせられるのは従果向因である。また、この世に生まれてきたということは、結果であり従因至果であるが、なぜこの世に生まれなければならなかったかと、宿世の原因を尋ねていくのは従果向因となる。自分の生活状態をみれば、いろいろな原因によって幸不幸、成功と失敗が生じてくる。しかし、本源を尋ねれば、すべて信心の一念に収まり、妙法に照らされているのである。

また、ここで妙法蓮華経の妙ということについてとくに考えてみよう。幾億万の星の存在、地球の発生、さらに生命の誕生、等々、因果の理法に非ざるものはないはずである。それらの根幹を指して妙というのである。例えば眼が悪い、どうして眼が悪いように宿命ずけられて生まれたか。勉強しすぎて悪くなったといえば、それは近因である。勉強しても悪くならない人も多数いる。その因果を、一段二段深く思索してみれば、実に不思議なこ

と感ぜざるを得ない。不思議とは、無ということでもない。そして一つの法則が有り得ぬという意味でも決してない。非常に、思議しがたき大法則という意味を、一口に妙と説かれたものである。ゆえに、実態の力は厳然とある。その実態の本源をば不可思議というのである。現代科学では説明でき得ぬ奥義を指すともいえよう。

次に、差別と平等との関係について考えてみよう。南無妙法蓮華経を唱えることは、平等の中の平等である。すなわち譬喩品（二三三ページ）に「三界は、皆是れ我が有なり……吾が子なり」云云と。大聖人のもとに、全部、子どもであり、弟子なのである。成仏するためには、大臣でも財閥でも、学生でも、男女、老若、貴賤をとわず、御本尊に題目をとなえる以外絶対にないのである。このように根本は無差別なのである。ただし、実際の世界においては、差別が存在するのである。

衆生世間や国土世間の世間とは、差別の義である。次の「第四破有法王出現世間の事」には、「世間とは日本国なり」とある。アメリカとかフランスとか日本とか相対すれば差別になる。国土世間である。衆生世間の場合にも、イヌやネコや、その他から見れば、人間は差別されるわけである。今度は、人間のなかでも、技術者である、政治家である、または、家庭の主婦である、科学者である、芸術家だとか、おのずから差別ができてくるものである。差別は絶対に、久遠元初以来、尽未来際まであるのが道理なのである。であるから、国土世間、衆生世間、五陰世間と、すべて定義づけられてあるわけである。広宣流布ができても、当然差別はある。これが、実相であり社会の道理なのである。

青年、婦人、壮年等々、人生をみても差別はあり、職業も、みなまちまちなのが実態となろう。

能力、指導力……という点でも、適材適所という点でも、自然に差別が出て来るものである。ただし、いかなる差別があっても、成仏は疑いない。妙法を根底とした幸福の確立には差別はなくなってくるわけである。

第四　破有法王出現世間の事

本文

第四破有法王出現世間の事

御義口伝に云く有とは謗法の者なり破とは折伏なり法王とは法華経の行者なり世間とは日本国なり、又云く破は空・有は仮・法王は中道なり、されば此の文をば釈迦如来の種子と伝うるなり惣じて三世の諸仏の出世は此の文に依るなり、有とは三界廿五有なり破とは有執を破するなり法王とは十界の衆生の心法なり王とは心法を云うなり諸法実相と開くを破有法王とは云うなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは謗法の有執を断じて釈迦法王と成ると云う事なり、破有の二字を以て釈迦如来の種子とは云うなり、又云く有と云うは我等が煩悩生死なり此の煩悩生死を捨てて別に菩提涅槃有りと云うは権教権門の心なり、今経の心は煩悩生死を其の儘置いて菩提涅槃と開く所を破と云うなり、有とは煩悩・破とは南無妙法蓮華経なり有は所破なり破は能破なり能破・所破共に実相の一理なり、序品の時は尽諸有結と説き此の品には破有法王と説き譬喩品の時は皆是我有と宣べたり

云云。

語訳

破有法王出現世間の事　薬草喩品（二八四ページ）に「有を破する法王、世間に出現して、衆生の欲に随いて、種種に法を説く」とある。

有とは謗法の者なり　有とは、三界六道の迷い、執着をいう。これに二十五ある。これを二十五有という。いま、謗法の人は二十五有に執着し、苦しみの生活を送るがゆえに、このように仰せられているのである。

破とは折伏なり　天台も「法華折伏、破権門理」といっているように、折伏とは相手の邪義を打ち破り正法に帰せしめることである。

破は空・有は仮・法王は中道なり　破は、仮有の世界をうち破った、空の世界である。有とは仮有の世界、すなわち現実にあらわれた姿、形をいう。法王は生命の本質という意味であるから中道とも考えられる。信心から論ずれば、「破」とは、煩悩を「破」することであり、不幸の原因を破することである。また「有」とは、煩悩のことであり、法王とは菩提である。煩悩を菩提と開くことが破である。したがって、破有法王とは、煩悩即菩提の当体といえよう。

釈迦如来の種子　釈迦如来となる種子、すなわち成仏の因のことである。破有法王は、空仮中の三諦であることは御文のとおりである。空仮中の三諦とは、南無妙法蓮華経なのである。御義口伝（七一七ページ）には「此の円融の三諦は何物ぞ所謂南無妙法蓮華経是なり」とあり、また同（七二二ページ）には「舎とは空諦利とは仮諦弗とは中道なり円融三諦の妙法なり」とある。

南無妙法蓮華経と唱えることが成仏の根源なのである。また三世の諸仏も妙法によって仏になることができるのである。

三界廿五有　講義を参照。

諸法実相と開くを破有法王とは云うなり　この前文に「法王とは十界の衆生の心法なり王とは心法を云うなり」とあり、煩悩を捨て去って菩提があるという執着を打ち破って、十界の衆生ことごとく妙法の当体であるということが「破有法王」であり、即それは、諸法実相と開くことなのである。

釈迦法王　ここでは仏という意味。

今経の心　今経とは法華経のこと。

能破・所破　能は能動、所は受動である。能破は煩悩を菩提と開いていくところの南無妙法蓮華経であり、所破とは、破らるべき（開かるべき）煩悩であり、ともに、実相である。煩悩といえども、それは実相なのである。

尽諸有結（じんしょうけつ）　序品（一一九ページ）に「諸の有結を尽して、心自在を得たり」と説かれている。有もやはり、煩悩を意味する。尽くすとは煩悩を断じ尽くすということであり、法華経の心でいえば、煩悩即菩提と開くことである。

皆是我有　譬喩品（二三三ページ）の「今此の三界は、皆是れ我が有なり」の文。御義口伝（七二四ページ）「第九今此三界等の事」参照。この三界は、ことごとく仏の所有であるという意味。すなわち、三界六道の世界が即仏界とあらわれることである。三界六道の迷いが即法王たる仏界とあらわれることが「破有法王」であるから、譬喩品の「皆是我有」とこの品の「破有法王」とは同じ意味である。

通解

「有を破する法王、世間に出現して、衆生の欲に随いて、種種に法を説く」というところである。

御義口伝には、次のように仰せである。有とは謗法の者である。破とは折伏することである。法王とは法華経の行者である。世間とは、日本国のことである。つまり、御本仏・日蓮大聖人が日本に出現されて、謗法の者を折伏されるということである。また、破は空・有は仮・法王は中道で、三諦を意味しているのである。それゆえ、この文は釈迦如来となる――すなわち成仏の種であると伝えられている。総じて、三世の諸仏の出現は、この文にしたがっているのである。有とは三界二十五有（三界六道を二十五種に分けたもの。欲界の四趣、四洲、六欲天、大梵天、色界の四禅、無色界の四天、無想天、那含天をいう）である。破とは有に対する執着を破するのである。法王とは、十界の衆生の心法である。王とは心法を意味するのである。諸法実相と開く、すなわち御本尊を信ずることを破有法王というのである。

いま日蓮大聖人およびその門下が南無妙法蓮華経と唱え奉ることは、謗法に対する執着を破するところの法華経の行者の立ち場なのである。破有、すなわち謗法破折こそ仏になる種子なのである。また、有とは、われわれの煩悩や生老病死の苦しみである。この煩悩生死を捨てたところに、別に菩提涅槃があるというのは権教権門の結論である。しかし、大聖人の仏法の根本は、御本尊を信ずることにより煩悩を菩提と開き、生死を即涅槃と開

く、すなわち、煩悩即菩提、生死即涅槃であり、そのことを破といっているのである。破有の有とは煩悩、破とは南無妙法蓮華経に当たるのである。有、すなわち煩悩は破らるべきものであり、破、すなわち南無妙法蓮華経は破っていくほうであるが、破っていくほうも、破らるべきものも、ともに諸法実相の一理であり、生死の真の姿なのである。序品の時は、尽諸有結（諸の有結を尽くして）と説き、この薬草喩品では、破有法王と説き、譬喩品の時は皆是我有（皆是れ我が有なり）とのべている。

講義

まず、二十五有とは、この世に厳然と実在しているということが「有」なのである。

目に見えぬから、無であるとは断定できないものである。欲望界、物質界、並に精神界等、すべて現実に実在して、何らかの影響を、互いにおよぼしている――その実在また作用活動をば「有」というのである。空気も、媒煙も、全部「有」であるといえる。風邪を引いた――その伝染の原因になるものも、やはり「有」である。

要するに、あらゆる意味で、わが生命活動に影響のある実在をいうのである。この宇宙にあるものは、お互いに関係しあっている。星の光でも、太陽の光でも、ぜんぶ関係しあっているのである。同様に、わが一念も、全宇宙に関係しているのである。これが妙法の原理である。

なお念のためにいえば、三界とは欲界（欲望の世界）色界（物質の世界）無色界（精神の世界）のことである。ま

た二十五有とは、三界六道を分別したもので、まず欲界では、四州（東弗婆提、西瞿耶尼、南閻浮提、北鬱単越）四趣（地獄、餓鬼、畜生、修羅）六欲天（四王天、忉利天、夜摩天、兜率天、化楽天、他化自在天）の十四有であり、色界では次の五有、大梵天と色界の四禅（初禅、二禅、三禅、四禅）、終わり無色界は次の六有、無色界の四天（空処、識処、無処有処、非想非非想処）無想天、那含天、あわせて二十五有となり、この有を破するのが仏法である。

なぜ二十五の数を算出したのかといえば、「三蔵法数」に次のように説いている。

「二十五有は六道の迷いを出でない。生あり死あり因果が亡びないゆえである。しかして梵天王、無想天および那含天が四禅天の中にあるのに別にここにその名を出している。それは外道が梵天王を万物を生ずる主として悪しく敬い、また無想天は無心をもって涅槃となし、五那含天は真解脱である等と外道が誤って考えているので、この三天をとくに三有として打ち破り、外道を破折しているのである」と。

第五　我観一切・普皆平等・無有彼此・愛憎之心・我無貪著・亦無限礙の事

本文

第五我観一切・普皆平等・無有彼此・愛憎之心・我無貪著・亦無限礙の事

御義口伝に云く此の六句の文は五識なり我観一切普皆平等とは九識なり無有彼此とは八識なり愛憎之心とは七識なり我無貪著とは六識なり亦無限礙とは五識なり我等衆生の観法の大体なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は豈我観一切普皆平等の九識の修行に非ずや爾らば無有彼此に非ずや愛憎之心に非ずや我無貪著に非ずや亦無限礙に非ずや。

語訳

我観一切……　薬草喩品の「我一切を観ること、普く皆平等にして、彼此、愛憎の心有ること無し、我貪著無く、亦限礙無し、

恒に一切の為に、平等に法を説く、一人の為にするが如く、衆多も亦然なり」の部分である。

此の六句の文は五識なり　「此の六句の文」とは、表題にあげている「我観一切……」等の六句の文である。五識とは、第九識、第八識、第七識、第六識、第五識の五つの識ということである。「識」とは、心が内外の対境に対して、これは何、あれは何と、その異同を知る作用をいうのである。六識とは、眼、耳、鼻、舌、身、意の、各々の識があると立てる。眼識は「色」を縁として物の区別異同を知る識。以下各々、声、香、味、触、法を縁とする。第七識を末那識という。思量によって物事を判断していく識。第八識を阿頼耶識という。染浄の二法を含む。浄法薫ずれば菩提となり、染法薫ずれば煩悩となる。第九識は、染浄含蔵の第八識に対して、真浄識、根本浄識をいう。十界に約せば、六識は二乗、八識は菩薩、九識は仏である。講義参照。

我観一切普皆平等とは九識なり　一切を、なんの偏頗もなく、平等に見ていく仏の知見は、九識である。寿量品に「如来如実知見」とあるのは、これである。なお信心に約せば、信心根本に仏智をいただき、人生社会を見透してゆける活動ともいえよう。

無有彼此とは八識なり　第八識の阿頼耶識は、染浄の二法を含む。すなわち、染法とか浄法といった、相対的世界観で判断していく第八識は、「彼此」の別があるといえる。

愛憎之心とは七識なり　第七識の末那識は、思量識ともいう。深き思索をして、判断することである。しかしいかに深く思索しても、いまだ愛憎の心を存するという。ある特定の思想に偏するごときはこれである。

我無貪著とは六識なり　六識とは、六根による判断である。いかに意識し、正確に判断しようとしても、六識では、貪著がある。執着心が抜け切れていないのである。

亦無限礙とは五識なり　五識とは、六識のうち、「意識」をとり除く。五根それ自体をいう。すなわち、意識のない、五根自

体の感じ方であるから、感覚的に行動するようになる。したがって、五識だけでは、あまり動物と変わりないといえる。瞳礙が最も多いことがわかる。

我等衆生の観法の大体なり　以上の五つの識が、われわれ衆生の物の見方の大体である。

通解

これは、薬草喩品（二八八ページ）に「我一切を観ること、普く皆平等にして、彼此、愛憎の心有ること無し、我貪著無く、亦限礙無し、恒に一切の為に、平等に法を説く、一人の為にするが如く、衆多も亦然なり」とあるところである。

御義口伝には、次のように仰せである。この六句の文は、五つの識、すなわち、九識、八識、七識、六識、五識の五つの識をあらわしている。

「我一切を観ること、普く皆平等にして」とは、第九識である。「彼此有ること無し」とは、第八識を指して、八識の染浄の二法を含む、相対的な世界を離れていることを意味する。「愛憎の心無し」とは、第七識を指して、あるものを憎み、ある者を愛するという差別観を排するのである。「我貪著無く」とは、第六識を指し、仏は、まだ貪著を存する第六の境涯を開いて、偏頗のない境地に立っていることを示すのである。「亦限礙無し」とは、五識を指し、意識がなく、ただ本能的に五官で判断するところに生ずる障りをはなれることを意味する。これら

の、五識乃至九識が、われら衆生の観法、物の見方の大体である。

いま、日蓮大聖人およびその門下が、南無妙法蓮華経と唱え奉るのは、どうして、「一切を観ること、普く皆平等にして」の九識の修行でないことがあろうか。したがって、仏の境地に立脚する以上、無有彼此であり、愛憎之心が無いということであり、我無貪著であり、亦無限礙である。

講義

この段には、五識、六識、七識、八識、九識等の唯識論が説かれている。唯識論は、弥勒、無著、世親等の菩薩によって説かれたものである。竜樹、天親、天台等のいわゆる中観論派と呼ばれる仏法の正統に対して、唯識哲学をもって対抗した一派である。法相宗、三論宗などが、唯識哲学によっている。

唯識とは、ただ識のみという意で、一切の諸法は、みな心や識の転変であり、実有なるものは心識のみであるという説である。唯識論は、このように観念論、唯心論と相似したものであるが、現代のそれと比べてみれば、格段にすぐれたものといえよう。しかし、この世親等の唯識哲学も、天台大師の三諦円融、一念三千の法門よりみれば、まだ部分観であり、低級のそしりをまぬがれないのも明らかである。

日蓮大聖人は、その上に立って、五識、六識、七識等を援用され、御本仏、日蓮大聖人の胸中の肉団におわします九識心王は、己心の本尊なりと申されている。日女御前御返事（一二四四ページ）に「此の御本尊全く余所に求

る事なかれ・只我れ等衆生の法華経を持ちて南無妙法蓮華経と唱うる胸中の肉団におはしますなり、是を九識心王真如の都とは申すなり」と。

法相宗では世親の唯識三十論頌、唯識二十論等を所依の経論としている。厳密にいえば、唯識哲学の中でも、弥勒系統、無著系統、世親系統では、それぞれ立てる法門に異なりがある。世親の唯識三十論頌によれば、識の転変とは異熟と思量と境の万別との三種となるといい、この三つは阿頼耶識（八識）、思量識（七識）、六識であるという。そして一切は唯識のみであると立て、認識の対境は心内に映現する相分で、本質を縁として生じた影像にすぎず、その本質は第八阿頼耶識に含まれる種子より生じたものであるから、結局は、すべて、識の所変に外ならぬと説いている。

いま、われわれの生活に照らして、簡単にのべれば、次のようになるであろう。

五識とは、眼、耳、鼻、舌、身、の識によって、意の識が含まれないゆえに、行動それ自体が五識といえよう。雨が降り、風が吹き、雲が湧く外界の状態それ自体を感ずる姿である。六識になると、意識が加わり、われわれの通常の日常心である。五識になかった比量や推論をするようになる。すなわち、五識ではまだ縄を蛇と見あやまったりするが、六識はそのようなことなく、さらに具体的に、どれほど烈しく雨が降り、風が吹いたかも比量することができる状態である。七識になると、さらに思量の働きを付して、考えるにいたる。すなわち行動しようと思考する直前の状態である。雨や風を願い要請する姿である。八識になると、雨を降らせようか、風を吹かせようかと明らかに思考して、具体的に行動する姿である。

第九識は、最高の識であるがゆえに九識心王ともいい、われらの信心の一念である。宇宙そのものであり、我即宇宙の一念にも通ずるのである。さらに根本的には、わが己心の仏界ということができる。

授記品四箇の大事

授記品四箇の大事

授記品四箇の大事

第一授記の事

本文

第一授記の事　文句の七に云く授とは是れ与の義なりと。御義口伝に云く記とは南無妙法蓮華経なり授とは日本国の一切衆生なり不信の者には授けざるなり又之を受けざるなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経の記を受くるなり、又云く授記とは法界の授記なり地獄の授記は悪因なれば悪業の授記を罪人に授くるなり余は之に准じて知る可きなり、生の記有れば必ず死す死の記あれば又生ず三世常恒の授記なり、所詮中根の四大声聞とは我等が生老病死の四相なり、迦葉は生の相・迦旃延は老の相・目連は病の相・須菩提は死の相なり、法華に来って生老病死の四相を四大声聞と顕したり是れ即ち八相作仏なり、諸法実相の振舞なりと記を授くるなり妙法の授記なるが故に法界の授記なり、蓮華の授記なるが故に法界清浄なり経の授記なるが故に衆生の語言音声は三世常恒の授記なり、唯一言に授記すべき南無妙法蓮華経なり云云。

語訳

記　記別の略。未来の事を予記分別すること。未来世の成仏に対する仏からの印可（印加）である。これを授けることを「授記」という。開目抄上（一九三ページ）に「劫・国・名号と申して二乗成仏の国をさだめ劫をしるし所化の弟子なんどを定めさせ給へば」とあり、劫・国・名号が与えられることである。たとえば、授記品では、迦葉が、名を光明如来、国を光徳、劫を大荘厳と授記されている。

記とは南無妙法蓮華経なり　末法において、成仏の法は、南無妙法蓮華経以外にないから、このようにいわれた。

授とは日本国の一切衆生なり　授記の授とは、末法においては、日蓮大聖人が、日本国の一切衆生に南無妙法蓮華経の記を授けられることなのであるとの意。

法界の授記　法界とは宇宙、森羅万象をいう。法界の授記とは、森羅万象にわたる授記ということ。授記を広く論ずるならば、必ずしも仏界にのみ限るのではない。地獄界、餓鬼界等、十界通じて授記のあるをいう。具体的には、以下示されているごとくである。

地獄の授記　たとえば悪思想、悪師等の悪因によって、地獄の業を授けられることをいう。

三世常恒の授記　三世とは、過去世、現世、未来世をいう。常恒は「常」も「恒」も、ともに「つねに」の意味。三世常恒で永遠の生命ということ。すなわち永遠の生命にわたる授記をいう。生死生死と永遠に繰り返していく生命に内在する授記である。生死の二法は絶対に例外のない鉄則である。生の授記があれば必ず死の授記があり、死の授記があれば必ず生の授記

がある。これを三世常恒の授記という。信心に約せば大御本尊を信ずることにより永遠の幸福を授記されることである。

四大声聞　慧命須菩提、摩訶迦旃延、摩訶迦葉、摩訶目犍連の四人をいう。譬喩品を聞いて領解する中根の声聞、すなわち喩説周である。

生老病死の四相を四大声聞と顕したり　迦葉は生の相、迦旃延は老の相、目連は病の相、須菩提は死の相をそれぞれあらわしており、これらの四大声聞が法華経にきて成仏の記を与えられたということは、生・老・病・死が即八相作仏とあらわれたことを意味するのである。

八相作仏　仏が応身または化身を現じて、作仏（または成道）を中心とする八種の相を示現して説法教化することをいう。八相とは下天、託胎、出胎、出家、降魔、成道、転法輪、入涅槃をいう。仏の一生の姿である。われわれもまた、南無妙法蓮華経と唱えるならば、生・老・病・死が即八相作仏とあらわれるのである。

諸法実相の振舞なりと記を授く　諸法実相とは、宇宙の森羅万象が、ことごとく妙法蓮華経の当体であるということ。いっさいの現象は、ことごとく妙法の所作であるという授記である。信心に約せば、大御本尊を信じ、南無妙法蓮華経と唱えることによって、いっさいの活動が妙法のリズムにかなって、幸福な人生を歩むことができるのである。

蓮華の授記　蓮華には「清浄」「因果倶時」等の義がある。観心本尊抄文段には「蓮字には淤泥不染の徳、種子不失の徳、因果同時の徳其の外十八円満等の種々の深義之れあり」（富要集第四巻二二九ページ）とある。宇宙の森羅万象は蓮華の当体であると授記されたことである。すなわち法界は本来清浄であると授記されたこと。信心に約せば、信心によって、われわれの一切の活動が仏界に照らされた清浄な活動となり、また所住の国土、環境も清浄な姿に変わること。

経の授記　経には言語音声の義と、経歴すなわち時間の経過を意味する場合がある。ここでは後者の義。妙法蓮華経の経は三世常恒ということである。御義口伝（七〇八ページ）には「三世常恒なるを経と云うなり」とある。経の授記とは、宇宙の森

羅万象ことごとく三世常恒であるという授記が与えられたことである。生命論からいえば、われわれの生命が永遠であるという授記であり、信心に約せば、信心によって永遠の幸福を得るということである。

通解

文句の七に、授記の授とは与という意味であると釈している。

御義口伝には、次のように仰せである。記とは南無妙法蓮華経のことである。そして授とは、日本国の一切衆生に授けるのである。ただし、不信の者には授けないし、また、不信の者は、この南無妙法蓮華経の記を受けない。いま、日蓮大聖人およびその門下は、南無妙法蓮華経の記を受けるのである。また、授記とは法界の授記ということであって、たとえば地獄の授記は悪因であるから悪業の授記を罪人に授けることなのである。餓鬼、畜生……菩薩、仏界と、十界それぞれ、これに準じて知るべきである。また、生の記があれば必ず死があり、死の記があれば、また生ずるのであって、三世常恒の授記なのである。

所詮、法華経迹門に説かれる中根の四大声聞とは、われわれの生老病死の四相をあらわしているのである。すなわち、迦葉は生の相をあらわし、迦旃延は老の相、目連は病の相、須菩提は死の相を示しているのである。この生老病死の四相を、法華経にきて、四大声聞としてあらわしたのである。これはすなわち八相作仏である。

この生老病死は諸法実相の振舞いである。すなわち妙法蓮華経の所作であるとの記を授けたのである。妙法の

授記であるがゆえに法界の授記である。蓮華の授記であるがゆえに法界清浄である。経の授記であるがゆえに衆生の語言音声は三世常恒である。これらを南無妙法蓮華経のただ一言におさめ、われわれ衆生に授記せられたのである。

講義

末法今時においては、真実の授記は、ただ、三大秘法の本尊である。なぜならば、絶対に、これ以外に、成仏でき得ぬからである——との御断言の文である。

他の、いかなる宗教、本尊を、信奉、実践しても、あたかも、屈歩虫（しゃくとり虫）の天に至らざるがごとく、決して成仏でき得ない。古今東西の哲学、思想も、みな、三大秘法の大仏法の序分であり、流通分にすぎない。生活革命の源泉、人間革命の究極の原理こそ、妙法なのである。その授記こそ、正しい授記なのである。悪思想、邪教の授記をこうむれば、悪業の授記を受けることになり、ついに不幸を招かざるを得ない。

「思想は生きている、思想ほど恐ろしきものはない」と叫んだ哲人がいた。個人も万人も共に、本源的に、普遍妥当性をもって、救済でき得る大思想、すなわち、三大秘法の南無妙法蓮華経に生きることが、最第一の価値ある人生と確信されたい。

また、たとえば、剣道や柔道において、有段者になることも、その世界の授記である。大学を卒業して、もら

う免状も、一つの授記である。代議士が当選して受ける当選証書も、その道の授記である。なお、親より財産を受けて、相続した書類も、また授記といえよう。しかし、最高の人生観、世界観、宇宙観を確立して、永遠に幸福に生きゆける、真実、根本の授記こそが大事なのである。一切の境遇、一切の職業の、全人類が受けるべき授記が大御本尊と拝すべきであろう。

中根の四大声聞とは我等が生老病死の四相なり

四大声聞をば、われらの生命活動、また一生の実相に生命論として、説かれたと思われる。成住壊空の法理も同じ意味となろう。迦葉は、生の相。すなわち、釈尊声聞の十大弟子の一人で、頭陀行第一である。修行第一、実践第一という意味であるから、情熱をたぎらせ、布教に、修行に、勇躍精進した生命なるがゆえに、生を表わしているわけである。したがって、われらの信心実践も、己心の迦葉ということができる。

迦旃延は、老の相。論議第一。学問修行をへて、重厚な人格で、教義を受けもって、釈迦仏法の広布に尽した生命を意味する。したがって、われわれの折伏、講義、講演等も、立派に、己心の迦旃延の働きとみることもできるのである。

目連は、病の相。神通第一である。その母、青提女が餓鬼道に落ちているのを、神通力によって知り、法華経により、救うことができたという話は有名である。また、釈尊入滅直前、竹杖外道に囲まれ、いったん脱出したが、過去世の罪業であることを知り、外道に殺され、その業を滅したといわれる。すなわち、宿命の業を、たち

きるため、一生の総決算を自覚した、病の相を、生命論から説いたと思える。われらの罪障消滅の一念は、当然、己心の目連とも考えられるであろう。

須菩提は、死の相。解空第一である。よく、空理に通じているゆえに、生死不二が仏法原理なれば、死を意味したのである。われらが、依正不二、一念三千の法理を知ることは、己心の須菩提と一往考えられる。

妙法の授記なるが故に法界の授記なり

妙法には、八万法蔵が、ことごとく、包含されている。八万四千の仏法は、全宇宙の現象、本質を、説き明かしたものである。したがって、妙法即本尊の授記は、宇宙にある、力、宝、等々を、一切、わが生命に、授記されたことに通ずるのである。世界といえば、日本も、米国も、ソ連も、百十幾か国が、くまなく含まれているごとくに。

空諦の本尊は、宇宙それ自体。仮諦の本尊はわが当体。中諦の本尊は、三大秘法の御本尊となる。空諦の本尊を、一幅の大曼荼羅となされたのが、十界三千の法理を具備した本尊である。水素と酸素を化合させて水を造るためには、$2H_2+O_2=2H_2O$ の原理がある。しかし、実際に水とするためには、この方程式に白金等の触媒の必要あることは、化学の常識である。もったいない譬えであるが、中道法相の大御本尊に、帰依せねば、宇宙のリズムとの合致、ならびに、わが生命の真実の浄化、生命力、智慧は、湧現でき得ないのである。

「蓮華の授記なるが故に法界清浄なり」とは、蓮華の授記は、因果倶時、刹那一念の授記であり、南無妙法蓮華

経のことである。法界清浄とは、成仏の境涯を指す。宿命打破しゆく本因の力、福運、智慧を創り、慈悲心を活動させてゆく、一念の法則である。

「経の授記なるが故に衆生の語言音声は三世常恒の授記なり」の文。経とは、通途には、一切の振舞い、現象の異名である。この場合の経は、当然、妙法蓮華という、宇宙の一大方軌たる、経である。すなわち、御本尊のことなのである。この経の法則に則った生活は、最高、無上の人生、生命活動となり、価値創造となり、社会に対する貢献に通ずるとの意である。衆生とは生命と約す。所詮、永遠に人間と生まれ、妙法を護持して、南無妙法蓮華経を口唱し、九界に遊戯して、絶対の幸福な境涯、人生を歩みゆくことができるとの意である。

第二　迦葉光明の事

本文

第二迦葉光明の事

御義口伝に云く光明とは一切衆生の相好なり光とは地獄の灯燃猛火此れ即ち本覚自受用の智火なり乃至仏果之れ同じ、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経の光明を謗法の闇冥の中に指し出だす此れ即ち迦葉の光明如来なり、迦葉は頭陀を本とす頭陀は爰に抖擻と云うなり、今末法に入って余行を抖擻して、専ら南無妙法蓮華経と修するは此経難持行頭陀者是なり云云。

語訳

迦葉光明の事　授記品（二九四ページ）の最初の「我が此の弟子摩訶迦葉は、未来世に於いて、……。最後身に於いて、仏に成為

ることを得ん。名を光明如来、応供、……仏、世尊と曰わん」についてである。

相好　顔つき。容姿。

地獄の灯燃猛火　燈燃猛火は、ともしび、燃焼、猛火のことである。煩悩に焼かれることをあらわし、地獄の苦悩を意味する。

本覚自受用の智火　本覚自受用とは、御本仏の仏身のこと。本覚とは、もともとの悟りで、自受用とは「ほしいままに受け用いる」仏身のことをいう。地獄の燈燃猛火に苦しむ衆生も、大御本尊を信ずることによって、久遠元初の自受用身とあらわれるのである。

乃至仏果之れ同じ　その他、餓鬼、畜生、修羅、……仏界も、これに準じて考えるべきであるとの意である。

闇冥　くらやみのこと。

頭陀　梵語。陶汰、抖擻、修治などと訳す。身心を修治し、貪欲等を払いのける修行をいう。

抖擻　梵語「頭陀」の訳で「ふりはらう」「あげはらう」「振りおとす」等の意がある。

此経難持行頭陀者　宝塔品第十一（四一九ページ）の「此の経は持ち難し、若し暫くも持つ者は、我即ち歓喜す、諸仏も亦然なり、是の如きの人は、諸仏の歎めたもう所なり、是れ則ち勇猛なり、是れ則ち精進なり、是れを戒を持ち、頭陀を行ずる者と名づく」の中の「此の経は持ち難し」と「是れを戒を持ち、頭陀を行ずる者と名づく」の文である。末法においては、南無妙法蓮華経を持つことが、即頭陀を行ずることになるのであって、特別に頭陀行などやる必要はない。

通解

御義口伝には、次のように仰せである。光明如来の光明とは、一切衆生の相好―すがた、形をいう。光りとは、地獄の火のことであり、また本覚自受用の智火のことでもある。仏果にいたる他の九界もこれと同じである。

いま、日蓮大聖人およびその門下が、謗法の暗闇の世に南無妙法蓮華経を教え、光明をさし出しているのは、すなわち迦葉の光明如来ということである。迦葉は頭陀第一の人である。頭陀とは、訳すれば抖擻（物を払い去る）という。いま、末法にはいって、われわれが謗法の余行をいっさい払い去って、もっぱら南無妙法蓮華経を唱え、自行化他の修行にはげむのは、見宝塔品第十一に「此の経は持ち難し、若し暫くも持つ者は、我即ち歓喜す、諸仏も亦然なり、是の如きの人は、諸仏の歎めたもう所なり、是れ則ち勇猛なり、是れ則ち精進なり、是れを戒を持ち、頭陀を行ずる者と名づく」と説かれていることに当たるのである。

講義

神力品（五八四ページ）に「日月の光明の、能く諸の幽冥を除くが如く、斯の人世間に行じて、能く衆生の闇を滅し」とある。真実の光明は南無妙法蓮華経である。「斯の人」とは、久遠元初の自受用報身如来、即日蓮大聖人であらわれる。法に約して妙法、人に約して大聖人。人法一箇の大御本尊のみが、一切衆生に根本的幸福を与えきる光明なのである。闇夜のごとき五濁の現状を救済しきる、力は、哲学は、光明は、いずこにあろうか。唯心哲学か、唯物哲学か、実存哲学か？　既存の、流布されきった哲学では、事実、救済でき得ないのが現実である。あとは、

日蓮大聖人の三大秘法の大仏法を、全世界の指導者が、謙虚に聞き、実践してみる以外に、解決の道は、あり得ないと断言するものである。

宝塔品の「此経難持」の経文を、われらは身口意の三業で読みきり、今世の使命を、おのおの、立派に果たし、霊鷲山にて、大聖人のお褒めをいただきたいものである。

「乃至仏果之れ同じ」等の文。「地獄の灯燃猛火此れ即ち本覚自受用の智火なり」とは、一口に言えば「生死即涅槃、煩悩即菩提」と拝せると思う。不幸のどん底の人が、本尊を受持すれば、この御聖訓になると確信する。したがって、光明とか、智火とは、客観視すれば、生活の状態であり、主観視すれば、生命の活動状態と考えられる。地獄界は、生きては、苦しみ、懊悩、死しては、灯、燃焼、猛火の中。修羅界の光りとは、瞋りの眼。餓鬼、畜生の光明もまた、動物が獲物を取る眼を想像すべきである。人界より菩薩界になれば、喜びの生活、楽しみの人生航路、研究努力の眼の光り、智慧の力、慈悲行為、かつまた、人々を救おうと思う努力、輝く情熱の眼の光明と考えるべきである。

第三　捨是身已の事

本文

第三捨是身已の事

御義口伝に云く此の文段より捨不捨の起りなり転捨にして永捨に非ず転捨は本門なり永捨は迹門なり此の身を捨るは煩悩即菩提生死即涅槃の旨に背くなり云云、所詮日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは捨是身已なり不惜身命の故なり云云、又云く此の身を捨すと読む時は法界に五大を捨すなり捨つる処の義に非ず、是の身を捨て仏に成ると云うは権門の意なりかかる執情を捨つるを捨是身已と説くなり、此の文は一念三千の法門なり捨是身已とは還帰本理・一念三千の意なり、妙楽大師の当知身土・一念三千・故成道時・称此本理・一心一念・遍於法界と釈するは此の意なり云云。

語訳

捨是身已　授記品（三〇七ページ）に「我が此の弟子、大目犍連は、是の身を捨て已って、八千、二百万億の、諸仏世尊を見たてまつることを得」等とある。目連への授記のところである。大聖人の仏法でこれを読めば、煩悩即菩提、生死即涅槃と開覚していくことが、捨是身已であり、さらに南無妙法蓮華経と唱えることは、不惜身命の修行であるから捨是身已である。

転捨・永捨　「転捨」とは、仮りに捨てる意で、本有常住の生命観である。「永捨」とは永久に捨ててしまうという意で、無余涅槃等の、永遠の生命を知らざる低い生命観である。煩悩を断じ、生死を離れる思想は永捨で、煩悩即菩提、生死即涅槃と転ずるという思想は転捨である。権迹相対するとき、権教は永捨、迹門は転捨である。また本迹相対するとき、迹門は永捨、本門は転捨である。種脱相対するとき、脱益は永捨、下種は転捨である。すなわち、真実に本有常住の生命観を説き明かしたのは、日蓮大聖人の文底下種の仏法である。

還帰本理・一念三千　本理とは宇宙本源の理で、南無妙法蓮華経のことである。本理である事の一念三千・南無妙法蓮華経の大御本尊に還帰（帰命）することをいう。捨是身已ということは、「是の身を法界に捨す」ことで、我が身即大宇宙であり、妙法の当体であることをあらわすのである。

当知身土・一念三千・故成道時・称此本理・一心一念・遍於法界　妙楽が「弘決」で述べていることば。「当に知るべし身土一念の三千なり故に成道の時此の本理に称って一心一念法界に遍し」と読む。一代聖教大意（四〇二ページ）には「六十巻・三千丁の多くの法門も由無し但此の（止観第五の）初の二三行を意得可きなり、止観の五に云く『夫れ一心に十法界を具す一法界に又十法界を具すれば百法界なり一界に三十種の世間を具すれば百法界には即ち三千種の世間を具す此の三千一念の

心に在り』文、妙楽承け釈して云く『当に知るべし身土一念の三千なり故に成道の時此の本理に称て一身一念法界に徧ねし』文」とある。また、日寛上人は観心本尊抄文段に、次のように釈されている。すなわち「当に知るべし身土」とは本尊を示し、当抄の初めの「此の三千一念の心に在り……三千を具す」の文と同じで「一念三千」の四字は観心を明かし、当抄の初めの「此の三千一念の心に在り……三千を具す」の文と等しいのである。身土とは本地自受用身の身土で、自受用身の身土は十法界の全体である。身は正報であり衆生世間、五陰世間の二千、土は依報で国土世間の一千であるから三千となる。されば「一念」は即われらの信心、「三千」は即自受用身の身土である。「成道」とは、われらの成仏であり、「本」とは本地久遠元初、「理」とは難思境智の妙法、「一身」とはわれらの五大、「一念」とはわれらの信心、「法界に遍し」とは自受用身である。ゆえに文意は「当に知るべし本地自受用身の身土・われらが信心の一念の中の三千である。ゆえに成道の時この本地難思の境智の妙法に称い一身の五大が法界に遍じて所証となり、一念の信心が法界に遍じて能証の智となり、久遠元初の境智冥合の自受用身とあらわれるのである」となると。

通解

ここは、授記品の最後の偈に、「我が此の弟子、大目犍連は、是の身を捨て已って、八千、二百万億の諸仏世尊を見たてまつることを得」云云のところである。

御義口伝には、次のように仰せである。大目犍連がその身を捨ておわって、八千、また二百万億の諸仏世尊を見たてまつることができた。すなわち成仏したと説くこの段から、捨不捨ということが起こるのである。本意は

転捨―かりに捨てるのであって、永捨―永久に捨ててしまうことではない。転捨は本門であり、永捨は迹門の教えである。われわれのこの身を永捨することは、煩悩即菩提、生死即涅槃の本旨にそむくことになるのである。所詮、日蓮大聖人およびその門下が、南無妙法蓮華経と唱えたてまつるのは、不惜身命（身命を惜しまず）であるから、捨是身已である。

また、この身を捨すと読む時は、宇宙法界に五大（地水火風空）、すなわちこの肉体を捨すのであって、捨てるという義ではないのである。この身を捨てて仏になるというのは、爾前権教の意であって、このような爾前権教に執着する心を捨てることを捨是身已と説かれているのである。さらに深く拝すれば、この捨是身已の文は一念三千の法門をあらわしている。すなわち捨是身已とは「還帰本理・一念三千」―本理である事の一念三千・南無妙法蓮華経の大御本尊に帰命するという意味である　妙楽大師が「当に知るべし身土は一念の三千なり、故に成道の時、この本理に称って、一心一念法界に遍し」と釈しているのは、この意味である。

講義

佐渡御書（九五六ページ）に「世間に人の恐るる者は火炎の中と刀剣の影と此身の死するとなるべし牛馬猶身を惜む況や人身をや癩人猶命を惜む何に況や壮人をや」云云と。また、可延定業書（九八六ページ）には「一日の命は三千界の財にもすぎて候なり」云云とある。仏法は、生命の尊厳を説き、生命の大事を説く。したがって、仏法には犠

性はあり得ないのである。南無とは帰命という意であり、また、南無とは、楽波羅蜜なりとおおせである。還帰本理の一念三千の帰命なれば、所詮は、無上道に生きている生命といえるのである。

不惜身命は、当然、末法の法華経の色読である。御本尊を受持し、大聖人の御金言通り、強く、正しく、実践活動していることは、不惜身命であり、宿命打破をなし、福運を積み、成仏することは疑いないわけである。女性のために、不惜身命の人もある。金だけのために、不惜身命の人もある。権力、勢力だけのために、不惜身命の人もある。はかない不惜身命というべきであろう。われらの不惜身命は、大聖人の御遺命を達成しゆく、崇高なる目的実現への行動それ自体である。不惜身命については、さらに勧持品の「第二不惜身命の事」で論ずることにする。

「又云く此の身を捨すと読む時は法界に五大を捨すなり」の文。この文は、寿量品の若退若出の文の心に通ずる。換言すれば、それぞれの宿業により、大宇宙に還元するという意味である。すなわち、有情、非情ともに三世常恒である。地球自体が、厳然たる一個の生命と言えよう。火炎の地球がさめ、さまざまな作用等を得、現実に、有情、非情の生命を現出した不思議は、当然、色心不二の生命体が、一切の根本であることは、明確といえよう。生老病死、成住壊空は、大自然の摂理なれば、一切の生命が、所詮、宇宙に帰することになる。その還元してゆく宇宙に十界のあることを知らねばならない。そこに、今世の仏法の絶対必要性が存するわけである。また、今世の生命の因が、未来の果を決定し、未来の果が即、因となり、次の娑婆世界出生の果をつくりあげているのである。

経文に、不自惜身命とある。南無とは帰命。題目をあげきることが、大聖人の御金言を実践することが、南無であり、不自惜身命となる。この尊い生命を、小事に捨ててはならない。妙法に帰命するとは、捨てるのではなく、捨すのである。それは、立派に、楽波羅蜜となる、と仰せである。果縛に苦しむ境涯より、無上の楽を得られることが、真実の仏法の原理なのである。結局、題目をあげきった人生が、自らも利益し、人々にも、国土世間にも、大宇宙にも、功徳、精気を与えきり、永遠に、法味を捨すことになるわけである。

したがって、実際問題として、あらゆる非情、食物、飲み物、家屋、洋服等が、すべて、われらに捨したといえるのである。有情の生命も、当然、一往は、生きては文化社会の創造に、生命活動をもって、捨しをなしたといえようし、死してもまた、宇宙(五大)の中に、還元され、とけこみ、宇宙活動の働きを期していることは考えられることである。

第四　宿世因縁吾今当説の事

本文

第四宿世因縁吾今当説の事

御義口伝に云く宿世の因縁とは三千塵点の昔の事なり下根の為に宿世の因縁を説かんと云う事なり、因縁とは因は種なり縁は昔に帰る義なりもとづくと訓ぜり、大通結縁の下種にもとづくと云う事を因縁と云うなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは過去の因にもとづきたり、爰を以て妙楽大師の云く「故に知んぬ末代一時聞くことを得て聞き已て信を生ず・事須く宿種なるべし」と、宿とは大通の往時なり種とは下種の南無妙法蓮華経なり此の下種にもとづくを因縁と云うなり、本門の意は五百塵点の下種にもとづくべきなり真実妙法の因に縁くを成仏と云うなり。

語訳

宿世因縁吾今当説　授記品（三〇八ページ）に「我が諸の弟子の、威徳具足せる、其の数五百なるも、皆当に授記すべし、未来世に於いて、咸く成仏することを得ん、我及び汝等が、宿世の因縁、吾今当に説くべし、汝等善く聴け」とある。これは授記品の最後のところにある文で、授記品で中根の声聞への授記を終えたあと、これから下根の声聞のために宿世の因縁を説こうというのである。これによって化城喩品の説法があり、三千塵点劫が明かされるのである。

因縁　果を生ずべき直接の原因を因といい、因を助け、果にいたらしめるものを縁という。たとえば植物の種子は因で、日光、雨、土等は縁である。この因と縁が和合して、はじめて芽を生じ、成長するのである。また、一切衆生の心中の仏性は因で、それが諸法を縁として、はじめて成仏の果をあらわすのである。大乗入楞伽経（唐の実叉難陀の訳・七巻）第二に「一切の法は因縁により生ず」と。また大乗起信論に「諸仏の法には因あり縁あり、因縁具足して乃ち成弁することを得」と説いているのはみなその意味である。弘決の巻一には「親生を因となし、疎助を縁となす」とある。また止観巻五には「果を招くを因となし、また名づけて業となす……縁は縁由に名づく、業を助くるは、皆これ縁の義なり」とある。このように仏法では、万法は因と縁とによって生ずると説いている。総勘文抄（五七四ページ）には「因とは一切衆生の身中に総の三諦有って常住不変なり此れを総じて因と云うなり縁とは三因仏性は有りと雖も善知識の縁に値わざれば悟らず知らず顕れず善知識の縁に値えば必ず顕るるが故に縁と云うなり」とある。御義口伝上（七一六ページ）には「衆生に此の機有って仏を感ず故に名けて因と為す」とある。

過去の因　久遠元初の因。

大通の往時　往は昔の意。大通智勝仏の昔のこと。

真実妙法の因に縁く　真実妙法とは、久遠元初の南無妙法蓮華経である。南無妙法蓮華経こそ三世十方の諸仏が成道した本因であり、この本因に縁くことを成仏というのである。三重秘伝抄には「種子を覚知するを作仏と名づくるなり」とある。

通解

ここは、授記品の一番最後に、「我が諸の弟子の、威徳具足せる、其の数五百なるも、皆当に授記すべし、未来世に於いて、咸く成仏することを得ん、我及び汝等が、宿世の因縁、吾今当に説くべし、汝等善く聴け」と述べられている段である。

御義口伝には、次のように仰せである。宿世の因縁とは、三千塵点劫の昔のことをいうのである。下根の声聞、つまり因縁周のために、宿世の因縁を説こうというのである。因縁とは、因は下種、縁は昔に帰るという意味で、「もとづく」と訓ずる。次の化城喩品第七で説かれる大通結縁の下種にもとづくということを、ここで因縁といっているのである。今、日蓮大聖人およびその門下が南無妙法蓮華経と唱えたてまつるのは、過去の因―久遠元初の因にもとづく、久遠元初に帰るのである。

このゆえに妙楽大師は、「末法において南無妙法蓮華経の大白法を聞くことができ、聞きおわって信を生ずるのは、宿種があるゆえであることがわかる」と述べている。この宿とは大通智勝仏の昔のこと、種とは下種の法

体である南無妙法蓮華経であり、この下種にもとづくことを因縁というのである。そして、本門の意は、五百塵点劫の下種にもとづくべきであり、所詮、真実の妙法、久遠元初の南無妙法蓮華経の因に縁くことを、成仏というのである。

講義

人生の目的は、何か。それは、相対的幸福でなく、絶対的幸福の確立にある。その根本原則として、永遠の生命を会得することにあり、その一道は、妙法を、受持実践する以外にない。所詮、わが生命の本質を覚知せよとの段の御文であられる。

釈迦仏法の生命論、大聖人の仏法の生命論の相違が、明確になされている。釈尊の久遠論は、まだ、有始有終であり、日蓮大聖人の久遠論は無始無終であられる。釈尊は、己心の永遠の生命観を説かれたのにたいし、大聖人は、三身常住を明かされている。真実の因縁の因とは、久遠元初の因にもとづく、久遠元初に帰する。久遠元初はすなわち南無妙法蓮華経である。したがって、本尊に、妙法を口唱すること自体、仏界を湧現し、無始無終の永遠の生命に、本質的に、生きていることになるのである。

やれ、自然主義だ、物質自然主義だ、理想主義だ、客観的理想主義だ、神秘主義だ、と西洋哲学で論議されるが、この大聖人の生命観、宇宙観とくらべれば、天地雲泥なることがわかるであろう。

化城喩品七箇の大事

化城喩品七箇の大事

第一　化城の事

本文

第一化城の事

御義口伝に云く化とは色法なり城とは心法なり、此の色心の二法を無常と説くは権教の心なり法華経の意は無常を常住と説くなり化城即宝処なり、所詮今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は色心妙法と開くを化城即宝処と云うなり、十界皆化城・十界各各宝処なり化城は九界なり宝処は仏界なり、化城を去って宝処に至ると云うは五百由旬の間なり此の五百由旬とは見思塵沙無明なり、此の煩悩の五百由旬を妙法の五字と開くを化城即宝処と云うなり、化城即宝処とは即の一字は南無妙法蓮華経なり念念の化城念念の宝処なり、我等が色心の二法を無常と説くは権教なり常住と説くは法華経なり無常と執する執情を滅するを即滅化城と云うなり、化城は皮肉・宝処は骨なり色心の二法を妙法と開覚するを化城即宝処の実体と云うなり、実体とは無常常住・倶時相即・随縁不変・一念寂照なり一念とは南無妙法蓮華経・無疑曰信の一念なり即の一字心を留めて之を思う可し云云。

語訳

化城　化城喩品にある「化城宝処の譬え」である。珍宝のある所（宝処）へ、みんなで行こうというときに、道のりが五百由旬もあるので、途中で疲れてしまい、もう帰ろうと言いはじめた。そこで引率していた一人の導師は、三百由旬を過ぎたところに、一城を化作して、みんなをそこで休ませ、疲労が回復したのを見はからって、その化城を消滅させ、「さあ、宝処は近いのだ、がんばって行こう、今の大城は、私がみんなを休息させるために化作したもので、目的地ではないのだ」と言って前進を開始したという譬えである。そして、化城は三乗であり、宝処は一仏乗であると説かれている。御義口伝に「化城は九界なり宝処は仏界なり」とあるとおりである。

色心の二法　色とは肉体、物質をいい、心とは精神、心をいい、色心の二法で生命のこと。

法華経の意は無常を常住と説くなり　小乗教では、生死の流転は無常であると説くが、法華経では、生命は永遠であり常住であると説く。このように法華経によって無常を即常住と開いていくことができるのである。同じく、煩悩、生死は無常であり、菩提、涅槃は常住であるが、法華経では、煩悩即菩提、生死即涅槃と説く。

化城即宝処　化城は九界、宝処は仏界で九界即仏界をあらわす。化城は煩悩、宝処は菩提で煩悩即菩提をあらわす。同じく生死即涅槃、無明法性体一等の原理をも示している。詳細は講義参照。

十界皆化城・十界各各宝処なり　地獄から仏界にいたるまでの十界の生命活動は化城であると同時に宝処である。

化城を去って宝処に至ると云うは五百由旬の間なり　「化城を去って宝処に至る」とは、九界をはなれて仏界がある、煩悩を断じて菩提を得る、生死をはなれて涅槃がある、という考え方である。「五百由旬の間」とは、化城喩品の「譬えば、五百由

旬の険難悪道の曠かに絶えて、人無き怖畏の処あらん」（三四二ページ）とあり、これは、見思惑、塵沙惑を指すのである。すなわち、化城を去って宝処に至るという考え方は、いまだ迷いであるとの意。

見思、塵沙、無明　見思惑とは、三界六道の苦果を招く惑で、さらに分けて見惑と思惑とになる。見惑とは、五利使（身見、辺見、邪見、見取見、戒禁取見）と五鈍使（貪瞋癡慢疑）である。思惑とは、倶生惑ともいう。生まれると同時についている煩悩をいう。次に塵沙惑とは、化導修行の障り、および成仏への無数無量の惑いをさす。次に無明惑は、元品の無明と同意。三惑を生じせしむる、生命に本来そなわった根本的な惑をいう。

即の一字は南無妙法蓮華経なり　化城を宝処と開いていく、すなわち九界を仏界と開く根本は何かといえば南無妙法蓮華経であるとの意。

念念の化城念念の宝処なり　瞬間瞬間が化城即宝処の生活となるということ。

即滅化城　化城喩品の「即ち化城を滅して」とあるところの文。「即滅化城の事」（本書五四六ページ）の項参照。

実体　実体とは、生命の本質、本源、宇宙の本質、本源。所詮、因果倶時の法が実体になるのである。それを一幅の曼荼羅に図顕したもの、具現したものが、御本尊になるのである。人に約せば、日蓮大聖人のご当体であり、一念、報身、智慧ともいえる。

無常常住・倶時相即　無常も常住も、倶時相即、すなわち瞬間に具している生命の実体をいう。

随縁不変・一念寂照　「南無妙法蓮華経」についての御義口伝の語訳（本書五〇〇ページ）参照。

無疑曰信　「疑い無きを信と曰う」と読む。日蓮大聖人の仏法を絶対に疑いなく実践することを信というのである。

通解

御義口伝には、次のように仰せである。化城の化とは色法（肉体・物質）であり、城とは心法（精神・非物質）である。この色心の二法を無常であると説くのは爾前権教の心である。法華経の真意は、この無常を常住と説く。かりのものである化城が、じつはそのまま宝処なりと説くのが文底なのである。所詮、今、日蓮大聖人およびその門下が、御本尊に南無妙法蓮華経と唱えたてまつり、わが色心が、即妙法蓮華経の当体と開き、即身成仏をとげることを化城即宝処というのである。十界は皆、化城であるが、しかも、その十界おのおのが宝処である。化城とは九界であり、宝処は仏界である。

化城を去って、宝処に至るまで五百由旬の道のりがあるというが、この五百由旬とは見思、塵沙、無明の三惑である。この三惑、煩悩の五百由旬を妙法の五字と開覚するのを化城即宝処というのである。化城即宝処の即の一字は南無妙法蓮華経である。われわれが南無妙法蓮華経と唱えるときに、念念の化城、九界の生命は、念念の宝処、すなわち仏界の生命となるのである。

われわれの色心の二法、生命を、無常と説くのは権教であり、常住不滅と説くのは法華経である。権教の無常の教えに執する執情を滅することを、即滅化城というのである。

化城は皮や肉であり、宝処は骨である。色心の二法のわが身即妙法と開覚することを、化城即宝処の実体とい

うのである。実体とは無常にして常住、倶時にして相即、随縁であってしかも不変なるものであり、妙法に照らされた一念の働き、生命自体をいう。

一念寂照の一念とは、南無妙法蓮華経であり、妙法を信じきった「疑い無きを信と曰う」の一念である。化城即宝処の即の一字は、とくに心をとどめて、これを思うべきである。

講義

八万法蔵はことごとく、生命の実体、宇宙の実相を明かし説いている。ここは、化城といい、宝処といい、すべて、われらの色心なりとの御文であられる。すなわち、決して観念論、おとぎ話の経々でなく「化城は皮肉、宝処は骨なり」云云というがごとくに、生命あるいは、生活を説かれているのである。

大聖人は、生命論を、色心不二論で説く場合、三身常住論で説かれる場合、依正不二論で論ずる場合等々、様様な観点から説かれている。

所詮、一切の経、偈、句は、ことごとく、南無妙法蓮華経に含まれるのである。日寛上人は「肝要とは、唯一を挙げて一切を摂する義なり」云云と。しかして、仏法の真髄、肝要は、本尊であることは当然であり、あとは、われらの無疑曰信の純真なる信心が、成仏の境涯を会得でき得る直道なりとの指導である。

十界皆化城・十界各各宝処なり化城は九界なり宝処は仏界なり

「十界皆化城」――これは、信心のない人生。地獄より仏界にいたるまで、刻々と変化しゆく生命活動は、化城である。「十界各各宝処なり」――これは、事の上である。妙法を護持し、信心した場合である。地獄より、仏界にいたるまで、本有の妙法に照らされた、生命活動である。

化城は九界であるとは、無明流転の人生である。宝処とは、仏界である。また本尊のことである。そして、肉団の妙法を湧現した、生命活動のことである。なお、信心の有無にかかわらず、理上にては、すべて十界三千の生命である。しかしながら、妙法受持の生命は、十界各各宝処となる。本有常住、常寂光土にかわり、信心なくば、六道、九界の無明に酔い、永遠の幸福境涯を確立することができ得ぬとの哲理であると拝したい。

化城を去って宝処に至ると云うは五百由旬の間なり此の五百由旬とは見思塵沙無明なり、此の煩悩の五百由旬を妙法の五字と開くを化城即宝処と云うなり

煩悩即菩提、生死即涅槃の文である。

経文の上で「化城を去って云云」という表現があるが、大聖人は、観心の立ち場から、この五百由旬ということは、実は、見思惑、塵沙惑、無明惑のことであると申されているのである。

化城を去ることはできない。この身で仏になる以外にない。煩悩を去るとか、煩悩を断ずるというのは、爾前

の教えであり、煩悩即菩提が大聖人の哲学である。

なお、化城は九界、宝処は、仏界なれば、九界即仏界の成仏の原理を説かれている。いかなる階層の人たりとも、平等に成仏できうる、大慈悲を、感じなくてはならない。

化城即宝処とは即の一字は南無妙法蓮華経なり念念の化城念念の宝処なり

化城もわれわれの生命、宝処もわれわれの生命。仏になるといっても、われわれの生命の仏界を湧現することにつきる。だんだんと修行して仏になるのではない。化城即宝処、九界即仏界になる根本は何かといえば、御本尊に向かって唱題修行し、南無妙法蓮華経の当体を自覚することにある。「念念の化城念念の宝処なり」とは、われわれの一念の所作は無数無量といえる。しかし、そこに南無妙法蓮華経を唱えるならば、ぜんぶ仏の力の一念に変わる。仏の境涯は、遠くにあるものでもなければ、だんだん仏になるものでもない。わが身すなわち仏なり、当体なりと、確立しきることにつきる。それを生活の上、生命力の上に湧現するには、南無妙法蓮華経を唱える以外にない。

化城は観念論であり、宝処は生活である。化城は理で、宝処は事になる。勉強しているというのは、化城の念念であって、それを生活に具現した場合には、宝処の念念に変わるのである。

色心の二法を無常と説く

「色心の二法」とは、生命の全体のこと。「無常と説く」は、今世論であり、永遠、長遠でないという意味である。したがって、権教は現世論であり、法華経は永遠論である。小乗は、三身のうち、応身を中軸として説かれ、権大乗は、報身または法身となる。実大乗は、三身常住を明かし、なかんずく、報中論三で、自受用報身を根本と説かれている。また、小乗は、色心の、色の面、目にみえる、生命状態の方を強く説く、応身論である。大日経等は、法身論であり、般若経は、智慧、報身の面を説いている。法華経は、三諦円融、三身永遠を明かし、完璧な、大生命哲学である。

唯物論は、色論である。その本質は、小乗哲理に近いといえよう。唯心論は、心論のみであり、また小乗、権大乗思想に、その内容は、似ていると考えられのである。

化城は皮肉・宝処は骨なり

法華経迹門の教理たる「化城」と「宝処」をば、わが生命にあてはめてみれば、「化城」は「皮肉」となり、「宝処」は身体の骨髄と読むことができる。すなわち、「宝処」は、境涯論では、仏界であると同時に、人体に約せば、最も中核たる骨となる。当然、生命は皮肉骨同生のものであるが、骨あって、皮肉があると、段階をへて、考えることも道理であろう。

また、化城は九界、宝処は仏界であることを、色法の面から論じ、わからせようとされたとも拝することができる。信心して、人間革命をなし、病気等が治せる原理も、推察できうるところである。なお、大宇宙はすなわち、わ

が当体である小宇宙と、等しいものであるから、題目の力によって、完成された、色心不二の生命を樹立することこそ、わが身の広宣流布ともいえよう。

国土世間に、あてはめれば、その国土は豊饒となり、民衆が、豊かに、興隆しゆく源泉になることは、間違いない原理といえよう。大宇宙と、全人類が、妙法のリズムに合致した、生活、活動をしてゆけば、所詮は、吹く風枝を鳴らさずの平和境、理想境が、到来することも、必然といいきれるのである。わが身も、国土も、宇宙も、方程式は、同一法理と考えていけるのである。

無常常住・倶時相即

「無常」は変化、「常住」は永遠、「無常」は八識より五識、「常住」は九識、「無常」は九界、「常住」は仏界ともいえる。

この生命に、両者が厳存する。信心の有無にかかわらず、無常常住・倶時相即されていることも、疑いない事実である。しかしながら、理の上の論じ方、事の上の論じ方と二通りになる。理の上では、生命は等しく、理の一念三千の当体となる。だが、題目を唱えなければ、仏界の湧現は、あり得ない。したがって、完全なる、一念三千の生命活動とはなり得ない。なお、われ等の生命は、一往は、無常である。一瞬々々、変化の連続である。二歳の時と、二十歳の時とは、色法の大変化がなされて来ている。さらに、交通事故、病魔等々の不祥事も、生活の常住を許さない。

再往、如実知見して、生命の本質をみれば、仏は常住、永遠を説く。事実、われ等の生命それ自体は、無始無終であり、その本質は、滅せず、生ぜず、宇宙と共に永遠であるからである。その両者の生命状態をば「無常常住」と考えられる。例えば、大地は常住、草木は無常、その関係をば、「倶時相即」と言うのである。

「寂照」とは小乗では「空寂」、また「寂滅」といい、大乗教では「寂照」となる。「空寂」は、灰身滅智であり、「寂照」は、常楽我浄となる。根本的に、修行観、生命観の相違がある。小乗教では、すべてを、犠牲にして、悟りを得ようとする。釈尊自身、「四十余年、未顕真実」（八八ページ）と、小乗爾前の修行を打ち破っている。

あくまで、「空寂」は、自身の煩悩を断じてゆかねば、到達できぬ修行法である。戒律にしばられ、制約されながらの、人生であり、まことに、残酷といわざるをえない。それに対し、末法の法華経は、妙法に照らされ、九界に遊戯していく人生である。自己を、最高度に発揮して、絶対の幸福生活をなしつつ、社会の繁栄にいそしむ、最高善の振舞いをいうのである。現社会において、低級思想に執着し、満足しきっている人、なお、利己主義に徹し、人の幸不幸を考えぬ人達こそ、小乗的な人生観といわざるをえない。

人生を楽しみつつ、社会に価値創造しながら、

第二　大通智勝仏の事

本文

第二大通智勝仏の事

御義口伝に云く大通は心王なり智勝は心数なり大通は迹門智勝は本門なり大通智勝は我等が一身なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は大通なり題目を唱うるは智勝なり、法華経の行者の智は権宗の大智よりも百千万倍勝れたる所を智勝と心得可きなり、大は色法通は心法なり我等が生死を大通と云うなり、此の生死の身心に振舞う起念を智勝とは云うなり、爰を以て之を思うに南無妙法蓮華経と唱え奉る行者は大通智勝仏なり十六王子とは我等が心数なり云云。

語訳

大通智勝仏　三千塵点劫の昔いたという仏。化城喩品（三一〇ページ）には「乃往過去、無量無辺不可思議阿僧祇劫、爾の時に仏有しき。大通智勝如来、応供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏、世尊と名づく。其の国を好成と名づけ、劫を大相と名づく」とある。大通智勝仏は二万劫の間法華経を説かなかった。大通智勝仏に十六人の子供があった。その十六人の子供の請によって二万劫過ぎてから妙法蓮華経を説いた。その時十六王子および少分の声聞は信受して法益を得たが、多分の衆生は疑いを起こして信じなかった。そこで後に十六王子が父王の仏の説をくりかえして法華経を説いた。これを「大通覆講」という。またこれによって、その時の衆生は、ようやく信解することができた。この時の第十六番目の王子が釈尊で、その時の下種を大通下種という。

大通は心王なり智勝は心数なり　天台宗、華厳宗などでは、識を九つ立てて、第九識の阿摩羅識をもって如来蔵識、清浄識といい、これを心王と立てる。心王とは心の主体をいい、心数とは心王に対する語で、心にともなって起こってくる作用をいう。結局、生命の本体と、生命の働き、すなわち体と用の関係であり、心王・心数で倶体倶用をあらわす。また一念三千でいえば、一念は心王、三千は心数である。また妙法は心王であり、森羅万象は心数である。また心王は不変真如の理である。森羅万象ことごとく妙法の当体だからである。大宇宙の一切に通ずるゆえに大通という。心数とは随縁真如の智である。縁にふれて生命活動があらわれるからである。ゆえに智勝という。

大通は迹門智勝は本門なり　大通は心王であり、不変真如の理をあらわす。迹門では諸法実相と説き、森羅万象のことごとく妙法の当体であることを明かした。これは不変真如の理である。したがって大通は迹門である。智勝は心数であり、随縁真

如の智をあらわす。本門では、理ではなく、事の上に一念三千を説く。すなわち、現実に仏界を顕現することを説くのである。これは随縁真如の智である。したがって智勝は本門である。

法華経の行者　日蓮大聖人およびその門下のこと。

権宗の大智よりも百千万倍勝れたる　四信五品抄（三四二ページ）の「此の人は但四味三教の極位並びに爾前の円人に超過するのみに非ず将た又真言等の諸宗の元祖・畏・厳・恩・蔵・宣・摩・導等に勝出すること百千万億倍なり」の文と同じ意である。この文は位について申されているのであるが、元意は同じである。

生死　生死はたんに「生」と「死」という意味以外に「生命」と訳す場合と、「苦しみ」と訳す場合とがある。ともに、生死、生死の流転輪廻という意味からきている。「生死即涅槃」の場合は「苦しみ」、「生死一大事」の場合は「生命」と読める。この場合の生死は生命という意味である。

起念　行動を起こすところの一念の働きをいう。瞬間瞬間、縁にふれて活動している、その生命に内在する智慧の働きをいう。したがって随縁真如の智であり、智勝である。

通解

ここは、三千塵点劫の昔に、大通智勝仏という仏がおり、その仏は出家する前は王様であって、十六人の王子があった。そしてその十六王子は、みな、大通智勝仏から法華経の説法を受けたということについての御義口伝である。

御義口伝には、次のように仰せである。大通智勝仏の大通とは心王であり、智勝とは心数である。心王は生命の根本、心数は生命の働きのことである。したがって、大通は迹門、智勝は本門である。大通智勝とは我等が一身のことである。

今、日蓮大聖人およびその門下が、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は大通であり、その題目を唱えることは智勝となるのである。

法華経の行者―別しては日蓮大聖人、総じては御本尊に題目を唱えるわれわれの智は、権教をきわめきった高僧、一切の邪宗の教祖、また一切の学者よりも、百千万倍も勝れている、それを智勝と心得べきである。

大は色法、通は心法である。われわれの生命を大通というのである。この生命の身心―色心の二法に振舞う起念を智勝というのである。

以上のことから結論するに、南無妙法蓮華経と唱え奉る行者は大通智勝仏であり、十六王子とは、われわれが題目を唱え奉って、出てくるところの働きを意味するのである。

講義

法華経文上の、仏、菩薩が、みな、実在であったということは、信ずる以外にない。しかし大聖人は、この文上の教理をば、現実に、実際的に、わが身に、わが生活に、お説きくださっているのである。舎利弗をば、空仮

中の三諦に約し、威音王仏をば、色心不二に約するごとくに、いま、御本尊に題目を唱うれば、化城喩品の大通智勝仏も、また、わが身の振舞いと等しいというのである。

十六王子といっても、また、妙法を唱う、わが一念一心の働きを指すのだとお説きである。

大聖人の仏法は、決して、観念論ではない。現実的であり、崇高なる生命論の奥義であられるのである。

心王と心数については、心王は、元品、生命活動の本源であり、心数は、一念の所作、活動のことである。なお、本迹より論ずれば、心王は、生命の根本—不変真如、迹門である。心数は、現実に具現された、精神の活動状態であり、随縁真如、本門である。悲しみ、苦しみ、歓び等々の心理状態は、心数である。したがって、心数が事であり本門となる。心王は、理であり迹門となる。

私たちの一念は、当然刻々と変化する。内面より、かつは、外部の縁によって、ある時は、人を救おう、ある時は、退転しようか、また、遊びたい、学びたい、語りたい、等々と。

これが真実の精神活動であり、事であり本門なのである。所詮、題目をあげ、妙法の当体の確信ある生命活動が、幸福確立の心王、心数となっているわけである。

第三　諸母涕泣の事

本文

第三諸母涕泣の事

御義口伝に云く諸母とは諸は十六人の母と云う事なり、実義には母とは元品の無明なり此の無明より起る惑障を諸母とも云うなり、流転の時は無明の母とつれて出で還滅の時は無明の母を殺すなり、無明の母とは念仏禅真言等の人人なり而随送之とは謗人を指すなり、然りと雖も終に法華経の広宣流布顕れて天下一同に法華経の行者と成る可きなり「随至道場還欲親近」是なり。

語訳

諸母涕泣　化城喩品（三一四ページ）に「其の仏、未だ出家したまわざりし時に、十六の子有り、其の第一をば名を智積と曰う。

諸子、各種種の珍異玩好の具有り。父、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たもうと聞いて、皆所珍を捨てて仏所に往詣す。諸母、涕泣して、随いて之を送る。其の祖転輪聖王、一百の大臣、及び余の百千万億の人民と、皆共に囲繞して、随いて道場に至り、咸く大通智勝如来に親近して、供養、恭敬、尊重、讃歎したてまつらんと欲す」とある。

元品の無明　無明惑と同じ意。生命に本来そなわった根本的な惑をいう。

流転・還滅　流転とは、凡夫が生死を流転することで、迷い、九界の意。還滅とは「寂滅に還る」ことで、生死を離れ、煩悩を断じつくすことで、悟り、仏界をいう。ただし、これは、爾前権教の考え方であり、真実は、九界即仏界と現われることが還滅である。

而随送之とは謗人を指すなり　「諸母、涕泣して、随いて之を送る」の「随いて之を送る」とは十六人の王子が出家するために大通智勝仏の所へ行こうとするのを引きとめることで、これは仏道修行を妨げる姿であり、謗法の人をさすのである。

随至道場還欲親近　「随いて道場に至り、還って（大通智勝如来に）親近して』の文。妙法蓮華経（大石寺版）には「還」の字が「咸」の字になっている。「還」はかえって「ふたたび」等の意味で、「咸」は「みな」「ことごとく」という意味である。日蓮大聖人は、文底の仏法の立ち場から、この一字を変えて御義口伝されたと思われる。

通解

「其の仏、未だ出家したまわざりし時に、十六の子有り、其の第一をば名を智積と曰う。諸子、各種種の珍異玩好の具有り。父、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たもうと聞いて、皆所珍を捨てて仏所に往詣す。諸

母、涕泣して、随いて之を送る。其の祖転輪聖王、一百の大臣、及び余の百千万億の人民と、皆共に囲繞して、随いて道場に至り、咸く大通智勝如来に親近して、供養、恭敬、尊重、讃歎したてまつらんと欲す」のところである。

御義口伝には次のように仰せである。諸母とは十六人の母ということである。ほんとうの意味は、母とは元品の無明―根本の迷いである。この無明から起こる惑障―見思惑、塵沙惑、無明惑の三惑と煩悩障、業障、報障の三障などを諸母というのである。

流転、すなわち九界の時は、この無明という母とつれだっているのであり、還滅、すなわち仏界の時は、無明の母―迷いを断つのである。

また、この無明の母とは、念仏、禅、真言等の人々である。邪宗を信ずる人々である。「諸母、涕泣して、随いて之を送る」というのは、謗法の人々をいうのである。仏道修行に励む人を引きとめようとする姿である。

しかしながら、ついには化儀の広宣流布が実現して、天下一同に御本尊を信じ、題目を唱えるようになるのである。

「随いて道場に至り、還って大通智勝如来に親近して」とあるように、みんな、御本尊にお会いすることができるのである。

人類、幾千万の歴史は、「苦」の一字を、のぞくことができえなかった。

仏法では、苦をば開いて、四苦八苦と説く。その不幸を受ける根本は、無智より生ずると思う。無智なるがゆえに、宗教の正邪をもわきまえることができず、だまされ、苦を解決することができない。

世間一般のことには、有智の人は多数いる。しかしながら、根本の生命という問題になると、有智の人はまったく少ないものである。

なお、生命には、無明と法性とが本有であり、無明は、不幸、苦を呼び、法性は、幸いを呼ぶ。

いま、十六人の母とは、元品の無明を指す。この無明を断つ、すなわち、冥伏させるところに、個人と世界の幸福、平和が樹立できるとの根本的指導と拝する。

また「法華経の広宣流布顕れて天下一同に法華経の行者と成る可きなり」云云の御文は、化儀の広宣流布が、必ず達成されるとの御予言と拝すべきである。

法華経とは、末法の五字七字の法華経。天下一同とは、別して日本国一同、総じて、全世界、全人類のことである。行者とは、妙法を護持し、大聖人のご金言どおり実践する人である。所詮、日本国中の人が、広くは、全世界の人々が、みな、御本尊を持つとの大確信であられる。われらは、まず、日本国の仏法興隆に、一直線に邁

進してゆこうではないか。

無明の母を殺すなり

母を殺す、父を殺すということは、すでに序品で述べたように、決して命を断つという意味ではない。あで、生命に潜む悪を破すと読むのである。また、煩悩即菩提と開くことを、「無明の母を殺す」と申されてのである。

ある、愚かな学会批判者が、この意味がわからず、切り文して「学会はケシカラン、父を殺せ、母を殺せえている。親を殺せば功徳があると教えている」と勝手に解釈して、狂人のごとく批判して暴言をはいていい開目抄（一八六㌻）には「一切衆生の尊敬すべき者」として、「主師親」をあげられ、報恩抄（二九三㌻）「仏教をならはん者父母・師匠・国恩をわするべしや」と申され、また、四恩抄（九三五㌻）でも、父母の報ぜん道を説かれているのを、よくよく拝すべきである。

御義口伝の序品の七箇の大事（七一一㌻）にも、「南無妙法蓮華経の剣を取って貪愛・無明の父母を害して了釈尊の如く仏身を感得するなり」とある。命をたつとは、すべて、誤った宗教の不幸の根本をば、妙法の利もって断ち切るのである。そして煩悩即菩提を得るのである。

第四　其祖転輪聖王の事

本文

第四其祖転輪聖王の事

御義口伝に云く本地身の仏とは此文を習うなり、祖とは法界の異名なり此れは方便品の相性体の三如是を祖と云うなり、此の三如是より外に転輪聖王之れ無きなり転輪とは生住異滅なり聖王とは心法なり、此の三如是は三世の諸仏の父母なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は三世の諸仏の父母にして其祖転輪聖王なり、金銀銅鉄とは金は生・銀は白骨にして死なり銅は老の相・鉄は病なり此れ即ち開示悟入の四仏知見なり、三世常恒に生死・生死とめぐるを転輪聖王と云うなり、此の転輪聖王出現の時の輪宝とは我等が吐く所の言語音声なり此の音声の輪宝とは南無妙法蓮華経なり爰を以て平等大慧とは云うなり。

語訳

其祖転輪聖王　「第三諸母涕泣の事」の語訳に引用した化城喩品の文の中に「其の祖転輪聖王……」とある。転輪聖王は、輪王、または転輪王ともいう。三十二相を具し、位につくとき天より輪宝を感得し、その輪宝を転じて四方を降伏せしめるので転輪王という。その輪宝に金銀銅鉄の四種あって、金輪王は四洲、銀輪王は東西南の三洲、銅輪王は東南の二洲、鉄輪王は南閻浮提の一洲を領すという。

相性体の三如是を祖と云うなり　如是相は仮諦、如是性は空諦、如是体は中諦である。すなわち、相性体の三如是は、空仮中の三諦であり、即妙法である。御義口伝（七一七ページ）には「此の円融の三諦は何物ぞ所謂南無妙法蓮華経是なり」とある。其祖転輪聖王の祖とは、おおもとという意味で、宇宙の本源を意味する。妙法が宇宙の本源なるゆえ、かく仰せなのである。

生住異滅　生は、発生、誕生であり、住とは、それが、ある期間一定の状態にあることであり、異とは、変化し、原形が崩れることであり、滅とは、破壊されてなくなること、あるいは死滅してしまうとの意。（講義参照）

聖王とは心法なり　転輪聖王を転輪と聖王とに分けると、転輪とは、生々発展し、また死滅していく色法を意味し、聖王とは心法を意味するのであるということ。

開示悟入の四仏知見　方便品の「第三唯以一大事因縁の事」の語訳参照。

平等大慧　法華経の見宝塔品（四〇〇ページ）のなかで、多宝如来が法華経を賛歎したことば。「能以平等大慧、教菩薩法、仏所護念、妙法華経」とある。すなわち、一切法の根底に一貫している平等性を覚知する、また、一切衆生を平等に救済してい

く広大な御本仏の智慧、大御本尊の智慧をいう。

通解

ここは、第三諸母涕泣の事の通解で引用した化城喩品の文の中に、「其の祖転輪聖王……」とあるところの御義口伝である。

御義口伝には、次のように仰せである。本地身の仏とは、この文から出ているのである。

祖とは、法界の異名であり、方便品の相性体の三如是を祖というのである。三如是は三諦であり三身であり、詮ずるところ御本尊であり、日蓮大聖人の御事である。この三如是以外に転輪聖王はないのである。転輪とは、生、住、異、滅という変化の姿をいうのである。聖王とは、その根本の生命をいうのである。この三如是―御本尊こそ、一切の三世の諸仏の父母、すなわち、三世の諸仏を誕生させる根本なのである。

今日蓮大聖人およびその門下が、南無妙法蓮華経と唱え奉るのは、三世の諸仏の父母であり、其祖転輪聖王にあたるのである。別しては日蓮大聖人御一人が三世の諸仏の父母である。

転輪聖王は、金輪、銀輪、銅輪、鉄輪とわかれているが、金は生、銀は白骨―すなわち死、銅は老の相、鉄は病の相を意味しているのである。金銀銅鉄で生老病死を意味しているのである。これはすなわち、開示悟入の四仏知見――開仏知見、示仏知見、悟仏知見、入仏知見になるのである。

三世常恒、永遠の生命の中で、生死、生死とめぐりゆくのを転輪聖王というのである。

この転輪聖王は輪宝といって、どんなものでも打ち破れる宝器をもっているといわれるが、これは、われらが吐くところの言語音声である。この音声の輪宝とは何かといえば、南無妙法蓮華経のことである。

この南無妙法蓮華経こそ、真実の平等大慧となるのである。

講義

転輪聖王とは、通途に、須弥山、四州の統治の王といわれている。輪王は、必ず輪宝をもって、山河も平坦にし、いっさいのものを感服せしめるといわれている。その輪宝の品質によって、金輪、銀輪、銅輪、鉄輪王の四王に分かれる。輪王の種別によって、領土も大小となる。また、輪王は、三十二相を具え、人類の寿命が、八万歳以下に下がった時代には、もう出現しないといわれている。

大聖人は、金輪王、乃至、鉄輪王をば、われわれの生老病死にお説きくださっている。われら題目を唱えるものこそ、輪宝を持せる者なりと決定されておられる。一人残らず、人間革命し、丈夫の振舞いができうるとの言であられる。

生住異滅については、無量義経の説法品（八四ページ）には、「法の相是の如くして是の如き法を生ず。―是の如き法を住す。―是の如き法を異す。―是の如き法を滅す」と、法の相というものの生住異滅を説いている。この

文中、法とは現象ということである。すなわち森羅万象の現象なのである。

「生住異滅」と「生老病死」「成住壊空」との関係についていえば、三者とも、所詮、同じ意味である。「生住異滅」は、主客共に、森羅万象をみつめている姿ともいえよう。「生老病死」は、とくに、われら衆生、有情にあてはめて考えられる。「成住壊空」は、宇宙観、および、非情世間にもあてはめていける方程式であろうど、空仮中の三諦と、法報応の三身との関係のごとく、イコールの関係である。

この哲理は、万人共通の大法則である。法は、妙法、権教、唯心論、唯物論、ヒンズー教、儒教等、数えきれない。しかしながら、真実の法則、現象の本源は、南無妙法蓮華経なのである。ゆえに、その具現された実相が、一念三千の大曼荼羅となるのである。

「生住異滅」を分けて論ずれば、「法を生ず」―妙法より、宇宙現象を生ずる。また、三世十方の一切の微塵の経々を生ずる。

「法を住す」―三千の宇宙現象、生命現象を、一幅の本尊に住している。

「法を異す」―妙法と権教、外道との法は、自ずから異している。また、九界と仏界とは当然異なる。自然現象からみても、風雨、嵐、雪等、ぜんぶ異する姿を示している。

「法を滅す」―力ある法、真理の法、すなわち、根本法、南無妙法蓮華経を根本として、邪法、邪義、不幸をまねく教法を滅せねばならない。絶待妙の上から、あくまでも妙法を根本とすべきであるとのご金言である。

国法に約せば、憲法は妙法である。他法は権教であろう。憲法が骨髄になって、その他の法律が開かれていか

なければならない。

この中に生住異滅の異ということがあるが、これは変化と考えてよい。木に花が咲いたり、葉が落ちゆくのも異であり、今日、紅顔の美少年であった人が、やがて白髪の老人になり、シワだらけの顔になるのも異である。

第五　十六王子の事

本文

第五十六王子の事

御義口伝に云く十とは十界なり六とは六根なり王とは心王なり子とは心数なり此れ即ち実相の一理の大通の子なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は十六王子なり八方作仏とは我等が八苦の煩悩即菩提と開くなり云云。

語訳

六根　眼、耳、鼻、舌、身、意の六根のことである。根とは、生命には、対境に縁すると即時に作用する機能が本然的に備わっており、その機能の根源を根という。六根の対境にあたるものが、六境または六塵（色、声、香、味、触、法）で、六

根が六境と関係して生ずる感覚を六識という。たとえば、生命には眼根があるために、色境に縁すれば眼識（視覚）を生ずるのである。また生命に意根があるから、こわいとか楽しい等の意識を生ずるのである。

実相の一理　実相とはありのままの姿、事物の本質をいう。すなわち、妙法をさす。森羅万象といえども、その本質は妙法の一法であるから一理という。所詮、南無妙法蓮華経をさして実相の一理というのである。

八方作仏　十六王子が、それぞれふたりずつ、東、東南、南、西南、西、西北、北、東北の八方で作仏したことを八方作仏というのである。化城喩品（三四〇ページ）に「其の二りの沙弥は、東方にして作仏す。一を阿閦と名づく。歓喜国に在す。二を須弥頂と名づく。東南方に二仏。一を師子音と名づけ、二を師子相と名づく。南方に二仏。一を虚空住と名づけ、二を常滅と名づく。西南方に二仏。一を帝相と名づけ、二を梵相と名づく。西方に二仏。一を阿弥陀と名づけ、二を度一切世間苦悩と名づく。西北方に二仏。一を多摩羅跋栴檀香神通と名づけ、二を須弥相と名づく。北方に二仏。一を雲自在と名づけ、二を雲自在王と名づく。東北方の仏を、懐一切世間怖畏と名づく。第十六は、我釈迦牟尼仏なり」とある。

八苦　生老病死の四苦に、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五盛陰苦の四つを加えたものである。（くわしくは本書四二五ページ参照）

通解

三千塵点劫の昔に、大通智勝仏という仏がおり、その仏は出家する前は王様であって、十六人の王子があっ

た。そしてその十六王子は、みな、大通智勝仏から法華経の説法を受け、やがて八方の国土に生じて成仏したということについての御義口伝である。

御義口伝には、次のように仰せである。十六王子の「十」とは、地獄から仏界に至る十界を意味しているのである。そして「六」は、眼耳鼻舌身意の六根を意味している。

また「王」とは心王―生命活動の本源であり、「子」とは心数―具体的生命活動のことである。すなわち十六王子とは、実相の一理の大通の子―すべて事の一念三千である妙法蓮華経の当体、十界三千の生命、これを大通の子というのである。

今、南無妙法蓮華経と唱え奉る日蓮大聖人の門下は、十六王子に当たるのである。

また、八方作仏とは、十六王子が八方の国土に二人ずつ生じて成仏したことである。八方とは、東西南北の四方に、東南、西南、東北、西北の四維である。このことは、どこの世界においても、アメリカにおいても、ソ連においても、イギリスにおいても、南無妙法蓮華経を唱えれば仏になれるということを表わしているのである。

そしてこの八方作仏は、われわれの八苦の煩悩が即菩提と開くことを意味する。八苦とは、生老病死の四苦に、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五盛陰苦の四つを加えたものである。

講義

宗教のための宗教、仏法のための仏法は、決してありえない。概して、世間の人々には、宗教は崇高なもの、現実の社会は、きたないもの、したがって、宗教は現実を切り離して考えるべきである、と思いこんでいる傾向がある。これこそ、宗教の本質を知らない、世間一般の宗教の仮面に、たぶらかされている姿と断ぜざるをえない。

現実の救済、現実の社会改革、また、物心両面にわたる幸福確立の源泉こそ、真実の宗教の力であり、使命であることは、当然の理である。

いま、大聖人のご観心より拝し、妙法蓮華経二十八品には、一偈一句たりとも、生命論からはなれた議論はないのである。生命活動は、生活である。すなわち、生活をはなれた、宗教、信心は、絶対にありえないのである。十六王子というも、観心の立ち場より論ずれば、妙法護持のわれら自身のこととなる。

すなわち、十界、六根、心王、心数を説き明かした哲理である。

実相の一理とは、南無妙法蓮華経のことである。しかして、われらは、御本仏・日蓮大聖人の子供であると拝すべきであると。

真実の大聖人の弟子は、この文に照らし、真実の永遠の王子なりと、確信すべきである。いかに、福徳に満ち

満ちた、人生であろうが、世間の王子は「今世だけ」の王子である。われらは、宮殿こそないが、夢のごとき特権こそないが、大王の子として、民衆の中に、民衆と共に生きてゆく、栄光に輝く大王子なのである。

八方作仏とは、十六人の王子が、二人ずつそれぞれわかれて、八方に法華経を説きに行き、成仏した。いま大聖人は、八方とは八苦のことである。題目を唱えることにより、八方に行かずして、その場で、その当体で、菩提を悟らしめるの法門なりとお説きであられる。

第六　即滅化城の事

本文

第六即滅化城の事

御義口伝に云く我等が滅する当体は化城なり、此の滅を滅と見れば化城なり不滅の滅と知見するを宝処とは云うなり、是を寿量品にしては而実不滅度とは説くなり、滅と云う見を滅するを滅と云うなり三権即一実の法門之を思う可し、或は即滅化城とは謗法の寺塔を滅する事なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は化城即宝処なり我等が居住の山谷曠野皆皆常寂光の宝処なり云云。

語訳

即滅化城　「第一化城の事」に引用した文の中に「即ち化城を滅して」とあるところである。

而実不滅度　寿量品（五〇六ページ）には「衆生を度せんが為の故に、方便して涅槃を現ず、而も実には滅度せず、常に此に住して法を説く」とある。仏が滅度するのは方便のためで、実際には滅度していないということ。生命は永遠であることをあらわしている。

滅と云う見を滅するを滅と云うなり　「即滅化城」の滅とは、われわれの身は、無常であり、苦悩、煩悩に満ちたものとし、この身を滅し、苦悩、煩悩を断ち切って、どこか別世界において悟りがあると説くところの、爾前権教に対する執着を滅することを滅というのである。

三権即一実　三権とは、声聞乗、縁覚乗、菩薩乗の三乗である。一実とは、一仏乗である。法華経にきて、開三顕一がなされ、九界即仏界があらわれたことをいう。また、三権とは蔵通別の三教である。一実とは円教たる法華経である。蔵通別の三教も法華経によって開会されることをいう。（講義参照）

我等が居住の山谷曠野皆皆常寂光の宝処　念仏宗等では、この世を穢土であると嫌って、この土よりはなれようとする。しかし、法華経では、娑婆世界が即寂光土であると説いている。妙法受持のわれらは、この土即常寂光の国土とあらわれるのである。このこともまた、化城即宝処に通ずるところである。

通解

これは化城喩品（三四四ページ）に「爾の時に導師、此の人衆の、既に止息することを得て、復疲倦無きを知って、即ち化城を滅して、衆人に語って、汝等、去来宝処は近きに在り。向の大城は我が化作する所なり。止息せんが

為のみと言わんが如し」とあるところである。すなわち導師が、みんなが化城で休息し、疲れをのぞいたのを見、その化城を消滅させ、さあ本来の目的地である宝処に行こうと促すところである。

御義口伝には、次のように仰せである。われわれの肉体というものは、必ず滅する。それゆえに、化城―かりの姿である。

この即滅化城の滅を滅亡と見れば、すなわち、生命を今世限りとすれば、化城である。不滅の滅と知見する、つまり永遠の生命を確信すれば、宝処になるのである。

このことを寿量品（五〇六ページ）では、「而実不滅度」（而も実には滅度せず）と説いているのである。

また、生命は今世限りであるという見方を滅することを、滅といっているのである。

三権即一実の法門とは、三乗即一仏乗であり、化城即宝処のことである。仏の境涯は、遠くにあるものでもなければ、だんだん仏になるものでもない。わが身がすなわち仏なり、仏の当体なりと、確信することにつきるのである。

また、即滅化城とは、謗法の寺塔を折伏しつくすことである。

今、日蓮大聖人およびその門下として、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、九界即仏界なることを覚知するのである。われわれが居住するところの山や谷、曠野など、すべてのところが常寂光の宝処―仏土となるのである。

講義

永遠の生命を明かしている哲理である。「不滅の滅」の知見とは、三大秘法の本尊に、南無し、各人が、感得する以外にわからぬところである。

生命は永遠でない、という低い思想の行き詰まりから、現在の政治、教育、経済、社会の行き詰まりがある、といえるのである。すなわち、民主主義の根本土台ができ上がっていない。一切の社会が砂上の楼閣となっている。誠に、悲しむべき状態といわねばならない。一日も早く、広宣流布し、個人も、社会も、世界も、行き詰まりのない時代を迎えたいものである。

三権とは、声聞、縁覚、菩薩のことである。知識、技術等が、画竜点睛たる妙法を根本とすれば、最高に生かされ、幸福への知識、技術となるということである。すなわち、本尊を受持しない三権は化城と同じく、絶対の幸福はありえない。三権即一実とは、妙法を唱えれば、三乗、三権の技術、知識が、ぜんぶ、生かされる状態と考えられよう。

「化城即宝処なり」についてはすでに述べたが、さらにいえば、化城は観念、宝処は生活、化城は理、宝処は事にわけることもできる。

われわれが、同志を、後輩を、真剣に激励する。この激励自体は、まだ化城である。この激励によって、起ち

上がり、信心が進み、境涯が開けば、それ自体は宝処で、すなわち、化城即宝処になるわけである。

たとえば、学生として、目標をかかげ、勉強しようと決意する。これは、まだ化城である。それ自体には、功徳がない。その決意を出発として、真剣に努力し、実力がついてくる、それ自体は宝処である。

第七　皆共至宝処の事

本文

第七皆共至宝処の事

御義口伝に云く皆とは十界なり共とは如我等無異なり至とは極果の住処なり宝処とは霊山なり、日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は一同に皆共至宝処なり、共の一字は日蓮に共する時は宝処に至る可し不共ならば阿鼻大城に堕つ可し云云。

語訳

皆共至宝処　化城喩品（三五三ページ）には「汝今勤め精進して、当に共に宝所に至るべしと言わんが如く」とある。「当」の字をここでは「皆」の字に作ってある。これは、一切衆生を救う大聖人のご境涯から経文を読まれたからであろう。

如我等無異　方便品（一七六ページ）に「我が如く等しくして異ること無からしめんと欲しき」とあり、一切衆生を仏と同じ境涯に入らしめるということである。観心本尊抄（二四六ページ）には、この経文を引いて「妙覚の釈尊は我等が血肉なり因果の功徳は骨髄に非ずや」と仏の大慈悲を説かれている。

極果　仏界をさす。「極」とは最高ということであり、果とは仏果を意味する。仏果こそ最高の幸福境涯であるから極果という。

霊山　霊鷲山のこと。釈尊が法華経を説いたところ。ただし、大聖人がここでいわれる「霊山」とは、大御本尊の住所であり、信心したわれわれの住所である。また幸福境涯をさす。

阿鼻大城　阿鼻は梵語。「無間」と訳す。無間地獄という意味である。大城とは、無間地獄が、七重の鉄城、七層の鉄網で囲まれていて、凡力では抜け出ることができないほど堅固な所であるというので、城にたとえるのである。無間地獄のことについては、御書の顕謗法抄（四四七ページ）にくわしい。

通解

御義口伝には、次のように仰せである。

「皆共に宝処に至る」の「皆」とは、地獄より仏界にいたるすべてをいうのである。「共」とは、「如我等無異」――方便品の「我が如く等しくして異ること無からしめんと欲しき」、つまり一切衆生を仏と同じ境涯に入らしめるということである。

「至」とは、極果の住処へ至る、すなわち、最高の幸福境涯に至るということである。「宝処」とは霊鷲山のことである。大御本尊のいますところであり、また、最高の幸福境涯を意味している。

今、大御本尊を信じ、南無妙法蓮華経と唱え奉る日蓮大聖人の門下は、一同に皆共至宝処、すなわち、成仏することができるのである。

とくに、「共」の一字は、日蓮大聖人と共にいる—大聖人を信ずるときには、成仏することができるし、日蓮大聖人と共でない、すなわち、離れ、不信の念をおこすならば、阿鼻地獄におちる、不幸のドン底におちるということを示しているのである。

講義

「皆共至宝処」の文こそ、自由、平等、尊厳の、民主主義の一大原理である。「皆」とは、十界三千の当体のことである。日本人も、イギリス人も、フランス人も、インド人も、ソ連人も、皆同じ生命であるとの言であられる。すなわち、人類平等の大生命哲学と拝すべきである。「共」とは、いかなる人たりとも、等しく、仏界を具している。信心によって、仏界を湧現することによって、仏の生命と等しくなる、妙法の当体となるとの、もったいない平等論である。「至」とは、極果にいたる信心のことである。すなわち、ひたぶるに信心に励み、社会に価値創造しゆくわれらの住処こそ、尊厳であり、霊山なりとの言であられる。

「日蓮に共する時は」とは、大聖人の弟子として、真剣に信心し、広宣流布の実践に進む人のことである。すなわち、創価学会である。したがって、われらの住処は、宝処である。我此土安穏である。平和と幸福を享受できうることは、絶対に間違いないわけである。不共、謗者の人々は、阿鼻大城に堕ちざるをえない、御金言に照らし、現実の世界をみて。一日も早く、いかなる障魔にも打ち勝って、楽土日本を、築いてゆきたいものである。

五百弟子品三箇の大事

五百弟子品三箇の大事

第一衣裏の事

本文

第一衣裏の事

御義口伝に云く此の品には無価の宝珠を衣裏に繋くる事を説くなり、所詮日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は一乗妙法の智宝を信受するなり信心を以て衣裏にかくと云うなり。

語訳

衣裏　法華経の七譬の中の一つである。衣裏珠の譬え、または貧人繋珠の譬えともいう。方便品八箇の大事の「第一方便品の事」の語訳参照。五百弟子授記品（三六八ページ）には「世尊、譬えば人有り、親友の家に至りて、酒に酔うて臥せり。是の時に親友、官事の当に行くべきあって、無価の宝珠を以って、其の衣の裏に繋け、之を与えて去りぬ。其の人酔い臥して、都

べて覚知せず。起き已って遊行し他国に到りぬ。衣食の為の故に、勤力求索すること、甚だ大いに艱難なり。若し少し得る所有れば、便ち以って足りぬと為す。後に親友会い遇うて、之を見て是の言を作さく、『咄い哉丈夫。何ぞ衣食の為に、乃ち是の如くなるに至る。我れ昔、汝をして安楽なることを得、五欲に自ら恣ならしめんと欲して、某の年日月に於いて、無価の宝珠を以って、汝が衣の裏に繋けぬ。今故現に在り、而るを汝知らずして勤苦し憂悩して、以って自活を求むること甚だ為れ癡なり。汝今此の宝を以って所須に貿易すべし。常に意の如く乏短なる所無かるべし』といわんが如く、仏も亦是の如し」とある。

無価　あまりにも高価で、価をつけることができないということで、無上最高の意である。

一乗妙法の智宝　一乗とは一仏乗、法華経をさす。ただしここでは、末法の法華経である南無妙法蓮華経のこと。妙法とは、文底秘沈の大法本地難思の境智の妙法をさす。智とは智慧である。所詮、一乗妙法の智宝とは、大御本尊のことである。

通解

御義口伝には次のように仰せである。

この五百弟子授記品には、酒に酔って臥している友人の衣の裏に、無価の宝珠―無上の宝珠をかけたという話が説かれている。われわれの生命自体に仏界があるということを意味している。また観心本尊抄（二五四㌻）に「一念三千を識らざる者には仏・大慈悲を起し五字の内に此の珠を裹み末代幼稚の頸に懸けさしめ給う」とあるように、求めずして無上の宝珠である御本尊をいだくことができたことを意味していると思われる。

所詮、南無妙法蓮華経と唱え奉るわれわれ日蓮大聖人の門下こそ、一乗妙法の智宝、すなわち大御本尊を信受することになるのである。

信心があることを、衣の裏にかけるというのである。

講義

仏界所具の文である。すなわち無価の宝珠とは、仏界―法性―妙法のことであり、衣裏とは、生命の奥底、一念のことである。われわれは、人より幸福をもらうものでもない。あくまで、幸福は自分自身が創るものである。その根本が、信心である。

第二　酔酒而臥の事

本文

第二酔酒而臥の事

御義口伝に云く酒とは無明なり無明は謗法なり臥とは謗法の家に生るる事なり、三千塵点の当初に悪縁の酒を呑みて五道六道に酔い廻りて今謗法の家に臥したり、酔とは不信なり覚とは信なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る時無明の酒醒めたり、又云く酒に重重之れ有り権教は酒法華経は醒めたり、本迹相対する時迹門は酒なり始覚の故なり本門は醒めたり本覚の故なり、又本迹二門は酒なり南無妙法蓮華経は醒めたり酒と醒むるとは相離れざるなり、酒は無明なり醒むるは法性なり法は酒なり妙は醒めたり妙法と唱うれば無明法性体一なり、止の一に云く無明塵労即是菩提と。

語訳

酔酒而臥　五百弟子授記品に（三六八ページ）「世尊、譬えば人有り、親友の家に至りて、酒に酔うて臥せり」とある。

五道　六道のうち天界を除いた五道をいう。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人の五道である。五道も六道も、ともに不幸な生活の流転を意味する。

始覚・本覚　始覚とは始成正覚のことである。爾前経および法華経迹門では、釈尊は十九歳で出家し、三十歳で成道したという表面的な説き方しかしなかった。法華経本門寿量品にきて、自分は五百塵点劫という遠い昔に、すでに成道したと説くのである。これは自分の本地を覚ったことを意味するから本覚という。久遠実成のこと。

又本迹二門は酒なり南無妙法蓮華経は醒めたり　種脱相対を示している。文上の本迹二門は、文底下種の法たる南無妙法蓮華経に相対すれば、酒すなわち無明である。いまだ生命の奥底を明かしていないからである。ただ南無妙法蓮華経のみが、生命の奥底を説き明かし、一切衆生を幸福にする大原理なのである。したがって「醒めたり」とおおせられているのである。

法は酒なり妙は醒めたり　同様の文が、御義口伝上（七〇八ページ）に「妙とは法性なり法とは無明なり無明法性一体なるを妙法と云うなり」とある。

無明塵労即是菩提　無明とは三惑のなかの第三の無明惑である。いっさいの迷いの本源であるから元品の無明という。塵労とは、貪瞋癡をさしていう。塵は六塵（色、声、香、味、触、法）で、労は労倦で、塵によって労をなすから塵労という。したがって無明塵労で煩悩をあらわす。それが「即是菩提」であるから、煩悩即菩提のことである。

通解

「世尊、譬えば人有り、親友の家に至りて、酒に酔うて臥せり。是の時に親友、官事の当に行くべきあって、無

価の宝珠を以って其の衣の裏に繋け、之を与えて去りぬ。其の人酔い臥して、都べて覚知せず……」のところの御義口伝である。

この酒とは、無明（迷い）であり、迷いの結果、謗法をしている状態である。酒に酔って臥しているとは、謗法の家に生まれることをたとえているのである。

迹門の意は、釈迦仏法の衆生は、三千塵点劫という遠い昔に、悪縁の酒―不信、謗法の心をおこして、その結果、地獄から人、天にわたる五道六道の不幸な生活を酔いめぐってきて、今また邪宗、謗法の家に生まれたというのである。酔うとは不信であり、覚めるとは信ずることである。

今、日蓮大聖人門下のわれわれが、南無妙法蓮華経と唱え奉る時には、無明、謗法の酔いがさめたといえるのである。

さて、この酔っている、さめているということも、何段階もあるのである。

権実相対して、権教は酒で、法華経はさめている状態である。

また本迹相対して、迹門は酒である。始成正覚―インドで初めて仏になったと説いているからである。本門はさめている。久遠実成五百塵点劫の成道を説いているからである。

また、文上の本迹二門は酒である。文底の南無妙法蓮華経は全くさめている状態である。

酒に酔っていることと、さめていることとは、離れたことではない。酒は無明、迷いであり、さめていることは法性、悟りである。妙法の「法」は酒、すなわち無明であり、「妙」はさめていること、すなわち法性である。

南無妙法蓮華経と唱えれば無明と法性、迷いと悟りは、その体が同じであることを悟るのである。

摩訶止観の一には「無明塵労即是菩提」といっている。無明とは元品の無明惑、塵労とは貪瞋癡の三毒、したがって、無明塵労とは煩悩のことであり、天台は煩悩即菩提ということをいっているのである。

講義

酒とは無明なり無明は謗法なり臥とは謗法の家に生るる事なり

一往は、宿命論である。再往は、宿命打破論に入るわけである。

「三千塵点の当初」の段は、あらあら永遠の生命を説き、不幸の根本は、今世だけのものではない。あくまで、前世、過去世の根源があることを明かしている文となる。生命は、永遠である。この不幸の遠因を明かしている個所とも読めるわけである。

大聖人の仏法は、因果倶時の一理をとかれている。すなわち、久遠元初の本体こそ、三大秘法の本尊であられる。したがって、わが身の一念の瞬間に永遠をはらみ、瞬間の連続が、永遠となる。その一念一瞬の当体こそ、因果倶時となるわけである。われわれの宿業の結果より、未来への幸福をこい願う、一念の成就を、確立しきる原理こそ、本因妙の大仏法なのである。

酒とは、無明である。これこそ、邪悪な思想、哲学を指すことは当然である。

また、「本迹二門は酒なり南無妙法蓮華経は醒めたり」とは、種脱相対のところである。すなわち、末法今時においては、いっさいの解決は、日蓮大聖人の仏法による以外、絶対にありえないとの御宣言である。

第三　身心遍歓喜の事

本文

第三身心遍歓喜の事

御義口伝に云く身とは生死即涅槃なり心とは煩悩即菩提なり、遍とは十界同時なり歓喜とは法界同時の歓喜なり、此の歓喜の内には三世諸仏の歓喜納まるなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉れば我則歓喜とて釈尊歓喜し給うなり、歓喜とは善悪共に歓喜なり十界同時なり深く之を思う可し云云

語訳

身心遍歓喜　五百弟子品の最後（三七二ページ）には「我今仏に従って、授記荘厳の事、及び転次に受決せんことを聞き奉って、身心遍く歓喜す」とある。

身とは生死即涅槃なり心とは煩悩即菩提なり　生死とは、からだの上にあらわれる苦悩である。煩悩とは、心のなかのさまざまな苦悩・煩悶である。したがって、身が歓喜するとは生死即涅槃であり、心が歓喜するとは煩悩即菩提である。

十界同時　地獄界から仏界にいたるまでの十界の生命が、同時に歓喜すること。信心によって、地獄の苦しみに責められている人も、餓鬼界の人も、畜生界の人も、ぜんぶ即座に生命を歓喜させていくことができる。

法界同時の歓喜　法界とは宇宙の森羅万象。われわれの身心―生命が歓喜すれば、同時に宇宙の森羅万象が歓喜するということ。依正不二を示している。

我則歓喜　宝塔品に「此の経は持ち難し、若し暫くも持つ者は、我即ち歓喜す、諸仏も亦然なり」とある。この我とは釈尊である。釈尊といっても、蔵、通、別、迹門、本門、文底の六種の釈尊がある。文底の釈尊とは日蓮大聖人のことである。

通解

五百弟子授記品の最後に「我今仏に従って、授記荘厳の事、及び転次に受決せんことを聞き奉って、身心遍く歓喜す」とある。この文について、御義口伝には次のように仰せである。

身が歓喜するとは、生死即涅槃ということである。心が歓喜するとは、煩悩即菩提ということである。身心ともに、九界即仏界と開くことをいうのである。また「遍」とは、十界同時であることである。歓喜は、わが身心だけが歓喜するのではなく、一念三千の理法によって、法界すべてが同時に歓喜するのである。

この歓喜のなかには、三世諸仏の歓喜もはいっているのである。見宝塔品第十一に「此の経は持ち難し、若し

暫くも持つ者は、我則ち歓喜す、諸仏も亦然なり」とあるように、今、日蓮大聖人の門下が南無妙法蓮華経と唱え奉れば、「我則ち歓喜す」とて、釈尊、すなわち文底の釈尊である日蓮大聖人は、ご歓喜あそばされるのである。この歓喜は、善悪ともに、つまり仏界も九界も共に歓喜するのである。十界が同時に歓喜し、成仏していくのである。このことを深く思案していくべきである。

講義

「身心遍歓喜」の身心は、色心不二の意であり、遍とは、十界同時の生命全体に活動があることを意味する。地獄より、仏界にいたるまで、小宇宙である。わが当体は、局部だけの生命活動でなく、必ず全生命に、その生命活動がなされるのが、実体であり実相なのである。のみならず、われら自身の十界の生命活動が、即、大宇宙であり、法界に同時に反映するとの言を、その不思議を、よくよく思索すべきであろう。

「此の歓喜の内には三世諸仏の歓喜納まるなり」のところでは、追善供養の原理も含まれている。また、自身が、信心により、幸福生活の体験を得た、この実証よりみて、先祖の抜苦与楽に通じ、先祖も、また、喜んでいるとも考えられるわけである。「我則歓喜とて釈尊歓喜し給うなり」とは、われらが、妙法を護持して、よろこんで折伏し、教学に励んでいけば、大聖人が喜ばれる。もし、苦しんでいれば、大聖人は、悲しまれるのである。所詮、歓喜の前進をしきってゆく事が、信心の最大事といえる。経に「一念随喜の功徳」云云とあるよう

に、歓喜の信心のあるところに、必ず功徳は湧いてくるのである。

学会内でいえば、青年が成長してくれれば、親もよろこぶであろうし、私もうれしい。青年が成長しなければ、親も悲しみ、私も苦しい。

いま、各政党でも、また、会社でも、労働組合でも、国全体がこの方程式を考えるべきである。皆が、幸福になることを願い、指導者たちが、「ああ本当によかった、喜ばしいことだ」と胸奥よりいえる時代が来なくてはならない。ところが、派閥抗争、権力闘争等、人を押しのけ、押したおし、自分だけよくなり、人をつき落としてもかまわぬという利己主義が充満する現実の世界といわざるをえない。その根本解決こそ、すべての人が、御本尊を受持することにつきるわけである。

最後に「善悪共に」は、いかなる境遇たりとも、病人、貧乏、健康、富者等、万人が、妙法受持の人生になれば、必ず成仏できうるとの御文である。

本有の妙法に、照らされてみれば、提婆、十羅刹女も、皆、妙法の当体となるわけである。所詮、いかなる人たりとも、宿命転換をなし、本有常住に、幸福な人生を営むことは、必定なりとの御文と解する。

人記品二箇の大事

人記品二箇の大事

第一　学無学の事

本文

第一学無学の事

御義口伝に云く学とは無智なり無学とは有智なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは学無学の人に如我等無異の記を授くるに非ずや、色法は無学なり心法は学なり又心法は無学なり色法は学なり学無学の人とは日本国の一切衆生なり、智者愚者をしなべて南無妙法蓮華経の記を説きて而強毒之するなり。

語訳

学無学　「学」とは、これから勉学すべき無智の者をいう。「無学」とは、学問の修行を修得した有智の者をいう。人記品で学無学二千人が宝相如来と授記されている。

色法は無学なり心法は学なり又心法は無学なり色法は学なり　色心不相応であることを示しているのである。色法が無学で心法が学とは、たとえば姿、行動がひじょうにりっぱであっても、心は無智であったり、邪智、謗法に染まっている場合などである。また心法が無学で色法が学とは、たとえば、心の中では正しいと認めつつも、またどうすればよいか等がわかっていながらも、実践活動にうつすことができない場合などである。講義参照。

而強毒之　「而も強いて之を毒す」と読む。文句にある。妙法を聞くのを好まない者に対しても強いてこれを説いて毒心を起こさせること。毒心というのは、貪瞋癡の三毒で、なかでも地獄の因である瞋恚をいう。文句の第十には「本と已に善有り、釈迦は小を以て而も之を将護したまう、本と未だ善有らざれば、不軽は大を以て而も強いて之を毒す」とあり、釈尊の化導の仕方と、常不軽菩薩の化導の仕方が述べられている。末法の衆生は本未有善であるから、不軽菩薩の立ち場をとる。而強毒之とは、折伏であり、これによって、反対する者も、毒鼓の縁をむすんで、必ず御本尊にあえるという原理である。また戸田城聖前会長は「倒れて、なおかつ、ご利益のあることを確信することである」とも述べられている。

通解

人記品においては、学無学の声聞の弟子二千人が成仏の記を受けるのである。

御義口伝には次のように仰せである。「学」とはこれから勉学すべき無智のものをいい、「無学」とは学問の修行が終了した有智のものをいう。今、日蓮大聖人およびその門下が、南無妙法蓮華経と唱えて折伏を行ずるのは、日本国の学無学の人を「我が如く等しくして異ること無からしむる」（一七六㌻）すなわち、全員を成仏の幸

福境涯に導く行為ではないか。色法は無学であり、心法は学である。また心法は無学であり、色法は学である。学無学の人とは、日本国の一切衆生である。日本国の一切の智者愚者をひっくるめて、南無妙法蓮華経の記別を説いて、強折するのである。

講義

「学」とは、学問の未熟な人。「無学」とは、すでに学問に透徹した人。今の世間で使われている言葉と反対になる。仏法を知ってくると、現代用語の中に、いかに多数の仏法用語が、長く広く使われているかが伺える。その、現代に流布されている用語が、今度は、非常に曲解されて来ていることも事実である。「我慢強い」という言葉は、普通、良い場合に使われる。しかし仏法の上では、我慢偏執といって、よくないこととされている。

さて、「色法は無学なり心法は学なり又心法は無学なり」云云の個所を、応用し解釈して考えてみたい。唯物論は、色法は無学となり、心法は学となる。唯心論は、心法は無学であり、色法は学といわざるをえなくなる。両者とも、低級な哲理といわざるをえない。また、「色法は無学なり」とは、肉体は健全である。しかし「心法は学なり」精神は、薄弱である。頭は悪い。反対に「心法は無学なり」とは、頭脳は実に明晰である。しかし「色法は学なり」身体は非常に悪い。虚弱である、……等々、さまざまに解釈することができる。所詮、色心共に、「無学」に到達することが、信心修行の目的となる。現代語でいえば、完全なる凡夫、人間、人格ということであろう。

「智者愚者をしなべて南無妙法蓮華経」云云とは、いかなる智人、大学者たりといえども、また、愚者であっても、絶対の幸福は、成仏だけは、妙法による以外に断じてないとのご指導であられる。

「而強毒之」とは、強いて之を毒すと読み、強折のことである。所詮、御本尊を受持せしむる方法は、折伏をもってする以外に道はないとのおおせであられる。

第二　山海慧自在通王仏の事

本文

第二山海慧自在通王仏の事

御義口伝に云く山とは煩悩即菩提なり海とは生死即涅槃なり慧とは我等が吐く所の言語なり自在とは無障碍なり通王とは十界互具百界千如一念三千なり、又云く山とは迹門の意なり海とは本門の意なり慧とは妙法の五字なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は山海慧自在通王仏なり全く外に非ざるなり我等行者の外に阿難之れ無きなり、阿難とは歓喜なり一念三千の開覚なり云云。

語訳

山海慧自在通王仏　人記品では、釈尊の十大弟子の一人で、多聞第一といわれた阿難が授記され、山海慧自在通王仏の名号が

与えられた。国を常立勝脩といい、劫を妙音偏満といった。

山とは煩悩即菩提　煩悩はよく山にたとえ、「煩悩の山」等という。山海慧自在通王仏の「山」は、煩悩即菩提をあらわしている。

海とは生死即涅槃　生死はよく海にたとえ、「生死海」とか「生死の苦海」といったりする。しかし、山海慧自在通王仏というとき、自然にこの生死の海は即涅槃の大海とあらわれていることを示すのである。

慧とは我等が吐く所の言語なり　われわれの言々句々というものは、ことごとく智慧の働きによる。「寒い」と発声するのも、「空腹」を訴えるのも、他人をののしることも、ぜんぶ、縁にふれてあらわれた智慧の働きである。

無障碍　さわりがないこと。煩悩、苦悩等に束縛されない状態、あるいは生活をいう。

通王とは十界互具百界千如一念三千なり　通とは十界互具、百界千如、三千世間を意味する。宇宙の森羅万象に通ずるがゆえに通という。王とは心王であり、一念である。したがって通王とは一念三千をあらわしているのである。

山とは迹門の意なり海とは本門の意なり　山とは煩悩即菩提であり、どちらかといえば、迹門の立ち場である。二乗作仏、悪人成仏等が説かれ、九界即仏界、仏界即九界の十界互具の姿が説き明かされたのは法華経迹門である。ここに宇宙の森羅万象は即妙法の当体であることが明らかにされたのであった。海とは生死即涅槃であり、どちらかといえば、本門の立ち場である。生死とは生命の流転の上の苦悩であり、それが即永遠の生命なりとの開覚があらわれて、常住の世界が説き出されるのは本門寿量品であるからである。

慧とは妙法の五字なり　煩悩が即菩提と開かれるのも、生死が即涅槃とあらわれるのも、結局、文上の本迹二門にはその文のみあって実義がなく、ただ文底下種の南無妙法蓮華経の智慧の働きによるのである。したがって山海慧自在通王仏の慧とは、妙法の五字と仰せられたのである。

阿難とは歓喜なり　阿難は梵語。歓喜、慶喜、無染等と訳す。釈尊十大弟子の一人。多聞第一といわれた。釈尊の従弟で、釈尊の叔父斛飯王の子ともいわれている。釈尊が菩提樹下に坐して成道した日に生まれたという。斛飯王が使者を釈尊の父浄飯王のもとへおくり、阿難の生誕を知らせたところ、王はひじょうに喜び、歓喜と命名したという。またすばらしい相をもって生まれたので、国民はこぞって王子の誕生を慶んだので、それによって慶喜の名があるという。また、阿難が仏に常随給仕し、歓喜に燃えて仏道修行に励んだことも、その名の示すとおりであった。

通解

人記品において、声聞の弟子の阿難が山海慧自在通王如来の記別を受けている。御義口伝には次のように仰せである。その「山」とは煩悩即菩提を表わし、「海」とは生死即涅槃を表わし、「慧」とはわれわれが吐くところの言葉を表わしている。「自在」とは無障碍であることを意味し、通王とは十界互具、百界千如、一念三千を意味している。また、「山」とは迹門、「海」とは本門、「慧」とは妙法、すなわち文底独一本門を意味しているのである。

今、南無妙法蓮華経と唱え奉る日蓮大聖人およびその門下は、山海慧自在通王仏である。この仏も、われわれのことを指しているのであって、全く別のことではないのである。われわれ法華経の行者以外に阿難はないのである。阿難とは梵語で歓喜という意味である。われわれが一念三千の当体である、仏であると開覚して、歓喜す

ることをさすのである。

講義

人間はみな、自由自在を欲し、無障碍、すなわち、苦にしばられない生活を要求しているのである。その根本生活法が、妙法に依る以外に決してないとの御文である。

「阿難とは歓喜なり」云云の文は、われら己心の阿難であり、信心ほど最大のよろこびは、絶対にないとのご指導である。これは、事実、われわれが体得、体験しているとおりである。釈尊在世における阿難は、常随給仕、多聞第一といわれ、迦葉につづき、第二の付法蔵とされた。すなわち、信心修行の鑑といわれ、その一念は、永遠の生命を覚るため、歓喜に燃えて一途に修行して来たことを、大聖人がお引き遊ばされた文と拝する。

自在とは無障碍なり

自在とは、自由自在、衆生所遊楽という意味であり、無障碍とは、不幸な宿業にしばられないことである。すなわち、絶対的幸福境涯、仏界の湧現のことである。われわれは、この自在、無障碍の会得、確立を願望し、努力しているといえる。所詮、信心の目的も、自在、無障碍の人生確立につきるわけである。その方法は何か。それは、三大秘法の本尊に題目をあげる以外にない。自在の境涯とは、特別な姿になるものでは決してない。最も

凡人らしく、人間らしく、そのままの姿で、大福運をつみ、世の道理をわきまえ、宿命的な、三悪道、四悪趣（あくしゅ）の力にひきずりまわされない生命活動のことである。

例えば、怒りは修羅、この命の強い人は、怒りに引きまわされて、とんだ不幸をまねいてしまう。苦しみは地獄、この命の強い人は、病気の苦悩、借金等の悩みがあり、この宿命と戦い、自在、無障碍の人生を築きたいことは当然の理となろう。以下九界の生命活動も、これに準じて考えていただきたい。

法師品十六箇の大事

法師品十六箇の大事

法師品十六箇の大事

第一　法師の事

本文

第一法師の事

御義口伝に云く法とは諸法なり師とは諸法が直ちに師と成るなり森羅三千の諸法が直ちに師と成り弟子となるべきなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は法師の中の大法師なり、諸法実相の開覚顕れて見れば地獄の燈燃猛火・乃至仏果に至る迄悉く具足して一念三千の法師なり、又云く法とは題目・師とは日蓮等の類いなり。

語訳

開覚　開き覚るの意で、己身の仏界を開き、わが身が妙法の当体であると覚ること。また唱題によって開かれた境地、悟りを

いう。

地獄の燈燃猛火　授記品の「第二迦葉光明の事」の語訳（本書五〇〇ページ）参照。

通解

御義口伝に、法師品の「法師」ということについて、次のように述べられている。「法」とは諸法――あらゆる現象ということである。「師」とは諸法が直ちに師となる、すなわち、宇宙のあらゆる現象が、一念三千の当体、つまり、御本尊と現われて、それが直ちに師となるのである。森羅三千の諸法すなわち南無妙法蓮華経が、直ちに師匠となり、われわれはその弟子となり、成仏できるのである。

いま、南無妙法蓮華経と唱え奉る日蓮大聖人およびその門下は、法師の中の大法師、つまり、指導者の中の大指導者である。また、あらゆる現象は妙法蓮華経の当体であるという諸法実相の理が顕われてみれば、地獄の灯燃猛火から仏界にいたるまで、ことごとく、一念三千の法師ということができるのである。また、法師の「法」とは南無妙法蓮華経、「師」とは日蓮大聖人のことであり、人法一箇を表わしているのである。

講義

人法一箇の文であられる。釈迦仏法は、人法勝劣―法が勝り人が劣る。日蓮大聖人の仏法は、人法一箇である。すなわち、法は南無妙法蓮華経であり、人は日蓮大聖人となる。

「法とは諸法なり師とは諸法が直ちに師と成るなり」の御文は、総勘文抄の（五六八㌻）「釈迦如来・五百塵点劫の当初・凡夫にて御坐せし時我が身は地水火風空なりと知しめして即座に悟を開き給いき」云云の意に通ずるところである。すなわち、地水火風空は諸法であり、南無妙法蓮華経のことである。開悟したもう仏は、久遠元初の自受用報身如来であり、即、日蓮大聖人であられる。また、森羅三千の諸法とは、換言すれば、宇宙それ自体なのである。その根本の法をば、日蓮大聖人は、一幅の大曼荼羅として具現あそばされ、一切衆生の「成仏への師」とされたのである。

御本尊を拝して、南無妙法蓮華経を中心とした十界三千の御文は、いわゆる諸法であり、法本尊である。「日蓮」とお認めは、人本尊をあらわされている。その大御本尊を師匠として護持し、広宣流布の使命を実践していく者こそ、一切の社会事象を、正見することができ、社会の真の指導者といえるのである。それを御文に「法師の中の大法師なり」と仰せである。すなわち「法師」とは、一般的にいえば、指導者のことであり、大法師とは経済の指導者、政治、科学等の指導者などを、さらに指導していく原理と力を有する者のことをいうのである。

「諸法実相の開覚顕れて見れば地獄の灯燃猛火・乃至仏果に至る迄悉く具足して一念三千の法師なり」とは、南無妙法蓮華経に照らしてみるならば、地獄界、餓鬼界、畜生界、修羅界、人界、天界、乃至、菩薩界、仏界等、それ自体が、宇宙に実在せる実体であることが、明らかである。ともにわれわれ生命の実相、実体の範疇でもある。ここで大事なことは、妙法が根本でなければ、すなわち、御本尊を中心としなければ、苦に束縛された生命活動をくりかえすのみであり、六道輪廻の域を出ないのである。したがってここでは、われわれ個々の生活においても、社会における活動も、もし妙法を指導理念とするならば、十界の生命ことごとく、幸福への価値創造を営むことができるとの言であられる。

第二　成就大願愍衆生故生於悪世広演此経の事

本文

第二成就大願愍衆生故生於悪世広演此経の事

御義口伝に云く大願とは法華弘通なり愍衆生故とは日本国の一切衆生なり生於悪世の人とは日蓮等の類いなり広とは南閻浮提なり此経とは題目なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者なり。

語訳

成就大願愍衆生故生於悪世広演此経　法師品（三八四―三八八ページ）には、末法において法華経をひろめる人は、じつは大菩薩が、願って悪世に生まれてきたのであると述べている。「是の諸人等は、已に曾て、十万億の仏を供養し、諸仏の所に於

て、大願を成就して、衆生を愍むが故に、此の人間に生ずるなり」「此の人は是れ大菩薩の、阿耨多羅三藐三菩提を成就して、衆生を哀愍し、願って此の間に生まれ広く妙法華経を演べ分別するなり」「是の人は、自ら清浄の業報を捨てて、我が滅度の後に於いて、衆生を愍むが故に、悪世に生まれて、広く此の経を演ぶるなり」などの文証がある。

南閻浮提　釈尊が出現した時代のインドでは、須弥山を中心とする宇宙観が信じられていた。釈尊もそれを否定せず一応は用いているが、これはインド人の物の考え方に順応して、わかりやすく仏法を説こうとしたためであろう。それは須弥山中心の宇宙観が、もっとも低い小乗経に説かれていることからもうかがわれる。それによると、世界の中央に須弥山があって、その高さは水面より八万四千由旬、水底より水面までも八万四千由旬であるという。そして、この山を八つの山（というより山脈）が囲んでいる。またその山と山との間にそれぞれ八つの海があり、須弥山を含めて九山八海という。そのいちばん外側の山（鉄囲山）に囲まれた海のなかに四州（四つの大陸）がある。東方を弗婆提、西方を瞿耶尼、南方を閻浮提、北方を鬱単越という。この四州のうち、仏法にもっとも縁のあるのは、南の閻浮提である。仏が出現するのも実にこの閻浮提なのである。現在において閻浮提とは、広くいえば地球全体、狭くいえば東洋といえよう。顕仏未来記（五〇八ページ）には「問うて云く月氏漢土に於て仏法無きことは之を知れり、東西北の三洲に仏法無き事は何を以て之を知る、答えて云く法華経の第八に云く『如来の滅後に於て閻浮提の内に広く流布せしめて断絶せざらしめん』等云云、内の字は三洲を嫌う文なり」とある。

通解

法師品には、末法において法華経をひろめる人は、じつは大菩薩が願って悪世に生まれてきたのであると述べ

ている。

「是の諸人等は、已に曾て、十万億の仏を供養し、諸仏の所に於いて、大願を成就して、衆生を愍むが故に、此の人間に生ずるなり」「此の人は是れ大菩薩の、阿耨多羅三藐三菩提を成就して、衆生を哀愍し、願って此の間に生まれ広く妙法華経を演べ分別するなり」「是の人は、自ら清浄の業報を捨てて、我が滅度の後に於いて、衆生を愍むが故に、悪世に生まれて、広く此の経を演ぶるなり」などの文証がある。

御義口伝には次のように仰せである。「大願を成就して」の「大願」とは法華弘通のことである。つまり広宣流布のことである。末法出現の地涌の菩薩は、すでに、他の世界において、広宣流布を成就してきたのである。「衆生を愍むが故に」の「衆生」とは、日本国の一切衆生のことである。そして、その「悪世に生まれて」くる人とは、もったいなくも、御本仏日蓮大聖人、およびその門下なのである。「広く此の経を演ぶるなり」の「広く」とは南閻浮提、一閻浮提、すなわち世界全体に広宣流布することであり、「此の経」とは題目、三大秘法の南無妙法蓮華経のことである。

いま南無妙法蓮華経を唱え奉る日蓮大聖人、およびその門下こそ、この法師品の文証に当たるのである。

講義

この文は、地涌の菩薩の使命、目的を明かされている。「大願とは法華弘通なり」とは、御本尊の広宣流布であ

り、人間勝利の新文化実現のことである。すなわち、おのおの、地涌の菩薩として、一生成仏、すなわち、幸福生活確立は、当然のことであるが、真の大菩薩であるならば、ただ一すじに、広宣流布達成に向かって、さらに戦いの駒を進めるであろう。今日においては、仏法に身をささげた、この革命児こそ、真の日蓮大聖人の弟子として、かならずや、三世十方の仏、菩薩より、大称賛を受けるのである。

「慜衆生故とは日本国の一切衆生なり」とは、別しては、日蓮大聖人が、日本国にご出現あそばされたがゆえに、当然、日本国の人々を、まずお救いくださるとの大慈大悲と拝することができるのである。総じては、全世界の人々が、「慜衆生故」の衆生になることは、当然のことである。現実に、インド、中国、韓国など、かつて全盛を誇った釈迦仏法は、ほとんど消滅してしまい、仏教発祥の地たるインドにおいてすら、ヒンズー教徒が、八割五分をしめる有様であって、仏教徒は、ごく僅かしか、残っていないのである。その仏教徒も、小乗教をやったり、権大乗教であったりして、知識人から、まったく相手にされない。

中国は、共産国であり、当然、生きた仏法が存在するわけがない。おそらく、細々と残存しているにすぎないであろう。また、あったとしても、化石のような、釈尊、天台仏法の余燼である。日本はどうかといえば、まったく同様である。「仏教」あって、「仏法」なきに等しい。宗教法人と名のつくものが、十八万も数えられるが、宗教の正邪、善悪は迷乱して、宗教はなんでもよいということになり、むしろ、誤った思想や宗教のために、真の幸福も、真の平和国家も、建設できえないのである。それは、大聖人ご在世も、今日も同じであり、その誤った思想、宗教に染まった人々は、慜衆生故の人々に当たるのである。

一日も早く、真実の仏国土の建設を、成就したいものである。そして、大聖人の御なげきを、お喜びに変えていきたいものである。

第三　如来所遣行如来事の事

本文

第三如来所遣行如来事の事

御義口伝に云く法華の行者は如来の使に来れり、如来とは釈迦・如来事とは南無妙法蓮華経なり・如来とは十界三千の衆生の事なり今日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉るは真実の御使なり云云。

語訳

如来所遣行如来事　法師品（三八六ページ）には「若し是の善男子、善女人、我が滅度の後、能く竊かに一人の為にも、法華経の、乃至一句を説かん。当に知るべし。是の人は則ち如来の使なり。如来の所遣として如来の事を行ずるなり」とある。

通解

「是の人は則ち如来の使なり。如来の所遣として如来の事を行ずるなり」について、御義口伝には次のように仰せである。末法に文底の法華経、南無妙法蓮華経をひろめる者は、如来、すなわち仏のお使いとして出現したのである。如来とは釈迦、「如来の事」とは南無妙法蓮華経である。また、如来とは十界三千の衆生、あらゆる衆生をも意味するのである。いま南無妙法蓮華経を唱え奉る日蓮大聖人、およびその門下こそ、真実の仏のお使いなのである。

講義

「如来所遣」について、文上では、釈尊の使いとしての、上行菩薩のことをいうのである。文底では、如来とは、日蓮大聖人のことであり、われら地涌の菩薩、即、創価学会員こそ、如来の使いなのである。所詮、文底より拝し、法華の行者とは、日蓮大聖人のことであり、それは久遠元初の自受用報身如来の再誕であられる。

次の「如来とは十界三千の衆生の事なり」の御文は、一往の理の上の説である。これは、すべての人々が、みな仏性をもっており、理の上では、如来であると、また、如来の使いとしての資格があることを、説かれているのである。再往は、日蓮大聖人の三大秘法の御本尊を護持し、またご遺命である広宣流布達成に、実践活動をし

ていく者こそ、真実の如来の使いである。このように、如来の使いを自覚するならば、自己を卑下したりすることは、おかしいことである。大聖人のお使いが、悩み苦しむわけがない。

たとえば、一国の大使でも、公使でも、みなその国の代理であり、代表である。したがって、その国は、いかなる大使、公使も、かならず尊敬し、守っている。同じく、如来の使いであるわれらも、諸天善神に護られることは、絶対なのである。われらは、もったいなくも、日蓮大聖人の使いなのだという自覚に立って、その名誉と誇りを忘れてはならない、一生成仏のためにも、一国、世界の安穏のためにも、また一切衆生を、永遠に救済しきる大仏法の、令法久住のためにも。また、如来の使いたる私たちを、謗り、いじめれば、宇宙の法則たる、因果の理法により、厳然と証明されることも、この文により明らかなのである。われらの信心は、この如来の使いを自覚するか、しないかによって、決まるともいわれる。ゆえに、大確信をもって進むべきである。

第四　与如来共宿の事

本文

第四与如来共宿の事

御義口伝に云く法華の行者は男女共に如来なり煩悩即菩提生死即涅槃なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は与如来共宿の者なり、傅大士の釈に云く「朝朝・仏と共に起き夕夕仏と共に臥し時時に成道し時時に顕本す」と云云。

語訳

与如来共宿　法師品（三九一ページ）には「薬王、当に知るべし。如来の滅後に、其れ能く書持し、読誦し、供養し、他人の為に説かん者は、如来則ち、衣を以って之を覆いたもう為し。……是の人は、如来と共に宿するなり。即ち如来の手をもって、

其の頭を摩でたもうを為ん」とある。

傅大士　呵責謗法滅罪抄（一一二八ページ）には「弥勒菩薩は傅大士となれり」とある。東陽大士ともいい、中国南北時代、南斉の人で、姓を傅といった。輪蔵の創始者として有名であり、経蔵内にかならず、大士の像を安置するという。秀句十勝抄に「梵僧呉にきたりて弥勒を東陽に謁す」とある。七十三で寂した。

通解

末法に法華経を弘通する者について、「是の人は、如来と共に宿するなり」とある。御義口伝には、次のように仰せである。「法華の行者」すなわち、南無妙法蓮華経を唱え折伏を行ずるものは、男女ともに如来である。それは、煩悩即菩提、生死即涅槃の生活を送るからである。いま南無妙法蓮華経を唱え奉る日蓮大聖人およびその門下は、「如来と共に宿する」ものである。弥勒菩薩の後身であるといわれる傅大士は「毎朝御本尊にお会いし、また毎晩御本尊とともに安らかに寝ていく。また大事な時、大事な問題について題目を唱え、自覚にたって行動することである」と述べている。

講義

この文は、男女同権の原理を、説かれている文である。東洋では、とかく女性の社会的地位が低く考えられているが、日蓮大聖人の仏法においては、じつに明瞭に、男女の平等を説かれているのである。しかも、七百年前において。

したがって、南無妙法蓮華経を護持した男女は、ともに、最高の人生観にたち、社会観をもって、幸福な生活ができるということである。これは、わが学会の婦人部、女子部の活発な活動が、実証している。これに対し、たんなる法律上の男女同権では、形だけのものであって、本質的な同権とは、なりえないのである。

「傅大士の釈に云く云云」とは、朝の勤行、夕の勤行、刹那の題目等は、われわれの人生行路を根本的にあやまちなく、もっとも有意義に生活できる因業であることを説いているのである。あたかも日々の勤行は、草木の根に、毎日水をかけ、肥料を施して根を張らせ、幹、茎を太らせ、花を咲かせ、果をみのらせていくようなものである。もし、信、行のない人生は、いくら栄誉、栄達があり、有名、人気などがあったとしても、はかない、夢のような生活に終わってしまうのである。これに対し、地味ではあるが、毎日、信行をつみ重ねていく人生は、もっとも尊く、正しく、そして着実に、大福運をつんでいくのである。ただ、忘れてはならぬことは、自行、化他にわたる信心がなければ、利己主義におちいり、慳貪の罪をまぬがれないということである。

第五　是法華経蔵深固幽遠無人能到の事

本文

第五是法華経蔵深固幽遠無人能到の事

御義口伝に云く是法華経蔵とは題目なり深固とは本門なり幽遠とは迹門なり無人能到とは謗法なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は無人能到の者に非ざるなり云云。

語訳

是法華経蔵深固幽遠無人能到　法師品（三九三ページ）には「是の法華経の蔵は深固幽遠にして、人の能く到る無し」とある。

深固　深くて固い。法華経本門では、縦に久遠の生命を説き明かしており、これは深くて、なかなか覚知することができない。ゆえに深固である。

幽遠　おく深く遠い。法華経迹門では、横に十界互具、百界千如、一念三千の理を説き明かした。これこそ宇宙根本の理であり、幽遠である。

通解

「是の法華経の蔵は深固幽遠にして、人の能く到る無し」とある。御義口伝には次のように仰せである。「是の法華経の蔵」とは南無妙法蓮華経のことである。深固（深くかたい）とは本門のことであり、幽遠（おく深く遠い）とは迹門のことである。「無人能到」とは、この深遠な仏法哲理を理解できず、信ずることのできない謗法の者のことである。いま題目を唱え、信心修行に励む日蓮大聖人ならびにその門下は、無人能到の者ではないのである。

講義

ここは、法華経の生命哲学の、深遠なることを示された文である。横には、空仮中の三諦、宇宙全体を説き、縦には、久遠、すなわち永遠の生命を説き明かしているがゆえに。

その生命哲学こそ、五重の相対、三重秘伝、四重の興廃等、文証、理証、現証によって、独善でなく、最高無二の大哲理であることは、決定である。小乗の哲理にしても、外道よりみれば、幾重にも深遠であることが伺える。いわんや、末法の独一本門の大仏法においてをやである。「無人能到」とは、三教の謗者をいう。現今の、浅薄なる学者、評論家の類いも、その中に当然はいる。仏法の奥底もきわめず、認識もせず、実践もせず、みだりに、イヌの遠吠えのごとくに批判する、増上慢の者こそ、みずから墓穴を掘っているわけである。乱世、乱国には、悪人、梟雄のみ、幅をきかすものである。

開目抄（二三二㌻）には「智者に我義やぶられずば用いじとなり、其の外の大難・風の前の塵なるべし（乃至）ちかいし願やぶるべからず」と。所詮、いかなる者が、いかに、皮相的、感情的に、日蓮正宗を、創価学会を、批判し、弾圧しようが、三大秘法の大仏法を、破り、壊すことは、絶対にできないのである。

仏法を解せぬ人々が、あえて勉強もせず仏法を論ずることは、八百屋が科学者を批判し、子供が関取りと相撲をとるような道理とかわらぬ。

国か、または、指導者たちが、宗教の正邪を、真剣に研究し、まどわぬようになるか、または、宗教は宗教の広場において、盛んに法論、論議をさせ、宗教の正邪の勝負をば、さらに、さらに推進させゆくべきであろう。

第六　聞法信受随順不逆の事

本文

第六聞法信受随順不逆の事

御義口伝に云く聞とは名字即なり法とは題目なり信受とは受持なり随順不逆とは本迹二門に随順するなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者の事なり。

語訳

聞法信受随順下逆　法師品（三九五㌻）には「是の諸の化人、法を聞いて信受し、随順して逆わじ」とある。

聞とは名字即なり　御義口伝（七〇九㌻）の「如是我聞の事」のなかに「所聞の聞は名字即なり法体とは南無妙法蓮華経なり

能持とは能の字之を思う可し」とあり、今文と同じ意味である。その項参照。

本迹二門に随順　現在でいえば、法華経迹門方便品と法華経本門寿量品を読誦することが本迹二門に随順することになる。月水御書（一二〇一ページ）には「法華経は何れの品も先に申しつる様に愚かならねども殊に二十八品の中に勝れて・めでたきは方便品と寿量品にて侍り、余品は皆枝葉にて候なり、されば常の御所作には方便品の長行と寿量品の長行とを習い読ませ給い候へ」等とある。

通解

「是の諸の化人、法を聞いて信受し、随順して逆わじ」についての御義口伝である。「聞」とは名字即の位である。「法」とは南無妙法蓮華経のことである。「信受」とは、御本尊を受持することである。「随順不逆」とは、本門寿量品と迹門方便品に随順することである。つまり、この両品を勤行に用いていることをいうのである。いま、この「聞法信受随順不逆」の者とは、南無妙法蓮華経を唱え奉る日蓮大聖人およびその門下を指すのである。

講義

受持即観心を明かしている。聞法の聞とは、六即位の名字即のことであり、たんに耳で聞くことではなく、身

で法を聞くということであり、すなわち三大秘法の御本尊を受持するならば、それが観心、信心というのである。ゆえに、信心を全うするとは、「此経難持」のご金言のごとく、この御本尊を一生涯、いかなる苦難にも屈せず、受持し通す人こそ、成仏の境涯を会得できるのである。

この大御本尊を根本として、題目を正行とし、方便、寿量を助行として、所破借文、所破所用の上から、本迹二門に、随順してさからわないというのである。ゆえに、本門寿量品、迹門方便品を読むのであるとの御文と拝する。所詮、大聖人の門下は、正しく経文どおりの実践をしているとの、意であると思う。

第七 衣座室の事

本文

第七衣座室の事

御義口伝に云く衣座室とは法報応の三身なり空仮中の三諦身口意の三業なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は此の三軌を一念に成就するなり、衣とは柔和忍辱の衣・当著忍辱鎧是なり座とは不惜身命の修行なれば空座に居するなり室とは慈悲に住して弘むる故なり母の子を思うが如くなり、豈一念に三軌を具足するに非ずや。

語訳

衣座室　衣座室の三軌については法師品（三九四ページ）に、次のように説かれている。「薬王、若し善男子、善女人有って、如

来の滅後に、四衆の為に是の法華経を説かんと欲せば、云何が応に説くべき。是の善男子、善女人は、如来の室に入り、如来の衣を著、如来の座に坐して、爾して乃し四衆の為に広く斯の経を説くべし。如来の室とは一切衆生の中の大慈悲心是れなり。如来の衣とは柔和忍辱の心是れなり。如来の座とは一切法空是れなり。是の中に安住して、然して後に、不懈怠の心を以って諸の菩薩、及び四衆の為に、広く是の法華経を説くべし」と。三軌の軌ということは「方軌」ということで、弘通の方法ということである。講義参照。

衣座室とは法報応の三身……　法華文句の八には「如来の室を修するは是れ大慈悲なり、若し同体に就かば即ち法身なり、若し衆生に被むるは即ち是れ解脱なり、能く衆生をして同体に会せしむるは即ち是れ般若なり、如来の衣を修ずるは、若し所覆に就かば即ち法身なり、若し能覆の厳身に就かば即ち寂滅忍なり。若し和光利物に就かば即ち解脱なり、若し能坐に就かば即ち般若なり、若し所坐に就かば即ち法身なり。身と座と冥に称うは即ち解脱なり」とあり、衣も座も室も、ともに法報応の三身に約しうることが示されている。たとえば柔和忍辱の衣でいえば、その衣におおわれた清浄なる生命は法身であり、またあらゆる大難を耐え忍んでいく心は報身（般若・寂滅ともいう）、それによってあらゆるものを利益するのは応身（解脱ともいう）である。また、同様にそれぞれ空仮中の三諦、身口意の三業に約して論ずることもできるのである。

通解

衣座室の三軌については、法師品（三九四ページ）に次のようにある。

「薬王、若し善男子、善女人有って、如来の滅後に、四衆の為に是の法華経を説かんと欲せば、云何が応に説く

べき。是の善男子、善女人は、如来の室に入り、如来の衣を著、如来の座に坐して、爾して乃し四衆の為に広く斯の経を説くべし。如来の室とは一切衆生の中の大慈悲心是れなり、如来の衣とは柔和忍辱の心是れなり。如来の座とは一切法空是れなり。是の中に安住して、然して後に、不懈怠の心を以って諸の菩薩、及び四衆の為に、広く是の法華経を説くべし」と。

御義口伝には、次のように仰せである。衣座室の三軌とは法報応の三身であり、空仮中の三諦であり、身口意の三業である。いま南無妙法蓮華経と唱え奉る日蓮大聖人およびその門下は、この衣座室の三軌をみずからのいのちの中に成就するのである。「衣」とは、大難を耐え忍ぶ柔和忍辱の衣である。有名な勧持品第十三の二十行の偈の中で「濁劫悪世の中には、多く諸の恐怖有らん、悪鬼其の身に入りて、我を罵詈毀辱せん、我等仏を敬信して、当に忍辱の鎧を著るべし、是の経を説かんが為の故に、此の諸の難事を忍ばん、我身命を愛せず、但無上道を惜しむ」（四四二ページ）とあるのがこれである。「座」とは不惜身命の修行であり、「空」とは、南無妙法蓮華経を唱えて、一念三千の当体としての働きをいうのである。「室」とは、大慈悲心をもって折伏するがゆえである。母が子のことを心配するような気持ちのことである。このように、みずからのいのちの中に、衣座室の三軌をそなえているではないか。

講義

末法の三軌をのべられている。三軌とは、すべて末法の御本仏、日蓮大聖人のお振舞いのことであり、はじめの「柔和忍辱の衣」は一切衆生を永遠にお救いくださるため、大難を忍ばれ、三大秘法の大御本尊を、ご建立たまわったことである。「空座に居する」とは、名聞名利に一切かまわず、すべて一念三千のご当体として、一切衆生に、仏智を授けんがための、お振舞いをいうのである。「室とは慈悲に住して弘むる故なり」抜苦与楽の義であり、本源的に衆生の苦を取り除かれ、根本的に常楽我浄の大福運を、与えたもうのである。それは南無妙法蓮華経の、ご当体としての所作であられる。いま、私達は、この御本仏の弟子として、大聖人のお振舞いの、万分の一でも力をつくし、広宣流布の実現を心に期して、ご報恩のまことを、実践活動の上に、あらわさねばならぬと信ずる。

第八　欲捨諸懈怠応当聴此経の事

本文

第八欲捨諸懈怠応当聴此経の事

御義口伝に云く諸の懈怠とは四十余年の方便の経教なり悉く皆懈怠の経なり此経とは題目なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは是れ即ち精進なり応当聴此経は是なり、応に日蓮に此の経を聞くべしと云えり云云。

語訳

欲捨諸懈怠応当聴此経　法師品第十（三九五ページ）に「諸の懈怠を捨てんと欲せば、応当に此の経を聴くべし」とある。

懈怠　おこたること。なまけること。低い教えは民衆を幸福にすることをおこたるから、懈怠の法である。

精進　法華文句に「無雑の故に精・無間の故に進」とある。現在でいえば、題目に余文を雑えず、もっぱら大御本尊に向かい、間断なく唱題することを精進という。また折伏に励むことも精進である。講義参照。

通解

「諸の懈怠を捨てんと欲せば、応当に此の経を聴くべし」と読む。御義口伝には、次のように仰せである。「諸の懈怠」とは四十余年の方便権教、爾前経のことで、これらはことごとく、懈怠の経である。「此経」とは題目のことである。いま、日蓮大聖人およびその門下が南無妙法蓮華経と唱え奉ることは、懈怠ではなくして、精進である。日寛上人は「依義判文抄」のなかで、「精進は即ち是れ唱題の行なり故に釈に云く『無雑の故に精・無間の故に進』と云云、宗祖云く『専ら題目を持ちて余文を雑えず』云云」（富要集第三巻一一三ページ）と申されている。すなわち、純粋に、また間断なく唱題に励むゆえに精進行にあたるのである。このような姿を応当聴此経（応当に此の経を聴くべし）というのである。この「応当」の「応」という意味は、日蓮大聖人に応じて、すなわち、日蓮大聖人に順って、南無妙法蓮華経を信ずべきであるという意味である。

講義

仏法哲理、思想の高低を述べられている。宗教や思想の、内容いかんによって、民衆の幸、不幸が決定されて

しまうからである。人々を堕落にみちびく思想もある。また、民衆を興隆させていく思想もあれば、社会を破壊していく思想もある。これらは、今日の青少年の非行問題や、原水協の分裂騒ぎなど、痛切に感ずるところである。じつに思想、哲学の内容こそ、個人を、社会を、狂わせもし、救いもする、大きな力があることを、われらは、銘記しなければならない。

釈尊も、大聖人も、ここでは四十余年の爾前の経々をさして、はっきりと、懈怠の経であると、断言なされておられるのである。すなわち、懈怠の経は、個人を堕落させ、不幸にし、国をば亡ぼす経である、との結論である。この大聖の警告を、まじめに聞く者は、誰であるか。

日本国の現在の仏教界、乃至、東南アジアの宗教など、国家、社会におよぼす影響をみるに、みな、この懈怠の経の中にはいることは、明らかではないか。日本に全国的組織をもつ全日仏（全日本仏教会）も、新宗連（新日本宗教団体連合会）も、いずれも懈怠の経々を、標榜しているから、すでに宗教本来の使命も遂行できず、ましてや、社会の改革などは、思いもよらぬことであろう。じつに、非生産的な、まったく懈怠の存在といわざるをえない。

これに対し、大聖人は、南無妙法蓮華経と唱題することは、「精進」であると仰せである。すなわち、「精」とは「無雑」、「進」とは「無間」（間断ない）と訳す。所詮、「精」とは、御本尊であり、「進」とは、間断ない実践である。したがって、この妙法を根本理念とするならば、おのおの自体顕照されて、社会の繁栄のため、大きく貢献することができるのである。妙法はその源泉であり、力となることは論をまたぬ。

第九　不聞法華経去仏智甚遠の事

本文

第九不聞法華経去仏智甚遠の事

御義口伝に云く不聞とは謗法なり成仏の智を遠ざかるべきなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は仏智開悟の者にして成仏の近き故なり。

語訳

不聞法華経去仏智甚遠　法師品（三九六ページ）に「法華経を聞かずんば、仏智を去ること甚だ遠し」とある。

通解

「法華経を聞かずんば、仏智を去ること甚だ遠し」と読む。御義口伝には、次のように仰せである。「不聞」とは、法華経すなわち南無妙法蓮華経の教えを聞かないがゆえに謗法である。それは、成仏の境涯から非常に遠ざかることになるのである。いま南無妙法蓮華経を唱える日蓮大聖人およびその門下は、仏界を湧現し、現実生活の上に成仏の証拠をあらわすのである。

講義

「仏智開悟の者にして成仏の近き故なり」とは南無妙法蓮華経によらなければ、絶対に、幸福は確立できぬとの御文である。

相対的な幸福、健康、財産、名誉などは、その人の福運、努力、智慧、才能等によって、たやすく得られるものである。しかるに、永遠の生命を会得し、永遠に栄えゆく、金剛不壊の絶対的幸福は、ただ、妙法の御本尊を受持し、信行に励む以外には絶対に得られない。いかなる有名人、成功者たりとも、御義口伝をそのまま拝すれば仏法に対して「不聞」であり、すなわち、謗法となる。したがって、その福運は次第に衰えゆき、最後は悲劇に

終わらざるを得ぬといえよう。この姿、現証は、私たちも、しばしば見せつけられているが、仏法のきびしさを、これによってあらためて知るのである。

妙法のみは、生活法の原理であり、好むと好まざるとにかかわらず、あらゆる人々が絶対必要とする法理なのである。聞く、聞かない、という相対的な法則では決してない。妙法を受持せぬことは、自動車にガソリンが無いようなものであり、また、テレビや電話器があっても、電流を必要としないという考えに似ている。折伏をされても、御本尊の話に耳をかさないような人は、せっかくの人生の歓喜を、ついに知ることなく、生涯を終えてしまうことは、まことに、残念という以外にない。

第十　若説此経時有人悪口罵加刀杖瓦石念仏故応忍の事

本文

第十若説此経時有人悪口罵加刀杖瓦石念仏故応忍の事

御義口伝に云く此経とは題目なり悪口とは口業なり加刀杖は身業なり此の身口の二業は意業より起るなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は仏勅を念ずるが故に応忍とは云うなり。

語訳

若説此経時有人悪口罵加刀杖瓦石念仏故応忍　法師品（三九七ページ）に「若し此の経を説かん時、人有って悪口し罵り、刀杖瓦石を加うとも、仏を念ずるが故に応に忍ぶべし」とある。

通解

「若し此の経を説かん時、人有って悪口し罵り、刀杖瓦石を加うとも、仏を念ずるが故に応に忍ぶべし」と読む。御義口伝には、次のように仰せである。「此の経」とは南無妙法蓮華経のことである。また、悪口などの難を身口意の三業の点から見れば、「悪口」は口の働きであるから口業である。「刀杖瓦石を加う」ということは身の働きであるから身業である。そしてこの身口二業の迫害は、彼らの意の働き、すなわち意業から起きてくるのである。いま南無妙法蓮華経を唱え奉る日蓮大聖人およびその門下は、広宣流布の仏勅を念ずるがゆえに、これらの難を忍ぶのである。

講義

第三類の強敵の文である。大聖人を迫害した平左衛門尉の一族の滅亡、これは撰時抄文段（富要集第四巻三五〇ページ）に、詳細に述べられている。再往、大聖人の大慈大悲のお姿を拝するならば、「平左衛門こそ提婆達多」と仰せあそばされ、順ずる者も、また謗ずる者も、ともにお救いくださるのである。

したがって、この御文を拝し、折伏して反対したからとて、すぐ感情的になってはならぬ。「応忍」の二字を、

よくよく心に入れて、折伏を行なうべきである。

第十一　及清信士女供養於法師の事

本文

第十一及清信士女供養於法師の事

御義口伝に云く士女とは男女なり法師とは日蓮等の類いなり清信とは法華経の信心の者なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者是なり云云、此れ諸天善神等・男女と顕れて法華経の行者を供養す可しと云う経文なり。

語訳

及清信士女供養於法師　法師品（三九七ページ）に、「我化の四衆、比丘比丘尼及び清信士女を遣わして、法師を供養せしめ」とある。諸天善神が法華経の行者を守護するという文である。船守弥三郎許御書（一四四五ページ）には「法華経第四に云く『及

清信士女供養於法師』と云云、法華経を行ぜん者をば諸天善神等或はをとこ（男）となり或は女となり形をかへさまざま（様々）に供養してたすく（助）べしと云う経文なり、弥三郎殿夫婦の士女（しじょ）と生れて日蓮法師を供養する事疑なし」とある。

通解

法師品には、諸天善神の働きについて、次のような文証がある。「我（仏のこと）化（け）の四衆、比丘比丘尼、及び清信士女を遣（つか）わして、法師（ほっし）を供養（くよう）せしめ」云云と。

御義口伝には、次のように仰せである。「士女」とは男女ということである。「法師」とは法華経の行者である日蓮大聖人およびその門下のことである。「清信」とは法華経―御本尊を信ずる者についていうのである。いま南無妙法蓮華経と唱え奉る日蓮大聖人の弟子檀那の信心は清信である。

この文証は、諸天善神が、信心強盛な男女の姿をとって、法華経の行者、日蓮大聖人およびその門下を供養するという経文なのである。

講義

法華経の行者は、かならず、さまざまな形で、護（まも）られているという、御文（ごもん）である。

一見して、不思議に思える経文であるが、生命論より深く考察するならば、感応の原理により、諸天善神の加護が、絶対にあるものと確信するのである。

日蓮大聖人が伊豆伊東へ流罪された時には、船守弥三郎夫妻が真剣に御供養申しあげ、大聖人から「ことに五月のころなれば米もとぼしかるらんに日蓮を内内にて・はぐくみ給いしことは日蓮が父母の伊豆の伊東かわな（川奈）と云うところに生れかわり給うか、法華経第四に云く『及清信士女供養於法師』と云云、法華経を行ぜん者を男ば諸天善神等或はをとことなり或は女となり形をかへさまざまに供養してたすくべしと云う経文なり、弥三郎殿夫婦の士女と生れて日蓮法師を供養する事疑なし」とのお言葉を賜わっている。また、佐渡御流罪の時の阿仏房、千日尼夫妻の命をかけての活躍は、この経文に符節を合わせたごとくではないか。

また、現在、われわれも信仰の生活体験を通して、だれびとも、諸天の加護を認めざるを得ないのである。仏法は決して、観念論ではない。現実論であり、証拠主義である。したがって、御本尊を受持する人は、かならず、親子、兄弟、友人などから、また職場や、社会等において、事実、さまざまな形をもって、護られているのであり、よく功徳がないという人も、周囲をみつめたり、入信時にさかのぼって現在を考えてみたときに、いつの間にか、大功徳をうけているのに気がつくのである。この段は、その原理を説かれていると思う。

第十二　若人欲加悪刀杖及瓦石則遣変化人為之作衛護の事

本文

第十二若人欲加悪刀杖及瓦石則遣変化人為之作衛護の事

御義口伝に云く変化人とは竜口守護の八幡大菩薩なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者を守護す可しと云う経文なり。

語訳

若人欲加悪刀杖及瓦石則遣変化人為之作衛護　法師品（三九七ページ）にある文。「若し人悪りに、刀杖及び瓦石を加えんと欲せば、則ち変化の人を遣わして、之が為に衛護と作さん」と読む。

竜口守護の八幡大菩薩　文永八年九月十二日の竜の口の法難のさい、大聖人が首の座でいまにも首を刎ねられようとしたとき、八幡大菩薩の守護の力によって光り物が現われたことを指す。大聖人は鎌倉から竜の口まで行く途中、若宮の八幡宮の前に立ち、八幡大菩薩を叱りとばされている。そのときのようすは種種御振舞御書（九一二―九一四ページ）に詳しい。

通解

「若し人悪りに、刀杖及び瓦石を加えんと欲せば、則ち変化の人を遣わして、之が為に衛護と作さん」ということである。これも諸天善神の働きを述べたものである。

御義口伝には、次のように仰せである。この変化人とは、たとえば竜の口の首の座の時、八幡大菩薩が守護の力を発揮して光り物が現われたことを指すのである。末法において南無妙法蓮華経を唱える日蓮大聖人およびその弟子檀那を、諸天善神がかならず守護するという経文なのである。

講義

これも、諸天善神の働きの文である。凡夫の想像を絶する、御本仏への迫害や、これに応ずるお振舞いについて、われら信者とのへだたりは、どうしようもない。しかして、この経文のごとく、大聖人に対する、諸天善神の働き

は、厳然とあらわれたのである。所詮、この経の法理は、われわれ信者の立ち場より考えるならば、自己が変われば、国土も、対境も、周囲の人々も、みな変わるという事実から、思索して、会得すべきであろう。

これこそ仏法の真髄、一念三千の大哲理であり、これを覚知せんがための信心である。自己の生命活動が、大宇宙の生命活動に感応していく関係であるがゆえに、一切を、自在に動かし得ることは、間違いないことといえるのである。

第十三　若親近法師速得菩薩道の事

本文

第十三若親近法師速得菩薩道の事

御義口伝に云く親近とは信受の異名なり法師とは日蓮等の類いなり菩薩とは仏果を得る下地なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者の事なり。

語訳

若親近法師速得菩薩道　法師品（三九八ページ）の文。「若し法師に親近せば、速かに菩薩の道を得」とある。

通解

「若し法師に親近せば、速かに菩薩の道を得」の文について、御義口伝には、次のように仰せである。「親近」とは信受の別名である。「法師」とは日蓮大聖人およびその門下のことである。菩薩とは仏界に入る下地である。いま、法師である日蓮大聖人のお教えを信受し、南無妙法蓮華経を唱え奉る日蓮大聖人の弟子檀那は、成仏への直道である菩薩の道を得たといえるのである。

講義

菩薩とは仏果を得る下地なり

菩薩の行をしなくては、仏果をうることができないのは、通途の仏法の定則である。

今日においては、われわれは地涌の菩薩の自覚に立って、広宣流布実現を一大目標として、実践活動を行なっているのである。この菩薩道を行じて、はじめて本覚の如来を、覚知することができる。小学校で勉強せねば、中学校に進級できないと同様に、また、中学校や高校の下地がなく、実力がなければ、大学には入れないと同様に、仏果を目ざして進むときは、現在の菩薩道に精進するのである。しかして、大聖人の仏法では、この菩薩道は、あくまで外用の姿であり、内証の辺は、すでに、大聖人の眷属なのである。

第十四　随順是師学の事

本文

第十四随順是師学の事

御義口伝に云く是師とは日蓮等の類いなり学とは南無妙法蓮華経なり随順とは信受なり云云。

語訳

随順是師学　法師品（三九八ページ）の最後に「是の師に随順して学せば、恒沙の仏を見奉ることを得ん」とある。

通解

法師品の最後に「是の師に随順して学せば、恒沙の仏を見奉ることを得ん」と述べられている。

御義口伝には、次のように仰せである。「是師」とは日蓮大聖人のことである。「学」とは南無妙法蓮華経を学ぶのである。「随順」するとは「信受」するということである。つまり、日蓮大聖人を師匠と仰ぎ、その御金言を信受し、人法一箇の御本尊に向かって南無妙法蓮華経と唱えるということである。

講義

この文は、人生における根本的な師弟論を説かれている。「是師」とは日蓮大聖人であり、人本尊となる。「学」とは妙法のことであり、法本尊のことである。「随順」とは信受の義であり、われらは、日蓮大聖人を、「師」と定め、一生涯、その教えを信受して、南無妙法蓮華経を実践するのである。すなわち三大秘法の御本尊を受持し、実践にはげむことである。ただし、悪師に随順したときは、必ず不幸と混乱を招き、善師に随順してこそ、幸福と繁栄が享受できるのである。

現在の日本においては、「師」に対する観念が、ほとんど意識されなくなった。これは、まことに不幸なことといわねばならない。戦後、とうとうとして浸透した民主主義思想を、その真の意義を理解せず、自主性も確立しないままに、受けいれたゆえであるか。ただ過去の束縛から、とつぜん、解放されたというだけであって、人生の根本的な問題であるべき師弟の道を、まったく忘れてしまったかのようである。だが、この現今の事実をもって、師弟の道が不必要であるとはいえない。否、人生における行動も、民衆の思想も、すべて師によって決定

されているのである。

一面からいえば、民主主義それ自体を確立するためにも、その大地ともいうべき、本源的な、偉大なる「師匠」が絶対に必要なのである。しかして、師といっても、われらの人生において、小学校の師、中学校の師、高校の師、大学の師、また教科書としての師、あるいは柔道の師、剣道の師、各スポーツの師、芸術の師、医学の師、科学の師、経済学の師、文学の師、哲学の師、各職場における師等々、まことに多種多様の師がある。だが、これらの師は、すべて、根本的な「師匠」とはいえないのである。なぜなら、彼らは真に人生を指導しきれるものではないゆえである。所詮、その根本的な師匠こそ、三世に通暁された、末法の御本仏たる日蓮大聖人であり、法においては南無妙法蓮華経と決定すべきことを主張してやまない。

もし、かりに、日蓮大聖人以外に、今日の思想をよく指導するものが存在するとすれば、それは、だれびとであろうか。われらの真摯な、科学的な研究によっても、その大哲理は、いまだ見当たらない。また、その証拠としての事実も聞かない。だが、日蓮大聖人の大哲学を指針として実践するならば、すべての人の幸福を確立できうることは、すでに幾千万の学会員の姿が、これをよく証明しているといえよう。これを社会にあてはめたとき、政治、教育、科学等のいっさいの繁栄が、実現されることは、いうまでもない。

いま、結論より述べれば、末法今時は、万人共通の大師匠である、三大秘法の御本尊を、師とする以外に、人生の根本的な「師」は存在しないのである。また、これを信受するものこそ、真実の「師弟の道」を、まっとうしたといえるのである。

第十五　師と学との事

本文

第十五師と学との事

御義口伝に云く日蓮等の類いの南無妙法蓮華経は学者の一念三千なり師も学も共に法界三千の師学なり。

通解

ここは、前の「第十四随順是師学の事」に関連した内容である。

御義口伝には、次のように仰せである。日蓮大聖人ならびにその門下の唱える南無妙法蓮華経というものは、真実の仏法を探究し、実践していくものの一念三千の当体である。したがって、師匠である日蓮大聖人も、また、その師匠日蓮大聖人の教え、南無妙法蓮華経を信受して、実践していく門下も、共に、宇宙森羅万象いっさいの

師匠であり、学者となるのである。所詮、一念三千を知った人は、師弟不二、境智冥合の原理によって、世界最高の学者である。あらゆる階層、あらゆる世界において、大指導者として君臨すべき資格があるとの御文である。

講義

「師も学も共に法界三千の師学なり」とは、師弟不二論、境智冥合論である。師と共に、また求道者の立ち場として、生命の本質を学び、実践していることを明かしている。

これは、他教団の教義などの、遠く及ばない透徹した理論であり、また既成、新興宗教の教祖観を、根底よりくつがえしている哲理である。

師匠たる日蓮大聖人の御生命も、随順する弟子であるわれら凡夫の生命も、ともに一念三千の当体であるから、師弟不二である。しかるに、誤った宗教の教祖等は、自分のみが仏教の真髄を知り、宗教の奥義をきわめたような言説を吐き、しかも、低級きわまる教義を、なかなか理解しがたいものであるといっている。そのくせ、あたかも悟りを開いた聖人のごとくに振舞う姿は、まったく、社会を、そして民衆を欺瞞する、大悪人と断ぜざるをえない。

われらは、あくまでも一念三千の哲理を学び、また、みずからの生命が一念三千の当体であることを確信し

て、師匠と同じく、弟子も共に、最高真実の生命観を把握せよというのが、日蓮大聖哲の仰せである。この哲理は、現今の民主主義思想の根底となるものであり、民衆ひとりひとりの主体性と、自我の確立を可能にする大哲理であることを見逃してはならない。巷間でいわれるファッショとか、全体主義、国粋主義のごとき、型にはまった集団行動の規制では断じてない。そんな窮屈なものでは決してない。この大哲理をまったく知らぬ人々の戯言にすぎない。

わが学会こそ、個人に正しき人生観を確立せしめ、そして幸福な社会建設のために、和合僧という一つの方程式により、訓練、教育して、その目的を達成せんとする団結であることを銘記されたい。

また、一般社会における学者には、帰納法的に研究する科学者もおり、経済学者があり、文学者もいる。また哲学者もいる。それらの学者は、いまだ、宇宙の本源たる一念三千の序分の学者にすぎないといえよう。これに対し、妙法こそ、宇宙の本源を説いた画竜点睛の原理であり、また、いっさいの階層の求めんとする終局の大哲理であって、あらゆる社会の繁栄の源泉なのである。

第十六　得見恒沙仏の事

本文

第十六得見恒沙仏の事

御義口伝に云く見恒沙仏とは見宝塔と云う事なり、恒沙仏とは多宝の事なり多宝の多とは法界なり宝とは一念三千の開悟なり法界を多宝仏と見るを見恒沙仏と云うなり、故に法師品の次に宝塔品は来るなり解行証の法師の乗物は宝塔なり云云、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは妙解妙行妙証の不思議の解・不思議の行・不思議の証得なり真実一念三千の開悟なり云云、此の恒沙と云うは悪を滅し善を生ずる河なり、恒沙仏とは一一文文皆金色の仏体なり見の字之を思う可し仏見と云う事なり、随順とは仏知見なり得見の見の字と見宝塔の見とは依正の二報なり得見恒沙の見は正報なり見宝塔の見は依報なり云云。

語訳

恒沙仏　恒沙とは恒河すなわちガンジス河の沙のことである。ガンジス河は、ヒマラヤ山脈を源として、東へ流れてベンガル湾に注いでいる大河。インド三大河の一つで、昔から、霊験に富んだ河として、人々から尊崇されていた。恒沙とは、ガンジス河の沙のように数が無量であることを示すものとして用いられることばである。無量無数の仏を恒沙仏というのである。

解行証　解とは解了であり、信解である。行とは実践修行であり、自行化他にわたる題目である。証とは悟りであり、最高の悟りは成仏である。

一一文文皆金色の仏体　経文の一字一字が、ことごとく、仏の当体であるということ。いまでいえば、大御本尊にしたためられた御文字は、即日蓮大聖人、御本仏の生命となる。

通解

ここも、前の第十四、十五につづいて、「恒沙の仏を見奉ることを得ん」というところの御義口伝である。御義口伝には、「見恒沙仏」（恒沙の仏を見る）というのは、「見宝塔」（宝塔を見奉る）ということであると仰せられている。

「恒沙仏」（恒沙の仏）とは、恒河（ガンジス河のこと）の沙のように多い仏であるから「多宝」のことになる。この「多宝」の多とは、多いということであり、宇宙全体の森羅万象ことごとくをさし、それから十界三千すべてが、南無妙法蓮華経の当体であると開悟することを「宝」というのである。したがって、宇宙の森羅万象ことごとく、「多宝仏」（御本尊）と信ずることを見恒沙仏というのである。

ゆえに、法師品第十の次に、見宝塔品第十一が説かれているのである。

解行証の法師、つまり三大秘法の仏法を理解し、その教えのとおりに実践し、その仏法の偉大な力を証得していく法師の乗り物、すなわち「妙法弘通の大導師」が根本とすべきは、宝塔すなわち御本尊である。いま、日蓮大聖人ならびにその門下が、南無妙法蓮華経と唱え奉る姿は、妙解、妙行、妙証、すなわち、不可思議の理解と、不可思議の修行と、不可思議の証得ができた姿であり、真実の一念三千を開悟した姿である。

この恒河というのは、悪すなわち謗法を滅し、善を生ずる河である。すなわち、御本尊を信ずれば、迷いを福に転じていくことができるのである。恒沙仏とは、経文一字一字が、みなりっぱな仏の当体なのである。「得見恒沙仏」の「見」の字について、このことをよく考えるべきである。この見は仏見ということで、御本尊を信ずる信ということである。

随順とは、仏知見である。得見の「見」の字と、見宝塔の「見」の字とは、依正の二報になる。つまり「得見恒沙仏」の見、すなわち、恒沙仏をみようとするのは智になり、正報となる。そして「見宝塔」の見、すなわち信心する対境が、宝塔すなわち御本尊になるから依報である。

講義

一念三千を開悟する文である。

「見恒沙仏とは見宝塔と云う事なり」の御文は、法師品第十の次に、見宝塔品第十一となる段階を、すでに明かしている。法師品の法師とは、文底より拝せば、日蓮大聖人の御事であり、見宝塔品の宝塔とは南無妙法蓮華経の御本尊のことである。ともに、人法一箇の御本尊を顕わされているのである。「多宝」の「多」ということは、法界すなわち宇宙それ自体である。「宝」とは、一念三千すなわち南無妙法蓮華経のことである。したがって、全宇宙法界の本源は、すべて多宝仏にあらざるものはなく、われらの生活に約せば、森羅万象ことごとく無量の宝であり、功徳であり、慈悲であると開悟することが「見恒沙仏」というのである。

「解行証の法師の乗物は宝塔なり」とは、「我が身は地水火風空なりと知しめして即座に悟を開き給いき」（五六八ページ）の御文のとおり、いっさいを開悟したもうた方、すなわち日蓮大聖人の示された乗り物は、御本尊であるとの言であられる。「妙解、妙行、妙証」ということは、われらが御本尊を信じ、題目を唱え折伏を行じていくならば、必ず、真の人生観、宇宙観を確立して、最高の幸福境涯をうるとのことである。

「妙解」とは、信解である。妙法の事の一念三千は、御本尊を信ずることによってのみ、解了することができる。すなわち、妙法の功徳をただちに身に感ずるのである。以信得入、以信代慧とは、このことである。もし疑いが

あるときは、いっさいが閉ざされるように、いかなる教えも講義も身につかないのである。また、その生活は空虚である。「妙行」とは、歴劫修行ではなく、直達正観の南無妙法蓮華経である。われらは、自行化他の題目を唱え、折伏をしていく時に、現世において、日々の宿命打開のうえに、いかなる不幸も、また生老病死の人生も、我此土安穏の人生に革命できるのである。「妙証」とは、われらが現実に生死即涅槃の境涯を得て、物心ともの真の幸福生活ができるとの文であり、これ人生の究竟の悟りである。

また恒沙について、悪を滅し、善を生ずる河といわれているが、これ御本尊の功力を説いたもので、われらの悪業を滅して、仏界の生命を湧現するようになることである。随順とは、信受といい、仏知見といい、所詮、信心のことであり、すなおな信心により、はじめて仏を知見できるのである。寿量品の「一心欲見仏、不自惜身命」（五〇七ページ）が三大秘法の題目にあたるの義と同じである。しかして、「得見の見の字と見宝塔の見とは依正の二報なり」とは、得見恒沙仏の見は正報であり、すなわち、われらが当体である。また「見宝塔」の見は依報、客体であり、すなわち御本尊のこととなるのである。

宝塔品廿箇の大事

第一宝塔の事

本文

第一宝塔の事　文句の八に云く前仏已に居し今仏並に座す当仏も亦然なりと。御義口伝に云く宝とは五陰なり塔とは和合なり五陰和合を以て宝塔と云うなり、此の五陰和合とは妙法の五字なりと見る是を見とは云うなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は見宝塔なり。

語訳

宝塔　法華経見宝塔品第十一に涌出する多宝塔のこと。宝塔品（三九九ページ）に「仏前に七宝の塔あり。高さ五百由旬、縦広二百五十由旬なり。地より涌出して、空中に住在す。種種の宝物をもって、之を荘校せり。五千の欄楯あって、龕室千万なり。無数の幢旛、以って厳飾と為し、宝の瓔珞を垂れ、宝鈴万億にして、其の上に懸けたり。四面に皆、多摩羅跋栴檀の香を出

第一宝塔の事

本文

第一宝塔の事　文句の八に云く前仏已に居し今仏並に座す当仏も亦然なりと。御義口伝に云く宝とは五陰なり塔とは和合なり五陰和合を以て宝塔と云うなり、此の五陰和合とは妙法の五字なりと見る是を見とは云うなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は見宝塔なり。

語訳

宝塔　法華経見宝塔品第十一に涌出する多宝塔のこと。宝塔品（三九九ページ）に「仏前に七宝の塔あり。高さ五百由旬、縦広二百五十由旬なり。地より涌出して、空中に住在す。種種の宝物をもって、之を荘校せり。五千の欄楯あって、龕室千万なり。無数の幢幡、以って厳飾と為し、宝の瓔珞を垂れ、宝鈴万億にして、其の上に懸けたり。四面に皆、多摩羅跋栴檀の香を出

して、世界に充編せり。其の諸の旛蓋は、金、銀、瑠璃、硨磲、碼碯、真珠、玫瑰の七宝を以って合成し、高く四天王宮に至る」とある。この宝塔出現の意義は、一つは宝浄世界から来た多宝如来が、迹門の真実を証明するためである。これを証前の宝塔という。一つは後の本門を説く起こりになるためである。これを起後の宝塔という。証前が傍、起後が正である。宝塔とは、末法においては、大御本尊である。また生命論からいえば、一切衆生は仏界を内包する尊厳なる生命の当体であるから宝塔である。信心に約せば、宝塔とは御本尊を信ずる者の当体をいう。阿仏房御書（一三〇四㌻）に「南無妙法蓮華経と・となうるものは我が身宝塔にして我が身又多宝如来なり」とある。

文句の八に云く……　法華文句巻八下の宝塔品を釈す中の「此法華は即ち是れ三世諸仏の四の支徴なり、先仏已に居し、今仏並座す、当仏も亦然らん」との文。

前仏・今仏・当仏　前仏は宝塔にすでに座していた多宝仏、今仏は宝塔品で多宝と並座した釈迦仏、当仏は未来にあらわれる仏をいう。

五陰　色、受、想、行、識のこと。色とは色形、すなわち肉体や草木等のこと。受は外界のものを受け入れること。想は受け入れたものを想って忘れないこと。行は想いから起こる行であり、識とはこれらを起こす根本の意識をいう。この五陰が仮に和合したのを衆生という。日寛上人の三重秘伝抄に「五陰仮に和合するを名づけて衆生と云うなり」とある。

通解

ここは、「見宝塔」という題名のご説明である。文句の八に、「前仏である多宝仏は已におり、今仏である釈

迦仏も、そこにならんで座った。当仏も、またそうである」と説かれている。

御義口伝には、次のように仰せである。見宝塔の「宝」とは、色受想行識の五陰である。見宝塔の「塔」とは、和合の義である。この五陰が和合した姿をもって宝塔というのである。そして、この五陰和合は、妙法蓮華経の五字であると信解する。これを見宝塔の「見」というのである。いま、日蓮大聖人ならびにその門下が、南無妙法蓮華経と唱え奉り、わが身即妙法五字の当体であると信ずるのは、見宝塔である。

講義

宝塔即本尊、本尊即わが当体の御文である。日蓮大聖人のご観心より拝するならば、宝塔とは、三大秘法の御本尊である。そして、生命論、および信心の上より論ずれば、宝塔は、われらが当体となるのである。すなわち、宝塔の宝とは、生命活動の色受想行識をいうのであり、塔とは、調和、和合のことを示されている。所詮、わが一身の当体を宝塔というのである。佐渡の阿仏房に対し、日蓮大聖人は「今阿仏上人の一身は地水火風空の五大なり、此の五大は題目の五字なり、然れば阿仏房さながら宝塔・宝塔さながら阿仏房・此れより外の才覚無益なり」（一三〇四ページ）と仰せられているのも、この文の意と、まったく同じである。

しかして「五陰和合とは妙法の五字なり」とは、われらが一身は、頭は妙、咽喉は法、胸は蓮、腹は華、足は経であるからである。すなわち御義口伝（七一六ページ）方便品・第三唯以一大事因縁の事には「我等が頭は妙なり

喉は法なり胸は蓮なり胎は華なり足は経なり此の五尺の身妙法蓮華経の五字なり」と仰せである。

さらに三世諸仏総勘文教相廃立（五六七ページ）には、妙楽の弘決の六を引いて、

「此の身の中に具さに天地に倣うことを知る頭の円かなるは天に象り足の方なるは地に象ると知り・身の内の空種なるは即ち是れ虚空なり腹の温かなるは春夏に法とり背の剛きは秋冬に法とり・四体は四時に法とり大節の十二は十二月に法とり小節の三百六十は三百六十日に法とり、鼻の息の出入は山沢渓谷の中の風に法とり口の息の出入は虚空の中の風に法とり眼は日月に法とり開閉は昼夜に法とり髪は星辰に法とり眉は北斗に法とり脈は江河に法とり骨は玉石に法とり皮肉は地土に法とり毛は叢林に法とり、五臓は天に在っては五星に法とり地に在っては五岳に法とり陰・陽に在っては五行に法とり世に在っては五常に法とり内に在っては五神に法とり行を修するには五徳に法とり」等の文を引かれて、次に「五行とは地水火風空なり五大種とも五蘊とも五戒とも五常とも五方とも五智とも五時とも云う、只一物・経経の異説なり内典・外典・名目の異名なり、今経に之を開して一切衆生の心中の五仏性・五智の如来の種子と説けり是則ち妙法蓮華経の五字なり、此の五字を以て人身の体を造るなり本有常住なり本覚の如来なり」と仰せである。すなわち宇宙即我、我即妙法蓮華経の当体であるという大哲理を示されたのである。

古代の哲人ソクラテスは、「汝自身を知れ」との名句を残した。しかし、「汝自身」に表現される内容は、あまりにも漠然としたものである。むしろ、ソクラテスも、把握すべき生命については、その片鱗だにも知ることができなかったといえる。ゆえに、幸福の内容も、ついに今日になっても結論されず、人類の平和も招来されえな

いのである。

しかし、日蓮大聖人の事の一念三千の法門は、かくのごとく、徹底した一大生命哲学であり、その究極における、具体的ご図顕こそ、三大秘法の大御本尊なのである。所詮、信心によって浄化される、わが生命も、「汝自身」の生命も、一念三千の当体であり、妙法蓮華経の当体であって、尊極無上の仏の生命であることを知るべきである。

第二 有七宝の事

本文

第二有七宝の事

御義口伝に云く七宝とは聞・信・戒・定・進・捨・慙なり、又云く頭上の七穴なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは有七宝の行者なり云云。

語訳

有七宝　宝塔品冒頭の「爾の時に仏前に七宝の塔あり」の文。七宝とは金、銀、瑠璃、硨磲、碼碯、真珠、玫瑰である。なお大智度論では「金、銀、毘琉璃、頗梨、車磲、馬瑙、赤真珠」であり、阿弥陀経では「金、銀、瑠璃、玻瓈、硨磲、赤珠、碼碯」となっている。

聞・信・戒・定・進・捨・慙　聞法、信受、持戒、禅定、精進、喜捨、慙愧のこと。出世間における七宝といい、仏道修行においての肝要といわれる。これに対し金、銀等の七宝を世間の七宝という。本文では信心を根本として述べられている。

頭上の七穴　二つの目、二つの耳、二つの鼻の穴、一つの口。

日蓮等の類い……有七宝の行者なり　南無妙法蓮華経と唱える大聖人および門下は、聞、信等の七宝がそなわっているのであり、またその身が七宝なのである。

通解

見宝塔品第十一の最初に「爾の時に仏前に七宝の塔あり」と述べられている。これについて御義口伝には、次のように仰せである。七つの宝とは、聞、信、戒、定、進、捨、慙のことで、七聖財ともいわれる。また七宝とは、頭上の七穴、すなわち二つの目、二つの耳、二つの鼻の穴、一つの口をいうのである。いま、南無妙法蓮華経と唱え奉る日蓮大聖人およびその門下は、七宝を有する真の法華経の行者である。

講義

法華経宝塔品に説かれた七宝の塔とは、諸の旛蓋が、金、銀、瑠璃、硨磲、碼碯、真珠、玫瑰の七宝で飾ら

れた、美しい宝塔をあらわしている。しかるに、日蓮大聖人は、この七宝を、妙法を根本とした、聞、信、戒、定、進、捨、慙と決定されて、即身成仏、人間完成の実践原理を厳然と示されたのである。

「聞」とは、正しい仏法を聞くことであり、聞いてよく御本尊を信受していくのは「信」であり、御本尊を受持して身口意の三業をもって正法を守りきり、非を防ぎ悪を止める、金剛不壊の戒を「戒」という。また「定」とは、禅定であり妙禅である。信心唱題により、安心立命の境涯を会得できる生命のことであり、「進」とは題目をあげ折伏をやり抜く精進行のことである。「捨」とは、不自惜身命であり、身命を捨てて仏法を求めきることである。また、信心を貫いて、なお足れりとせず、さらに、向上していこうとする心、常に反省して前進していく心は「慙」である。

また、七宝とは、頭上の七穴であると仰せである。二つの目、二つの耳、二つの鼻の穴、一つの口とあらわれている頭上の七穴が、環境や社会に対するいっさいのアンテナとなり、生活にいろいろの現証を具現することになるから、七つの宝となるのである。

第三　四面皆出の事

本文

第三四面皆出の事　文句の八に云く四面出香とは四諦の道風・四徳の香を吹くなりと。御義口伝に云く四面とは生老病死なり四相を以て我等が一身の塔を荘厳するなり、我等が生老病死に南無妙法蓮華経と唱え奉るは併ら四徳の香を吹くなり、南無とは楽波羅蜜・妙法とは我波羅蜜・蓮華とは浄波羅蜜・経とは常波羅蜜なり。

語訳

四面皆出　宝塔品で宝塔の相貌を述べる中の「四面に皆、多摩羅跋栴檀の香を出して、世界に充徧せり」の文。多摩羅跋は栴檀の形容詞で、四面に清らかな栴檀の香を出したということ。栴檀は与楽と訳し、インドの摩黎山に産するといわれる香

木。病苦を除くといわれる。

文句の八に云く……　法華文句巻八下の七宝塔を釈する文。天台は宝塔品の四面皆出の文を釈して、四諦の道風が、四徳の香を吹くことであるといっている。四諦とは、苦諦、集諦、滅諦、道諦であり、苦諦は世間の果報、集諦は世間の苦果の因縁、滅諦は出世間の悟り、道諦は悟りを得る道である。四徳とは常、楽、我、浄の四徳である。くわしくは四徳波羅蜜という。波羅蜜は梵語で、到彼岸と訳す。四徳については御義口伝上涌出品（七五一ページ）にくわしい。またこの文は、生死即涅槃、煩悩即菩提をも顕わしている。

生老病死　四相とも四苦ともいう。生時に苦があるのを生苦とし、身体が衰弱するのを老苦という。病気の苦が病苦で、死時の苦を死苦という。またこの四苦が生命の果報の相なるがゆえに、果報の四相ともいい、略して四相という。なお、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五盛陰苦と合わせて八苦という。

楽波羅蜜　生死、煩悩の苦を明らかに見つめ、それを即、涅槃、菩提の楽にしていくこと。

我波羅蜜　仏の我が、宇宙に遍満していること。

浄波羅蜜　染法を離れ、浄法にして鏡のごとく清浄なことをいう。

常波羅蜜　三世にわたって、永遠に連続して不滅であること。

通解

宝塔品には、宝塔の説明として「四面に皆、多摩羅跋栴檀の香を出して、世界に充偏せり」と述べられている。法華文句の八には、四面に香を出だすとは、四諦――苦諦（世間の果報）、集諦（世間の苦果の因縁）、滅諦（出

世間の悟り）、道諦（悟りを得るの道）――すなわち、苦集滅道の四諦の道風によって、常楽我浄の四徳の香があらわれてくると釈している。したがって、四諦の道風、すなわち煩悩・生死も、御本尊の力によって、四徳の香、すなわち菩提・涅槃とあらわれてくるのである。

御義口伝には、次のように仰せである。すなわち、四面とは、生老病死をさしていうのである。その生老病死の四相とは、われわれの生命の実体である。しかしながら、われわれが生老病死、人生の苦しみに際して、つねに、南無妙法蓮華経と唱えていくならば、妙法に荘厳された生命となり、常楽我浄の四徳の香を吹くことになるのである。南無妙法蓮華経を常楽我浄の四徳の波羅蜜にあてはめれば、南無とは帰命であり、御本尊に命をささげることであって、最高の楽波羅蜜である。妙法とは、大宇宙それ自体である。したがって我波羅蜜である。蓮華というのは、「如蓮華在水」といわれるように、「清浄」ということを表わすのであるから、浄波羅蜜である。また経とは、「三世常恒なるを経という」のであるから、常波羅蜜となるのである。

講義

御本尊の功徳を明かす文である。生老病死の四相、すなわち、出生、老衰、病痛、死去の四苦は、人種や民族の相違に関係なく、また、老若男女の区別なく、貧富階級の差別なく、あらゆる人が当面する、人生の根本問題である。

仏教は、実に、この問題をいかに解決するかを中心として展開されている。小乗教においては、四諦の法輪、権大乗教においては、十二因縁等を説く。しかし、いずれも、生老病死の四相や生命の本質を根底的に説き明かしたものではない。法華経にきて、実には、日蓮大聖人の仏法において、はじめて根本的解決をみるのである。いわんや、この大仏法以外の他教団においては、絶対に解決され得ないことは、当然の理である。

生老病死は、われわれの煩悩であり、しかして、生死、生死を連続するこの二法は、生命の実体でもある。だが、その理論がいくらわかったとしても、現実に、三大秘法の御本尊に向かって唱題しないかぎりは、煩悩の苦を解決することは、絶対にできない。御本尊とは、そのように、大生命哲学の究極の理にたって、日蓮大聖人がご図顕遊ばされたのであって、三大秘法、すなわち本門の本尊、本門の題目、本門の戒壇の中でも、極説中の極説として建立されたのである。「一閻浮提第一の本尊此の国に立つ可し」（二五四ページ）と。日寛上人は、この御本尊の功徳について、「祈りとして叶わざるは無く、罪として滅せざる無く、福として来らざる無く、理として顕れざる無し」（観心本尊抄文段の首文）と仰せになっておられる。ゆえに、御本尊を受持し、題目を純真に唱えるものは、みな罪障消滅、宿命転換をなしとげて、その生命は力に満ちて活動的となり、同時に荘厳になっていくのである。

第四　出大音声の事

本文

第四出大音声の事

御義口伝に云く我等衆生の朝夕吐く所の言語なり、大音声とは権教は小音声・法華経は大音声なり廿八品は小音声・題目は大音声なり、惣じて大音声とは大は法界なり法界の衆生の言語を妙法の音声と沙汰するを大音声とは云うなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは大音声なり、又云く大とは空諦・音声とは仮諦なり・出とは中道なり云云。

語訳

出大音声　宝塔品（四〇〇ページ）に「爾の時に宝塔の中より、大音声を出して歎じて言わく、善い哉、善い哉、釈迦牟尼世尊、

能く平等大慧、教菩薩法、仏所護念の妙法華経を以って、大衆の為に説きたもう。是の如し、是の如し。釈迦牟尼世尊、所説の如きは、皆是れ真実なり」の文。多宝如来が多宝塔より、法華経が真実である旨を大音声をもって証明したこと。

大は法界なり　出大音声の大が法界、すなわち宇宙にわたることをいう。法界とは諸法の界々をいい、十に分別して十法界となる。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天、声聞、縁覚、菩薩、仏である。またこの法界は一念三千の実相であるところから法界三千ともいう。

大とは空諦……出とは中道なり　出大音声を空仮中の三諦で論じた文。三諦とは仏の悟った真実で、空諦とは法界三千のいっさいの性分のこと。仮諦とは法界のいっさいが、仮に和合している皮相の面をいう。そして中諦とは中道ともいい、空仮の二諦を備え、動かすことのできない本質をいう。これを相性体、法報応に分けて配立すれば、空諦が性で報身になり、仮諦が相で応身、中諦が体で法身である。「大とは空諦」とは大は法界であり、また音声の性分であるから空諦にあたるということ。「音声とは仮諦」とは、音声は衆生の言語であり、衆生の生命の外面に顕現した相であるゆえに仮諦となる。「出とは中道なり」とは大音声を出す根源であるゆえに中道である。

通解

多宝如来が、宝塔の中から大音声を出して、釈尊の説法の真実なるを証明するところである。すなわち宝塔品には「その時に宝塔の中より、大音声を出して歎じて言わく、善い哉、善い哉、釈迦牟尼世尊、能く平等大慧、教菩薩法、仏所護念の妙法華経を以って、大衆の為に説きたもう。是の如し、是の如し。釈迦牟尼世尊、所説の

如きは、皆是れ真実なり」とある。

御義口伝には、次のように仰せである。大音声とは、われわれ衆生が、朝に夕に話している言語である。権実相対していうならば、権教は小音声であり、法華経は大音声である。また種脱相対していうならば、法華経二十八品は小音声であり、南無妙法蓮華経の題目は大音声である。総じていうならば、大音声の大とは法界、つまり宇宙万有の大きさをいう。法界の一切衆生の言語は、すべて妙法の音声であると分別していく、その音声を大音声というのである。

いま、日蓮大聖人およびその門下が、南無妙法蓮華経と唱え奉る題目は、大音声である。また、出大音声を空仮中の三諦で論ずれば、大とは法界であるから空諦であり、音声とはわれら衆生の言語のことで、仮諦である。この大音声の出る本源、意志は、あらゆる十界の言語音声をなさしむるから、出とは中道である。

講義

法力、仏力の浅深、高下を明かす文である。一往は、権教は小音声、法華経は大音声となる。再往は、法華経二十八品は小音声、南無妙法蓮華経の題目は大音声となる。

昔は、送信機の出す波長は性能が悪く、近距離しかとどかなかったが、今日の機械は、精巧な上に、シンコム衛星等によって、全世界にまでとどくことが可能となった。これ大音声といえるのである。また「大音声」の大

は、法界、宇宙を意味する。そして、われら衆生の音声が、妙法の法則と、リズムに合致していくことを大音声ともいう。これ祈りの原理である。追善供養の原理でもある。これは、現在、空間に無数に流れる電波を例にして、明瞭に推察することができる。また、大とは空諦、音声とは仮諦、出とは中道、すなわち、わが一身の当体が、自由自在に九界に号令できうることともいえる。且つ、大宇宙にわれらの平和と安穏を号令できうる方程式ともいえる。一日も早く、広宣流布を実現して「吹く風枝をならさず雨壌を砕かず、代は羲農の世となりて今生には不祥の災難を払ひ長生の術を得、人法共に不老不死の理顕れん時を各各御覧ぜよ現世安穏の証文疑い有る可からざる者なり」（如説修行抄五〇二ページ）の新時代を、建設したいものである。

「我等衆生の朝夕吐くところの言語なり」とは、衆生の言語は即仏の所作であることを説かれた文である。衆生の生命活動は、九界の活動であり、その言語も、また九界の言語である。しかるに、何ゆえ、出大音声をわれらの言語といわれるのであろうか。思うに、題目を唱える者は、九界即仏界であり、その日常の言語も、また、民衆救済の言語であると信ずる。折伏における言語ほど尊いものはない。指導にあたっての言々句々ほど、人々の胸をうつものはない。また大衆をリードする叫びほど影響の大なるものはなく、大衆の真実の声ほど力強いものはないのである。

以上のように、題目を根本とした、日常生活の音声は、すべて人を救いきっていく言語なのである。われわれは、日蓮大聖人滅後七百年に生まれ、大聖人の大音声はいかばかりであったかと想像するのみである。だが、日蓮大聖人の音声こそ、われわれの唱える題目に通ずるものと確信する。また、日蓮大聖人の言々句々は、われら

の手にする御書全集にあらわれ、これ、偉大な大音声であると確信するものである。大音声とは、日本一国のみならず、全世界にとどろく声でなければならない。したがって、この大音声たる題目は、必ず世界に広布し、やがて全人類の音声となることは、絶対にまちがいない事実であろう。

第五　見大宝塔住在空中の事

本文

第五見大宝塔住在空中の事

御義口伝に云く見大宝塔とは我等が一身なり住在空中とは我等衆生終に滅に帰する事なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉りて信心に住する処が住在空中なり虚空会に住するなり。

語訳

見大宝塔住在空中　宝塔品（四〇〇ページ）に「爾の時に四衆、大宝塔の空中に住在せるを見……」の文である。湧出した大宝塔が空中にかかったことをいう。空中とは宇宙ということである。

滅に帰する　「滅に帰する」とは死を意味する。死後の生命が大宇宙にとけ込むことを「住在空中」と述べられているのであ

る。

虚空会　法華経宝塔品第十一より属累品第二十二までの説法の会座。その間、仏と衆生は空中に住したので虚空会という。法華経の説法は二所三会といい、最初から法師品第十までと薬王品第二十三以下は霊鷲山会である。すなわち、二所で三度の会座が持たれたのである。その中で虚空会がもっとも重要である。虚空会の中でも寿量品が最要の品であり、ここで説かれた法華経の奥底が神力品第二十一で地涌の菩薩に付属されたのである。御本尊は虚空会の儀式を借りて、日蓮大聖人が仏の生命を顕現されたものである。

通解

宝塔品に「爾の時に四衆、大宝塔の空中に住在せるを見、又塔の中より出したもう所の音声を聞いて……」とある。この文について、御義口伝には、次のように仰せである。「見大宝塔」とは、われらが一身である。「空中に住在せる」とは、われわれ衆生が終に滅し、大宇宙に帰することをいうのである。

いま日蓮大聖人ならびにわれわれ門下が、南無妙法蓮華経と唱え奉りて、信心に励んでいるところが、住在空中であり、虚空会に住することになるのである。

講義

これ色心不二、生死不二の文である。見大宝塔は、色法である。住在空中は、心法である。見大宝塔は、健全なる身体、住在空中は、価値創造しきっていく智慧、精神ともいえるのである。また、住在空中とは、永遠の生命を説かれている。大宇宙への還元の意である。我の存在の意でもある。一念、精神、意識、境涯等は、われらの胸中を指す以外にありえない。それを住在空中、虚空会に住すと説いているのである。

唯物論による人生の偏頗性、唯心論に流されてゆく人生のあやまちを、この色心不二の御文によって、絶対に粉砕することができるのである。色心不二の哲学こそ、人類待望の大哲学である。われわれは仏法哲学こそ、あらゆる文明の土壌であることを、歴史の上から、また思想の本質の上から覚知しえたのである。

ちなみに、現在の政治理念を究明するとき、西欧陣営はキリスト教を根底とする政治思想であり、東欧陣営は、「神なき宗教」ともいわれるマルクス・レーニン主義を根底とする政治思想である。しかして、いかに高邁らしくつくろっても、キリスト教の根本思想は唯心哲学にすぎず、マルクス・レーニン主義の根本思想は唯物哲学にすぎない。人類の平和と幸福は、そのいずれからも、絶対に得られなかったのである。

また人類思想の歴史は、プラトン、ヘーゲル等の唯心思想、古代ギリシャに始まる唯物論、あるいは一元論、二元論の論争等、これすべて、唯心論か唯物論かの相剋をくり返して、決定的な思想の勝利を、いずれもみなかったのである。

「無量義は一法より生ず」と。この色心不二の大哲学こそ、政治、経済、教育等のあらゆる文化の本源であり、永久不変の哲理である。あたかも大河の流れの悠久なるごとく、何百年、何千年の昔から東洋民族の心の奥底に流れてきた、東洋仏法の真髄、色心不二の大哲学こそ、混迷せる世界の思想界、世界政治を救う唯一の哲学なることを知るべきである。

第六　国名宝浄彼中有仏号曰多宝の事

本文

第六国名宝浄彼中有仏号曰多宝の事

御義口伝に云く宝浄世界とは我等が母の胎内なり、有仏とは諸法実相の仏なり爰を以て多宝仏と云うなり、胎内とは煩悩を云うなり煩悩の淤泥の中に真如の仏あり我等衆生の事なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るを当体蓮華の仏と云うなり云云。

語訳

宝浄世界　多宝如来の住む土。宝塔品（四〇一ページ）に「過去に、東方の無量千万億阿僧祇の世界に、国を宝浄と名づく。彼の中に仏有す。号を多宝と曰う」とある。生命論からいうならば、母の胎内である。本文の「一廿八品悉南無妙法蓮華経の事」

（七九七ページ）においても「宝浄世界の仏とは事相の義をば且らく之を置く、証道観心の時は母の胎内是なり……妙法の宝浄世界なれば十界の衆生の胎内は皆是れ宝浄世界なり」とある。

諸法実相　諸法はそのまま実相であるということ。すなわち法界三千のいっさいの本然の姿は、妙法蓮華経の当体であるということ。諸法実相の仏とは、十界互具・一念三千の仏のことであり、三十二相をそなえた色相荘厳の仏ではなく、凡夫そのままのありのままの仏をいう。

煩悩の淤泥の中に真如の仏あり　淤泥とはどろのこと。真如の仏とは、真実でありのままの仏の意。煩悩の中にこそ仏があるのだということ。煩悩即菩提、生死即涅槃の義。

当体蓮華　妙法蓮華経それ自体をいう。譬喩蓮華に対していう。譬喩蓮華とは、華草の蓮華が、華と実が同時になることから、因果倶時の妙法蓮華に似ているので、この蓮華を借りて当体蓮華を説明したものである。したがって当体蓮華の説明は譬喩蓮華であり、説明された実体たる妙法蓮華そのものは当体蓮華である。たとえば、宝塔品の儀式は譬喩蓮華、御本尊は当体蓮華である。総じては宇宙の森羅万象、いっさいの現象が当体蓮華であり、妙法蓮華である。別していえば、日蓮大聖人が妙法蓮華の当体である。当体義抄（五一〇ページ）には「問う妙法蓮華経とは其の体何物ぞや、答う十界の依正即ち妙法蓮華の当体なり」とあり、同（五一二ページ）には「所詮妙法蓮華の当体とは法華経を信ずる日蓮が弟子檀那等の父母所生の肉身是なり」とある。

通解

宝塔品で、大楽説菩薩が、仏に、宝塔のことについて質問し、仏が、この宝塔の中には多宝如来という仏がいるのだと説明したところである。「爾の時に仏、大楽説菩薩に告げたまわく、此の宝塔の中に、如来の全身有す。……国を宝浄と名づく。彼の中に仏有す。号を多宝と曰う……」（四〇一ページ）とある。

御義口伝には、次のように仰せである。多宝如来の住む宝浄世界とは、母親の胎内のことである。なぜなら母の胎内とは、生命の出生するところであり、生命以上にすぐれた宝はないゆえに、宝浄世界というのである。「有仏」つまり「仏います」とは、諸法実相の仏、あのままの姿で、現実にいる仏である。特別の世界にいる仏ではない。その仏を多宝仏と名づけたのである。また、胎内とは、煩悩である。その煩悩の渋泥の中に、ありのままの仏がある。それは、われわれ衆生のことである。さらには、いま日蓮大聖人ならびにその門下が、南無妙法蓮華経と唱え奉っているのを、当体蓮華の仏というのである。

講義

「宝浄世界」とは、特別の世界を指すのでは決してない。また観念の世界をさすのでも断じてない。具体的には、母の胎内をいうと仰せである。すなわち、これ生命出生のもっとも大事なる意義をば、宝浄世界と説いてお

られるのである。

「有仏」とは、一仏、二仏、三仏、三十二相の仏ではない。諸法実相の仏をいうのである。すなわち凡夫僧、示同凡夫の仏を指すのである。所詮、日蓮大聖人のことであられる。これこそ、真実本有の大生命哲学といえるのである。御義口伝（七六六ページ）には「末法の仏とは凡夫なり凡夫僧なり、法とは題目なり僧とは我等行者なり、仏とも云われ又凡夫僧とも云わるるなり」と。同じく御義口伝（七五二ページ）に「今日蓮等の類いの意は惣じては如来とは一切衆生なり別しては日蓮の弟子檀那なり、されば無作の三身とは末法の法華経の行者なり無作の三身の宝号を南無妙法蓮華経と云うなり」と。諸法実相抄（一三五八ページ）には「されば釈迦・多宝の二仏と云うも用の仏なり、妙法蓮華経こそ本仏にては御座候へ……凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏は用の三身にして迹仏なり」とある。

すなわち末法の御本仏とは、別しては凡夫僧の日蓮大聖人であられる。しかして、総じては日蓮大聖人の仏法を信じまいらせる、われら末法の凡夫こそ、真実の仏なのである。ゆえに、日蓮大聖人は、もったいなくも、「煩悩の泥の中に真如の仏あり我等衆生の事なり」と仰せられたのである。これ煩悩即菩提、生死即涅槃の極致というべきである。

第七　於十方国土有説法華経処我之塔廟為聴是経故涌現其前為作証明讃言善哉の事

本文

第七於十方国土有説法華経処我之塔廟為聴是経故涌現其前為作証明讃言善哉の事

御義口伝に云く十方とは十界なり法華経とは我等衆生流転の十二因縁なり仍て言語の音声を指すなり善哉とは善悪不二邪正一如なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る処を多宝涌現と云うなり。

語訳

於十方国土有説法華経処我之塔廟為聴是経故涌現其前　多宝如来の誓いのことばである。宝塔品（四〇一ページ）に「若し我、成仏して滅度の後、十方の国土に於いて、法華経を説く処有らば、我が塔廟、是の経を聴かんが為の故に、其の前に涌現して、

為に証明と作って、讃めて善い哉と言わん」とある。

十方とは十界なり　十方とは東西南北の四方に、四維すなわち、東北、西北、東南、西南と、さらに上下の二方を加えたもの。あらゆるところということ。十方とは十界なりとは、宇宙の森羅万象は、ことごとく十界の範疇におさまるということである。

流転の十二因縁　生命流転の因果関係を十二に分けて説いたもの。権大乗経で説く苦しみの因縁である。十二因縁とは、無明（過去世に持っている煩悩）、行（過去世の善悪の業）、識（母の胎内での五陰）、名色（胎内の発育途上での四根のない状態）、六処（胎内で六根を具足した状態）、触（幼児が弁別なく物に触れる状態）、受（苦楽を弁別して受ける）、愛（事物異性への愛欲）、取（事物への貪欲）、有（現世の因により来世の果を定める）、生（来世に受ける生）、老死（来世の老死）である。最初の無明が根本となって、すべてが六道輪廻の苦しみであるゆえに、流転の十二因縁という。生死の苦しみを流転する意。これに対し還滅の十二因縁とは根本の無明を打ち破って煩悩を断じていく因縁である。一念三千理事（四〇七ページ）に「十二因縁流転の次第如何、答う無明は行に縁たり行は識に縁たり識は名色に縁たり名色は六入に縁たり六入は触に縁たり触は受に縁たり受は愛に縁たり愛は取に縁たり取は有に縁たり有は生に縁たり生は老死憂悲苦悩に縁たり是れ其の生死海に流転する方なり……還滅の十二因縁の様如何答う無明滅すれば則ち行滅す行滅すれば則ち識滅す……生滅すれば則ち老死憂悲苦悩滅す、是れ其の還滅の様なり仏は還って煩悩を失って行く方なり」とある。しかし、ここでは、権教で説く生死流転の十二因縁ではなく、生命の流転の本質、因果関係という意味で「流転の十二因縁」といわれている。

善哉とは善悪不二邪正一如なり　善悪不二とは、善も悪も別々のものではなく、ともに、もともと生命の本質にそなわっているものである。善を仏界、悪を九界にとれば九界即仏界の義になる。邪正一如も同様。邪が九界、正が仏界で九界即仏界となる。また悪、邪を煩悩、生死にとり、善、正を菩提、涅槃ととれば、煩悩即菩提、生死即涅槃の義である。法華経の法

門、すなわち文意は多宝如来が善哉と賛嘆する法門は、法華経の煩悩即菩提、また九界即仏界の哲理であるということ。この法華経とは南無妙法蓮華経である。

通解

これは、多宝如来が、菩薩の修行をしていた時に立てた、誓いの言葉である。くわしくは、宝塔品に（四〇一ページ）「若し我、成仏して滅度の後、十方の国土に於いて、法華経を説く処有らば、我が塔廟、是の経を聴かんが為の故に、其の前に涌現して、為に証明と作って、讃めて善い哉と言わん」とある。

御義口伝には、次のように仰せである。十方とは、十界である。法華経には、われわれ衆生というものが、永遠に生死の苦海を流転していくものであるという生命の実体を説かれているのである。

すなわち、法華経とは、われら衆生の流転しゆく十二因縁を説く。十二因縁とは、権大乗経で、三界における生命流転の法則を十二に分けたもので、無明、行、識、名色、六処（六入）、触、受、愛、取、有、生、老死をいう。しかし、ここでは爾前権教の十二因縁ではなく、法華経の生命哲学の上からの十二因縁と知るべきである。よって、法華経とは、言語の音声、つまり生活を説きあらわしているのである。善哉とは、善悪不二、邪正一如である。すなわち、われわれの生命が煩悩であるがゆえに、題目をあげることによって即菩提となるのである。

今、日蓮大聖人ならびにその門下が、南無妙法蓮華経と唱え奉るところに、仏界が湧現し、最高の幸福境涯を

つかむことができるのである。これを多宝涌現というのである。

講義

「法華経とは我等衆生流転の十二因縁なり」云云とは、生命の本質、本源、実体、因果の二法、生命発展の法則を明確に説き明かしたのが法華経なりとの文であられる。通途に法華経といっても、実には三種類あることを知るべきである。第一に釈尊の法華経は、法華経二十八品。像法における天台大師の法華経は、摩訶止観。末法における日蓮大聖人の法華経は、五字七字の三大秘法の南無妙法蓮華経である。所詮、南無妙法蓮華経を根本として、摩訶止観および法華経二十八品は、その説明書にあたるわけである。その一つの証拠として、法華経二十八品においても、妙法蓮華経序品第一、妙法蓮華経方便品第二といわれているではないか。

華厳経は、十信、十住、十行、十回向、十地、等覚、妙覚等の法門を、諸菩薩、凡夫大機（頓大の機）のために別円二教として説いたのである。この華厳を説きたもう仏を、他受用報身如来といい、国土を実報土と称するのである。しかし、そのときの衆生は、いまだ大乗の理を真に聞きうる機根ではなかった。阿含経においては、苦集滅道の四諦の法門を説き明かした。これは鈍根の機のために、修証の法を説いたのであり、十二年間、この小乗教は説かれた。この教主は一丈六尺の娑婆同居の仏であり劣応身である。方等部は、二乗が小乗によって見思の煩悩を断じ、羅漢の小果を得て涅槃を成じたと、誤った考えに執着したので、所々に四教の法をといて、

二乗を弾呵し、菩薩を称揚したのである。般若部では、二乗を誘導して大乗に向かわしむべく、通別円の三教を帯同して十四年間説かれるのである。

しかして、法華経二十八品は、これら四十余年の方便権経を説き終わって、随自意の立ち場より仏の境涯を説かれたのである。法華経は、大宇宙に広く十界三千の曼荼羅をえがいた状態とも考えられる。また、われらの十界三千の生命を、克明に、説き明かしたともいえる。その根本たる、南無妙法蓮華経の法本尊、日蓮大聖人の人本尊を、すなわち、仏法の真髄、骨髄をおしたためになった一幅の大曼荼羅をば大御本尊というのである。

日女御前御返事（一二四三㌻）にいわく「されば首題の五字は中央にかかり・四大天王は宝塔の四方に坐し・釈迦・多宝・本化の四菩薩肩を並べ普賢・文殊等・舎利弗・目連等坐を屈し・日天・月天・第六天の魔王・竜王・阿修羅・其の外不動・愛染は南北二方に陣を取り・悪逆の達多・愚癡の竜女一座をはり・三千世界の人の寿命を奪ふ悪鬼たる鬼子母神・十羅刹女等・加之日本国の守護神たる天照太神・八幡大菩薩・天神七代・地神五代の神神・総じて大小の神祇等・体の神つらなる・其の余の用の神豈もるべきや」云云と。

「言語の音声」とは、生活のことである。学校でも、社会でも、芸術、科学、文学等、全般にわたり、その基本は言語、音声を第一歩としていることは、論をまたない。「善哉とは善悪不二邪正一如なり」とは、いかなる人たりとも、妙法を信じて、全部救われるとの大慈悲である。善悪不二、邪正一如もまた、九界即仏界、煩悩即菩提、生死即涅槃をさしている。所詮、三大秘法の御本尊に帰命すれば「多宝涌現と云うなり」、すなわち、多宝とは、大御本尊であり、大御本尊の大功徳である。また智慧、福運、生命力と訳すこともできるわけである。

第八　南西北方四惟上下の事

本文

第八南西北方四惟上下の事

御義口伝に云く四方・四惟・上下合して十方なり即ち十界なり、十界の衆生共に三毒の光之れ有り是を白毫と云うなり一心中道の智慧なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは十界同時の光指なり諸法実相の光明なるが故なり。

語訳

四惟　四方（東西南北）の中間、すなわち東北、西北、東南、西南のこと。四維と同じ。

三毒　貪、瞋、癡をいう。貪は貪欲で「貪り」、瞋は瞋恚で「いかり」、癡は愚癡で「愚かなこと」。慢、疑と合わせて見惑、

十使中の五鈍使になる。

白毫　白毫の光り。三十二相の中の一つである眉間白毫相である。眉間白毫相とは、仏の眉間に白い毛があって兜羅綿のようであって、右旋し、光りを放つという。仏が仏智をもって、あまねく一切を見透していけることをあらわすのである。序品第一に「仏、眉間白毫相の光を放ちて、東方万八千の世界を照らしたもうに、周偏せざること靡し。下、阿鼻地獄に至り、上、阿迦尼吒天に至る」（一二四ページ）とある。宝塔品にも「仏、白毫の一光を放ちたもうに、即ち東方、五百万億那由佗恒河沙等の、国土の諸仏を見たてまつる」（四〇四ページ）と。御義口伝（七一二ページ）にも「白毫の光明は南無妙法蓮華経なり……白毫の光は中道なり……南無妙法蓮華経と唱え奉る時・題目の光無間に至りて即身成仏せしむ」とある。

一心中道の智慧　一心とは生命、信心、妙法である。中道とは偏らない、完全円満なる仏の生命である。一心中道の智慧とは仏智であり、南無妙法蓮華経のことである。

十界同時の光　十法界のあらゆる界々が、南無妙法蓮華経の白毫の光りに照らされ、九界即仏界、十界互具となること。

通解

仏が白毫の光りを東方に放ち、また南西北方、四方十方を照らすのである。宝塔品には「南西北方、四惟上下、白毫相の光の、所照の処も亦復是の如し」（四〇四ページ）とある。その光りの行くところ、いたるところで、十方分身の諸仏が説法している姿がある、というところである。

御義口伝には、次のように仰せである。十方とは、東西南北の四方と、東北、西北、東南、西南の四惟、それ

に上下をあわせて十方となるのである。これすなわち、十界のことである。十界の衆生の生命は、十界共に貪瞋癡の三毒の光りがある。この光りを白毫というのである。これは一心中道、すなわち一念の信心より出ずる仏智である。いま、日蓮大聖人およびその門下が、南無妙法蓮華経と題目を唱えるときは、十界の各界同時に功徳があらわれるのである。それは、諸法実相の明らかな光りに照らされるから、功徳があるのである。

講義

「十方」とは、全宇宙あますところなきをいう。これまた、われら十界の生命ともなる。ある西洋の学者が「われらの生命体は小宇宙なり」と。また、ある学者は「わが生命は、大宇宙の一細胞のようなものである」と。まことにゆえある理論といえる。事実、太陽の黒点あらわれれば、電波にも、また人体にも、大障礙を与えおよぼす。また、社会生活におよぼす影響も大なるものがある。

この生命と宇宙との関係は、経文のいたるところに説かれている。下山御消息（三五〇㌻）に「起世経に云く『諸の衆生有りて放逸を為し清浄の行を汚す故に天・雨を下さず』」と。瑞相御書（一一四〇㌻）に「夫十方は依報なり・衆生は正報なり譬へば依報は影のごとし正報は体のごとし・身なくば影なし正報なくば依報なし・又正報をば依報をもって此れをつくる……衆生の五根やぶれんとせば四方中央をどろうべし・されば国土やぶれんと・するしるしには・まづ山くづれ草木かれ江河つくるしるしあり人の眼耳等驚そうすれば天変あり人の心をうご

がせば地動す」と。また瑞相御書に（一一四二ページ）「人の悦び多多なれば天に吉瑞をあらはし地に帝釈の動あり、人の悪心盛なれば天に凶変地に凶夭出来す、瞋恚の大小に随いて天変の大小あり地夭も又かくのごとし」と。三世諸仏総勘文抄（五六八ページ）には「是を以て明かに知んぬ可し天崩れば我が身も崩る可し地裂けば我が身も裂く可し地水火風滅亡せば我が身も亦滅亡すべし、然るに此の五大種は過去・現在・未来の三世は替ると雖も五大種は替ること無し」と。

幾千万億の星座にも、全宇宙に、それぞれなんらかの波動影響を及ぼす生命活動がある。同時に、小宇宙であるわれらも、三毒（貪、瞋、癡）の光り、すなわち力用の働きがある。これ本有の生命活動であり、法華経では、白毫と説く。これ煩悩即菩提であり、生死即涅槃の原理である。すなわち、わが身の三毒を転じていく以外に真実の生活はありえないからである。これ一心中道の智慧となすと。一心中道の智慧とは煩悩・業・苦の三道を、法身・般若・解脱と転ずる信心の一心のことを指すのである。所詮、妙法護持のわれらは、「十界の同時の光指なり」の生活ができ得るのである。すなわち、いかなる境遇の人たりとも、いかなる瞬間の人生たりとも、九界を遊戯し、苦悩、宿命に流されることなく、悠々と、いっさいの苦難を乗りこえ、遊楽の人生を送ることができるとのおことばと拝する。「諸法実相の光明」とは、三大秘法の大御本尊に照らされ、わが肉団の本尊が湧現する生命をいうのである。ある思想家のいわく「生命の本源的解決なくして、真の人類の幸福の前進は決してありえない」と。動乱の世界に生きるわれら地涌の菩薩は、生命を賭して、この大慈大悲の諸法実相の光明をば、暗黒の世界に、点じきっていこうではないか。

第九　各齋宝華満掬の事

本文

第九各齋宝華満掬の事

御義口伝に云く宝華とは合掌・一念三千の所表なり各とは十界なり満の一字を一念三千と心得可し、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは仏に宝華を奉るなり宝華即宝珠なり宝珠即一念三千なり合掌以敬心欲聞具足道是なり云云。

語訳

各齋宝華満掬　宝塔品に「諸仏、各宝樹の下に在して、師子座に坐し、皆侍者を遣わして、釈迦牟尼仏を問訊したもう。各宝華を齎ち、掬に満てて……」の文。十方の諸仏が侍者を遣わして仏に問い訊ねるところである。

宝華とは合掌・一念三千の所表なり　宝華をもつということは、信心の立ち場から論ずれば、合掌したということであり、それが即、一念三千、南無妙法蓮華経を表わしているのである。御義口伝（七二二ページ）に「合掌とは法華経の異名なり……合掌に於て又二の意之れ有り合とは妙なり掌とは法なり、又云く合とは妙法蓮華経なり掌とは廿八品なり、又云く合とは仏界なり掌とは九界なり九界は権仏界は実なり、妙楽大師の云く『九界を権と為し仏界を実と為す』と十界悉く合掌の二字に納まって森羅三千の諸法は合掌に非ざること莫きなり」とある。

満　円満、欠けるところなく満ちているということ。一念三千こそ完全無欠な哲理であるから「満の一字を一念三千と心得可し」と仰せられたのである。

宝華即宝珠　宝珠は南無妙法蓮華経をたとえたことば。諸仏のもつ宝華は、即南無妙法蓮華経の最高の宝珠であるということ。宝珠は妙法によくたとえられ、法華経七譬の中の衣裏珠（無価の宝珠）も髻中明珠も妙法蓮華経をたとえている。

合掌以敬心欲聞具足道是なり　方便品の「諸の天竜神等、其の数恒沙の如し、仏を求むる諸の菩薩、大数八万有り、又諸の万億国の転輪聖王の至れる、合掌し敬心を以って、具足の道を聞きたてまつらんと欲す」（一六一ページ）の文。方便品で釈尊に説法を請うた文である。宝塔品で諸仏が侍者を遣わして、仏を問訊し、宝華をもったということは、すなわち合掌して仏の説法を請うたことを意味する。

通解

「各宝華を齎ち、掬に満てて」と読む。十方分身の諸仏が侍者を遣わして、釈迦仏にあいさつするところであ

る。

御義口伝には、次のように仰せである。宝華とは、合掌を意味するのである。また事の一念三千・南無妙法蓮華経をあらわしている。したがって、宝華とは御本尊のことである。各とは、地獄界より仏界にいたる十界をいうのである。満の一字は欠けるところのない、満ちている、という意味であるから、事の一念三千と心得べきである。いま日蓮大聖人、およびその門下であるわれわれが、大御本尊に南無妙法蓮華経と唱題し奉れば、それは仏に宝華を奉ることになるのである。宝華は、即宝珠であり、宝珠は即事の一念三千の南無妙法蓮華経、つまり御本尊のことである。方便品第二の「合掌し敬心を以て、具足の道を聞きたてまつらんと欲す」（一六二ページ）とは、このことを説かれているのである。

講義

生活即信心の態度についての文である。宝華とは、信心の合掌のことである。譬喩品にも、合掌とは、法華経の異名なりとも説かれている。したがって、末法の法華経、即三大秘法の大御本尊に南無し、題目をあげる姿が宝華であり、合掌となる。他宗教のごとく、印契を結んだり、また、三大秘法の本尊に向かわざる合掌は、真の合掌とは、決していえない。また、合掌の「合」とは妙なり、「掌」とは法なり、とも説かれている。受持即観心に通ずるところであり、信心のいかに大事かをうかがうことができるのである。

なお、所表とは、たとえをもって、その意義を明かすことである。宝華を捧げる行為を借りて、一念三千の意義を表わしている。所詮、宝華を満掬しゆく行為とは、今日では、大御本尊に合掌する姿であり、これこそ、真の信心の姿であり、吾が身が当体蓮華仏となるのである。

なお、通途には、宝華は、宝珠と同一義に用いられている。観心本尊抄に「一念三千を識らざる者には仏・大慈悲を起し五字の内に此の珠（宝珠）を裹み末代幼稚の頸に懸けさしめ給う」（二五四㌻）云云と。最後に「合掌敬心」は信心合掌を意味し、「具足道」は、一念三千の法理となる。

第十　如却関鑰開大城門の事

本文

第十如却関鑰開大城門の事　補註の四に云く此の開塔見仏は蓋し所表有るなり、何となれば即ち開塔は即開権なり見仏は即顕実なり是れ亦前を証し復将さに後を起さんとするのみ、如却関鑰とは却は除なり障除こり機動くことを表す謂く法身の大士惑を破し理を顕し道を増し生を損するなりと。

御義口伝に云く関鑰とは謗法なり無明なり開とは我等が成仏なり大城門とは我等が色心の二法なり大城とは色法なり門とは口なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る時無明の惑障却けて己心の釈迦多宝住するなり、関鑰とは無明なり開とは法性なり鑰とは妙の一字なり天台の云く「秘密の奥蔵を発らく之を称して妙と為す」と、妙の一字を以て鑰と心得可きなり、此の経文は謗法不信の関鑰を却けて己心の仏を開くと云う事なり開仏知見之を思う可し云云。

語訳

如却関鑰開大城門　宝塔品（四〇九ページ）の「釈迦牟尼仏、右の指を以って七宝塔の戸を開きたもう。大音声を出すこと、関鑰を却けて大城の門を開くが如し」の文。関はかんぬき、鑰は錠前のこと。すなわち門のかぎのことをいう。釈尊が七宝塔を開いたのが、ちょうど大城の門のかんぬきをはずして、そのとびらを開くような大きな音がしたことを示す。

補註　法華三大部補註の略。十四巻。宋の従義の著といわれる。本書の序講（二三ページ）参照。

前を証し……後を起さんと　証前起後の宝塔のこと。宝塔の出現に二義があり、証前とは権教に対して迹門の真実なることを証し、起後とは本門の説法、発迹顕本の起縁となることをいう。証前は傍、起後が正意である。

法身の大士　大士とは菩薩。法身の菩薩のこと。

道を増し生を損す　道増損生のこと。法華文句に「道を高に増し、生を尽に損す」とある。法華本門の利益をいったもの。道とは中道の智慧、生とは変易の生。すなわち菩薩がしだいに中道の智慧を増し、惑を破して変易の生を損じていくことをいう。

天台の云く　玄義の序文である私記縁起にある文。章安が述べている。

開仏知見　方便品広開三顕一の文。「諸仏世尊は、衆生をして仏知見を開かしめ……」とある。御義口伝（七一六ページ）の「唯以一大事因縁の事」の語訳（二三五ページ）参照。

通解

釈尊が宝塔を開くところである。「是に釈迦牟尼仏、右の指を以って七宝塔の戸を開きたもう。大音声を出すこと、関鑰を却けて大城の門を開くが如し」（四〇九ページ）と述べられている。補註の四には、この開塔見仏は、考えてみるに、表わす所があるのである。なんとなれば、すなわち、「開塔」ということは、即開権ということであり、「見仏」は、即顕実ということである。これは、また、前の迹門を証明し、後の本門を起こそうとする意味があるのである。如却関鑰の「却」とは、「除」ということであり、成仏するのに妨げとなる、いろいろな障害物を除き、成仏する機根になることを表わしているのである。法身の菩薩が、いろいろな惑を破し、道理をあらわし、中道の智慧を増し、変易生死を損減していくのであると。

御義口伝には、次のように仰せである。関鑰とは謗法ということであり、無明ということである。また「大城の門を開く」という開とは、謗法や無明を開いていくがゆえに、われわれが成仏するということである。大城門とは、われわれの色心の二法である。大城が色法であり、門とは心法を表わしている。今、日蓮大聖人およびその門下が、南無妙法蓮華経と唱え奉るときは、無明の惑障を却けて己心の釈迦多宝が住し、仏界が湧現してきて、成仏することができるのである。関鑰とは無明のことであり、その関鑰を開く、開とは、法性ということである。鑰とは、成仏の門を開くカギであるから、妙の一字になる。天台大師は、このことを「秘密の奥蔵をひらくので、これを称して妙となすのである」と説いている。妙の一字をもって、鑰と心得べきである。

この経文、すなわち如却関鑰開大城門は、いろいろな謗法不信の関鑰を却けて、われわれの己心の仏界を湧現することを示している経文である。「仏知見を開く」ということは、このようなことであり、このことをよく

よく考えるべきである。

講義

煩悩即菩提の哲理の文である。「関鑰」とは、扉の鍵の意。この関鑰とは、御義口伝では、謗法、無明なりと仰せである。何故か。それは、扉の鍵それ自体では、未だ内部の価値はありえない。したがって、煩悩、九界をさしておられるがゆえである。「開」とは、仏界のことであり、成仏を意味する。結句は、信心の二字が、開となる。「大城門」とは、大城が色法、門が心法を意味する。色心不二の生命のことである。

所詮、物質的な悩み、精神的な悩みを、つまり、三障四魔を打ち破ってゆく信心によって、門に入ることができるとの指導であられる。結局、折伏行も、題目も教学も、一切の学会活動が、わが己心の釈迦多宝を、ハッキリ見るためである。これ、永遠の幸福境涯に住し、大宇宙のリズムに合致した、最高の生活をいうのである。大確信に満ち満ちて、苦悩の社会を、悠々と遊戯してゆける人生をいうのである。これ、ただただ、われら学会員の信心の目的であることを忘れてはならない。

「鑰とは妙の一字」とは、無明煩悩の中に、われらの成仏できうる鍵が収められている哲理である。所詮、煩悩即菩提の鍵が、われらの肉団に蔵せられているので、誠に言語筆舌につくせぬ、妙といわざるをえない。御義口伝の方便品第二に「開とは信心の異名なり云云、信心の開仏知見を以て正意とせり」とも説かれている。

この原理によって、政治家も、教育者も、学者も、芸術家も、人間革命し、社会の幸福と平和への指導者になってもらいたいものである。かつ、この大指導原理によって、不幸と悲惨な人が一人もなくなることを、祈ってやまないものである。

第十一　摂諸大衆皆在虚空の事

本文

第十一　摂諸大衆皆在虚空の事

御義口伝に云く大衆とは聴衆なり皆在虚空とは我等が死の相なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は生死即涅槃と開覚するを皆在虚空と説くなり生死即涅槃と被摂するなり、大地は色法なり虚空は心法なり色心不二と心得可きなり虚空とは寂光土なり、又云く虚空とは蓮華なり経とは大地なり妙法は天なり虚空とは中なり一切衆生の内・菩薩・蓮華に座するなり、此れを妙法蓮華経と説かれたり、経に云く「若在仏前蓮華化生」と。

語訳

摂諸大衆皆在虚空　宝塔品（四一一ページ）「釈迦牟尼仏、神通力を以って、諸の大衆を接して、皆虚空に在きたもう」の文。大衆

が、釈迦多宝が宝塔に並座して虚空にあるのを見て、虚空に住したいと願ったのに対して、仏が神通力をもって一座の大衆を虚空に住せしめたもの。以後、虚空会が始まる。

被摂　摂せられること。摂とはおさめるの意。ここでは大衆の皆在虚空が、生死即涅槃を示しているということ。

寂光土　仏法で説く四種類の国土の一つ。凡聖同居土、方便有余土、実報無障礙土、そして常寂光土である。たんに寂光土ともいう。仏の住む土。絶対的幸福境涯の国土である。法華文句巻九上に「住処とは常寂光土なり。常は即ち常徳、寂は即ち楽徳、光は即ち浄と我なり。是れを四徳秘密の蔵と為す」とある。虚空会は寂光土である。

菩薩・蓮華に座するなり　菩薩が成仏の位に座すこと。蓮華に二の義がある。すなわち出水の義と華開の義である。出水とは法華論に「如来大衆の中に入って坐し諸の菩薩の如く蓮華の上に坐して……」とあり、華開についても、「如来の浄妙法身を開示して信心を生ぜしめんが故なり」とある。このように菩薩は蓮華の上に坐すと説かれている。菩薩とは、信心に約せば、御本尊を信じ南無妙法華経と唱え、一切衆生の救済のために戦う人である。その人が即妙法蓮華経の当体とあらわれることを示した原理である。

若在仏前蓮華化生　提婆達多品（四二六ページ）に「妙法華経の提婆達多品を聞いて、浄心に信敬して、疑惑を生ぜざらん者は、地獄、餓鬼、畜生に堕ちずして、十方の仏前に生ぜん。所生の処には、常に此の経を聞かん。若し人天の中に生ずれば、勝妙の楽を受け、若し仏前に在らば、蓮華より化生せん」とある。南無妙法蓮華経と唱えるならば、絶対の幸福境涯を得るとの文である。

通解

釈尊が宝塔の中に入って、多宝とならんですわり、さらに、大衆をも虚空におくのである。「即時に釈迦牟尼仏、神通力を以って、諸の大衆を摂して、皆虚空に在きたもう……」とある。

御義口伝には、次のように仰せである。「摂諸大衆」の大衆とは聴衆である。「皆虚空にあり」とは、われわれの生命が、大宇宙に冥伏し、死の相を現じているのである。今、南無妙法蓮華経と唱え奉る日蓮大聖人、およびその門下は、その信心によって、生死即涅槃と開覚するのである。その姿を皆在虚空と説くのである。仏の立ち場からみるならば、衆生は、生死即涅槃ととられるのである。

大地は色法であり、虚空は心法である。この色と心は不二と心得べきである。虚空とは寂光土である。また、妙法蓮華経というたてわけからみるならば、虚空とは蓮華であり、経とは大地であり、妙法とは天である。虚空とは中である。一切衆生の内、菩薩が蓮華（成仏）に座しているのである。これを妙法蓮華経と説かれているのである。法華経の提婆達多品には「若在仏前蓮華化生」と説かれている。すなわち、もし御本尊の前にあって、信心修行に励んでいくならば、因果倶時で、成仏の境涯をうることができるというのである。

講義

生死即涅槃の文である。「大衆」とは聴衆であり、われわれ一般大衆のことである。生死の海にただよい、永遠の生命に生きることを知らない迷いの衆生である。「皆在虚空」とは、死の相である。われわれの生命が、大

宇宙の生命に冥伏した状態をいう。すなわち永遠不滅の生命における滅の相である。

この見方よりすれば、生もまた、永遠の生命の中において生の相を現じたものである。かく悟ることが、涅槃であり、生死の苦海も、永遠の楽土に転ずることができるのである。これ生死即涅槃である。しかし、この境涯に達するためには、三大秘法の御本尊を信じ、南無妙法蓮華経と唱うることが根本条件である。ゆえに、「今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、生死即涅槃と開覚するを皆在虚空と説くなり、生死即涅槃と被摂するなり」と仰せなのである。

色心不二の哲理よりみれば、大地は色法、虚空は心法であって、この二者は一体である。そのように正しく知見することが、生命の実体を把握することになる。その生命観に立ったとき、そこが虚空であり、したがって常寂光土なのである。さらに妙法蓮華経の五字より立てわけるならば、虚空は蓮華である。経は、われわれの言語音声であり、一切の行動であるがゆえに、色法であり、大地である。妙法は心法なるがゆえに天である。虚空は天と地より見れば、中であって、色心不二となる。

最後の「一切衆生の内・菩薩・蓮華に座するなり、此れを妙法蓮華経と説かれたり」とは、成仏の要諦を説かれたのである。われわれが御本尊を信じ南無妙法蓮華経と唱え仏道に励む時、生死即涅槃、色心不二の生命活動を顕現し、妙法蓮華経の当体と現われるのである。提婆達多品に説く「若在仏前蓮華化生」とはこれをいう。

第十二　譬如大風吹小樹枝の事

本文

第十二譬如大風吹小樹枝の事

御義口伝に云く此の偈頌の如清涼池と譬如大風と燃大炬火とは三身なり、其の中に譬如大風とは題目の五字なり吹小樹枝とは折伏門なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは大風の吹くが如くなり。

語訳

譬如大風吹小樹枝　「(仏が)身より妙香を出して、十方の国に徧じたもう、衆生薫を蒙って、喜び自ら勝えず、譬えば大風の小樹の枝を吹くが如し、是の方便を以って、法をして久しく住せしむ」(四一三ページ)とある。

偈頌　偈は偈他の略。通途で偈頌という。韻文形式の経文。散文のものでも字数が整っていれば偈頌という。四句をもって偈

とする。たとえば「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為楽」などは一偈である。いまは宝塔品（四一二ページから）の偈頌である。

如清涼池　宝塔品の「諸仏各各に宝樹の下に詣りたもう、清涼池の蓮華荘厳せるが如し」の文。

燃大炬火　宝塔品の「其の宝樹の下の諸の師子座に、仏其の上に坐したまいて光明厳飾せること、夜の闇の中に大いなる炬火を燃せるが如し」の文。

通解

「譬えば大風の、小樹の枝を吹くが如し」と読む。仏の説法の姿を表現しているのである。御義口伝には、次のように仰せである。宝塔品の偈頌の「清涼池の（蓮華荘厳せるが）如し」「譬えば大風の（小樹の枝を吹くが）如し」「（夜の闇の中に）大いなる炬火を燃せるが如し」、この三つは法報応の三身をあらわしているのである。

その中の「譬えば大風の……如し」とは、題目の五字をいうのである。「小樹の枝を吹く」とは、大風ともいうべき題目によって、小樹の枝のような邪宗教が折伏されるのである。すなわち「法華折伏破権門理」のことを申されているのである。今、日蓮大聖人およびその門下が、南無妙法蓮華経と唱えて折伏していく、その姿というものは、大風の吹くようなものである。

講義

宝塔品の偈頌に「如清涼池、譬如大風、燃大炬火」とあるが、これは、三身を表わしている。如清涼池は、「清涼池の蓮華荘厳せるが如し」とあり、功徳あふるる清浄なる仏身、すなわち応身ともいえよう。譬如大風は「譬えば大風の小樹の枝を吹くが如し」とあり、仏の智慧、はたらき等を指すがゆえに、報身と考えられる。燃大炬火とは「夜の闇の中に大いなる炬火を燃せるが如し」とあり、仏の力、本質を明かしたもので、法身と拝することもできる。

次に、「譬如大風」とは題目であり、「吹小樹枝」とは折伏のことである。われわれの唱える題目は、自行化他にわたる南無妙法蓮華経である。一切経のすべての理法、すべての功徳は、この一句の中に包摂されるのである。ゆえに、経中の王であり、戸田城聖前会長が、この題目を唱え、折伏に励む創価学会を、宗教界の王者といわれた意義はここにある。一切の教団が、南無妙法蓮華経の前には、あたかも、小樹が大風に吹かれて、なびくようなものである。現在における一切の思想、哲学といえども、南無妙法蓮華経の偉大な哲理と力に対しては、とうていおよぶものではない。もともと「無量義は一法より生ず」といい、「百千枝葉悉く一根に趣く」と説かれているが、その一法あるいは一根こそ南無妙法蓮華経なのである。この題目を根本として、すべての哲学は生かされるものであると知るべきである。

第十三　若有能持則持仏身の事

本文

第十三若有能持則持仏身の事

御義口伝に云く法華経を持ち奉るとは我が身仏身と持つなり、則の一字は生仏不二なり上の能持の持は凡夫なり持つ体は妙法の五字なり仏身を持つと云うは一一文文皆金色仏体の故なり、さて仏身を持つとは我が身の外に仏無しと持つを云うなり、理即の凡夫と究竟即の仏と二無きなり即の字は即故初後不二の故なり云云。

語訳

若有能持則持仏身　宝塔品（四一八ページ）「我仏道を為て、無量の土に於いて、始より今に至るまで広く諸経を説く、而も其の中に於いて此の経第一なり、若し能く持つこと有らば、則ち仏身を持つなり」の文。法華経を持つことは、即仏を受持するこ

とであるということ。御本尊を受持する者は、仏を受持しているのであり、成仏でき得ることを示している。人法一箇を顕わす文である。

生仏不二　生とは衆生、すなわち衆生と仏とが不二であるということ。九界即仏界、仏界即九界の義である。華厳経に「心仏及衆生是三無差別」と。

一一文文皆金色仏体　金色の仏体とは色相荘厳の仏をいうのではなく、真の仏であることを示す。法華経の一文一句が、すべて仏身と同じであるということ。略法華経に「六万九千三八四・一々文々是れ真仏」とある。

理即・究竟即　天台の配立した六即位の最低と最高。凡夫と仏である。止観第一下に「理即とは一念心即ち如来蔵の理なり……一色一香に一切法を具す。一切の心も亦復是の如し。是れを理即是菩提心と名づく」「究竟即菩提とは、等覚一転して妙覚に入り、智光円満して茶を過ぎて道の説くべきなきが故に究竟菩提と名づけ、亦究竟の止観と名づく」とある。大聖人配立の時は御義口伝（七五二ページ）に「此の品の如来は理即の凡夫なり……無作の三身の仏なりと究竟したるを究竟即の仏とは云うなり」とある。

通解

これは、宝塔品の「若し能く持つこと有らば、則ち仏身を持つなり」とあるところである。御義口伝には、次のように仰せである。三大秘法の大御本尊を持ち奉るというのは、わが身がすなわち仏なりと確信することである。則持仏身の則の一字は、生仏不二、すなわち衆生も仏も別のものではないのである。若有能持の持というの

は、われわれ凡夫が持つのである。持つ体は、南無妙法蓮華経の五字である。これ御本尊受持につきる。これが仏身を持つことになる。南無妙法蓮華経の一字一字が、みな金色の仏体、すなわち大聖人の生命それ自体であるがゆえである。

さて、われわれが仏身を持つということは、わが身即仏であり、それ以外に仏はないと確信することをいうのである。理即の凡夫、すなわち九界の衆生と、究竟即の仏とは、別のものではないのである。即の一字は、即故初後不二（即の故に初めと後わりは不二なり）すなわち、初めの理即の凡夫と、後わりの究竟即の仏とは不二である、区別さるべきものではないというのである。

講義

即身成仏の奥義を明かし、人間の尊厳性を示されている。われわれ凡夫が、御本尊を持ち奉るとは、わが身即仏身と持つことであると仰せである。釈迦仏法においては五十二位をたて、歴劫修行による成仏を説くのであるが、日蓮大聖人の仏法においては、御本尊を持つことそれ自体、成仏なのである。「受持即観心」である。

天台も、理即より究竟即まで六即を設けているが、大聖人は「理即の凡夫と究竟即の仏と二無きなり」と仰せられ、生仏不二、すなわち衆生と仏は別のものではないと説かれている。通途の仏法観の大革命といえる。しかも、仏身を持つとはわが身の外に仏無しと持つをいう。まことに明確に生命の尊厳を説かれているではないか。

現在、民主主義を口にするものは多いが、生命の尊厳がどこにあるかを理解せずして、真の民主主義があろうはずがない。

人権を重んじ、人間性を無視してならないことは、民主主義の根幹である。しかし、なにゆえに人権を重んずべきか、人間性の本質はどこにあるかを究明せずして、個々の人間革命も、社会革命も期待することは決してできない。いま、日蓮大聖人の哲理によれば、人間は、本来仏である、妙法蓮華経の当体であると断定なさっているのである。これ生命の本質であり、実体である。この生命観にたって、初めて、民主主義の基盤が確立し、相互に信頼し、尊重し、助け合う、理想の社会が建設されてゆくのは当然である。

ただし、仏法は総別の二義をわきまえなければならない。総じては一切衆生は仏であるが、別しては日蓮大聖人であらせられる。衆生が即仏であるといっても、生命論の上から説く理上の問題であって、真実われわれが、仏の生命を湧現し、幸福生活を実現するためには、御本仏日蓮大聖人の御命である三大秘法の大御本尊を信じて、南無妙法蓮華経と唱える以外には絶対にありえないのである。

第十四　此経難持の事

本文

第十四此経難持の事

御義口伝に云く此の法華経を持つ者は難に遇わんと心得て持つなり、されば則為疾得無上仏道の成仏は今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る是なり云云。

語訳

此経難持　宝塔品（四一九ページ）の「此の経は持ち難し、若し暫くも持つ者は、我即ち歓喜す、諸仏も亦然なり、是の如きの人は、諸仏の歎めたもう所なり、是れ則ち勇猛なり、是れ則ち精進なり、是れを戒を持ち、頭陀を行ずる者と名づく、則ち為れ疾く、無上の仏道を得たり。能く来世に於いて、此の経を読み持たんは、是れ真の仏子、淳善の地に住するなり」の文。法

華経を受持することの困難なことを説いて、その功徳を示している。依義判文抄においては、この文を三大秘法に配立している。此経難持から無上仏道までが本門の本尊、能於来世読持此経が本門の題目、是真仏子住淳善地が本門の戒壇である。

則為疾得無上仏道　前掲の文。「則ち為れ疾く無上の仏道を得たり」と読む。受持の功徳を示す文。即身成仏、直達正観の依文である。

通解

宝塔品の「此の経は持ち難し」について、御義口伝には、次のように仰せである。この御本尊を信じ、仏道修行に励む者は、必ずや難にあうであろうと心得て、信心すべきである。それゆえ、「則ち為れ疾く、無上の仏道を得たり」という成仏は、いま南無妙法蓮華経と唱え奉る日蓮大聖人およびその門下が、果たすことができるのである。

講義

最高の幸福論を説かれている。御書に「日蓮が弟子等は臆病にては叶うべからず」（教行証御書一二八二ページ）と。また「難来るを以て安楽と意得可きなり」（御義口伝七五〇ページ）と。これらの御文はすべて、本文の意に通ずるも

のである。三大秘法の御本尊を持つ以上は、「難に遇わんと心得て持つなり」との仰せである。そこに無上最大の幸福、すなわち、即身成仏の境涯は得られるのである。

仏法の方程式を厳然と説かれているではないか。遠くは、釈尊は九横の大難にあい、天台は南三北七にせめられ、伝教は六宗にあだまれている。その他の例は数かぎりない。近くは、初代牧口常三郎会長は、牢獄でお亡くなりになり、二代戸田城聖会長もまた、二か年の長きにわたって獄中生活を送られたのである。しかしながら、仏法のために身を捨つるは「石に金をかへ糞に米をかうるなり」（種種御振舞御書九一〇ジー）との御金言を思うとき、いかなる難にあおうとも、大御本尊を護持して一生成仏の本懐を全うすべきではないか。

主師親の三徳を具備された御本仏、日蓮大聖人が、われわれに慈悲をたれ給わぬわけがない。難を受けるのを御覧になって、不憫に思わぬわけはない。だが、転重軽受は仏法の大法則であり、受けるべき難を克服せずして、成仏はありえない。

さらに、難に遭うことを覚悟してこそ、魔を防ぐこともできるがゆえに、きびしく仰せになるのであって、大慈大悲の御金言と強く強く信じなくてはならぬ。しかるに凡夫は、大事な時に目先きの安楽を求めて信心を忘れ勝ちなものである。ゆえに御書に「受くるは・やすく持つはかたし・さる間・成仏は持つにあり、此の経を持たん人は難に値うべしと心得て持つなり、『則為疾得・無上仏道』は疑なし、三世の諸仏の大事たる南無妙法蓮華経を念ずるを持とは云うなり」（四条金吾殿御返事一一三六ジー）と。また「一生空しく過して万歳悔ゆること勿れ」（富木殿御書九七〇ジー）と、生涯強盛に信心を貫き通し、おのおの悔いなき人生を全うしようではないか。

第十五　我則歓喜諸仏亦然の事

本文

第十五我則歓喜諸仏亦然の事

御義口伝に云く我とは心王なり諸仏とは心数なり法華経を持ち奉る時は心王心数同時に歓喜するなり、又云く我とは凡夫なり諸仏とは三世諸仏なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱えて歓喜する是なり云云。

語訳

我則歓喜諸仏亦然　「此の経は持ち難し、若し暫くも持つ者は、我則ち歓喜す、諸仏も亦然なり」（四一九ページ）の文。文上では「法華経を受持するのはむずかしいが、少しでも受持するならば釈尊も三世十方の諸仏も喜ぶのである」という意味。御本尊受持の功徳の説明である。

心王・心数　心王は心の働きの根本、生命活動の根本であり、心数は心の諸作用、一念の所作、活動のこと。心王は迹門不変

真如の理で、心数は本門随縁真如の智であると配立することもできる。

三世諸仏　過去・荘厳劫の千仏、現在・賢劫の千仏、未来・星宿劫の千仏。また過現未の三世にわたるいっさいの仏。

通解

宝塔品の「此の経は持ち難し、若し暫くも持つ者は、我則ち歓喜す、諸仏も亦然なり」とあるところの御義口伝である。

御義口伝には、次のように仰せである。我則歓喜の我とは、心王つまり生命それ自体であり、諸仏とは心数、つまり生命の働きをいうのである。大御本尊を受持し、信心に励むときは、生命の根本も、生命の働きも、同時に歓喜するのである。また、我とは、凡夫のことであり、凡夫即仏で、日蓮大聖人のことである。諸仏とは、三世十方の諸仏のことである。いま、日蓮大聖人およびその門下が、南無妙法蓮華経と唱えて歓喜すれば、諸仏もまた歓喜するのである。これを我則歓喜諸仏亦然というのである。

講義

題目を唱えることが最高の歓喜であるとの御文である。われわれが、南無妙法蓮華経と唱うることは、われわ

れの生命に偉大なる影響を与えることであり、躍動する生命活動となるのである。顔色はすぐれ、生活の上に功徳がぐんぐん現われるのは、その証拠である。これこそ真実の歓喜であり、日蓮大聖人は「歓喜の中の大歓喜なり」（御義口伝七八八ページ）とも仰せである。

競技に勝った、金がもうかった、病気がなおった、大臣になった、すべては喜びにちがいない。だが、それは永遠の喜びであろうか。そうではない。一時的のものであり、相対的のものであって、決して永久的なものではなく、絶対的なものでもない。場合によっては、むしろ、そうした一時的な歓喜が、却って将来のあだになり、不幸の原因になることは、日常生活に常に経験するところではないか。

御本尊を信じ題目をしっかり唱える以外に、本然的な歓喜はありえないのである。この歓喜こそ常住のものであり、一切の歓喜は、ここに包含されて、初めてわれわれの幸福の内容となるのである。ゆえに、南無妙法蓮華経と唱え奉れば、御本仏日蓮大聖人はお喜びくださり、他の一切の三世の諸仏も喜ぶのである。われわれが妙法を唱え、折伏すると、いろいろと非難を受け、迫害される場合もある。しかし「法華経を持ち奉る時は心王心数同時に歓喜するなり」とは何を意味するのであろうか。表面的には反対するようであっても、一切の衆生に仏性がある以上、本然的には歓喜しているのである。反対するのは、その仏性が顕現することを恐れて、魔が妨害する現象と見るべきではなかろうか。われわれは、喜んでいる仏性に着目せず、表面的な魔の働きに眩惑されるのである。南無妙法蓮華経は、本来、一切衆生が心の奥底において求めているものであることを確信して、高らかに題目を唱えぬいていこうではないか。

第十六　読持此経の事

本文

第十六読持此経の事

御義口伝に云く五種の修行の読誦と受持との二行なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは読なり此の経を持つは持なり此経とは題目の五字なり云云。

語訳

読持此経　「能く来世に於いて、此の経を読み持たんは、是れ真の仏子、淳善の地に住するなり」の文。法華経を読み、受持するものは真の仏の弟子であり、成仏することができるとの意。

五種の修行　五種の妙行ともいう。受持、読（経文を見て読む）、誦（暗誦する）、解説、書写である。法師品に「若し復人有

って、妙法華経の乃至一偈を受持、読誦し、解説、書写し、此の経巻に於いて、敬い視ること仏の如くにして……是の諸人等、未来世に於いて、必ず作仏することを得ん」とある。法華経で説かれた仏道修行。この中で受持がもっとも根本である。法師功徳品第十九に「此の経を受持し、若しは読み、若しは誦し、若しは解説し、若しは書写……」とある。またこの五種の修行には一字五種の修行（妙）、要法五種の修行（南無妙法蓮華経）、略品五種の修行（方便品、寿量品）の三義がある。末法においては受持即観心である。観心本尊抄（二四六ページ）に「釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華経の五字に具足す我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り与え給う」とある。なお自行化他に配立すれば、受持、読誦、書写は自行、解説は化他である。

通解

ここは、宝塔品の「此の経を読み持たんは」とあるところで、御義口伝には次のように仰せである。受持、読誦、解説、書写の五種の修行の中の読誦と受持との二つの修行のことである。いま日蓮大聖人およびその門下が南無妙法蓮華経と唱え奉るのは「読」であり、この経を受持しきっていくのは、「持」になるのである。この経とは題目の五字であり、南無妙法蓮華経、事の一念三千の大御本尊のことである。

講義

仏道修行には、受持、読、誦、解説、書写の五種の修行があるが、末法においては、受持と読誦の二行が肝心であって、他はすべてこれに含まれるのである。

まず、われわれは、御本尊をお受けしたならば、南無妙法蓮華経と唱える。御本尊に向かって唱えれば読であり、御本尊に向かわずして唱える場合は誦である。この題目の功徳は、無量であり、言語に絶するものである。たとえ、かりそめに、継母が子供をほめるように、心ならずも一回唱えた題目の功徳さえ、はかり知れないほど大きい。妙楽は「発心真実ならざる者も正境に縁すれば功徳猶多し」（富要集第三巻七一ページ）とも説いている。しかし、これは御本尊の力の偉大なることを表わしたものであって、われわれは、一生成仏するためには、生涯題目をあげ続けねばならない。当体義抄（五一二ページ）には「正直に方便を捨て但法華経を信じ南無妙法蓮華経と唱うる人は」云云と条件をお示しになり、以下、御本尊の功徳があげられている。

また、報恩抄（三二八ページ）には「日本・乃至漢土・月氏・一閻浮提に人ごとに有智無智をきらはず一同に他事をすてて南無妙法蓮華経と唱うべし」とある。「他事をすてて」とあることに心を留むべきである。名聞、名利にとらわれず、ひたぶるに題目をあげてこそ、御本意に叶うのである。かかる題目をあげることは、御本尊を受持することと表裏一体である。「受くるは・やすく持つはかたし・さる間・成仏は持つにあり」（四条金吾殿御返事一一三六ページ）と。御本尊を純真に信じまいらせ、題目をあげぬき、いかなる大難があろうとも、絶対に御本尊を受持しきってこそ成仏できるのである。

第十七　是真仏子の事

本文

第十七是真仏子の事

御義口伝に云く法華経の行者は真に釈迦法王の御子なり、然る間王位を継ぐ可きなり悉是吾子の子と是真仏子の子と能く能く心得合す可きなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は釈迦法王の御子なり。

語訳

是真仏子　「能く来世に於いて、此の経を読み持たんは、是れ真の仏子、淳善の地に住するなり」の文。御本尊を受持するものが真の仏の子であるということ。

悉是吾子　譬喩品の「今此の三界は、皆是れ我が有なり、其の中の衆生は、悉く是れ吾が子なり」の文。一切衆生が仏の子

であるということ。

悉是吾子の子と……心得合す可きなり　悉是吾子は一切衆生が仏の子であるということで、信心していないものでも、すべて仏の子であるという意味。しかしその中で、御本尊を受持するものこそ真の仏子である。このことを考え合わせなさいということ。

通解

宝塔品の「是れ真の仏子」とあるところの御義口伝で、次のように仰せである。法華経の行者は、真に釈迦法王の御子である。それゆえ、釈迦法王の王位を継ぐことができるのである。譬喩品の悉是吾子（悉く是れ吾が子なり）の子と是真仏子の子と、よくよく心得あわすべきである。いま、南無妙法蓮華経と唱え奉る日蓮大聖人およびその門下は、釈迦法王、つまり久遠元初の自受用報身如来の御子である。

講義

法華経の行者とは、別しては、日蓮大聖人であり、総じては、われわれ信者である。「釈迦法王」とは、久遠元初の自受用報身すなわち日蓮大聖人である。三大秘法の御本尊を信じ奉り、身口意の三業において、実践活動

をするならば、われわれは法王である日蓮大聖人の真実の仏弟子としての資格を得る。子供である以上、王位をつぐのは当然であると仰せである。

戸田城聖前会長が「創価学会は宗教界の王者である」といわれたゆえんはここにある。宗教界の王者は、現在における「思想界の王者」であるということと等しい。いまや思想の混乱は、実に、はなはだしい。この大混乱が、いっさいの不幸の根本原因をなしているのである。われわれ、真の仏弟子として、色心不二の大哲学を高く掲げ、人間文化建設の大理想を実現しようではないか。

第十八　是諸天人世間之眼の事

本文

第十八是諸天人世間之眼の事

御義口伝に云く世間とは日本国なり眼とは仏知見なり法華経は諸天世間の眼目なり、眼とは南無妙法蓮華経なり是諸天人世間之眼・又云く是諸仏眼目云云、此の眼をくじる者は禅・念仏・真言宗等なり眼等とは目を閉づるなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは諸天世間の眼に非ずや云云。

語訳

是諸天人世間之眼　「能く来世に於いて、此の経を読み持たんは、是れ真の仏子、淳善の地に住するなり、仏の滅度の後に、能く其の義を解せんは、是れ諸の天人、世間の眼なり」（四一九ページ）の文。法華経の義を解するものは一切世間の眼目であ

るという意味。

仏知見　仏の知見、仏見のこと。文句巻四上に「仏は一切種智を以て知り、仏は仏眼を以て見る。此の智眼を開くを乃ち仏知見と名づく」とある。この仏の知見、仏界を衆生に得させるために仏は世に出現するのである。これを一大事因縁という。方便品に「諸仏世尊は衆生をして仏知見を開かしめ、清浄なるを得せしめんと欲するが故に世に出現したもう。衆生に仏知見を示さんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして仏知見を悟らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして、仏知見の道に入らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。舎利弗、是れを諸仏は唯一大事の因縁を以っての故に、世に出現したもうと為づく」とある。

通解

宝塔品に「是れ諸の天人、世間の眼なり」とあり、これについて、御義口伝には、次のように仰せである。

「是諸天人世間之眼」の世間とは、日本国のことである。またその中の眼とは、仏の知見である。法華経すなわち御本尊は、諸天世間の眼目である。眼とは、南無妙法蓮華経である。この眼は、諸の天人、世間の眼である。また、三世諸仏の眼目なのである。

この南無妙法蓮華経の眼をえぐりだす者、つまり南無妙法蓮華経を誹謗し、ないがしろにする者は、禅、念仏、真言宗などの邪宗教の輩である。今、南無妙法蓮華経と唱え奉る日蓮大聖人、およびその門下は、諸天世間の眼ではないか。すなわち、われわれこそが、世界の指導者なのである。

講義

日本国の現状を打開し、救う道は、ただ三大秘法の御本尊のみであることをお述べになっている。「世間とは日本国なり」とあるが、当然、広くは世界全体をさす。これは日蓮大聖人出世の本懐の曼荼羅が一閻浮提総与の御本尊であることから明瞭である。しかし、ここでは、大聖人が、法華経有縁の国、日本に御出現になったこと、また世界といっても、結局は、日本一国が広宣流布することが前提であるがゆえに、別しての立ち場から、かく仰せであると拝する。

「眼とは仏知見なり」とあるが、法華経方便品に諸仏出世の本懐は、一大事因縁であり、その一大事因縁は、すなわち、衆生をして仏知見を開かしめ、仏知見を示し、仏知見を悟らしめ、仏知見の道に入らしむることにあると説かれている。日蓮大聖人はさらに、この仏知見を南無妙法蓮華経であると結論なさっている。この仏知見、すなわち南無妙法蓮華経こそ、一切衆生の眼目であり、この眼目なくしては、だれびとも真の幸福をつかむことができないし、社会の繁栄もありえない。

しかるに、この眼目をくじる者として、禅、念仏、真言等があげられている。もちろん、今日においては、かかる既成宗教は、直接に、日蓮正宗に抗する何らの力も持つものではないし、その他の新興宗教といえども同じである。だが、いまなお多くの人々を迷わせているし、これら誤れる宗教に縁をもつ輩が、国家権力の中枢となり、陰に陽に学会誹謗をしている。

さらにインテリとか有名人とかいわれる人々、学者、評論家等の中に、無認識の評価をする人々がいるが、これらは、眼をくじる人であれ、決して、民衆の眼というべき人ではない。いま、諸天世間の眼は、別しては御本仏、日蓮大聖人であらせられ、総じては、われわれ創価学会員であることを自覚し、誇りと確信をもって広宣流布達成をめざして前進すべきである。

第十九　能須臾説の事

本文

第十九能須臾説の事

御義口伝に云く能の一字之を思う可し説とは南無妙法蓮華経なり、今日蓮等の類いは能須臾説の行者なり云云。

語訳

能須臾説　「恐畏の世に於いて、能く須臾も説かんは、一切の天人、皆応に供養すべし」（四一九ページ）の文。南無妙法蓮華経を少しでも説いていくこと。このことは末法においては非常に困難である。宝塔品六難九易の文に「若し仏の滅後に、悪世の中に於いて、能く此の経を説かん、是れ則ち難しとす」（四一六ページ）とある。

能の一字　能は能所の能ではなく「能く」という意味で、「色心相応して」「身口意三業にわたって」の意が含まれている。

通解

宝塔品の「恐畏の世に於いて、能く須臾も説かんは、一切の天人、皆応に供養すべし」とあるところである。御義口伝には、次のように仰せである。能須臾説の能の一字は、色心共に、また身口意の三業をもって、という意味である。このことを思索すべきである。説とは、南無妙法蓮華経を説くのである。いま、日蓮大聖人およびその門下は、能須臾説の行者、つまり一瞬一瞬、身口意の三業で実践していく者なのである。

講義

折伏の大事であることを説かれた文である。「能の一字之を思う可し」とある。末法悪世の今日、折伏は容易なものではない。それだけに折伏の功徳は偉大である。さて仰せのように、折伏にあたっては、この「能」の一字をよくよく心に留めなくてはならない。

まず折伏は、相手を救う行為である。自分自身が絶対の確信をもつことが肝要である。相手に通ずるものは、表面上のことばづかいや、話し方の上手、下手ではない。その人の心の奥底に、確信があるかないかが根本である。みずから、身口意の三業において、仏道修行を実践し、確信と喜びとをもってのぞむべきである。次に折伏

は慈悲の行為である。誤った宗教の害毒を除いて、大御本尊の偉大なる功徳に浴せしめることにある。ただただ、御本尊のもとに、案内し、幸福にしてあげようとの純真な精神をもととしなくてはならない。自分の利益や感情や、名聞、名利にとらわれるようなことがあっては、もはや折伏精神とはいいえない。

「説とは南無妙法蓮華経なり」説く法はなにかといえば、三大秘法の南無妙法蓮華経である。すなわち折伏は、弘安二年十月十二日に、大聖人が出世の本懐として御図顕遊ばされた大御本尊を知らしめて、苦悩の民衆を救うことにつきるわけである。日蓮宗系を名のる教団は、数多い。そしていずれも、題目を唱えているが、本門の本尊なきがゆえに、本門の題目ではない。まったく大聖人の御本意に反する誤った宗教であり、堕地獄の根源であると断ぜざるを得ない。

第二十　此経難持の事

本文

第二十此経難持の事

御義口伝に云く此の経文にて三学倶伝するなり、虚空不動戒・虚空不動定・虚空不動慧・三学倶に伝うるを名けて妙法と曰うと、戒とは色法なり定とは心法なり慧とは色心二法の振舞なり、倶の字は南無妙法蓮華経の一念三千なり伝とは末法万年を指すなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉り権教は無得道・法華経は真実と修行する是は戒なり防非止悪の義なり、持つ所の行者・決定無有疑の仏体と定む是は定なり、三世の諸仏の智慧を一返の題目に受持する是は慧なり、此の三学は皮肉骨・三身・三諦・三軌・三智等なり。

語訳

此経難持　第十四の「此経難持」参照。

三学　戒、定、慧をいう。戒は戒律、定は禅定、慧は智慧である。いかなる経教においても戒定慧の三学を説く。戒は防非止悪の義。定は静慮の義、すなわち心を静めて悟りを開くこと。慧は照明の義で、煩悩を断破して、真理の本性を得ることである。日蓮大聖人の仏法においては三学は三大秘法となる。三大秘法口決に「一には本門寿量の大戒・虚空不動戒を無作の円戒と名づけ本門寿量の大戒壇と名づく、二には本門寿量の本尊・虚空不動定・本門無作の大定を本門無作事の一念三千と名づく、三には本門寿量の妙法蓮華経・虚空不動慧を自受用本分の無作の円慧と名づく」（富要集第三巻一〇五ページ）とある。

此の経文にて三学倶伝するなり　宝塔品「此経難持」の文に戒定慧三学が含まれているということ。本文第十四此経難持の事の語訳参照。すなわち「此経難持」等の文に三大秘法が説かれていることをさす。詳しくは依義判文抄（第三に宝塔品の此経難持等の文）参照のこと。

虚空不動戒……妙法と曰うと　学生式問答第五の文。「虚空不動戒・虚空不動定・虚空不動慧・三学倶に伝うるを名けて妙法と曰う。故に見宝塔品に云く『此経難持若暫持者……是真仏子住淳善地』と」とある。

防非止悪　戒のこと。非を防ぎ、悪を止むとよむ。依義判文抄に「凡そ戒は防止を以て義と為す、非を防ぐが故に淳なり、悪を止むるが故に善なり」（富要集第三巻一一四ページ）とある。

決定無有疑　神力品総結の文。「我が滅度の後に於いて、応に斯の経を受持すべし、是の人仏道に於いて、決定して疑い有ること無けん」（五八四ページ）とある。御本尊を受持するならば、仏になること疑いないとの文である。

三世の諸仏の智慧……是は慧なり　南無妙法蓮華経と唱えることによって、その中に三世の諸仏の智慧が含まれているゆえに仏の智慧が得られるということ。観心本尊抄（二四六ページ）に「釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華経の五字に具足す我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り与え給う」と、また方便品に「一たび南無仏と称せし、皆已に仏道を成じき」

（一八二ページ）とある。

三軌　衣座室をいう。弘経の三軌ともいう。（くわしくは本書四四五ページ参照）

三智　一切智、道種智、一切種智のこと。一切智は、一切の思想および経典に通達した二乗の智慧、道種智はあらゆる道法により、衆生の生命に仏界を湧現させようとする菩薩の智慧、一切種智とは、一切を見通していく透徹した仏智をいう。止観にはこの三智が一心に具しているとして「仏智、空を照すこと、二乗の見る所のごとくなるを、一切智と名く。仏智、仮を照すこと、菩薩の見る所のごとくなるを、道種智と名く。仏智、空仮中を照し、皆実相を見るを、一切種智と名く。ゆえに三智は一心の中に得というなり」と述べている。

通解

宝塔品の「此の経は持ち難し」とあるところについて、御義口伝には、次のように仰せである。この此経難持の経文によって、戒定慧の三学を倶に伝えるのである。虚空不動戒（戒壇）と、虚空不動定（本尊）虚空不動慧（題目）を倶に伝えるのを名づけて、妙法というのである。

戒とは一往色法を意味し、戒壇となる。定とは心法を意味し、本尊となる。慧とは色心二法の振舞いであるから、題目である。倶の一字は三大秘法を倶して一大秘法となる。ゆえに南無妙法蓮華経、事の一念三千のことである。伝とは、末法万年に伝えていくことをさしているのである。いま、日蓮大聖人およびその門下が、南無妙法蓮華経と唱え奉って、権教は無得道であり、法華経は真実の教えであるとして折伏していくのは戒である。こ

れは非を防ぎ、悪を止めるという意味である。

この御本尊を受持するものは、決定無有疑の仏体、つまり、成仏することは疑いないと定める。これは定である。また、三世十方の諸仏の智慧を一返の題目に受持していく、これは慧である。この戒定慧の三学は、皮肉骨、法報応の三身、空仮中の三諦、衣座室の三軌、道種智・一切智・一切種智の三智である。

講義

此の経文にて三学倶伝するなり

所詮、三大秘法の御本尊であり、これを此経難持と心得て持つとき、一切の衆生は永遠の幸福に生きることができる旨が述べられている。

仏法には、浅深、勝劣が厳密に説かれている。しかして、いかなる経においても、三学がたてわけられている。大聖人の仏法における三学は、通解に述べたように、戒壇と本尊と題目になる。この三大秘法は倶して一大秘法、すなわち南無妙法蓮華経であり、事の一念三千の当体である。しかして、この功徳は、じつに末法万年におよぶとの言であられる。報恩抄（三二九ページ）に「日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華経は万年の外・未来までも流布（ながる）べし」と。

信心の上より、三学を論ずるならば、三大秘法の御本尊以外に、絶対に、幸せになる道はない、他はすべて、邪宗教なりと修行する、これが戒である。防非止悪の意味になるがゆえである。この御本尊を持てば、かならず即身成仏する、すなわち、この身が仏体であると定める、これが定である。三世の諸仏の智慧は、いっぺん南無妙法蓮華経と唱える、その題目の中におさまる、これが慧である。このように、末法の三学は、最高の三学であって、三大秘法の御本尊であり、この御本尊を信じて、自行化他にわたる南無妙法蓮華経を唱うるわれわれは、いっさいの経典に説くところの三学を実践することになる。

提婆達多品八箇の大事

提婆達多品八箇の大事

第一　提婆達多の事

本文

第一提婆達多の事　文句の八に云く本地は清涼にして迹に天熱を示すと。御義口伝に云く提婆とは本地は文殊なり、本地清涼と云うなり迹には提婆と云うなり天熱を示す是なり、清涼は水なり此れは生死即涅槃なり天熱は火なり是は煩悩即菩提なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るに煩悩即菩提生死即涅槃なり、提婆は妙法蓮華経の別名なり過去の時に阿私仙人なり阿私仙人とは妙法の異名なり阿とは無の義なり私無きの法とは妙法なり、文句の八に云く無私法を以て衆生に灑ぐと云えり阿私仙人とは法界三千の別名なり故に私無きなり一念三千之を思う可し云云。

語訳

提婆達多　提婆達多品（四二四ページ）に「爾の時の王とは、則ち我が身是れなり。時の仙人とは、今の提婆達多是れなり。提婆

達多が善知識に由るが故に、我をして六波羅蜜、慈悲喜捨、三十二相、八十種好、紫磨金色、十力、四無所畏、四摂法、十八不共、神通道力を具足せしめたり。等正覚を成じて、広く衆生を度すること、皆提婆達多が善知識に因るが故なり」とある。提婆達多は、提婆、調婆達、調達等ともいう。訳して「天熱」あるいは「天授」という。その出生の時、諸天は、提婆達多が成長して、三逆罪を犯すことを知って、心に熱悩を生じたので「天熱」と名づけたという。また提婆達多は釈尊の従弟で、父は斛飯王、弟は阿難尊者である。釈尊の八万法蔵、外道の六万蔵を誦持し、出家して神通を学び、学道大いに進んだが、憍慢な心の持ち主で、虚栄心、利欲の俗念が強く、深く釈尊を恨み、ついに三逆罪を犯した。第一は、大衆に囲繞されたら仏と同じであると考えて、釈尊の和合僧団を破り、五百の弟子を得て、破和合僧の罪を犯した。第二は、仏を圧死させようと、耆闍崛山の上から釈尊をめがけて大石を落としたが、鞞羅山神がそれを受けとめて釈尊を守った。しかし、その砕石が飛び散って、釈尊の足指を傷つけて、出仏身血の罪を犯した。第三には蓮華色比丘尼が提婆達多を呵責すると、かれは拳をもって尼を打ち、即死させた。これは、殺阿羅漢の罪である。このような三逆罪を犯した上、さらに悪邪師・富蘭那外道と親しく交わり、善根を断じても恥じ悔いるところがなかったという。また阿闍世太子をそそのかして、父頻婆沙羅王を殺させ、釈尊に敵対させた。ある時は、悪毒を指爪につけ、釈尊の御足を礼すると同時に傷をつけ、殺害しようとして果たさず、王舎城の中で、大地が自然に破裂して、生きながら地獄に落ちたという。しかし「法華経提婆達多品」においては、釈尊は提婆達多の過去の因縁を説き、過去世に提婆は阿私仙人といい、その時国王であった釈尊は、王位を捨てて阿私仙人に千年間仕えて、成仏したと説いている。そして提婆が釈尊に敵対する姿は善知識であり、その功徳を説いて成仏の記別を与え、無量劫の後、天道国において天王如来となるであろうと説いた。これは竜女の女人成仏とならんで、法華経にきて初めて説かれた「悪人成仏」のことである。観心本尊抄（二四〇㌻）に「経に云く『提婆達多乃至天王如来』等云云地獄界所具の仏界なり」とある。

本地　現わされたところの化身に対し、それを現わす本身を本地という。大地が万物のよりどころとなるように、種々の外相も真実相を根本としている。また、天月を本地、池にうつった月を垂迹にたとえることもある。一般には、仏菩薩が衆生を済度するため、仮の姿で現われた垂迹に対して、その真実身である仏菩薩をいう。たとえば天台、伝教の本地は釈尊であり、日蓮大聖人の本地は本仏たる久遠元初自受用報身如来である。これに対し、天台等が薬王の再誕、日蓮大聖人が上行の再誕といわれるのは、垂迹の姿をさしている。

文殊　くわしくは、文殊師利、曼殊師利などといい、梵語である。文殊は妙、師利は頭、徳、吉祥の義がある。妙徳、濡首、敬首、妙吉祥と訳す。法華経序品第一では、過去無量無辺不可思議阿僧祇劫の、日月燈明仏の時に出た妙光菩薩が、文殊であると説かれている。すなわち、文殊は過去に日月燈明仏の弟子として法華の付属を受け、仏の八子を教えて、成仏させた。その最後の仏を燃燈といい、これを釈迦は、師と仰いだ。ゆえに、文殊は釈尊の九代前の師ともいわれる。迹化の菩薩の上首、第一の智慧をもち、普賢と一対で権大乗の釈尊の左に座すことがある。提婆品では、娑竭羅竜宮に行って法華経を説いて、八歳の竜女に菩提心を起こさせている。また、釈尊滅後四五〇年まで、娑婆世界にとどまって、大乗を弘めたともいわれる。観心本尊抄（二五一㌻）に「文殊師利菩薩は東方金色世界の不動仏の弟子……一往釈尊の行化を扶けん為に娑婆世界に来入す又爾前迹門の菩薩なり本法所持の人に非ざれば末法の弘法に足らざる者か」とある。また法華文句第二上には「文殊師利、此には妙徳と云う、大経には了々に仏性見ること猶妙徳等の如しと云い……心性の理を観ずるに、三徳秘密、縦ならず横ならず、故に妙徳と名く」とある。

阿私仙人　阿私は梵語。法華経提婆達多品（四二二㌻）に次のように説かれている。釈尊が過去無数劫のむかし、国王と生まれ、大乗のために王位を捨てて無上の法を求め、「誰か能く我が為に、大乗を説かん者なる。われ当に身を終わるまで、供給し走使すべし」と誓った。その時阿私仙人がきて「われ大乗を有てり、妙法蓮華経と名づけたてまつる。若し我に違わ

ずんば、当に為に宣説すべし」といった。王はこのことばを聞いて、歓喜して仙人にしたがい、果を採り水を汲み、たきぎを拾い、身をもって牀座として、千歳の間いっさいを供養して、衆生のために妙法を求めて修行し、ついに成仏することができた。その時の王はすなわち今の釈尊であり、仙人は今の提婆達多である。この大権の聖者が、業因感果の理を示すために、みずから三逆罪をつくり、現身に地獄に落ちたが、妙法の功力によって、天王如来との記別を受けたのである。

無私法　「私無きの法」とよみ、公平な法、平等大慧の法、つまり南無妙法蓮華経のこと。

灑ぐ　水をまく、水を下しかける、注ぐということ。一切経音義に「水をもって塵を検るを灑という」とある。ここでは一切衆生のために最高の仏法を説いたことを意味する。

通解

三逆罪を犯した悪逆の提婆達多について、文句の八には、実は、このような悪逆の提婆も、本地は清涼なのであって、迹に天熱を示す、すなわち天に熱悩を生ぜしめるような悪人の姿を示したのである、といっている。

これについて、御義口伝には、次のように仰せである。提婆達多の本地は文殊なのである。したがって文句の八には「本地清涼」というのである。本地はこのように清涼であって、垂迹として悪逆の提婆の姿をとったのである。したがって「天熱を示す」というのである。清涼は水についていうのであり、水は生死をあらわし、それが清涼なのであるから、生死即涅槃をあらわすのである。天熱とは煩悩の火であり、その天熱の提婆が授記を蒙るのであるから、煩悩即菩提をあらわすのである。今、日蓮大聖人およびその門下が南無妙法蓮華経と唱え奉る

ことは、煩悩即菩提、生死即涅槃と開いていくことになるのである。

悪逆の提婆達多も、実は妙法蓮華経の別名なのである。経文には、過去に提婆は阿私仙人であったことが説かれている。この阿私仙人とは何か。これこそ実に妙法の異名なのである。阿私仙人の阿とは無の義であり、無私――私なきの法とは、妙法なのである。妙楽の法華文句記の八には「無私法（私無きの法）を以て衆生に灑ぐ」とあり、この無私法は妙法を指していることは明らかである。このようにみていけば、阿私仙人とは法界三千の別名であり、森羅万象、十界三千、ことごとく阿私仙人なのである。したがって、私なく平等大慧なのである。一念三千こそ実に私なき法である。これをよくよく考えなさい。

講義

提婆達多の成仏は、善悪不二、邪正不二、邪正一如の原理を示したものである。釈尊を、宿世の敵とまで憎み、あらゆる謀をめぐらし、死に追いやること幾度。その提婆達多に、釈尊は、天王如来の記別を与えたのであった。しかも、法華経提婆品に説くところによれば、提婆は、無量劫の昔、阿私仙人という仙人であって、法華経を持っていたとある。その時、釈尊は、国王であって、この阿私仙人に仕えたのである。

実に不思議なことである。いままで、五逆罪と誹謗正法の者は、永久に無間地獄の焔にむせび、絶対に救われないものとされていた。提婆達多は、五逆罪はおろか、生涯かけて、釈尊をののしり、迫害し、正法を誹謗した

のである。その提婆達多が、過去に阿私仙人という法華経の行者であったということ、かつ成仏の記を与えられるということは、霊山一会の大衆にとっては驚きであり、それまでの迷妄を一時にたたき破られた感があったことであろう。

過去に阿私仙人という法華経の行者であったのが、なぜ提婆達多の姿をとり、無間地獄に落ちたかは、一つには業因業果の理を衆生に示さんがためであり、二つには、釈尊の大善を、いよいよ盛んならしめようとしたためである。

第一の、業因業果の理については、恩師のいわく「再往この問題を考える時には、釈尊にしても大聖人にしても、およそ仏法を説かれるにあたっては、前世の業因が今世の業果と現われることを確信しているのである。また、それは生命の哲理なのである。現代の人々は、過去に生き、現在も生き、未来もまた生命活動をなすのであるということを、なかなか信ずる者が少ない。しかし、われわれは皆、過去世の業因をもって現世に生まれてきているのである。されば、阿私仙人が提婆達多と生まれてきて、釈尊の仏法を助け、業因業果を衆生に示したことは当然のことである。過去の師匠が今世の弟子となって現われたのである」と。釈尊と提婆達多の関係は、今世だけではなく、過去遠々劫よりの関係である。あるときは師となり、またあるときは、悪人の姿をとって説法を助ける等と、連続しゆくものであることが明かされているのである。

第二に、釈尊の大善をいよいよさかんならしめるためとは、およそ、悪がなければ、善をあらわすことはできない。ゆえに爾前経では「悪がなければ以て賢善を顕すことができない。このゆえに提婆達多は無数劫以来、つ

ねに釈尊とともにあって、釈尊は仏道を行じ、提婆は非道を行じてきた。しこうして、互いに啓発してきたものである」と。しかるに、対悪顕善が終われば、悪の全体は即これ善である。ゆえに法華経では善悪不二、邪正一如、逆即是順となるのである。この方程式は、爾前経には説かれなかった奥底の義である。

ゆえに、法華経で、提婆達多が天王如来なりと説かれたことは、法華経の偉大さ、深さを示すものである。呵責謗法滅罪抄（一一三一ページ）にいわく「提婆達多は仏の御敵・四十余年の経経にて捨てられ臨終悪くして大地破れて無間地獄に行きしかども法華経にて召し還して天王如来と記せらる」と。種種御振舞御書（九一七ページ）にいわく「釈迦如来の御ためには提婆達多こそ第一の善知識なれ、今の世間を見るに人をよくなすものはかたうどよりも強敵が人をば・よくなしけるなり乃至日蓮が仏にならん第一のかたうどは景信・法師には良観・道隆・道阿弥陀仏と平左衛門尉・守殿ましまさずんば争か法華経の行者とはなるべき」と。

また、提婆達多の生命は誰にでもある。かつて戸田前会長は「提婆達多は男のヤキモチ、竜女は女のヤキモチをあらわす」といわれた。現在のいっさいの人々は、みなことごとく提婆達多である。瞋恚と嫉妬と苦悩、煩悶の心の充満する世なれば。だが、法華経によって天王如来の記をうくるごとく、大御本尊の功力により、それらの提婆達多の生命も即天王如来とあらわれるのである。また、釈尊と提婆達多の激烈な戦いは、実は一個人に集約されるのである。われわれの仏道修行は、たえず、わが己心の提婆達多との戦いである。また、創価学会と、その行進をはばもうとする輩との戦いを意味する。だが仏の軍は必ず勝つ、魔軍は必ず破れる原理とも拝せるのである。

私無きの法とは妙法なり

妙法は絶対に平等であるとの御文である。大御本尊には偏頗がない。またあらゆる宇宙の森羅万象を一法も欠くところなく具備している。いかに形の上で信心しているようにみえても、虚栄や形式で、御本尊をごまかすことはできない。また信心に反対した人は必ず根本軌道から外れたコースをたどる。信心強盛の人は大功徳をうける。また、あらゆる人をことごとく救いきっていく大御本尊こそ「私無きの法」ではないか。

第二　若不違我当為宣説の事

本文

第二若不違我当為宣説の事

御義口伝に云く妙法蓮華経を宣説する事を汝は我に違わずして宣説すべしと云う事なり、若の字は汝なり、天台の云く「法を受けて奉行す」と、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は日蓮に違わずして宣説す可きなり阿私仙人とは南無妙法蓮華経なり云云。

語訳

若不違我当為宣説　提婆達多品（四二二ページ）に「我大乗を有てり。妙法蓮華経と名づけたてまつる。若し我に違わずんば、当に為に宣説すべし」とある。

宣説　法を説くこと。法を弘めること。

若の字は汝なり　若の字は、もともとは、なんじという意。

天台の云く「法を受けて奉行す」　天台の法華文句第八に「時王聞仙言の下、第四に二行半は、法を受けて奉行することを頌す」とある。国王が阿私仙人にさまざまな給仕をして、妙法蓮華経を会得しようとしたことをいう。しかしここで奉行というのは、仏の仰せどおりに、法を弘めていくことをさす。

通解

王が大乗の法を求めているのに対し、阿私仙人が「我大乗を有てり。妙法蓮華経と名づけたてまつる。若し我に違わずんば、当に為に宣説すべし」と述べたところの御義口伝である。

この文について、次のように仰せである。「妙法蓮華経を宣説する事を汝は我に違わずして宣説すべし」と読むべきなのである。若の字は「もし」と読むのではなく、汝と読むべきなのである。

天台の法華文句の八には「法を受けて奉行す」とあり、仏の仰せどおり、法を弘めるべきことが示されている。今、日蓮大聖人およびその門下で、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、日蓮大聖人に違わずに、そのまま法を弘めるべきである。阿私仙人とは南無妙法蓮華経のことなのである。

講義

今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は日蓮に違わずして宣説す可きなり

この文は、極めて重要である。日蓮大聖人は種種御振舞御書（九一九㌻）に「かかる日蓮を用いぬるともあしくうやまはば国亡ぶべし」、四菩薩造立抄（九八九㌻）に「私ならざる法門を僻案せん人は偏に天魔波旬の其の身に入り替りて人をして自身ともに無間大城に堕つべきにて候つたなしつたなし……総じて日蓮が弟子と云って法華経を修行せん人人は日蓮が如くにし候へ」等と仰せられている。

現在、身延派日蓮宗をはじめとして、南無妙法蓮華経と唱える宗教は数多くある。だが、ことごとく日蓮大聖人の教えに背き、大謗法を重ねているのである。まさに亡国の宗教であり、天魔波旬の姿である。また、日蓮正宗の信徒であっても、信心がなければ、「日蓮に違わずして」の御金言に反するものであり、けっして功徳なく、行き詰まり、あるいは宿命転換でき得ず、不幸の巷を相変わらずさまようのである。

また、「宣説」とは、折伏である。たとえみずから口に南無妙法蓮華経と唱えようとも、折伏がなければ、如説修行の者とは決していえない。折伏をしぬいていく者こそ、日蓮大聖人のお心にかなう者であると仰せられているのである。如説修行抄（五〇三㌻）にいわく「雞の暁に鳴くは用なり宵に鳴くは物怪なり、権実雑乱の

時法華経の御敵を責めずして山林に閉じ籠り摂受を修行せんは豈法華経修行の時を失う物怪にあらずや、されば末法・今の時・法華経の折伏の修行をば誰か経文の如く行じ給へしぞ、誰人にても坐せ諸経は無得道・堕地獄の根源・法華経独り成仏の法なりと音も惜まずよばはり給いて諸宗の人法共に折伏して御覧ぜよ三類の強敵来らん事疑い無し」と。

今、創価学会員が、広宣流布をめざして、全民衆の幸福のため、世界平和のために邁進していることは、この文を、身をもって読んでいる姿なのである。

第三　採菓汲水拾薪設食の事

本文

第三採菓汲水拾薪設食の事

御義口伝に云く採菓とは癡煩悩なり汲水とは貪煩悩なり拾薪とは瞋煩悩なり設食とは慢煩悩なり、此の下に八種の給仕之れ有り此の外に妙法蓮華経の伝受之れ無きなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは即ち千歳給仕なり是れ即ち一念三千なり貪瞋癡慢を対治するなり。

語訳

採菓汲水拾薪設食　提婆品（四二二ページ）に「王、仙の言を聞いて、歓喜踊躍し、即ち仙人に随って、所須を供給し、果を採り水を汲み、薪を拾い食を設け、乃至身を以って牀座と作せしに、身心倦きこと無かりき。時に奉事すること千歳を経て、法

の為の故に、精勤し給侍して、乏しき所無からしめき」とある。

通解

釈尊が過去世に国王となっていたとき、歓喜踊躍して阿私仙人に師事し、給仕をなし、「菓を採り水を汲み、薪を拾い食を設けた」という経文がある。

この文について、御義口伝には、次のように仰せである。採菓、すなわち「菓を採る」とは、貪瞋癡慢の四煩悩の中では癡煩悩をあらわすのである。汲水、すなわち「水を汲む」とは、貪煩悩をあらわす。拾薪、すなわち「薪を拾う」とは、瞋煩悩をあらわす。また設食、すなわち「食を設く」とは慢煩悩をあらわすのである。

しかして、この下の文には、八種の給仕が説かれている。提婆品には、釈尊が過去世に阿私仙人について法華経を伝受したとき、この八種の給仕のほかの修行は、説かれていないのである。所詮、今、日蓮大聖人および大聖人の門下が、南無妙法蓮華経と唱えたてまつるのは、すなわち国王の阿私仙人に対する千歳の間の給仕にあたるのである。これすなわち一念三千であり、貪瞋癡慢の四煩悩を対治する根本の修行である。

講義

釈尊は、かつて過去世に国王であった。その時阿私仙人が法華経を持てるを知って、国位を捨てて阿私仙人の弟子となり、千歳の間、菓を採り水を汲み薪を拾い身を牀座となして仙人に仕え、法華経を修行して成仏することができたのである。これは、釈迦仏法の修行方法である。日蓮大聖人の仏法は、受持即観心であり、大御本尊を持つことそれ自体が、千歳給仕となっているのである。ゆえに、本文には「今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは即ち千歳給仕なり」と示されているのである。

また、再往考えれば、仏法は常随給仕でなければわからないということである。顕立正意抄（五三七㌻）にいわく「今日蓮が弟子等も亦是くの如し或は信じ或は伏し或は随い或は従う、但だ名のみ之を仮りて心中に染まざる信心薄き者は設い千劫をば経ずとも或は一無間或は二無間乃至十百無間疑無からん者か是を免れんと欲せば各薬王楽法の如く臂を焼き皮を剝ぎ雪山国王等の如く身を投げ心を仕えよ、若し爾らずんば五体を地に投げ偏身に汗を流せ、若し爾らずんば珍宝を以て仏前に積め若し爾らんずんば奴婢と為って持者に奉えよ若し爾らずんば等云云、四悉檀を以て時に適うのみ、我弟子等の中にも信心薄淡き者は臨終の時阿鼻獄の相を現ず可し其の時我を恨む可からず等云云」と。

いま、民衆の幸福を願って、骨をけずり、身の皮をはぐ思いで、日夜活躍するわれわれ創価学会員こそ、「千歳給仕」をしているのであり、成仏は絶対間違いなしと断ずるものである。

第四　情存妙法故身心無懈倦の事

本文

第四情存妙法故身心無懈倦の事

御義口伝に云く身心の二字色心妙法と伝受するなり、日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉りて即身成仏す身心無倦とは一念三千なり云云。

語訳

情存妙法故身心無懈倦　提婆品（四二三ページ）に「情に妙法を存せるが故に、身心懈倦無かりき」とある。「身心無懈倦」とは、身心ともに、倦くことがないということ。われわれの生命が、妙法蓮華経の当体、一念三千の当体であるがゆえに、身心無懈倦なのである。

通解

これは提婆品（四二三ページ）に「情に妙法を存せるが故に、身心懈倦無かりき」とあるところの御義口伝である。この文について、次のように仰せである。身心の二字は色（身）と心、すなわちわれわれの生命がそのまま妙法の当体であるというのが、仏の伝受なのである。日蓮大聖人およびその門下は、南無妙法蓮華経と唱えて即身成仏するのである。身心無倦というのは、われわれが一念三千の当体であることを示しているのである。

講義

身心とは、生命のことである。すなわち、最高の幸福境涯である。「懈倦」とは、苦悩の生活のことである。環境に流され、宿命に泣き、宿命に苦しみゆく不幸なる生命活動である。「情に妙法を存せるが故に」とは、大御本尊を持つことである。妙法護持の人生は、必ず宿命を打破し、そして、福運を積みゆくことができる。人生行路にあって、自在の境涯を会得することができるのである。身心とは、色心と同意である。ゆえに、いかなる肉体的苦痛、精神的煩悶も、ことごとく解消することを意味する。これこそ、われらの、幾千万の体験、体得が、如実に証明しているところである。

なお、われわれは、常になさねばならぬことが沢山ある。しかし、信心がないと、あれもしなければならない、これもしなければいけない等々と、現実に立ちふさがる様々な問題の重圧に、耐えかねてしまうものだ。弱々しく、引き退がるか、あせりと、いらだちで、苦悩するのが常であろう。逆に、題目を力強く唱えゆく人は、未来に、いかなる難関が横たわっていても、悠々と乗り切ってゆく力が湧く。現実の生活は、日々に洋々と開けゆき、大洋のごとく、行き詰まるところをしらぬ。確信は、盤石の巌のごとくである。心境は、豊かで潤いのあること、田園のごとくである。あらゆる波乱も、変毒為薬して、それがすべて、その人の人生を飾りゆくものとなってしまうのである。

「身心無懈倦」とは、生命の部分観のみしか説かぬ法、哲学、思想に対し、一念三千の法門は、融通無礙の哲理であることをあらわしている。一念三千こそ、生命を完全に説ききった大哲理なるがゆえに、身心無懈倦なのである。

また、一代聖教大意（四〇二ページ）に「止観の五に云く『夫れ一心に十法界を具す一法界に又十法界を具すれば百法界なり一界に三十種の世間を具すれば百法界には即ち三千種の世間を具す此の三千一念の心に在り』文、妙楽承け釈して云く『当に知るべし身土一念の三千なり故に成道の時此の本理に称て一身一念法界に徧ねし』」と。

身心無懈倦の身心とは、一念三千の一念であり、妙楽のいう「一身一念」にあたる。無懈倦とは三千の変化であり、妙楽のいう「法界に徧ねし」にあたるのである。ゆえに身心無懈倦とは、一念三千なのである。

第五　我於海中唯常宣説の事

本文

第五我於海中唯常宣説の事

御義口伝に云く我とは文殊なり海とは生死の海なり唯とは唯有一乗法なり常とは常住此説法なり妙法蓮華経とは法界の言語音声なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る是なり、生死の海即真如の大海なり我とは法界の智慧なり文殊なり云云。

語訳

我於海中唯常宣説　提婆品（四二九ページ）に「文殊師利の言わく、我海中に於いて、唯常に妙法華経を宣説す」とある。これは文殊が、娑竭羅竜宮で無量の菩薩を化導するのに、法華経をもってした、と自叙するところである。さらにこの文殊の説法

によって、八歳の竜女の成仏を説き、さらに舎利弗、智積の疑問に答えて、竜女の即身成仏が示される。

唯有一乗法なり　方便品第二の文。方便品（一七四ページ）に「十方仏土の中には、唯一乗の法のみ有り、二無く亦三無し、仏の方便の説をば除く」とある。

常住此説法　寿量品第十六の文。寿量品（五〇六ページ）に「衆生を度せんが為の故に、方便して涅槃を現ず、而も実には滅度せず、常に此に住して法を説く」とある。

生死の海　この場合の生死とは、生老病死のことで、苦しみと訳す。またその他、生死生死と旋火輪のように永遠に伝わっていく生命の実体を説く場合もあり、迷いと訳す場合や、生と死を意味することもある。生死の海とは生死の苦海ともいい、生死流転の苦しみがいかに深いものであるかを海にたとえていう。

真如の大海　真とは真実の義。如とは如常の義である。虚妄を離れて真実であるから真といい、常住であって不変であるから如という。したがって真如とは宇宙万有の実体で、真実にして平等無差別な絶対真理をいう。変化してやまない現象の仮相に対していう語。すなわち南無妙法蓮華経のこと。したがって真如の大海とは仏界のことで、生死の海が即真如の大海となるとは九界即仏界のことである。

法界の智慧　法界とは全宇宙。あらゆるものに智慧がある。四季の変化、地球の公転、自転、また火がものを焼き、犬や猫がないたりするのも、ぜんぶ智慧であることをいう。

通解

これは提婆品に「文殊師利の言わく、我海中に於いて、唯常に妙法華経を宣説す」とあるところである。

御義口伝には、次のように仰せである。「我」とは文殊師利菩薩のことである。海で説くというのは、その海は生死の苦しみの海であり、九界で説いたということである。「唯」とは方便品に「唯一乗の法のみ有り」とあるように、法華経のみということである。「常に」とは寿量品に「常に此に住して法を説く」とあるように、娑婆世界に住して説くということである。妙法蓮華経とは、法界、すなわち宇宙の森羅万象の言語音声が、すべて妙法蓮華経の働きであることをさすのである。今、日蓮大聖人および門下が、南無妙法蓮華経と唱えたてまつるのがこれである。その時には生死の苦しみの海が、即、悟りの海、すなわち仏界となるのである。我とは全宇宙のもつ智慧であり、したがって智慧第一の文殊がそれを代表しているのである。

講義

生死の大海が、真如の大海と転ずる法は、唯、大御本尊に、妙法を唱え、智慧を湧現する以外にないことを示された御文である。

われわれの人生を、生死の苦海にするも、真如の大海とするも、わが一念で帰結されてしまうものだ。信心強盛なれば、真如の大海に遊戯できるし、信心無き人は、生死の苦海に沈む以外になく、厳しき因果律といえよう。われらの、瞬間瞬間の活動は、全部自身の智慧の働きが決める。しかし、それが、邪智、浅智、地獄界の智

慧、餓鬼界、畜生界、修羅界等の智慧の場合が多い。ここに、不幸を招く第一歩があることを知らねばならない。

現今の、多数の人の智慧は、邪智であり、四悪趣、五道、六道の智慧である。ゆえに、利己の人のみ充満し、自己の目的のためには、手段を選ばず、そのためにのみ、鋭利に智慧を働かすのである。戦争の時、敵方の大量虐殺のための智慧は、地獄界の智慧といえる。反対に、真実幸福への智慧は、仏智である。一生成仏への前進は当然のことながら、全人類を救いきってゆく智慧なのである。そして、この智慧こそ、信心の二字に収まることはいうまでもない。

第六　年始八歳の事

本文

第六年始八歳の事

御義口伝に云く八歳とは八巻なり提婆は地獄界なり竜女は仏界なり然る間十界互具百界千如一念三千なり、又云く八歳とは法華経八巻なり我等八苦の煩悩なり、惣じて法華経の成仏は八歳なりと心得可し八苦即八巻なり八苦八巻即八歳の竜女と顕るるなり一義に云く、八歳の事はたまをひらくと読むなり、歳とは竜女の一心なり八とは三千なり三千とは法華の八巻なり、仍って八歳とは開仏知見の所表なり智慧利根より能至菩提まで法華に帰入するなり、此の中に心念口演とは口業なり志意和雅とは意業なり悉能受持深入禅定とは身業なり三業即三徳なれば三諦法性なり、又云く心念とは一念なり口演とは三千なり悉能受持とは竜女法華経受持の文なり、歳とは如意宝珠なり妙法なり八とは色心を妙法と開くなり。

語訳

年始八歳　提婆品（四二九ページ）に「娑竭羅竜王の女有り。年始めて八歳なり」とある。竜女が八歳であること。

竜女　竜の女身である竜女は、大海の娑竭羅竜王のむすめで八歳であった。文殊師利菩薩が竜宮で法華経を説いたのを聞いて菩提心を起こし、ついで霊鷲山で釈尊の前で即身成仏の相を示して女人成仏の現証を顕わした。竜女作仏という。爾前の女人不成仏、改転の成仏を破折している。

八苦　生・老・病・死の四苦に、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五盛陰苦を加えたものをいう。

利根　利は鋭利、根は信根不疑等の五根、あるいは眼等の五根である。鈍根に対する語。能力の鋭利なものをいう。智慧利根とは智慧が鋭敏に働くもの。

智慧利根より能至菩提まで　文殊が竜女の成仏を説く文。提婆品（四二九ページ）に「年始めて八歳なり。智慧利根にして、善く衆生の諸根の行業を知り、陀羅尼を得、諸仏の所説の甚深の秘蔵悉く能く受持し、深く禅定に入って、諸法を了達し、刹那の頃に於いて、菩提心を発して不退転を得たり。弁才無礙にして、衆生を慈念すること、猶、赤子の如し。功徳具足して、心に念い口に演ぶること、微妙広大なり。慈悲仁譲、志意和雅にして、能く菩提に至れり」とある。

悉能受持深入禅定　「悉く能く受持し、深く禅定に入って」と読む。禅定とは、心を静めて真理を感ずること。大御本尊を絶対なりと信じて永遠の生命を悟ることで、その実践活動は身業である。

三徳　法身、般若、解脱をいう。法身とは仏の清浄なる生命それ自体であり、般若とは仏の智慧であり、解脱とは仏のふるまい、幸福な姿である。また主、師、親を三徳とすることもある。

三業即三徳なれば三諦法性なり　当体義抄（五一二ページ）に「正直に方便を捨て但法華経を信じ南無妙法蓮華経と唱うる人は煩悩・業・苦の三道・法身・般若・解脱の三徳と転じて三観・三諦・即一心に顕われ其の人の所住の処は常寂光土なり」とある。

通解

これは提婆品（四二九ページ）に「娑竭羅竜王の女有り。年始めて八歳なり」とあるところの御義口伝である。

この文について、次のように仰せである。竜女が八歳であるということは、すなわち法華経の八巻を意味する。提婆達多は地獄界であり、竜女は成仏しているゆえに仏界なのである。ゆえに十界互具となり、したがって百界千如一念三千を表わしているのである。また、八歳とは法華経八巻であり、われわれの八苦の煩悩である。総じて法華経の成仏は八歳であると心得べきである。八苦の煩悩が即法華経八巻であり、八苦八巻が即八歳の竜女と顕われているのである。

一義には八歳はたまをひらくと読む。歳とはたまの義で、竜女の一念、生命であり、八とはひらくの義で、その一念が三千と開くのである。三千とは法華八巻である。ゆえに八歳とは方便品に「開仏知見」とあるように、仏知見を開いて表わすところのものである。「智慧利根」から「能至菩提」に至るまでの文は、すべて竜女が法華経に帰入したことを説き明かしているのである。「心に念い口に演ぶる」とは身口意三業に約せば口業であ

る。「志意和雅」とは意業になり、「悉く能く受持し、深く禅定に入って」とは実践活動であり身業である。身口意の三業は即、法身、般若、解脱と転じるゆえに、三諦が円融して悟りの境涯になるのである。また心念口演の心念とは一念であり、口演とは三千である。悉能受持は竜女が法華経を受持したという文である。歳とは如意宝珠であり、妙法である。八とは、われわれの生命を妙法の当体であると開き覚ることである。

講義

提婆品には、提婆達多の成仏の記とともに、竜女の即身成仏があげられている。竜女といえば畜身であり、女人の身である。それが即身成仏するということは、それまでの爾前経の考え方とは、まったく相反するものである。仏法における爾前経、また外典（儒教など）では、徹底して女人を嫌っている。儒教には三従というものがある。それは、女人は衆罪の根本であり、破国の根源であり、したがって女人を表面に出させてはいけないとし、女人は従わせるものとして三つのことを定めたのである。すなわち一は、幼にしては父母に従う、二は、嫁しては夫に従う、三は、老いては子に従う、というのである。

また、仏教にも五障というものがある。すなわち「一には六道輪廻の間男子の如く大梵天王と作らず、二には帝釈と作らず三には魔王と作らず、四は、転輪聖王と作らず、五には常に六道に留まりて三界を出でて仏に作らず（超日月三昧経にあり）」（法華経四三二㌻にも同意の文あり）というのである。この五障三従といった考え方が、ど

れだけ女性の心を卑屈にさせ、また不幸を生んだことか。

また、三皇五帝の三墳五典には、女人は諂曲の者であると、あるいはまた災は三女より起こる等ともいわれてきているのである。仏教にはいっても華厳経には「女人は地獄の使なり能く仏の種子を断つ外面は菩薩に似て内心は夜叉の如し」また「能く仏の種子を断つ」等とあり、また涅槃経には「一切の江河必ず回曲有り一切の女人必ず諂曲有り」あるいは「所有三千界の男子の諸の煩悩・合集して一人の業障と為る」等と説かれているのである。また銀色女経という経文には「三世の諸仏の眼は大地に落つとも女人は仏になるべからず」と説かれ、大論には「清風は、とると云えども女人の心はとりがたし」と述べている。

だが法華経では、これらの妄執を、ことごとく打ち破ったのである。

竜女の成仏を聞いて、あまりに不審に思った多宝仏第一の弟子である智積菩薩、釈尊の弟子の中で智慧第一の弟子である舎利弗も、竜女が成仏するなどということは絶対にないと、四十余年のさまざまな経文を引いて難問するのである。

だが竜女の成仏は、提婆品に明々白々であり、さすがの智積も舎利弗も舌を巻き口を閉じ、霊山一会の大衆は、法華経の偉大なる力に、歓喜のあまり掌を合わせた、とある。

開目抄下（二二三ページ）に「竜女が成仏此れ一人にはあらず一切の女人の成仏をあらはす、法華已前の諸の小乗教には女人の成仏をゆるさず、諸の大乗経には成仏・往生をゆるすやうなれども或は改転の成仏にして一念三千の成仏にあらざれば有名無実の成仏往生なり、挙一例諸と申して竜女が成仏は末代の女人の成仏往生の道をふみ

あけたるなるべし」と。

民主主義の根本原理、実義は、絶対に、大仏法にのみあると主張するものである。偏頗（へんぱ）なる思想、低級なる哲学は、必ず、なんらかの犠牲をともなうものである。ゆえに、民主主義の、根本的理念とは、いいきれないのである。

戦後、民主主義は、時代の代名詞とされてきた。男女平等も、大いに叫ばれている。これこそ、偉大なる人類の進歩であり、理性の勝利である。だが、現実には、たんなる有名無実となり、その本質は、真剣に解明されぬまま流されている。いまだ、封建性にしばられ、あるいは、形のみの女性解放に終始しているといっても過言ではあるまい。

真の男女平等は、男女ともに、人格の確立をなし得て初めていいうる。したがって、男女平等は、真実の人間形成の根本法たる、日蓮大聖人の仏法を土台として成立することを強調してやまない。

阿仏房御書（一三〇四㌻）に「末法に入って法華経を持つ男女の・すがたより外には宝塔なきなり、若し然れば貴賤上下をえらばず南無妙法蓮華経と・となうるものは我が身宝塔にして我が身又多宝如来なり」と。宝塔とは、尊厳なる生命の当体である。大御本尊を根本としたときには、男女ともに、その身が宝塔とあらわれる。すなわち男女ともに、妙法の当体であり、平等に最高の幸福境涯を享受（きょうじゅ）できるとの仰せなのである。

諸法実相抄（一三六〇㌻）に「末法にして妙法蓮華経の五字を弘めん者は男女はきらふべからず、皆地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目なり」と。

大聖人の仏法を弘める男女は、ともに地涌の菩薩であり、苦に束縛（そくばく）されない、常楽我浄（じょうらくがじょう）の生命の当体であるとの仰せである。信心によって、生命が清浄となり、人生観、社会観、世界観の眼が開かれゆく。これ真の自我の確立である。そして男女ともに協力し合い、補い合い、それぞれの立ち場で幸福なる人生を歩んでいくことこそ、真の平等であると確信する。

第七　言論未訖の事

本文

第七言論未訖の事

御義口伝に云く此の文は無明即法性の明文なり、其の故は智積難問の言未だ訖らざるに竜女三行半の偈を以て答うるなり、難問の意は別教の意なり無明なり竜女の答は円教の意なり法性なり、智積は元品の無明なり竜女は法性の女人なり仍て無明に即する法性法性に即する無明なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは言論未訖なり、時とは上の事の末末の事の始なり時とは無明法性同時の時なり南無妙法蓮華経と唱え奉る時なり、智積菩薩を元品の無明と云う事は不信此女の不信の二字なり不信とは疑惑なり疑惑を根本無明と云うなり、竜女を法性と云う事は我聞大乗教の文なり竜女とは竜は父なり女は八歳の娘なり竜女の二字は父子同時の成仏なり、其の故は時竜王女の文是なり既に竜王の女と云う間竜王は父なり女とは八歳の子なり、されば女の成仏は此の品にあり父の竜の成仏は序品に之れ在り、有八竜王の文是なり、然りと雖も父子同時の成仏なり序品は一経の序

なる故なり、又聞成菩提とは竜女が智積を責めたる言なりされば唯我が成仏をば仏御存知あるべしとて又聞成菩提唯仏当証知と云えり苦の衆生とは別して女人の事なり、此の三行半の偈は一念三千の法門なり遍照於十方とは十界なり、殊には此の八歳の竜女の成仏は帝王持経の先祖たり、人王の始は神武天皇なり神武天皇は地神五代の第五の鵜葺葺不合尊の御子なり此の葺不合尊は豊玉姫の子なり此の豊玉姫は沙竭羅竜王の女なり八歳の竜女の姉なり、然る間先祖法華経の行者なり甚深甚深云云、されば此の提婆の一品は一天の腰刀なり無明煩悩の敵を切り生死愛着の縄を切る秘法なり、漢高三尺の剣も一字の智剣に及ばざるなり妙の一字の智剣を以て生死煩悩の縄を切るなり、提婆は火炎を顕し竜女は大蛇を示し文殊は智剣を顕すなり仍って不動明王の尊形と口伝せり、提婆は我等が煩悩即菩提を顕すなり、竜女は生死即涅槃を顕すなり、文殊をば此には妙徳と翻ずるなり煩悩生死具足して当品の能化なり。

語訳

言論未訖　提婆品（四三一ページ）に「言論未だ訖らざる時に、竜王の女、忽に前に現じて」とある。

智積難問の言　文殊が竜女の成仏を述べたのに対し、智積菩薩が難問したことば。大要次のようなことである。すなわち釈尊は多くの難行苦行、菩薩道を行じて仏になった。しかるに、畜身で女人の身である、竜女が須臾のあいだに仏になるなどとは、信ずることができないというのである。

竜女三行半の偈　智積の難問がまだおわらないうちに、竜女が三行半の偈をもって答えるのである。すなわち「深く罪福の相を

達して、偏く十方を照らしたもう、微妙の浄き法身、相を具せること三十二、八十種好を以って、用って法身を荘厳せり、天人の戴仰する所、竜神も咸く恭敬す、一切衆生の類い、宗奉せざる者無し、又聞いて菩提を成ずること、唯仏のみ当に証知したもうべし。我大乗の教を聞いて苦の衆生を度脱せん」の文。

難問の意は別教の意なり　智積の難問の意味するところは、釈尊は難行苦行し幾多の菩薩道を行じて、ようやく仏になったというのであり、これは歴劫修行を意味するもので、別教の意である。

竜女の答は円教の意なり　竜女の答えは自己の即身成仏のことであり、また「我大乗の教を聞いて、苦の衆生を度脱せん」と仏の境涯にたって答えているので、円教の意である。

時とは上の事の末末の事の始なり　「言論未だ訖らざる時に」の時とは、「上の事」すなわち智積難問の終わりであり、「末の事」すなわち竜女の答えの始めである。智積の難問は無明、九界であり、竜女の答えは法性、仏界であるから、無明法性体一、九界即仏界を表わす。したがって時とは無明が法性と転じ、九界即仏界と開く瞬間である。

智積　智積菩薩。多宝如来に従って法華の会座にきている。提婆品（四二六ページ）に「時に下方の、多宝世尊の所従の菩薩、名を智積と曰う。多宝仏に啓さく、当に本土に還りたもうべし。釈迦牟尼仏、智積に告げて曰わく、善男子、且く須臾を待て。此に菩薩有り、文殊師利と名づく。与に相見るべし。妙法を論説して、本土に還るべし」とある。

我聞大乗教　提婆品（四三一ページ）の偈の文。「我大乗の教を聞いて、苦の衆生を度脱せん」と。大乗の教とは法華経、末法では文底下種の南無妙法蓮華経のこと。聞くとは開宣のこと。苦の衆生はこの場合、別して女人をさす。すなわち竜女が女人成仏を示しているのである。

有八竜王　序品第一（一二一ページ）に「八竜王有り、難陀竜王、跋難陀竜王、娑伽羅竜王、和修吉竜王、徳叉迦竜王、阿那婆達

多竜王、摩那斯竜王、優鉢羅竜王等なり。各、若干百千の眷属と倶なり」とある。

又聞成菩提・唯仏当証知・遍照於十方　前に引用した竜女の三行半の偈の文。

神武天皇　人皇第一代の天皇。諱は神日本磐余彦尊。天祖大日霊尊より第五代、彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊の皇子。母を豊玉姫。豊玉姫は、海神豊玉彦つまり沙竭羅竜王のむすめで、竜女の姉であるとされている。古事記、日本書紀によれば、神武天皇は日向国高千穂宮を出、海路浪速を経て紀伊に上陸、長髄彦等を平定して、大和国の橿原宮で即位。明治以降この年を紀元元年とした。在位七十六年で崩御したといわれる。

鵜葺草不合尊　日本神話における神氏十二代神のひとり。すなわち、天神七代と地神五代の最後にあたる地神五代の神。その母、豊玉姫は、海辺のなぎさに、鵜の羽を萱にして、産殿を造られていたが、その産殿が、まだ葺き合えないうちに子を生んだ。よって、その子を鵜葺草葺不合尊と名づけたのである。（古事記）

一天の腰刀　一天とは全世界、広くは大宇宙。腰刀は腰に帯びる刀のこと。武士は身を守るため、つねに腰に刀を帯びた。一天の腰刀で、煩悩・生死を断ち切る妙法の智剣を意味する。

漢高三尺の剣　漢高とは漢の高祖・劉邦で、漢高三尺の剣とは、漢の高祖の威光が天下におよんだ故事。和漢朗詠集に、「漢高三尺の剣は唯ら諸侯を制す、張良一巻の書は立に師傅に登る」とある。

不動明王の尊形　不動明王は剣をもち、身に猛焔がある。剣は、智剣を意味し、智剣は能く三毒の悪竜を摧滅することを表わすのである。したがって提婆の火炎、竜女の大蛇、文殊の智剣は、不動明王の尊形を表わす。

通解

提婆品（四三一ページ）に「言論未だ訖らざる時に、竜王の女、忽ちに前に現じて」とある文である。

御義口伝には、次のように仰せである。この文は無明即法性の明文である。なぜかならば、智積が竜女の成仏を疑った問いを終えないうちに、竜女が三行半の偈をもって答えたので、その智積の非難した問いは即身成仏、女人成仏を疑うものであり、別教のこころをあらわし、無明、すなわち迷いである。竜女の答えは即身成仏、女人成仏を示すもので、法華円教のこころをあらわし、法性、すなわち悟りである。智積は妙法の力を信ずることのできないという根本の迷いであり、竜女は仏界を示した女人である。よって智積の問いが終わらないうちに竜女が答えたというのは、無明に即する法性であり、法性に即する無明を顕わしたものである。

今、日蓮大聖人およびその門下の、南無妙法蓮華経と唱えるものは、言論未訖のように、即座に無明即法性、すなわち九界即仏界なのである。「言論未だ訖らざる時」の時とは、上の事、すなわち智積の問いの終わりであり、末の事、すなわち竜女の答えの始めであって、ゆえに時とは無明（迷い、九界）と法性（悟り、仏界）が同時であるという時を示すのである。すなわち南無妙法蓮華経と唱え、九界即仏界と開く瞬間の時をさすのである。

智積菩薩を根本の迷いというのは、「此の女の須臾の頃に於いて、便ち正覚を成ずることを信ぜじ」と智積がいった、その「不信（信ぜじ）」をもっていうのである。不信とは疑うということであり、疑うということは根本の迷いなのである。竜女が悟りであるというのは、「我れ大乗の教を聞いて……」といった文によるのである。竜女についていうなら、竜は父の娑竭羅竜王であり、女とはその八歳になる娘である竜女である。竜女の二字は父子同時の成仏をいうのである。そのゆえは「時に竜王の女」とある文がそれである。

竜王とは父であり、女とは八歳の子である。ゆえに女の成仏はこの提婆品に説かれているのであり、父の竜王の成仏は序品にあるのである。これは序品に「有八竜王」とあって娑竭羅竜王を含めた八竜王等が、法華の会座に連なっているからである。しかし父子同時の成仏である。序品は法華一経の序であるゆえである。「又聞いて菩提を成ずること」とは、竜女が智積を責めた言である。ゆえに我が成仏を仏は知っているのであると、竜女は「又聞いて菩提を成ずること唯仏のみ当に証知したもうべし」といったのである。「苦の衆生を度脱せん」といった苦の衆生とは、別しては女人のことである。この竜女の三行半の偈は、一念三千の法門を顕わしている。「徧く十方を照らしたもう」は、十界を照らすことをいうのである。

ことにこの八歳の竜女の成仏は、国家の元首、主権者が法華経をたもつ先例である。人王の始めは神武天皇であり、神武天皇は地神第五代の鵜萱葺不合尊の子である。この鵜萱葺不合尊は豊玉姫の子であり、豊玉姫は娑竭羅竜王の娘であり、竜女の姉である。ゆえに人王の先祖は法華経の行者である。このことには深い意義があるのである。ゆえにこの提婆品は、一天の腰刀なのである。無明や煩悩という敵を切り、生死の苦しみを離れられない縄を切る秘法なのである。漢の高祖の、絶大な威力を示した三尺の剣も、妙の一字の剣には及ばないのである。妙の一字の智剣で、生死の苦しみ、煩悩の迷いの縄を切るのである。提婆は火炎を表わし、竜女は大蛇を示し、文殊は智剣を表わすのであって、これは不動明王の尊形を形作るのであるとの口伝である。提婆はわれわれの煩悩が即菩提になることを表わし、竜女はわれわれの生死の苦しみが即涅槃、成仏の境涯になることを表わすのである。文殊とは梵語で、妙徳と翻訳するのであって、煩悩も生死もその中に具していて、此の品における能

化の立ち場である。

講義

言論未訖とは、無明即法性ということである。総勘文抄（五七〇ページ）には、無明と法性との関係を鏡にたとえて、次のように説いている。

「我が心の鏡と仏の心の鏡とは只一鏡なりと雖も我等は裏に向って我が性の理を見ず故に無明と云う、如来は面に向って我が性の理を見たまえり故に明と無明とは其の体只一なり鏡は一の鏡なりと雖も向い様に依って明昧の差別有り鏡に裏有りと雖も面の障りと成らず只向い様に依って得失の二つ有り相即融通して一法の二義なり、化他の法門は鏡の裏に向うが如く自行の観心は鏡の面に向うが如し化他の時の鏡も自行の時の鏡も我が心性の鏡は只一にして替ること無し鏡を即身に譬え面に向うをば成仏に譬え裏に向うをば衆生に譬う鏡に裏有るをば性悪を断ぜざるに譬え裏に向う時・面の徳無きをば化他の功徳に譬うるなり衆生の仏性の顕れざるに譬うるなり」

無明とは、鏡の裏のごとく、それによって自己を映し出すことはできない、すなわち、わが身が一念三千の当体であるとは自覚できない。したがって無明を根本とした人生は、なんの確固たる指針もなく、暗きより暗きに入りゆく迷いの人生である。法性とは、鏡の面のごとく、それによってわが身は一念三千の当体であることが浮き彫りにされるのである。したがって、法性を根本にすれば、仏界に照らされ、いっさいを如実知見し、ゆ

うゆうたる人生を歩むのである。

無明と法性は鏡の裏と面のごとく一体不二であるが、法性がかくされ無明のみ支配する生活は不幸であり、悲哀である。だが「自行の観心は鏡の面に向うが如し」と仰せのごとく、大御本尊を信じて南無妙法蓮華経と唱えるならば、無明は即法性と転じて、法性が根底となり、無明は冥伏し、幸福境涯に住することができるのである。また無明即法性と転ずるのは、われわれの信心の一念の中にあり、瞬間瞬間の生命活動にあると確信すべきである。それがまた言論未訖なのである。ゆえに本文には「今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは言論未訖なり、時とは上の事の末末の事の始なり時とは無明法性同時の時なり南無妙法蓮華経と唱え奉る時なり」と仰せられているのである。

信心を別にして、一般的にみても無明即法性に通ずる姿はある。たとえば、科学の発展などは、たえず無明即法性の連続であった。ある科学者が、自分の研究に没頭し、なんとか納得したい、新事実を発見したいと悩む。この状態は無明である。だがある瞬間に発見できた場合、その瞬間は無明即法性ではないか。無明を法性と開いていくなかに人類の進歩がある。迷いから迷いへ——それは進歩ではなく退歩である。一個人においても同様である。無明を即法性と開いていくなかに、その人の無限の発展がある。絶えざる発展、自己形成、そこには、絶えざる弱き自己、迷いの自己との戦いがある。だが題目を唱えない人生は、所詮無明に支配された人生であり、自分で自分をどうすることもできないのである。ただ大御本尊を信じ、題目を唱えた人生のみが、永久に行き詰まることなく発展があり、未来があり、建設があることを知るべきである。

第八　有一宝珠の事

本文

第八有一宝珠の事　文句の八に云く一とは珠を献じて円解を得ることを表すと。御義口伝に云く一とは妙法蓮華経なり宝とは妙法の用なり珠とは妙法の体なり、妙の故に心法なり法の故に色法なり色法は珠なり心法は宝なり妙法とは色心不二なり、一念三千を所表して竜女宝珠を奉るなり、釈に表得円解と云うは一念三千なり、竜女が手に持てる時は性得の宝珠なり仏受け取り給う時は修得の宝珠なり、中に有るは修性不二なり、甚疾とは頓極・頓速・頓証の法門なり則為疾得無上仏道なり、神力とは神は心法なり力とは色法なり観我成仏とは舎利弗竜女が成仏と思うが僻事なり、我が成仏ぞと観ぜよと責めたるなり、観に六則観之れ有り爰元の観は名字即の観と心得可きなり、其の故は南無妙法蓮華経と聞ける処を一念坐道場成仏不虚也と云えり、変成男子とは竜女も本地南無妙法蓮華経なり其の意経文に分明なり。

語訳

有一宝珠　提婆品（四三二ページ）に「爾の時に竜女、一つの宝珠有り。価直三千大千世界なり。持って以って仏に上る。仏即ち之を受けたもう。竜女、智積菩薩、尊者、舎利弗に謂って謂わく、我宝珠を献る。世尊の納受、是の事疾しや不や。答えて言わく、甚だ疾し。女の言わく、汝が神力を以って、我が成仏を観よ。復、此れよりも速かならん」とある。竜女の成仏を説いたところで、舎利弗が女身である竜女の成仏に疑問をもった時、竜女が釈迦仏に宝を献上して、成仏を表わし、舎利弗の疑問を除いた。文句第八に「珠を献じて円解を得るを表わす。円珠は其円因を修得するを表わす、仏にたてまつるは、これ因を将て果を剋するなり。仏の受けたもうこと疾きとは、果をうることすみやかなるなり、これすなわち一念に道場に坐して成仏すること虚しからざるなり」とある。すなわち一の宝珠とは、事の一念三千の妙法を表わす、宝珠を竜女がもつことは、竜女の生命にそなわる理性の一念三千であり、仏が受け取ったのはその一念三千を証得し、即身成仏したことを表わす。

性得の宝珠　修得の宝珠に対していう。提婆品で竜女が釈尊にたてまつる宝珠をさす。宝珠は仏性をいい、竜女がその生命に具している性質であるので性得という。九界であり、無明であり、迷いである。

修得の宝珠　竜女が持っている時は「性得の宝珠」で、仏が納受して竜女の成仏を決めたことは「修得の宝珠」である。理の上で仏界を具しているのではなく、仏道修行によって、現実に仏界を顕現することである。仏界であり、法性であり、悟りである。

修性不二　妙楽のたてた十不二門の一つ。修得と性得が一体不二であること。修善修悪は性善性悪から出る。修によって性を開発し、性に基づいて修がある。相互に融通して不離の関係をもっている。九界即仏界であり。無明法性体一を表わす。

十不二門については、玄義籤第十四に「一には色心不二門、二には内外不二門、三には修性不二門、四には因果不二門、五には染浄不二門　六には依正不二門、七には自他不二門、八には三業不二門、九には権実不二門、十には受潤不二門なり」とある。

頓極・頓速・頓証　頓とはすみやか、極とは極果のこと。すなわち直達正観、即身成仏のことである。頓速、頓証も同じ。爾前経では歴劫修行をたて、菩薩が六度万行を修していくことが成仏の道であると説いた。しかし法華経の序分・無量義経では、「速疾頓成」を説いて歴劫修行を否定し、提婆品では竜女の即身成仏が顕われて現証を示し、寿量品の最後にも「速成就仏身」と衆生の即身成仏を説いている。しかし釈迦仏法では熟益・脱益の機根の衆生が対象であり、法門も、やはり熟脱の法門である。末法における文底下種仏法においては、御本尊を受持して題目を唱えるならば、いかなる人であっても、例外なく、差別なく即身成仏できうるのである。

観我成仏　提婆品（四三三㌻）に「汝が神力を以って、我が成仏を観よ。復、此れよりも速かならん」とある。教相からいえば「我が成仏」は竜女の成仏であるが、観心では竜女にとどまらず、竜女にむかって問いを発した舎利弗自身の成仏であり、一切衆生自身の成仏であると確信することをいう。竜女の成仏がなければ舎利弗の成仏もありえないゆえである。

六則　天台の立てた六即のこと。すなわち理即、名字即、観行即、相似即、分真即、究竟即である。

一念坐道場成仏不虚也　先に引用した文句の八の文のうち「これすなわち、一念に道場に坐して成仏すること虚しからざるなり」とある文。

変成男子　提婆品（四三三㌻）に「当時の衆会、皆竜女の、忽然の間に変じて男子と成って、菩薩の行を具して、即ち南方無垢世界に往いて、宝蓮華に坐して、等正覚を成じ、三十二相、八十種好あって、普く十方の一切衆生の為に、妙法を演説するを見る」とある。この変成男子は爾前経に説かれる改転の成仏ではなく、即身成仏を示すものである。

通解

提婆品（四三二ページ）に「その時に竜女、一つの宝珠有り」云云とあるところの御義口伝である。天台の文句の八には一つの宝珠の一とは、その珠を仏に献じて円解を得ることを表わすと説いている。

御義口伝には次のように仰せである。一とは妙法蓮華経である。宝珠の宝とは珠の値打ちを示すゆえに妙法の働きであり、宝珠の珠とは妙法の体そのものである。妙のゆえに心法であり、法のゆえに色法である。色法は珠であり、心法は宝である。ゆえに妙法は色心不二を示すのである。一念三千を表わして竜女が宝珠を仏に奉るのである。文句の八に「円解を得ることを表す」というのは一念三千の法門をいうのである。竜女がまだ宝珠を手に持つ時は、性得すなわち我が生命に具しているという理の上の宝珠であり、仏がそれを受けた時は、修得、すなわち実際に生命の上に具現した事の上の宝珠である。その中に、修得と性得が不二である、すなわち修性不二門を示しているのである。竜女が仏に宝珠を渡したのを舎利弗が「甚だ疾し」といったのは、直達正観、即身成仏の法門のことをいうのである。宝塔品に「則ち為れ疾く、無上の仏道を得たり」（四一九ページ）とあるのと同じである。竜女が舎利弗に「汝が神力を以って、我が成仏を観よ」（四三三ページ）といった神力とは、神は心法で力は色法である。

「我が成仏を観よ」とは、舎利弗が、その成仏が竜女の成仏であると思うのは間違いであって、舎利弗自身の成

仏であると観ぜよと竜女が責めた言である。観に六即の観がある。ここでの観は、名字即の位の観である。そのゆえは、南無妙法蓮華経と聞いたことがすでに、文句の八に「一念に道場に坐して成仏すること虚しからざるなり」とあるように、成仏だからである。「竜女の、忽然の間に変じて男子と成って」とあるのは、竜女もその本地は南無妙法蓮華経であるということである。その意は経文にはっきりと現われているのである。

講義

日蓮大聖人の仏法は、頓極・頓速・頓証の法門である。すなわち、直達正観の法であり、即身成仏の法である。本因妙抄（八七七㌻）に「文の底とは久遠実成の名字の妙法を余行にわたさず直達の正観・事行の一念三千の南無妙法蓮華経是なり」と。直達正観とは何か。また頓極、頓速、頓証とは何か。それは信心すれば、ただちに仏であり、最高の幸福境涯にいたるということである。

最高の仏法は、瞬間の生命を説き明かしている。釈迦仏法のように時間的経過を追うのでもなければ、遠きかなたの理想郷に幸福を求めるものでもない。持妙法華問答抄（四六六㌻）に「命已に一念にすぎざれば仏は一念随喜の功徳と説き給へり」と。また十字御書（一四九二㌻）に「今日本国の法華経をかたきとしてわざわいを千里の外よりまねきよせぬ、此れをもってをもうに今又法華経を信ずる人は・さいわいを万里の外よりあつむべし、……法華経を信ずる人は・せんだんに・かをばしさのそなえたるがごとし」と。大御本尊を信じ、南無妙法蓮華経

と唱える瞬間の生命に、あらゆる福運、功徳を集積できうるのである。

逆に信心のない人は、ただちに地獄なのである。日達猊下は「もし信心が断えた時は、即座に地獄である」と仰せられている。だんだんと地獄に落ちるのではない。たとえ形はどうあろうと、生命の本質はすでに地獄である。なんと生命の峻厳であり、仏法のきびしいことか。

次に「観我成仏とは舎利弗竜女が成仏と思うが僻事なり、我が成仏ぞと観ぜよと責めたるなり」とは、竜女の成仏は即舎利弗の成仏になるのであり、竜女が成仏しなければ、舎利弗としても成仏できないと責めたことを意味する。この文を、われわれの信心の立ち場から読めば、竜女の成仏とは、ほかでもない己れ自身の成仏を意味するということである。竜女の成仏は挙一例諸といって、あらゆる衆生を代表してあげられた一例にすぎない。仏法には例外がない。経に「若有聞法者無一不成仏」（一八三㌻）と。「若し法を聞くこと有らん者は」とは大御本尊を信ずることである。「一りとして成仏せずということ無けん」とは、万人が一人ももれなく成仏できるということなのである。

たとえ、今は貧乏であろうと、病身であろうと、また不遇の身であろうと、ひとたび大御本尊を信ずるならばすでに大福運の持ち主であり、五年、十年、二十年経ったときには、その証拠は歴然としてくるのである。種を蒔き苗が次第に生成し大樹になり、空に聳えゆくがごとくに。これ末法の冥益である。

勧持品十三箇の大事

勧持品十三箇の大事

勧持品十三箇の大事

第一　勧持の事

本文

第一勧持の事

御義口伝に云く勧とは化他・持とは自行なり南無妙法蓮華経は自行化他に亘るなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経を勧めて持たしむるなり。

語訳

勧持　勧とは、勧めることで化他、持とは、持つことで自行になる。

南無妙法蓮華経は自行化他に亘るなり　三大秘法抄（一〇二二ページ）には「題目とは二の意有り、所謂正像と末法となり、正法には天親菩薩・竜樹菩薩・題目を唱えさせ給いしかども自行ばかりにしてさて止ぬ、像法には南岳天台等亦南無妙法蓮華経

と唱え給いて自行の為にして広く他の為に説かず是れ理行の題目なり、末法に入て今日蓮が唱る所の題目は前代に異り自行化他に亘りて南無妙法蓮華経なり名体宗用教の五重玄の五字なり」とある。

通解

勧持品の勧持ということについて、御義口伝には、次のように仰せである。勧とは他に勧めることで化他であり、持とは自ら持つことであり自行である。南無妙法蓮華経は自行化他に亘るのである。今、日蓮大聖人およびその門下は、南無妙法蓮華経を勧めて、それを一切衆生に持たしめているのである。

講義

宝塔品第十一には三箇の勅宣があり、提婆品第十二には二箇の諫暁が説かれ、これにつづいて勧持品第十三では、薬王菩薩を代表とした迹化の菩薩が、いっせいに、仏の滅後において法華経を説けば、必ず三類の強敵による数々の大難をうけるであろうが、必ず仏の所属の法を弘通する旨の誓いを立てるのである。

宝塔品の三箇の勅宣については、つぶさには開目抄下（二一七―二一八ページ）にあるとおりである。要するに、釈尊が一座の大衆に向かい、三度にわたって滅後の弘経を勧進するのである。その中にも第三の勅宣には、六難九

易が説かれている。これは法華経がいかに難信難解であるか、そして滅後の弘経がいかに難事中の難事であるかを示したものであり、よほどの決意がなければ滅後の弘経はできないといましめているのである。

次に提婆品の二箇の諫暁とは、いうまでもなく提婆達多の天王如来の記別と竜女の即身成仏である。ともに法華経がいかに偉大であるかを示し、弘経の心を起こさしめようとしたのである。

宝塔品の三箇の勅宣と提婆品の二箇の諫暁とを合わせて五箇の諫暁または五箇の鳳詔等という。この五箇の諫暁をうけて、勧持品における八十万億那由佗の菩薩の弘経の誓いがあるのであり、その二十行の偈には三類の強敵の姿が克明にえがかれている。

第一類　諸の無智の人の悪口罵詈等し及び刀杖を加うる者有らん我等皆当に忍ぶべし。

第二類　悪世の中の比丘は邪智にして心諂曲に未だ得ざるを為れ得たりと謂い我慢の心充満せん。

第三類　或は阿練若に納衣にして空閑に在って自ら真の道を行ずと謂いて人間を軽賤する者有らん利養に貪著するが故に白衣の与に法を説いて世に恭敬せらるることを為ること六通の羅漢の如くならん、是の人悪心を懐き常に世俗の事を念い名を阿練若に仮て好んで我等が過を出さん、常に大衆の中に在って我等を毀らんと欲するが故に国王・大臣・婆羅門・居士及び余の比丘衆に向って誹謗して我が悪を説いて是れ邪見の人・外道の論議を説くと謂わん、濁劫悪世の中には多く諸の恐怖有らん悪鬼其身に入って我を罵詈毀辱せん、濁世の悪比丘は仏の方便随宜の所説の法を知らずして悪口し顰蹙し数数擯出せられん。

この勧持品の二十行の偈を身をもって読まれた方は、日蓮大聖人お一人であった。ゆえに、日蓮大聖人の出現

がなければ、仏の予言は ことごとく妄語となる、と諸御書に示されているのである。

開目抄上（二〇二ページ）に「而るに法華経の第五の巻・勧持品の二十行の偈は日蓮だにも此の国に生れずば・ほ殆どをど世尊は大妄語の人・八十万億那由佗の菩薩は提婆が虚誑罪にも堕ちぬべし、経に云く『諸の無智の人あって・悪口罵詈等し・刀杖瓦石を加う』等云云、今の世を見るに日蓮より外の諸僧たれの 人か法華経につけて諸人に悪口罵詈せられ刀杖等を加えらるる者ある、日蓮なくば此の一偈の未来記は妄語となりぬ、『悪世の中の比丘は・邪智にして心諂曲』又云く『白衣の与に法を説いて世に恭敬せらるること六通の羅漢の如し』此等の経文は今の世の念仏者・禅宗・律宗等の法師なくば世尊は又大妄語の人、常在大衆中・乃至向国王大臣婆羅門居士等、今の世の僧等・日蓮を讒奏して流罪せずば此の経文むなし、又云く『数数見擯出』等云云、日蓮・法華経のゆへに度度ながされずば数数の二字いかんがせん、此の二字は天台・伝教もいまだ・よみ給はず況や余人をや、末法の始のしるし恐怖悪世中の金言の・あふゆへに但日蓮一人これをよめり」と。

顕仏未来記（五〇七ページ）に「此の明鏡に付いて仏語を信ぜしめんが為に、日本国中の王臣・四衆の面目に引き向えたるに予よりの外には一人も之無し、時を論ずれば末法の初め一定なり、然る間若し日蓮無くんば仏語は虚妄と成らん、難じて云く汝は大慢の法師にして大天に過ぎ四禅比丘にも超えたり如何、答えて云く汝日蓮を蔑如するの重罪又提婆達多に過ぎ無垢論師にも超えたり、我が言は大慢に似たれども仏記を扶け如来の実語を顕さんが為なり、然りと雖も日本国中に日蓮を除いては誰人を取り出して法華経の行者と為さん汝日蓮を謗らんとして仏記を虚妄にす豈大悪人に非ずや」と。

聖人御難事（一一八九ページ）に「竜樹・天親・天台・伝教は余に肩を並べがたし、日蓮末法に出でずば仏は大妄語の人・多宝・十方の諸仏は大虚妄の証明なり、仏滅後二千二百三十余年が間・一閻浮提の内に仏の御言を助けたる人・但日蓮一人なり」と。

日蓮大聖人は、これらの御文にお示しのごとく、釈尊の経文と大聖人のお振舞いとが符合することをもって、わが身が末法の法華経の行者すなわち末法の御本仏であるとの証拠とされているのである。ゆえに勧持品こそ末法の世相を写し出してくもりなく、日蓮大聖人を御本仏なりと証明づける明鏡である。

開目抄下（二三三ページ）に「日蓮といゐし者は去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ、此れは魂魄・佐土の国にいたりて返年の二月・雪中にしるして有縁の弟子へをくれば恐怖をそろしくて・をそろしからず・みん人いかに・をぢぬらむ、此れは釈迦・多宝・十方の諸仏の未来日本国・当世をうつし給う明鏡なりかたみともみるべし」と。

だが、ここに実に大不思議があると思う。それは、釈尊と日蓮大聖人とは約二千年の隔たりがある。二千年と一口にいうが、それはまことに長い期間である。今の世に、だれびとが、二千年以後の世相を、予言できる人があろうか。みずからの身にひきあてて考えれば、いかに釈尊が偉大な聖人であったかがわかろう。しかも、その一つ一つの文が、寸分も狂いなく的中しているとは不思議であり、実に偉大なことだと思う。釈尊の三か月後の涅槃も的中し、付法蔵経の予言も的中し、また大集経の五五百歳の予言も的中、そしてこの勧持品の予言もみごと的中しているのである。聖人知三世事（九七四ページ）に「教主釈尊既に近くは去って後三月の涅槃之を知り遠く

は後五百歳・広宣流布疑い無き者か、若し爾れば近きを以て遠きを推し現を以て当を知る如是相乃至本末究竟等是なり」と。

日蓮大聖人は、釈尊よりも百千万億倍すぐれた御本仏である。大聖人に相対すれば、迹仏である、釈尊は太陽の光りに照らされて、ささやかな光りをはなつ、月のごとき存在なのである。下山御消息（三六三㌻）には「教主釈尊より大事なる行者―日蓮」と仰せられ、諫暁八幡抄（五八九㌻）には、釈尊を月にたとえ、日蓮大聖人を日にたとえられている。また法蓮抄（一〇四四㌻）には釈尊を一劫の間、三業相応で供養する功徳よりも、末法の法華経の行者を戯論に一言、あたかも継母が継子をほめるように、心からではなくとも、賛嘆し供養する功徳のほうが百千万億倍すぐれていると仰せられている。

その大聖人の未来記如何。顕仏未来記（五〇八㌻）に「問うて曰く仏記既に此くの如し汝が未来記如何、答えて曰く仏記に順じて之を勘うるに既に後五百歳の始に相当れり仏法必ず東土の日本より出づべきなり」と。また報恩抄（三二九㌻）に「日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華経は万年の外・未来までもながるべし（流布）」と仰せられている。

現在、創価学会が、広宣流布のために邁進しているのは、とりもなおさず、この大聖人の仰せを実現せんがためであり、日本の繁栄も、世界の平和も、また末法万年尽未来際までの恒久平和も、われわれの手によって実現できると確信する。

第二　不惜身命の事

本文

第二不惜身命の事

御義口伝に云く身とは色法・命とは心法なり事理の不惜身命之れ有り、法華の行者田畠等を奪わるは理の不惜身命なり命根を断たるを事の不惜身命と云うなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は事理共に値うなり。

語訳

不惜身命　勧持品第十三（四三五ページ）に「教化すべきこと難しと雖も、我等当に大忍力を起して、此の経を読誦し、持説し、書写し、種種に供養して、身命を惜しまざるべし」とある。薬王菩薩等の二万の菩薩が滅後の流通を誓ったことばで、命が

けで正法を弘めること。同じ勧持品の「我不愛身命」と同じ。（第十三但惜無上道の事、参照）日興遺誡置文（一六一八ページ）に「未だ広宣流布せざる間は身命を捨て随力弘通を致す可き事」と、また寿量品に「不自惜身命」とある。大御本尊を渇仰し、広宣流布に身命を惜しまない信心が必要である。この不惜身命に事と理がある。

事理の不惜身命　「事」の不惜身命とは、実際に生命を断たれようとも正法を護持することである。「理」の不惜身命とは、たとえ身命をたたれるようなことがなくても、生命を養うべき「田畠」等を奪われるのは、命根を断つのと同じ道理であるゆえに、理の不惜身命というのである。現在でいえば、たとえば折伏したために、会社の上役からにくまれ、月給が減らされるとか、会社を追放されるとか、また家族の反対にあい、家を出される等の場合にあたる。

通解

勧持品の「我等当に大忍力を起して、此の経を読誦し、持説し、書写し、種種に供養して、身命を惜しまざるべし」のところである。

御義口伝には、次のように仰せである。身命の身とは色法、命とは心法であり、身命で色心不二の生命をさすのである。不惜身命に事と理の不惜身命がある。法華の行者が田畠等を奪われるのは、理の不惜身命であり、命根を断たれるのは、事の不惜身命というのである。今、日蓮大聖人およびその門下が、南無妙法蓮華経と唱え奉り、仏道修行に励むならば、事の不惜身命、理の不惜身命、ともに値うのである。

講義

不惜身命とは、寿量品の「不自惜身命」と同じ意味である。日寛上人は、寿量品の「一心欲見仏、不自惜身命」の文を信行に分けて、「一心欲見仏」を信と立て、「不自惜身命」を行と立てられている。すなわち、大御本尊を信じて、唱題し、折伏にはげむことが、不惜身命になるのである。信心し、折伏をやり通していけば、必ず難がある。日蓮大聖人は兄弟抄（一〇八七ページ）に、天台大師の摩訶止観の第五の文を引いて、次のようにこの原理を説かれている。

「此の法門を申すには必ず魔出来すべし魔競はずは正法と知るべからず、第五の巻に云く『行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競い起る乃至随う可らず畏る可らず之に随えば将に人をして悪道に向わしむ之を畏れば正法を修することを妨ぐ』等云云、此の釈は日蓮が身に当るのみならず門家の明鏡なり謹んで習い伝えて未来の資糧とせよ」

難がなければ、正法とはいえないというのが大聖人の仰せである。

日蓮大聖人のお振舞いは、一生涯、不惜身命のお姿であった。小松原の法難、竜の口の法難、伊豆、佐渡への二度の流罪等々である。またお弟子については、小松原の法難のさいの鏡忍房、工藤吉隆、熱原の法難のさいの神四郎、弥五郎、弥六郎等の三烈士等も不惜身命の姿であった。また第二祖日興上人のご一生も、本門弘通のた

めに身命をなげうって戦われた。第三祖日目上人も、国家諫暁のために、その尊き生命を惜しまれなかった。

また、以来日蓮正宗には、不惜身命で戦ってきた幾多の歴史がある。江戸時代の、尾張法難をはじめとした、金沢の法難、仙台の法難等、皆そうであった。近くは、初代牧口会長は、官憲のために捕えられ、牢死なされた。まさに不惜身命であった。第二代戸田会長のご一生も不惜身命の姿であった。また、現在創価学会員が、一人でも多くの人を救わんと、いかなる反対も圧迫ものともせず、心血を注ぐ姿は不惜身命ではないか。

だが、現在は、身命におよぶような難などは、ほとんどない。それは今、化儀の広宣流布は眼前にあり、大御本尊の大功徳は、中天の太陽のごとく光り輝き、われわれは護られているからである。しかし必ず、それぞれの立ち場で難があるのは当然である。難がなければ、宿命転換できず、真実の幸福も確立できないのである。難があったときが大事である。成仏するか地獄に落ちるか、その時の一念が決定する。難を乗り越えたときは、台風のあとの晴天のごとく、真実の幸福感にみちみちてくるのである。

したがって大聖人の、難があった時の指導は実にきびしい。大聖人が佐渡御流罪中にあらわされた如説修行抄（五〇四㌻）には「一期を過ぐる事程も無ければいかに強敵重なるとも・ゆめゆめ退する心なかれ恐るる心なかれ、縦ひ頸をば鋸にて引き切り・どうをばひしほこを以て・つつき・足にはほだしを打ってきりを以てもむとも、命のかよはんほどは南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経と唱えて唱へ死に死るならば……」等と仰せられ、また、熱原の法難のさいの指導書たる聖人御難事（一一九〇㌻）には「彼のあつわらの愚癡の者ども・いゐはげまして・をどす事なかれ、彼等にはただ一えんにおもい切れ・よからんは不思議わるからんは一定とをもへ、ひだ

腹るしとをもわば餓鬼道ををしへよ、さむしといわば八寒かん地獄ををしへよ、をそろししと・いわばたかに鷹あへるきじねこ雉猫にあえるねずみ鼠を他人とをもう事なかれ」といわれている。

このようなきびしい指導も、所詮は、成仏させたい、幸福をつかませたい、との慈悲であり、厳父の愛なのである。もしも、われわれが、難がこわいからといって、難をうけないように信心をやめれば、難がなくなるかといえば、決してそうではない。信心して難をうける以上の大難をうけなくてはならない。

御本尊を拝んでの難は、罪障消滅され、宿命転換されていく、成仏のためへの難である。これは聖人御難事（一一九〇ページ）に「設えば灸治のごとし当時は痛いたけれども後の薬なればいたくていたからず疼」と仰せあるごとく、喜びであり、楽しみである。だが、信心を破ってうけた難は、雪だるま式に、それがまた因となって地獄に落ち、不幸を招くだけである。したがって、われわれは、大御本尊を根本として、日蓮正宗の大信者として、創価学会員として、最後の最後まで、一生成仏のため、広宣流布のために戦っていこうではないか。

不惜身命について、さらに一言したい。信心に限らず、一般に、これから何かしようとしている人の心は、はずんでいる。またその姿は美しくもある。とくに、いかなる困難とも戦い、自己の目標にうち進んでいく姿は、最美である。発明家が研究に没頭している姿も、また、医者が病人をなおすために、懸命になっている姿も、また学者が真理の探究に身をうちこんでいる姿も、そこには、何かを作りあげたい、発見しよう、という意欲があふれている。

ある目標に向かって、身命をうちこんでいくことは、不惜身命に通ずるものである。ただし目標の高低、浅深、

善悪のいかんが問題である。浅きもの、また低級なもの、誤れるものに身命をなげうつほど、あわれなことはない。最高のものに帰命（きみょう）していく人生でなければならない。結論すれば、大御本尊に帰命することであり、自己の一生成仏、また全世界の平和のために、身命を賭（と）して戦うことが、最高の人生であり、真実最高の不惜身命なのである。

不惜身命の精神に立った人ほど強いものはない。真実の安楽であり、いかに、他からこわそうとしても、こわすことはできない。誰を恐れる必要もない。誰にこびへつらう必要もない。巌（いわお）のごとく堂々としており、太陽のごとく光輝（こうき）にみちた人生行路である。

第三　心不実故の事

本文

第三心不実故の事

御義口伝に云く心不実故とは法華最第一の経文を第三と読み最為其上の経文を最為其下と読みて法華経の一念三千を華厳大日等に之れ有りと法華の即身成仏を大日経に取り入るるは此等は皆心不実故なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は心実なるべし云云。

語訳

心不実故　勧持品（四三六ページ）に「是の娑婆国の中は、人弊悪多く、増上慢を懐き、功徳浅薄に、瞋濁諂曲にして、心不実なるが故に」とある。

法華最第一の経文を第三と読み　弘法が十住心を立てて法華は真言の三重の劣と釈した邪義をいう。日蓮大聖人はこの邪義に対して「真言天台勝劣事」（一三四ページ）では大日経は法華経の七重、八重の劣であると破折されている。安然は「真言教時義」において、弘法の十住心を五つの失ありとして破折している。

最為其上　このとおりの文は見当たらないが、安楽行品（四六五ページ）に「最在其上」（最も其の上に在り）の文がある。

法華経の一念三千を華厳大日等に之れ有りと　真言宗で、大日経の「心実相」が法華経方便品の「諸法実相」に相当するという邪義を立てることをさす。日寛上人は三重秘伝抄で、大日経では記小久成（二乗作仏、久遠実成）を明かさないゆえに小乗偏真の実相であると破折されている。また華厳経の「心如工画師」の文を一念三千の文とするのに対しても、記小久成を明かさないゆえ、邪義であって、三重秘伝抄で引用するのは会入の後であるといわれている。（くわしくは三重秘伝抄の第四、第五の個所参照―富要集第三巻一九ページより）

通解

ここは、勧持品で、末法の人の性を予言して、「心不実なるが故に」と説いているところである。御義口伝には、次のように仰せである。心が不実であるということは、法華経が一切経中最第一であるのに、弘法のように第三に下し、最高である法華経を最低と読み、法華経のみに説かれている一念三千の法門を、華厳経、大日経にも説かれているとして、法華経の即身成仏の教えを大日経に盗み入れるようなことを指して、心が不実というのである。しかして、今、日蓮大聖人およびその門下の、南無妙法蓮華経と唱える者は、心が実なのである。

心不実故とは、正しきものを、正しいと見ることができない。勝れているものを、勝れていると認めない。このように、偏狭であり、低級なものに執着する心を不実というのである。わが創価学会に対し、その本質、純粋性、目的観をも知らず、我見のみで、批判し、怨嫉を抱く心などは、不実の典型である。われらの団結の強きをみては、狂人のごとく「ファッショ」という人など、特にその部類である。良き団結は、誰人も欲するところである。これ以上のうるわしき姿はないのだ。これができないところに、今日の幾多の悲劇があるのではなかろうか。一家も、会社も、労働組合も、政党も、国家も、全世界も、団結しよう団結しようと懸命に努力しているではないか。われわれが、大仏法を根底に団結しているのは、最大の模範と称賛して、当然のことなのではなかろうか。それを異常視すること自体、異常であることを知らねばなるまい。

創価学会が、オリンピック以上の、堂々たる文化祭を展開した。これを日本の誇りとし、世界の誇りとした人が幾人いたことであろうか。反対に、恐れを抱き、眉をひそめた人がいたと聞く。誠に残念なことである。しかし、時代は滔々と流れている。人々の心が、次第に、目覚めつつ動いている。必ずや、全民衆から、感謝と、尊敬と、信頼を得る日が間近かであることを、強く強く確信するものである。彼等の感情的、皮相的な批判は、これみな、「心不実故」の証明にほかならないことを、御金言に照らし、銘記していくのみである。

第四　敬順仏意の事

本文

第四敬順仏意の事

御義口伝に云く法華経に順ずるは敬順仏意なり意とは南無妙法蓮華経是なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは敬順仏意の意なり。

語訳

敬順仏意　勧持品第十三（四四〇ページ）に「時に諸の菩薩、仏意に敬順し、並びに自ら本願を満ぜんと欲して、便ち仏前に於いて、師子吼を作して誓言を発さく……」とある。仏意は仏の意で、御本尊、南無妙法蓮華経のこと。この御本尊を敬い順ずることが敬順仏意である。

通解

勧持品（四四〇ページ）に「時に諸の菩薩、仏意に敬順し……」とあるところについて、御義口伝には、次のように仰せである。法華経に順じ、南無妙法蓮華経を信ずるのは、仏意に敬順していることである。仏の意とは南無妙法蓮華経である。今、日蓮大聖人および門下が、南無妙法蓮華経と唱えることは、仏意に敬順していることを意味する。

講義

仏意の仏とは、日蓮大聖人、意とは南無妙法蓮華経であり、仏意で人法一箇の大御本尊をあらわす。経王殿御返事（一一二四ページ）に「日蓮がたましひをすみにそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ、仏の御意は法華経なり日蓮が・たましひは南無妙法蓮華経に・すぎたるはなし」と。

敬順とは、信心である。大御本尊を絶対と信じ、南無妙法蓮華経と唱えることが真の敬順仏意である。

第五　作師子吼の事

本文

第五作師子吼の事

御義口伝に云く師子吼とは仏の説なり説法とは法華別しては南無妙法蓮華経なり、師とは師匠授くる所の妙法子とは弟子受くる所の妙法・吼とは師弟共に唱うる所の音声なり作とはおこすと読むなり、末法にして南無妙法蓮華経を作すなり。

語訳

作師子吼　勧持品（四四〇ページ）に「仏前に於いて、師子吼を作して誓言を発さく……」とある。百獣の王である獅子がひとたび吼えると、他の獣類をすべて平伏する威力があるところから、衆生の迷いをすべてはらって、悟りを得させる仏の説法を

師子吼という。経王殿御返事（一一二四ページ）に「南無妙法蓮華経は師子吼の如し」とある。

通解

ここは勧持品（四四〇ページ）の「仏前に於いて、師子吼を作して誓言を発さく……」とあるところである。

御義口伝には、次のように仰せである。師子吼というのは仏の説法である。説法とは法華経、別して南無妙法蓮華経を説くことをさす。師子吼の「師」とは、師である仏が授ける妙法であり、「子」とは、弟子が受ける妙法であり、「吼」とは、師匠と弟子と、ともに唱える音声をいうのである。作とはおこすと読む。師子吼を作すとは、末法において南無妙法蓮華経を作すことをいうのである。

講義

「説法とは法華別しては南無妙法蓮華経なり」とは、種脱相対をあらわしている。すなわち、説法とは法華経であるが、別しては法華経寿量品文底の南無妙法蓮華経をさすのであるとの意味なのである。

次に「師とは……」以下の文は、師弟不二を示されたものである。「師とは師匠」とは、日蓮大聖人である。「授くる所の妙法」とは、大御本尊のことである。人法一箇を示す。「子とは弟子」とは大御本尊を信ずる者で

あり、「受くる所の妙法」とは、信心で受けとるところの妙法、すなわち、大御本尊を信じて、我が己身の大御本尊を湧現することである。「吼とは師弟共に唱うる所の音声なり」とは、師弟不二である。

また「南無妙法蓮華経を作す」とは、信心は受動ではなく、能動であるということであり、また広宣流布も他の人がやるのを待つのではなく、己れ自身がやると決めることである。戸田会長は、かつて「広宣流布は、一人の青年が命を捨てれば、必ずできる」と申され、また「青年よ一人立て」とも呼号なされた。まず第一歩は、自分みずから立つのである。それが一波が万波を呼ぶように次第にひろがっていくことは、まちがいない。われわれがやっていることは、大衆の無意識のうちにも、もっとも欲していることをしているからである。

第六　如法修行の事

本文

第六如法修行の事

御義口伝に云く如法修行の人とは天台妙楽伝教等なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは如法修行なり云云。

語訳

如法修行　勧持品（四四〇ページ）に「世尊、我等如来の滅後に於いて、十方世界周旋往返して、能く衆生をして、此の経を書写し、受持し、読誦し、其の義を解説し、法の如く修行し、正憶念せしめん」とある。諸菩薩が滅後の流通を誓う文の中のことば。如法とは、仏の教法のままということで、仏の教法のまま修行するのを如法修行という。如説修行も同じ。日蓮大聖

人の教えどおり修行するのが末法の如法修行の行者である。

通解

勧持品（四四〇ページ）で諸菩薩が「法の如く修行し、正憶念せしめん」と滅後の流通を誓う文について、御義口伝には、次のように仰せである。仏の教法のごとく修行する人とは、天台、妙楽、伝教等である。今末法においては、日蓮大聖人および門下の、南無妙法蓮華経と唱えるものが、如法修行である。

講義

如法修行の法とは思想、修行とは実践である。如法修行は、あらゆるものに通じていえることである。たとえば外道（バラモン）の如法修行についていえば、四韋陀、十八大経などの彼らの経典を、その通り実践するとすれば、それは外道の如法修行である。

戸田城聖前会長は、開目抄講義で、次のごとく述べられている。

「婆羅門においても、低い程度のものであるが、生命の本体は何ぞやという点を思考して、その得た結論を、実践活動に移したのである。ゆえに彼らは、これを極説となして、たがいに論争し、またこの法をば実践行動に

移して、一日に三度恒河にはいったり、あるいは髪を抜いたり、岩に身を投げたり、あるいは身を火にあぶって五体を焼き、あるいは裸形になり、馬を殺せば幸福になるといったり、あるいは草木を焼いたり、いっさいの木を拝んだりしたのである。これこそ、最高の仏教哲学からみれば、ほんとうの子供だましであって、なんらうるところのないのはもちろんである」と。

このように法の如く修行するといっても、その法が、低級であったり、誤れるものであったり、不合理なものであれば、それを実践したときには、ゆがんだ人間をつくりあげるだけであり、不幸を招くばかりである。またその思想が低級であり、不合理であれば、必然的にそれを行動に移すのに無理が出てくる。したがって思想と実践が次第に背離してくるのである。現在、三大秘法の南無妙法蓮華経以外のあらゆる思想が、思想と実践の背離を深刻に示している。マルクスの思想にしても、また実存主義の哲学にしても、また東洋の儒教哲学にしても、あらゆるものが、その実践において行き詰まってしまっている。

この点、ことにあわれむべきはキリスト教である。「あなたがたは、敵を愛し、人によくしてやり、また何も当てにしないで貸してやれ」（ルカによる福音書）。また「彼から利子も利息も取ってはならない。あなたの神を恐れ、あなたの兄弟をあなたとともに生きながらえさせなければならない」（レビ記）。これらの聖書の文句を、所説のごとく実践しているキリスト教徒が、はたして幾人いるであろうか。

次に、いかに最高の思想、哲学を有していても、それを実践しなければ、価値は生じないことを銘記すべきである。われわれの持つ法は、八万法蔵の真髄であり、世界最高の色心不二の生命哲学である。その実践とは、大

御本尊を信じて唱題し、折伏にはげんでいくことである。テレビのスイッチを入れ、画面に像をあらわすことは簡単であり、小さな子供にもできる。だが、そのテレビの理論というものは、きわめて複雑かつ難解なものである。大御本尊は、秘密の奥蔵であり、難信難解である。だが、われわれがそれを実践に移すときは、受持即観心となり、ただ大御本尊を信じて、唱題するだけで、真実の幸福をかち得ていくことができるのである。

第七　有諸無智人の事

本文

第七有諸無智人の事

御義口伝に云く一文不通の大俗なり悪口罵詈等分明なり日本国の俗を諸と云うなり。

語訳

有諸無智人　勧持品（四四一ページ）に「諸の無智の人の、悪口罵詈等し」とある。勧持品では諸菩薩が滅後の流通を誓う二十行の偈の中で、末法に正法の行者を迫害する三類の強敵が現われることが明かされているが、この文は、その第一類の俗衆増上慢をさす。「無智の人」とは仏法について正しい知識をもたずに、いたずらに正法の行者を迫害する謗法のものをいう。隣人等、一般社会の人々の反対がこれにあたる。法華文句記に「文に三初に一行は通じて邪人を明す即ち俗衆なり」とあり、

開目抄下（二二六㌻）には「第一の有諸無智人と云うは経文の第二の悪世中比丘と第三の納衣の比丘の大檀那と見へたり、随って妙楽大師は『俗衆』等云云」とある。

一文不通の大俗　一文不通とは、経論の一文にも通じていない無知なことをさし、大俗とはきわめて卑俗なことをいう。仏法に無知な俗人のこと。ここでは、末法における三類の強敵のうち、第一類、俗衆増上慢をいう。

通解

勧持品（四四一㌻）の「諸の無智の人の、悪口罵詈等し、及び刀杖を加うる者有らん」と、俗衆増上慢を明かす文について、御義口伝には、次のように仰せである。もろもろの無智の人とは、仏法の一文も知らない俗人のことである。正法の行者に悪口をいい、罵倒するのは、はっきりしていることである。諸とは日本国の俗衆増上慢をいうのである。

講義

この文は、第一類の俗衆増上慢のところである。この増上慢は、信心すると同時に、出てくるものである。普段は、何でもなく、心よく交わっている友人、家庭等の人が、信心のことになると、きまって反対をするもの

だ。御金言のいかに的中するかを、驚くほど、体験するものである。

しかし、いかに反対しても、大仏法には、絶対に抗しきれるものではない。猛烈なる反対者が、後で、必ず、ぞくぞく入信するのも、誠に不思議な、力ある仏法といわざるを得ない。

第八　悪世中比丘の事

本文

第八悪世中比丘の事

御義口伝に云く悪世中比丘の悪世とは末法なり比丘とは謗法たる弘法等是なり、法華の正智を捨て権教の邪智を本とせり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は正智の中の大正智なり。

語訳

悪世中比丘　勧持品（四四一ページ）に「悪世の中の比丘は、邪智にして心諂曲に、未だ得ざるを為れ得たりと謂い、我慢の心充満せん」とある。末法に法華経を弘通する者を迫害する三類の強敵のうち、第二の道門増上慢をさす。開目抄下（二二七ページ）に「第二の悪世中比丘と指さるるは法然等の無戒・邪見の者なり」とある。すなわち邪宗教の僧が正法を誹謗してくるのが

この道門増上慢にあたる。

悪世　悪い世の中、時代。五濁（劫濁、煩悩濁、衆生濁、見濁、命濁）が盛んで、謗法の充満している末法の世をさす。

劫濁とは飢饉、疫病、戦争等が起こり、時代そのものが乱れること。煩悩濁は貪、瞋、癡、慢、疑の本能の乱れ、衆生濁とは衆生そのものの濁り。見濁とは思想の濁り。命濁は生命力が弱く、病気等が多くなる生命の濁り。末法においては釈迦仏法が隠没して仏法が濁乱し、煩悩濁、見濁を引き起こし、命濁を生んで、命濁から起こる衆生濁がひろがって劫濁になっている。これが悪世末法の様相である。

通解

勧持品（四四一ページ）に「悪世の中の比丘は、邪智にして心諂曲に、未だ得ざるを為れ得たりと謂い、我慢の心充満せん」と道門増上慢を明かした文について、御義口伝には、次のように仰せである。「悪世の中の比丘」の悪世とは末法現在をさす。比丘とは、弘法等の法華誹謗の邪僧をいうのである。法華経の正しい智を捨てて、権教の、人を不幸にする邪智を本としているのである。今、日蓮大聖人およびその門下が、南無妙法蓮華経と唱えるのは、正智の中の大正智である。

講義

悪世中比丘とは道門増上慢を明かしているところである。

第二類、道門増上慢とは、既成宗教界、新興宗教界共に含まれる。すなわち、全日仏、新宗連がこれである。自宗の正義、信念を流布するを、宗教本来の使命、純粋性であることを忘却し、世法のみにとらわれ、連合しておのが企業を守らんとする、卑怯極まりなき宗団を指す。一例として、従来の日蓮宗と称する、誤れる教学を信奉し、さも大学者のごとく装い、七百年間、日蓮大聖人の正義を護持してきた、富士大石寺に対して盲評するものをいう。何の研究もなく、日蓮正宗の隆昌、創価学会の躍進に対する、批判迫害をいう。

しかし、道門増上慢は、すでに力を失っている。京都、奈良の寺々はさびれ、観光地と化し、邪宗日蓮宗の本山、身延も、すでに荒廃の極に達している。道門増上慢の盛んな時代も過ぎ去っている証拠といえよう。

わが学会の歴史からいえば、戸田城聖前会長の昭和二十六年ごろから、昭和三十年の小樽法論を境にして、誤った宗教は一段と衰えている感をもつものである。その後は、全日仏等が、墓地埋葬拒否問題等で、多少の動きをみせている程度である。新時代は、次に述べる第三類、僭聖増上慢との戦いであり、その勝利こそ、広宣流布実現の最後のくさびであると確信して止まない。

第九　或有阿練若の事

本文

第九或有阿練若の事

御義口伝に云く第三の比丘なり良観等なり如六通羅漢の人と思うなり。

語訳

或有阿練若　勧持品（四四一ジ一）に「或は阿練若に、納衣にして空閑に在って、自ら真の道を行ずと謂いて、人間を軽賤する者有らん、利養に貪著するが故に、白衣の与に法を説いて、世に恭敬せらるることを為ること、六通の羅漢の如くならん、是の人悪心を懐き、常に世俗の事を念い、名を阿練若に仮って、好んで我等が過を出さん。而も是の如き言を作さん、此の諸の比丘等は、利養を貪るを為っての故に、外道の論議を説く、自ら此の経典を作って、世間の人を誑惑す、名聞を求むるを

為っての故に、分別して是の経を説くと、常に大衆の中に在って、我等を毀らんと欲するが故に、国王大臣、婆羅門居士、及び余の比丘衆に向って、誹謗して、我が悪を説いて、是れ邪見の人、外道の論議を説くと謂わん」とある。阿練若は無事閑静処と訳し、人里離れた山寺などのこと。ここでは僭聖増上慢が、静かな山寺などにこもって人に邪法を説く姿を説いている。現在では、いたずらに民衆から遊離した学者、評論家などが、自分が何でも知っているような錯覚にとらわれ、正法を奉ずるものを軽べつし迫害したりする姿である。

第三の比丘　三類強敵のうち第三の僭聖増上慢をいう。法華文句記に「三に七行（前項で引用した文）は僭聖増上慢の者を明す、此の三の中に初は忍ぶ可し次の者は前に過ぎたり第三最も甚だし後後の者は転識り難きを以ての故に」とある。世間に信用される知識階級などが誹謗してくるのが僭聖増上慢である。

良観　鎌倉時代の律宗の僧。奈良西大寺等に学び、鎌倉へ来て極楽寺の僧となって律、真言等を弘めた。世間からは生仏のように尊敬されたが、日蓮大聖人は良観に対し、僭聖増上慢であると破折されている。極楽寺良観への御状（一七四ページ）に「良観聖人の住処を法華経に説て云く『或は阿練若に有り納衣にして空閑に在り』と……僭聖増上慢にして今生は国賊・来世は那落に堕在せんこと必定なり」とある。なお文永八年に日蓮大聖人と祈雨の勝負をしたが、雨は降らず、徹底的に負け、邪法であることを暴露した。

如六通羅漢　勧持品の僭聖増上慢の姿を説いた文（前掲）の中のことばで、「世に恭敬せらることを為うこと、六通の羅漢の如くならん」とある。六通とは六神通で、天眼通、天耳通、他心通、宿命通、神足通、漏尽通である。この六神通を得た阿羅漢（小乗の聖者）を六通の羅漢という。

通解

勧持品（四四一ページ）に「或は阿練若に、納衣にして……」と、僭聖増上慢を明かした文について、御義口伝には、次のように仰せである。この文は三類の強敵の中、第三の僭聖増上慢の邪僧を指している。極楽寺良観等がそれである。世間の人は六神通を得た阿羅漢のように、その邪僧を尊敬しているのである。

講義

広宣流布達成の前夜には必ず第三類の僭聖増上慢の出現があることは、御書に照らし明白である。この第三類の僭聖増上慢は「六通の羅漢の如く」世の中の人々から尊敬され、正法の人を批判し、迫害するのである。

したがって三類の強敵のなかでも、この第三類の僭聖増上慢が最も忍び難いのである。撰時抄（二九二ページ）にはこの勧持品の僭聖増上慢を説いた文を引かれ次のように述べられている。

「正法の強敵と申すは悪王・悪臣よりも、外道・魔王よりも、破戒の僧侶よりも、持戒有智の大僧の中に大謗法の人あるべし」と。

化儀の広宣流布が展開されつつある現在においても、この本質を備えた僭聖増上慢がさまざまな形態をとって妙法流布の活動をはばんでいる。

だが、めざめたる大衆ほど強いものはない。滔々と流れゆく大河のごとく、広宣流布への大衆の心は動き、時代はすでにその大潮流のなかに入っている。現在、僭聖増上慢の出現があることは、大聖人の御金言のとおりであり、広宣流布達成は、絶対であることを確信する。

第十　自作此経典の事

本文

第十自作此経典の事

御義口伝に云く法華経を所作して読むと謗す可しと云う経文なり云云。

語訳

自作此経典　勧持品（四四二ページ）の「自ら此の経典を作って、世間の人を誑惑す」の文。僭聖増上慢の者が、法華経の行者を誹謗していうことば。「自ら作る」とは、仏の教説によらず、自分勝手につくるということ。

通解

勧持品（四四二ページ）には、僭聖増上慢が、「自ら此の経典を作って、世間の人を誑惑す」と、法華経の行者を誹謗する姿が説かれている。御義口伝には、次のように仰せである。この文は、われわれが法華経を自分勝手に作って読んでいると、僭聖増上慢が誹謗するであろうという経文である。

講義

現在でいえば、邪宗身延派日蓮宗等が、自らの宗派の非をかくすため、三大秘法抄を偽書扱いにしたり、あるいは、御義口伝、本因妙抄、百六箇抄等を後世の偽作であるなどというのは、まさにこの文にあたるのである。

日興上人の遺誡置文（一六一七ページ）には「一、御書何れも偽書に擬し当門流を毀謗せん者之有る可し、若し加様の悪侶出来せば親近す可からざる事」とある。

さらに、本門戒壇の大御本尊に対する疑難などは、その最たるものであろう。

第十一　為斯所軽言汝等皆是仏の事

本文

第十一為斯所軽言汝等皆是仏の事

御義口伝に云く法華経の行者を蔑づり生仏と云うべしと云う経文なり、是は軽心を以て謗るなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者を云う可きなり。

語訳

為斯所軽言汝等皆是仏　勧持品（四四二ページ）に「斯れに軽しめて、汝等は皆是れ仏なりと言われん、此の如き軽慢の言を、皆当に忍んで之を受くべし」とある。三類の強敵が法華経の行者を軽蔑して「生き仏」ということをさす。

通解

勧持品（四四二ページ）の「斯れに軽しめて、汝等は皆是れ仏なりと言われん」と、法華経の行者がうける難の一つを示した文について、御義口伝には、次のように仰せである。法華経の行者を軽べつして、生仏と呼ぶであろうという経文である。これは軽べつする心で誹謗するのである。今、日蓮大聖人および門下の、南無妙法蓮華経と唱える者が、このようにいわれるのである。

講義

法華経の行者を蔑づり生仏と云うべし

三大秘法の南無妙法蓮華経のみが末法における唯一の正法であるとの確信に立って、折伏行にはげむと、彼等謗法の徒は、必ず、皮肉な軽蔑の念をもって、生仏などと呼んでそしるであろうということである。しかし、あくまで耐えて、妙法流布に邁進せよとの指導であられる。よく、折伏にあたり、そんな凄い宗教なら、すぐ証拠を示せ等と道理にあわぬおどかしのようなことをいわれたり、あざけられることと同意である。

法華初心成仏抄（五五六ページ）には「其の上勧持品には法華経の敵人三類を挙げられたるに（三類を挙げられてい

る)、一には在家の俗男・俗女なり此の俗男・俗女は法華経の行者を憎み罵り打ちはり・きり殺し所を追ひ出だし或は上へ讒奏して遠流し・なさけなくあだむ者なり、二には出家の人なり此人は慢心高くして内心には物も知らざれども智者げに(智者らしく)もてなして、世間の人に学匠と思はれて法華経の行者を見ては怨み嫉み軽しめ、賤しみ犬野干よりも・わろきようを人に云いうとめ法華経をば我一人心得たりと思う者なり、三には阿練若の僧なり此の僧は極めて貴き相を形に顕し三衣・一鉢を帯して山林の閑かなる所に籠り居て在世の羅漢の如く諸人に貴まれ仏の如く万人に仰がれて法華経を説の如くに読み持ち奉らん僧を見ては憎み嫉んで云く大愚癡の者・大邪見の者なり総て慈悲なき者・外道の法を説くなんど云わん、(しかるにこの僭聖の僧)上一人より仰いで信を取らせ給はば其の已下万人も(これを)、仏の如くに供養をなすべし、法華経を説の如くよみ持たん人は必ず此の三類の敵人に怨まるべきなりと仏説き給へり」と申されている。

第十二　悪鬼入其身の事

本文

第十二悪鬼入其身の事

御義口伝に云く悪鬼とは法然弘法等是なり入其身とは国王・大臣・万民等の事なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者を怨むべしと云う事なり、鬼とは命を奪う者にして奪功徳者と云うなり、法華経は三世諸仏の命根なり此の経は一切諸菩薩の功徳を納めたる御経なり。

語訳

悪鬼入其身　勧持品（四四二ページ）に「濁劫悪世の中には、多く諸の恐怖有らん、悪鬼其の身に入りて、我を罵詈毀辱せん」とある。六道の一つである餓鬼道の衆生を鬼といい、天竜等の八部衆を神というが、この鬼神、天神、夜叉神等の類いを悪鬼

という。人に対しては病気等を惹き起こし、また思考の乱れを起こす。国家社会に対しては、天災地変や思想の乱れ等を惹き起こす働きをする。ここでは、法然、弘法等の邪宗の僧が、国家の権力者に取り入って、法華経の行者を迫害することをさす。また兄弟抄（一〇八二ページ）には「第六天の魔王が智者の身に入って善人をたぼらかすなり、法華経第五の巻に『悪鬼其の身に入る』と説かれて候は是なり」とある。第六天の魔王が法然等の身に入って、法華経の行者を迫害するのである。

奪功徳者　功徳を奪う者の意。鬼のこと。鬼は訳して奪命者、奪功徳者等という。

通解

勧持品（四四二ページ）に「悪鬼其の身に入りて、我を罵詈毀辱せん」と、末法の難をあげた文についての御義口伝である。この文について、次のように仰せである。悪鬼とは法然、弘法等の邪宗の僧をいうのである。悪鬼が其の身にはいる、其の身とは、国王、大臣、万民などをいう。そしてそれらの人々が、日蓮大聖人および門下が南無妙法蓮華経と唱えるのを怨嫉するのである。鬼とは命を奪う者で、奪功徳者と訳すのである。法華経、南無妙法蓮華経は、三世のいっさいの仏の命の根本である。また、この南無妙法蓮華経には、いっさいの菩薩の功徳が納まっているのである。悪鬼は、その生命を、むしばまんとするのである。

講義

悪鬼とは、誤った宗教、誤った思想をいう。この段は、これらの恐ろしさを説かれているのである。

思想ほど、強いものは無い。また思想ほど、恐ろしいものも無い。宗教ほど、力あるものは無い。また、宗教ほど、恐ろしいものも無い。残念なことに、一般の人々は、この害毒の恐ろしさを知らない。眼に見えず、手にふれることができないゆえに、気に止めないのも無理もなかろう。

しかし、誤った宗教や思想は、知らずしらずのうちに、人の生命をむしばみ、生命力を奪ってゆく阿片のごときものである。初めは気づかず、気がついた時には、すでに遅く、どうしようもない状態になっているものである。ガンのごとく、伝染病のごとく、悪影響を及ぼしながら、あらゆる人の幸福をむしばんでゆくものである。実に、恐るべきは、低級思想であり、誤れる宗教である。

富木殿御書（九六九㌻）には「智者は怨家・蛇・火毒・因陀羅・霹靂・刀杖諸の悪獣・虎狼・師子等を畏るべからず、彼は但能く命を断じて人をして畏るべき阿鼻獄に入らしむること能わず、畏るべきは深法を謗ずると及び謗法の知識となり決定して人をして畏るべき阿鼻獄に入らしむ」と。

三世通暁の、御本仏の御聖言をば、一日も速やかに、かつ、多くの人たちに知らしめていきたいものである。

第十三　但惜無上道の事

本文

第十三但惜無上道の事

御義口伝に云く無上道とは南無妙法蓮華経是なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経を惜む事は命根よりも惜き事なり、之に依って結ぶ処に仏自知我心と説かれたり法華経の行者の心中をば教主釈尊の御存知有る可きなり、仏とは釈尊我心とは今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者なり。

語訳

但惜無上道　勧持品（四四三ページ）に「我身命を愛せず、但無上道を惜しむ」とある。八十万億那由佗の菩薩が、滅後の流通を誓う文。無上道とは、三大秘法の南無妙法蓮華経である。命がけで正法を弘め、三大秘法の仏法の令法久住を願うこと。

仏自知我心　勧持品の最後（四四四ページ）に「我世尊の前、諸の来りたまえる十方の仏に於いて、是の如き誓言を発す。仏自ら我が心を知しめせ」とある。勧持品の二十行の偈（八十万億那由佗の菩薩が滅後の弘経を誓った文）の総結の文である。正法を弘めるのに命をかけている心境を、仏のみが知るということ。

通解

勧持品（四四三ページ）に「我身命を愛せず、但無上道を惜しむ」と、諸菩薩が、滅後の流通の決意を述べた文について、御義口伝には、次のように仰せである。無上道とは南無妙法蓮華経である。今日蓮大聖人および門下が南無妙法蓮華経を守り令法久住を願うことは、自分の命以上に大切にするのである。それゆえ、勧持品の二十行の偈の最後の文に「仏自ら我が心を知しめせ」と、仏がわれわれの心を知っていると説かれているのである。法華経の行者の心の中を、久遠元初の自受用報身如来である日蓮大聖人が、必ず知っておられるのである。仏とは文底の釈尊、すなわち久遠元初の自受用報身如来であり、我が心とは、日蓮大聖人およびその門下の南無妙法蓮華経と唱えるものの心である。

講義

無上道とは、南無妙法蓮華経のことである。すなわち、三大秘法の大御本尊のことである。他のいっさいの、十方微塵の経々、思想哲学は、有上道なのである。無上道を信心に約せば、最高の幸福生活のこととなる。結局、大善生活を指す。

今日蓮等の類い南無妙法蓮華経を惜む事は命根よりも惜き事なり

例えば、正月に、子供が百円札をもらったとする。子供にとっては、大事な百円札となる。百万円の小切手より、一万円札より、大切にしがみつくものである。これ「命根よりも惜き事なり」の姿となろう。百円札が、子供にとっての無上道となる。会社の社長が、生涯かけて、大会社をつくり上げた。その社を、全魂傾けて、護り戦う。これおなじく、「命根より惜き事なり」に通ずるところである。しかし妙法に比較すれば、自分なりに無上道と思い込んでいるに過ぎないわけだ。また総理大臣は、自分の地位を無上道と思っていることだろう。たしかに、区会議員、都会議員、国会議員からみれば、そうもいえよう。そして自己の権力に、命がけでしがみついていく。これ権力の座を惜しむこと「命根よりも惜き事」なのである。

しかし、総理大臣たりとも、永遠不滅の大哲理を根底にせざるかぎり、民衆の根本的救済はあり得ない。ゆえに、大御本尊を根本としてみれば、それも有上道である。所詮、人法共に、御本仏日蓮大聖人と、八万法蔵の極理たる一大秘法の大御本尊に帰趨するのである。「命根よりも惜き事なり」の御金言のごとく、妙法を堅持し、妙法流布に活躍する人こそ、大御本尊に境智冥合した、無上道の人生といえるのである。

之に依って結ぶ処に仏自知我心と説かれたり

成仏は、遠くになく、汝自身の内奥にあるを明かされた文である。「仏みずから、わが心を知れり」と宣説されたごとく、自分自身の生命に躍動するものである。死して、天国にゆくのでも決してない。西方十万億土に幸福があるのでもない。共産革命が成就してから幸福になるのでもない。信心即人間革命であり、常寂光土にしてゆくのが、大聖哲の原理なのである。これほど、簡単にして、現実的である大哲理が、いずこにあるであろうか。

法華経の行者の心中をば教主釈尊の御存知有る可きなり

「教主釈尊」とは、日蓮大聖人の御事である。法華経の行者とは、別しては、当然、末法の御本仏、日蓮大聖人であられる。総じては、信行学に励みゆくわれらもまた、法華経の行者と自覚してよいのである。ここは、凡夫のわれわれ自身が、日蓮大聖人のお心にかなう、仏の当体とあらわれるとの仰せなのである。

したがって、一往、理上では、大聖人と同じ十界三千の生命である。再往は、当体義抄（五一二ページ）によれば、「所詮妙法蓮華の当体とは法華経を信ずる日蓮が弟子檀那等の父母所生の肉身是なり、正直に方便を捨て但法華経を信じ南無妙法蓮華経と唱うる人は煩悩・業・苦の三道・法身・般若・解脱の三徳と転じて三観・三諦・即一心に顕われ其の人の所住の処は常寂光土なり、能居・所居・身土・色心・倶体倶用・無作三身の本門寿量の当体

蓮華の仏とは日蓮が弟子檀那等の中の事なり」と述べられている。この御文のごとく、信心ある人こそ、仏の所作にかわってくるとの仰せである。

戸田城聖前会長も「信心強盛なる者は、日蓮大聖人の御血が、わが生命に湧いてくるのだ。清浄な、たくましき、人を救おうとする慈悲が、そして、人生を悠々と生ききっていける力が、これこそ血脈を受けているのだ」と。まことに、勿体ないかぎりである。われらは、大法王たる日蓮大聖人の子供として、弟子として、名誉と、襟度とをもって、前進していきたいものである。

安楽行品五箇の大事

安楽行品五箇の大事

安楽行品五箇の大事

第一　安楽行品の事

本文

第一安楽行品の事

御義口伝に云く妙法蓮華経を安楽に行ぜむ事末法に於て今日蓮等の類いの修行は妙法蓮華経を修行するに難来るを以て安楽と意得可きなり。

語訳

安楽行品　安楽行品第十四で、迹門十四品の最後の品にあたる。この品の大意は、前品の勧持品第十三では、深行の菩薩が弘経の甚難を歎じ、五百および八千の声聞が娑婆を恐れて他土の弘経を誓うような状態であったから、文殊菩薩は、浅行初心の行者が濁悪世で安楽に妙法蓮華経の修行する方法を問い、釈尊はこれに対して、身、口、意、誓願の四安楽行を説き、初

心の人はこれに住して妙法蓮華経を弘通し、修行することが示されたのである。勧持品は末法折伏の行を明かし、安楽行品は正像摂受の行を明かしたのである。講義参照。

通解

安楽行品には、妙法蓮華経を安楽に修行する方法が説かれているが、それは正像における摂受の修行である。御義口伝には、次のように仰せである。妙法蓮華経を安楽に行ずるということは、末法において日蓮大聖人およびその門下の修行に約していえば、大御本尊を信じ、自行化他にわたる仏道修行をはげめば、必ず難がある。その難が起きてくることが、実は安楽であると意得なければいけない。

講義

安楽行品には、身、口、意、誓願の四安楽行が説かれている。その意は、悪口、迫害されず、安穏に妙法を修行するには、いかにしたらよいかを示したものである。勧持品に説く、三類の強敵の嵐と戦い、弘法する方軌とは、全く異なり、穏やかな消極的な実践方法をいうのである。

例えば、口安楽行の文には「若しは口に宣説し、若しは経を読まん時、楽って人及び経典の過を説かざれ。

亦、諸余の法師を軽慢せざれ。他人の好悪、長短を説かざれ。声聞の人に於いて、亦名を称して、其の過悪を説かざれ。亦名を称して、其の美きことを讃歎せざれ」（四五四ページ）等とあり、また身安楽行の文にも「云何なるを菩薩摩訶薩の親近処と名づくる。菩薩摩訶薩、国王、王子、大臣、官長に親近せざれ。諸の外道、梵志、尼揵子等、及び世俗の文筆、讃詠の外書を造る、及び路伽耶陀、逆路伽耶陀の者に親近せざれ。亦諸の有ゆる凶戯、相扠、相撲及び那羅等の種種の変現の戯に親近せざれ。又、旃陀羅及び猪羊、雞狗を畜い、畋猟し漁捕する諸の悪律儀に親近せざれ」（四四六ページ）等とあるのである。

これらの文によれば、人里離れた、平穏無事な所で仏道修行することになる。これらの修行は、正法、像法時代には通用したかも知れぬ。しかし、末法には、全く用をなさないのである。現今は、五濁の時代、修羅闘諍の盛んな時代である。不幸の人、謗法の者が充満している。それらを見、手を拱ねいて、自分だけ平穏無事に仏道修行を願うは、仏法を知らざる言であり、人である。かくのごとき輩は、利己主義であり、卑怯者であり、怪物のごとき存在である。

如説修行抄（五〇三ページ）に「一乗流布の時は権教有って敵と成りて・まぎらはしくば実教より之を責む可し、是を摂折二門の中には法華経の折伏と申すなり、天台云く『法華折伏・破権門理』とまことに故あるかな、然るに摂受たる四安楽の修行を今の時行ずるならば冬種子を下して春菓を求る者にあらずや、雞の暁に鳴くは用なり宵に鳴くは物怪なり、権実雑乱の時法華経の御敵を責めずして山林に閉じ籠り摂受を修行せんは豈法華経修行の時を失う物怪にあらずや、されば末法・今の時・法華経の折伏の修行をば誰か経文の如く行じ給へしぞ、誰人に

ても坐せ諸経は無得道・堕地獄の根源・法華経独り成仏の法なりと音も惜まずよばはり給いて諸宗の人法共に折伏して御覧ぜよ三類の強敵来らん事疑い無し」と。

悪口を気にし、迫害を恐れ、平穏のみ願い、自からの節操まで、枉る人生は、弱者の人生である。日蓮大聖人御在世時代においても、迫害の厳しさに耐えかねて退転する人も幾多おった。これ等の人々は、結局、大聖人の御本仏たることを知らず、信ぜず、ただただ目先きの安穏にのみとらわれた人々である。その名誉ある立ち場を捨て去った、誠に哀れな姿であった。佐渡御書（九六一ページ）に「日蓮御房は師匠にておはせども余にこはし我等は柔やはらかに法華経を弘むべしと云んは螢火が日月をわらひ蟻塚が華山を下し井江が河海をあなづり烏鵲が鸞鳳をわらふなるべしわらふなるべし」と。

大聖人滅後においても、五老僧は、天台沙門と名のってしまった。そして、折伏を捨て、摂受の行に走ったのである。ただ一人、日興上人のみが、日蓮大聖人の正法正義を護持し、いかなる権力、圧力にも屈せず、伝持なされ、広布の基礎をつくられたのである。現在、創価学会は、大聖人の仏法を、寸分違うことなく前進している。時に適った、最高最善の実践行為をなしているのである。一千数百万の人々が、大御本尊を持った源泉は、一対一の折伏であったことは、そのことを示す尊い証拠ではなかろうか。

次に「難来るを以て安楽と意得可きなり」との御金言を、確信できる人こそ、大聖人よりお褒めを戴ける人である。この人こそ、今世で、仏の力を出し、死して霊山に帰り、三世十方の仏、菩薩より称賛される、最高の信者、人生といえるのである。これ、その人の一念、信心の強さによって決まるのである。大聖人の御一生も迫害

の連続であった。しかし、大難の中、生涯、御境涯は悠々たるものであった。われらもまた、信心を開けば、一切が安楽となるのである。難があればあるほど、その人は成長する、福運を早く積みゆくことを決して忘れてはならない。

次に、「安楽」とは、あらゆる人が安楽を求めぬいている。病人は健康になろうとし、貧者は富者になろうと努力する。限りなく、苦をば、安楽に脱却しようとするは、人間自然の姿である。しかるに、このような安楽は、相対的な安楽である。真実絶対の安楽は、成仏である。何ものにもおかされず、永遠に安楽してゆける境涯を確立することこそ、最高の安楽なのである。

第二　一切法空の事

本文

第二一切法空の事

御義口伝に云く此下に於て十八空之有り十八空の体とは南無妙法蓮華経是なり十八空は何れも妙法の事なり。

語訳

一切法空　安楽行品（四四八ページ）には「一切の法を観ずるに、空なり、如実相なり。顚倒せず、動ぜず、退せず、転ぜず。虚空の如くにして所有の性無し。一切の語言の道断え、生ぜず、出せず、起せず。名無く、相無く、実に所有無し、無量、無辺、無礙、無障なり」とある。

十八空　右に引用した文にある十八の空である。①不顚倒、②不動、③不退、④不転、⑤如虚空、⑥如実相、⑦不生、⑧不出

⑨無所有性、⑩不起、⑪無障、⑫無名、⑬無相、⑭一切語言道断、⑮実無所有、⑯無辺、⑰無量、⑱無礙（順不同）のことである。

通解

ここは、安楽行品に「一切の法を観ずるに、空なり」とあり、以下十八空が説かれているところの御義口伝である。この文について、次のように仰せである。この「一切法空」の文の下には十八空が説かれている。この十八空の本体とは南無妙法蓮華経である。十八空はいずれも妙法のことをあらわしている。

講義

安楽行品の十八空は、いずれも生命の不可思議（ふかしぎ）な状態を、さまざまな角度から説き明かしたものである。空（くう）というと、一般には無と同じような意味に使われている。また、ある有名な辞典にも、仏法で説く「空」を「有に対して存在を否定すること」とあるくらいである。また、仏教関係の学者が論ずる空も、観念的であり、いたずらに難解な仏教用語を使いながらも、実際には小乗教等の説く空観（くうかん）をもとにしたものが多い。およそ生活と全くかけはなれたものになっている。真実の仏法の説く空は、絶対に「無」ではない。「有」「無」とは別の概念で

ある。有りといえば無く、無しといえば有るという不思議なる生命の状態をいう。

一般の哲学においては「有」と「無」の二つを根源にしている。特に西洋哲学においては「有る」か「無い」かの判断だけで、そこに「空」という概念はない。空を英語に訳しても empty space とか vanity としか訳すことができない。これでは無と同じになってしまう。爾前経の有名な空観として「色即是空」という語があるが、これを英訳するのに、ある辞典では all is nothing としている。これでは「全ては無」ということで、空はたんなる「空虚」や「無」の意味でしかなく、旧約聖書・伝道の書にある空と同様になってしまう。

外国人が空を無と同じように考えている例として、戸田前会長がこんな話をされた。

「皇太子殿下の英語の先生で、イギリスの人がいた。またわしの友達の中に、日本大学の哲学部長がおりまして、その人と二人でそのイギリス人の所へ遊びに行った。そのイギリス人は、日本の仏教界の大学者といわれる鈴木大拙という人に仏教を教わっていた。そのイギリス人に私は『先生、空というのは何ですか』と。そしたらピアノの上にあった折鶴をくしゃくしゃにして『これが空だ』といった。そんなバカなことがあるか。大拙先生に、英国からわざわざ来て、日本の仏教学を教わりながら。それは無ではないか。空と無とは違う。空がわからなければ仏教哲学はわからんのです」（戸田先生をかこむ講義後の質問会より、大白蓮華七十九号）

なんでも「有る」か「無い」かで割り切ろうとする。これがドイツ哲学を初めとする西欧の哲学思想の考え方である。しかし、仏法においては有、無のほかに、もう一つの概念として「空」を説く。有るといえば無い、無いといえば出てくる。有でも無でもない、しかも有であり、無であるというのが空の定義である。

たとえば、ここにラジオがあるとする。スイッチをひねると世界じゅうの放送を聞くことができる。もしそこにラジオがないとすれば放送を聞くこともできない。そこには何もないことになる。何もないではないかといっても、ラジオがあると、ちゃんと音波としての働きを現わすのである。また怒るという生命状態がある。この怒るという生命を、もし、有るといおうとしても、どこにもその実体というものがない。つかむことがない。無いといおうとしても、怒るという生命状態は厳然として存在するし、「あの人は機嫌が悪い」というように、怒っている状態と、他の状態とを識別することができる。このように、あってなきがごとく、なくてあるがごとき、有無で論ずることのできない実体を空ともいい、妙ともいうのである。

一生成仏抄（三八四ページ）に「抑妙とは何と云う心ぞや只我が一念の心・不思議なる処を妙とは云うなり不思議とは心も及ばず語も及ばずと云う事なり、然れば・すなはち起るところの一念の心を尋ね見れば有りと云はんとすれば色も質もなし又無しと云はんとすれば様様に心起る有と思ふべきに非ず無と思ふべきにも非ず、有無の二の語も及ばず有無の二の心も及ばず有無に非ずして而も有無に偏して中道一実の妙体にして不思議なるを妙とは名くるなり、此の妙なる心を名けて法とも云うなり」と。

死後の生命は空の状態である。わかりやすい例として睡眠を考えてみる。眠っている間は、心はどこにもない。ところが起きると心は活動する。眠っている場合には心がなくて起きている場合にはある。あるのがほんとうか。ないのがほんとうか。あるといえばなく、ないといえば出てくる。このような状態であるゆえに、空とも妙ともいうのである。

宇宙は即生命であるから、人が死んだ時、ちょうど眠っている間、心が何処(どこ)にもないように、死後の生命は宇宙の大生命にとけこんでどこを探してもないのである。御義口伝に「皆在虚空とは我等が死の相なり」（七四二ページ）と。虚空とは大宇宙である。死後の生命は大宇宙に冥伏(みょうぶく)していることを示された明文である。それではなくなってしまったのかといえば、決してそうではない。この大宇宙に溶け込んだ死後の生命は、何かの縁にふれて、われわれの目にうつる生命活動となって現われてくるのである。眠りの状態から目をさまして、昨日の心の活動状態をそのまま持続して活動するように、新しい生命は、過去の生命の業因(ごういん)をそのまま受けて、現世の果報として生きていくのである。寝ては起き、起きては寝ていくのと同じように、生きては死に、死んでは生きながら、永遠に生死を繰り返していくのが、生命の真実の姿である。

第三　有所難問不以小乗法答等の事

本文

第三有所難問不以小乗法答等の事

御義口伝に云く対治の時は権教を以て会通す可からず。一切種智とは南無妙法蓮華経なり一切は万物なり種智は万物の種なり妙法蓮華経是なり、又云く一切種智とは我等が一心なり一心とは万法の惣体なり之を思う可し。

語訳

有所難問不以小乗法答　安楽行品（四五四ページ）に「難問する所有らば、小乗の法を以って答えざれ。但、大乗を以って、為に解説して、一切種智を得せしめよ」とある。

対治　謗法を対治すること。すなわち折伏のことである。

会通　「会」とは、あわせる、理解する、てらしあわせる、などの意があり、「通」には、ひらく、かよわす、つたえる、ときあかす、などの意味がある。会通とは、よく理解して疑いやとどこおりのないようにすること、いろいろな議論を合わせて理解し説き明かすこと、などの意味がある。ただし、ここでは説明する、意義を述べる、という意味である。

一切種智　一切種智慧ともいう。三智（一切智、道種智、一切種智）の最上に位する、透徹した仏の智で、あらゆることを見通し、また一切衆生の成仏の善根の種ともなる力である。一切とは、万物であり、種智とは、万物の本源たる南無妙法蓮華経である。

一心　生命論に約せば瞬間の生命であり、信心に約せば信心の一心であり、大御本尊に約せば自受用身の一念の心法、すなわち、大御本尊の中央の南無妙法蓮華経である。一心の一には唯一、無二、平等、絶対、普遍妥当等の意味がある。

万法の惣体　あらゆる現象の本質、本体ということ。

通解

安楽行品に「難問する所有らば、小乗の法を以って答えざれ。但、大乗を以って、為に解説して、一切種智を得せしめよ」とあり、御義口伝には、次のように仰せである。

謗法を破折することは、権教等の低い教えで会通を加えてはならない。「一切種智を得せしめよ」とある、その一切種智とは、南無妙法蓮華経のことである。一切とは万物である。種智とは万物の本源たる南無妙法蓮華経のことなのである。また、次のようにもいわれている。一切種智とはわれわれの一心、生命である。一心とはあ

らゆる現象の本体である。

講義

低い哲理、思想では、あらゆる人の疑問を晴らすことはできない。執着を断破することもできない。必ず行き詰まりを生ずることは当然である。最高の哲学、思想を有する教えこそが、永久に行き詰まることなく、あらゆる人々を救い、あらゆる人々から賛同の嵐を呼ぶことは必然である。

たとえ、初めは信じない人でも、必ず正論の前には屈せざるを得ないのである。われわれが、誰人が反対しようが、非難しようが、つねに最高の仏法を人々に説くのは、その理由によるものである。

第四　無有怖畏加刀杖等の事

本文

第四無有怖畏加刀杖等の事

御義口伝に云く迹化の菩薩に刀杖の難之れ有る可からずと云う経文なり、勧持品は末法法華の行者に及加刀杖者数数見擯出と此の品には之無し、彼は末法の折伏の修行此の品は像法摂受の修行なるが故なり云云。

語訳

無有怖畏加刀杖等　安楽行品（四五六ページ）には「我が滅度の後に、若し比丘有って、能く斯の、妙法華経を演説せば、心に嫉恚、諸悩障礙無く、亦憂愁、及び罵詈する者無く、又怖畏し、刀杖を加えらるる等無く、亦擯出せらるること無けん」とある。

及加刀杖者数数見擯出　勧持品の二十行の偈の中にある文。ここには三類の強敵が説かれている。及加刀杖者は、そのうち第一の俗衆増上慢を明かす文（四四一ページ）にある。「諸の無智の人の、悪口罵詈等し、及び刀杖を加うる者有らん」と。また数数見擯出は第三の僭聖増上慢を明かす文（四四三ページ）のなかにある。「濁世の悪比丘は、仏の方便、随宜所説の法を知らずして、悪口して顰蹙し、数数擯出せられ」等とある。

通解

安楽行品には「我が滅度の後に、若し比丘有って、能く斯の、妙法華経を演説せば、心に嫉恚、諸悩障礙無く、亦憂愁、及び罵詈する者無く、又怖畏し、刀杖を加えらるる等無く、亦擯出せらるること無けん」云云の文がある。

この文について、御義口伝には、次のように仰せである。迹化の菩薩には刀杖の難がないという経文である。勧持品には、末法の法華経の行者について、「及び刀杖を加うる者有らん」あるいは「数数擯出せられ」等と説かれているが、この安楽行品にはそのようなことは説かれていない。それは、勧持品は末法折伏の修行を明かし、この安楽行品は像法摂受の修行を明かしているからである。

講義

釈迦滅後、法華経のゆえに大難にあったのは、日蓮大聖人お一人であった。天台、伝教といえども迹化の菩薩であり、まったく大難に遇っていない。少々あったとしても悪口程度であり、刀杖の難をうけたわけでもないし、数数見擯出の文を身をもって読んだわけでもない。また、天台も伝教もともに、賢王の保護があり、難を受けるどころか、むしろ優遇されたのであった。まことに、安楽行品に説かれたとおりの姿であった。

だが、日蓮大聖人は、勧持品の予言そのままの振舞いであられた。経文に照らし、また事実の上から、彼らは迹化の菩薩であり、日蓮大聖人は本化であり、また内証は末法の御本仏であることは歴然たるものがある。

開目抄上（二〇二㌻）にいわく「像法の中には天台一人法華経・一切経をよめり、南北これをあだみしかども陳隋・二代の聖主・眼前に是非を明めしかば敵ついに尽きぬ、像の末に伝教一人・法華経一切経を仏説のごとく読み給へり、南都・七大寺蜂起せしかども桓武・乃至嵯峨等の賢主・我と明らめ給いしかば又事なし、今末法の始め二百余年なり況滅度後のしるしに闘諍の序となるべきゆへに非理を前として濁世のしるしに召し合せられず兆験して流罪乃至寿にも・をよばんと・するなり、されば日蓮が法華経の智解は天台・伝教には千万が一分も及ぶ事なけれども難を忍び慈悲のすぐれたる事は、をそれをも・いだきぬべし」と。

また本因妙抄（八七五㌻）には、天台と日蓮大聖人の立ち場を比較相対していわく「彼は安楽普賢の説相に依り・此れは勧持不軽の行相を用ゆ」と。これをもって、正法像法年間は摂受の修行であり、末法では折伏でなければならないことが明らかである。

第五　有人来欲難問者諸天昼夜等の事

本文

第五有人来欲難問者諸天昼夜等の事

御義口伝に云く末法に於て法華を行ずる者をば諸天守護之有る可し常為法故の法とは南無妙法蓮華経是なり。

語訳

有人来欲難問者諸天昼夜等　安楽行品（四六二ページ）には「人有り、来って、難問せんと欲せば、諸天昼夜に、常に法の為の故に、而も之を衛護し、能く聴く者をして、皆歓喜することを得せしめん。所以は何ん。此の経は是れ、一切の過去、未来、現在の諸仏の、神力をもって護りたもう所なるが故に」とある。

常為法故　引用の前文のなかに「常に法の為の故に」とある。

通解

安楽行品に「人有り、来って、難問せんと欲せば、諸天昼夜に、常に法の為の故に、而も之を衛護し、能く聴く者をして、皆歓喜することを得せしめん」等とあり、御義口伝には、次のように仰せである。末法において、法華経すなわち三大秘法の大御本尊を信じ行ずる者をば、諸天善神が必ず守護するのである。「常に法の為の故に」とある「法」とは、南無妙法蓮華経のことである。

講義

諸天善神の加護は絶対であるとの文証である。諸天善神とは、妙法の働きである。ゆえに南無妙法蓮華経と唱える人の生命に、己心の諸天善神の活動があらわれ、大宇宙の諸天善神の働きを呼び起こし、内外相応し、ゆうゆうと大宇宙のリズムに合致した生活をしていくことができる原理である。

法華初心成仏抄（五五七ページ）にいわく「凡そ妙法蓮華経とは我等衆生の仏性と梵王・帝釈等の仏性と舎利弗・目連等の仏性と文殊・弥勒等の仏性と三世の諸仏の解の妙法と一体不二なる理を妙法蓮華経と名けたるなり、故に一度妙法蓮華経と唱うれば一切の仏・一切の法・一切の菩薩・一切の声聞・一切の梵王・帝釈・閻魔・法王・日月・衆星・天神・地神・乃至地獄・餓鬼・畜生・修羅・人天・一切衆生の心中の仏性を唯一音に喚び顕し奉る功

徳・無量無辺なり、我が己心の妙法蓮華経を本尊とあがめ奉りて我が己心中の仏性・南無妙法蓮華経とよびよばれて顕れ給う処を仏とは云うなり、譬えば籠(かご)の中の鳥なければ空(そら)とぶ鳥のよばれて集まるが如し、空とぶ鳥の集まれば籠の中の鳥も出でんとするが如し口に妙法をよび奉れば我が身の仏性もよばれて必ず顕れ給ふ、梵王・帝釈の仏性はよばれて我等を守り給ふ、仏菩薩の仏性はよばれて悦(よろこ)び給ふ」と。

現在、創価学会員が諸天善神に守られていることは、あらゆる面に実証されている。交通事故などを一例に見ても、世間のそれに比較すれば統計的に分析して、はるかに少ない。また不景気のときも、不思議と、学会員の多くが守られてきていることも、絶対の事実である。また、信心を根本とすれば、いっさいが諸天善神の働きに変わる。たとえ魔王、魔民たりといえども、これを駆使(くし)し、諸天善神の働きに変えていけるのである。

涌出品一箇の大事

涌出品一箇の大事

涌出品一箇の大事

第一　唱導之師の事

本文

第一唱導之師の事

御義口伝に云く涌出の一品は悉く本化の菩薩の事なり、本化の菩薩の所作としては南無妙法蓮華経なり此れを唱と云うなり導とは日本国の一切衆生を霊山浄土へ引導する事なり、末法の導師とは本化に限ると云うを師と云うなり、此の四大菩薩の事を釈する時、疏の九を受けて輔正記の九に云く「経に四導師有りとは今四徳を表す上行は我を表し無辺行は常を表し浄行は浄を表し安立行は楽を表す、有る時には一人に此の四義を具す二死の表に出づるを上行と名け断常の際を踰ゆるを無辺行と称し五住の垢累を超ゆる故に浄行と名け道樹にして徳円かなり故に安立行と曰うなり」と今日蓮等の類南無妙法蓮華経と唱え奉る者は皆地涌の流類なり、又云く火は物を焼くを以て行とし水は物を浄むるを以て行とし風は塵垢を払うを以て行とし大地は草木を長ずるを以て行とするなり四菩薩の利益是なり、四菩薩の行は不同なりと雖も、倶に妙法蓮華経の修行なり、此の四菩薩は下方に住す

る故に釈に「法性之淵底玄宗之極地」と云えり、下方を以て住処とす下方とは真理なり、輔正記に云く「下方とは生公の云く住して理に在るなり」と云云、此の理の住処より顕れ出づるを事と云うなり、又云く千草万木・地涌の菩薩に非ずと云う事なし、されば地涌の菩薩を本化と云えり本とは過去久遠五百塵点よりの利益として無始無終の利益なり、此の菩薩は本法所持の人なり本法とは南無妙法蓮華経なり、此の題目は必ず地涌の所持の物にして迹化の菩薩の所持に非ず、此の本法の体より用を出して止観と弘め一念三千と云う、惣じて大師人師の所釈も此の妙法の用を弘め給うなり、此の本法を受持するは信の一字なり、元品の無明を対治する利剣は信の一字なり無疑曰信の釈之を思ふ可し云云。

語訳

唱導之師　涌出品（四七六ページ）には「是の菩薩衆の中に、四導師有り。一を上行と名づけ、二を無辺行と名づけ、三を浄行と名づけ、四を安立行と名づく。是の四菩薩、其の衆中に於いて、最も為れ上首唱導の師なり」とある。

涌出の一品は悉く本化の菩薩の事なり　涌出品は、地涌の菩薩の品である。従地涌出品第十五より普賢菩薩勧発品第二十八までが本門になる。この涌出品の前半においては、他方の八千恒河沙の菩薩が、仏滅後、娑婆世界において妙法蓮華経を流布させてもらいたい、という要請をするが、仏は絶対に許さない。「止みね善男子、汝等が此の経を護持せんことを須いじ」といい、あくまでも本眷属の上行など四菩薩を上首とした六万恒河沙の大菩薩を召して、末法における妙法蓮華経の流布をゆるす重要な品である。涌出品は、なお略開近顕遠を説き、動執生疑をさせたのである。本化の菩薩とは迹化の菩薩

に対していう。迹化の菩薩とは釈尊が三十成道して以来、華厳・阿含・方等・般若の爾前経および法華経迹門において化導された菩薩をいう。弥勒、薬王等の諸菩薩のことである。本化の菩薩とは、法華経本門にいたって出現した菩薩で、釈尊の久遠以来の弟子である地涌の菩薩をいう。しかし、一重立ち入って本化の菩薩を論ずれば、本化の本とは久遠元初の独一本門であり、久遠元初以来の日蓮大聖人の本眷属をいうのである。講義参照。

所作　ふるまい。

引導　導くこと。案内すること。

疏の九　文句の九をさしている。

輔正記　「法華天台文句輔正記」の略。道暹の著である。天台の法華文句、及びそれを妙楽が釈した文句記の注釈書である。さらに略して輔ともいう。道暹は、伝未詳であるが、妙楽の門人であると思われる。

四徳　常楽我浄の四徳である。

二死　分段の生死と変易の生死をいう。分段の生死とは三界六道の生死で、いわゆる迷いの生死であり、不善業・煩悩・業の因縁で、六道の間、それぞれ果報の身を現ずる。それに分限段落の差があるので分段という。変易の生死とは三界六道を出た生死で、見思の惑を断じた声聞、縁覚、菩薩等の聖者の生死である。すなわち修行の過程で分段の身を変易（変も易もかわるという意味）して煩悩をたち、智慧をひらいていくゆえに変易の生死である。分段・変易の生死を合わせて二種生死という。変易の生死については、総勘文抄（五七一ページ）に「損変易生とは同居土の極楽と方便土の極楽と実報土の極楽との三土に往生せる人・彼の土にて菩薩の道を修行して仏に成らんと欲するの間・因は移り果は易りて次第に進み昇り劫数を経て成仏の遠きを待つを変易の生死と云うなり、下位を捨つるを死と云い上位に進むをば生と云う是くの如く変易する生死は浄土の苦悩にて有るなり」とある。

断常の際　断常二見のこと。すなわち断見と常見のことで、外道の生命観である。断見とは心身ともにこの一生を限りとして断絶し、再び生まれることがないという思想。常見とは心身ともに常住不滅であると説くが、鳥は、いつも鳥、人はかならず人に生まれると説いて、真の因果を説かぬ思想。いずれも偏見である。このような見解に六十二種ある。ゆえに六十二断常の見という。

五住の垢累　五住の煩悩のことである。垢累とは、けがれのこと。すなわち生命のにごりであり、煩悩をさしている。一に三界の見惑（一切処住地の煩悩）二に欲界の思惑（欲愛住地の煩悩）三に色界の思惑（色愛住地の煩悩）四に無色界の思惑（無色愛住地の煩悩）五に根本無明惑（根本無明住地の煩悩）である。すなわち宇宙の実相を掌握するのをさまたげる働きをするものをいう。

道樹　道樹とは道場樹の略で、菩提樹のことである。いっさいの仏は、みなこの樹の下で正覚を開くという。大集経には「衆生を憐愍して道樹に趣く」とあり、今でいえば、浅き生活を去って、真実正しい人生を歩むことである。

法性之淵底玄宗之極地　天台の法華文句の九に「下方とは法性の淵底、玄宗の極地なり、故に下方と言う」とある。地涌の菩薩が下方に住していたということに対する釈である。法性とは生命、淵底とは、奥底ということである。玄宗とは根本という意味。極地とは、究極ということである。すなわち生命の奥底、究極たる南無妙法蓮華経のことを、天台はこう表現したのである。

生公　竺の道生のこと。中国東晋の世の高僧。沙門竺法汰について出家、後、羅什三蔵の弟子として修行した。青園寺に住し、頓悟成仏の説を立て「二諦論」「仏性当有論」「法身無色論」等を著し、また闡提成仏の義を立てた。これにより衆僧の怨嫉するところとなり大衆のために追放せられた。その時、道生は「わが所説、もし経義に違せば、現身に厲疾を表さん。もし、実相と違背せずんば、願くは寿終の時、師子の座に上らん」と誓って蘇州の虎丘に去った。後道生の説の正しいことが

明らかとなり、その誓いのごとく宋の元嘉十一年盧山において法座に登り、説法終わるとともに、眠るがごとく入滅したといわれる。

無疑曰信　「疑い無きを信と曰う」と読む。文句の九にある。

通解

涌出品（四七六ページ）に「是の四菩薩、其の衆中に於いて、最も為れ上首唱導の師なり」とあるところについて、御義口伝には、次のように仰せである。

涌出品の一品は、すべて、本化の菩薩である地涌の菩薩のことについて説いているのである。その地涌の菩薩のふるまいは南無妙法蓮華経を根本としているのである。これを唱というのである。唱導之師の導とは日本国の一切衆生に大御本尊をたもたせ、平和で幸福な生活へ指導することをいうのである。末法の導師、指導者とは地涌の菩薩、すなわち別しては日蓮大聖人、総じてはその弟子に限ることを師というのである。

此の涌出品に出現する上行、無辺行、浄行、安立行を釈する時、天台の文句の九を受けて道暹の輔正記の九には「涌出品に四導師があるということは常楽我浄の四徳を表わしているのである。上行は我を表わし、無辺行は常を表わし、浄行は浄を表わし、安立行は楽を表わしている。ある時は、ひとりの生命にこの四菩薩の義を具しているのである。分段の生死、変易の生死を出ることを上行と名づけ、断見、常見の生命観を越えて永遠の生

命観を会得することを無辺行と名づけ、三界の見惑、欲界の思惑、色界の思惑、無色界の思惑、根本無明惑等の五住の惑いを超えることを浄行と名づけ、そして菩提樹のように真実正しい道を歩み、円満な人徳をもつことを安立行と名づけるのである」とある。

今、日蓮大聖人およびその門下が、南無妙法蓮華経と唱えるのは、すべて地涌の菩薩の眷属なのである。

また、火は物を焼くのがその使命であり上行である。水は物を浄めるのが使命であり浄行である。風は塵や垢などを吹き払うのが使命であり、無辺行である。大地は草木を育成するのが使命であって、安立行である。四菩薩の行は不同であっても、ともに南無妙法蓮華経の修行なのである。この四菩薩は下方に住するゆえに天台は法華文句で「生命の奥底であり、究極である」といったのである。下方が地涌の菩薩の住所なのである。そして下方とは真理なのである。道暹の輔正記には「下方とは竺の道生のいうのには妙法蓮華経の道理にかなっていることである」と説いている。この理の住処から現出するのを事というのである。また、いっさいの草木といえども、地涌の菩薩でないものはない。それゆえ、地涌の菩薩を本化というのである。本とは教相からいえば五百塵点劫、観心からいえば無始無終の久遠元初からの利益なのである。

この地涌の菩薩は根本の法をもっているのである。本法とは南無妙法蓮華経である。この南無妙法蓮華経の題目は、地涌の菩薩のたもつところのものであって、迹化の菩薩のたもち得ないものである。この南無妙法蓮華経の体から用、働きを出して、天台は、摩訶止観、一念三千として弘めたのである。総じて大師といわれる人も人師も、この妙法の本体の用を弘めているのである。この本法を受持するのは信の一字によるのである。成仏を疑

い、御本尊を疑うという根本の迷いを、対治する利剣は、信の一字なのである。文句の九の「疑い無きを信と曰う」という釈をよくよく思うべきである。

講義

本化の菩薩の所作としては南無妙法蓮華経なり

本化の菩薩の振舞い、実践は、すべて南無妙法蓮華経を根本としている。迹化の菩薩は、蔵、通、別、円と教化をうけ、機熟し、所詮は法華経二十八品をたもった振舞いであるけれども、本化の菩薩は、本来、南無妙法蓮華経を根本とし、南無妙法蓮華経を受持しきった振舞いなのである。ここに迹化の菩薩と本化の菩薩との根本的な相違があるのである。

かつて、戸田城聖前会長は「世の中の政治家等の指導者は、迹化の菩薩である。われわれは本化の菩薩である」と、生活に約して説明されたことがあった。いかに偉大な指導者、政治家であったとしても、三大秘法の大御本尊をたもっていなければ、根本的な、世の中の革命、一人一人の救済は絶対にできない。

したがって、新しい時代に新しい哲学をもって、新しい指導者が涌出して、これからの日本の国の繁栄のため、そしてまた、世界の平和と幸福のために戦っていく以外にない。われわれこそ、民衆の幸福、世界平和をかちと

る戦いの先駆者であり、指導者であると確信すべきである。

此れを唱と云うなり

唱導之師の唱とは、南無妙法蓮華経と唱えることである。また、南無妙法蓮華経を根本として、大指導者になって、いっさいの民衆のために、人類の文化のため、あらゆる階層にたたかいを進めて、貢献していくことをいうのである。われわれの妙法を根底にしたいっさいの言々句々は唱である。

アメリカの大統領も、ソ連の最高首脳も、またフランスの大統領も、国家のために、または民族のために、あるいは世界の平和のために、長時間にわたる演説もするし、政策も発表する。また、その他、評論家にしても、学者にしても、さまざまなことを発表する。それらはぜんぶ、一応は唱になるのである。だが、それらの唱は有名無実であり、必ずしも民衆の幸福につながらない。かえって、民衆に、不安と動揺を与える場合も多々ある。大御本尊を持ったわれわれの、いっさいの言々句々は、妙法蓮華経の法理にかない、平和と幸福のために事実の上に通じていくのである。

導とは日本国の一切衆生を霊山浄土へ引導する事なり

唱導之師の導とは、日本国の全民衆を霊山浄土へ引導する——大御本尊を持たせ、日蓮正宗総本山、富士大石寺に参拝させることであると。すなわち、日本の広宣流布である。世界平和は、日本の広宣流布がなされるなら

ば、必然的に達成されていくものである。従って、まず、日本国の広宣流布こそ急務である。この力強い息吹きは、やがて全世界へ波及していくことは必然なのである。

末法の導師とは本化に限ると云うを師と云うなり

末法の導師とは、別しては日蓮大聖人、総じては、大聖人の弟子である。世の中には、いろいろな指導者や師匠がいる。しかし、五濁爛漫の末法の全民衆を救済しきる真実の指導者は、大御本尊を受持しきっている者に限るのである。

この大聖人の御文を拝するならば、われら地涌の大菩薩が、あらゆる分野に、あらゆる階層に進出し、一切の人々を、誘引、引導しきる、真実が中の真実の師匠であり、指導者たることを確信すべきである。

上行は我を表し無辺行は常を表し浄行は浄を表し安立行は楽を表す

いまこの文を信心の上から拝すれば、上行は、南無妙法蓮華経という、我を表わす。われわれは六道輪廻、九界そしてまた十界の生命活動をしているけれども、その根本は南無妙法蓮華経を唱えていくことである。いかなる場合でもただ南無妙法蓮華経を唱えることを、忘れないという我である。無辺行とは、一切法これ仏法で、いかなる生活、どんな境遇、どんな時代にあっても、つねに南無妙法蓮華経を忘れないことである。

浄行は、同様にいかなる時代が来ようとも、どんな境遇であろうとも、どんな悲しいときでも、どんなつらいときでも、どんなうれしいときでも、ただ南無妙法蓮華経を根本とした生活、生命活動は浄のなかの浄である。世の中は、五濁爛漫であり、おごりたかぶり、にごりきった人々ばかりである。だが蓮華の花が、ちょうど泥沼に咲くごとく、泥沼のような九界の現実の世界の中で、題目を上げきっていく人生活動は、もっとも浄らかな生命活動なのである。安立行は、寿量品に「我此土安穏」と。いかなる時代にあっても、いかなる事態がおころうとも、いつも南無妙法蓮華経を受持し、唱えているならば、楽である。すなわち、常楽我浄を上行、無辺行、浄行、安立行の四菩薩から説いたわけである。

小乗仏教は、苦集滅道であり、苦、空、無常、無我である。それに対して、大聖人の仏法は常楽我浄である。また大聖人は「南無妙法蓮華経を唱えるものは、歓喜の中の大歓喜なり」（御義口伝七八八ページ）とも仰せである。すなわち常楽我浄である。まだまだ幾重にも生命論の立ち場で、さまざまに解釈ができる。

有る時には一人に此の四義を具す二死の表に出づるを上行と名け断常の際を踰ゆるを無辺行と称し五住の垢累を超ゆる故に浄行と名け道樹にして徳円かなり故に安立行と曰うなり

この文について、日寛上人の開目抄文段（富要集第四巻三一九ページ）には、次のごとくに説かれている。

「二死の裏に没するとは下る義であり、すなわち繋縛不自在である。二死の表に出ずるのは上る義であり、すなわち解脱自在である。ゆえに、上行は我を表するのである。断常を踰え辺際なしとは中道常住である。ゆえに無

辺行は常を表するのである。五住の垢累を超ゆるとはすなわち清浄である。ゆえに浄行は浄を表するのである。道場菩提樹の下で万徳円満すとは安楽に成立することである。ゆえに安立行は楽を表するのである。これらは別体の地涌である。

次に『有る時には一人に此の四義を具す』とは、すなわち総体の地涌である。在世は別体の地涌であり、末法は総体の地涌である。なぜなら『有る時』とは末法を指すからである。ゆえに末法の地涌の菩薩には常楽我浄の四徳が一身に具わっているのである。これこそ御本仏日蓮大聖人であらせられる」（取意）

もし、この総体の地涌を、われわれの信心生活に約していえば、われわれが大御本尊を信じて、唱題していくならば、四菩薩の徳用が、わがこの一身にそなわることである。

いまその立ち場から、この文をみていくことにする。

「二死の表に出づるを上行と名け」分段、変易等の生死の苦に束縛されない、自由自在の境涯を上行と名づけるのである。題目を唱え、仏界を湧現した生活は、なにものにもおかされない、力強い生命活動の現われである。上行こそ、真の自由の境涯なのである。

「断常の際を踰ゆるを無辺行と称し」断見、常見等の低き生命観を捨て去り、永遠の生命観に立った時、一切の行き詰まりは、ことごとく打破され、広々たる未来の心境に生ききることができる。これ無辺行の境涯である。

「五住の垢累を超ゆる故に浄行と名け」五住の垢累等、宇宙の本体、生命の本質を見分けることのできない惑いから来る。生命の穢れは、妙法の強力な仏界に照らされ、浄化され、清浄無染の生命活動をしていくのである。

これ浄行の境涯である。

「道樹にして」とは、道場菩提樹の下でとの意味である。すなわち、信心生活に約せば、いっさいを、仏法を根本として如実知見していける人生である。ものごとに対して、筋道をとおし、またあくまでも正論は正論として、いいきっていける、また見ていける生活である。「徳円かなり」とは、もっとも人間らしい人格者である。人間革命されきった人格、個人も幸福であり、隣人をも情をもって幸福に導いていける人格、それを名づけて安立行というのである。よく戸田城聖前会長は「私はりっぱな大凡夫である」と申され、初代牧口会長も「信心しきった場合には、結局は、一見すればりっぱな平凡な人間である」といわれたと聞く。信心すれば自然と円満な徳はそなわるのである。むしろ、いまの有名人や政治家は、権威をもち、虚栄をもち、背のびし、人間らしい人間ではなく、一種の片端となっているのである。われわれの場合は、ありのままで、自然と「徳円か」な姿になっていくのである。生命の本質からあらわれた自然の姿である。

結局こうみていくと、御本尊を受持し、御本尊に題目をあげていくことそれ自身が、二死の表に出たことになり、断常の際を踰えたことにもなり、五住の垢累を超えたことにもなり、徳円かなることになるのである。

今日蓮等の類南無妙法蓮華経と唱え奉る者は皆地涌の流類なり

諸法実相抄（一三六〇ページ）には「皆地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目なり」とある。すなわち南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、皆地涌の菩薩の眷属なることをいうのである。

従って、法華経二十八品、そして、従地涌出品に説かれた、教相における地涌の菩薩は、この大聖人の観心釈によって、所詮は日蓮大聖人の弟子を意味することがわかろう。遠く経文にあったものは、実は現実のわが身の上のことなのである。

法華経を読むと、非常に数字的に大きいことが説かれている場合が多い。たとえば経文には「百千万億那由佗劫」とある。だが大聖人の観心釈では、それは百界千如と読むわけである。また「観音三十三身」とあるのを、大聖人は、空仮中の三諦と読み、十界と読み、また法報応の三身と読む。また「千仏の御手」とあるのを、千如と読む等、けっして経文上のこととしてではなく、一歩深く、生活に直結して説かれている。これが大聖人の仏法から法華経を解釈する読み方なのである。次にあげる涌出品の文を教相のまま読んでも、現在の創価学会の広宣流布に向かう姿に、ひじょうによく似ていることがうなずける。

「一一の菩薩、皆是れ、大衆の唱導の首なり。各六万恒河沙等の眷属を将いたり。況や五万、四万、三万、二万、一万恒河沙等の眷属を将いたる者をや。況や復、乃至一恒河沙、四分の一、乃至千万億那由佗分の一なるをや。況や復、千万億那由佗の眷属なるをや。……況や復、億万の眷属なるをや。況や復、千万、百万、乃至一万なるをや。況や復、一千、一百、乃至一十なるをや。況や復、五、四、三、二、一の弟子を将いたる者をや。況や復、単己にして遠離の行を楽えるをや。是の如き等比、無量無辺にして、算数譬喩も知ること能わざる所なり」

また、この経文からすれば、まだまだ折伏はできることになる。「仏語実不虚」の自信をもち、勇気をもって、誉れ高く、進んでいきたいものである。

又云く火は物を焼くを以て行とし水は物を浄むるを以て行とし風は塵垢を払うを以て行とし大地は草木を長ずるを以て行とするなり四菩薩の利益是なり

地水火風の四大を四菩薩に配立し読むところである。

火は空に上るゆえに上行は火大であり、風は辺際がないゆえに無辺行は風大であり、水は清浄なるゆえに浄行は水大であり、地は万物を安立するゆえに安立行は地大に配せられるのである。古くから天台仏法では、四菩薩を四大に配立した文献が残っている。天台家の大学者といわれた尊舜の止観見聞の五には「地涌の四大士は即四大なり地大は万物を育し、清水は塵垢を洗い、火大は寒苦を防ぎ、涼風は九夏の熱を涼ます、皆是れ本地の慈悲本覚の所施なり」とある。

天台は、四菩薩の行を四大にことよせて論じているが、所詮は四菩薩とは妙法蓮華経それ自体であることをあらわそうとしたものである。すなわち、四菩薩とは、宇宙本然に備わる大慈悲の生命活動であり、個人に集約すれば、尊厳極まりなき、妙法の生命活動をいう。

四菩薩の行は不同なりと雖も、倶に妙法蓮華経の修行なり

いっさいの宇宙の森羅万象の中にも四菩薩の働きはある。同じく、ある人は政治家に、ある人は実業家に、ある人は科学者に、教育者に、ある人は家政婦に、ある人は職工に、ある人は新聞記者に、ある人はカメラマンに

と、四菩薩の行は不同なりといえども、ともに妙法蓮華経の修行なのである。

すなわち、南無妙法蓮華経を根本とするならば、どういう立ち場であっても、いかなる境遇であっても、おのおの使命感に立って生活し、活動し、人生を生ききっていくことが、それ自体りっぱな仏道修行なのである。広宣流布につながり、社会を利益していることに通じている、との仰せである。これこそ、民主主義の原理なのである。

わが宗団は、誠実であり、清潔である。団結が強い。外見から見た人は、自由がないのではないかと錯覚するであろう。これは大なる誤りである。一人の人間が、命令的に民衆を引っぱっていけると思うこと自体、時代錯誤も甚だしい。混沌としているこの日本国で、放縦なこの社会にあって、だれが命令で動くであろうか。わが子さえ、意見を聞かぬ場合が多い。いわんや、何百万、何千万の人が命令についてくるわけが絶対にない。

わが教団は、わが和合僧は、命令主義でもない。英雄主義でもない。また、そんな時代でもなく、機根でもないのである。

われわれは、信心一途である。ゆえに強いのである。この本質を、わきまえぬため、世の評論家達は愚論を繰り返しているに過ぎないといえよう。われわれは、ただ、大御本尊を受持することを根本とし、各人が一生成仏を目指して仏道修行することのみが、目的なのである。それ以外のことはいかなる生活であろうが、職業であろうが、またいかなる境遇であれ、ぜんぶ自由である。創価学会は、それぞれ主体性を持ち、その境遇の中から、広宣流布を成し遂げようという目的観に立った、異体同心の団結なのである。これ未曾有の、新世紀にふさわしき、大宗団の出現であり、大勝利の前進の足音と確信したいものである。

此の四菩薩は下方に住する故に釈に「法性之淵底玄宗之極地」と云えり、下方を以て住処とす下方とは真理なり、輔正記に云く「下方とは生公の云く住して理に在るなり」と云云、此の理の住処より顕れ出づるを事と云うなり

「法性之淵底玄宗之極地」とは、南無妙法蓮華経のことである。すなわち真理の中の真理、生命の奥底、宇宙の本源、本体であり、あらゆる法理、道理の根本である。たとえば、エネルギーの根本、草木が繁茂してゆく、その力の根本力、われわれが活動していく源泉力、それを天台は「法性之淵底玄宗之極地」といったのである。

われわれは、信心なき時は、隣人の不幸をかえりみなかった。自分のことでいっぱいであったものである。しかし、一度、大御本尊を受持して、生命力は湧き出で、不幸な人を救おうとの慈愛に満ちみちているのである。日本の国の安穏安泰も考えるようになった。世界の民衆の幸福も、心から願いゆくようになった。

これは観念論でなく、事実、現実に活動を展開しているのである。これは、地涌の生命が、奥底より湧現している姿なのである。

戸田城聖前会長は、青年訓に「青年は、親をも愛さぬような者も多いのに、どうして他人を愛せようか。その無慈悲の自分を乗り越えて仏の慈悲の境地を会得する人間革命の戦いである」と述べられている。大御本尊に、南無した時、仏の慈悲の境地に立脚し、あらゆる衆生を利益する力が湧き、世界平和のため、全民衆のために貢献していくことが可能になるのである。

また、御義口伝（七九九ページ）に「涌出とは十界の衆生の出胎の相なり」とあるごとく、地涌の菩薩の出現は、四徳をそなえた尊厳なる生命が、母の胎内より湧出することを意味するのである。

「下方とは真理なり」の真理とは道理ということである。神が人間をつくったという不合理、あるいは観念的なものではないということである。また、下方とは実際に大地ととってよいと思う。われわれが歩くのも大地がなければならないし、いくら飛行機が飛んでも最後は大地に戻ってこなければならないし、鳥もやはり結局大地に戻ってこなければならない。われわれが食べるものも、すべて大地より生成され、育成されるのである。さらに太陽の熱、またいっさいの引力も、星の運行も、大地に直接関係をもつものである。なお、竺の道生が述べた「下方とは、住して理に在るなり」の理とは、南無妙法蓮華経を指しているのである。

「此の理の住処より顕れ出づるを事と云うなり」とは、事すなわち、生活実践をいう。または、現象界を指す。所詮、あらゆる現象は南無妙法蓮華経を根本としているということである。天台大師が「起はこれ法性の起、滅は滅」と論じたごとく、全現象の起滅等は、ぜんぶ妙法蓮華経を根本としてあらわれた姿である。換言すれば、現実の中に、妙法の大法則があって、決して観念的なものではないということである。

又云く千草万木・地涌の菩薩に非ずと云う事なし

これ、妙法を根本とすれば、一切の活動が地涌の菩薩の働きに変わるという文である。例えば、原子爆弾たりとも、「地涌の菩薩に非ずと云う事なし」の道理になるのである。これは、妙法を根本とすれば、原子爆弾も必

ず平和開拓利用に変わってゆくとの原理である。反対に、誹謗、謗法のみ世界に充満した場合、阿鼻叫喚地獄になって、千草万木は死滅してしまう。共に、一切のものが、天魔の働きに変わってしまうのである。世界恒久平和を根本理念とし、人類共栄の永久原理とし、かつまた、地球民族主義の一大指針として、心ある人に、この大法理をば、伝えきらねばならない。

されば地涌の菩薩を本化と云えり等

「久遠五百塵点」とは教相である。「無始無終」は久遠元初であり、観心である。ここでは当然、久遠元初の日蓮大聖人の仏法と拝すべきなのである。「本法所持の人」とは、別しては日蓮大聖人、教相では上行菩薩のことである。信心より拝すれば、大聖人の弟子である、われわれを指すのである。

此の本法の体より用を出して止観と弘め一念三千と云う、惣じて大師人師の所釈も此の妙法の用を弘め給うなり

南無妙法蓮華経が本体であり、それから用をいだして、釈尊は法華経二十八品を説き、天台は摩訶止観を説いたのである。また、あらゆる大師、人師、例えば、竜樹、天親、妙楽、伝教等も、南無妙法蓮華経の本体の用を弘めたに過ぎないのである。その本体を直接弘めていくのが、本化の地涌の菩薩である。すなわち、われわれのことである。なんと福運の大なることであろう。かつ、重大な使命を痛感するものである。

此の本法を受持するは信の一字なり、元品の無明を対治する利剣は信の一字なり無疑曰信の釈之を思ふ可し云云

「此の本法」これすなわち、三大秘法の大御本尊を受持するのは、信の一字である、との御断言である、元品の無明とは、不幸の根本をいう。それを断ち切る利剣は、信の一字しかないとのおおせである。政治、法律、機構、制度、道徳、教育、環境だけでは、この無明、不幸の本源の解決は、永久にでき得ない。結局、抜本的に、日本の国の、幸福と平和と繁栄を築くのは、信心強盛なる、地涌の菩薩のみであるとの文なりと大確信すべきである。第三次世界大戦に戦く世界を救うことも、またおなじである。